藤岡作太郎著

國文學全史（平安朝篇）

岩波書店刊行

藤岡作太郎著

國文學全史（平安朝篇）

岩波書店刊行

緒言

一、本篇は、わが企畫せる國文學全史の一部をなすもの、成るに從うて、まづこれを公にす。前途遼遠、全部の成るはいまだいづれの日にあるかを知らず。希はくは世の學者諸君が研究の結果の續々發表せられて、世を裨益せんことを、微軀聊かまた驥尾に附して奮勵せん。

一、本篇は、數年前、文科大學において講じたる國文學史をもととして、これを簡明に敍し、更に一二節を加へたるものなり。夏冬の休暇毎に、逗子に、能州和倉に、豆州伊東に、材料を携へゆきて筆を執り、最後に大磯にて總論を綴りそへぬ。人こそ知らね、この書を繙くにつけて、われには別に過ぎ去りし客寓の追懷の忘れ難きものあり。

一、文明史の一部として本篇を見るもの、或は書籍の解題などの煩雜なるを非難せん。然りといへども、わが國、文藝の研鑽日いまだ淺く、古名著の定本も成らず、その時代も決せざるもの少からず、これを以て文學史を說くに當りて

や、まづその材料の價値を考査する必要あり。この書において、たとひ他はこれを煩雜なりとすとも、われはむしろ省略に過ぎたりとせん。嘗てわが近世繪畫史を公行するに當りて、その緒言の第二條に述べたることは、更にこゝに繰り返さざるべからず。

一、本篇の說くところ、文壇の大勢力たりし作家と作物とを主として、その他は節約に從ふ。神樂歌、催馬樂歌また和歌六帖の如きは、著名なるものなれども文運の大勢に關係少しと思へば、すべてこれを闕きたり。

一、夜半の寢覺物語は世に殆どその本なきを、中村秋香、黑川眞道兩氏にその祕本を借覽することを得て、發明するところ少からず。特に記して兩氏に謝意を表す。

一、西行を論ずるや、撰集抄はこれを取らず、專ら山家集に據る。山家集は流布本を用ひざるを得ざりしが、近頃に至りて異本を得たり。されど稿本既にわが手にあらずして、また訂正すること能はず。

一、索引はおほよそ現今の發音に從ふ。人名、書名共に平安朝のもののみを取り

その以前もしくは以後のものは須要のものといへども、煩を厭ひてこれを省く。但し藤原定家の如きは、むしろ鎌倉時代の人なるべしといへども、その前半生はまた平安朝にあれば、その名もその編述の書もこれを加ふ。

一、六歌仙、梨壺の五人の類は、人名索引のうちに加へ、和歌所、尚歯會の類は、件名として書名に併せて索引を作る。

一、索引のうち、天喜四年六月殿上詩合などは詩合の條を見るべく、在民部卿歌合などは歌合の條を見るべく、太郎百首などは百首の條を見るべし。

一、表紙の模様は中村不折畫伯の手に成り、書肆また苦心經營したるものなるが、印刷の術全からず、また原圖の色を改めなどして、もとの韻致を留めざるに至る。ひとへに畫伯に謝せざるを得ず。

明治三十八年九月

著者しるす

目次

第三期　道長時代　三六一

平安朝文學史

藤岡作太郎 著

總論

第一章 上古と近世

われら何の幸か、この昭代に遇ひて、千古未曾有の大戰を見、みづから戰勝國の民と誇ることを得るや。二十世紀の歷史の第一章は日本の勃興を以て始まる。その急速なる飛躍は東西古今にその比を見ず、まして黑船に驚き、オロシャに悸えしわが祖先が、夢にだも想ふこと能はざるところなりき。弘安の元寇、たゞ颶風の倖せしのみ、文祿の征韓、寸功もなくして果てぬ、これらの小戰鬪を以て國史の最大事件とせし祖先は、誰か、今日、茫々たる滿洲に數十萬の大兵を動かし、偉大なる萬里遠征の敵艦を日本海上に鏖にすることを測り得たる。わが國民は小說よりも大なる物語を實現せり、歐米各國はいづれも瞠若として、或は

驚歎の眼を睜り、或は猜忌の色を浮べて、絶東の新進國を見、われはみづからまた意外の成功に、その天佑か人力かを疑はざるを得ず。而してこれが結果を見て原因を求むるもの、内外ともにその研究に怠らざるが、わけて外人は異種異俗の國民に對する好奇の念に促がされて、その戰勝の眞因を考察せんとするや切なり。

武士道、この一語をもつて、日本國民の大飛躍を闡明する鎖鑰とす。或は米食を以て、或は水を呑むこと多きを以て、或は頻繁なる沐浴を以て、優勝の原因なりとするものあれども、これらは穿鑿に過ぎて滑稽に陥るの感なくんばあらず。十目の見るところ、古來の武士道實にわが國民を不撓不屈の勇士たらしめしなり。背に矢を立つること勿れの諺も、矢と彈丸との差あるのみ、その諺の生命あるは今も昔に異ならず。妻を離別して戰場に出づるは、軍談講釋の上ならで、新聞雜誌に現にこれあり。一身を以て大君に捧げ、將卒相和し、同僚相勵まし、忍耐刻苦爭うて難に赴き、死に就く歸るが如し。これ古來わが國民が事に當つて遵奉せしところにして、今日の大捷もまたこの精神より得たるものに外なら

ず。西洋人は基督教を以てその生涯の行爲を律する根本の準繩とす、日本人のうちにこれに當るものを求むれば、儒教にあらず、佛道にあらず、また神道にもあらずして、武士道なり、武士道はわが國民思想の精髓なり。

武士道は日本國民の宗教なり、道德なり。極東帝國を論じて、その性質風俗を說明するものは、まづこの根本思想より演繹し來り、古來の歷史を批評するにも、これを以て標準とす。上下いづれも武を重んじて文を輕んじ、劍法兵術の發達せる割には、學問文藝の稱するに足るものなし、哲學の研究、理化學の發明において何等の貢獻かある、士氣を練り、嚴格を尙び、君命じ士從ひ、各〻その分に安んじて、粗衣糲食以て足れりとす、金錢を見ること塵埃の如くせよ、婦人と小人とは近づくべからず、かくの如きは、これ日本國民固有の性質なりと。然り、武士道の今日における功果は甚だ大なり、その社會に磅礴するや、日月も爲に光を失ふべく、千練萬磨、光芒陸離たる日本刀が觸れて斬らざるものなきが如くなるは、明白なる事實なり。然れどもたゞこの一武士道を以て、わが國民の特色を網羅し得たりとすべきか、これを以てすべて上下三千載の歷史を說明し得べし

となすか。

わが國の文藝を評するもの、多くは論じて曰く、日本人は色彩の眼なし、その繪畫は、空氣を畫かず、陰影を示さざるはもとより、森羅萬象たゞその輪廓を引きて、眞の色を寫さず、線あつて色なく、平面あつて立體なきもの、これその特色なり。人物を描きても、よくその感情を表はすこと能はず。元來、わが國民は意志の權威を重んじて、克己制慾に力む、喜怒色に現はさず、苦樂の外に立つを以て、男子の面目とす。從うて日常の對話應接また抑揚波瀾なく、外人より見れば、平板にして沈欝に過ぐるの感なきを得ず。この國民の畫くところなれば、感情の表現に拙にして、變化に乏しきこと、當然の數なり。文學においてもまた然り。事實の變化を重んずること、繪畫の輪廓の如く、心理の描寫を怠るは、かの色彩に似たり。普遍性をのみ描いて、固有性を寫さず、人間個々の性格の紙上に躍動することなければ、時に臨みて感情の區々なるに注意せず。これわが文藝の特色なりと。然り、色彩なく、感情なきが如きは、わが文學および美術における第一の缺點なること疑なし。しかれどもこれ果して頭髮の黑く、皮膚の黄なるが如く、わ

が國民に免るべからざる特色なるか、悠々たるわが文藝の歷史は、毫もその外に逸すること能はざりしか。

西洋の文學を學ぶもの皆いはく、その一應の意義はもとより通曉すべし、趣旨の奧に洞徹するは、萬里隔絕の異人種には、到底超えがたき難關なりと。言語はよく人の思想を表はすものなりといへども、なほ聞くものの異なるだけ、その理會せる意義に相違を生ず、況や國語の全く異なる人々の間におけるをや。小說を讀みても、その中に寫せる服裝風俗の、いかほどに驕慢なるか、また謙退なるかは解し易からず、詩を誦しても、その調律の眞の妙味は得て感じがたし。たとひかの國に往きて、久しくその社會に交はりたりとも、數年の研究はなほ數年の研究に留まるのみ、生れながらの國民に比して、その文學を理會し玩味する能力の遙かに劣れるは論なし。得意げに批評するものの、滑稽を眞面目に解し、卑俗を優雅と謬る類も少からざるなり。かくの如き陷り易き誤解は、たゞ東西國を異にする文學の間にのみ見るべきものなるか、國は同じといへども、古今時を異にする場合にも起らざるか。言語思想は處によつて異なるのみなら

ず、時によりてまた變ず、さらばこの相違によつて生ずる謬見は、處において然るが如く、また時によつて然らざるか。

江戸幕府時代の批評家が平安朝の文學を見るや、多くは曰く、惜しいかな、描くところ驕奢にして輕靡、かの伊勢、源氏の主人公の如き、姦婬を事として憚からず、著者またこれに同情を寄す、代々の撰集、人々の家集また情語艶詞に充つ、かくの如くして風教を如何と、道德家流は彈指して顧みず。强ひて辯ずるものは、これまた佛家の善巧方便、表は感興の饒からんことを主として、裏には深邃なる寓意ありとす。或は源氏を以て老莊の教を敷衍したりとし、或は佛教の説を祖述したりとし、或は伊勢を以て生涯の憤懣を椅餘に漏らししなりとし、或は和歌もまた道に入る媒なりとす。甲論乙駁、樣々の見解を下すものありといへども、いづれも己を以て他を測るものにして、江戸時代の色眼鏡を透して遠く平安朝を觀察す。かの文學の眞義は得べからずして、却つて後世附加の着色に妨げらるゝも、また止むを得ざることなり。今日、文運隆々として揚り、古代文學の闡明せられたること、數十年前の比にあらず、研究の方法は自由にして周密

に、よく從來の弊習を脫し得たりといへども、なほ翻へりて思へば、今日のわが學問文學はなほ江戸時代の餘慶を被るもの多く、われらが考察の基礎はかの時代に置かれざるを得ず、從うてわれ〳〵が思ふところ說くところ、前代の舊套を脫せざるもの多し。西洋文學およびその研究法を學べるものは、わが古代文學に通曉せず、古代文學に通曉するものも、またみづから古代の人となりて觀察せず、かくして平安朝の文學も、これが眞相を解するものは、極めて稀なり。』

明治の今日はしばらく措いて論ぜず、紀元以來の歷史を探りて、文學の最も隆盛なる時代を訪ぬれば、直ちに指を平安朝と江戸時代とに屈せざるを得ず。平安朝といひても殆ど四百年の長日月、江戸時代もまた三百年に近く、その間、榮枯盛衰の運あるを免れずといへども、大體の運と特色とにおいて相似たるものあり。これを歐洲の歷史に比すれば、わが奈良、平安は彼の希臘、羅馬、即ち上古(クラシック)時代なり、江戸時代は文藝復興(レネイッサンス)以後の近世なり。佛敎渡來以前の文學はいふに足らず、その後、奈良朝には、萬葉集ありといへども、その外には特に見るべきものなく、文質彬々たるはひとり平安朝を推さざるべからず。鎌倉、室町時代に至

つて大に退歩したることも、やゝ歐洲の中古に齊しく、元和以後、奎運隆々として興れること、また東西相比するに足る。而してわが上古の平安朝と近世の江戸時代とは、星霜相隔たること四百餘年、中古の深谷を中にして、兩端に聳えたる山の草木は、全く性質を異にす。中古のうち續きたる干戈擾亂は、社會に非常なる感化を與へ、風俗習慣これが爲に顯著なる變遷を經たり。從うてその前の文學と後なると種類同じからず、時には同一國民の手に成りたるものなりや否やを疑はしむるものありて存す。

江戸時代の下半期は最も明治のわれ〳〵に近きもの、當時の社會を見し人は今に生存し、少壯者もまたその親兄より親しく當時の有樣を聞けば、文化、文政の讀本、草雙紙などは、何等の障礙もなく明白に了解せらる。されどなほ薄霞か陽炎の春の野に靉靆き燃ゆるこゝちして、些々たる時代の墻も直下の把玩に多少の妨害を與ふるが如し。貧なる父母を助くとて、小女の苦界に身を沈むるが、果して孝行なりや、お家の寶物が失せたりとて、重代の功臣の家をも身をも失ふは、何とて輕き命ぞ。文化、文政はなほ甚だ近し、一歩溯つて元祿の淨瑠璃、浮

世草紙を見れば、更に解し易からざるものあり。西鶴が喋々として三箇津の遊里を品隲するもの、果してその評の當れりや如何を判じ得るか。曾根崎に、今宮に、行末長き命をわれから縮めて、心中の浮名を歌はるゝもの、いかに已むべからざる事情ありてこゝに至りしか。今日の心を以ては、當年の行に同情を表するを得ざること少からず。星霜僅かに二三百年、旣に社會の變遷は、われらをしてその昔の文學を讀んで、一見の下、書中の世界を眼前に再現する能はざらしめ、時にその解釋に苦ましむることあり。まして今を隔ること遥かに遠く、幕府樹立の以前、禪宗、眞宗、日蓮宗などの行はるゝ以前、江戸はもとより鎌倉もいまだ開けざる頃、玄關、書院もなく、茶の湯も知らず、砂糖も用ひず、夢にも鐵砲を見ず、十露盤も彈かぬ頃の文學を、八九百年後の今日にありて、讀破し批評せんとす。殊に注意を加へざれば、江戸時代の論者の覆轍を踏み易し。虛心平氣、明治の社會を離れ、評者みづから平安朝の一人となりて、以てその時代を見る、蓋し正鵠を得るに近からん。

國文學の歷史を學ぶものは、各時代の社會の情態を究めざるべからずといへ

ども、わけて上古と近世との形勢の顯著なる相違に就いて大觀せざるべからず。近世は尙武の時代、上古は尙文の時代、一は質素勤儉を奬め、一は浮華侈靡に流れ、一は士農工商のうち武士最も勢力ありて、花の櫻木に譬へられたるに、一は公卿殿上人のみ蔓りて、その外の世は月も照らさずと思へり。三從七去、難きを婦人に責めて、しかもその位置を輕視したるは、近世なり。男子と應對相讓らざるのみならず、文才また實にこれを凌ぐべき女子の輩出せしは、上古なり。社會を通じて一般に、江戶時代は男子的なり、平安朝は女子的なり。一は義理を主とし、一は情趣を重んず、仁義五常を一生の指針として、その導く外に逸することを許さざるを、近世の敎とし、痛切なる情の動くところ、區々たる制裁の妨ぐべきにあらずと寛假するを、上古の習とす。意志と運命と相戾つて衝突するや、一は切腹あり、心中あり、一は强ひて運命に屈從するか、さらずば出家あるのみ。敵討、果し合、妖怪退治は江戶小說の好題目にして、和歌の贈答、物詣、法事、舞樂は平安小說に普通なる記事なり。一は血に滿ち、一は淚に滿つ。これらの相違、求め來ればなほ多かるべし。

上古の近世に異なること、かくの如くなれば、平安朝の文學を說くに當りても、まづ誤解を豫防せざるべからず。されば一々の作者、作品に就いて評論する前に、まづ當時の社會の情況、風俗思想の一斑を示し置くを得策とすべし。

第二章　平安城

歷史は國勢の變遷を記すものにして、變遷はまづ都會に兆すとせば、歷史の頁數の大部は、都會を舞臺として起れる事件を以て充たさるといふも、過言にあらず。進步の木鐸たるものも、地步を都會に占めずんば、その抱負を施すに所なし、文運の發展もこゝに基礎を固めて、しかる後、全國に弘布するなり。さばれ首府の勢力の强大に過ぎたること、平安朝の如きも多からず、平安朝の歷史、特にその文藝の歷史は、全國の歷史にあらずして、たゞ京都の歷史なり。平安京裏の貴族は安逸に馴れ、懦弱に流れ、京都のうちに跼蹐して、身心を活潑に使役するを欲せず、公事供養にあたら日を費やして、實務を執るを卑み、地方の施政の如

きは、毫も意に介せず、國郡睽離の形勢は年々に進み行けども、知らず顔に一時の安を帝都に貪りぬ。都鄙の關係かくの如く薄くして、しかも文學はたゞ都人の文學なり、地方を度外に置くことを欲せざるものも、わが平安朝文學の研究には勢しかせざるを得ず。

萬葉集の和歌を見よ。人麿は石見の邊地に哀絕の調を歌ひ、赤人は東、富士の名山、西、伊豫の溫泉を賦し、旅人は筑紫の名所に感吟少からず、家持は越中の山水と神靈相通ず。東歌、防人の詠、遠國微賤の民が嘯くところ、また傾聽すべきものありき。平安朝にも、業平の東下り、貫之が都上り、實方の奥州ゆきなど、異數の事あり、道眞が太宰府の貶謫、西行が諸國の行脚は殊に稀有の例なるが、首府孤立の時代とて、いづれも文壇一瞬の電光石火、大體の形勢には何等の影響をも與へず。諸國の交通をいへば、蓋し奈良朝よりも開けたることあるべし、延曆年間、坂上田村麿が東夷征伐ありて、東北の來往もこれより度數を加へたるならん。また同じ頃、鈴鹿、不破、愛發、および相坂の關を廢して、公私往還の便を計り、足柄路が富士山の噴火によりて壅塞せられしを以て、新たに箱根路を開けり。され

ど旅行はなほ不便に、草枕、萱の假蘆に一夜を過す折もあり、盗賊の患も多ければ、貴族は誰か遠く出づるを望まん。たゞ平安數里のうちをわれらの世界と甘んじて、たま〳〵の遊參物詣は石山または長谷の參籠、住吉の舟遊なり。住吉は難波津に臨みて、海上鎭護の神のましますところ、この地西國往來の要港にして、江口、神崎など相接し、碇舶の舟、來遊の客あれば、遊女扁舟に棹さして宴飮の興を添ふ。平安末期に至りては、やゝ遠隔の地に出遊することも少からずなり、白河法皇等は熊野に、鳥羽法皇等は嚴島に御幸ありて、萎縮せる意氣のやゝ發展したる觀あり。されど概括していへば、光源氏が須磨の近流に望鄕の念に堪へず、涙痕の袖に絕えざりしもの、これ平安貴族の常情なりき。

さらば余輩はこゝに平安文學唯一の舞臺たる平安京に就いて說明するところなかるべからず。

建國以來、歷代の帝王多くは代を改むる每に、宮城をも遷したまへり。されど時勢の進步し、都民の增加するに從ひて、漸く簡易なる遷都は實行しがたきに至り、靑によし奈良の都は咲く花とにほひて、こゝに七代、七十餘年を經たり。東國

畿定の大志ある桓武天皇には、住みなれし都城も不便少からねばにや、こゝにまた遷都の議は動きぬ。延曆三年、地を山背國乙訓郡長岡に相して、新都の造營を捌めしが、その地淀川に近く、舟楫の便ありとはいへ、面積狹隘にして萬年の帝都に適せず、更めて和氣淸麿の奏議により、少しく東北に進みて、葛野郡宇太の地を占す。延曆十三年、盛儀を具へて新營の都に遷幸あり、詔して宜はく、この國山河襟帶、自然に城を成す、この形勝によりて、山背國を改めて山城國とすべし、子來の民、謳歌の輩異口同辭に號して平安京といふ、今これに從ふべしと。これより新都は平安京と稱せられて、明治維新の際まで千七十五年の間、天つ日嗣の常の御あらかとなりて、今もなほ皇室の大儀はこゝに行はるとぞいふなる。

平安京は、鎌倉の如く、山丘參差の間に狹くるしく介在したる處にあらず、東京の如く、前より前へと必要に應じて開きゆきたる處にもあらず、奠都當時の形勢にかゝはらず、遠く千年の後を慮りて設計し、その規模は唐の長安の制に則りて成る。全市の廣袤、南北千七百五十三丈(現今の間數一里十一町四十三間餘)、

東西千五百八丈（一里五町三間ばかり）。大內裏その北位の中央にありて南面す、皇居、百寮この中にあり、大內裏および京城の四面ともに土垣隍溝ありてこれを繞る。大內裏の南の正門朱雀門より京城の南門羅城門まで、南北にわたりて通ぜる大路を朱雀大路とし、これによりて坌市を左京（東の京）、右京（西の京）に二分す。左右京共に、京極と朱雀大路との間に、四條の大路、十一の小路を開き、南北向の道路併せて三十二筋あり。東西に通ぜる道路は大路すべて九筋、北より一條、二條と數へて九條に終る。一條と二條とは大內裏を挾みて、他よりも廣く、その間にまた大路四筋、更にその間每に一筋づゝの小路あり、二條より九條まで各條の間、三筋づゝの小路あり東西向の道路併せて三十九筋あり。この間を小別して、民家一戶を長さ十丈、幅五丈と定め、八戶を重ねて一行とし、四行を幷べて一町とし、四町を一保とし、四保を一坊とし、左右京各〻一條の大路に沿うて四坊あり。區劃すること恰も棊面の如く、條理整然、一線紊れず。西加茂を經、紫野を過りて、有栖川は東の堀川となり、衣笠山の麓より北野を超えて、紙屋川は西の堀川となる。朱雀大路の幅員二十八丈、大內裏の南面を縱へる二條通は十七丈、

その左右に添ひたる東西の大宮通は各〻十二丈、以下十丈、八丈、小路も四丈に及ぶ。柳櫻をこきまぜ植ゑ列ねし都大路の景色、何ぞそれ堂々として大國の風あるや。

しかれどもこの大規模の帝國は、當時の社會には廣きに過ぎたりき。京都の歷史を說くもの或は曰く、平安朝も末になるに從ひて、氣運は東遷し、右京は廢墟となり、鴨東は市街となりて、以て後世の形勢を釀成したりと。これ一を知つていまだ二を知らざる論なり。源平爭鬪の頃、西の京の田舍に數へられたるは勿論のこと、平安最盛時期の著述たる枕草紙に、既にその荒廢を說き、しかもその頃なほ勢の東する兆なきを思へば、右京は設計のみにして、はじめより住民はこゝかしこに點々散布するのみ、公衆はなほ便に從ひて、左京に集まり棲みしならん。（平安通誌そのほかの書にも既にこの論あり。）白河天皇の頃より法勝寺等を營み、離宮を構へて、鴨川の東、三條街道の北なる白河は、一時の繁昌を極め、城南鳥羽の地もまた離宮の造營ありて、殷賑の狀を呈す。平家勃興するや、一族の第宅六波羅に立ち列びて、鴨川の東、五條の南は熱鬧の地となりぬ。大內裏のうちにては、八省院を

國家の正朝とし、大極殿をその正殿とす。宏壯華美、人目を驚かししが、貞觀、康平二回の火災に罹り、その後再建せしかども、治承の火災にあひしよりは荒廢して止みぬ。皇居は天德四年はじめて火災に罹りしが、その後、屢〻建てて屢〻燒く。これがため、または物ノ怪の恐、方違などのため、天皇の一時は里內裏にましますことも少からず。鳥羽天皇は里內裏を土御門に營みて、その結構を大內に準じたまふ。皇居は却つて漸次殘衰に傾きて、纔かに舊地位にありといふのみ、鎌倉時代に至りては、遂に全く廢墟となり、土御門の里は、北朝の天子が住みなれたまひしより、常の皇居となりて、以て近世に及べり。

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景行くところとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚め、群を拔いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大、豪壯なるものは存せずといへども、明麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峯、高雄の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて、地勢は

窮まる。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織り込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照りはゆる色の、千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍、香山、耳無の三山の如く、近く相並びてあらねば、妻爭ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松曳く樂などいづれ劣らぬところがら、南にやゝ隔りて男山これに對すれど、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂河大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく、また南に向ふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば山のうちにこもりて、海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配やゝ急なれば、蘆間に出て入る白帆の町の側を往來するながめなきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の

鑛物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは淸けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居るところは、わけて見るにも嗅ぐにもこゝちよからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして、淸き京都は益〻淸かりしなり。

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表はせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、說明を須ひずとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日、驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黑雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり〳〵て海を覆ふ、波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす、波か、雷か、世界はたゞ一暗黑の中に沒し去るかと、疑はれて凄まじかりき。かくの如く壯絕なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な〳〵の景色の、今にも恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ〳〵

彼方へ〳〵と薄くなりて、向うに寢たる東山はあるかなきかの夢よりいまだ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る乙女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色の、またよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちにはらはらと面を撲つ、あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

溫帶の地といへども、大陸の內部は、寒氣凛々たる冬期は直ちに烈日赫々たる夏期となり、氣候激變して、その間に和煦の時季を見ず。海岸は、溫暖なるところ多きかはりには、年中春の如く、秋の如くにて、夏冬の峻酷なる風物を感ぜず。四季交代の順序の明かなること、わが國の如きは少く、わが國にても、花も紅葉もなき浦曲などは、到底、京都の四季のながめの面白きにしかず。春立つと思ふばかりに、四方の山々霞こめ、空の色、水の色さへ昨日に變りて覺ゆ、若菜つみ、小松曳くも、新らしき年のしるしなり。梅の花散りて、鶯老を啼けば、柳の綠、桃の紅、花

の音信あわたゞしく、夢かとばかり青葉となりぬ。垣の卯の花、花橘を過ぎがてにする郭公の、しばらくして聲もせずなりぬるは、時知りぬるとわけてめでたし。五月雨に軒の玉水ひまなく、公事、物詣も途絶えがちなるに、晴るればやがて暑さの凌ぎ難き、それも一時、名越の祓に夏も終りぬ。冷風立ちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千種、蟲の聲々、月影さへも隈なくて、とり〴〵なる物の哀はこの頃ぞまされる。千入に染むる紅葉を秋の名殘として、木がらし騷がしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に惱みて、早くも年は暮れゆきぬ。

愛すべき山川の懐に涵養せられたるわが國民は、永く薫育の恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰集の部を分つや、四季は戀と相並んで最も重んぜられたり。花や、月や、その折々毎に合奏歌合は絶えず。この時代より盛なりし五節句も、起源は多く支那にあるべしといへども、よく國風に融化し、またよく季節に調和したる遊樂なり。白馬の節は勇ましく神々しく、曲水の宴の上巳の節となりたるもやさしく、端午は第一に盛にして、淀野にひきし菖蒲の根を

競ひ、軒に蓬を葺けば、藥玉の簾にかゝりたるも興あり。七夕の空澄み渡る頃、銀河を隔つる二星を仰ぎて、任意ならぬ戀の人間ならぬ世にもありと泣き、重陽には菊花の秋に驕れるを愛して、吟誦夜を覺えず。近世に至りて算盤彈く丁稚、剃刀片手の下剃までが、梅咲くや、初雪やなど首をひねるは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、また一は千年以前の祖先が深く四季折々の景色に愉悅せし結果なりといはざるべからず。

社會の進歩するに從うて、人工を以て自然に反抗する力は增加す、これやがて文化の恩澤なり。今日、開明の民は、煉瓦の家屋風もすかさず、室内の煖爐春長しへなれば、何處にか北風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處に暑さを避く。都會の住居軒たち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づかず。たとへば東京の子供の、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はと問けば側れる板とのみ思へる類多し。平安朝の京都は、いまだかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず、從うてその住民も人爲の力を以て自然を左右せんとするほどの慾望を有せずして、却つて山川の美に憧憬せる本性は、あくまでこれに同

化せんと試み、服飾の色彩、第宅庭園の配置、一に模範を自然に取る。平安人士の行動のいかに美はしく、平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは、かれらの事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は自然に近づけり。かれらは工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、たゞ自然に屈從せり、屈從せるにあらず、愛着せるなり。その愛着せるや、勞動に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿雲客生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京都の地勢にも不足を感ぜず、たゞ景色の美にあこがれて、烏兎匆々四百年、政事の實力はいつしか出でて關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして、風流の地なり、平安朝は實務の時にあらずして、風流の時なりき。

第三章　平安朝の社會

平安朝の文學を見れば、何ぞ悠揚たる。この世は歡樂世界なり、兜率天上なり、日

日の行事は宴飮歌舞、民に怨嗟の聲なく、國に盜賊の患あるを知らず、泰平無事、常世の春なるが如し。しかれどもかくの如きユトピアは現實に求むべからず、平安朝の實地はその文學の表面に現はれたるよりも悲慘なり。或は重病の者を衢に捨てて顧みず、或は京のうちに盜賊恐れげもなく横行す、權家に虐げられて訴ふるにところなきものあり、良人に捨てられて浮草の寄るべ定めぬものあり。貧窮困厄、樣々なりといへども、物質的不滿足の多き中流以下の社會は、當時の文學とは沒交渉なり。鎌倉、室町の世は、詩歌連歌などを樂むもの、出家、武士あり、江戸幕府の世は文運上下に普遍し、下流の民も俳諧、淨瑠璃などに意を注ぐ、しかのみならず鎌倉以來、文運の樞軸は既に貴族の手を離れて、中流に歸し、月卿雲客はむしろ迂愚の徒として度外に置かれたり。平安朝は然らず、社會は公卿の社會なり、文化は公卿の文化なり、文化の指導者たるものはかれらにして、その他の民はその進歩に力を致すを得ず、また恩澤に霑ふを得ず。文學もまた殿上人が獨占の文學なれば、この時代の文學史を論ずるに當りては、中流以下の社會はしばらく問はずして可なり。

階級を重んじ、貴賤を別つことは、維新以前は古今を通じての習なりき。大化以來、考課の法を設けて、才によりて人を用ふることとせしが、その制も漸次荒廢し、いつしかまた職業を世襲し、家格生れながらに定まりて動かず。位階を貴ぶこと甚しく、競うて任官叙爵の榮に與からんとすれば、平安宮廷は百官が競爭の場となりぬ。宮廷に出入せざるは人としての耻辱、九品の蓮臺は知らぬ世界のこと、まづこの世にては紫宸、清涼の諸殿を立ちならさでやはと望めば、國郡の官を得たる受領も地方に赴くを喜ばず、任地には代官を置いて政治を委ぬるもの多し。受領は元來利得饒き役にて、位は低けれども富有なるがあれば、名流の人も貧なるは、これと姻戚の縁を結ばんとし、受領は貴族の縁類たるを譽として、喜んでこれに應ず。

皇室の事は申すもかしこし、人臣にては藤原氏深く根柢を固めて、一門宮廷に滿つ。皇族より出でて人臣となりたるもの、橘、在原、源、平等の諸氏ありといへども、いづれも藤家に壓せられて力を伸すこと能はず。諸流の源氏も、皇子の直ちに姓を賜はりたるは、重要の地位を占むる者あれども、二代、三代と續きては榮

えず、平氏と共に地方の受領となりて、徐ろに實力を養ふもの多し。前後うち續き朝廷に跋扈するは藤原氏にして、平安朝の歴史は藤原氏榮枯得喪の歴史、この時代の文學史は藤原一門の文學史と稱するも不可なることなし。

朝廷にありて權力を爭ふものも、祖先を異にする氏と氏との間にあらず。かれらはいづれも春日を氏神としたる一門なり。同族は相睦みて爭ふことなかるべきに、利害の前には血緣なく、兄弟叔姪も墻に鬩ぎて、おのれ樞要の地位に昇らんとす。人臣が昇るべき究竟の地位は何ぞ、攝政關白の貴に居り、皇室の外戚と崇めらるゝことこれなり。藤原良房が外戚の尊を負うて攝政の任に當りしより、この二件は多く相待つて來る。權家に生れて榮達を希ふもの、才識もこれを得る所以にあらず、技藝もこれを得る所以にあらず、攝關もし望むべくんば、まづ外戚となるべし。されば、よき娘もてるは、進んでこれを後宮に納れて女御更衣とす。女もし天皇の寵愛を一身に擔はば、これその父が榮達の一段落、幸にして皇子を生み奉らば、また一段落、なほ幸にして皇子東宮に居たまひ、皇位を嗣ぎたまはば、わが事即ち成れり。この幸福を想うて、世の父母たるもの女を生

むを重んじ、競うてこれを掖庭に上せ、おのれこれが後見となりて、儕輩を排擠して憚らず、軋轢の激甚なる醜陋の態を極む。一二の實例を見よ。

圓融天皇の時、九條師輔の子に伊尹、兼通、兼家あり、伊尹まづ太政大臣たり、繼いて攝關たるもの誰なるべきか、二弟共に野心を懷いて相快からず。兼家宇多天皇の皇女に尙し、官位夙に顯達して兄兼通を凌ぐ。兼通心安からず、嘗て己の妹なる天皇の母后に强ひて、攝關の任は兄弟の序を以て相受くべしとの手書を得、常にこれを懷にして離さず。既にして伊尹の病みて薨ずるや、兼通かの手書を出して上る、天皇母后の手跡を見て、遺命に違ひがたく、乃ち兼通を關白としたまふ、これより兄弟釁隙あり。兼家その女詮子を後宮に納れんと計る、兼通憤つていはく、わが女既に皇后たり、かれ更にその女を進めんとす、何ぞ兄を凌ぐこと甚しきと、嫌隙殊に甚し。二人第宅相接す、人の兼家を訪ふものある每に、兼通の家人これをその主に報ず、兼通罵つていはく、かれ小人兼家に諂媚すと、訪人これを畏憚して、多くは夜に入りて往けりといふ。その後、兼通病に罹り、まさに危篤に陷る。兼家これを聞きて疊るやう、わが兄既に亡し、機至れり、われ繼い

て太政大臣たらんと、車を促がして參內す。兼通の家人騶呵の聲を聞きて、入つて告ぐ、兼通以爲らく、これわが病を訪ふなりと、席を設けて待つ。焉んぞ知らん、兼家の車空しくその門を過ぎ、轆々として西に向つて去らんとは。兼通怒氣心頭を衝き、病を力め、人に翼けられて入朝す。兼家時に帝の前にあり、病兄の來るを見て、錯愕して遁れ出づ。兼通睥睨して、さて奏して曰く、臣今逝く、逝くに臨んで願はくは除目を行はんと。よりて從兄賴忠をわが後任に推し、兼家の躁急を劾して、現任の職を褫ふ、憎惡の念なほ已まず、西海に貶せんとせしが、罪の擧ぐべきなければ、せん方なくして止みぬ。

かくて賴忠關白となり、太政大臣となり、その女遵子掖庭にあり、兼家また遂にその女詮子を後宮に納る。二女ともに女御となりて寵幸せられしが、遵子まづ擢でられて皇后となる。その威儀を整へて入內するや、その兄公任駕に從ひ、得得として驕れる色あり。兼家の東三條の第を過ぎ、馬を駐めて曰く、この家の女御いつかまたかくの如くなると、兼家の一族これを喜ばず。しかるに詮子皇太子を生み、太子(すなはち一條天皇)即位したまふに及びて、皇太后となり、立太后

の儀甚だ盛なり、公任またその式に從ふ。太后の女房辨內侍車中よりこれを歷いて曰く、素腹の后いつかかくのごときと。公任深く慚愧せりといふ。かくて兼家は一條天皇の外祖父として攝政となり、ついで太政大臣となり、兄弟三人のうち最も榮達せり。師輔の三子勢を爭ひ、相次いで攝關たりしが如く、兼家にも道隆、道兼、道長の三子ありて軋轢し、また相次いで攝關の重位を占む。道隆の女さきに一條天皇の後宮に入りて皇后たり、道長更にその女を納れて中宮とす。道隆早く薨じ、道兼また間もなく薨じ、道長ひとり威權赫々、その五女を四帝、一皇子に納れ、三帝の外祖父となりて、また他の競爭を容さざりき。

上述の事實を見ても、當時の人情、排他利己を事として、義理の何たるかを辨へざるを知るべし。上にありて名流勢家が權を爭ふより、以下順次にその分に從ひて黨同伐異す。げにや無事安逸の世、めざましき功績も立てがたく、地位固定の時、才能も出世の用をなし難ければ、請託攀緣して以て權家の推薦に與らんとす。身分の高からざるは、大臣、大將などの顯達の門に出入し、その家の私事を務めて恩顧を希へば、こゝに朝臣にしてまた一家の僕なるが如き、家禮といふ

ものを生ず。かくして漸次に王臣は私臣に移り、遂に武家君臣の制を釀成するに至りぬ。されば當時の社會は、わけて便佞浮華、權利を慕ふこと蟻の甘きに就くが如し。樞要の地位にあるものには、知ると知らざるとを問はず參趨して、叩頭の足らざらんことを恐るゝに、その人一旦勢を失ふや、向背掌を翻へすが如く、昨日は門前車馬の輻輳せしところ、今日は鳥雀空しく囀りて人影を見ず、輕薄紙の如しとは、まことに當時の人心の謂なり。されど憐むべし、世人がかくの如き行動を敢てせしも、一は社會の組織が然らしめしなり。今日の佛門の僧侶を評するもの屢〻曰く、かれらは奸猾にして陰險、俗より出でて俗よりも遙かに俗なりと。さはいへ一概にその心事をのみ斥非すべからず。明治のわれ／＼は頂天立地至るところに職業を求め得べきに反して、かれらはなほ在來の階級に縛せられ、狹隘なる一宗の間にのみ浮沈すれば、道德堅固なるものの外は、勢排他利己の已むを得ざるものあり。平安朝の廷臣も蓋しまたかくの如し。その職に就き、身を立つるは、唯一の朝廷あるのみ、行動の範圍極めて狹く、そのうちに局促せざるべからざるが故に、扁舟に百千の人を容れず、これに乘らんとす

るものはおのづから他を排斥するに至りしなるべし。

平安廷臣が活動せる、その舞臺は狹隘なり、その筋は單調なり、かれらは競うて朝廷に出て仕へて、その他を知らず、帝都のほか骨を埋むべき青山あるを思はず。苟安に馴れて、幾外の動靜に眼を閉づれば、その生活の單純なることは言語に絶す。貴族はみづから政務に與るを喜ばず、武事を執るを卑み、年中の行事たゞ修法讀經か、賀茂、石清水の祭事か、詩歌管絃は公卿必修の技にして、かれらは月雪花の遊宴には常にこれを玩ぶ。當時の小説に、春にもなりぬ、さ月にもなりぬなど、四季の變遷とその折々の行事雅遊とを記せることのみ多きは、卽ちこの消息を漏せるなり。今日の京都市民がなほ因循姑息の誹を受くることあるは、一は平安の昔の餘弊を受けたるものにあらずや。人みな宇津保、源氏の變化に乏しくして、讀者を倦怠せしむるをいふ、しかれどもこれらも著作の時にありては、決して變化に乏しきものにあらずして、多大の感興を以て耽讀せられたり。もしこれらの小説を以て單調なりとせば、卽ち平安の社會の單調なるなり。この單調なる一生のうちに、著大の事件ありとせば、婚姻と出産となり。貴族

の娘が女御となり、皇子を生むは、一門に光彩を生ずる所以なるは、更めていふを須ひず。廷臣相互の婚嫁も、夫は妻の家の地位もしくは財産を利用せんとし、妻の父兄は壻の名望を頒取せんとす。出産は婚姻によりて生じたる關係を更に固定せしむるものなり。當時の歴史にも、小說にも、婚姻と出產との描寫に力を盡したるは、これが爲なり。かくして單調なる社會に、この二件あるによりて、地位の異動を生じ、盛衰屢ところを更ふ、有爲轉變の理は歡樂世界も漏るゝことを得ず、平板なる平安文學に多少の變化を見、趣味を感ぜしむる所以なり。

翻へつて家族の內情を見よ。職官も世襲の姿となり、地位の高下は人によつて得られず、家によつて定まりしかど、後世の如く、正庶の分、長幼の序明かなるにはあらず、その職を傳ふるや、子より孫に繼承するもあり、兄弟相讓るもあり。財產も擧げて嫡子に讓るよりむしろこれを子女に分配すること多し。分配の多寡はたゞ財主の意に任せ、年齡の如何に準ぜずして、愛情の多寡に基き、母を異にする時は、その母の輕重に依る。當時の制、一夫多妻は公然の風なり、男子の妻を設くるや、直ちに己が家に迎へずして、夜に入ればその里方に赴き、明くれば

歸る、恰も今人の妾宅に通ふが如し。かくて相互の間に知らしめずして、幾人の妻をも有することを得れば、多妻の風は益〻助成せられしなるべし。漸く相馴れて家に迎へても、對の家を定めてこれに住ましめ、貴族の第には一家に數人の妻あることよの常のことなり。これらは後世の如く妻と妾との別あるにあらずして、いづれも同等の妻といふべく、たゞこれが差を生ぜしむるは、妻の里の高下なり。里もし貴ければ、妻の勢おのづから他の對の君を壓し、その腹の子女また父の愛情を專らにし、遂には家を繼ぐに至る。要するに繼嗣の關係はやがて夫妻の關係なり。さらばこゝに男女の關係について一言せざるべからず。

一夫多妻は即ち男尊女卑の結果なるが如し、印度、支那と同じく、女子を卑むは、わが國古來の風なり。男子は妻を更へ妾を置くも、破廉恥の事とせざるに、女子は二夫に見ゆべからず、或は生れながらに罪業深しとし、或は三從七去の義務ありとす、小心翼々、男子の鼻息を仰いで一生を過すは、中世以後の習なれば、これより推せば、平安朝もまた然るべく思はる。しかれども實際はこれに異なり。大體にいへば、女子の地位の下れるは疑なしといへども、武家時代の如く繫縛

に甘んじたることはなかりき。婚嫁は青年男女の親と親との約束によつて直ちに定まるにあらずして、當人同志の交際より成る。交際といひても手を携へて散歩するなどのことにはあらず、多くは和歌を贈答し、時に簾を隔てて語るにあり。ゆかしと慕へる女子には、必ず男子より衷情を運べる詠を送る、これに答ふると答へざるとは、女子の隨意なり。近づくすべを得たる時は、男子より往き訪ふに、直ちにこれと語るを欲せざれば、侍女をして應接せしむ。みづから出づる時も、男子はわづかに簀子の上にあり、女子は簾のうち几帳の陰に隱れて、語を交ふるのみ。厭はしと思へは、客を捨てて引き入ることも、おのが心の儘なり。かくの如きは、一は女子本然の羞耻心より出で、一は一夫多妻の習はおのづから男子をして婚嫁を重ねしめ、厭きたる妻は弊履と捨て去るの放恣に陷らしむること多きを以て、秋扇の歎を恐れて、踏躙逡巡、かなたの赤心を明めざれば、その戀を容れざるによるといへども、とにかくに女子は主人の如く、男子をしてその膝下に伏して哀を乞はしむるの觀を呈せり。されど交密に情熟して、一旦婚嫁すれば、あゝ賽は投げられぬ。女子の再嫁は後世の如く不德とはせら

れざれども、子を生み色衰へたるものは、おのづから人も喜ばず。輕靡なること浮雲の如き男子は、たゞ珍らかなるにつきて、昨日の愛を忘れ易し。優劣忽ち地を更へて、妻は夫を天と仰ぎ、その心の渝らんことをのみ憂ふ。結婚の翌日よりもはや、後朝の文のいかゞあらんと氣遣ひ、一夜二夜音づれねば、早く永き別れとなりしにはあらずやと泣く。戰々競々、女の袖に涙の乾く隙なきは、平安朝の無爲なる社會に、最も生じ易き波瀾にして、當時の小說もまたこれが爲に喜憂交〻至るの情趣を生じたり。

人の妻となれば、節を折きて夫に服從せざるを得ず、これを厭へりとて、いつまで處女を以て世を過し難し。これを以て榮譽ある生活を想ふ中流以上の婦人は、家を出でて後宮に事ふ。後宮には、上に皇后、中宮あり、數人の女御、更衣その下にありて、互に君寵を爭へば、いづれも力めて才色ある女房を集めて、勢威を張らんとす。若殿上人は、或は異性相引く自然の性より、或は宮人の眷顧を得て立身の種とせんとの慾より、競うて女房の局々を音づれて談笑すれば、和歌に、管絃に、女房の抱負と技倆とはなか〳〵に高くして、上達部に讓らず。淸少納言宮

廷の生活を誇つて曰く、「おひさきなく、まめやかに、えせ幸など見て居たらん人は、いぶせく、あなづらはしく思ひやられて、なほさりぬべからん人の女などは、さしまじらはせ、世の中の有樣も見せならはさまほしう、內侍などにてもしばしあらせばやとこそ覺ゆれ」と。（枕草紙）かく後宮の陪侍を名譽とし、婦人の學藝を奬勵すれば、才媛淑女の彬々として輩出せること、平安朝の如きは、古今東西に比類なし。處女は婉柔なる態度を以て男子を惱殺し、宮女は卓越せる才識を以てこれを羞殺し、婦人の勢力の大なること、後人の夢想する能はざるところなり。平安朝の歷史の過半は婦人の歷史なり、少くともその文學史は主として女子の作品を以て占めらる。

平安朝の文學は巾幗者流の文學なり、男子が國際の高き墻壁に遮られて、修得し難き漢詩文に遑々として、功名の見るべきものなき間に、女子は自由なる假名文字を操つりて、おのが城壘を堅くせり。女子の勢力は男子に及びぬ、風俗思想より言語文章まで、平安朝の社會は、一般に女子的となりぬ。後世のいはゆる雅文なるものは、即ち當時の上流婦人の文章の樣式が弘布して、遂に一般世人

の模範と仰ぐに至りしものにあらずや。その句が聯珠の絲の如く、脈々として絕えざるが如き「何々になん」「何々にこそ」といひて、結語を略し去るが如き「種々の行爲を一つ口に「物す」「奉る」「景色ばむ」など、ことさらに不明瞭なる言語を以て現はすが如き、敬語を濫用し、主格を省略するが如きは、その原因一にして足らざるべしといへども、謙退含羞なる婦人の特性より出で、上流社會の儀禮を加へて成りたることゝ、またその主因の一なるべし。これやがて宮廷の婦人が文壇の權威を左右せし結果にして、爾來わが國文は永くその影響を脫すること能はざりき。

第四章　日常の生活

平安朝の貴族は體質虛弱にして、資性沈鬱、行動に鈍にして、感情に敏なり。かくの如きもの、かれらが日常衣食住の狀態を見れば、決して偶然にあらざるを知るべし、

食物は、常食品として米飯を用ひしことは、言ふにしも及はず、副食物として鳥肉、魚貝、菜蔬菓蓏の類あり。牛馬はもとより食はず、鹿猪の類は、太古以來、食膳に上りしが、この時代に至りて、佛教普く行はれ、殺生を忌むこと深くなりしより、漸次肉食の風は廢れぬ。牛乳を用ふるは、戒律に觸るゝにもあらず、佛教の儀式にも具へられ、蘇といふ牛酪の如き精製品もありしかど、獸肉を嫌ふと共に、いつしかこれも廢れたるが如し。鳥類はさすがに賞美せられしが、雞は居らず、雉を獵ること最も多く、ついで鴨、雁、その他の小鳥もまた用ひらる。魚貝は鯛、鯉を上品とし、淡水魚は鮭、鱒、鱸、鮒、氷魚、香魚、石伏など多く、海產品は鮪、鯖などもあれども、章魚、海老、石決明、榮螺、胎貝、老海鼠、小蠃子、甲蠃、白貝、蟹蜷、石華、海鼠、海月などの、滋養分に乏しくして不消化なるもの、殊に翫味せられ、種々の海藻また用ひらる。平安京の地、三面山にして、海に遠く、海產品は最も近くて、難波か若狹より送らざるべからざるに、運輸不便の時代なれば、今日の京都市民が口にするやうなる新鮮のものは到底得べからず、鮭、鱸の如きも、また遠路輸送のほかなければ、おのづから鮮魚よりも、干しまたは鹽漬にしたるもの多く用ひられ、鮨、楚

割、火乾、煮乾、押年魚、鯖醤、蒸鮑、熬海鼠などの製品は、今日よりも當時に夥しく行はれたり。

菓子は生菓と製品とありて、共に食卓の重要なる地位を占む。生菓には桃、栗、柿、梨、李、棗、柑、橘、枇杷、柘榴、覆盆子、胡桃、椎子、芡、蓮子、通草の實等さま〴〵ありしが、栗と柿とは搗栗、甘栗、扁栗、削栗、煠栗にし、熟柿、干柿、串柿にして、四季うち續きて用ひらる。今日にても祝賀などの式に、熨斗鮑、堅魚節、伊勢海老、昆布、搗栗、串柿などを三方に盛るは、故實家輩の牽強附會の解釋を下すものあれども、風俗變遷の後も、儀禮には古風を保守する習にて、上古に普通なりし食物をこゝに示すに過ぎざるなり。製品は生菓と區別せんが爲に唐菓子と稱す。糫餅（マガリ）、捻頭（ムギカタ）、饆饠、黏臍、桂心、餲餬、餅餤、餢飳（フト）、煎餅等の種類あれども、概ね米麥の粉を固め、また餅に舂きて、これに甘葛の煎汁にて甘味を加へたるものにて、曲げひねりたる形狀によりて、多くの名あれども、素質は大同小異の單純なるものに過ぎず。

日常の食事には、椀（マリ）、盤（サラ）の類を折敷、臺盤、懸盤などの上に置くが、大饗など多くの客に對する時には、大なる長き机の上に並べ据うること、今日の洋食における

が如し。卓上には酢、鹽、醬などを皿に盛りて、客の前に備へ、嗜好に從うて即座に鹽梅するを得せしめ、箸のほかに食匙を用ふることも、西洋の風に似たり。保延二年、藤原賴長が大饗には、菓子、干物、生物おの〳〵八種にして、なほこれより多きもあり。山海の珍羞座前に堆しといへども、概するに食物を選擇し、調理する方法いまだ精しからず、汁、鱠、羹、煎付、燒物などの調製甚だ簡單なり。列ねたる數は多けれども、干物、鹽物の滋味に乏しきが過半を占め、配置調色の變化に工夫を凝して、營養分の如何を思はず。形式に拘はりて實用に疎き平安貴族の特色は、その食物の上にも現はれ、宿弊は引いて永く後世に及べり。

平安貴族が形式を重んじて、實用を蔑ろにする風は、食物よりも更に服飾の上に現はれたり。太古以來、衣服の制、男子は、下肢に、袴とはいへど股引の如く細きものを穿ち、上肢に、筒袖にて丈短き上衣を着て、大體は洋服に似たりしが、奈良朝より平安朝に及びて、漸次狹きものは廣く、短きものは長く、樣式一變して、勞動に不便なるものとなるに至りぬ。和銅元年令して曰く、今より後、衣の袖口闊さ八寸以上、一尺以下は、人の大小に隨うてこれを爲ることを得と。寶龜六年ま

た令あり、袍の袖口五位以上は一尺、六位以下は八寸を限とすべしとありしに、一條天皇の頃に及びては、一尺八寸の長きに至る。袍の袖はかくの如く闊大に、長さまた深く手を被ひ、袴は大口の上に表袴を襲ねて、見るに豊かなれども、歩むに難み、後ろには下襲の裾を引くこと數尺。これらは通常禮服ともいふべき束帶の風なれば、容儀を重んじ、威嚴を主とするも理なりといへども、略服たる直衣姿も、上衣の形狀には別なく、指貫は少しく歩行に便なるべきが、事々しさは五十歩、百歩の差あるのみ。平常の服たる狩衣、直垂なども、袖括ありて、機に臨みては袖をかゝぐることも爲し得べけれど、一般の形式においては、なほ勞動を計算のうちに置くこと少き、不便の衣服たるを免れず。世を逐うて風俗益〻華奢、鳥羽天皇の頃に至りては、上下殊に容儀を刷ひ、衣文の正しきを喜び、衣服を糊にて強く張りて、板を組みたるが如く、冠、烏帽子も漆を塗り固めて桶の如くす、いはゆる强装束これなり。

婦人は服裝更に重くろしく、いたはしげなり。まづ小袖の上に、長く地に曳く袴を穿き、その上に單、袙、表着を襲ね着る。禮服としてはなほ上に唐衣を懸け、下に

裳を着、略儀には裳、唐衣のかはりに小袿を着る。袙は數多く襲ね、いはゆる五つ衣また十二一重にして、華美に誇るものは、二十餘枚に至るもあり。身を動かすだに苦しげなるに、なほ大なる檜扇を手にせざるべからず。相對しても、紅紫燦爛たる衣服に驚きて、これに包まれたる人を見ず。當時の美人を評して、御衣（ミソ）ばかりに見えさせたまふと、いへること少からざるを思ふべし。たゞに衣服の著大なるのみならず、頭髮の目ざましさも、また遙かに後世に異なり。その澤やかにして長きは、婦人の美貌の第一條件にして、當時の人は、色の白きよりも、目鼻だちの優しきよりも、まづこゝに注意す。結ばずして背に垂れて、末廣く、丈に餘らんことに苦心し、身長より二尺も長きはその例少からず。村上天皇の時、宣耀殿女御は、車に乗るに、身は既にその內に入れど、髮の端はなほ母屋の柱のもとにあり、一筋を陸奥紙の上におくに、白き隙間も見えざりきといふ。（大鏡）また源氏物語に、末摘花の君が己がぬけ髮を髢（カツラ）に爲りて、侍女の侍從の餞とせしは、その長さ九尺に餘れりといへり。（蓬生卷）これらは殊に誇張していへるものなるかも知るべからずといへども、とにかくに服裝の重きが上に、身に餘る黑髮を垂れ

ては、身體も縛られたるやうにて、輕快なる擧動は到底望むべきにあらざりしなり。

京の着倒れは因襲一朝のことにあらず。平安朝の昔より既に食物の不良なるわりに、市民は機織の業に長じ、服裝に綺羅を飾れり。その紋樣色彩の如きも、鮮麗にして、近世の不明瞭なる間色の縞物には似ず。紋樣には浮文、固文の別あり、大にして明かなる花鳥唐草などを附く。正服の色は位階によりて定まりて、紫緋、綠、縹と順を追ひて下り、各色また深淺の差あり、一位より四位までは、いつしか混じて一つ黑色となりしかど、淺緋以下は儼然たる別あり、五位の赤き、六位の綠なるなど、いかに曄曄なる姿ぞや。すべて當時の人は服色に注意すること深く、一つ色にも襲ね色、染色、織色の別あり。表裏透映する襲ね色に趣を取るが如き、色彩についての趣味の發達せること驚くべし。また四季の景物を愛すること深きや、かれらは服色をもその折々の花木に擬して命名し、着用また時を違へず。春に用ふるは紅梅、白梅、柳、櫻、櫻萠黃、樺櫻、夏は卯花、雞冠木、躑躅、楝、秋は萩女郎花、海松、虫靑、白菊、黃菊、紅葉、黃紅葉、冬は枯色、松、氷、時節を論ぜざるものには

二藍、檜皮、蘇芳、木賊等の色あり。あくまでも自然に執着し、人間を以て山水畫中のものとなす、その風流は到底われらの及びがたきところなり。されど偷安懶惰、實用を忘れ、服裝を見るに美の方面よりのみする社會の不具も、また憐むべし。婦人の盛裝を競うては、蒔繪、螺鈿を飾り、金をのべ、または鏡をはめて紋にするなどの極端に趨るもありき。

家屋の建築もまた自然に反抗して、堂々と人力の壯嚴を發揮したるものにあらずして、これを周圍の山水の勝概中の一部と見て、力めて相互の調和を計れり。第宅の主腦を寢殿といひ、これを繞りて對の屋あり、渡殿これを接續す。南面は建物を置かずして庭園とす、池あり、中島あり、池には舟を浮ぶべく、中島には橋を架す。池に臨みて釣殿、泉殿あり、釣を垂れ、涼を納るべし。階前の庭、池邊の築山などには、種々の常盤木、花紅葉などを植ゑて、山水の自然を寫し、壺前栽などにも、清淺なる遣水を引き、春秋の草花を養ひて、蝶の姿、虫の音を愛す。室內の裝飾は華美を盡して、畫くに紅綠黄などの濃く目に立つ原色を好み、蒔繪、螺鈿を用ふること、寺院の建築のみに限らず。すべて自然より出でて、自然より更に華

麗なるものなりき。

當時の建築、外形は淡雅にして、內部は精美、巧緻なること感稱するに堪へたるものありといへども、實用の方面より見れば、陰森晤曚、蓋し人身の健康を害せしこと少からざるべし。家屋の制も漸次宏壯なるに至れりとはいへ、なほ甚だ低矮にして、またいまだ二階屋を造るを知らず。一棟の構造、外部には簀子すなはち椽側を廣く繞らし、そのうちに庇あり、庇の周圍は格子、蔀などにて固め、これを外しても、なほ常に簾を以て隔つるを忘れず。庇のうちに母屋あり、その周圍もまた簾を以て隔つ。されば中央なる母屋はもとより、庇もまた殆ど日光の透入することあらず、室內闇く陰氣なるに、更に貴族は帳臺を設け、侍女なども姿を現はすを喜ばずして、几帳の陰にあり。當時の遺制を傳へたる京都の皇居を拜觀するに、淸涼殿の夜のおとゞの如き、白日また夜間に異ならざるを覺ゆ。室內普通の裝置は、一面の板の間に、人に應じて疊または圓座を敷きたるに、小さき炭櫃、火桶などを具ふるのみなれば、冬の寒さは戶外に異ならざるべく、夏のむしあつさもまた思ひやらる。花に鳴く鶯、池に棲む蛙を和歌の友とせし人

は、快く好晴に囀る小鳥に倣はず、陰濕の地にかゞまりて雨を呼ぶものの類なり。かくの如き生活をなすもの、その性の陰欝に流るゝこと、決して偶然にあらず、輕捷快活なる擧動をかれらに望むは、雲雀のはたらきを土龍子に强ふるものにあらずや。

衣服に身を包み、家屋に陰を爲りて、ことさらに譽ある太陽の光を避けたる平安貴族は、また白晝よりも夜陰を好み、歌會管絃など日沒の後を好時期とせり。衣食住が健康にいかなる關係あるかの智識の全然缺乏せるかれらの、衞生に注意すべき筈もなく、むしろ森羅萬象が月影に照らされて朦朧たる色を美はしとし、夜氣を犯して端近く、池の面による波を數へ、二千里外の故人を懷ひなどして、更の闌くるも覺えず。かれらはまた曰く、夜鳴くものは、何も、何も、皆よしと。闇を破りて裂帛の聲ある時鳥を、いつも初音と稱へ、妻戀ふ鹿、叢にすだく蟲にあくがるゝもこれが爲なり。若殿上人の晝はものうげに眺め暮らし、夜に入りてぞ妹がり通ふ。久しく遇はざりし恨、いづれかまされるときほふ思、喜び歎きさま〴〵にかき口說きて、しばしもまどろまぬに、雞鳴に驚き、朝霧をわけて

立ち出づめり。あるは盜人などのやうにうそぶき歩きて、築地の壞れなどより覗ひて、燈の陰に美はしき女もがなと、おぼつかなき獲物を探すもあり。何時も自然を學ぶ世の、夜は休むもの、寢るものとの定のみは守られずして、當時の人は光よりも陰、晝よりも夜を喜びたり。

如上の生活に明しくらせる平安貴族の、更に健康に不利なることあり。結婚はいづれの國、いづれの時代にも、一生の大事たることと疑なきが、無爲苟安の世には、わけて冠婚の式を重視せざるを得ず。男子が成丁の人となる儀式をうひかうぶりまた元服といひ、女子には裳着といふ。漸次その期を早めて、十歳を過ぐること遠からざる男子を元服せしめ、後には十歳以下にしてこれをなさしむ。貴族は、元服したる時には、直ちに添臥の女を定めて、その妻となす習なり。されば男女十二三歳にして既に婚嫁するは珍らしとせず、この年頃の幼女の早くも懷妊するあり。今日にても、遊廓のあたりに育てられたる女子は、成熟極めて速かなりといへば、これもまた怪むに足らず。されど骨格なほ十分に發達せざる女子に、結婚出產を强ふる弊は、直ちに事實に現はれぬ。當時、分娩の困難なり

しは、蓋し今人が想像の外にありて、これが爲に死に至るもの屢〻これあり。わけて迷信深き習にて、安産を祈るとて、加持祈禱の沙汰喧ましく、不斷經の聲、護摩の香、物の怪の罵るなど、少弱なる妊婦の堪へがたきところなるべし。幸に九死を免れて、母子無事にひだつとも、かくして健全なる國民を育成することは、望むべからざる數なり。

要するに平安貴族が日常の生活は、自然の權威に服從して、その知識はなほ人間の勢力を使役するに至らず。衣服の形狀のみは誇張に過ぎて、いたく不自然なりといへども、その色合などなほ花木を摸することを忘れず。形式の美、配色の巧に苦心し、實用の事物にも、その目的を忘れて、審美的の眼孔をのみ注ぎ見る。その結果は不養生に流れ、不健康に陥り、擧動不活潑にして陰鬱、體質おのづから神經の過敏を生じ、感情的となり、多恨多涙、克己を闕いて、性慾の動くまゝに浮沈するに至れり。花に戯れて餘念なき狂蝶の一生、かれらは果して幸なりしか。

第五章　佛敎の流布

平安朝人士の思想を左右したること最も多きものを、何ぞと問はば、誰か一言の下に佛敎なりと叫ばざらん。渡來以後、漸次勢を張り、奈良朝に至りて、大佛の偉觀、國分寺の配置等、その勢力は一時の盛を極めしが、平安朝のはじめ、最澄、空海起りて、こゝに面目を一新し、天台、眞言の二敎天下を席捲するに至れり。

最澄唐より歸朝して、新たに天台宗を傳へ、かねて占め置ける叡山に據りて立つ、この地は皇城の鬼門にして、延曆寺は國家鎭護の道場なり。最澄の高弟に義眞、圓仁(慈覺大師)あり、義眞の上足に圓珍(智證大師)あり、圓仁、圓珍相繼いで入唐して、最もその宗の興隆に功あり、最澄ありといへども、この二人なかりせば、台敎はなほ强大なる能はざりしなり。圓仁は楞嚴家の祖、圓珍は山王家の祖にして、また三井に園城寺を興す。はじめは山王家勢あり、その家より續いて天台座主を出し、横川の楞嚴院は落莫として、主僧一二人を留むるに過ぎざりしが、良源(慈慧大師)に至りて形勢は一變す。良源は圓仁の法孫にして、世に元三大師と

稱し、山門の中興と仰がる、學識深邃にして、また事務の材幹あり、門下に俊秀の輩を集む。九條師輔これを尊崇し、爲に横川に法華三昧堂を建て、また第十子をその弟子として、尋禪と名く。師輔の子兼家も父の志を繼ぎ、横川に慧心院を開きて、家運の繁昌を祈る。良源藤氏と夤縁して一派の勢力を張り、また僧兵を置きて武備を起す。三塔すべて下風に靡き、爾來、座主の重位はこの派の占むるところなり。時には山王家また英才ありて座主となることあれども、楞嚴家これを排擠して止まず、二三日、長きも三月ばかりにして、退職の已むを得ざるに至らしむ。朝廷干渉を加ふれども、如何ともしがたく、山王家は壓迫に堪へずして、三井寺に移住し、山門、寺門の軋轢絶ゆることなかりき。

空海才識一世に空し、眞言宗を唐より傳へ、帝都に東寺を掇めて、皇室の歸依、都人の渇仰の府とし、別に高野山に靈地を占めて、清淨の界永く萬世不壞の教を立てんとす。その後、益信、聖寶の二僧の出づるに至りて、宗門の勢大に張る。宇多法皇益信に歸依して、御髮を剃り、仁和寺に御室を營みて住みたまふ。聖寶は醍醐寺の開基なり。益信の流に寛朝(即ち宇多の皇孫)出で、聖寶の流に仁海起り、こ

れより廣澤、小野の二流相對立す。二流のうち更に分派ありといへども、諸流派いづれも敎義の上に差あるにあらず、たゞ門戸を構へてその盛大を競ふのみ。古義、新義などの別れしは、平安末期のことに屬す。かくて眞言は天台と相並びて、共に隆々たりしかど、細かに比較すれば、社會における勢力些しくかれに譲るところありしが如し。さばれ內實は天台却つて眞言の分子を容るゝこと多し。元來、支那にては天台と眞言と儼然たる差あり、天台は法華經を所依とし、眞言は大日經を根本とし、一は精しく經典を修め敎理を究めて、佛敎の根柢に到らんとする、いはゆる顯敎にして、一は修法加持によりて、直ちに佛と我と三密相合せしめんとする、いはゆる密敎なり。しかるに最澄の唐に在るや、天台を學ぶ傍ら、また眞言宗と禪宗とを併せ傳へ、名は天台とはいへ、實は他の二宗を混ぜしものなりき。圓仁は更に眞言に傾きて、顯敎の理義と密敎の事相とを重要なることと相同じとし、圓珍は殊に甚しく、顯劣密勝を唱ふ。されば表面は天台、眞言と流を分つといへども、その行事はいづれも壇を立て、護摩を焼きて、諸佛菩薩の法を修することを主とす。天台宗は台密といひ、東寺の流は東密といひて

區別すれども、世を擧げて、專ら眞言祕密の修法灌頂に信念を置きたり。天台、眞言の二敎平安京の榮ゆると共に旺盛を極め、傳來當初このかたの諸宗はこれが爲に壓せられて、微々として振はず。されど强弩の餘力なほ見るべく、奈良の舊都に僻在して、頽勢を挽回せんとするものあり。東大寺は奈良諸寺の首座を占むといへども、今や却つて衰廢し、華嚴の一宗絕えざることたゞ絲の如し、ましてその他の寺院はいふに足らず。ひとり興福寺は藤原氏の氏寺として、氏神春日と並び立ち、一門の渴仰深ければ、從つて寺院の繁昌も著し。境內の南圓堂は冬嗣の建立にかゝり、北家擁護の觀音ぞましますされば此の寺が立つるところの法相宗には、高德碩學續々として輩出し、練磨工夫以て新立の天台を顚覆せんと欲す。こゝにおいてか南都、北嶺の軋轢あり。はじめは經論により、才識を鬪はせて、問答論義せしが、口舌の果は腕力來り、干戈を以て相見ゆるに至る。山法師は日吉の神輿を振り、奈良法師は春日の神木を捧げて、神聖なる佛敎も偏執の種、修羅の基ぞかし。大和には多武峯の叡山の無動寺に屬するあり、山城には淸水寺の興福寺に附するあれば、南都衆は屢〻多武峯を攻め、山僧は

また淸水寺を襲ひて、鬪爭常に絕えず。心ある僧は痛歎せしかど、大勢は滔々としてかくの如くなりき。

とにかくに平安朝の社會は、擧げて佛敎に沈湎せり。歷代の天皇いづれも信仰深く、攝關の家たる藤原氏も崇佛を家風とすれば、上の赴くところ、下これに靡かざるはなし。旣に桓武天皇の時に、京の東寺、西寺、洛東の淸水寺、洛北の鞍馬寺、神護寺、近江の延曆寺、梵釋寺あり、爾來、大寺巨刹の建立しば〱なり。淸和、宇多二帝は共に眞言に歸依し、出家して、一は水尾に、一は御室に籠りたまふ、門跡の名は實に御室に始まれり。下つて白河天皇殊に佛法に御志篤く、殺生を禁じ、籠鳥を放ち、貢魚を停めて、禁中常に六齋日の如し。天皇なほ世間に志を斷たざれども、法の爲には道に入らざるべからず、乃ち出家して更に政を聽きたまひ、ここに院宣の變態を生ず。天皇法勝寺を剏め、それより平安末期の間、尊勝寺、圓勝寺、最勝寺、成勝寺、延勝寺の建設あり、いづれも白河にありて、併せて六勝寺といふ。鳥羽の安樂壽院、洛東の得長壽院、(或はいはく、院は鳥羽にありきと)蓮華王院(今の三十三間堂)、いづれもまた皇室の御願に出でたり。藤原氏が造寺の盛なるは、皇室をも凌駕

すべし。基經は極樂寺を、忠平は法性寺を、師輔は楞嚴院を、兼家は法興院を、爲光は法住寺を、道隆は積善寺を、道長は木幡に淨妙寺を、京極に法成寺を造立す。そのほか在來の寺中に堂塔を增設し、佛像を寄附せしことなどは、一々いふに及ばず。皇族名門以下概ね灌頂受戒し、重病に罹れば、頭髮を剃り、俗體のまゝにて死するものは佛果を得ずとす。死後にはその住宅を寺院とし、莊園を寺領に弃捨するもの多し。

上下おしなべて、佛敎に耽溺すれば、年中の行事、公私ともに過半は加持祈禱、法會供養なり。法會にて最も多く行はれしは法華八講にして、なほ十講、三十講どもあり。供養は招請の僧侶の數の多きを喜びて、千僧供養、百僧供養といふもあり、四十、五十、六十歲などの賀筵にもまた佛事を修して、長壽冥福を祈る習とす。精進、誦經、物詣、山ごもり、春立つより曆の軸の見ゆるまで、佛いぢりにあかしくらすこと、忙しくもさすがに心長閑しや。榮華物語(疑卷)に、道長が年中佛事にいそしみたる樣をしるす。正月は御齋會、二月は興福寺の涅槃會、三月は滋賀の彌勒會、四月は比叡の舍利會、六月は山の傳敎忌、七月は奈良の文殊會、八月は山

の念佛、九月は東寺の灌頂、十月は興福寺の護摩會、十一月は山の内論義、十二月は公私の御佛名、御讀經に參列し、そのひま〳〵には山に八講を行ひ、また天王寺、高野山などに詣づ。若き時より不斷經を讀みて、その驗あらはなりとて、一族をはじめ下々までこれをまね行はぬはなし。また論義を好みて、これを奬勵すれば、交際社會に名を知られたる殿ばらは、これに加はらぬを耻とし、日夜營々として經文を學びたりといふ。

流行かくの如くなれば、佛敎の威權は驚くべく、社會の事物に對するその影響甚だ大なり。これを文學に見るも、今樣が和讃より出でたる、歌合の論義に取りたるなど、その例少からず。更に佛敎と對立拮抗すべき祭神の道を見ば、いよいよその勢の大なるを知るべし。

日本は神國なり、神を祭りて祝福を祈り、恩惠を謝するは、わが國固有の美風なり。外來の佛敎にして、もし祭神の俗を斥けて、おのれこれに代らんとせば、彼此扞格決して好果を見ること能はざりしなるべし。幸にして佛敎には本地垂迹の說あり、既に印度において他敎を融合し、その神を取つてわが道のものとし

たり、何ぞこの法をわが國に應用せざらんや。布教者は曰く、日本に種々の神の出現ましますは、本地の諸佛が時勢に應じて濟度せんが爲に、迹をこの地に垂れたまひしなり。たとへば天照大神は大日如來、豐受大神は金剛夜叉、國常立尊は大梵天、諾冉二尊は伊舍那天、伊舍那天姫なりと。かくて神の名に權現、大菩薩などいふことも出で來りぬ。この神佛融合の起源を思ふに、そのはじめは都下宮中に經義を講釋する僧侶の間に說かれたるよりも、山を開き道を通ずる修驗者流によつて、地方に唱へられたること多かるべし。山に、川に、みな土地の神あり、こゝに來りて佛敎を布くものは、勢その神を佛敎に融化せざるべからざるを以てなり。傳へていふ、文武天皇の時、役小角あり、大峰、葛城兩山の間に路を通ずとて、葛城の一言主神を役し、功を成すこと遲しとて、これを縛せりといふ。ついで泰澄は加賀の白山を開きて、妙理大菩薩すなはち伊弉諾尊に逢ひ奉り、勝道は下野の二荒山を拓きて、神宮寺を建つ。その頃また行基の出づるありて、奈良の都において神佛一致の說を述ぶ。或は傳ふ、聖武天皇の東大寺を建立せんとしたまふや、なほ祖神の怒に觸れんことを慮り、行基をして往きて舍利一

粒を奉らしめて、大廟の神意を伺はしむ。大神の託宣に曰く、實相眞如の日輪は生死の長夜を照却し、本有常住の月輪は煩惱の迷雲を爍破す、我今遭ひがたき大願に逢ひて、渡に船を得たるが如し、又得がたき寶珠を受けて、暗に炬を得たるが如しと。元亨釋書による、神道家の說と相違するところあるは固よりなるべしかくして東大寺の大伽藍は立てられ、手向山八幡は勸請せられて、寺內鎭守の神となれり。

かくの如く平安朝以前、既に神佛一致は行はれたりといへども、奠都の後、顯密二敎が勢を逞しくするに及んで、更にその事實は盛なり。眞言宗はもと印度にありて、婆羅門敎の種々の神を借り來りて、最上佛の下に隷せしめ、純一なる佛敎よりも、むしろ二敎混和の體をなせるものなれば、密部の事相の遍滿せるこの朝は、すなはち神佛和合の流行に最も都合よき時代なるべし。されば世或は稱して、最澄、空海は和光同塵の說を唱へたる祖なりとなすもの、精確なる論にはあらざれども、大勢の計算よりいへば、また所以なきにあらず。習合の見地より神道の敎理を立てたる書の、これらの高僧の手に成れりといふが如きは、概ね後人の假託なるべしといへども、事實において神佛を一致せしめたること、

否、神を以て佛の下に隸屬せしめたることは、平安朝に殊に著しきを見る。かくして大寺のあるところ、必ず鎮守の神の附隨するあり。延暦寺の日吉山王、三井寺の新羅明神、高野山の丹生、高野明神、清水寺の地主權現の如き、その例にして、春日は興福寺の鎮守、伏見の稻荷は東寺の鎮守、貴船は鞍馬寺の鎮守なりといふ說も、異論はあるべけれど、余輩はこれを取る。既に神社は佛寺の勢力に壓せられ、太古以來の大祠も漸く勢を失へば、新たに佛敎と隨逐して起りしもの、大に世人の渴仰を得たり。石淸水八幡宮は大安寺の僧行敎の勸請にかゝり、その重儀なる放生會は、名を聞きても直ちに佛敎の法事に類せるものなるを想はしむ。祇園は午頭天王なり、北野は菅公なると同時にまた大自在天と崇めらる。明治の今日、なほ北野、祇園、稻荷が四方の信者を集めて、參詣者の絕ゆる隙なきに、廣瀨、龍田、平野、松尾が境內森閑として神樂の聲も聞えぬは、他に原因もあるべしといへども、千年以前の盛衰の樣を依然としてこゝに止むるものにあらずや。更に翻へつて當時の大社を見よ、いづれも神宮寺あり。そのはじめ天平勝寶年中、常陸鹿島神社に設けられ、遂には伊勢神宮にも及びて、神を祭る行事に

も、佛式の法事供養をなす。神社の構造にも、寶塔、鐘樓を建て、燈籠を列ね、仁王門に倣ひて隨身門を置くもの多きが如き、明かに這般の消息を示すものなり。旣にわが國に固有なる祭神の道をさへ融化し去る、佛敎の勢力の偉大なる、問はずとも知るべし。これが活動の狀態種々ありといへども、概括して論ずれば、主として次の三種にあり。

(一)佛敎は學問なり。佛敎の旨を知るには、先づ經論を學ばざるべからずといへども、當時の社會は手段に急にして、目的に疎し。最澄、空海、圓仁等の高僧には、抄解の著多く、學徒は三國の典籍の修得に刻苦し、わけて法相、天台にては註釋批判の沙汰嚴しく、經義の闡明に精進す。かくては曇鸞が卷軸を取つて一炬に附せし遺意いづくにかある。俗人もまた經論を學ぶこと、詩文を學ぶが如く、これを寫字し、讀誦するを以て名聞とす。途中の逍遙、彼岸は遠くして日早くも暮れんかな。

(二)佛事は實用の技術なり。僧侶が布敎の方便なり、餘業なりとして、山谷を拓き、津梁を通じたる濟世の事業は、しばらく措いて言はず、功利のあるべからざる

ところに、また功利は求められぬ。元來、佛敎の旨は貧富利害の觀念を忘れて、紛紛たる世塵を離るべきものなるに、敎ふるものの俗に投ずるがため、聽くものの眞を得がたきがため、結果は却つて反對の方面に走り、種々の佛事は富貴利益を增加する手段となる。營々として餘念なき加持祈禱も、息災延命のためなり、子孫繁昌のためなり。最澄が宮中において毘盧遮那法を修し、空海が仁王經法、請雨經法を修せしより、建壇修法は年毎に盛に、廣澤の寬朝は將門の亂に南北の諸高僧と共に朝敵降伏を祈り、小野の仁海は長久の旱魃に雨を祈りて、雨僧正の名あり。諸寺の修法も祈禱の目的によりて種類を異にす。たとへば山門の重んずるところ、鎭護國家のために大熾盛法あり、息災增益に七佛藥師法あり、御所築造に大安鎭法あり、寺門には天變地異に尊星法あり、東寺には息災增益一切に孔雀王法あり、鎭護國家に仁王法など、それ〲專門の術あるが如し。兵亂戡定の功は、戰場に臨みし武士よりも、壇上に數珠おしもむ僧正にありとし、實際の醫師またこれありといへども、病氣には何をおきても加持の功力を賴む。觀音と藥師とが世間の信仰特に篤きは、一は現世の七難を救はんとの誓

願あり、一は病氣平癒の應驗掲焉なりと信ずるが故にて、かくてはかしこき佛菩薩に消防組合、水難救濟會などの事務を強ひ、お醫者樣や取りあげ婆の役をも務めさするなり。

(三)佛事は綜合美術なり。こゝには佛敎に伴ひて、建築、繪畫、彫刻などが一々に發達せしことをいふにあらず。艶麗にして莊嚴なる法會供養が、一種の劇的趣味を觀者に與へたることこれなり。七堂伽藍金銀瑠璃を羅織し、端正慈悲の三尊、忿怒破邪の五大明王、口動き眼輝けば、香煙は徐ろに上りて幢幡を繞る。轉讀の聲或は高く、或は低く、諧調節に合ひて、うたゝ心耳を淸ますに、舞樂いづこにか起りて響悽惋、その聲に合せて、綾錦を着飾りたる僧徒は練り出で、蓮花しきりに散ること雪の如し、紫雲は棟に下らずとも、身は既に汚濁世界を離れて、兜率天上にあり。これまことに諸種の美術を統合し、人をして恍惚無我の界に遊ばしむるもの、法會の場は即ち小淨土なり。

佛敎はかくして社會のあらゆる方面に勢力を占めたるが、その影響するところは表面なり、形而下なり、廣さにおいて餘ありといへども、深さにおいて足ら

ず、宗教の第一義となすべき信仰を勸むることは却つて忘れられたりき。宗教は既に哲學にあらず、いはんや實用の技たるにおいてをや。綜合美術として一時の忘我を與ふといへども、永遠の安心は望むべからず、岐路に彷徨して、根本の旨は人心に傳達せられ難し。それも理なるかな、當時の僧侶の中には、出塵の心淸きもあれど、多くは一旦の蹉跌か不平の爲に剃髮せしのみにして、更に出家の本意を思はず、または功名心の熾なるが爲に佛門に入るも少からず。名利を棄つべき界の却つて名利の衢となりて、寺階の輕重、僧綱の高下を爭ふのみ、みづから悟らずして、いかんぞ人を敎へん。稀には醍醐の聖寶が賀茂祭にあか裸の腰に乾鮭を太刀に佩き、やせ牛に乘りて都大路を練り、多武峯の增賀が三條大后宮に參りて、簀子より糞ひり散らして、僞善の頽俗を痛罵せしなどの事あれど、一般の風は毫も更まらず。平安朝を擧げて濁浪のうちに浮沈し、やうやく眞實の意義を有する宗敎の說かれしは、鎌倉時代に入る頃よりのことなりとす。

或はこの論を疑ふものあらん。然り、念佛の功德は早く台家に唱ふるところ、空

也は諸國に歷遊して、下民の間にこの易行の敎を布き、源信は往生要集を著はして、淨土宗の基をなし、鳥羽天皇の頃には、融通念佛宗も開かれたりといへども、なほ專念稱名の廣く世の信仰を得たるは、平安朝を終りて後のことにあらずや。露にたとへ、うたかたにたぐへて、この世を常なしといひ、憂き世なりけりとは、歌にも詠めど、厭世出離の思想はいまだ人心の根柢に浸まず、うはべはいかにもあれ、まことは秋の近きも覺えずして梢に騷ぐ蟬と一般、沈痛悲哀の態度も、流行の衣を引き被ひたるばかり、その一枚を剝げば、直ちに赤裸々なる邦人固有の想はあらはる。樂天的なる、滿足し易き、峻刻ならざる傾向は、依然として神代ながらの民なり。かれらは大千世界に遍滿する法身佛を敬虔するを知らず、萬有に對する自己の關係を思はず、懷疑もなければ信念もなし。社會の表面は佛敎の影響に滿ちたりといへども、根本思想はいまだ變化を受けず。もし人心に感化を與へたるものありとせば、そは宿命の說なるか。

佛敎は三世因果の說を立てて、現世におけるさま〳〵の人の運命を說明す。さまでの功勞なくして富貴自在なるものあり、曰く、これ過去の善行の報なり、現

世に善行を積まば、未來またかくの如くなるを得んと。罪なきに禍に罹るものあり、曰く、過去積惡の果なりと。かくの如く、現在の運命を宿世の業とする思想は、深く人心に浸潤して、平安朝第一の作品たる源氏物語の如き、殊にこの說を敷衍せる觀あり。社會の事情もまたこの思想と夤緣して、因ともなり、果ともなりしが如し、貴族がその女を女御更衣に進めて、將來の榮華を計るは、當時の習されど年齡の適否、容貌の美醜の如きは、人力の如何ともする能はざるところ、皇子誕生の如きも、また宿命の幸不幸如何にあるのみ。こゝにおいて元來、活潑の氣力なき月卿雲客はいよ〳〵運命の前に手を束ね、佛神に好運の發展を祈るを、せめてもの事とす。さらば現世の善因を以て、當來の好果を取るは如何といふに、あくまで天力に屈從して、人力のこれに對峙すべきを知らざるかれらは、自己と世界との窮極の一致を知らず、自覺の念なくして、怯懦無能、未來の運もみづから開拓せずして、加持祈禱の結果に待たんとす。自然は平安朝の社會にはあまりに大に過ぎたり、佛敎はかれらに覺醒と信仰とを與へずして、宿命の說にいよ〳〵天力は倍加す。人間の行爲も敎誨のために箝制を加へられず

して、性慾はむしろ自然のまゝに發育したりき。

第六章　情念偏重の時代

鎌倉、室町時代において世道人心を支配する專制君主たりし佛敎も、平安朝においては、なほ社會の道義を律する標準とならず、儒敎もいまだその勢力を揮ふ能はず、仁義五常の敎が十分に發達して、武士道と共に處世の指針となりしは、遙かに下りて江戸時代のことに屬す。佛敎の光は人間海の浪の上を照せども、底に沈める魚に及ばず、詩文の花を大宮人はもてはやせども、孔孟立敎の實は摘まんとするものなし。さらば平安貴族の思想は何物の感化を得、その行爲はいかなる敎によつて制御せられしか。說くものは曰く、當時は宗敎も道德もなし、これなきにあらずといへども、世人は顧みざるなり、無方針、無節制、放縱にして淫靡なるは、即ちその結果なり、頽風爛俗その由つて來るところを見るべしと。

余輩は謂へらく、平安貴族の行爲を左右する準繩なきにあらず、後世と類を異にすとはいへ、とにかくに文化の高潮に達せし時代、何ぞ蒙昧野蠻なる未開種族の如くならんや。唯かれらの奉戴せしは、宗敎にあらず、道德にあらずして、一種別樣の天女なり、假にこれを名けて情趣といふ。意志にあらずして情念、理性にあらずして趣味、これあるが爲に天地有情、草木微笑。たゞ情念は狂亂すること多く、趣味は墮落し易し、極端に奔らずしてこれが圓滿なる發達を計るを、貴族敎育の根本とす。容儀端正に進退溫雅、交際に巧に、唱和に長ずる、これ紳士の標本。男子より手紙を受けたる婦人は、情交を結ぶに意なしとても、なほこれが答書を送らざるべからず、これに躊躇するものは、その父母(もし既婚のものならば、時にその夫もまた)促がし勸めて筆を執らしむ。敲くに聲なきは木片の類、婉柔にして物に從ふを女子の美德とすればなり。嫉妬は女の愼むべき第一といふは、後世の事、龍田山夜半にや越ゆると、餘所に通ふ夫の身を思ふは、やさしけれど、情の濃やかならぬを恨むるは、人の至情、烈しからぬ嫉妬はいよ／＼佳なり。多妻の世とはいへど、おのづからまことの妻と見るべきは一人なるは、道

義の上より來れるにあらずして、眞の愛は別つ能はざる所以を示す。喜怒哀樂は抑壓すべきものにあらずして、むしろ育成せしむべし。本能の滿足といふもの、旣に平安朝の昔に實行せしところ、しかも情慾の暴殄を意味するにあらずして、天體の軌道を外れざるが如く、おのづから節序を得、止めずして止まり、驅らざるに動く、動止の中庸を失せざる、これ世間の道なり。「つき〲し」といふは卽ちこれ。愛を主として義を知らず、美を重んじて善を說かず、近年一時の流行語となれる「美的生活」といふもの、これを實際に行へるものありとせば、まづこれを平安貴族の平生にありとせん。

自然は常に平安貴族の模本なり、かれらは自然のうちに生活して、みづからその一部をなす。風は梢に鳴り、情は人に動く、愛憎は人間の自然なり。山より下る水は堰けども止むべからざるが如く、人情もまた區々たる桎梏を以て縛すべからず。たゞ見よ、天地は悠揚として迫らず、雨の誘ふや、拒まずして花は咲き、風の攻むるや、怒らずして花は散る。激湍岩を嚙んで飛沫雪と飛べども、直ちに消え去つて徐ろに碧潭のうちに入る。春や、月や、もとの姿にして、人心舊の如くな

らざるを恨めども、四季の節を違へざるは、即ち人生の軌範にあらずや。かくして自然に屈從せる社會は、行動またおのづから自然に似たりといへども、和らかにつゝまやかなること庭園の如くにして、雄大の趣を闕きたる山水の間に棲みては、自然が平靜のうちにまた力の存するを覺らず、天火刧風、山烈け海翻へるの壯觀を見ずして終れり。

或は余が情趣の說を駁するものあらん。宇津保の仲澄が妹の貴宮を戀ひ、源氏の光の君が繼母の藤壺の女御と通じたるが如きは、敗倫の極、この醜態を寫して靦然として憚らざるは、これも中和なる情趣を得たるものか、彈指すべく惜唾すべしと。去かれども古今俗を異にすることを思ひて、よく當時の社會の內情を察せよ。一夫に數人の妻あり、その子たるもの生母と共に棲めども、父は共にあらず。生母のほかにまた母あれども、平常甚だ疎遠にして、屢〻生母と敵視し、時にはおのれその顏をも見知らざることあり、異腹の兄妹もまた來往親睦せざるもの多し。かくの如き關係にして、なほこれを子母兄妹と稱すべくんば、子母兄妹は即ち他人の謂なり。人倫自然の血緣より出でたる實にあらずして、煩

瑣なる社會が設けたる名なり。知らず変はらざるもの相知りて愛念萌す、これを非道とするか、愛は天の道なり。咎めて曰く、汝が慕ふは母なり、妹なりと、何事ぞ母といひ、妹といふも、世人が斯くわれに告ぐるのみ、わが心に感ずるにあらず、自ら覺らざるものを以て、われを罪す、これ虛僞なり。虛僞の名を以て自然の情を抑へんとすとも、自由を想ひ彈力に富めるもの、誰かこの僞君主に反抗して立たざるものぞ。平安朝の小說がこれらの情火炎々たるものに對する同情の深きも偶然にあらず。社會の不自然なる束縛を憤れるあまりには、なほ進んで仲澄が同母妹を戀ふるの極端をさへ描けり。さばれ人生も自然と共に節序なかるべからず、平和を喜び、中庸を重んじたる世は、社會の壓制もまたせん方なきこととなりとして、極端の情、激烈の愛をして、一旦世に向けたる刃を以て、更に己を斫らざるを得ざらしめたり。

繫がざる駒は狂ひ易く、約束なき人心は屢々放恣に陷る。情趣の中和を得るを以て理想とすといへども、經典の則るべきものなく、別に存するところの宗敎道德も制裁の力なしとせば、世風の靡くところ、岌々乎として危いかな。武を忘れ

て文に傾き、柔弱にして輕浮、義を忘れて情に過ぎ、放逸にして淫靡、實務に遠ざかりて遊樂を事とし、富人權家に阿附して貧弱を凌ぐ。因果相重なり、滔々として社會は濫る。自然を喜んでこれを摸せざることなかりしもの、世下りては、衣服の形容却つて極端の不自然に陷りしが如く、和歌の製作たゞ典型を逐うて全く寫生を忘れしが如く、結果は豫期と相反し、山上淸澄の泉も百里の末には黃濁の川と化す、これ平安朝風俗の實際にあらずや。

しかれども翻へりて情趣を重んじたる風俗が、文學の上にいかなる結果を生ぜしかを見よ。江戸時代は趨勢全く當時と相反して、道義を偏重し、意志を以て情念を滅却し去らざるべからずとし、文學もまた勸善懲惡を究竟の目的となす。描くところの人物どこまでも善人か、さらずば惡人、重忠はいつも情深く、岩永は常に意地わる、靑隈は公家惡、モサ詞は强いしるしと相場のきまりて、はては仁義の文字を體に刻みしやうなる八犬士の類を理想的人物とす。人心微妙、境に臨み機に應じて情懷出沒、美行も罪惡もこゝに生ずとするは、江戸作者の敢てするところにあらず。從うて小說戲曲ともに人情の琴線に觸れず、たゞ事

件を錯綜せしめ變化せしめて、わづかに讀者の好奇心を繫げるのみ。平安朝は決してかくの如く文學を以て倫理の奴隷たらしめず、情趣を重んずる結果、人物の性情躍如として紙上にあり。善人も情に驅られては過を犯し、惡人も物に感じては性を矯む。事によつて心は動き、むしろ變化なき生活を寫しても、心裡の徑行寫し得て見るべきものあり。九百年の昔よく性格を描き、人情を發きて、今日なほその人に接するが如くならしむるもの、蓋し情趣を重んじたる賜にあらずや。敢て當時の紊れたる風俗を讚美するにあらず、それとこれとを混ずる勿れ。熟したる文學は壞れたる世風の結果にあらず、尙文の世、文學の美果を生じたるはその功なり、風俗の惡果を齎らせるはその弊なり、功と弊と互に因たり果たるにあらず、弊に恐れて功を棄つるは、識者の取らざるところなり。

第七章　時期の區劃

國史に平安朝と稱する時代は、通常、皇位繼承の年歷によることの便なるを以

て、桓武天皇の初年より安德天皇の末年まで、凡そ四百四年間を指す。文學史の研究にもこの時期を以て儼然他と甄別することの、果して正確なるかは、いまだ斷言しがたしといへども、いひ馴れたるものは耳に入り易きのみならず、文學もまた社會一般の大勢に伴ひて消長するものなれば、普通にいふところに從ひて、國文學の全史より、この一時代を取り來るも、決して不當の所爲にはあらざるべし。そもそも桓武の初年は唐の德宗の時に當り、詩聖李杜歿して後二十年になるならず、西洋にてはシャーレマン大帝が盛に天下を經營せる時なり。安德の末年は南宋の孝宗の時、金人境を侵し世は亂れたれども、朱陸の徒輩出して、盛に學說を唱道し論破し、西洋は基督敎の勢力無上の力ありて、羅馬法王神權を握り、第二十字軍既に終りて、第三將に始まらんとす。數度の十字軍を經て封建制度はこれが爲に衰頽せしに、わが國にては武家政治のこゝに始まれる時なりき。

星霜四百餘年、この間幾度か形勢の推移することなくして止まんや。悠々たる數世紀を以て、單に平安朝の一語の下に攝するは、余輩の爲すに憚るところ。私

見を以てすれば、大勢は凡そ百年に一變し、そのうち五十年毎に小變あり、平安全期は即ち次の四大期に別つべきか。

（一）弘仁前後――一一六年間　（桓武初年延曆元年（一四四二）、宇多末年寛平九年（一五五七））

（二）延喜天曆――八九年間　（醍醐初年昌泰元年（一五五八）、花山末年寛和二年（一六四六））

（三）道長時代――八六年間　（一條初年永延元年（一六四七）、後三條末年延久四年（一七三二））

（四）平安末期――一一三年間　（白河初年延久五年（一七三三）、安德末年壽永四年（一八四五））

これまた皇位繼承の年歷による便宜法を取りたるのみ、普通の歷史に雷同せず、文學史として獨立せる方法を取らば、むしろ次の區劃を以て正當なりとすべし。されど二者もと根本の差別あるにあらず、後者は專ら作品について定めたるもの、前者は廣く時勢の大體について言へるものにて、年歷の前後長短い

づれを取るとも著しき相違なし。

延暦十三年(一四五四)――平安奠都
(一)詩文流行――一一二年間
延喜五年(一五六五)――古今集成
(二)撰集勃興――九七年間
長保三年(一六六一)――拾遺集成
(三)散文全盛――八六年間
應德三年(一七四六)――後拾遺集成
(四)和歌革新――一〇三年間
文治四年(一八四八)――千載集成

(一)弘仁前後は唐朝摸倣の時代なり、詩文流行の時代なり、佛教一新の時代なり。その前半期は弘仁を中心とし、空海傳道の傍らまた漢文學に偉勳あり。皇族權家詩文の修得に刻苦して、勅撰集、家集の編述少からず。萬葉の盛運これが爲に大打擊を被りて、和歌は微々として振はず。後半期は貞觀を中心とし、藤氏の北家攝關となり、皇室の外戚となりて、これより政權この家を離れず。詩文の名家多しといへども、辭句の修飾にのみ腐心して、氣骨を失ひ、多年屈辱の苦を受け

たる和歌漸く頭を擡げ來りて、時勢一轉の機やゝ熟し來る。

(二)延喜天暦は反省自覺の時代なり、國民文學興隆の時代なり。外國文學は漸く排せられて、和歌の勅撰集はこゝに成る。前半は延喜を中心とし、古今集の撰ありて、永く歌道に範を垂る。貫之は國文界に覇をなすもの、名聲前哲人麿に拮抗し、散文にまた一期を劃せり。後半は天暦を中心とし、和歌相續いて盛なれども、古今の光彩に眩惑して、更に一歩を進むべき識見なく、典型を株守する弊こゝに成る。盛衰は纏を糾ふが如く、和歌頓挫の隙を覗うて、詩文に名あるものまた出づ。散文は手法次第に巧緻になりて、以て次期の素をなすに至れり。

(三)道長時代は即ち藤原氏繁昌の極點にして、女流文學者輩出の時代なり、散文全盛の時代なり。和歌は常に流行して優麗の作多しといへども、なほ古今の典範を超ゆること能はず。前半は即ち御堂關白道長が威權赫々天日と輝きし時、廷臣宮媛その下に屈し、文人技術家かれを繞つて保護を仰ぐ。散文また最も發達して、彩華錦繡を織り、中にも枕草紙、源氏物語を以て、古今を通じて比類なき國文學の雙璧とす。下半は道長が子孫の時代にして、藤原氏の權勢がこゝに傾

斜を始めたると共に、名家もまた凋落し、文壇漸く秋風落莫の感あり。

(四)平安末期は即ち院宣政治の起りし時、和歌革新の時代なり、歌論興隆の時代なり。小説は思想の源既に枯れて、徒らに前期を摸擬するのみなるに、過去の盛運を追懷する情は、やがて國史雜錄の發達を促がすに至れり。前半は白河、鳥羽二法皇が院政の時代、社會はます〳〵驕奢に流る。和歌の唱和は前よりもなほ盛なりしが、政界の大勢漸く一變の兆ありて、風雲の動くと共に、斯道にも革新の聲一方に起り、保守派と改革黨と鎬を削りて爭ふ。從うて歌論の研究盛に起り、作歌は清新勁拔の體を詠ずるもの多し。惜しいかな、その論は考竅膚淺にして科學的ならず、その作は奇を衒ひ變を喜び、輕佻に過ぎて、毫も眞率の態度なく、黨同伐異の弊を極む。後半は源平爭鬪の時代、二條、六條は蓋し歌界の源平二氏なり。擾亂なほ甚しけれども、淸盛が權威を恣にして、こゝに武家政治の端を開きしが如く、二條の俊成識見卓拔、諸流を和解折衷して、溫雅の體を定む。風調漸く定まり、鎌倉時代の門閥樹立の形勢はこゝに端緖を開けり。

これより本論に入り、平安朝における顯著なる作家、作品について一々評論せ

んとす。敍述の順序は、前述の方法に從ひ、四期に別ちて、おの〳〵一篇を設け、每篇更に題によりて章を立つ。四期またそれ〳〵に二小期の區劃のあることは、おのづから本文の中に覺らしめ、繁雜を厭へば、これが爲に特に題を設けて篇を更ふることをせず。

第一期　弘仁前後

第一章　遣使留學とわが學問

寒林枯木既に千紫萬紅の春を藏む、たゞ春風の促がさざるを以て、いまだ爛漫の花を開かざるのみ。日本國民は自然を愛する民なり、森羅萬象の美趣を解する民なり、蝦房蟹舍もその眼には繪畫を展べ、鶯啼蛙鳴もその耳には詩歌を奏づ。太古未開の世、文學美術の見るに足るものなきは、外これを暖め、これを養ひ、これを長ぜしむるものなければなり、胸中いかんぞ無韻の歌なからん。誰かいふ、わが國民は美的思想に乏しく、その文學も外來の資を仰がざるはなしと。八雲の神詠をはじめ神代の遺韻今に存して、以て千木鰹木を組み、和栲荒栲を纒ひし君臣が、事に觸れて表はしし感興の一斑を知るべし。されど國民がこの詩情に培ひて、山頂雲湧き飛泉巖に翻へるの歌を成さしめしは、外國文藝の傳播を待ちてのことなり。誰かいふ、わが敷島の道のみは、毫も韓唐の感化を受けず

して、自然に發達せしものなりと。わが文藝の開けて長足の進歩を爲ししは、偏に海外の文物を輸入せし結果なり。邦人の思想もこれが爲に動き、これが爲に伸びたるにあらずや。わが文學はもとより國民固有の性情に本づきたるものにして、その根柢を外國より移ししものにあらずといへども、その花と咲き、雪と散りて紅白繚亂の盛況を呈せしは、著しく外國文化の甘泉に沐せしによりてなり。

嚴格なる意義における日本文化史は、應神天皇の朝、漢學の傳來せしに始まれり、否、欽明天皇の朝、佛敎の移植せられしに始まれり。王仁招聘の前後、三韓の文物を輸入し、雄略天皇殊に産業の發達に力を盡したまへりといへども、文運の進歩なほ遲々たるのみ。佛像經論の渡來と共に、諸般の技術の傳習せらるゝあり。聖德太子の奬勵に成りし俄然たる文藝の開展は、因循保守の廷臣をして、徒らに赤手洪水を拒ぐの愚を學ばしむ。冠位の制定、憲法の頒布、國史の撰修、相續いて成り、燦たる大化の改新も踵を接して來りぬ。わが國の光彩ある文化の歷史は、實にこの時を第一期として敍せらるべし。推古、天智時代の法度儀禮の撰

定、美術工藝の奬勵はかくして起り、奈良七十餘年の爛熟せる時代もこゝに現はれぬ。而してこれらの文化發達の歷史は、即ち佛教興隆の歷史なり、漢學修得の歷史なり。佛教の文藝に影響せしことはいふにしも及ばず、百般の文物いづれか漢土を學びて成りしものにあらざる。文藝において、大友皇子以下の詩賦を詠ぜしは、固より海外の藝術そのものを移ししなるが、純然たる國民文學と稱せらるゝ萬葉集の和歌といへども、唐代文學の直接なる感化を受けたるもの少からず。さらずとも、或はその命題に、或はその構想に、彼より暗示を得たるもの少しとせんや。さればわが文學史を究めんとするものは、太古の簡素純樸の時代を過ぎては、直ちに外國交通とその影響とを考へざるべからず。わがこの歷史は平安朝に終始す、敢て推古、天智の朝および奈良の盛世について陳ぶることを要せずといへども、平安初期はなほ前代に繼ぎ、しかも前代よりも擢んでて、支那文學を輸入し、詩文に刻苦せる時代なれば、この篇を始むるに當りては、まづ溯りて遣唐の使節および留學生のことより說き起して、以てわが文學の盛衰とその傾向の由つて來りしところを見ざるべからず。

推古天皇の十五年、小野妹子を隋に遣はす、翌年歸朝し、隋使裴世清伴ひて來る。漢土邊地との交通はその以前よりこれありきといへども、支那朝廷と直接に使節の往返ありしは、實にこの時をはじめとし、聖德太子がかの國の文物を學ぶに熱心なるが爲に、この擧ありしなり。その二十二年、また犬上御田鍬、矢田部造を遣はす。されど隋末の世、戰亂相繼ぎて報聘の暇あらず、幾ばくもなくして隋亡び、唐代りて東亞大陸を一統す。舒明天皇の二年、犬上御田鍬、藥師惠日を唐に遣はす、これを遣唐使のはじめとし、その四年、唐使高表仁御田鍬等を送り來る。これより奈良朝の終まで、遣使凡そ九回。かくて平安朝に入りて、延曆二十年、藤原葛野麿、石川道益使節となりて海に浮ぶ、風波に蕩搖せられて途より歸り、二十三年、更に入唐す。その後三年を經、大同元年、高階遠成派遣せられ、また二十九年を過ぎて承和元年、藤原常嗣海に航せしが、難に遇ひて歸り、同五年更にかの國に向ふ。それより五十七年、寛平六年に至りて菅原道眞を大使とし、紀長谷雄を副使として、入唐せしめんとす。道眞唐朝亂離、遣使もその益なき由を奏す七年これを可とす。かくして兩國朝廷相互の遣使は絕えたり。

既に支那と交通して、外國の文物を移植す、彼我の交通甚だ繁劇ならざるべからずして、その實際はいまだ必ずしも然らず。推古天皇の朝に入隋のこと始まりてより、文武天皇の朝まで百餘年の間は、遣使凡そ八回、奈良朝七十餘年の間は四回、桓武天皇即位より寛平の廢使まで百十四年の間は、僅かに三回のみ。漢文學最盛の嵯峨天皇の朝の如きは、却つて遣使のことあらず。往返の度數の多からざること、今日、世界交通の頻繁なるより思へば、頗る怪むべきが如しといへども、當時、交通機關の具はらず、航海の不便なるは、現時、洋行の容易なるに比すべくもあらず。不完全なる小舟を漫々たる海上に泛べて、その運を一に天候の險易に任す。航海既に難きに、韓唐内地の陸路の更に安からざるあり。烟波一抹、故國の影を失ひて、早くも暴風激浪の難に遇ひ、或は覆沒して底の藻屑となるものあり、或は遠洋の孤島に漂着して、蠻民に殺害せらるゝものあり。往いて唐朝儀容の盛を見んとするものは、死を覺悟して妻子に別れざるべからず。かかればおのづから使節派遣も比年なること能はずといへども、この不便の世にありては、また怠れりとせず。そのはじめ文物未だ備はらず、唐風移植に汲々

たりし頃は、遣使も最も數多かりしが、制度漸く立ち、學問文藝やゝ緒に就くに至りては、その勞とその功と相當らず、從うて毎朝遣唐使の沙汰に及ばざりきといへども、これを以て唐風崇拜の念の薄らぎしものとはすべからず。公の交通のほかに、鎭西邊陲の民の渡航するものあり、これらの舟が輸入せし事物も蓋し少からざりしなるべし。されば平安初朝はなほ支那に沈醉せる時代にして、萬端のこと唐に則り、學術文學は殊にかの朝に倣ひしなり。

遣唐使の渡航に當りては、必ず留學生のこれに伴ひ行くあり。當時、君臣共に佛敎の興隆に勉めたるを以て、留學の諸生十中の八九は緇衣の徒なり。然り緇衣の徒なりといへども、かれらがかの國において學ぶところのもの、啻に經論のみにあらず、また造像建築の術を學べり、天文算數の道を學べり、もとより文學も修めたりしなり。入唐の學侶および來朝の外僧は、一々擧げずともあるべし。奈良朝における、僧徒以外の留學生の著名なるは、安倍仲麿、吉備眞備なり。眞備と共に歸化せるもの唐人袁晉卿あり、文選、爾雅に通じたり。平安奠都の後、はじめて入唐せるもの最澄、空海あり、最澄は天台宗を傳へ、空海は眞言宗を布きて、

從來の六宗これが爲に光を失ふ。空海の器は八面玲瓏、佛教はもとより、詩文書畫その他の末技も學んで到らざるはなし。最澄また博學にして、陰陽醫方工藝の道にも熟す。その門に學ぶもの、僧侶のほかに、藤原冬嗣、大伴國道、和氣弘世、同眞綱等あり。橘逸勢もまた當時の奇才、この二人の高僧と共に留學し、義眞は譯語の沙彌としてその師最澄に從ふ。その後、學僧の遣使に從ひ、或は商船に便乘して入唐せるもの、天台に圓行、圓仁、圓珍等あり、眞言に常曉、慧運、眞如等あり。遣使廢絶の後幾ばくもなく、唐滅びて五代の亂世となり、宋の一統となるかくてもなほ彼我商舶の鎭西沿岸に出入するものあり、これに托して入宋する心ものもありきといへども、これを數ふれば、僅かに五指を屈するばかりなり。

唐朝の文化を學び來りて、これを貴族廷臣の間に布かんとす、こゝにおいてか學校の要ありこれよりさきわが國いまだ形質共に備はれる學術なかりき、これあるは海外の文藝を移植せしに始まる。大寶の制、既に京師に大學寮あり、諸國に國學ありて、以て平安朝に及ぶ。平安朝に及びて唐土詩文の學は益〻盛に、搢紳名流の私學を設けて、一族の子弟を薰育し、門流の榮達を計るもの少からず。

弘文院は和氣廣世が父淸麿の志を繼いで建てしもの、勸學院は、天長三年、藤原冬嗣が施藥院と共に設けしもの、綜藝種智院は、同五年、空海これを開き、學館院は、嘉祥三年、嵯峨太皇太后その弟橘氏公とこれを擬む。淳和院はもと淳和上皇の仙洞なりしを、蓋し元慶五年、恒貞親王の奏上によりて王氏の學院となり、奬學院も、同年、在原行平の建つるところなり。弘仁の前後は私學の創立かくの如く盛なりしが、寬平以來、漢學漸く衰へ、また藤原氏ひとり專橫に、他家は勢を失ひて學料給せず。從うてわづかに形骸の存在せるもあり、大學寮に併せてその別曹とせられたるもあり、學燈影薄らぎて、また前日の光彩なきに至りぬ。

當時、學校に於て生徒に敎授せし科目は如何。そのはじめ學校を設けたるは、一般人民を陶冶せんが爲にあらずして官吏の職に堪ふるものを敎育せんが爲なりき。大寶の制、學者を任用するに、明經、明法、秀才、進士、書、算の六道によれり。その後、平安朝に至りては、いつしか約まりて、明經、紀傳、明法、算の四道となり、秀才進士は紀傳に併せらる。紀傳は史記、漢書、後漢書の三史を專門の學として修む、その才を試むるや、講說に長ぜず、經義に明かならずとも、對策して文藻に嫺ふ

ものはこれを擧ぐ、故にまたつとめて文選を學ぶ。大同三年、紀傳博士を置かれしが、承和元年に至りて、これを停めて文章博士を置く。紀傳の名絶えて、文章の業に移りしもの、名は實の賓、世風と浮沈して、歷史の學はおのづから詩文の道に轉ぜしを知るに足るべし。明經以下の三道また文章道に壓せられ、微々として振はず。諸博士のうち敍位最も高きを文章博士とす。弘仁の末、文章博士菅原清公大學寮のうちに文章院を置く。承和の初、これを東西の二曹に別ち、大江音人とおの〳〵その一を主る。東曹は音人にして、西曹は清公なり。菅江の二家これより文學の家となり、諸氏の子弟の榮達を希ふもの、いづれもこれに就いて講習す、生徒の盛なること、東西の二曹に如くはなし。また以て文章道のひとり秀でて旺盛なりしことを思ふべし。

學校において定めたる學科および士を試み選ぶ法は、專ら唐の制に則り、唐はまた隋の制によれり。そも〳〵隋唐は詩賦の最も盛なる時代なり。唐の太宗四海に君臨して、大に儒學を興さんとす、滔々たる世潮は、されど逆らひ難し、高宗、武后を經、中宗に至りては、政教衰へ、經術廢れ、博士助教の輩その名は存すれど

も、その職を盡さず、修文館の學士を採るにも、詩文に堪能なるものを重んぜしかば、文人詞客は益〻世に重んぜらる。玄宗はじめは鋭意治政に勵みしかど、幾ばくもなく倦怠して、臺閣のうち宴飮しきりなり。世を擧げて逸樂を喜び、杯を含んで詩を賦す、一代を覆ひて、唐朝詩賦の流行は、正に宋朝理學の隆盛と對比すべし。專らその風を受けたるわが君臣が、主として詩文の學を嗜み、四道のうちひとり文章道の群を抜きたるも、當然のことなり。見よ、この時より平安朝を通じて、詩賦は和歌管絃と共に月卿雲客が貴紳として修むべき必須の技たるに、經術律令の博士輩は貧老頑固をあらはす好題目として、屢〻物語草紙などの嘲笑の種となれり。

學問に對する一般の風潮凡そかくの如くなれば、當時また如何なる書籍が愛好耽讀せられしかは推して知るべし。大寶令によれば、經學に要するところの書、禮記、左傳を大經とし、詩、周禮、儀禮を中經とし、周易、尙書を小經として、これを修むるを敎授の正業とし、外に論語、孝經はすべての學徒に通じて修得せしむ、孟子は尙ばず。延暦十七年、公羊、穀梁の二傳を加へて小經に準ず。大中小の九經

の目かくて全く唐に倣へるなり。群書治要、顏氏家訓の如き、また歷〻君臣の間に學習せらる。されど平安朝の士流が好むところは、經術にあらずして、詩文にあり。空海が歸朝せるや、世說、劉希夷集、王昌齡集、同詩格、貞元英傑六言詩等を進獻せし由は、その性靈集に見えたり。かくして紀傳文章の道の貴ばるゝや、從うて三史、文選の最も行はれたるは、前に一言せるが如し。孝謙天皇の頃までは、太宰府にも五經のみを蓄へて、いまだ三史は有せざりしに、この朝に至りて、史書は一時の流行となり、これにも優りて文選は勢を得たり。唐土の諺にも文選爛れて秀才半ばすと稱す、弘仁中、藤原常嗣、同諸成大學にありて文選を闇誦し、藤原衞と共に學中の三傑と稱せらる。會〻わが國に渡りて、邦人の好尙に適し、忽ち威を逞しくせるを白氏文集とす。太宰少貳藤原岳守唐船の貨物を檢して、元稹、白居易の集を得、これを朝廷に奉る、よりて承和六年、從五位上を授けらる。文德實錄嵯峨上皇頗る白氏文集を悅び、世人のいまだ知らざるに乘じ、試にその閉閣唯聞朝暮鼓、登樓空望往來船の二句の空を遙に改め、聖作として小野篁に示したまふ。篁吟誦一番して曰く、惜むらくは遙の空にあらざることをと、上皇讃歎これ

を久しうす。枕草紙に云く、文は文集、文選、博士の申文と、平安中期を超えて、その流行のなほ渝らざるを見るべし。遊仙窟また大に世にもてはやさる。この小篇は唐人張文成の作にして、猥雜厭ふべしといへども、文辭の見るべきものあり。文成名は鷟、武后の代の人、官は諫議大夫を經て祕書少監に至れり。遊仙窟のはじめてわが國に傳はりしは、いづれの年なるかを知らずといへども、傳へいふ、嵯峨天皇の時、學士伊時これを訓讀せんと欲すれども、通ずること能はず、洛西木島社に祈請して、夢に神の敎を受けたりと。（本書文保三年文章生英房の序文）これらを當時最も勢ありし書とすといへども、そはたゞ流行を極めしものをいふのみ。傳來の書は唐櫃に籠め厨子に收めて百また千、藤原佐世が日本國現在書目錄を見ば思半ばに過ぐべし。歐陽文忠公が日本刀の歌に曰く、徐福行時書未焚、逸書百篇今尙存と、茫々たる四百餘洲、代を改むる毎に、干戈爭ひ、兵燹荒びて、古典籍の泯滅するもの多く、後には却つてこれをわが國に求むること、平安朝の頃より旣にしかりしなり。

第二章　歴史制度等に關する著述および詩集

桓武天皇英邁の資を以て、帝都を平安の地に奠め、邊陲不逞の徒を征し、全國統一の實をあげ、紀綱を振興せんとしたまふ。爾來數代また聖帝の遺意を紹ぎて、心を國家の經營に潛む、企畫備はらんには規模大ならざるを得ず、規模大ならんには制度完からざるを得ず。かくて千年の大都定まりて、國權新たに振へば、平安初期は文章の學盛にして、學者はもとより公卿大夫も翕然として詩文の修練に耶めたりといへども、なほ第二期以後の如く、政事に惰り、遊樂を事とし、詩歌管絃にのみ放浪するが如くならず、歴史制度の學もまた考究せられたり。されば今詩文の本論に入るに先だちて、當時、歴史制度等に關していかなる著述ありしかを畧述し、以て實務の學のいまだ荒廢せざりしを見んとす。

國史には――

續日本紀　延暦十六年、右大臣藤原繼縄、民部大輔菅野眞道等勅を奉じて撰す、文武天皇元年より延暦十年までの記録たり。

日本後紀　承和七年、左大臣藤原緒嗣等（或は冬嗣とも或は繼縄とも）撰進す、延暦十一年より天長十年までの記録なり。

續日本後紀　貞觀十一年、太政大臣藤原良房、參議春澄善縄等撰進す、仁明天皇一代の記録なり。

文德實録　元慶二年、右大臣藤原基經撰進す、實は菅原是善、都良香、島田良臣等の編纂せるなり、文德天皇一代の記録なり。

なほ第二期に至りて三代實録あり、延喜元年、左大臣藤原時平、右大臣菅原道眞、大外記大藏善行、大外記三統理平等撰進す、清和、陽成、光孝三帝の間の記録なり。以上五書を奈良朝の日本書紀に併せて六國史と稱す。別に類聚國史あり、寛平四年、菅原道眞に勅して六國史の記事を類別して編纂せしめたまひしもの、もと二百卷あり、今、殘闕して存す。その後、新國史（一名續三代實録）の撰あり、大江朝綱（或はいふ藤原實頼）の撰にして、記するところ仁和より延喜に至るといへども、

その大半は散逸したり。これらの後、國史の公撰といふべきものなく、たゞ帝王をはじめ月卿雲客の日記の、その闕を補ふあり。

制度には――

弘仁格式　弘仁十一年、大納言藤原冬嗣等撰進す。

內裏式　弘仁十二年、右大臣藤原冬嗣撰進す。

令義解　天長十年、清原夏野、小野篁、善道眞貞、菅原清公、藤原常嗣事等撰進す。

貞觀格式　貞觀十三年、大納言藤原氏宗等撰進す。

なほ御室目錄には延曆、貞觀、および延喜の交替式を掲ぐ。侍中群要は橘廣相の撰にかゝり、その著朝官當唐名略鈔の原稿ならんといふ。御室目錄にまた廣相の藏人式の名を載せたり。第二期には延喜年間、左大臣藤原時平等勅を奉じて延喜格式を撰す、時平中途に薨ぜしかば、仲平代りてその業に當れり。』
その他の書には、兩大神宮儀式帳は、延曆二十三年、大中臣眞繼等の撰するところ、古語拾遺は、大同二年、齋部廣成が獻りて一家の不遇を愁訴せしところ、新撰姓氏錄は、弘仁三年、萬多親王等が勅によりて撰進せしところなり。大同類聚方

は、大同三年、安倍眞直が出雲廣貞と共に勅を奉じて醫藥の方を輯めたるもの、もと百卷ありしが、今、散佚して五卷を存す。祕府略は、天長八年、滋野貞主等が勅によりて古今の文書を蒐集類別せるものゝすべて一千卷ありと稱せられしが、今その二卷を見るのみ。御室目錄にまた弘帝範および群書要覽の名あり、ともに大江音人の撰といふ、今傳はらず。

わが國の歷史を研究することは、漢學と相並びて行はる。朝廷において、弘仁三年六月、日本書紀の講義あり、ついで承和十年、元慶二年、同三年、同六年にまたその擧ありし由、類聚國史に見ゆ。また代々の私記の目は御室目錄等に揭ぐ。(御室目錄には養老五年の私記をはじめとし、弘仁以來、やゝ年數に異同あり)書紀を講述するは、すなはち紀傳、明經の博士にして、その要とするところ專ら歷史の學にありしを、その後、學者は益々漢學を尙び、三史五經を偏重して、わが國の史書に留意せず、いつしか書紀も神道の書の如く、その研究は神官諸の家學の如くなりて、學者のこれを顧みるもの甚だ稀なるに至れり。

この時代における歷史制度およびその他の實務に關する著書は、上述の如く

その數多く、惰力は曳いて、次期に至りても、なほその撰修あるを見たり。されど隋唐の文化を崇奉する時、紀傳の名に文章の實を包む時、一世の主力が詩文に集注したるや知るべし。そも〳〵弘仁の盛代は、いかに支那文物の燦爛たる時ぞ。平安朝詩文集の勅撰は實に嵯峨天皇の御存生のうちにのみありしなり。さきに奈良朝の末に懷風藻の撰あり、淡海三船の編纂にかゝると稱すれども、定かならず、また官位の高下に係はらずして、人名を掲げたるなどより見れば、勅撰なるにはあらじ。嵯峨天皇の朝に至りて、凌雲、文華秀麗あり、淳和天皇の朝に經國集あり、いづれも、姓氏錄、弘仁格式、祕府略、令義解等と前後して成りたるものなり。

凌雲集委しくは凌雲新集といふ、小野岑守が勅を奉じて菅原淸公、勇山文繼と議し、また病中なる賀陽豐年にも計りて撰進せしもの、蓋し弘仁五年または六年に成る。懷風藻の成りし天平勝寶三年より弘仁五年まで六十四年を經たり。延暦元年より弘仁五年まで三十三年間の詩を集む。すべて一卷、作者二十三人、詩九十篇、これを懷風藻の一卷、六十四人、百二十篇に比するにやゝ少し。彼は貴

賤を擇ばず、年次によりて順序を立て、此は官位によりて次第を定む。作者のうち、御製最も多く、二十二首に及ぶ。ついで岑守、豐年各十三首あり、後に古今集の撰あるや、撰者貫之、躬恒の歌を載すること多きと、同一轍に出でしなるべし。この集を一見しても、直ちに唱和のいかに唐を凌いで盛なりしかを思ふべく、また探韻の遊も行はれ、君臣の和樂せし狀況、さながら目睫の間に浮ぶ。遊苑の詩多く、寺院に遊べるものまた少からず、田園の吟もこれあり。

文華秀麗集は藤原冬嗣を總裁と仰ぎて、仲雄王、菅原清公、勇山文繼、滋野貞主、桑原腹赤が撰修せしもの、弘仁九年に成る。すべて三卷、作者二十八人、詩百四十八篇あり。前の如く御製最も多くして三十三篇を載せ、ついで巨勢識人、仲雄王、桑原腹赤等の作を多しとす。この集にては從來の或は年次により、或は官位によりて次第するに甘んぜず、進んで類別の法に從ふ。この法を用ひたるもの、既に和歌に萬葉集ありといへども、編纂完からず、體裁頗る亂雜なりき、かくてこの集に至りて、更に類題とし、遊覽、宴集、餞別、贈答、詠史、述懷、艶情、樂府、梵門、哀傷、雜咏の諸項に別つ。これかの文選の賦および詩の細目によりて取捨したるものにし

て、この取捨したるところ、すなはち宛然たる當時の社會の反映にあらずや。而して後の古今集以下の勅撰和歌集および朗詠集等の分類法もみなこれに出でたるなり。人名をしるすに、巨識人、野岑守などと約して唐人に倣ふこと、既にこの集にあり、後世、物徂來、服南郭等の出づるを待たざりしなり。

經國集は良岑安世を總裁として、滋野貞主、南淵弘貞、菅原清公、安野文繼、安部吉人が撰進せしもの、天長四年に成る。蓋しまた嵯峨上皇の企畫に出でしなるべく、これを前二集に比するに、頗る完備したるものなり。もと二帙、二十卷ありしが、散佚して今六卷を存す。前二集は當代の人の作のみを集めたりしが。これは進んで古人の詠をも網羅して、慶雲四年より天長四年に至り、作者百七十八人、賦十七、詩九百十七、序五十一、對策三十八あり。今あるところによりて見るに、作者は九十七人、そのうち例によりて嵯峨上皇の御製最も多く、載するところ三十九首に及び、ついで滋野貞主の作を多しとす。この集は分類法等全然文選に倣ひ、しかもこれが規模を小にしたるものなり。

更に思ふに、この時代は活氣充實して、歴代の君臣政務に勵精し、紀綱の振張に

務めし時なり。從うて歷史制度に關する編著甚だ多く、次期に至りてもなほその後を追ふものありしが、國憲の弛み、廷臣の遊惰に流るゝと共に、漸次その數減少して、遂に殆ど跡を絕つに至れり。されど階級の制を尙び、形式を重んじたる世の習とて、舊例古實の沙汰喧ましければ、歷史制度の實學は衰へたれども、第二期以後、典故の道は却つてこれを說くもの少からず。かくて源高明の西宮記、藤原公任の北山鈔、大江匡房の江家次第等の撰述あり。詩文の學は第二期以後なほ相ついで行はれしが、また漸く活氣を失ひて、たゞ形骸の存するのみ、靈妙なる國民の文學的精神は移りて和歌に現はるゝに至りぬ。歷史制度の學はいはゆる有職の道に變じ、詩文はその道を和歌に讓り、かくして第一期は第二期に轉じたるなり。

第三章　遊樂の風と漢文學の感化

これを學問のうへより見れば、四道のうちひとり流行を擅らにし、これを文學

のうへより見れば、またわが敷島の道を歷へて世にもてはやさる、詩文は實に弘仁前後において最も勢を得たり。文學は社會の反映なり、この詩文がまた平安初期の面目を露出せることは論ずるを須ひず。しからば當時の風俗にして屢〻吟咏唱和せられたるものは何ぞ、遊獵これなり、苑遊これなり。

聖武、孝謙二帝篤く佛敎を尊信したまひて、その治世には殺生禁斷の制屢〻頒布せられたりき。桓武天皇豪爽の資を以て天下に君臨す、敢てこれらの窘束を四民に加ふるものにあらず。奧羽征討の勇氣はその日常の生活にも現はれて、近郊の遊獵逐月にこれあらざるはなく、或は一月四五回の出遊に及べり。これ奠都以後、日なほ淺く、鴨桂の沿岸草莽深ければ、巡覽のかたはら早くこれを闢かんと欲したまひしにもよるべし。而してこれらの遊獵は概ね鷹狩にして、稱して野行幸といふ。京都附近の地名に、今なほ北野、紫野、朱雀野等の名あるは、蓋し當時の稱呼の存するなり。ついで嵯峨天皇また遊獵を好みたまひて、出御しきりなり、弘仁九年、新修鷹經を編して鷹所に下し、これを天下に頒布せしむ。天皇の遊獵に關する御製少からず、詠じて曰く、

三春出獵重城外、四望江山勢轉雄、逐兎馬蹄承落日、追禽鷹翮拂輕風、征船暮入連天水、明月孤懸欲曉空、不學夏王荒此事、爲思周卜遇非熊。（凌雲集）

その後、文德天皇は野外の出遊を好みたまはず、わづかに藤原良房、同良相の第に花を賞するなどの御遊ありしのみ。淸和天皇また出遊を喜びたまはず。天皇わけて佛敎に沈溺し、殊に僧眞雅を尊信す、眞雅奏して、山野の禁を解き、遊獵の娯を斷たんと請ふ、よりて貞觀三年、令して諸國の貢鷹を停めらる。かくて仁和二年十二月に至りて、光孝天皇芹川野に遊獵あり、文德、淸和ののち更めてこの擧は興りしなり。ついで宇多天皇も甚だこの遊を嗜みたまふ。その近郊に逍遙し、神の夢想を被りてのち、賀茂臨時祭を起されし由を傳ふるも、鷹狩の折のことなり。醍醐天皇も父皇の嗜好を繼ぎたまひしかど、世は漸く偸安柔弱に流れ、階前庭上櫻を弄び菊を折るなどを所詮として、鷹狩すら行はれずなり、延喜以後は白河天皇の時まで野行幸も中絕の姿なりきといふ。

平安の地、山河襟帶、花に、紅葉に、山は色を更め、月に、雪に、河は裝を凝して、好景千年觀を移さず。名流貴紳の近郊の地を擇んで、山莊を構へ、園囿を營みて、泉石の

態を盡すもの、また當時の流行なり。まづ桓武天皇には近江蒲生野の行宮あり、蓋し出獵の際休泊に便ならしめんが爲なるべし。嵯峨天皇には南に南池院あり、西に嵯峨山院あり。また冷然院あり、皇太弟稱して曰く、君王本自耽幽趣、泉石初看此地奇と、皇太弟はすなはち淳和天皇なり。天皇にもまた西院あり、雲林院あり。上の好むところ下これに靡くの理、皇族公卿また競うて山莊別業を營んで遊觀に供ふ。延暦の世、伊豫親王の大井莊あり、藤原繼縄の葛野別業あり。弘仁に至りては、藤原冬嗣の閑院、良峰安世の花山莊、淸原夏野の雙岡山莊など、一々數ふべからず。やゝ下りて源融皇族の尊を以て最も豪華を好み、六條河原に河原院を營みて、鹽竈の勝概に擬し、宇治の川浪岸を嚙むところに別墅を置きて、おのづから後の平等院の基礎を立て、また嵯峨に棲霞觀を設けて、嵐峡春秋の觀を恣まにす。當時の詩集を繙くもの、山莊に遊ぶの吟甚だ多く、また主歿して地空しく殘り、殘れども廢頽して舊時の樣にあらざるを歎ぜる詩少からざるを見るべし。有智子内親王が嵯峨の山莊も、また當時の文人が集まりて唱和せし名區なりき。

二條朱雀のあたり、湖心の小堂香花を手向くるものも多からず、水は濁り、藻は茂れりといへども、今なほ舊苑の紀念を留め、遊人をして往時の盛を追懷して悵然たらしむるは、神泉苑にあらずや。弘仁の前後、四時の宴遊最もしば〳〵なりしはこの神泉苑なり。奠都の後はやく、禁裏に近く泉石の觀を營みて、吟賞に充てられたるものと見えて、延暦二十一年はじめてこゝに行幸あり、嵯峨天皇に至りて出遊しきりなり。弘仁三年二月こゝに幸し、文人をして詩を賦せしむ、花の宴の節この時に始まれり。その他、季春、盃を泛べて文藻を競ふ曲水宴あり、盛夏釣殿に鉤を垂るゝ納涼の遊あり、晩秋、菊花を摘んで千歲の齡を契る重陽宴あり、鷹狩、鵜飼、相撲、賭射、調馬もまたこゝに行はれ、これを行ふや、いづれも詩を賦して相唱和す。賦詩管絃の遊これより大に興る。五節舞の盛なるに至りしも、この朝よりなり。後年、三善淸行意見封事を上つて曰く、伏案故實、弘仁、承和二代、尤好內寵、故遍令諸家擇進此妓、即以爲選納之便也。諸家僥倖天恩、不顧靡費、盡財破產、以貢進と。されば古事談の如きは、嵯峨天皇を評して政事に荒めるものとし、藏人所もこれか爲に出來たるなりと稱す。

箏に鷹を据ゑて、野に日は傾きぬ、琵琶の音冴えて、簀子露けく夜は明けぬ、花とて今月のうたげあり、月ゆゑ明日も遊ぶべし。制度は唐朝に倣ひて定め、機關徒らに大に、執務さほどに多からざれば、月卿雲客暇多くて、遊樂もまた年中行事の公務に數へらる。その遊樂もまた唐代の風俗を移ししもの多かりしは、彼の詩文に心醉せしおのづからなる結果なり。曲水といひ、端午といひ、七夕といひ、重陽といひ、探韻圍碁その他の彼此も、もとはいづれか漢土に出でざりける。深くかの國の詩賦に心をしめては、これに現はれたる事物を更にわが上に見んとするは、當然の理なり。元慶元年三月、大納言南淵年名耆老を集めて、はじめて尙齒會を小野の山莊に設く、すなはち白樂天の故事に倣へるものにして、この一例を以ても詩文の感化を知るべし。しからばこの感化力強き隋唐の詩文は、果していかなる傾向を帶びしものぞや。

三國の分裂せるもの、晋に一統せしが、更に南北の兩朝に分る。この頃、文辭は漸次爛漫綺麗を尙び、かの文選の撰ありし梁朝の如き、華美艶妖の體多く、さながら娼女の裝を凝して媚を賣るにも似て、內容の豐富ならんよりは、句を練り巧

を爭ふに力めて、輕靡最も甚しく、稱して宮體といはる。隋に至りて煬帝詞華を愛し、豪興を喜び、驕逸淫蕩、迷樓を造りて宮女數千を置く、女流の文藻あるものまた少からず。唐天下を一統して文華燦然、盛唐に李杜、王維あり、中唐に韓柳元白あり、晩唐には杜牧、李商隱、溫庭筠等のほか、後宮の才媛また詞藻に秀でたるもの多く、寵幸を競ひ榮華を爭ふさま、平安宮廷の小町、伊勢、淸紫泉赤等をこれに比するに、頗る似通ひたるところ多きを見る。宛然たる趨勢の類似、これ豈偶合ならんや。

漢の時、豪奢を極めしを武帝とす。宏壯なる長安の柏梁臺、華麗なる首山の建章宮、儒には董仲舒、公孫弘は春秋を以て進み、兒寬は經術を以て吏事を飾り、孔安國は六經に通達す、詩文には司馬相如錦心繡腸あり、朱買臣、東方朔もまた寵嬖の臣なり。李夫人が昔語、兎園の風流なる遊など、いかに平安人士が詩腸に浸みたりしぞ。唐朝にては、開元、天寶の盛大は弘仁の君臣が夢寐の間に往來せしところなるべし。われに唐樂を興ししは、かの左右の敎坊に倣ひしにあらずや。沈香亭に貴妃と椅を列ね、李白をして太平を謳歌せしめしもの、これわが朝の

悼せし天上宮殿なり。嵯峨天皇および群臣の詩に、春閨怨、王昭君等を題としたるもの少からず。支那には、漢以來、隣境に事多く、出征の將士鋒刃に斃り、瘴烟に犯されて、不祀の鬼となり、妻子の故國に飢寒に泣くが多し。春閨の落花に心を痛ましめ、月前の孤雁に腸を絞るも、二千里外の人を思へばなり。かくてぞ胡馬越鳥の歎もありて、蘇武、李陵は匈奴に漂らひ、王昭君は胡地に囚はる。この外征難を避けんが爲に、白氏が新豐折臂翁もありき。わが國、四邊海に圍まれ、內地は五風十雨、安寧相續き、殆ど外征の難なきに、なほ廷臣京師をのみ眷戀し、畿外に出づるを憚りて、婦人の如く泣血慟哭するが如き、要するに平安優柔懦弱の風は、一は支那文學の感化にあらざるなきを得んや。而してこの感化は、更に出でて、わが文學のうへに現はれしものなり。

平安朝の文學に沈鬱幽寂の風あるは、もとより佛敎の影響なり、その三春の老い易きを歎き、秋氣の肅殺を傷み、羇旅別離に涙を注ぐなど、また漢文學の影響するところも多しとす。しかりといへども日本文學はあくまで日本文學なり、これを彩りこれを飾れども、本來の面目は顯脫して隱れず。春花秋葉の優劣を

比べて、額田女王が金氣黄葉の秋を面白しとせしは、既に萬葉にことふりにたり。そののち平安朝に及びても、たゞ花の一重に咲くばかりなる春よりも、むしろ千種のいろ〳〵、なく蟲の聲々を喜べること、多くは然り。かの國には惡聲の杜鵑もわれには鶯よりも愛せられて、たゞ一聲の聞かまほしさに、山里にもさまよひ泊るにあらずや。才子佳人の歌には、涙の文字多しといへども、その樂天にして滿足し易き性はまた決して覆ふべからず。平安文學を究むるもの、必すその表裏の二面を讀破するを要す。

第四章　弘仁前後の詩人――空海と小野篁

奈良、平安兩朝の境に詩文を以て名を得たるもの、石上宅嗣淡海三船あり。宅嗣は舊宅を捐てて阿閦寺を營み、寺内に芸亭を設け、外典の書を備へて、好學の徒に閲讀せしめたるもの、三船は古來の帝王の謚號を定め、また眞僞は知らず、從來、懷風藻の編者として世に知られたるもの、いづれも才學一世に冠すと稱せ

らるれども、その作わづかに經國集に存するのみ。大伴家持また聲譽ありといへども、むしろかれは和歌を以て立つべきものなり。而して宅嗣は既に光仁天皇の朝に歿し、三船、家持また奠都以前に世を去りたれば、この篇において深く論究するを要せざるべし。

平安初期における文物の盛、詩章の華は、實に聖天子のこれを開きたまひしなり。平城天皇はその作少しといへども、また凌雲、經國二集に散見す。如何此一物、擅美九春場といへるは、この帝の詠にして、櫻花を詩に賦したるはじめなり。嵯峨天皇に至りては、天資文學を好みて、叡才煥發、辭藻富贍、聖作の多くしてまた俊秀なること、一世の文豪空海、小野篁と馳驅して劣らず。淳和天皇もやゝ踵を皇兄に接するに足る。嵯峨の皇子また父皇の嗜好を受くるもの多く、源弘最も學を好み、明は大學頭たり、信、常、寛、啓またよく詩文を作る。皇女有智子內親王藻思に長けたること丈夫も及ばず、その巫山高の詩に別有曉猿叫、寒聲古木條の二句の如き、評者は以て初唐の遺響ありとす。（日本詩史）

權家には、藤原四流のうち、北家の勢漸く他を凌ぐ。祖先鎌足文を以て身を起し、

また深く佛を信じ、爾來、その裔代々、世風と相浮沈して趨れば、一門の威力は次第に加はりぬ。弘仁の世、冬嗣北家に出て、勸學院を建て、施藥院を設けて、一族の子弟を養ひ、その貧病を恤み、また佛寺を修築す。嘗て勅を奉じて弘仁格式およぴ內裏式を撰し、また日本後紀の撰に與る。總裁として文華秀麗集を編せしも、この人に外ならず。かゝればもとより文藻に長じ、その詩の凌雲以下に揭げられて、吟咏するに堪へたるもの少からず。蓋し詩文は冬嗣の奬勵によりて益〻興り、冬嗣は詩文に長じて、愈〻世間に名を得たるなるべし。當時、藤原常嗣また北家の一流に出でて詩をよくせり。されどこれらは權門勢家として、殊にこゝに指を屈するのみ。弘仁文學の開祖として特筆大書すべきは、佛敎界の偉人空海その人なり。

最澄と空海とは平安新佛敎傳來の祖にして、從來の諸宗は新來の顯密二敎に壓せられて、その光を失へり。この二高僧のうち、最澄の功大はすなはち大なりといへども、行績いまだ空海の如く赫々たらず、むしろ法孫に名僧の輩出せるによりて、天台の一宗は後の榮達を得たりといふべし。最澄の和歌は新古今、續

古今、新拾遺等の集に兩三首を見るといへども、或は信を置くに足らず。詩は殆ど考ふるに由なければ、佛敎の弘布と內典の撰註とのほか、文學史上の價値は擧ぐべきものなしといひて可なり。空海が多面の才に至りては眞に驚くべし。その學を終へて歸朝するや、平城、嵯峨、淳和、仁明の四帝は師表と仰ぎ、嵯峨太后、淳和后妃等は灌頂を受け、公衆のために祕法を修すること五十餘度、四民の渴仰すること水の低きに就くが如し。前後高德多しといへども、俗に大師と稱するは、空海に限られたることを思へば、敎界の偉功思ひやるべし。書道は絕妙、雲煙筆端に湧いて、嵯峨天皇、橘逸勢と共に三筆と稱せられ、繪畫彫刻また平安美術の魁たり。その眞言種子を究めしは、語學のうへに恩惠を與へしこと、また多言を要せず。

空海は經論佛具と共に、隋唐の詩集詩論を請來すること尠からず。平城以下の帝王たゞにこれを敎界の師とするのみならず、よりて以て新渡の詩文書に接し、またその言說に益するところ多かりしならん。また空海が詩文の創作における、才藻俊逸、神氣穎敏、筆を下せば數百言立ちどころに成る。その唐にあるや

かの國の才人をして、華人もかくの如きは稀なりと歎稱せしむ。（性靈集序）平安朝の詩文の開發せるも、またかれを以て主功に推すべきなり。たゞ空海や、別に教界の聲名の天地と朽ちざるあり、これに覆はれて詩文の名は顯はれず、みづからまたこの技を以て得たりとせざりしならん。されば當時の詩苑において、その席に列せりとも見えず、凌雲、文華秀麗ともにその作なく經國殘篇に八首を見るのみ。しかりといへどもかれの詩文は別に獨立して存するあり、三教指歸と性靈集とこれなり。

三教指歸三卷、もと聾瞽指歸といふ。既に支那においては、後梁の陟岵の道安法師二教論を著はして、三教の極を詳かにし、唐の西明の法雲辨量三教論を撰し、廬州の錄事參軍姚䛒三教不齊論を修したりき。（三教指歸刪補序）三教指歸は空海がこれらに倣うて作りしものにして、全篇を龜毛先生論、虛亡隱士論、假名乞兒論、および序に別ち、兎角公といへるを主人とし、主人は外甥蛭牙公子のために教を龜毛先生に乞ふ、先生すなはち儒道を說き、隱士はこれを駁して道教を祖述し、遂に乞兒は佛教の眞理を明らむるを以て終る。一篇すべて華美なる四六駢儷

の章句を陳ねたるもの、空海が壯年の作にして、その辭藻の誇張は厭ふべきに似たりといへども、また以て作者が縱橫の才氣を見るに足る。性靈集委しくは遍照發揮性靈集といふ。空海の弟子眞濟がその師の詩文を編纂せるものにして、中にも勝道上人補陀落山碑、益田池碑、青龍寺故三朝國師碑の銘文など世に著はる。藤原惺窩は集のうち後夜聞佛法僧鳥詩を以て壓卷とす、詩にいはく、

閑林獨座草堂曉、三寶之聲聞一聲、一鳥有聲人有心、聲心雲水倶了々。

玉造小町壯衰書また俗に空海の作と稱すれども、信を置くに足らず、その作者を或は安倍清行とし、或は三善清行とす、いづれも確かならず、しばらく措いて問はずして可なり。

空海はよく詩文を作りしのみならず、またよくその法格を論ず。その文鏡祕府論六卷、これ實にわが國にありて詩文を評論せし嚆矢とす。溯つて思ふに、六朝および唐において詩文を論ぜしもの、沈約が四聲韻譜、劉勰の文心彫龍、崔融の新唐詩格、王昌齡の詩格、元兢の髓腦、皓然の詩議等の書あり、これらを取捨して祕府論は成りしなるべし。この書全篇を調四聲譜、論體勢、論對、論意、論病、論對屬

の六項に別ち、更に細目を割きて論ず。體を品してはこれを博雅、淸典、綺羅、宏壯、要約、切至の六種とし、一は頌論に、二は銘讃に、三は詩賦に、四は詔檄に、五は表啓に、六は箴誄に宜しとす。詩文の變遷を敍して、晉以來悉く頽廢して、文選も高聽の士いまだ許さず、開元の後、聲律風骨はじめて備はれりといふ。その屬文の心得の一二にいはく、

夫作文章、但多立意、令左穿右穴、苦心竭智、必須忘身、不可拘束。思若不來、卽須放情、却寬之令境生、然後以境照之、思則便來、來卽作文、如其境思不來、不可作也。

凡屬文之人、常須作意、凝心天海之外、用思元氣之前、巧運言詞、精練意魄、所作詞句、莫用古語。及今爛字舊意、改他舊語、移頭換尾、如此之人終不長進、爲無自性、不能專心苦思、致見不成。

凡詩人夜間床頭、明置一盞燈。若睡來任睡、睡覺而起、興發意生、精神淸爽、了々明白、皆須身在意中。若詩中無身、卽詩從何有、若不書身心、何以爲詩。

論旨明徹、思想を尙んで文辭を末とす。空海みづから作るところ、中年以後は、その論の如く、やゝ駢儷の臭を脫して、自在に筆を揮ふを得たりしならんが、その

後を受くるもの、その奥旨に徹せず、却つて文選に心醉して、綺麗の辭章を陳ぬるを以て、一生の能事とす。病を癒すべき藥は計らざるに心を蝕し、文人騷士徒らに詩品髓腦を喋々して、その法度に縛せられたるは、空海以後、詩文の通弊なり。しかりといへども空海一たび天下に呼號して、わが國これより詩文の品格を論ずるものあり、後の歌論もまたこれより出でたるを思へば、その感化もまた大なるかな。

弘仁の盛世にありて、漢學に長け、詩文に名あるもの、菅野眞道、仲雄王、賀陽豐年、良峰安世、淸原夏野、菅原淸公、滋野貞主等ありといへども、才學一世に秀でて、詩人の月桂冠を得べく、空海と併せて當代の二絕と稱すべきを、參議小野篁とす。篁は參議岑守の子なり、岑守內裏式等の撰に與り、また凌雲集撰者の數に加はる。その遠使邊城の詩に、唯餘勅賜裘與帽、雪犯風牽不加寒といへるは、菅公が恩賜御衣の句と同一轍に出づ。その子篁、年少の時、日々、弓馬を事とす、嵯峨天皇歎じて宣はく、この才を以てしてなほ弓馬の士となるかと、篁大に愧ぢてこれより硏鑽怠らず。多血の好漢、狷介人を容れず、才の迸り情の奔るに任せて、すゞろ

に人生の行路を難んず。俗にその地獄に通ひし奇談を傳ふるも、またその性の峻嚴を證するに足れり。承和中、遣唐副使に任ぜられしが、大使藤原常嗣の專横を憤り、病と稱して行かず、西道謠を作つてこれを刺る、嵯峨上皇逆鱗ましく〳〵て篁を隱岐に流す。昨日は遣使の譽を荷ひて今日は貶謫の禍、榮辱忽ち地を易へ、轉變の感に堪へずして、路に謫行吟七十韻を作る、世人これを傳稱す。上皇その才を惜み、數年にして召し還さる。篁また獄事の不當を恨みて、傷時詩三十韻を作りて、時論を動かせり。その世に出づるや、唐の白樂天と時を同じくし、詩格の往々相似たるものあり、その句の暗合せるもの三ありと傳ふ。江談抄たゞその詩文の殘れるもの多からず、わづかに經國殘篇、扶桑集、本朝文粹等に數篇を見るといへども、隴頭秋月明の詩に帝水城門冷、添風角韻清、隴頭一孤月、萬物影云生といへるが如きは、凄冷の氣肌を刺すを覺ゆ。

眞の才あるものは、想を述ぶるに形を問はず、篁また和歌に長じて、古今集以下にその吟少からず。その流謫の折の二首の如きは、普く人口に膾炙す、曰く、

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと、人には告げよ、海人のつり船。

思ひきや、鄙のわかれにおとろへて、あまの縄たぎいさりせむとは。
また處世の難く、不幸の多きを悲みて、
しかりとて背かれなくに、事しあれば、まづ歎かれぬ、あなう世の中。
戀の通路をせきとめられて、
數ならばかゝらましやは、世のなかにいと悲しきは賤のをだまき。
意馬心猿の狂ひに身を忘れて、
身のならむ淵瀬もしらず、いもせ川、おり立ちぬべきこゝちのみして。
概するに篁の作は詩といひ、歌といひ、極めて骨力あり、一圖に意氣に任せて文辭を列ぬるがゆゑに、章句の烹錬を失し、疎鹵に趁るものなきにあらず。世に篁を稱して野相公といふ。その孫美材は和歌をよくし、甥道風は書道に名ありき。』篁の如き不羈の才は、詩歌のいづれにも通ぜりといへども、その他は弘仁時代に歌人として名をあぐべきもの一人もあることなし。いかに詩文の流行が和歌を壓し、滔々たる社會が時勢の桎梏を脱する能はざりしか、思ふにもあまりあり。

第五章　貞觀より寛平までの詩人――都良香と菅原道眞

仁明天皇の朝、嵯峨上皇崩御あり、空海等も相續いて逝き、文德天皇即位のはじめ、貞主、篁また歿して、一時秋葉の凋落せるが如し。時運もこゝに一變して、天皇親政の時代は轉じて、攝關專權の時代となりぬ。奠都以來、昇平日久しく、邊陲の征討も絕え、地方の交通も衰へ、百官政事に倦み、逸樂に流れて、世は日々に華美を喜ぶ。これを平安初期の下半期として、上半期すなはち弘仁前後と區別すべし。この下半期のうち、貞觀、元慶の頃、詩文の名世に著はれたる人には、春澄善繩、大江音人、菅原是善、島田忠臣、橘廣相、都良香等あり、やゝ下りて寛平頃には、藤原佐世、大藏善行、菅原道眞、紀長谷雄、三善清行、三統理平等ありき。

春澄善繩本姓は猪名部造、藤原良房等と續日本後紀を撰し、また齊衡元年、菅原是善、大江音人等と詔によりて文人が奉れる重陽詩を品評す、されどその詩は、

今、經國殘篇に一首を見るのみ。大江音人はその先平城天皇に出で、江相公と稱せらる。學を是善に受くといへども、是善に一歲の長なり、蓋しその實淸公に學びたるならん。是善と共に貞觀格式を撰しまた勅を受けて弘帝範、群籍要覽を著はす、されどその全詩は一も見るところなし。菅原是善は淸公の子にして、菅相公と稱せらる。藤原氏宗等と貞觀格式を撰し、また島田良臣、都良香と文德實錄を編す。その著に東宮切韻、銀牓朝翰、集韻律詩、會分類聚、菅相公集ありといへども、今傳はらず。また現存の類聚名義抄を、或はその撰にかゝるといへど、僞作なる由旣に定評あり。島田忠臣田達音と稱す、百官唐名抄の撰あり。田氏家集三卷、その中、菅原道眞と唱和せる詩少からず、蓋し道眞の舅なるべしといふ。橘廣相字は朝綾、諸兄の裔なり。九歲にして昇殿を許され、すなはち詩を賦して曰く、荒村桃李猶應愛、何況瓊林華苑春と。文藻絢爛、學識博洽、三朝に歷事してその侍讀たり。宇多天皇卽位の時、文字は禍を買ひて、藤原佐世に譏せられ、關白基經の惛を得、恨を呑んで悶死したるは、阿衡始末としてよく世人の知るところなり。高雄神護寺の鐘は、銘は菅原是善の作、その序は廣相の撰、藤原敏行これを

書し、三絶の鐘と稱して、今に參觀者の歎美して措かざるところなり。廣相が項羽に題する句に曰く、燈暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲と。
都良香はもと桑原氏なり、腹赤の時に至りて都宿禰に改む、腹赤また詩文に長じ、仲雄王等と文華秀麗集を編し、また内裏式の撰に與れり。良香はその甥にして、藻思富贍、才名最も揚る。惜むべし、前諸家より遲く生れて、速く歿す、享年僅かに三十六。都氏文集の殘闕存し、また登富士山記など世に著はる。嘗て春色を追うて九條朱雀のあたりを逍遙し、口占して曰く、氣霽風梳新柳髮と、羅生門上嗟嘆の聲あり、次して曰く、氷消波洗舊苔鬚と、世に鬼神の所爲なりと稱す。また竹生島に詣で、その絶景を愛して、三千世界眼界盡と咏じたれども、その次句を得ず、神の敎によりて十二因緣心裏空の句を繼ぎたりといふ。昔、初唐の宋之問錢塘の靈隱寺に遊び、半夜行吟して、燈下の老僧より下聯を得たり、老僧はすなはち駱賓王なりと傳ふると、同一轍の談にして、或はこれらの傳說より附會したるかも知るべからず。世に稱す、良香のち南山の窟に入りて仙となれりと。
寛平前後の文士を見んか、藤原佐世は宇合六世の裔にして、後の式家の儒をな

す。その撰にかゝる日本國現在書目錄今に傳はりて世を益すといへども、その詩は見るところなし。大藏善行は時平、道眞等と三代實錄の撰に與る、長生して門人甚だ多く、藤原時平、同仲平、平惟範、同伊望、藤原興範、紀長谷雄、三統理平等みな業を受く。延喜元年、善行年正に七十、時平一時の英俊十六人を城南水石亭に會して、その壽を賀し、みづから弟子の禮を取る。その後九十歳に及んでなほ壯容ありといふ。

菅原道眞は淸公の孫、是善の子、三代儒を以て家を立て、道眞に至りて遂に三公の貴に昇る、その經歷は三尺の兒童もこれを知れり。道眞學を島田忠臣に受け、その撰著は、歷史に類聚國史二百卷あり、詩文に菅家文草十二卷、同後草一卷あり、後草は流謫後の作を集めしもの、もと西府新詩といひ、薨ずるに臨みて、封じて紀長谷雄に贈りしなりといふ。菅家御集、菅家百首、菅家遺誡、須磨記の如きは信ずべからず。菅家萬葉集とて詩歌を集めたるものあれども、信じがたく、菅蠧鈔また後人の假託なるべし、

紀長谷雄字は寬、紀納言と稱せらる。はじめ大藏善行に學びしが、のち中あしく

なりて、道眞の門に遊び、いたくその愛顧を被れり。性溫厚にして、漫に人と爭はず。三善淸行嘗て長谷雄と文を論じ、詬罵して曰く、古より無才の博士あることなし、これあるは汝に始まれりと、長谷雄默して論ぜず、人その雅量に服す。惟宗孝言これを聞いて曰く、龍の鬪ふは困むといへども、斃るゝに至らず、他畜はこれに近づくを得ずと。三善淸行字は耀、善居逸といひ、善相公と稱せらる。敏才多能、政事に通じ、また算術をよくし、これより後、三善氏は算道の家となる。善家集、今逸して傳はらず、意見封事、革命勘文等世に知らる。古來、淸行を論ずるもの、封事を上れるは忠、革命を論ずるは智、菅公を諫むるは誠、菅門諸生の錮を解かんと請ふは剛と稱し、併せて文辭も長谷雄輩に比すべきにあらずとして、嘖々これを稱するあり、或はこれに反して、公を忘れ、私を營み、忠良を排毀するもの、權家の犬たるに過ぎずと斥くるあり、その人物の正否は今に確定の論を見ず。されどその論をこゝに更めて繰り返すの要なし、今敢て是非せず。三統理平は三代實錄、延喜格式の撰に與れり、詩をよくすといへども、これを見ず、策問一を存するのみ。

以上寛平諸家のうち、長谷雄、淸行、理平の如きは、延喜の古今集勅撰の時代にも在世し、長谷雄、淸行はともにかの集の撰者なりし紀友則と同年にして、理平は延長四年までも生存せりといへども、一括していへば、年代にやゝ先後あり、系統またおのづから次第を立つべければ、便によりてこの文人等はこゝに擧げ、古今集の撰者等は第二期に論ずるなり。而して前述の文人諸家のうち或は名高くして實これに合はざるものあり、或は譽の傳はりて作の殘らざるものあり、そのうち殊に秀逸にして文學に功あるものを取らんか、貞觀の良香、寛平の道眞、これその人なり。寛平時代には蓋し道眞と長谷雄、淸行とを三雄とす。長谷雄は老實なる村夫子なり、その學は博かるべしといへども、その才は未だし、淸行が無才の博士と罵りたるも、偶然にあらず。貧女吟は琵琶行より出でたれど、見るに足らず、結末に寄語世間豪貴人、擇夫看意莫見人、又寄世間女父母、願以此言書諸紳といへるは、その言何ぞ道學者先生の趣あるや。淸行は、これを善と稱し、惡と評する、共に極端の論なるべく、要するに才氣縱橫、性の行くに任せ、學の博きを誇りて、漫に人を輕侮凌辱せしものなるべし。その詩は遺什も多からず、

また到底道眞の匹にあらざるべきか。さればなほ寛平の大立物としては、その政治界におけるが如く、文學にもまた道眞を擧げざるを得ず。

死して餘榮あるもの、古來道眞の如きはなからん。天德以後、天滿宮と仰ぎ祀られ、朝野の崇敬世を經て益〻篤く、いかなる山の奥、海の岸も、晩鴉の歸る鎭守の森に、神樂太鼓の響きくるは、稻荷、八幡ならねば天神樣と誰も知りぬ。尊奉かくの如く深きは、或は公薨じてのち變災屢〻起りたれば、迷信の深き世、これを公の祟と恐れたるにもよるべし、或は一旦槐位に昇りながら、榮枯忽ち地を易へ、寃枉のために僻地の土となりしを憐む同情にもよるべし。それ然り然りといへども、古來これを文學の神と仰ぐは、またその道の大器たりしによらずんばあらず。思ふに道眞の性や謹嚴にして至誠、その弊や藤原菅根を殿上に打ちたるが如き狹量の失に陷る。これ多血多感の質のまさに然るべきところ、その質はすなはちその詩を美にする所以にして、至誠の性と相俟つて、文學のうへに現はれたり。しかも詩は窮境にありて益〻進む、菅家後草の如きはその血を絞り、その涙を注ぎたるものにして、情感の純にして切なる、讀者をして涙滂沱たるを覺

えざらしむ、蓋しその悲慘の境遇の然らしめしなり。

道眞の詩の特色は、平易にして暢達、忠誠にして純潔、至情を披瀝して、淀まず、滯らず、恰も白玉を水晶盤上に轉ばすが如きにあり。白樂天は平易の文字を喜び、門前の老婆が批評を以て它山の石とせしもの、而して平安人士が作詩の至境と仰ぎしは、かれ樂天にあり。彼此競うてこれを學んで、たゞ及ばざるを恐れたりといへども、なほその奧旨を會得したるもの、道眞の如きはなからん。その奇禍を得て鄕を出づるや、吟じて曰く、

離家三四月、落淚百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼。

また二月十九日の詩に曰く、

郭西路北買人聲、無柳無花不聽鶯、自入春來五十日、未知一事動春情。

その他、不出門の詠の如き、重陽後朝の詠の如き、いづれも平易暢達を旨とせざるはなし。すべて難解の語を嫌ひて、わが國に用ひ馴れたる平常茶飯的の辭を列ぬ。佶倔聱牙は邦人の喜ばざるところ、流麗融和はその愛するところ、道眞の詩に至りて殊に和臭を帶び來れるを見る。或は稱す、この和臭あり、詩として見

るに足らずと。然り、漢詩としては純なるものにあらざるべし、しかれども詩を以て國民の性情を表現するものとすれば、道眞の如きはすなはち國民的詩人の最たるものにして、唐詩を同化して和詩となしたるもの、その地位は漢詩全盛より和歌勃興に移る境界線にあり。これを美術に見るも、空海等が傳來せし密敎的佛畫佛像も漸次その風を改め、巨勢金岡に至りて日本流に化し去りぬ。彼といひ此といひ、いづれも時勢の變移と相伴はざるはなし。かくして平安初期の漢文學において、特に空海と道眞とを擧げ、一はその移植において、一はその更新において、いづれも主功に數へんとす。一は佛者、一は儒家、彼の今日なほ大師樣として信仰の衰へざるはいふに及ばず、此も天神樣として普く國民の崇拜を受くるは、一はその國民的大詩人たるによらずんばあらず。

道眞の文學的地位は漢詩和歌の境にあり、かれは篁の如くまた好んで和歌を詠ず、その詠は載せて古今集以下の數勅撰集および大鏡等にあり。もとより詩に及ばずといへども、平易を主として感情を直白するは、彼此相似たり。家を離れ、京を顧みて、

君が住む宿のあたりを、ゆく〳〵も隱るゝまでにかへり見しはや。

といへるが如き、太宰府にありて、

東風吹かば香ひおこせよ、梅の花、あるじなしとて春を忘るな。

といへるが如き、共に人口に膾炙す。

平安初期の下半期において詩文に名あるもの、凡そ前に述べたるが如し。更にその大體に就きて論ぜんか、この期は即ち弘仁より、延喜、天暦に移らんとする過渡時代なり。しからば過渡時代として次期に轉ずるの傾向は何かある。第一に、全詩よりはむしろ聯句を愛するの風にして、一篇の結構を問はずして、却つて一二句に心勞せしが如し。一二句に苦心慘澹たること、もとよりいづれの國、いづれの世にもあることなれども、この時に至りて殊に流行し來り、朗詠の如き、單に著名の聯句を誦して、他を問はざるに至れり。恰もこれ長歌が短歌に移り、短歌のまた發句に變じたると、その趨向を同じくするものなり。第二に、門閥の定まれることこれなり。學閥、文閥の弊甚しきは、なほ後のことに屬すといへども、その家の樹立したるは既にこの時よりあり。菅江二氏は文章

道を以て家を興す。道眞は父祖三代文學に秀でて、またその子に淳茂あり、孫に文時あり、曾孫に輔正あり。大江氏は、音人以來、菅氏と並び立ち、その裔に朝綱、匡衡、匡房等の俊才を生ず。明經には、愛成が寛平の侍讀たりしより、清原の家殊に榮え、明法には、元慶の頃、秦直宗父子が姓を惟宗に改めしより、家名を興し、算道には、三善清行よりその家盛なり。蓋し泰平日久しく、人々安逸に馴れ、惰心を生じ、その家にあらざればその業に勵まず、また貴賤の階級明かに立ちて、學あり才ありとも、次を超えて昇ること難ければ、愈〻研鑽の念は薄らぎて、門閥はこゝに固定す。俗界の權力においてまた然り、諸種の職業においてみな然り、何ぞひとり文學のみを怪まんや。

第三に、時勢は漸く變じて、和歌を愛するもの多くなりしことこれなり。弘仁頃には歌人甚だ少く、著名なる人には篁の如きありしのみ、もとより絶えたるにはあらざれども、漢詩に壅塞せられて、萎靡振はざりしが、この下半期に至りては、翻へりて歌運勃興の兆を現はせり。前には嵯峨天皇をはじめ、その皇女まで詩を作りしに、今や陽成天皇、光孝天皇、文徳の皇子に惟喬親王、陽成の皇子に元

良親王、平城の皇孫に在原行平、業平の如き、たゞ和歌あるを知つて漢詩あるを思はず。冬嗣は歌もあれど、むしろ詩をよくせしに、その子良房は歌の存するのみ。良峯安世の子宗貞、音人の子千里の如きは、儒家より歌人に轉ぜしものといふべし。かくては次にこの時代の和歌について説かざるべからず。

第六章　貞觀より寛平までの歌人（上）――

在原業平

藤原宮の御代に人麿あり、天平に赤人あり、憶良、旅人、家持等前後して、萬葉和歌の盛大を致ししもの、延暦遷都の後に至りてその影を潛む、蓋し漢詩の威權に抑壓せられて、この衰頽を來ししなり。されば平安朝のはじめにおける歌人の特に指名すべきは甚だ稀に、たゞ古今集のうち、當時の作にかゝりて、萬葉の遺韻を帶ぶるものあれども、概ねよみ人知らずとして、その名を知る能はず。弘仁の篁の如き詩歌ともによくすと稱すべきのみ。強ひて歌人の名あるものを問

はば、猿丸大夫を擧ぐべきか。猿丸大夫の傳詳かならず、猿丸大夫集によりてその歌を知るに過ぎず。方丈記に、田上川を渡り、猿丸大夫が墓を尋ぬといへり。古今集序に、大友黑主を評して、古の猿丸大夫の亞流とす。この古とはいづれの時ぞ。三十六人歌仙傳には、猿丸大夫のことをいひて、萬葉集を尋ぬといへども、この人の名なし、もしくは異名か、決し難し、もしくは萬葉集の後、元慶頃の人かといへど、元慶頃とすれば、黑主と同時に當りて、古今集序に合はず。古今集目錄には、大夫を以て弓削王の異名とす、こは王の歌とて萬葉集に擧げたるものの、また大夫集に出でたればなり。されど王は天武第六の皇子、その異名に大夫の稱あらんこと、極めて信ずべからず。思ふにこの歌を混じたるは、大夫集の誤れるなり。そのほか大夫集の怪むべき點少からず、また古今のよみ人知らずの歌をのせたること多し。或は稱す、大夫集は人麿集と同じく、萬葉、古今等の中より拔き集めて、後人が強ひて名を構へたるものなるべしと。されどとにかく集中の歌、いづれも後世の作にはあらず、もし大體についていへば、大夫は平安朝のはじめ萬葉時代を隔つること遠らざる時の人なるべし。その詠の一二を見ても、

なほこれを證するに足る。

妹が門過ぎゆきがてに草結ぶ、風吹きとくな、あはむ日までに。

ひぐらしの鳴きつるなべに日はくれぬと、思へば山の影にぞありける。

物必ず反動あり、上れるものは下らざるべからず、弘仁の風潮は貞觀、元慶に至りて一變の機に向ひ、外國崇拜の熱漸く醒めて、國民自覺の念内に催し、漢詩を捨てて、更に和歌に心を潜むるもの漸く增加す。この轉換の氣運に乘じて、文壇の將となり、平安和歌の趨向を定めたるものは、まづ在原業平を推さざるを得ず。業平の傳は三代實錄(元慶四年五月の條)等に見ゆ。その父は平城の皇子阿保親王、母は桓武の皇女伊登内親王なり、親王奏請して、その子をして姓在原朝臣を稱せしむ。業平は親王の五男にして、體貌閑麗、放縱拘はらず。貞觀十四年、勅により鴻臚館に徃きて、渤海の客を勞問す。從四位上藏人頭右近衞權中將に至り、元慶四年、五十六歲にして卒す。

業平惟喬親王と親交あり。親王は文德天皇の長子にして、賢明の譽あり、父皇これをして位を嗣がしめたまはんの御志あり。時に藤原良房藤氏の長者として、

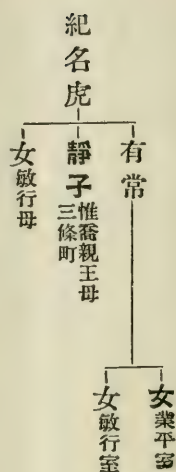
政を執り、權を弄す。その女染殿の后の腹に第二の皇子惟仁親王あり、天皇良房を憚りて、幼冲なる惟仁を儲位に置きたまふ。惟喬思のほかに弟に超えられ、世をはかなきものに疎んじて、洛北小野に閑居す。業平同情の念禁じがたく、世は睦月のいそぎに餘念なき頃、比叡の麓を思ひやりて、ひとり行き訪ひて、主客相對して今昔の感に堪へず、詠じて曰く、

忘れては夢かとぞ思ふ、思ひきや、雲ふみわけて君を見むとは。

これを以て、後人或は忖度して謂へらく、業平は單に花を折り香を偸むの貴公子にあらず、眞に世を憂へ國を思ふの大忠臣にして、深く藤家の跋扈を憤り、これを壓へて皇室の勢を張らんとせしものにして、二條の后の若かりし時、これと契りぬといふは、その入内を妨げんの謀、東下りは東國有志の徒を語らはんが爲なりしなり。企畫意の如くならず、憐むべし、韜晦してわづかに煩悶を和歌に遣り、遊子の名を後世に止めたれど、

思ふことといはでぞたゞにやみぬべき、われとひとしき人しなければ。

の詠は、その衷情を露出して餘あるにあらずやと。思ふに業平が惟喬と相親み

しは、深き魂膽あるにあらず、一は多情多涙の性より親王の逆境を憐みしが爲、一は彼我姻戚相通ぜしが爲なり。紀氏系圖を見よ。

業平を忠魂義膽の士とする論は、後世の論者がその道學的眼孔を以て、放縱不羈の平安貴公子を律せんとするもの、いかんぞ正鵠を得ん、儒道偏重の弊、かれらはお染久松を小説にしたてて忠士烈婦としたり、兼好が師直の艶書をしたためたりとの俗説に理由を設けて、北朝に内訌あらしめんが爲と解したり。江戸時代において平安朝の史蹟を見るや、漢學者のみならず、國學者といひ、戯作者といひ、文字あるものはすべて褊狹なる道義を以て、これが尺度とす。堂々たる男子、事を爲すや、磊々として天地に耻ぢず、何ぞ一女子を欺きて忠義の爲なりとせん。かくの如き庇護説は、いはゆる最屓のひき倒し、却つて業平の一笑を

招くに足るのみ。甲羅に似せて穴を掘る蟹のふるまひ、陋なるかな。なほこれを事實に見よ。われと等しき人しなければと歎けるは、もとより意深くあはれなる歌なり。されどこの一首を以て、必ずしも業平の一生を律すべからず。業平もし日常慷慨不平の念に堪へざらば、激越の情のいかんぞ別に流露せざることなからん。しかるに事實はこれに反して、かれは屢〻藤原氏と來往せり。基經の四十の賀を祝するや、賀辭を呈して曰く、

櫻花ちりかひくもれ、老らくの來むといふなる道まがふがに。

またの榮華藤氏を祝して、

咲く花の下にかくるゝ人多み、ありしにまさる藤のかげかも。

しばらく伊勢物語の記するところを事實とすれば、かれはまた良房に雉子を奉るとて、

わがたのむ君が爲にと折る花は、時しもわかぬものにぞありける。

古今集にはこの歌をよみ人しらずとす。

これらは尋常の交際上のお世辭ともいはばいふべし。されど後撰集によるに、

なほ思ふ心ありて、身の沈淪を憂へ、

頼まれぬうき世の中を歎きつゝ、日かげにおふる身をいかにせむ。

と良房に愁訴せるは、これを何とか評せん。要するに業平の性、もとより後世にいふところの慷慨家なるものにはあらず、またさるものの出づべき時勢にもあらず。たゞ三代實錄にいへるが如く、文字の通りなる放縱不拘の資、思ふがまゝに身をふるまひ、世にすねて、時には笑ひ、時には憤り、多情多恨、己が沈淪を歎き、惟喬が不幸を憐み、住みわびぬ、今はかぎりといひながら、山里にかくれもあへで、一生を送れる人なりしならん。そが金玉の響ある和歌を見ば、ずなはちこの說の誤らざるを知るべし。

貞觀、元慶頃の和歌の先達即ちいはゆる六歌仙の名をあげ、巧妙なる譬喩を設けてこれを評せるは、古今集序をはじめとす。その業平を論ずるや、曰く、心餘りて詞足らず。しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるが如しと。つら〳〵業平の作を見るに、經營慘澹、苦心を重ね、雕琢を經て成れるものにあらず、淚あり、血あり、情想の溢れて止まざる天才の、觸るゝがまゝ、感ずるがまゝに言ひ捨てたるも

のなれば、眞情の流露して、直ちに人の肺腑を衝くことはあり、しかも練磨推敲するにあらざれば、その文辭の言ひ得たるもあり、得ざるもあり。純樸にして强ひて修飾せざるは、延喜以後と異なるところにして、殊にこの特性は業平において甚しとす。貫之が心餘りてと評せしは、これが爲なり。

月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、わが身ひとつはもとの身にして。

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ、花こそちらめ、根さへかれめや。

といへるが如き、一讀その意を得がたく、詞を加へて解釋するを要す。そのすぐれたるものは、意義甚深、吟誦を重ぬれども飽かず、餘韻嫋々として曳いて絕えず、後世の巧を競ひ才に誇るもの、その上に加へんとすれども、遂に及ぶことなし。しかれどもわろきはたゞ言になりて、何等の趣味をも覺えざるもののなきにあらず。「植ゑしうゑば」の吟の如き、すなはちその一例か。その他、有名なる「世の中にたえて櫻のさかざらば」の吟の如き、また

行く螢、雲の上までいぬべくば、秋風ふくと雁に告げこせ。

といふが如き、粗鹵なる空想の、却りて理屈に陷りて、詩味の索然なるを覺ゆる

のみ。

要するに業平の歌は眞率にして虚飾なく、直下に人情を傾倒して餘蘊なし。かくしてかれは平安朝最初の第一等の歌人にして、またこの朝を盡しての第一等の歌人なり。たゞこの朝の末にありて、よくその壘を摩し、時に一頭地を抜きさへもせしもの、西行法師あり。西行は自然の懐に隱れ、業平は人生の波に漂ふ。西行は出でて天地の間に放浪せしに、業平は人生を内觀して、性情の波瀾を詩化せり。西行は後のこと、なほ業平の歌を見るに、文辭の如きは求めて雕琢を加へざれば、その詠に巧拙相交れるはもとより免れずといへども、これを誦して涙潜々として下るを覺えざるもの頗る多し。惟喬親王を訪ひし時の吟の如き、また、

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめば、いやはかなにもなりまさるかな。

つひにゆく道とはかねてしりしかど、昨日今日とは思はざりしを。

といふが如き、痛切なる感情を吐露し盡して、千古の絶唱にあらずや。

くれぬとてねてゆくべくもあらなくに、たどる〳〵も歸るまされり。

いとゞしく過ぎにし方の戀しきに、羨ましくもかへる浪かな。

といへるなど、千歳の後なほその人と相對するが如く、いかにその言の眞率なるよ。その後、延喜以來、和歌の大に興れるも、ひとへに先達業平等が唱道せるが爲にして、脂粉の氣の多くなり增りしも、また業平等が吟詠その責を免るゝこと能はざるへし。

業平の詠を集めたるもの、業平集あり、こは業平の編輯せるにもあらず、その門流子孫のなせるにもあらずして、後人がさかしらに世々の勅撰集より抄出したるものにして、何か一ふし變れるところあるにもあらず、たゞその歌を一つに集めて見得るの便あるのみ。それさへ他人の所詠を混入せること、既に契沖の河社にその辯あり。伊勢物語が業平の作たるとしからざるとに就きては、論評區々にして定まらず、別に一章を設けて說くべし。

おのれ儲貳に立つべくして、幼弟にその位を奪はれたる惟喬親王も、また入神の吟あり。親王僧正遍昭に送りて曰く、

櫻花ちらばちらなむ、ちらずとて、ふる里人の來ても見なくに。

またおのが境遇にみづから涙の催ほされて、

白雲のたえずたなびく峯にだに、住めばすみぬる世にこそありけれ。

業平の兄に在原行平あり、諸國の守に歴任し、太宰權帥となり、また陸奥、出羽の按察使となり、同族の爲に奬學院を建つ、その事業頗る見るべし。和歌は著名なるその弟に及ばずといへども、秀吟また少からず。須磨に流寓して、松風村雨の俗說に、千歳風流の名を留めたることはしばらくいはずとも、

わくらはに問ふ人あらば、須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ。

の一首に、誰か青松白沙の間に放浪する貴公子を思ひ出でざるものぞ。業平の子に棟梁、滋春あり、棟梁の子に元方あり、古今集卷頭の詠は實に元方の作なり。

第七章　貞觀より寬平までの歌人(下)——遍昭、小町等

梅蕾は春に先だちて綻ぶ、貞觀、元慶の頃は既に古今時代の魁をなし、和歌の勢

まさに漢詩と相如くに至れり。この際に當りて、歌人の著名なるもの、業平のみにあらず、僧正遍昭、文屋康秀、大友黑主、藤原敏行、女性には、小野小町、やゝ下りては伊勢の御ありき、

僧正遍昭は俗名を良峰宗貞といふ、有名なる良峰安世の子にして、實に桓武の皇孫なり。仁明天皇の知遇を得。從五位上藏人頭左近衞少將に至る。青春心は花の如く、若殿原上﨟達の間に伍して、風流好色の名あり。五條あたりのあばら屋に雨やどりし、若菜の羹に舌打して、その家の娘と一見相思の情に堪へざるが如き、一年の五節に、天つ風、乙女の姿しばし止めよかしと望めるが如き、その性行を察するに足る。仁明天皇崩御ましまししかば、哀傷に堪へず、深草に葬り奉りたる夜、直ちに叡山に上りて僧となりしが、さすがに剃りこぼたれたるおのが頭を、鏡の影に憐みけん、

たらちねはかゝれとてしも、うば玉のわが黑髮をなでずやありけむ。

一年を經て、御果の日、殿上人等河原に出でて衣を更へけるに、誰ともなくて、柏の葉にかきつけたるを送れるは、即ち遍昭の所爲なりき、曰く、

みな人は花の衣になりぬなり、苔のたもとよ、乾きだにせよ。

修行の間、初瀨に籠りて、測らずもその妻に目付けられしことなど、遍昭集に記したるが、この集はもとより遍昭が筆になれるものにあらず、遍昭を第三人稱にして、しかも文體遙かに後のものなり。修行を終りてのち雲林院に住持し、また花山に元慶寺を草創して、その座主となる、故に花山僧正の稱あり。宇多天皇篤くこれに歸依し、仁和元年、宴を仁壽殿に賜ひて、七十の壽を賀したまへり。

遍昭道心堅固にして、朝野その德を仰ぐ。嘗て仁明の皇后御めしありしかども、高野山に隱れて出でず、また屢〻榮譽ある僧綱を辭して、梵行に精進せんとす。思ふにその人とその歌と併せて端正莊嚴の體を具したらんが如し。さばれ僧形は詩情を改めず、行狀こそは純潔なれ、在俗の頃の風流心は剃られたる髮と共に落ち去らず。ある時、石上寺にて小野小町に邂逅す、小町は女の癖に人わろし、相手を試みんとて、

岩の上に旅寐をすればいと寒し、苔の衣をわれにかさなむ。

その答は洒々落々たり。

世をそむく苔の衣はたゞひとへ、かさねばうとしいざ二人ねむ。

また嘗て馬より落ちて賦して曰く、

名にめでてをれるばかりぞ、女郎花、われ落ちにきと人に語るな。

かくの如くその歌は嚴格ならずして、むしろ色めき華やぎたり。人我平等、一切の俗累より解脱せる洒落の眞骨頭より見れば、毫も怪むべきところなしといへども、當時の宗教と人心の程度とより見れば、遍昭の碩德にしてこの歌あるは、頗る相應せざるものの如し。しかり、遍昭のいふところは朴實ならずして輕華なり、單純ならずして婉曲なり、その辭は修飾せられ、想は練磨せらる。故に浮靡の風を厭ひて、質實の昔に返さんとしたる貫之は、これを冷評して曰く、僧正遍昭は歌の樣は得たれども、誠少し、たとへば繪にかける女を見て、徒らに心を動かすが如しと。この點において遍昭は業平と雙方の極端に趨れるもの、一は感情の純白なるを尙び、一は構想の曲折あるを喜ぶ、兩々相騈馳して、當代歌壇の偉觀なり。

かくして業平の天眞爛漫なるは多く得がたしといへども、遍昭は更に一歩を

進めて、文辭と思想と共に複雜になりたるものなり。彼は璞玉のおのづからに潤澤あるもの、此は佳人の綠鬢に燦として輝く髻華の明珠なり。遍昭は感興をあるがまゝにうち出すに慊焉らず、想像を逞しくして、種々の句法を用ひ、擬人法など殊にその好むところなりき。

山風に櫻ふきまき亂れなむ花のまぎれに君とまるべく。

といへるは、五節の舞妓を歌へると同一筆法に出づ。

よそに見て歸らむ人に、藤の花、はひまつはれよ、枝はをるとも。

と勸めたる、卑しく拙けれど、珍らしく、

蓮葉のにごりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく。

と叱したるは、日常普通の景物を執へて、破天荒なる喝破を與へたるものなり。その「香をだに盜め、春の山風」といへるが如き、むしろ新古今時代の歌に伍すべく、頗る雕琢を經たるものなり。故にこれを好まずとはいへ、なほ貫之も、その體を得たるは賞せざるを得ざりき。もしそれ、

末の露、本のしづくや、世の中の後れさきだつためしなるらむ。

秋の野になまめきたてる女郎花、あなことことし、花もひと時。

など厭世無常の觀をなせるもの多きは、一は出家の詠なればなり。遍昭在俗の時、子玄利あり、出家してのち、法師の子は法師ぞよきとて、これをも出家せしむ、素性法師これなり。歌よみの子はまた歌よみにて、好吟少からず。今、人口に膾炙せるもの一二を擧ぐるに止む。

今こむといひしばかりに長月のあり明の月をまちいづるかな。

そこひなき淵やはさわぐ、山川の淺き瀨にこそあだ浪はたて。

文屋康秀も業平、遍昭と同時の歌人なり、字は文琳、三河掾、山城大掾などの卑官に居て、一生を不遇に終りぬ。その詠數多からず。その上巧にさへもあらざりしが如し。少數の遺吟のうち、君の惠をてる日の光に比したるが如き、二三箇所の重複を見る。しかるを貫之が業平、遍昭等と列せしめたるは、頗る怪むべし。その評に、詞たくみにて身に負はず、いはゞ商人のよき衣きたるが如しといへるは、蓋し想の貧と辭の巧と相合はざるをいへるなり。しかれども想の貧なるはもとより、辭の巧もまた許すべからず、かの有名なる「うべ山風を嵐」の如き、小兒の

囈語に過ぎず。たゞ劣等なる言語の玩弄を重視したる時代のこととて、かゝる詠の絶品と仰がるゝこともありしは、康秀の僥倖のみ。

大友黑主も同時の人にして、長生して延喜の朝に及ぶ。近江滋賀郡の大領にして、また園城寺の地主たり。延喜中、宇多法皇屢、石山に御幸あり、國司その民を勞せんことを患ふ、法皇これを聞きて、その費を他國に課したまふ。國司恐縮の思に堪へず、陳謝の意を表せんと欲し、亭を打出の濱に作りて、菊を植ゑ、黑主に命じて還幸を迎へしむ。黑主和歌を奉りて曰く、

さゝら浪間もなく岸を洗ふめり、渚淸くば君とまれとか。

黑主少しく偏僻なる地に住して、劇變しやすき帝都の風潮に染まず、旣に萬葉の歌調は隔りたれども、なほ樸野質實、言辭の修飾少くして、古代の遺風を存す、故に或は稱して猿丸大夫の亞流といふ。

春雨のふるは涙か、櫻花、ちるを惜まぬ人しなければ。

といふが如き、また醍醐天皇の踐祚大嘗會に、

近江のや鏡の山をたてたれば、かねてぞ見ゆる、君が千歳は。

といふが如き、蓋し黒主が會心の作なり。黒主また好んで客觀的景物より一轉して主觀的感懷を述ぶ。

思ひいてて戀しき時は、初雁のなきてわたると人しるらめや。
白浪のよする礒間をこぐ舟の、檝とりあへぬ戀もするかな。
玉津島ふかき入江をこぐ舟の、うきたる戀もわれはするかな。

の如きその例にして、これらの多くはいはゆる序歌の體をなす。この體は前後いづれの時にもあれども、殊に萬葉集に多く、黒主がこれを好めるも、また古風に傾倒せるが爲なるべし。序歌の弊や、一篇の主眼と關係なく、むしろ無意義なる言語を弄するにありといへども、そのすぐれたるは悠揚迫らず、言外の餘韻曳いて絶えず。貫之が評して、大友黒主は心は高くて、その樣いやし、いはば薪負へる山人の、花の陰に休めるが如しといへるは、その風の高古なるを喜べどもまたあまりに近體に遠ざかれるを笑へるなり。さばれ黒主の詠優麗にして迫らず、滯らず、おのづから大家の風あるは、康秀が及ぶところにあらず。たゞその歌數の少くして、また變化の少きは、かれが業平、遍昭に一歩を讓らざるべから

ざる所以なり。

貫之が近古の名家を評するや、業平、遍昭、康秀、黒主、喜撰、小町を數へ、後世これを六歌仙と仰ぐ。その中もとより巧拙の別あり、殊に不倫の感あるは喜撰法師なりとす。貫之の評に、宇治山の僧喜撰は詞かすかにして、始終たしかならず、いはば秋の月を見るに曉の雲にあへるが如しと稱すれども、今その當否を驗すべき喜撰の詠を得るに難く、たゞ一の「わが庵は都の巽」の作あるのみ、この唯一の詠もまた「うべ山風」の類にして見るに足らず。或は思ふ、不幸にしてその作の湮滅せるなり、當代にありては、喜撰もまた歌壇の一雄たりしは、和歌の作式の撰あるを以ても知るべきか。最古の歌學書として知られたる、和歌四式のうち、喜撰作式あり。今日傳播するところの四式は、いづれも僞書なりといへども、喜撰の撰については、千載集の序にも記し、八雲御抄またその日を擧げたれば、必ずや僞撰ならざるものも、古は存せしならん。しかれどもこれもまた憶測に過ぎずして、はじめよりその書の存せざりしかも知るべからず。當時、歌道の大勢いまだ歌學の書を出すほどには進まざりしが如し。喜撰の傳記もたよるべき緣

口だになし。基泉といひ、窺詮といふも、或は同一の人といひ、或は各別とす、皆根據あるにあらず。その作の一首のほか殆ど見るべからざるも、後世のことにあらずして、古より既にしかりしなり。玉葉集に、

木の間より見ゆるは谷の螢かも、いさりに蜑の海へゆくかも。

といへるを載せたれども、時人喜撰の詠は一首のほかにあるべからざるをとて、これを難ず。また、

けがれなむ、手ぶさはふれじ、極樂の西の風ふく秋の初花、（顯昭古今集序註所引樹下集）

といへるを、喜撰の作とするもあれども、これは遍昭が、

折りつれば手ぶさに汚る、たてながら三世の佛に花たてまつる。

より出でて、しかも甚だ拙、後人のあらぬすさみに過ぎざるべし。要するに喜撰の名は遙かに實に過ぎたり、これを六家のうちより削り去らざるべからず。喜撰を削りて、これに代るべき人を求めよとならば、余は、

秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる。

と初秋の感を一首にいひ盡したる、藤原敏行を選ばざるべからず。されど貫之

がかれを加へざりしは、やゝ前述の人よりも若く、殆どおのれらと時代相接したればなるべし。敏行官位は從四位上右兵衞督に至る、最も書に巧なり。その法華經を寫して精進潔齋せず、地獄に墮ちぬといふ俗說は、のせて今昔物語卷十四にあり。村上天皇嘗て小野道風に、書道における古來の妙手は誰ぞと問ひたまふに、答へて、空海と敏行となりといへり。名家道風に推尊せらるゝことかくの如きは、以て敏行の伎倆を推すに足る。和歌において、敏行は業平の風を望んで立ちしものなり。その業平と姻戚の緣あることは、さきに業平を說くに當りて揭げし略系を見て知るべく、歌道もまたこの先輩を推尊して措かざりき。敏行と並んでまた平定文あり、平仲と稱せられて、好色風流の名極めて高かりき。』

業平を知るほどのものの小町の名を聞かざるはあらず、支那の美人はといへば、まづ楊貴妃を推し、日本には小町を稱すげにや小野小町は日本美人の標本なり、神泉苑の雨乞に佛天感應の理を示し、黑主の奸策に、草紙を洗ひて有髥男子を愧死せしめ、靑春紅顏のほこりに、深草の少將を弄し、忽ちよする老の波に、道端の卒都婆に息づき、五大もとに歸りては、一个の髑髏の秋風に吹かれて、あ

なめあなめと呟き、天人五衰の姿をさながらわが世に示せりなど、さま〲に傳ふることの多くは後人の假託に出でて、まことの小町は夢にも知らぬなるべしといへども、なほ小町は日本淑女の標本、少くとも平安朝上﨟の標本なり。しかり、小倉百首の歌牌を弄ぶ童男童女も、十二一重の繪姿を見ては、紫式部ともいはず、清少納言ともいはずして、小野小町と稱するなり。既に奈良朝にも、額田女王、大伴家の一族などの女流歌人なきにあらざりしが、これはあまりに事ふりにたり。平安朝に入りても、これよりさき一二詩歌、の才ある淑女なきにあらざりきといへども、なほ絶世の才を抱きて、巾幗の身を以て歌壇の魁となりしは、小町を措いて誰ぞや。かくて小町がひとりその名を後世に恣まにするは、一は他に先んじて出でしが爲なりといへども、またもとよりその詩才において拔群なりしによらずんばあらず。

小野小町の傳記の詳細は知るべからず。古今集目錄に、出羽郡司の女にして、比右姬といふといへど、相並べて、或は云く、母は衣通姬とあるの杜撰なるより見れば、これも信を置きやすからず。小野氏系圖によれば、篁の孫、良眞の女にして、

美材の從妹とす、或は小町に數人あり、攝して一人と見るは誤れりなどいへど、明證あるにあらず。玉造小町といふは架空の人物なるべく、これを除いて古今集以下の歌集に見えたるは、小野小町のほかにその人あるを知らざるなり。されば小町を論ぜんとせば、信ずべからざる俗說はさし措いて、直ちに勅撰集に見えたるその和歌について考究せざるべからず。別に小町集あれども、その杜撰なる由は、既に本居宣長の玉勝間に論あり。

貫之の評に云く、小野小町は古の衣通姬の流なり、あはれなるやうにて强からず、いはばよき女の惱めるところあるに似たり、强からぬは女の歌なればなるべしと。然り、小町の歌はどこまでも女性の歌なり、婉柔にして纖麗、最も感じ易く、動き易き質を具ふ。感興をあるがまゝにうち出すは、業平に似て、しかも業平の詞短く意遠きが如くならず、好んで平易の語を以て、甚深の感を歌ふ。詠ずるところ、はじめは、駘蕩の春、花に狂ふ胡蝶の如く、愛の香に醉ひて、樂しき苦みに、明日のわが身も知らざりき。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢と知りせばさめざらましを。

うたゝねに戀しき人を見てしより、夢てふものはたのみそめてき。

いとせめて戀しき時は、うばたまの夜のころもをかへしてぞぬる。

女は必ずその色に對するほこりあり、みづから見苦しといふも、物の裏を見する女のさがなり。深草少將のことは信じがたけれど、春を追ひ色に狂ふ若殿原を弄して、傷心斷腸せしめしは、或はこれあらん。

あまの住む里のしるべもあらなくに、うらみむとのみ人のいふらむ。

みるめなきわが身をうらとしらねばや、かれなで海人の足たゆく來る。

しかはあれど三春の行樂はうたゝねの夢、はかなきものを頼みても、頼みがたき頼みは忽ちに去りぬ。今はた鏡中の白髮を歎けども、いかんぞ昨日の影を留め得ん。

色みえでうつろふものは、世の中の人の心の花にぞありける。

これは傳へて大江維章に捨てられたる時の詠なり（古今栄雅抄および愚見抄）といへど、維章の傳も詳かならず。

海人のすむうらこぐ舟のかぢをなみ、世をうみ渡るわれぞ悲しき。

遂に文屋康秀に三河國に行かずやと誘はれて、

わびぬれば身をうき草の根をたえて、さそふ水あらばいなむとぞ思ふ。

小町の一生とその作との一斑はかくの如し。これについで女性の和歌に秀でたるもの、宇多天皇の御息所伊勢の御あり。寛平より延喜の世を歴たる人、これまた一時の名流にしてその作も多しといへども、その才は小町に及ぶこと能はず。煩を厭いてこゝにこれを說くことを止む。

第八章　竹取物語

前數章は專ら詩歌について述べたり、さらば平安初期における散文は如何。これを說くに先だちて、散文の發達は假字の流通と相待ちたるものなることを心得おかざるべからず。

應神天皇以來(或はその以前よりも)、邦人がその思想を表記して、遠地もしくは隔世の人に傳ふるには、漢文を借り用ひたりき。されど支那とわが國とは言語

の構造に根本的の差別あれば、彼の文字を取りてさながらにわが言語の標號とせんことは、最も困難なることにして、さらぬだに國土風俗を異にすれば、漢文の習得はわが國民には苛酷なる負擔なり。されば奈良朝もしくはその以前より、識者の間には、夙にわが國の言語のまゝに思想を文字に表はさんと欲する念ありといへども、別に固有なる文字の流通せるものなければ、まづ漢字を借りて音聲を寫し、こゝに國字製造に至るべき一段階をなす。かくして古事記の音訓併用あり、宣命の助辭縮小あり、萬葉集の諸種の法を試みたるあり。さばれ一方に便宜を得れば、一方に不便の生ずるあり、一字一語の文字を更めて一字一音に用ふるや、これを一語となすには、數音を費さゞるを得ず。彼の天地は我の安米都知と增し、爭は阿良曾布と重なり、鼠算に字數の殖ゆるが如きは、いよいよ耐へ難き負擔にあらずや。この負擔を憚りて、字形を省略せんとの考の浮ぶは、當然の數なり。まづ醜を鬼、蜈蚣を呉公とするが如きより始めて、一方には眞字の劃を省くあり、一方には草書の形を和ぐるあり、その一より片假名は出て、この一より平假名は成る。二種の假名共に一時に一人の手に成りしにあ

らず、奈良朝あたりより平安朝にかけて、漸次に出來しものなることは、殆ど定論なりとす。こゝにおいて始めて國字と稱すべきものあり、その材料こそ漢字に借りたれ、これを淘汰し、鎔鑄して成りたるは、純粹なるわが國字なり。學者と稱するものは、何時の世にも衒學的なり、かれらはもとより漢文學を學問として學びたるを、いかんぞその崇重するところの漢文を捨てて、斷然假名文を用ふるを得ん、況や公用の文また漢文を用ひ、滿廷の才人唐朝の詩文に心醉する時においてをや。されど世運の移轉は衒學先生を待たず、學者が圖書堆裡に紙魚と爭ふ間に、洪益ある新國字は漸く世に普し。難波津、淺香山により「あめつちほしそら」によりて、まづ童幼はその修練を得て、遂に平安初期以來、この假名は主として婦人(もしくは中流以下の人、もしくは眞の活眼達識の士)の間に流用せらるゝに至れり。これをしも覺らず、いはゆる博士秀才は嘲りていはんとす、かくの如きはこれ俗字のみ、女文字のみ、これを以て如何の文學をか製出し得んと。事實は果して然りしか、否、これに反せり。

漢字を以て書かれたる平安初期の散文には、文學的價値あるものありや。當時

の博士秀才は詩賦をよくすると共に、また好んで論說序跋の類をも綴れり、されどかれらが畢世の力をこめたる對策も、綺語麗句の綴合のみ。都良香の富士山記、三善清行の意見封事等、これを美文として推奬するには、躊躇せざるを得ず。純文學として千歲不朽の名を得べきものは、蓋し當時には殆どこれなしとすべし。しかるに假名の弘通は近來のことなるにも拘はらず、少しく文字あるものは、容易くこれを使用すること自在なるを得ん。さればこの時、文學的思想の久しく蓄積して迸發の機を待つものありとせば、これが用に供せらるべきは、この自在なる新國字にあらずして何ぞ。かくして平安文學のうち、文學的趣味に富みたる最初の散文は、假名を以て記されたり。しかもその作品は寸簡零墨に止まらずして、文學上最も高尙なる地位にある小說なりき。この小說は竹取物語即ちこれなり。

世に稱す、竹取物語は物語のいできはじめの祖なりと。然り、竹取はわが國の最初の小說なるべし。然れどもこれは廣き小說の意義においてのことにして、これをローマンスとノーヹルとの二種に別ちていへば、竹取は人生を活寫した

るノーヹルにあらずして、事實の怪奇に興をとるローマンスの一なり。わが國の傳奇的(ローマンチック)説話にははやく夢野の鹿、浦島が子の物語あり、その他、紀記、風土記等に見えたるものもあれど、いづれも世を經て漸々に成りたる傳説にして、一篇の作家が構想を文字の上に現はしたるものにあらず。文武天皇の頃、伊與部馬養が筆に成れりといふ漢文の浦島子傳あれど、これも在來の傳説のまゝを記せる短篇に過ぎず。一作者の想像に出でたる小説は、實に竹取を以てはじめとすべし。而してその趣向は記事の變怪を以て讀者の空想を刺戟し、また滑稽を交へたるものにして、人生の自然を描き、人情の祕奥に徹するが如きは、作者が深く注意せざりしところなり。本居宣長が物語は物の哀を寫すものなりといふ説を引いて、竹取物語解にこの心して竹取をも見るべきやう説きたるが、この説は源氏物語等にこそ全く適應すべけれ、竹取はこの説のみを以て制擧せんは誤れり。

竹取物語は興味深き短篇にして、版刻の本多く、世に廣く行はるれば、細かに一篇の梗概を説くは迂なり、唯大意を一括せんか。昔、竹取の翁といふものありき。

野山に入り、竹を取りて業とす。ある時、竹の中より小兒を得たり、歸りてこれを養ふに、すく〳〵と生長して、見るがうちに年頃の婦人となりぬ、容貌見るも眩ゆく輝けば、赫耶姫といふ。世の人その美を傳へ聞きて、われ妻に得ん、夫とならんと、きほひ望めども、姫は耳にだに入れず。競爭者の多かる中に、殊に眷戀の念に堪へずして、婚嫁を迫れる皇子、公達五人あり。されど姫は思ふところありて、いづれもこれに應ぜず、強ひて難題を設けて、その事の成るまじくば、われもまた君の妻たらじといふ。石作皇子は天竺の佛の石の御鉢を求むべく、車持皇子は東の海の蓬萊山の玉の枝を折るべし。阿倍御主人には唐土の火鼠の裘を望み、大伴御行は龍の首の五色の玉、石上麻呂は燕の子安貝を取れかしとなり。五人或は寶を取らんとして成らず、或は姫を欺かんとして謀敗れて、國色無雙の處女は遂に人の妻たることを肯んぜず。帝その名をきこしめして、后に入れたまはんとの勅使下りしが、姫はこれをしも諾ひ奉らず、怦々として樂まざる色あり。翁夫婦に向ひて、われはもと月界の女僊の罪を得て、しばらく下界に下りしもの、來る中秋の望の夜には、迎を得て故の棲處に歸りなん、養育の鴻恩は忘

れ難けれども、歎く。夫婦はあるにもあられず、いかでか見ぬ世界に歸しやるべき、袂をつかみ、首にすがりてもと、かき口說き、帝も護衞の衞士を送られたれど、かひもなくて、姬は明月の光を踏んで消え去りぬ。勅諚を背くも畏し、せめては御記念にもとて、不死の藥を奉りしが、思ふこと叶はでは、靈藥も何かせん、却りて思の種なるをと、富士の山の頂にて焚き捨てたまひきとなん。これこの物語の綱要なり。

この書の題目については、多言を要せず。竹取物語、つぶさには竹取翁物語といふ。また物語といふ語を略して、竹取翁とのみいふは、この一書に限りたることにもあらず。竹取翁の名は書中の事實に取りたるものにして、この翁は一篇の主人公にはあらねど、篇首にまづ見ゆれば、取りて書名となしたるのみ。かく單簡素樸なる命名法は、古の物語にその例多し。竹取翁の名は既に萬葉集にあり、竹を取りて業とせりといふ事も見ゆれば、これはこの集より借り來れるなり。竹取の二字、普通にはタケトリと訓むこと無論なりといへども、タカトリと訓むべしといふ說あり。六百番歌合に、顯昭がタカトリといへるを、俊成の判にて

れを難ぜしかば、顯昭陳狀して、却りてタケトリといふ古例こそ見たけれと、辯じたることとあれば、平安朝の末、既に訓方の諍論はありしにて、萬葉仙覺抄にもタカトリといへり。されどこの物語の名は、從來の例によりて、タケトリといはん方、穩かなるべし。源氏物語蓬生の卷などに、かぐや姫の物語といへるは、主人公の名によりて稱したる、この書の一名なり。

竹取物語の成りたる時期は明かならずといへども、平安朝の中頃には既に盛に行はれたることは、その名の當時の物語に散見するを以ても知るべし。宇津保物語初秋の卷の下に、中秋十五夜のことをいひて、赫耶姫の名を引き、源氏物語繪合の卷には、「まづ物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に、うつぼの俊蔭を合せて爭ふ」といひて、赫耶姫およびその他の人物をも評し、下りては狹衣、榮華物語などにも見えたり。河海抄に、竹取翁は古物語なり、作者を知らずとあり。俗に源順の作なりと傳ふれど、毫も根據なき說にして、天曆時代の源順が和漢の學に長けたりといふより、古風の物語はすべてその作に歸せしめんとす。河海抄に、宇津保を源順の作といへど疑ありといひ、また俗說に落窪をも順の

作といふ。これらの三書が一手に成れるものにあらざることは、識者を待たずして知るべし。玉小櫛に、竹取物語は誰が何時の代に作れりとは、定かに知られねども、いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたるといへど、從ふべからず。むしろ田中大秀が竹取物語解の説を穩健なりとす。曰く、源氏物語に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜の以往よりありし物なるべし。元來、作物語なれば、拘はるべき事にはあらざめれど、彼物語はつくり主のいたく心しらひせられたる物なれば、徒然草にいへる、小野道風の書ける朗詠集のたぐひにはあらで、古よりもてあそびて、時代も似つかはしければこそ、相覽主、貫之主などの物せられつるよしに云はれけめ。貫之はいふまでもなく、昌泰、延喜頃の人、相覽はその傳明かならずといへども、古書に說くところによれば、また同時の畫家なるが如し。かゝれば竹取物語は醍醐天皇の頃は旣に行はれたるものにして、しかも假名が弘通して後の作なれば、昌泰、延喜を隔ることとまた甚だ遠からじと覺ゆ。

宣長が延喜以來のものなるべしといへるに反して、或は竹取物語の著作の時

代を貞觀以前に置くものあり。世に傳はるところ、松浦宮物語といふものありて、その卷末に貞觀三年四月十八日、染殿の院の西ノ對にて書き終りぬ云々とあり。この奧書を信じて、入江昌熹は竹取は物語の祖なれば、松浦宮より古かるべく、松浦宮を貞觀の作とすれば、竹取はその以前なるべしといへり。されど松浦宮は實は鎌倉時代のものなるべく、貞觀の奧書はもとより虛僞の言なれば、これを以て竹取の時代を定むるは、歪みたる尺度を以て物を測るなり。また明治二十六年の刊行にかゝる竹取物語新釋には、竹取の時代を論じて弘仁年中とす、曰く「さるは弘仁十四年四月、御諱にふれて大伴氏を改め、たゞに伴とのみ稱へしめられたりしに、此書に大伴としもいへれば、其以前のものなるべく、また弘仁元年始めておかれし藏人所の頭中將、同三年定められし六衞のつかさなど見えたるを通じ考ふるに、弘仁三年より同十四年までの間になれりしなるべければなり」と。その弘仁三年以後なりといふは異論あるべくもあらず、たゞ同十四年以前としたるは信じ難からん。大伴といへるは、即ち大伴御行のことなり。御諱によりてこの姓を伴とすべしとの制ありとはいへ、一時の令はあげ

て千百年の習を變ふべきか、また永くその令の遵ひ守らるべきか。そはとまれかくまれ、御行は阿倍御主人、石上麻呂と共に、官位顯達せし實在の歷史的人物にして、著者が空想に出でたるものにあらず。その經歷は書紀、續紀等に散見して、いづれも持統、文武の頃の人なり。竹取の著者はこれらの名を假りたるのみ、名を古人に假れば、弘仁以後の作なりとも、大伴と稱するに何か憚からん。されば新釋の說もその時代を定むるに足らず、余輩はなほ少しく昌泰、延喜に先だてりといふを正しとすべし。

書中の記事は確かに竹取の時代を定むる根據たるに足らずといへども、文體を見れば、その古樸なる風容、必ず宇津保、源氏に先だち、貫之の散文にも先だてるを知るべし。平安中世以後の散文は、殊に女性的になりて、悠長にして纖弱、絲を以て珠を貫けるが如く、盡きんとして盡きざるに、竹取はこれに反して簡潔にして遒勁なり。而してまた奈良朝の如く接續詞を濫用することも失せ、「こゝに」「こゝを以て」「故（カレ）」「また」などの詞を見ること稀なれば、ふと見れば、その文章は奈良朝よりも却りて個々分立したる趣あり。試みに竹取の一例を擧げん。

龍の首の玉取り得ずば、歸り來なと宣へば、いづちも〳〵足の向きたらん方へ往なんとす。かゝるすきごとをしたまふことと誹りあへり。賜はせたる物はおの〳〵分けつゝとり、或は己が家に籠り居、或は己がゆかまほしきところへ往ぬ。親、君と申すとも、かくつきなきことを仰せたまふことと、ことゆかぬものゆゑ、大納言を誹りあひたり。

されど弖爾波、助動詞等の使用のやゝ自由に、しかもその意義の差別の精密になりゆきたるは爭ふべからず。また言語の古くして、平安中世以來に見難きも少からず。たとへば「くど」(竈)「けご」(家子)「つく」「あなゝひ」(麻柱)といふが如き「いろふ」(彩色す)、「によふ」(うめく)といふが如き、「舟のうちをなんせめて見る」「ある國の人をえ戰はぬなり」といふが如し。要するに竹取物語はその文章より見ても、到底、延喜以來のものにあらざるべく、さりとて弘仁の詩文全盛の世、假名の弘通もいまだしき時に、かゝるものを見るべくもあらず。貞觀より延喜まで三四十年の間に出來たりと見るを、穩當なりとすべし。

竹取物語の全體の趣向は、もとより著者が構案に出でたるなるべしといへど

も書中局部の事柄は、古傳說、古典籍に憑據を求めたるもの少からざるが如く、その源に泝れば、或は印度の經文に、或は支那の書籍に、或はわが國の口碑に、これが出典を求め得べし。しかれども單に些事の似たるのみ、名稱の通ひたりといふのみ、著者は片々たる材を己が記憶に求めて、これを彩り、これを更めて、假にも剽竊の名を下すべき嫌は、力めてこれを避けたり。しかもその古事を取り、古書に據りたりといふも、著者が有意にことさらに求めたるものとするは、或は妥貼を闕くべく、平生蘊蓄せるところの、この書を編むに當りて、知らず〳〵腦裏に再現して、以て書中の一分子を構成するに至りしなるべし。さてとにかくその出典と見るべきは如何。これにつきて第一に思ひ出でらるゝは、萬葉集卷十六の竹取翁歌なり。されどこれとても竹取翁といふものと僊女とのありといふだけの等しきのみ、全體の組織は大に異なり。この異同を存せしめしこそ、即ち著者が伎倆のあるところにあらずや。

そのほか種々の出典に就きては、契沖の河社をはじめ、小山儀が抄して入江昌熹が頭書せる抄、田中大秀の解などに、引用するところ甚だ多く、あまりに煩雜

にして、中にはまことの暗合とよりほかは思はれざるも、一二に留まらず。今、その出典の重要なる二三を假りて、試みに管見を附せんとす。まづ竹の中より人の生れたりといふことは、廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品に出でたり。但しこれも竹より人の生るといふばかりの類似にて、その他の事實は、却つて柰女耆婆經に見ゆるところ、よく通ひたり。なほ物の變化して人になれることとて、解に浦島子等種々の說を引きたれど、蛇足に近からん。女を爭ふことにつきては、萬葉集の勝鹿の眞間の手見名、櫻兒、鬘兒等のことを引きたれど、こは戀する中にありがちのこと、むしろ平常の生活に材を得べくして、強ち古典をまさぐるまでもなし。佛の御鉢、蓬萊の玉の枝、火鼠の裘、龍の頸の玉などは、漢籍、佛經などに出でしもの、更めていはずともありぬべし。解にはまた男せざりし女、月の都等について、種々の古典を擧げたれども、これらもやゝ似通ひたるのみ、確かなる憑據たるべきものの存するにはあらず。今昔物語のうちにまた赫耶姬の物語あり、この書と極めてよく似て、たゞ少しく異なり、これは今昔の著者が竹取物語を暗記のまゝに（或は故意に少しく更めて）節約したるものにして、この

書こその源なれ。詞林采葉抄にのせたる說話も、またこの書より出でたるなり。そのほか長明巡歷記および國名風土記に竹取のこと見えたりといへども、これらは後人が假託の書なれば、論ずる限にあらず。

本居宣長は、竹取物語が憑據を梵漢の書に得たりといふことは、多くは諾はず。されどこれは外國の感化を耻とする、頑固なる國學者流の偏見に出で、學問に忠實に、所論の公平なる大家も、こゝに好むところに僻せしものにして、むしろその門下なる大秀が、廣く出典を網羅せしを多とすべし。たゞその出典は偶合なるも少からず、要なしと見ゆるもあれば、これには頗る取捨を加へざるべからず。かく諸書に博く捜り、普く索めて、なほいまだ古人の口に上らざるものあり、何ぞや、漢武內傳これなり。この一篇の大意は、むかし漢の武帝仙術に耽溺し、栢梁臺を設けて、しきりにその道を練る。ある時、西王母天上より降り來り、上元夫人もまた降りて、王母は五眞圖靈光經を授け、夫人は六甲靈飛十二事を與へて歸り昇りぬ。武帝恭しく宮を設けて、この書を祕藏せしかども、正しく二僊の敎誨を遵守すること能はず、遂に火災によりて書は燒け失せぬとなん。今この

書を以て竹取に比するに、相通ひたるところ少く見えて、しかもその間に見おとすべからざる類似の存するあり。彼は術を求むるにより、僊女は下界に下りて帝に敎へ、此は罪を得てこの世に來りて、翁に養はる。一は祕書おのづから火災に燒け、一は靈藥をことさらに火中に投ず。換骨奪胎甚だ巧に、不即不離の妙あること、竹取の著者が翻案に長けたるを知るべし。當時、支那の書籍のわが國に傳はれるもの、日本國現在書目錄によれば、内傳のほか、この類の書には、穆天子傳、漢武帝故事、西京雜記、神仙傳、搜神記、搜神後記、靈異記、列仙傳等あり、顯密の敎の行はれたると共に、道家の書もまた流行して、陰陽宿曜の術も盛にもてはやさるゝに至りしが如し。この時に當りて竹取がやゝ道家の臭味を帶びたるも、偶然にあらざるなり。

元來、邦人は快活の性に富みて、滑稽を好むこと甚し、惜むべし、その滑稽は古往今來ともに意義の上に見ること少くして、言語の戲弄に終ること多きを。太古以來、言語に技巧を弄することは盛に行はれて、枕詞となり、懸詞となり、滑稽も主として言語の末に渉れり。されば竹取物語にも言語の上の滑稽多くして、一

齣の末毎に世諺、通語の說明を以て局を結ぶ。妻爭ひのことを述べては、「さる時よりなん、よばひとはいひける」といひ、佛の御鉢の條には、「かれ鉢を捨ててまたいひけるよりぞ、面なきことをはぢをすつとはいひける」といひ、玉の枝の條には、「これをなんたまさかなるとはいひ始めける」といひ、火鼠の裘の條には「これをきゝてぞ、とげなきものをばあへなしとはいひける」といひ、龍の首の玉の條には、「あなたへがたといひけるよりぞ、世に合はぬことをばあなたへがたとはいひ始めける」といひ、子安貝の條には、「あなかひなのわざやと宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。……それよりなん少し嬉しきことをば、かひありとはいひける」といひ、一篇の終には、「御文、不死の藥の壺ならべて、火をつけて燃すべき由仰せたまふ。その由承りて、兵士ども數多具して、山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とはなづけける」といへり。かくの如き筆法は敢てこの書に始まりたるにあらずして、奈良朝もしくはその以前より夙く行はれしを踏襲したるに過ぎず。たとへば古事記神代の條に、「故(カレ)、今に諺に雉の頓使(ヒタツカヒ)といふもとこれなり」といひ、崇神天皇の條に「故、その麻(チ)の三勾殘れるに

よりてなも、そこを美和とはいひける」といひ、垂仁天皇の條に「故、誇にところ得ぬ玉作とぞいふなる」といふが如き、世諺、地名の説明は、紀記に甚だ多し。從來その書の正史といふを以て、これらの記事をも歴史的事實と信ずるもののなきにあらざりしかど、そはいみじき膠柱の考なり、たゞ竹取に記するところと同じく、言語を弄せし一種の滑稽にして、上古の邦人が文學における慣用手段なりしことを忘るべからず。

更に竹取物語の全體を概括して論ずれば、前にいへるが如く、種々の出典はありながら、一も原書と同一のものなく、摸擬の誹を免れて、却つて著者が取捨の才に長じたるを見る。而して滑稽の趣味の全部に涉りて充ちたることを知らざるべからず。またその組織の方法を思ふに、五人の貴紳が難題をかけられたることを記すや、前二は奸計を回らして、赫耶姫をたばからんとし、後二は實地に奇品を求めて、難儀にあへりとし、その二つづゝ各〻相異にして、第一、第二の如きは殊に輕重の差を明かならしめたり。第三は他に欺かれたることを記して、さまでその描寫に重きを置かず。また海上の話二つありながら、一は假託の言

とし、一は實際の事としたるも、著者が結構に注意せることの深きを見るに足るべし。記事は怪奇の事實を主として、讀者の好奇心に訴ふるを主としながら、その怪奇は恐るべきものにあらずして、愛すべきものなり。人間にあり得べからざることを寫せりとはいへ、なほ甚しき不自然に陷らず、人情の常規を離れざるは、わが國民の性の傾くところ、おのづからこの傾向あるなりといへども、また一面には著者が文學的材能の頗る發達したるものあるにもよれり。かの赫耶姬が、もとは月界の僊なれど、この世にある間は、いづこまでも肉あり血ある人間にして、帝と和歌を唱和し、書と藥とを捧げ奉りて記念とし、また翁夫婦にしきりに離別を悲みて、情緒纒綿たりしが如きは、棄てがたき可憐の情趣をこの傳奇體小說に與へしものなり。

第九章　伊勢物語

竹取物語と併せて、平安初期における假名文の雙璧と稱すべきは、伊勢物語な

り。この書一たび世に出でてより、寛弘前後には既に上流士女の間に喧傳したること、枕草紙、源氏物語を見ても知るべく、その後、聲價は永く墜ちず。京極黄門はその詠歌大概においてまづ古今、伊勢、後撰、拾遺を學ぶべき山を逑べ、爾來、雷同附和、この書を尊重して措かず。中世において、最も歌人文士にもてはやされたるは、古今集とこれに並んで勢語、紫史あるのみなりき。極端にいへば、當代における文學の研究は、この三書の考竅に外ならずして、その註釋批評の歷史はすなはち中世國文學の歷史なり。されば抄解の多きこと、わが國にて三書の如きはあらず。今、伊勢物語を說かんとするに當りては、まづ古來のこの書に對しての評說の一斑を知らざるべからず。

伊勢物語は凡そ百二十六節（本によりて一二節の出入あり）より成り、和歌を主として、文章は長からず。一節每に、概ね「昔、男ありけり」の句を以て筆を起す。記するところ、多くは男女相思のこと、節々孤立して直接なる關係なしといへども、一篇を通じて、おのづから一人の經歷談をなす。而してこの主人公なる昔ありける男は、その歌によりて見れば、在原業平にして、古傳もまたこの書を以て業平の自記とし、

平安朝以來、或は呼んで在五が物語もしくは在五中將日記といへり。されど篇中の歌、その主人公の詠ずとするものにして、實は業平の作にあらざるものあり。議論はこれより芽ざして、その作者および時代につき、甲論乙駁、異論多く定まれるが如くして、いまだ定まらず。

平安朝の末、藤原清輔學問博洽に、歌學に通ず、伊勢物語に就いて說くところありしは、蓋しその著袋草紙に始まる。伊勢物語髓腦といへるもの、これよりさき在原滋春の作にかゝれりといへど、信ずるに足らず。清輔と踵を接して藤原定家あり、古書に博通して、大に門戶を張る、後世歌文を學ぶもの、ひとへにその說を崇仰し、かれが校訂の書を以て斯道の定本とす。伊勢物語には、天福二年、定家みづから校正書寫して孫女に授けしと稱せらるゝ、いはゆる天福本あり。その奧にかれの手記に成れりといふ文あり、曰く、

抑伊勢物語根源、古人說々不同。或曰在原中將自記云々、因茲有其謙退比興之詞等。又曰、伊勢筆作也、（或生年十三、幼書之）似彼家集文體、故號伊勢物語。以此兩說案之、更難決之。心中秘密、身上興言、他人推而難注之、以之可謂其自書歟。但疑萬葉古風

中、多載撰集歌、仁和聖日之間、粗記臨幸之義、此等事又不審、伊勢家集、其端文體偏以同之、是又見先達舊記、庶幾其體歟、爾不知之。加之此物語名字、非彼筆者、何稱伊勢乎。或說云、爲狩使下向伊勢、仍有此名、其說又難信。始則載南京春日之詞、次又註西對夜月之思、富士山雪、武藏野煙、凡非伊勢國事、多以爲此物語肝心。仍兩說共有不審、古事只仰而可信。又或說、後人以狩使事、改爲此草子端、爲叶伊勢物語之道理也。件本猥籍奇恠者也、伊行所爲也、不用也。先年所書之本、爲人被借失、仍爲備證本、重而校合也。

爾來、文學萎靡振はず、自由なる態度を以て熱心なる研究をなすものは、殆ど一人もこれあることなし。古註はたゞその名を聞く、知顯抄は幻怪の囈語なり、禪閤兼良は應仁戰亂の際に博學多識を以て鳴れるもの、著述少からず、愚見抄を撰して、前二書の妄を辨ず。ついで三條西實隆また戰國稀有の篤學にして、宗祇法師と計りて二條家の衰廢せる歌道を再興し、大に定家の說を祖述す。伊勢物語に關しても、愚見抄の紕繆を正し、こゝにいはゆる「當流」の說を立つ。數世相傳へて、その說を後昆に示せるもの、細川幽齋の闕疑抄あり。幽齋は、職國の末造、歌

文の道絶えんとするを、わづかに一木に支へて、江戸復興の世に傳へたるもの、すなはち新舊兩説の過渡にあるものにして、當流の説は擧げてその抄に具備せり。幽齋に學んで斯學を民間に弘布せる松永貞德の門に、北村季吟あり、奮ひて諸書の註釋に盡瘁し、編述浩瀚以て末學の人の栞とす、敢て創見あるにあらずといへども。當流掉尾の力を振ひ、たとひ孟浪杜撰の弊多しとはいへ、口授祕傳と稱せられたる舊説を世に公示したるは、ひとへに季吟の功なり。その拾穗抄は闕疑を主とし、師説によりて、傍ら愚見抄を參考したるものなり。

さらばこれらの舊説の立つるところは如何。中古、因循姑息の弊、たゞ謹んで定家のいふところを守りて、動かず、變ぜず。その諸説を概括していへば、天福本の奥書の二説を調和せるものにして、すなはち伊勢物語は在原業平の自記にして、伊勢の御の補へるものなりといふにあり。何を以てか業平の自記といふ。(一)謙退卑下の詞あり、「かたゐ翁」「歌はよまざりけれど」「もとより歌のことはしらざりければ」「さる歌のきたなげなさよ」などの如し。(二)男女の間の祕事、他人の憚るべきことをも記せり。(三)顯昭の袖中抄等の説によれば、朱雀院の塗籠に、業平の

白筆のものありといへるをや。さてこれを伊勢の御の補へりといふは、その題目により、また業平歿後、芹川行幸の折の行平の詠歌を記せるなどのことによりてなり。かゝればこの書は業平の自記に伊勢のかきそへたるなりといひ、更に進んでこれを七條后溫子に奉れるなりとす。

江戸時代は中古の頑迷固陋なるに似ず、學問文學みな自由研究の途をとりて日進月歩し、祕傳口授的舊說は非常なる打擊を受けたり。季吟と同時に契沖阿闍梨あり、古文を剖析批判して、こゝに國語學界に一新紀元を立つ。その勢語臆斷も、さすがに言語章句の解釋には、舊說を改むること多しといへども、大體の批評については、詳說することなかりき。荷田春滿ついで出でて、國學を起し、賀茂眞淵これを祖述して、天下を風靡す。曰く、古の道を知るには古の書を讀むべく、皇國固有の大道に志すものは、つとめて漢學佛敎の臭を避くべしと。かくして二人の伊勢物語におけるや、彼には童子問あり、此には古意あり。その後、古學の流行に伴ひて、註釋頻々として出づといへども、或は春滿、眞淵の新說を奉じ或は舊說を折衷するのみ、みづから進んで細密なる研究を遂げ、嚴正なる評論

をなしたるは、これあらず。さてこの新說の要とするところは、舊說に業平が作り、伊勢の補へりといふを駁して、伊勢物語は、編述の時代、後撰集に次ぐべきものなり、作者は知るべからずとす。その證は、物語のうち、芹川行幸の折の行平の詠歌あるのみならず、在原元方、紀友則、壬生忠岑、なほ下りては天曆頃の橘直幹の歌をさへのせたり。また業平に名立ちし二條后は陽成天皇の母、天皇は讓位の後、天曆の初までましくたれば、その間に母后の密事を記すべきにあらずといふにあり。

しからば伊勢物語はいづれの時代における何人の作ぞ。更にこれに關する議論が據るところの條々を擧げて、以て新舊二說の正否如何を問はしめよ。

一、謙退卑下の詞ありといふこと。　これを以て舊說は業平の自記とし、新說はこれを是認せず。嚴格にいへば、これはいまだいづれの說をも確定するに足るべき證據とはなしがたしといへども、余はむしろ舊說に左袒せんか。業平の自作に見ゆるやうにかきなしたるものゆゑ、後人のかけりとはいへ、謙退卑下の詞なくば、いかで理と思はせ、物の哀をも感ぜしむべき。さるをこれら

の詞ありとて、直ちに業平の筆なりとするは、迂愚もまた甚しとは、眞淵等の論ずるところなり。されど當時業平は歌人の間に非常の尊敬を博し、土佐日記の短篇にさへ三たび引かれたるほどなれば、かゝる世に、いかなるすね者か、思ひ切りて在五中將に扮して、「かたゐ翁」または「さる歌のきたなげなさよ」など言ふべき。業平を駁する人ならば知らず、十分なる同情を表しながらかくもいへるは、或は物語文の常なりといはばいへ、先人崇拜の世には適せず。余はむしろこれを以て放膽なる業平の筆なるべしとす。さはいへ業平の筆なりと斷言し得るにはあらず、さるべしと思ふのみ、これを以て正否を決する左券とするに足らざることは、前にいへるが如し。朱雀院の塗籠に業平自筆の本ありきといふが如きは、今、誰かその是非を知らん、議論のほかに置いて可なり。

二、表はすまじき祕事をかきたること。　舊説はこの事あるを以て他人の筆にあらずとし、新説はこれに反して、これあるが故に業平にあらずとす。もしこの書の著者を以て業平とせば、おのれが惡事を表はすやうのことはすまじ、

わけておほけなくも二條后と私通せしなどのことを記しおく理あらんや後世の嚴重なる批判をもうけ、子孫にも見らるゝものをとは、新說に論ずるところなり。さりながら謙退卑下の詞あるを以て、業平の作なりといふを淺薄なりとせば、この說はなほ〳〵淺薄なり。かくの如き說は江戶時代の儒學的道德論に基きたるものにて、漢學を排斥する國學者流のこれを唱ふるは、一般の時勢の渦中に陷りて、自家撞着を覺らざるなり。おのれが惡事をかくまじきならば、他人がまた崇奉して措かざる人の惡事を表はさんや。思ひ見よ、後世の罪惡とする行爲も、當時はいかに見たるか。今の準繩を以て昔を測らんとすれば、誤ること多し。總論にもいへるが如く、光源氏が薄雲女院を戀ひ、朧月夜內侍に名たちたるにも、紫式部は深き同情をよせ、宇津保物語の東宮はその妃の貴宮が仲忠に文通するを咎めざりき。ましてて世をすね、情に任する業平が、あるとしもなく、なきとしもあらぬ筆のすさみに、何を憚りてかかき散らさざらん。これは二條の后なり、誰なりなど註せるは、もとより後人のすさみなるをや。さればこの密事を記せりとて、業平なりともしがたく、ま

た業平ならずともいひがたし。陽成天皇在世の間の作にはあらずなど、眞淵が說けるは、狹いかな。

三、伊勢の補へりといふこと。　こは書名により、また伊勢家集と文體の似たりといふによりて、舊說の主張するところなり。されど新說はこれを辯じて、この類似を唱ふるは、伊勢の作といふ妄說を信ずる人の、似ざるをも似たりといふなり、馬を鹿といふに異ならずとす。この辯は說き得て當れり。かの伊勢家集や、その發端の體裁は少しく伊勢物語と似たるところあるが如しといへども、しかも二者筆法を異にし、男女の別さへ判然たり。いかんぞ伊勢物語が伊勢の御の手にかゝれるを信ぜんや。まして七條后溫子に奉れりといふ說は、伊勢の筆といふを虛なりとせば、いはずともまた妄誕の言のみ。果して然らば、何を以てこの物語を伊勢と名くるか、こゝに題號の論は起る。古來この題號についても、所論區々にして定まらず、その伊勢の筆になれりといふ說を措いて、なほ左の數論あり。煩を厭はず、これを記さしめよ。

(い)伊勢物語は僻言物語の意。　伊勢人は僻言すとは當時の諺なり、堀河次

郎百首に藤原忠房の歌、
伊勢ならばひが言ぞとも思はまし、大和なるてふ美作の池。
夫木抄に鴨長明の歌、
伊勢人はひが言しけり、津島より甲斐川ゆけば泉野の原。
山家集に、
伊勢人はひが言しけり、さゝ栗の笹にはならで柴にこそなれ。
とあるを以て知るべしと。さばれ物を定むるには、今の情を以て、よくいひ得たりと斷ずるが如きことをなさずして、委しくこれを當時の相似たるものに比較して、その正否を檢すべし。平安朝の物語の一般の命名法を見よ。竹取の翁、宇津保、落窪、源氏、また今は傳はらざれど、交野の少將、大津の王子の如き、概ね篇中の人物または場所などによりて、たやすく名を取りたるもの、或は卷中の歌詞によりて、御津の濱松など稱したるもあり。俳言といふ意を隱し、解釋を待ちてはじめて會得するが如き謎やうの題號は、當時もその後も用ひたることなし。豈この物語一つに限りて、この異類の名

あらんや。

(ろ)伊勢の意を音の延約轉通によりて解釋する說。世に眞字伊勢物語を傳ふ、この書に題名を妹背物語と記せるによりて、この義を取り、また他に伊勢物語はえせ物語なりとするものあり、されどこれらの極端なる語學的說明は無意義にしてむしろ滑稽なり、事々しく辯ぜずともありぬべし。

(は)伊勢齋宮の記事より書名は出でたりとする說。この說は更に二途に別ちて解せざるべからず。すなはち第一は齋宮の記事を一部の主眼なりとするもの、第二はこれをはじめは物語の劈頭第一にありきとするものなり。第一說は、旣に天福本の奥書にも說あるが如く、南京春日の詞、西對夜月の思、富士山の雪、武藏野の煙、いづれも篇中肝心の記事、人をして傷心の情に堪へざらしむれば、ひとり齋宮のことを以て主眼として、全篇の名とすべき謂なきなり。第二說も、かの奥書に、世尊寺伊行の所爲なり、不用なりと斥くれども、この駁論はいまだ深く信ずるに足らざるなり。袋草紙には、和泉式部本は齋宮のことを以て最初に書けりとすれば、そのはじめかゝ

る順序の本ありけんやも知るべからず、現今の順序の如きは、或は後世に至りて變更せられしなるべし。殊に初冠の章は、多くはこれを卷初に置くを正說とすれども、源融の歌を引用したるといひ、その文體のやゝ新しく見ゆるといひ、却つて後人が攙入になれりとも思はるゝをや。されば余はむつかしき解釋をこの書名に與へずして、安らかに齋宮のことの最初にありきといふ說に從はんとす。

四、後撰集以後のものなりといふこと。　新說を唱ふる人が殊に主張し、また舊說の人も既にその實あるを知りて、これを疑へるは、業平歿後のことの卷中にあり、また生前のこともありといふにあり。まづ生前のことといふは、篇中第二節に「奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定まらざりける時」とあるをいふ。されど業平が書きたりとて、まじめなる日記にもあらず、わが事、他の事を擇ばず、萬葉集の歌をさへわがものの如くに見せたりとすれば、貞都以後久しからぬ折などと、時を僞りて記せりとも、これを以ていかんぞまじめにそのいはゆる久しからぬ折の筆なりと妄信すべけんや。次に業平歿後の

こととは、芹川行幸の記事、そのほか三四の和歌をいへるなり。されど眞淵の如き、古今集にさへ後世の攙入ありといひながら、伊勢物語には、「これは二條の后の云々」などある註釋的記事をのみ、後人の裏書の混入せるものと辯じて、首尾全き一節にも攙入ありといはざるはいかにぞや。蓋し春滿、眞淵等はこの物語の戀愛の記事多きを厭ひ、またその和歌の純然たる平安朝の風體なるを喜ばず、萬葉調に私淑するあまりに、これに異なる作品の時代を實際より遲く考へて、さてこそ後撰に次ぐべきものなりとの先入的結論を得、芹川行幸の記事等を以てその論を裝ひたるものなれ。されど眞淵は創作の才こそ許すべけれ、評論の法は奇抜なれど細緻嚴正ならずして、おのづから獨斷偏癖に流れ、遂に高足宣長の公平綿密なるに及ぶこと能はず。余は芹川行幸の記事等を以て、伊勢物語の時代を斷定すべき條件とするに躊躇して、この書は後人の攙入少からざるものなることを揚言せんと欲す。そのいづれか原文にして、いづれか攙入せるものなると問はるれば、いまだ一々明確にその眞僞を指點しがたしといへども、今も引かれたる芹川行幸の一節(第百

十五段の如きは、斷じて後人の攙入とせん、そは記載の事實によりていふにあらず、その文體を見よ、はじめに「昔、仁和の帝芹川に行幸したまひける時、なま翁の今はさること似げなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、云々」と長くいひ續けたるは、他の文と全く體を異にし、結末に「若からぬ人は聞きおひけりとや」といへる「とや」の如きも、かの裏書の混入せるものにありがちの語なるにあらずや。されば現存せる伊勢物語は、後人の攙入せるところあるものなるは許すべし、しかもその原本をも併せて、後撰集以後のものとするは、玉石を併せて棄て去るに齊しからずや。

かくの如く論じ來れば、事實の研究は一も伊勢物語の時代を定むるに足らず、しかるを先人多くはこれに拘泥して辯證す、甲論じ、乙駁して、しかも定論の結着するを見ざるなり。何ぞ更に方向を轉じ、文章について考へ、これを當時の他のものと比較して、その時代と價値とを定めざるや。

議論はしばらく措きて、更に伊勢物語を一讀すれば、その文のいかに簡潔にして質素なるよ。平安朝の文體は、貫之の頃より、漸く修飾多く、纖麗にして絢爛な

らんことをのみ務めたるが、竹取物語と伊勢物語とはこの弊なく、却つて簡素を主とすれば、土佐日記より古かるべし。而して簡素なる點においては、伊勢のかた竹取よりもまさりたれど、その書の種類の異なるより、文章もおのづから異ならざるべからざれば、強ち伊勢を竹取より古しとも定めがたく、概するに二者ともに延喜以前のものなるべし。果してしからば、伊勢物語の作られたるは、大やうは業平の時代なり、而してその歌は概ね業平の詠にして、傳へて在五中將の日記ともいへば、これを業平とせんこと、當らずといへども遠からざるべし。

もとより文體の異同は、作者の異同により、これを以て時代の前後を判じやすからずといへども、大體の區別はまた時代によりて識別せられずんばあらず。奈良朝までは歌文ともに極めて簡素なり、祝詞、宣命、古事記の文、もしくは長歌の如き、脈絡長く續けたるもありといへども、その句法は甚だ單純なり。萬葉集の歌には、短歌も二三節に斷れたるもの多し。されば平安初期の散文は、この風を受けて、文章極めて短く、きれぎれに斷れて、いふところも甚だ簡短なりしを、

貫之以來、やうやく思想と文章と共に複雜に、特に女性の文に至りては、優長に流れたり。竹取物語の文に曰く、

翁、うれしくものたまふものかなといふ。翁年七十に餘りぬ、今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女に合ふことをす、女は男に合ふことをす。その後なん門も廣くなり侍る。いかでかさることなくてはおはしまさん。かぐや姫のいはく、なでふさることか爲はべらんといへば、云々

伊勢物語に曰く、

昔、わかき男けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、おもひもぞつくとて、この女を外へ逐ひやらんとす。さこそいへ、まだ逐ひやらず。人の子なれば、心の勢なくて、得留めず、女も賤しければ、すまふ力なし。さる間におもひはいやまさりにまさる。にはかに親この女を逐ひ棄つ。男血の涙を流せども留むるよしなし、率て出でいぬ。云々

その文の簡潔質素なる、これを以てその一端を知るべし。そも／＼二書の文は、これを修飾すべき形容詞、副詞も多からず、接續詞も少く、奈良朝までに多く用

ひたる「こゝに」、「こゝをもて」、「故（カレ）」、「又（マタ）」などは稀になりゆきて、「さて」などの簡單なるものあるのみ。且爾波はもとより奈良朝よりも數多く、使用も自在になりたれど、なほ延喜以後の如く饒多ならず、文脈の理路に關するものはもとよりこれあれども、文勢の弛張に關するは甚だ少し。「なん」最も多く、「ぞ」も「こそ」もあれど、土佐日記の多きに比すべくもあらず。過去の助動詞の「き」（し、しか）は伊勢物語に用ひず、古今集の和歌の端書も然り、竹取物語は草紙地には「けり」（ける、けれ）を用ひ、對話には「き」を用ふ。要するに伊勢の文は簡古を以てすぐれたるもの、その内容も併せて單純に、痛切なる感情を直白して飾らず。敢て竹取の如く、外國文學の影響あるにあらず、強ひてこれを求むれば、その歌に人生を朝露とはかなみ、落花と惜み、もしくは鷄卵（トリノコ）を十づゝ十は重ぬともといひ、行く水に數かくよりもといへるが如き比喩を用ふることにて、これらは文選等に得たるものといはんか。

伊勢物語は、記事の神異なること、竹取物語に等しきものあるにあらず、結構の整美なること、源氏物語の類にもあらず、和歌を主眼として、その前後の始末を

しるしたるものにて、或はこれを以て一の歌集に擬するものあれども、それは穏かならず。その文は歌の小序たるに止まらずして、別に趣味饒多なる談柄を添へ、歌文相待つて、その妙いふべからず。毎篇個々獨立して、組織の聯絡なしといへども、なほ多情多涙なる主人公の性格は前後を一貫して、片々の珠を繋ぐ絲となる。直ちに人性の奥に突入して、虚飾なく、餘談なく、眞情流露して、人の肺腑に入るもの、これをこの物語の長所とす、

竹取物語の條において述べたるが如く、わが國古代の文學には滑稽の分子多く、平安第二期までは殊にこの傾向を帶びて、沈鬱悲痛の趣少し。紀記の歌については一言せり、萬葉集卷十六また諧謔の詠多し。竹取物語も前陳の如く、古今集には俳諧の一體あり。土佐日記は屢々滑稽の言を弄し、落窪物語には可笑のことわけて多し。伊勢物語また時に滑稽の事柄なきにあらずといへども、こはわけて擧ぐべきほどにもあらず。たゞ著者がその和歌を詠ぜし由來を記するに當りて、機智を弄し、別に假設の譚を設けて、強ひて實際に違はしめ、讀者をして覺えず案を拍ちて呵々大笑せしむるもの、これまた一種の滑稽にして、これを

この物語の一の特性とす。たとへば第五十段の歌、

わがうへに露ぞおくなる、天の川、とわたる船の櫂のしづくか。

とあるは、古今集にも出でて、その實は七夕の夜、衣の袖の冷やかなるに、天を眺めての歌なるべし。しかるを物語には、「かくて物いたう病みて死にいりたりければ、面に水灌ぎなどして、息出でて」と作りなせり。次の段に、

五月まつ花たちばなの香をかげば、むかしの人の袖のかぞする。

とあるも、古今集に出で、まことは庭の面の花橘の追風に懷舊の情を述べたる歌なるべきを、物語には、とりて一個の小話に編みたり。また第八十二段の歌、

あかなくにまだきも月の隱るゝか、山の端にげて入れずもあらなむ。

といふは、物語にも、古今集にも、惟喬親王の退座を惜み、入る月に託してこれを留むるものとす。されどその實は單に月を惜める詠にほかならざるを、寓意あるものとせるは、例の伊勢物語の作意に出でたるを妄信し、これによりて、古今集の小序をも改めたるなりとは、香川景樹の辯ずるところなり。

かくして伊勢物語には、和歌とこれを作れる事情とを事實のまゝに記せると

ころもあり、ことさらに事情を揑造して、興味を添へたるところもありて、後世より辨じ易からず。たゞにこれのみならず、詠歌は業平の歌もとより多しといへども、他の萬葉集その他に出てたる歌をも取り來りて、主人公すなはち業平の詠とす。これを取れるや、殆どもとのまゝなるもあり、少しく變更を試みたるもあり、また二首を一首に調合したるもあり、放膽洒落、彼我の別を沒したるは、作者が興に乘じ筆に任せて揮灑したるに因る。これによりて旣に評者を迷はしむるに足るを、なほ後人がその後の歌を攙入せるあり、眞僞混交して、以て區區の論を起さしむ。難いかな、玉石を識別すること。

しかれどもなほ更に伊勢物語を熟讀せよ。その文の、詞簡にして意幽に、感懷の痛切なること、業平の歌とその軌を同じくするを見れば、この一篇をまた在五の作と推すも、蓋し大過なかるべし。嗚呼、業平の長所はすなはち短所なり、感情の横溢するに任せて、想を練らず、詞を琢かず、眞率に過ぎて、時には兒童の言の如くなるもあり。惜しいかな、天才は刻苦經營の功を積みがたく、わづかに眞理の一面を發揮して止むもの多し、業平もこの弊に陷りて、遂に後進貫之をして

別に大名を揚げしむ。さはいへ在五中將の名の永く後世に喧傳して朽ちざることを思へば、業平もまた偉人なりといふべし。而してその名の後世に喧傳するは、その歌のすぐれたるにもよるべしといへども、主として伊勢物語一篇の存するによらずんばあらず。この一篇は傳はりて後の國文の模範となりぬ、源氏物語の如き大著もまたこれに得るところありしが如し。業平が九十九髮の嫗を愛することを記して、「世の中の例として、思ひおもはぬ人もあるを、この人はそのけぢめ見せぬ心なんありける」といへるは、やがて轉じて光源氏の品性と化生したるものにあらずや。かくの如く後世に影響せしことを思ふに、平安朝の半ばになり末に移るに從ひて、風俗益〻輕靡に流れ、和歌も戀の歌のみ尙び用ひらるゝに至りしが如き、業平もまたその責に任ぜざるべからざるか。

第二期　延喜天曆

第一章　古今和歌集

今や平安朝の第二期に入りぬ、第二期はいはゆる延喜、天曆の聖代にして、その文學的特性よりいへば、勅撰集時代といふべし。これをまた前後の二小期に別つべく、前半はすなはち延喜時代、後半はすなはち天曆時代、彼は醍醐、朱雀二帝の間を併せいひ、此は村上、冷泉、圓融より花山在位の頃までをすべ稱す。天曆時代のことは後に說くべし、こゝに延喜時代と前代との差別について思ふに、弘仁の詩文全盛は一轉して延喜の和歌勃興となりしなり。而して貞觀、元慶はその過渡の時期にして、詩文は甚だ盛なりしとはいへ、一方には和歌に一身を委ぬるものの增加し、儒流の子孫の歌人に轉ずるものもありし由は、ほゞ前に述べたり。かくて延喜時代に至りては、漢學者、詩家踵を接いで歿し去り、文壇はうたた寒林枯木の感なきにあらず。前代の碩儒にては、醍醐天皇即位の後、間もなく

菅原道眞は奇禍にあひて、謫所のうちに薨じ、大藏善行、紀長谷雄、三善清行等しばらく凋殘せりといへども、年老い志沮みて、手腕を揮ふこと能はざるに、新進卓越の士はいまだ出でず。年少氣銳のもの、長谷雄の子に紀淑望あり、音人の孫に大江朝綱、同維時ありといへども、歌壇の盛運に抑へられ、蟄息して機を待つのみ。もとより詩文の蔑視せらるといふにはあらず、延喜十七年、朱雀院に行幸あり、文人を召して詩を賦せられしなどの例を見るといへども、なほ朝陽ことさらに壓せんとこそせね、星辰おのづから影を潛むる習、君も臣も和歌に熱中すれば、詩文の勢力を失へること、當然の數なりといふべし。

そも〳〵いかにしてこの和歌勃興の勢を釀成せるか、いふまでもなく、國民の自覺はその主因たるべし。由來わが國民は外國の影響を受けて、はじめはしきりにその文化に倣ふといへども、幾ばくもなくこれを同化して、自家藥籠中のものとし、後の進歩は却つてその本國に超えゆくこと多し。大化以來、制度文物すべて唐に則れるが、平安奠都の後、年旣に久しく、彼は戰亂相つぎ、我は文化漸く熟しては、支那崇拜の念も薄らぎ、自國の別に一地步を占むることを自覺す

るに至りぬ。遣唐使の廢止の如き、これを以て延喜時代における詩文の衰微の主因とするは早計に失すといへども、この事實はすなはち今やかの紛亂せる大國の學ぶに足らざるを信ずるに至りし明證なり。而して漢字の使用は先天的に不便なるに、既に自在なる假名の行はるゝあり、學者文人が習慣と虛飾の心とよりことさらに險難なる文字を用ふるほかは、誰か好んで便利を棄て不便に就くべき。醍醐天皇勅して前園の花草の名を錄せしむ、大江維時國字を用ひてこれを書す、天皇これを詰りたまふに、維時答へて申す、漢字を用ひば、恐らくは解し難からんと、維時はよく物の本末を辨へしものなり。この解し難き漢字を用ひて、詩を作り文を綴るとも、人を驚かすことはすなはちあり、一片の生氣の字句のほかに活動するはいまだし、なほ簡短易解の和歌が却つて直ちに人心を刺戟するに如かず。加ふるに平安朝は婦人の最も勢力ありし時代なり、婦人には前の有智子內親王、後の淸少納言の如きもあれど、さすがに女は女なり、漢學の力は薄く、文字も一般に假名を用ふ。この婦人と相對して、所思を述べ、戀愛を謠ひ、贈答唱和、いはゆる花鳥風月の使とせんとならば、婦人の解しやす

く學びやすきものならざるべからず。これすなはち詩文が學問として、進士及第の方便として存すれども、一般には勢を失ひ、ひとり和歌の隆々として興りし所以ならんか。

醍醐天皇は漢詩の聖作を見ずして、和歌は後撰集以下に少からず、思ふに好尙の彼に存せずして、此にありしなるべし。蓋しその叡慮に謂へらく、嵯峨天皇既に漢詩の勅撰あり、和歌またこれなかるべけんやと、こゝにおいて古今和歌集の出づるあり。從來、和歌は男女の贈答に資し、一時遣悶の具たるに過ぎざりしが、この時に至りて文壇最重の地歩を占めて、その正當なる價値は認められぬ。和歌の聲名はこの勅撰によりて定まれるなり。

醍醐天皇勅して大內記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河內躬恒、右衞門府生壬生忠岑をしてその家集を獻ぜしめ、また古來の歌の萬葉集に入らぬをも集め、承香殿の東なる所においてこれを選ばしむ。撰成る、名づけて續萬葉集といふ。重ねて詔あり、これを部類して二十卷とす、延喜五年四月十八日、業終りて奏上す、名づけて古今和歌集といふ。こゝに萬葉集に入らぬ歌を集むといへ

ども、既にその中にありて、またこの撰に入りたるもの、七首あり、思ふに編纂に精を闕きたるが爲なるべし。また延喜五年撰定すといへど、同七年の大堰川行幸の折の歌などの載りたるは、追つて加入せしものなるべく、さして怪むに足らず。一篇を別ちて春、夏、秋、冬、賀、離別、羇旅、物名、戀、哀傷、雜歌、雜體(長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所歌、東歌)と部類し、爾來殆ど勅撰集の定例となりぬ。この部類は萬葉、文華秀麗等を折衷して作りたるものなるべし。そのうち四季と戀との歌の、この集および後の集にいかに多きかを見よ。四時の遊觀、纏綿たる戀愛は、暇多かる大宮人が一年の行事の過半を占めて、詠歌の好題目たりしなり。

古今集を讀んで、更に萬葉集を繙くもの、誰か二書の間に犯しがたき陷穽の存するを認めざらん。後世の古今以後の書にのみ眼を曝せるものは、殆ど萬葉を解しかぬるばかり、二書は相懸隔せるなり。但しこれはしも一概にいふべからず、萬葉もとより單一の風にあらず、古今また種々の調あり、同一人の作にても、時を異にすればいふところも異なるものを、いはんや時と人と共に異なるをや。萬葉も後なるは古今に近く、古今も前なるは萬葉に近く、各自のうち既に變

遷の見るべきものあり、彼と此との間に急劇なる變化を起せるにはあらず。さはいへ概括して論ずれば、二書の間に大體の差別を立てざるべからず、その形においても、その想においても、和歌は著しき相違を生じたるなり。その目をあげてこれを略説せしめよ。

一、句法の變遷。　萬葉は五七の調にして、古今は七五の調なりとは、苟しくもわが文學に指を染むるものの、誰しもよく知れるところ、ことさらにその例を示すにも及ばず。更に五字と七字とを分割して、句法を細論するものありといへども、いまだ定説あるにあらざれば、こゝにはたゞ五七の七五に移れるをいふのみに止めんとす。されど續日本後紀にあげたる嘉祥二年三月、興福寺の大法師等が仁明天皇の四十の賓算を賀し奉れる長歌は、既に奠都の後、年久しといへども、なほ五七の調にして、その中に折々七五に轉ぜんとするところあるを見る。「かぎりなく、命ありしは、　この島にこそ、ありけらし」といひ、「申しあぐる、ことの詞は、　この國の、本つことばに、逐ひよりて、　もろこしのことばをからず」といへるが如し。古今の中なる、題しらず、よみ人しらずの長歌も、また過渡期の

ものとおぼしく、五七と七五と和混ず「逢ふことの、稀なる色に思ひそめ、わが身は常に、天雲の、はるゝ時なく、富士の嶺の燃えつゝとはに、思へども、逢ふことかたし、何しかも人を恨みん」といひて、後には「けなばけぬべく、思へども、閻浮の身なれば、なほやまず」といへるが如し。

句法の變化は何故に起れるか。その原由に就いて、種々の說をなすものありといへども、いまだにはかに首肯すべからざるもの多し。さるが中に最も根據ありと思はるゝは、和讃の調に倣へりといふにあり。今樣歌は一般に七五の四句を列ぬるものなり、この今樣がそのはじめ和讃より出でたりといふことは、既に假字本末にも論じたるところ。その大意にいはく、天竺に梵讃とて佛教の旨を演べたる梵語の讃歌あり、その一體にわが國の和讃といふものの句調に似たるが多し。これを漢人のおのが國の語に譯し、梵音の句調に叶へ作りて、やがて聲明に學び唱ふるを漢讃といへり。空海の眞言を傳ふるや、また漢讃の例によりて、いろは讃歌を作れるなるべし、これすなはち和讃の起原ならんか。その後、和讃大に行はれ、それが口なれたるより起りて、今樣の一體は生じたるなる

べしと。論者はこの説よりなほ進んで、和讃、今様の句法が和歌に感染し、すなはち七五句の行はるゝに至りしなりとす、蓋し傾聽するに足る說なり。しかりといへどもなほ論じゆけば、和讃、今樣を作るに、必ずしも七五の四句ならずともあるべし、梵讃にも旣にわが國の從來普通の歌の調なるがありしをや。しかるをなほ七五の句を列ぬるは、これぞ和歌の句法の變遷の原因たるにあらずして、却つてこの變遷と共に時潮の結果なるかも知るべからず。本末は誤り易し、孰れか因たり果たるは知り易からざるなり。旣に和讃の作られざる前すなはち萬葉時代の和歌にも、長歌にこそその例は殆どなけれ、短歌には三句めに句を切りて、おのづから七五の調をなすもの少からず。

たけばぬれ、たかねば長き妹が髮、この頃見ぬにかきれつらむか。

石見のや高角山の木の間より、わがふる袖を妹見つらむか。

など處々に見ゆれば、必ずしも和讃ありてのち七五の調の和歌は出でたりといふべからざるや明らけし。されど三句切の和歌は、殊に古今に至りてその數增加したることを思ひ、この增加の今樣の流行に伴ひたることを思へば、二者

の關係は忽諸に附すべからざるなり。なほこの句法の變遷は思想の變遷と如何に關係したるか、朗詠する折の樂律と如何に關係したるかについては、詳細なる研鑽を歷ざるべからず。

二、長歌の衰廢。 長歌は萬葉の特有なり、古今に至りては、全篇千餘首のうち、僅かに五首を見るのみ、その後も遂に恢復すること能はずして、永く短歌のみ行はるゝこととなりぬ。古今以下の集にのせたる少數の長歌も、たゞ句格の流暢なるばかりにして、情熱なく、空しく詞を飾るに過ぎざるは、形骸のみわづかに遺存せることを示す。何故にかくの如く長歌は一跌また振はざるに至りしか。支那にては古詩は變じて律となり、更に絕句となりぬ、わが國にては長歌はつづまりて短歌となり、また切れて發句となりぬ、想を長くして形を短くするは、東洋詩式の通性なるか。さはいへ簡單なるこの言を以て止まんは、あまりに汎漢に過ぐ、何故に平安朝に至りて長歌は衰微せしか。

いづれの國を問はず、太古の歌は疊句、對句を列ねて、歌調を整ふるもの多し、わが國の歌またその數に漏れず、はじめはもとより謳吟したるものなれば、古代

の單純なる心には、内容の構成よりもむしろ言語の組織に重きを置き、類似し、對比すべき語句を排列して、丁寧反覆、聽者をして、十分に、愉快に、歌中の意義を納得せしむ。見よ、太古の和歌にいかに疊對の句多きかを。輕皇子の詠に曰く、

こもりくの泊瀨の川の、上つ瀨に齋杙をうち、下つ瀨に眞杙をうち、齋杙には鏡をかけ、眞杙には眞玉をかけ、眞玉なすあが思ふ妹、鏡なす吾が思ふ妻、ありといはばこそ家にもゆかめ、國をもしぬばめ。古事記

爾來、この法を慣用し來りて、萬葉のうちにも、古風を尙べる人麿の如きは、殊にこの句格を喜べり。赤人に至りてはやゝ少けれども、なほ屢これを用ひて莊重の體をなす。しかるに更に世を經ては、和歌を謳吟すること稀になり、長歌も聲に聞くよりは目に見るものとなり、また上代單純の心は漸く複雜に移り、もはや句を疊み句を對しても感興を引かず、古今の長歌の如きは、たゞかけ詞に句を續け、迂餘曲折、遣水の叢中を流るゝが如くなりて、大に上古と句格を異にせり。たゞしこれは古今のみにあらず、旣に山上憶良、大伴旅人父子なども、意義を主として、歌調を散漫ならしめたりき。さるが上に平安朝に入りては、詩文の勃

興するありて、和歌はこれが爲に迫害せらる、短歌こそなほ形式の輕便なるによりて、世に用ひられたれ、長歌は著しくこの迫害を受けたり。仁明天皇の四十の寶算を賀して興福寺より長歌を奉れるや、續日本後紀の編者は記して曰く、季世陵遲し、斯道已に墜つ、今、僧中に頗る古語を存す、禮失はるれば、則ちこれを野に求むと謂ふべしと。思ふに平安の帝都は、流行に追はれて早くも古風を失ひたるに、少しく都會の地を離れては、却つて過去の遺風を傳へたるものか。しかれどもこの奉進の長歌とても、冗漫を極め、律語と散文との別を失ひて、いづれともつかぬ異形のものたるを免れざりき。

かくて仁明天皇の後、貞觀、元慶の頃に至りては、短歌こそ業平、遍昭等の出でて復興に黽めたるありとはいへ、長歌は衰へたるまゝになりて、革新の策を運らすもの殆どなかりしなるべし。蓋し當時和歌勃興の運に向ひしが、男女の贈答、一時の遣悶、すべて即吟を主として、輕易なるものを尙びしかば、おのづから推敲雕琢を要する長歌は復興するに由なかりしなるべし。その後、延喜の世、和歌興隆の氣運大に揚るに至りて、伊勢、貫之、躬恒などたま〳〵長歌を綴り見しか

ども、一旦衰頽せるもの再び復興するに至らず、その二三の作品もまた萬葉と形式を異にするものなり。上古の和歌は長短ともに謳吟し、これが爲にことに聲律を整ふる要ありしが、古今以後の長歌はすなはち如何。謳吟せんが爲には朗詠ありて、選擇せる詩句はその用に供せられ、短歌もまた使用せられたりといへども、長歌の謳吟はこれありきとも覺えず。よしやこれを謳吟すとも、かけ詞、亙爾波多くして、句々連續、繫げる絲の如くなれば、意義はおのづから朦朧となり、聽者は直ちにこれを會得せずして、五里霧中に彷徨し、かくして再び隆々の勢に達せずして止みたるものならん。詩歌はもとよりその想において擢でざるべからずといへども、その調もこれと相並んで必要なり。奈良朝までの長歌は、その想こそ單純なれ、句々相受け相列ねて、調の上には頗る成功したるものなり。平安朝なるは優麗の風はこれありといへども、理路の行進に重きを置き、古の解し易くて耳に快き調はまた得ること難かりき。

三、風調の變遷。　和歌の風調は、奈良朝において剛健、平安朝において優麗、彼此轉化の著しきこと、一目瞭然たり。かくの如き轉化はいかにして起りしか、思ふ

に次の數箇條はその因由たるべし(い)第一に述べし五七の調の七五の調に轉ぜしは、すなはち風調の變遷を促がしし主因にあらざるか。こはなほ細說を要すべしといへども、こゝには煩を厭ひてその目を揭ぐるに止む。(ろ)冠辭の變化を見よ。奈良朝およびその以前は、冠辭の使用殊に多く、しかも「春日の」、「飛ぶ鳥の」、「あしびきの」「神風の」の如き、たゞ先例を襲いで、殆ど語源の辿るべからざる五文字もしくはその以下のものなりき。平安朝に至りて、やゝ體を變じて、「伊香保の沼の、いかにして」「音羽の瀧の、音にきく」、「越の國なる白山の、頭は白くなりぬとも」の如き、七字の冠詞または一句以上の序詞多くなりぬ。二句のうち、上の五字句を冠辭とし、下の七字句を須要なる意義あるものとすれば、おのづから頭輕く體重くて、剛健に聞え、これに反して七字句もしくはその以上を冠辭または序句として、その下に來るところの五字句などを意義あるものとすれば、輕重所をかへて、輕く優しく聞ゆべし。(は)弖爾波の多少もまた風調に關係あり。萬葉の歌には弖爾波の數甚だ少し、弖爾波は虛辭なり、虛辭を用ふること多きに過ぐれば、冗漫無氣力の弊に陷れども、これあること少ければ、また佶倔聱牙に流

る。平安朝に至りて人事の益〻進歩するや、複雜なる意義を明かにまた十分に透徹せしめんと欲して、互爾波は大に整備し、從うて風調もおのづから流麗に化したり。かくの如く句格の轉化に伴ひて、和歌の風調も變遷せしなるべしといへども、しかもこの變遷はなほ思想の推移と共に行動せしものにあらざらんや。

四、思想の變遷。（い）風調の勁健より婉柔に移りしは、すなはち歌人の思想の移動に伴ひしなるべし。奈良朝にては、泰平日既に久しく、人心華美を尙ぶに至りきといへども、なほ武事の鍛錬も忘れられず、旅人、家持父子の如きは、武人にして和歌をよくするものなれば、詠出するところもおのづから莊重剛健なりき。平安朝に至りては、人情風俗年々に婉柔優麗に流る、その結果はおのづから詠歌のうへにも表はれざらんや。賀茂眞淵は、大和は丈夫國、山城は婦人國と論じたれど、しかく處の異なるよりは、むしろ時の異なるによりて、想も違ひ調も異なるなるべし。（ろ）次に思想は敍述的より思惟的に移れり。萬葉の歌を强ち客觀的なりとはいふべからざれども、なほその傾向を帶び、古今は著しく主觀的抒

情に偏せり。萬葉までは思想も單一にして、己の情を直下に吐露するに過ぎず。古今に至りては單一は變じて複雜になり、考案思索、悲喜の情を他の事物に比較することも詳密なり。その弊、時に理論に走りて、詩美を失ふことあり、評者或はこれを嫌忌して、却りて萬葉の直情、新古今の敍景を取る。試みに古今集の撰者が哀傷の詠を見よ。

夢とこそいふべかりけれ、世の中に現あるものと思ひけるかな。　貫之

ねても見ゆ、ねでも見えけり、大方は空蟬の世ぞ夢にはありける。　友則

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむ、儚き世をも現とは見ず。　忠岑

神無月、時雨にぬるゝもみぢ葉は、たゞわび人の袂なりけり。　躬恒

躬恒の詠はやゝ異なりといへども、他の三者のいづれも現世を夢にたとへたる主觀的思想の、何ぞ相似て平凡なるや。これを次に示す萬葉の歌のむしろ客觀的なるに比すれば、優劣おのづから明かなり。

去年見てし秋の月夜はてらせれど、あひ見し妹はいや年さかる。　人麿

妹が見し楝の花はちりぬべし、わがなく涙いまだ干なくに。　憶良

しかれども萬葉の、

わが園に梅の花ちる、ひさかたの天より雪の流れくるかも。　旅人

といふを、古今の、

人はいさ心もしらず、ふる里は花ぞむかしの香ににほひける。　貫之

といふに比するに、此は感懷綿々として盡きず、彼のたゞ稚氣あるのみなるにまされること論を須たず。思ふに和歌の優劣は、その主觀的なると客觀的なるとに關はらず。膚淺なる主觀は感興なき理屈に馳せ、輕率なる客觀は意義なき排列に陷る、兩者ともに害あり、要はたゞ詩情の貧富如何にあるのみ。古今集の一篇を見るに、主觀的抒情の歌多しといへども、いまだ後世の如く浮華淺薄なるは少く、言語の雕琢せるに兼ねて、また萬葉の如く眞情の流露せるもの多し。後世、歌人の崇拜して措かざる所以は、蓋しこゝに存す。

古今集は實に後世歌人の崇拜して措かざるところにして、既に阿佛尼の著といふ夜の鶴にも、「たゞ歌の本體には、古今の歌を見覺えて、本歌にもすべし」といひ、近世古學の興るまでは、歌道唯一の典範と稱せられ、古學興りて後も、また第

一等の歌書たる位置を下らず。文學衰微の世にも、この書と伊勢物語、源氏物語は歌學に志すものの机上を離れずして、これが研鑽も絕ゆることなかりき。さらば次に後人が古今集に對する見解註釋の一斑を說いて、この章の餘論たらしめよ。

古今集の註釋の現存するものにして最も古きを平安朝の末なる顯昭註とす。これよりさき四條亞相、相公禪門、淸輔朝臣の註ありし由、この書に見ゆれば、今は傳はらずといへども、古今の註は旣に道長の頃よりこれありしなり。顯昭註に次いで顯註密勘あり、藤原定家が顯昭の說の是非を批判せるものにして、その孫慶融これを輯む。爾來、歌道は二條、冷泉二家その覇權を握りて、いづれも定家を宗と仰げば、その古今における や、密勘を以て正說とするは、當然のことなり。古今の證本も、後人また定家の自筆本といふを取る。世或は貫之の自筆本についていふものあり、されど袋草紙によれば、その自筆本、一は延喜帝の御本を相傳して、陽明門院にあり、顯綱朝臣申し賜はりしが、轉々して公信朝臣の許にて燒失し、一は小野皇太后宮にて燒失したりきといふ。されば世に貫之自筆の

切といふを傳ふれども、その眞僞は頗る疑ふべし、況んや全本をや。よりて二條冷泉の歌風を傳ふるものは、定家の本を證本として、その以前のものは却つて用ふべからずとす。定家の本といふに二種あり、一は貞應二年七月の奥書あるもの、一は嘉祿二年四月の奥書あるもの、貞應本は眞名、假名の二序ありて、二條家にこれを採り、嘉祿本は假名の序のみありて、冷泉家にこれを用ふ。

定家の後、古今集を釋するもの、禪閤兼良の童蒙抄、飛鳥井雅親の榮雅抄等あり、今一々に列擧せず。されど戰國の世に入りては、この書の尊崇せられたる割に、その註解等は甚だ少し。こは强ち文運の衰微せるが爲とのみいふべからず、伊勢、源氏の如きは、この時も却つて註釋頻々として作られたるに、ひとり古今のこれに異なるは、尊崇の結果に出でたるなり。伊勢、源氏と共に重視せられたりといへども、なほ古今は歌道無二の寶典にして、その尊崇の度は他の二書に比すべくもあらず。しかも戰亂の世、典籍は散逸し易く、就學は安んじてなし難ければ、その道を尙ぶあまり、口決傳授と稱して、しきりにこれを神聖にして、漫に人に敎へず。他書にも傳授はありしが、古今傳授特に重くして、極祕のものとす

れば、從うて註釋の書も世に出づること多からざりしなり。さらば古今傳授はいかなるものの、いかにして起りしぞ。

古今傳授は蓋し東野州常緣の倡道せしに起れり。建武中興の業敗れてよりこのかた、公家は日に衰微に傾き、歌道の門閥二條、冷泉も時の非なるに遇ひては、その家も殆ど泯滅に垂んとす。文衰へて野にあり、學問文藝を以て誇りし月卿雲客その道を失ひ、これを拾ひ傳ふるもの却つて弓矢の家に出づ。常緣は應仁頃の士にして、古今の奥旨を得たりと稱し、こゝに古今傳授を倡道す。かれはこの傳授を誰にか得たる、或はいはく、祕說漏すべからず、或はいはく、貫之が歌道の玄旨を古今の一書に發揮したるは、夢想にこれを人麿に得たるなり、藤原基俊また世を隔てて貫之より傳へ、基俊より俊成、俊成より定家に傳へ、それより二條家に相傳して、頓阿に及び、常緣は頓阿の子孫に受けたるなりと。夢想の說は妄誕笑ふべしといへども、常緣實は頓阿の曾孫常光院堯孝に學びたるもの、その師說を基礎とし、多少の學才あるを恃み、みづから傳授といふものを作爲して、愚昧の世を欺きたるに過ぎざるべし。かくて常緣はこれを宗祇法師に傳

へ、宗祇はこれを三條西實隆に傳ふ。實隆は宗祇と計りて二條家の歌道を再興せるもの、その子公條、その孫實澄まで三世相續して、當流を立て、古今傳授を傳へたり。織田、豐臣の世、細川幽齋ひとり文學を衰滅の際に支へ、傳授を實澄に得たりしが、關原の役起るに及び、東軍に與して丹後田邊城を固守す。西軍大擧してこれを圍み攻め、城内の沒落旦夕にあり。後陽成天皇かくときこしめし、幽齋もしこのまゝにうせなば、古今傳授も共に亡びんとて、勅使を下して兩軍を和解せしめたまふ。數年前その由を石に刻し、舞鶴なる田邊城址に建てて、幽齋の功を永遠に傳へんとす。かくて幽齋は戰國の末世と文藝復興期との過渡にあるもの、江戸時代の歌學はかれによりて始めて闢かれたり。幽齋の傳授を受けたるもの、皇族には八條宮智仁親王あり、親王より後水尾天皇に傳へ、爾來代々の帝王に相傳す。華胄には三條西實條、中院通勝、烏丸光廣等あり。實條は實澄の孫、その父公明早く歿せしかば、幽齋の返し傳授を受けたるなり。武人には木下勝俊あり、庶人には松永貞德あり、貞德は望月長好に、長好は平間長雅に、長雅は有賀長伯に傳ふ。中流以下の間に文學を鼓吹したるは、實に貞德の功なり。以上

は傳授の正系を示したるもの、別に傍系の宗祇より出でたるものあり。すなはち門人柴屋庵宗長に傳へ、その後、連歌の宗匠花の本に相續せるもあり、同じく宗祇の門人牡丹花肖柏に傳へ、肖柏より林宗二に傳へたるもあり、肖柏は泉州堺に住みしかば、その傳を堺傳授といひ、宗二は奈良の饅頭屋なれば、その傳を奈良傳授といふ。また宗祇の子孫の代々相續せしといふもあり、遂に烏丸光廣、本阿彌光悅に傳はり、光悅の族佐野紹益その傳を得たりといふ。

古今傳授を重んぜし世には、和國第一の傳といひ、もしくは本朝最上至極第一の祕密大事と稱す。しかもその取るべきところは、大抵旣に顯註密勘に出で、これに孟浪杜撰の說を附加したるものに過ぎず。文學衰廢の世には、密勘をだに知るものなければ、傳授家が說くところを玄妙の說と思ひ、附會の言をさへ妄信したるなり。古今傳授の最も重きを三鳥三木の傳とす、また三草一木の傳あり。そのほか集の卷々に異名を附し、序の句々または卷中の歌に特別の意義を附して、切紙口決と祕す。今よりしてこれを見れば、言ふところ淺薄に過ぎ、更めてこゝに筆を費やすもあまりに子供らしく思はる。歌道の傳授は古今傳授の

ほかになほ伊勢の都鳥、鹽尻傳、源氏の三箇大事、十五箇條大事、徒然の三箇大事、七箇習等あり。要するにその說一も科學的批評法を用ふるなく、單に字義の解釋に過ぎず。その解釋や、謬妄なる語源論に涉り、別に言外甚深の意義を闡明すとて、神佛二敎、陰陽五行の說に附會して、奇怪なる倫理觀をなす。思ふに佛敎のわが國に行はるゝや、これが弘布の任に當るもの、本地垂迹の說を唱へて、神道を同化せしめしが、浸潤風をなし、後には神道を以て家を立つるものも、またひとりみづから純にしては、その理を深くし、その道を擴むる能はざるを知りて、ひそかに佛敎の敎義と作法とを應用す。鎌倉時代の僞書と稱せらるゝ神道五部書がいかに佛說を交へたるかを思へ、また戰國時代の一怪傑たるト部兼倶が唯一神道を唱へて、いかにその神事に眞言の法を容れたるかを見よ。歌道を說くものも、いまだ文學そのものに不朽の生命あり、不可說の價値あるを知らず、その道を尊くせんとして、强ひて神佛の敎に當て、陰陽の理をも附す。恰も近世國學の起るや、春滿、眞淵等が、萬葉の研究を以て、古道の開拓に資せんとせしと、同巧異曲、眞理の鑰はこれが爲に開かれざるに、美神は彈指して隱れ去る。而

していはゆる傳授口決はまた密教の祕密灌頂に擬して始まりたるもの、或はその道を保存するが爲なるべしといへども、却つてこれが開發を妨ぐ、實にこれ歌道における獅子身中の蟲。

二條當流の説に最後の光輝を與へたるものは、古今も伊勢に同じく、北村季吟にして、その著に八代集抄あり。季吟と同時に、契沖阿闍梨の難波に崛在するありて、古文學の自由研究これより大に起る。されど語義については、古今集は既によく耕耘せられて、開拓の餘地少く、語義以外の研鑽はいまだ當時に望む能はず、すなはち契沖はこれを措いてなほ闇霧に被はれたる萬葉集に向へり、その古今餘材抄は眞に萬葉學建設の餘材のみ。賀茂眞淵は殊に萬葉を偏愛し、その古今集打聽はわづかに門人の筆記にかゝりて、重きを置くべきにあらず。本居宣長の遠鏡また童蒙の便に供するのみ。香川景樹起りて大に眞淵一派に反抗し、國學者流の和歌が死語朽辭を列ねて得々たるを斥け、むしろ古今集の學ぶべきを論じて、古今集正義を著はす。說くところ徒らに語義の末に走らずして、節調の佳否を論じ、趣味の優劣を判ず、時に獨斷の偏見なきにあらずといへ

ども、いふところ概ね正鵠を得たり、千歳の後、貫之等は好知己を得たりといふべし。

第二章　文章家としての紀貫之

古今集といへば、第一に聯想せらるべきは紀貫之なり。この集の撰者は、ほかに三人ありといへども、貫之編纂の主功に居り、古今は貫之の古今、貫之は古今の貫之と目せらる。古今集を論ずるものは、まづ貫之について委細を說かざるべからず。

貫之の傳記は詳かならず。古今集目錄、三十六人歌仙傳、勅撰作者部類、和歌色葉集、羅山文集等に載せたれども、わづかにその補任を知るべきのみ。延喜六年、越前少掾、御書所預となり、加賀介、美濃介、大監物、右京亮等を經、延長八年、土佐守となり、天慶三年、玄蕃頭となり、のち從五位上に敍せられ、木工權頭となりて、同九年に卒す、享年明かならず。古今集正義にこれを辯じていはく、從來、古傳には古

今集を撰べる時、貫之齢二十三歳(一說には三十二歳)なりとし、これより數へて、天慶九年、六十三歳にて卒すといへり、何によりていへるにや當らぬことなり。寛平后宮歌合に貫之も歌よみのうちに入りしは、古今集に見ゆ、この歌合いつの年とは知られねど、まづは寛平五年頃なるべし。さらば撰集の時、二十三歳といふ說を信ぜば、寛平五年はわづかに八九歳なり、この幼齢を以て歌よみの數に入るべき理なし。されば撰集の時は四十五六歳にて、享年は八十五歳ばかりなりしなるべしと。なほ正義にその歿日をも考定したるは、穿鑿に過ぎたれど、享年についての考は穩當なりとすべし。

貫之が歌道における主功は古今の撰にあること、いふに及ばず。この勅撰の後、また醍醐天皇の勅を奉じ、この度は一人にて、新撰和歌集を撰して、古今集のうちわけてすぐれたる歌を抜き集めたり。貫之の作歌は、古今以下代々の勅撰集および私撰集のうちに多く散見するが、これを一つに纒めたるものには、家集二卷ありて、延喜八年までの歌を載す。この家集についても疑はしき點なきにあらずといへども、おほかたは貫之みづからの手に成りたるものなるべし。旣

に大鏡にもその由を記し、後拾遺集中の和歌の小序には、惠慶法師が紀時文より貫之の集を借りたる由見えたり。その歌は後人仰いで入神の技と稱し、人麿と並べて貫之を以て和歌の聖とす。しかり、その歌壇の功はもとより大なりといへども、かれが他の歌人よりも一歩を拔いて、ことに文學の恩人たりしは、散文において無上の功績あるを以てなり、貫之の價値はその和歌にあらずしてむしろその散文にあり。

貫之の手に成れる散文の注目すべきものには、古今和歌集序、大堰川行幸和歌序、土佐日記あり、漢文には新撰和歌集序あり。古今集の和歌の小序もけだし貫之の手になりたるものなるべく、一筆苟しくもせざる小品として、世に許さるれども、さして文學的價値の大なるものにはあらず。貫之集の小序もまた同じ手に出でたるべく、扶桑拾葉集には、貫之の作として蟻通の神に奉る和歌の序を擧げたるが、これは貫之集より拔きたるなり。さて古今集序はこの集撰進の年なる延喜五年の作なるべし、たゞし香川景樹は撰進の年は同六年なりと論じ、序もこの年に成れりとす、その說或は然らん。この序について訝かしきは、假

名序と眞字序と二種あることにして、古來これにつき議論區々に別れて一定せず。眞名序は本朝文粹にも載せて、それには紀淑望の作とす、その序の末には臣貫之等謹序と署名せり。假名序には、文中に貫之等云々とありて、署名なし。二序しるすところ、大體の意義は齊しくして、なほ多少の異同あり、果していづれか先になり、いづれか成文なりや。袋草紙は三說を擧げ、一は假名序まづ成り、淑望感歎して竊かにこれを摸したるもの、すなはち眞字序なりとし、一は貫之假名序をかゝんとし、まづ淑望に囑してその草案を眞字もて作らしめしなりとし、一は貫之まづ假名序を作り、これによりて淑望をして眞字序に改めさせしなりといふもの、すなはち藤原基俊の說なりとして、淸輔は基俊の說に贊す。八雲御抄、古今序註(北畠親房)は眞字序は勅撰集序の成文たるべきものにあらずとして、淸輔に反對す。爾來、種々の說あれども、特に奇抜なるは上田秋成の論と香川景樹の說となり。眞淵の古今集打聽を校訂したる秋成はこの書に附言して曰く、

今思ふに此序(眞字序)は本朝文粹にも載て、今とおなじく紀淑望の作なりと

いへり。こはいぶかしきは、序辭の尾に臣貫之等謹序之とあらはに見えたれば、殊に作者の名を擧べきにあらず、因て是を古傳に、淑望は中納言長谷雄の男なるが、貫之の猶子なるを以て、私に命じて草せしめたるなりといへり。契沖は此說を難じて、未知其所據、竊案旣是四傑奉勅撰此集、貫之何敢有私命、然則此序亦淑望奉綸綍撰也といへれど、猶盡ざるに似たり。一人殊に勅を奉りて書するに、臣貫之等謹序之と云べきにあらず。若代りて作るとならば、彼文粹に何某が爲に誰某書之の例に擧べきものぞ、さるから强ていはんに、此二序皇國文、漢文の體こそ變りたれ、またく事の義は同じきを書て奏せん事、和漢に例も有まじければ、此國字、漢字共に貫之のかけるが何れをか奏すべきの草有しを、後に補ひなし、且相並べて寫傳し成べし。

景樹は古今集正義に論じて斷然眞名序は後の僞作なりと斥け、藤原明衡も誤り信じてこれを文粹に揭げたるなりといへり。議論紛々いまだ歸するところを知らずといへども、眞字序の前後正否はとまれかくまれ、假名序の貫之の手に成れることは、十人一口、これに異議を挾むものなきなり。

大堰川行幸和歌序はのせて扶桑拾葉集にあり。行幸の折の和歌は六十三首ありといへども、今具はり傳はらず。文政三年、井上文雄大井河行幸和歌考證を著はし、貫之集、躬恒集等を探りて四十八首を擧げたり。この行幸は或は昌泰元年といひ、或は延長四年といへど、延喜七年とするを正しとす。眞淵は、この年九月十一日の天皇の行幸なりといへど、誤にて、その前日十日の法皇の御幸なり。古今集にも法皇云々といひ、躬恒集にも亭子の帝云々といひ、また重陽後朝とあるを見よ。たゞ行幸といへるのみ聞き苦しけれど、これもはじめ行幸、御幸の區別なかりし折の書樣に從へりとせん。たゞしこの行幸の折の和歌二首古今集にのりたるは、歲時矛盾の觀あり、行幸は古今撰進の以前なるべきかと思はるれども、延喜十三年、亭子院歌合の歌、同十四年、和泉大將定國の四十の賀の歌などもこの書に入りたるより見れば、これらの和歌はいづれも後に書き入れたるものと定むべし。これらは考證に論ずるところの說、今これに從ひてその大意を示すのみ。

古今集序および行幸和歌序は體裁句法相似て、明かに一人の手に出でたるこ

とを示し、共に支那の序文の體を學びたるものなり。古今集序は子夏の作と稱せらるゝ詩經序に得たるところ殊に多し。かの序に云く、故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩、先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美敎化、移風俗、故詩有六義と、貫之の序にいふところこれに似たるものの多きは、更めていふを須ひず。かくして貫之が漢文に倣ひてかの二序を作るに當りて、いかに苦心慘澹たるものありしぞ。由來、外邦の文學を翻案するもの、その文字多くは生硬未熟にして蠟を嚼むが如きに、これには毫もその弊なく、語を疊み句を對して駢儷の體に擬し、文脈句法よく漢文の粹を得て、しかも國文の尺度を出でず、換骨奪胎宜しきに合ひて、豔冶流麗、櫻の美と菊の淸とを兼ねたるが如し。貫之の功は、漢文の法を國文に移して、彼此の融化を試み、無瑕の美玉毫も斧鑿の痕を止めざるにあり。而してこの漢和融化は、貫之の文實にその嚆矢たること、更めて記しおかざるべからず。寒中の白玉一輪は枝に亂れし二月の紅梅より價あり、物のはじめたることの、いかに貴くしてまた困難なるよ。わづかに二篇の小品と侮るなかれ、貫之が汗と血とはこのうちにあり。國史を見よ、萬葉集の小序を見よ、懷風藻以下の詩

集の序が何の體なるかを見よ。古今集の序を撰するや、一時のすさみにあらず、堂々として一代の名歌の上に冠らしめて、天下後世の範たるべし。しかもこの體の先例は漢文においてのみ見るのみにして、いまだ國文にこれを見ず、尋常の文人は必ずや慣習の力に制せられて、卓拔の見なく、一通りの漢文を以て自ら誇り人に驕りしならん。さるを奮つて從來の惰力を一擊して、革新の旗を翻へしし貫之の功は偉大ならずや。されど慣習の力は大なり、社會の多數を驅つて、その勢威の下に服屬せしめずんば止まず。貫之が筆を取るに當りて、左顧左眄、これを漢にせんか、和にせんかと、考慮に日を費やししことなかるべきか。わけて貫之は才に乘じてひたすらに勇往突進するものにあらず、練磨砥勵を經て後決するものなるを知らば、古今集に序するに當りても、深思熟慮、和漢兩樣の文體を試みて、その優劣を考査したることを想はずんばあらず。これを漢にせるは、慣習の惰性に魅せられたるなり、これを和にせるは、國民の自覺の顯はれたるなり。なほ屈すべきか、更めて伸ぶべきか、一往一來、わが文學を代表せる歌人は、久しく逡巡せり。遂に賽は投げられぬ、古今集序はその和歌と共に國民の自覺

のこゝに俄然として發展せるものなり。しかれどもなほ眞字序をも存するは、雜肋棄てがたく、併せてこれを傳へしなるべし。こゝにおいてか余は國字、漢字共に貫之の手に成れりといふ秋成の說を賛す。秋成性疎懶にして褊狹、天授の奇才に任せて恣まに憶斷を試む、その論の常軌を外れて的中せざること屢〻なりといへども、他はしばらく措いて、目下の問題には前陳の理由によりて、秋成と同じ結論に達す。貫之が眞字序を他に囑せりといふ說は信ずべからず、かれは新撰和歌集の序を作るの能あり、何を苦んでか自ら試みざらん。眞字序は本朝文粹に載せたるのみならず、その句は朗詠にも謳はれたれば、景樹が僞作といふ說は、好むところに阿るなり。されば假名序、眞字序ともに貫之の作にかゝり、國民の自覺の發展は、かれをして假名序を選ばしめたるなり。たゞ新撰和歌集を編するに當りて、その序を漢文にしたるは如何、古今に對照せしめんとの好奇心に出でたるか、再び慣習の誘惑に靡きたるか、疑なきこと能はず。

古今集序は行幸和歌序と共に一種の文體を創始したるもの、その聲譽の中古に嘖々たるは、當然のことにして、代々の勅撰集の序文はみなこれを摸してし

かも及ばず、方丈記等の典雅なる駢儷體國文も、基くところはこの序にあり。しかれども近世に至りては、これよりもむしろ純粹なる國文として、貫之が老後の作なる土佐日記を推重す。貫之は、延長八年、土佐守となりて赴任し、六年の後、承平五年、任滿ちて歸途につく。土佐日記は、その年十二月二十日、國府を出立せるに筆を起して、翌年二月十六日、京の故宅に着くに文を結べる旅中の日記なり。しるすところによれば、十二月二十七日、大津を船出し、海岸を縫ひては、風をうかゞひ、浪をはかり、少しく進み、久しく滯り、二月六日やう〳〵難波津に着し、それより淀川を泝り、十五日、山崎にてはじめて舟を捨て、その翌日、京に入れり。景樹は、古今集を撰べる時、貫之四十五六歲なりとし、これによりて數ふれば、その日記をかきたるは、七十三四歲の頃なるべしといへり。或は曰く、この日記は唐の李翺の來南錄などを見て作れるものかと、この說必ずしも信ずべからず。日々の記事を錄するは、わが國の慣習なり、しかも多くは漢字を以て記されたるを、今は假名もて記す。假名は女文字ともいひて、普通は女の使用するものなれば、貫之もこれを記すに、舟中の女の風してかきたるなり。一篇のうち亡兒の

悲、海賊の恐至るところに存することを忘るべからず、全文滑稽を以て成れることをも思ふべしなどは、既に先達の敎へて人のよく知るところなれば、更めてこゝに細說せず。

土佐日記の原本は貫之の自筆本といふもの、京の蓮華王院にありしかど、散佚し、藤原定家がこの本を寫ししもの世に傳はりて、證本となれるなりといふ。この本、今、前田侯爵家の庫中にあり。定家以來、文學大に衰へ、人麿を尊重しながら萬葉を知らず、貫之を崇仰すといへども、その歌と古今集序とあるを知つて、土佐日記は學者文人の口に上ること稀なりき。江戸時代に至りて文藝復興し、この書を讀むものまた漸く增加す。聞書はその註釋のはじめなるべく、元和、寬永頃の著ならん。ついで人見卜幽の附註、北村季吟の抄等あり。古文硏究の勃興するに至りて、抄註益〻多し、中にも最も價値あるは考證と創見とにして、考證は文化十二年、岸本由豆流の手になり、創見は天保三年、香川景樹の著にかゝり、一は事實の考證に努め、一は意義の闡明に力をつくせり。かくの如く近世に至りてこの書の盛に行はるゝは、從來、古今集序が跋扈せし反動によりてなるべく、ま

たかの序の註釋は既に十分の研究を經たるに、この日記には考査の餘地なほ多きを以てなるべし。されど理由はたゞこれらに止まらずして、また左の事情あるによらずんばあらず。

一、國學者は日本固有の文學、道德、宗敎を發揮せんとして、勉めて外國の影響を受けたるものを斥く。曰く、韓唐に學んでよりわが道は衰へたり、わが趣味は墮落せりと。かくの如く褊狹なる愛國的精神は、古今集序の漢文の體裁句法を得たるを喜ばず、歌聖貫之にしてなほその弊あるかと歎じ、翻へつて土佐日記を得るに及び、その漢文脈の服裝を被らざるを見て、翕然としてこれに向へるなり。

二、外國文學の感化如何をよそにしても、また序と日記とは軒輊し易し。强ひて言語を修飾し、文字の雕琢に苦んで、感情の冷却し去りたるは、序文の弊にあらずや。日記が事に臨み興に乘じて、輕々揮灑し去りて、毫も補綴の痕を留めざるは、到底序文の及ぶところにあらざるなり。

三、近世の學者文人は、國學を立つるものとてもその數に漏れず、多くは儒敎の

風化を受け、また中古以來の武士道の精神に充ちたり。さるからに夫婦別あり、男女席を同じうせざるものとし、公然戀愛を語るが如きは、不德の所爲として社會のほかに擯斥し、愛を以て生命とする小說も、戲作の名の下に屈辱を被りて、みづから甘んじたり。かゝれば未曾有の絕作源氏物語にも憚焉らず、竹取、伊勢も篋中に藏めて人に見せざるに、ひとり土佐日記は男女の情を語ること極めて稀なれば、これあるかなと殊に喜び迎へられたるなり。

四、耳食の徒多く、一夜學問以て他に誇る時、帙を重ねたる書を學んで數月を歷るが如き根氣は、多數の人の難んずるところ、耳より口までの學問に古學通を以て誇らんとするものあまたある世には、短篇こそ重寶がらるゝなれ、土佐日記、方丈記の勢を得たるは、一はこれが爲なり。

今、土佐日記を評せんとするに當りて、飜へりてその近世に行はれたる所以の事情を參照するに、その第四條の如きは、毫も日記の價値を軒輊すべき尺度たるものにあらず。第三條も褊狹なる東洋倫理說を文學に挾むもの、却つて日記の興趣を殺ぐことこそあれ、何ぞこれを以てその聲譽を增すに足らんや。第一

條もまた方針を誤りたる鎖國的文學論のみ、論者が古今集序を貶し、土佐日記を揚ぐるの理由は、むしろ逆まに取つて反對說を立つるの利器とすべし。ひとり單純素樸なる風姿を保守するは、敢て日記の譽にあらずして、進んで外國の趣味を混入し、長短を取捨したるは、すなはち序文の功なり。弘く諸國の文學を研究し、想を養ひ形を練りて、はじめてわが文學は發達すべし、要は漢文の長を取らんとして、却つてその短を入れ、利弊相伴はざりしや如何にあり。こゝにおいて第二條にいへるが如く、序と日記との眞價の比較論は生ず。

しかり、古今集序と土佐日記とを並べ見よ。序は、文に抑揚頓挫あり、秩序整然、名將が三軍を率ゐて行進するが如くなれども、華美に過ぎ、語句の雕琢を主として、情熱に闕くるところあるが如し。これを措いて日記に向へば、鰻鱺の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいふべからざる興趣のその中に存するを見る。これすなはち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を歎稱する所以なり。しかれども理路の整頓を喜び、行文の莊嚴を尙ぶ勅撰集の序と、一時の興に乘じて、情感の動くに任する日記の

文とを、同じ尺度を以て測らんとするは、測る者の過にあらずや、彼は珠玉を碎き金銀を切りて彩華炫耀たる三尊來迎の畫幅にして、此は一抹の墨痕に雲煙の影を留むる墨繪の卷物なり。彼は花の宴に錦を張りたる幕の陰より舞ひ出づる蘭陵王にして、此は曉暗く秋冷やかなる馬道に蟲の音にまがふ朗詠なり。かくの如く風姿全く異なる二文を比較せんよりは、むしろ土佐日記を以て、語句の素樸に、記事の輕妙に、文脈の純粹なる國文たるにおいて相似たる伊勢物語と比較するの恰當なるに如かず。

人みな日記の素樸にして輕妙なるを賞す。さらばその一例を見よ。

二十三日、八木のやすのりといふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらず、これぞ正しきやうにて馬の餞したる。守がらにやあらん、國人の常として今はとて見えざなるを、心あるものは恥ぢずになん來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

その文單簡なりとはいへ、「しも」といひ、「ぞ」といひ、「なん」といふ如き助辭多く、これを前に伊勢物語の章にあげたる竹取、伊勢の二例に比すれば、素樸輕妙の點に

おいて、遥かにかれらに劣れり。日記に歸京の折のことを記して曰く、

家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ敗れたる、家を預けたりつる人の心もあれたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり、さればことにものもたえず得させたる。こよひかゝることと聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。さて池めいてくぼまり水づけるところあり、ほとりに松もありき、五年、六年のうちに千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり、今生ひたるぞ交れる。大かた皆あれにたれば、あはれとぞ人人いふ。

伊勢物語には、情人を訪へども在らず、過ぎにし春を懷ふことを記して曰く、

またの年の正月に、梅の花さかりなるに、去年を戀ひていきて、立ちて見、居て見、みれど去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる、

月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、わが身ひとつはもとの身にして。

物語の文、簡短にして情趣纏綿、日記の長々しくかい列ね、あはれなるが如くにして、あはれならず、をかしきが如くにしてをかしからざるとは、同日の談にあらず、また世人多く日記の滑稽を賞すれど、その實は、記するところ、「舟路なれど馬のはなむけす」、「潮海のほとりにてあされ合へり」、「一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に蹈みてぞ遊ぶ」の類、徒らに言語の上の諧謔を弄するものにして、高尚なるをかしみは求むれども得べからず。素樸なりといひ、輕妙なりといへど、情熱の熾なるものなく、行筆の重くろしきを強ひて輕くせんとして、口網も諸持に荷ひ出し、うなり出せる感なきにあらず。

かく論じゆけば、二篇の序文は、はじめて漢和の體裁を融和せる歷史的功績甚だ大なりといへども、その文學的眞價においては、未だ許すべからざるものあり、土佐日記の文、簡勁なりと賞美せらるれども、これを伊勢物語などに比するに、またその敵にあらず。貫之よ、かれの作品は遂に天神感應の大文章にあらざるなり。しからば敢て問ふ、その價はこれにあらずして、和歌にあるか。

第三章　古今集の撰者

古今集の撰者のうち、貫之の略傳は前章に述べたり、他の三人はいかなる人ぞ。

凡河内躬恒は祖先を詳かにせず、後世の傳說ありといへども、信じがたし。寛平六年、甲斐權少目に任じ、延喜七年、丹波權大目となり、御厨子所に兼務し、同十一年、和泉權掾に任ず、また後撰集に、淡路掾の任滿ちて歸れる由も見えたり。世に傳ふる祕藏抄（一名、古今打聞）といへる雜駁なる歌學の書を、躬恒の作なりと稱すれども、蓋し後人の假託なり。紀友則は或は貫之の甥（或は從兄弟といふ）にして、父は有友とて宮內權少輔たりきといひ、或は紀有常の子なりといふ。その父また和歌をよくす、友則が惟喬親王の求によりて、父の歌を集めたる由は、古今集に見えたり。寛平九年、友則土佐掾となり、同十年、少內記となり、延喜四年、大內記に任ず。古今の撰ありて後、久しからずして歿す。壬生忠岑は右衞門府生、御厨子所定外膳部、攝津權大目に歷任し、また和泉大將（藤原定國）の隨身たり。著はすところ和歌十體ありといへども、まことにその手に成れりとは信じがたし。そ

の子に忠見あり。この撰者三人いづれも家集あり、されど忠岑集の如き、脱漏頗る多し。

前に業平、遍昭等を論じたるに倣ひて、今また四人の撰者を比較せんとすといへども、その和歌に現はれたる各自の特性の顯著ならざるが爲に、やゝ躊躇せざるを得ず。時の古今を通じ、單調にして千篇一律の感あるは、短歌の通弊なり。一般の風調の變遷は認むるを得べく、萬葉と古今、古今と新古今の差別は明かなりといへども、一時代における諸人の歌ふところは、多く相違することなし。時代の格調はなほ存す、個人の格調は求め易からず。中には著しく他に異なること、曾禰好忠の如きものなきにあらずといへども、多數は五十步、百步の異同にして、十分に作者の性格を活動せしめ、理想を表現したるものは、寥々として曉天の星の如し。かくの如きは第一に短歌の句數に制限あり、僅々三十一の短文字を以ては、複雜なる思想を現はすに難んずるに由るならん。次に命題の變化なきも、その原因に數ふべし。和歌も進步するに從うて、弊また伴ひ、自然を觀察し、實感を詠出するよりも、題を設けて想を强ふるに至りぬ。延喜の頃には、旣

に題詠殊に增加し、席上の唱和、屏風の畫讃などの甚だ多かりしことは、貫之集一篇を繙いても、これを證するに足る。屏風に四季の繪を畫いてこれに讃歌をしるすは、當時の風なり、而してその景物の命題は、版木に摺りたるが如くに定まれり。春たつといふばかりにや霞たち、雪にまがふ梅枝に鶯の聲ぞ香れる。花を見すてゝ歸る雁、風につれなき櫻の陰もなし。池の藤浪、籬の卯の花、山時鳥音づれて沼の菖蒲をひく頃は、五月雨遠くふりくらす。六月祓はてぬれば、秋風はやく身に浸みて、機織女に衣かさん。女さびする女郎花、招く袂の花すゝき、露おく野邊の千種に蟲の音ぬれて、秋も今宵の望の月。霜とまどへる菊の花、紅葉の色は花にまさりぬ。霧たち、時雨すぎ、年の瀨は飛鳥の川も數ならず。過ぐるも速き夢の世に、待つ宵の涙、後朝のおもひ、空蟬の身のとゞめがたきは、戀なりけり。幾百年の懷、幾千萬の歌、煎じつむれば、かくの如きのみ。あながち古作を剽竊するにあらずして、却つて前人を崇奉し、その跡を蹈襲して違はんことを恐るゝは、鎌倉、室町時代の弊習に止まらずして、既に平安朝に見るところなり。從うて同一の典型に鑄られて、自由なく、變化なく、ひとしく先人の轍を追うて彼此類

似したるものの多かりしは、當然のことなり。躬恒の歌に、

　月夜にはそれとも見えず、梅の花、香を尋ねてぞしるべかりける。

　春の夜のやみはあやなし、梅の花、色こそ見えね、香やはかくるゝ。

　ふる雪に色はまがひぬ、うめの花、香にこそ似たる物なかりけれ。

この相似たるは、同じ人の詠なればともいふべし、さらば同代別人の詠を見よ。

　明けぬともをりやまどはむ、梅の花、いづれともなく雪のふれれば。　躬恒

　雪ふれば木ごとに花ぞさきにける。いづれを梅とわきてをらまし。　友則

和歌の習、通性の美を見て、個性の美を顧みず。一代の歌人を列ね、その作品を剖析批判せんとして、各自の特色の捉へ難きに呆然たらざるものありや。これ平安朝の歌人の作を論ずるに當りても、誰しも感ずるところの困難なるべし。

貫之の和歌の秀逸數首を擧げて、その作風を見んか。

　人はいさ心もしらず、ふる里は花ぞむかしの香ににほひける。

　とふ人もなき宿なれど、くる春は八重葎にもさはらざりけり。

　さくらちる木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞふりける。

わが宿を春と共にし別るれば、花は慕ひてうつろひにけり。

夏の夜のふすかとすれば、時鳥なく一聲にあくるしのゝめ。

あふ坂の關の清水にかげ見えて、今やひくらむ、望月の駒。

思ひかね妹がりゆけば、冬の夜の川風寒み千鳥なくなり。

こぬ人を下に待ちつゝ、久かたの月をあはれといはぬ日ぞなき。

君まさで煙たえにし鹽竈の、うら淋しくも見えわたるかな。

これらを傑作とすべく、その詠概ね工夫に力めて、直ちに人の肺腑を衝くもの少きが如し。

ねぬる夜の夢は浪にもあらなくに、たちかへりても人をみるかな。

わかれてふことは色にもあらなくに、心にしみてわびしかるらむ。

君ましし昔は露か、ふるさとの花みるごとに袖のひづらむ。

夢を浪、わかれを色、昔を露に比するが如き、强ひて譬喩を求めて、虚僞に流れ、少しも興趣のその間に生ずることなし、過ぎてはなほ及ばざるが如しとは、この謂なり。

あはれてふことを緒にしてぬく玉は、あはで年ふる涙なりけり。
しづ機にみだれてぞ思ふ、戀しさをたてぬきにして織れるわが身ぞ。
など物に喩へ句を行ること甚だ巧緻なれども、忠岑が、
鳥ならばあたりの木々に隱れゐて、ほれたる聲に鳴かましものを。
あはれてふ人はなくとも、空蟬のからになるまでなかむとぞ思ふ。
の一氣呵成にして、人を感ぜしむるものあるに如かざるなり。要するに貫之は詞を整へ句を練り、推敲を重ぬるものにして、情感の迸發して、人の心を燒き盡さずんば止まざるものにあらず。その什は出づるものにあらずして、作れるものなり。こは和歌においてのみならず、散文においてまた然るを見る。かれの文章は熟考打算の上に成る、冷靜なる組織的頭腦は有すれども、猛烈なる噴火的狂熱に闕くるところあり。好漢理性を具へて才情足らず、これが爲にその日記は伊勢物語に及ばず、作歌は躬恒と並べて鼎の輕重を問はれんとす。
貫之と相並んで、延喜歌壇の重鎭たるものを躬恒とす。その作例、
わが宿の花見がてらに來る人は、散りなむ後ぞ戀しかるべき。

今日のみと春を思はぬ時だにも、立つことやすき花の陰かは。
心あてに折らばや折らむ、初霜のおきまどはせる白菊の花。
わが戀はゆくへも知らず果もなし、あふを限と思ふばかりぞ。
ひきうゑし人はむべこそ老いにけれ、松の木高くなりにけるかな。
二人ともに古今撰進の任に當り、交情甚だ親密なり、嘗て七夕の朝、躬恒書を貫之に贈りて曰く、
君にあはで一日二日になりぬれば、今朝彥星のこゝちすらしも。
その答に曰く、
あひ見ずて一日も君にならはねば、七夕よりもわれぞまされる。
されど躬恒の性格を思ふに、頗る貫之に異なるところあり。貫之は機智頓才あるにあらず、その歌は經營慘澹にして成りしもの、躬恒は興に乘じて言ひ散らし、章句の雕琢においては、ことに注意せざりしが如し。類例を唐詩に求めて、貫之を歌界の杜子美とすれば、躬恒はそれ李太白か。醍醐天皇御遊ありし夜、躬恒を召して月を弓張といふ意は如何と、仰せられしかば、とりあへず、

照る月を弓張としもいふことは、山邊をさしていればなりけり。

と申し上ぐ。天皇叡感あり、大掛賜へるを肩に懸けて、

白雲のこの肩にしもおりゐるは、天つ風こそ吹きてきぬらし、

また嘗て參議伊衡が歌を以て問ひ、直ちに躬恒が歌を以て答へしもの四雙、その一に曰く、

よる晝の數は三十ぢにあまらぬを、などなが月といひはじめけむ。　伊衡

秋ふかみこひする人のあかしかね、夜を長月といふにやあるらむ。　躬恒

一二の例も機智の縱横なるを察すべし。躬恒また多涙多恨、或は老衰を歎じ、或は沈淪を憾み、厭世咨嗟の聲その詠に滿つ。

みな人は花のころもを着る中に、ひとりぞ老にしづみはてぬる。

わび人のおもふ心をちる花にそへて雲ゐに吹きつげよ、風。

ことさらに死なむことこそ難からめ、いきてかひなく物おもふ身は。

除目の朝、枕席暖かならず、萍流轉蓬の運を歎じて、

都にて春をだにやはすごしてぬ、いづちに雁のないてゆくらむ。

われ人の浮華にして、俗事に齷齪のみするを思ひて、

ときはなる松をばおきて、あぢきなくあだなる山の櫻をぞ見る。

貫之の作が當世一般の歌風を代表して、主觀的抒情なるに對して、躬恒はむしろ客觀的敍情を喜ぶ風ありき。

住の江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白波。

千鳥なく濱の眞砂をふみわけて、ゆく旅人はあはれ誰ぞも。

景物を敍して細巧なるは、

秋風に山とびこえてくる雁の、羽むけにきゆる峯の白雲。

貫之が「逢坂の關」の詠の如き、やゝ客觀的に近づけりといへども、かくの如きは、その詠のうち極めて稀なり。

和歌の形式よりいへば躬恒の作はこゝに示せる「住の江の」「秋風に」の詠の如く、名詞にて止めたるが少からず。この格は平安末期より鎌倉時代のはじめにかけて多く用ひられたれども、延喜の頃はなほ極めて少かりしに、躬恒ひとりこれを喜び、貫之の作には殆どなしといひて可なり。「逢坂の關」の詠の如き、名詞を

以て結語とするはあれども、これは「住の江の」如き名詞どめの格に異なり。貫之の詠はすべて主語、說語の整備せる文章をなし、動詞、助動詞を略すること稀なれば、從うて名詞どめを用ひず、躬恒は咄嗟の感興を寓して、時に業平の如く、詞足らずして、句法に闕けたるが如きも、往々にこれあり。

客觀的敍景といひ、名詞もて結ぶといひ、いづれも千載、新古今時代の歌人が好んで用ひしところ、而して既に躬恒においてこれあるを見る。はじめは古今集の撰者のうち貫之ひとり崇奉せられ、人麿と併せて二聖と稱せらる。大納言公任後中書王に語つて曰く、古今歌仙のうち貫之第一たり。後中書王曰く、さりとて人麿にしかずと。よりて二人の秀歌各〻十首を撰出して、これを闘はしむ、七首は人丸勝ち、三首は貫之勝ちたりといふ。三十六人歌仙傳その後、平安朝の末に至りては、躬恒と貫之との優劣如何を論ずるものあり。俊頼曰く、躬恒をばなあなづらせたまひそと。長明無名抄かくの如く躬恒の漸く尊重せらるゝは、その詠が當時流行の歌風に似て、世人が範をかれに得たること多きによるといへども、また漸次その眞價の現はれたるによらずんばあらず。

かく論ずれば、頗る貫之を貶して、躬恒を揚ぐるが如し。然り、躬恒の才にして蔽はるゝところありしは、これを拓かざるべからず、貫之にして歌道の聖人と過信せられしは、適當の地に据ゑ直さざるべからず。しかれども躬恒は業平の如く詩才の蓊勃たるにはあらず、業平は眞情溢れて止まらず、おのづから語句の修飾に暇なきものにして、躬恒は文學的才情の充ちたるよりも、むしろ臨機應變の機智に富みたるものなるのみ。貫之の什や、涙に濕ひ、血の迸るものに乏しといへども、その內容は沈思熟考の上、從來の單純を複雜にし、幼稚を老成ならしめ、外形は修練を遂げて、語句の措置を多樣多式ならしむ。その文は古今集序、行幸和歌序によりてはじめて漢和兩式の融和を試み、永く後世に範を垂る。貫之なくんば果して延喜に勅撰集ありや、漢風の國文ありや、未だ知るべからず。その作品は眞に深遠なるものなしといへども、歌文ともに成功するところあり。審美的技能はよく發展して、二序となり、日記となり、また和歌となり、以て文學史上明かに一體を定め、一期を劃せしむ。宜なり、後の歌人文士仰いで正視する能はず、たゞその膝下に雌服せしことや。

友則と忠岑とを見るに、友則は貫之に似、忠岑は躬恒に似たり。その歌の質においては、この二人もかの二人と輕重するに苦むといへども、その數の甚だ少きは、友則、忠岑が到底貫之、躬恒に及ぶ能はざる所以なり。友則は格調を重んじ、殊に流麗典雅の風を喜び、好んで「あるかな」「けるかな」「なりけり」などの助動詞を以て結ぶは、近世の香川景樹に似たりといふべし。

ひさかたのひかりのどけき春の日に、しづ心なく花のちるらむ。

秋風は身をわけてしも吹かなくに、人の心のそらになるらむ。

など疑問の格にして疑問の助辭を略したるも、一に佶倔の調を避くるが爲にあらずや。

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲に、まどひまされる戀もするかな。

笹の葉におく霜よりも、ひとり寐るわが衣手ぞさえまさりける。

など、比較法を用ひ、悠々として迫らざるは、友則が得意の筆法なり。

忠岑もまた躬恒の如く機智に富めり。嘗て和泉大將の夜更けて、醉ひしれて左大臣時平を訪へるや、大臣怪みて、何處よりの歸り路ぞと問ふ。大將の隨身なり

ける忠岑、松明ふりながら取りあへず、

鵲のわたせる橋の霜のうへを、夜半にふみわけてことさらにこそ。

されば忠岑の歌も才に任せて、語句の練熟に關くるところあり、語句の足らざる間に、却りて情の切なるものあるを見る。その戀の歌の如きは、自家の境遇をそのまゝに露出したるものならんか。かれの詠のうち巧麗を以てまさるるは、

松の音に風の調をまかせては、龍田姫こそ秋はひくらし。

これに反して、粗大の趣の取るべきは、

思ひやる心のほどは果もなし、風のいたらぬ隈は多かり。

その女に遣はせる長歌には、東海道の名所をよみこめたり。いにしへ影媛が鮪を傷める長歌に、また近郊の地名を列ぬといへども、こはあまりに隔たりて、また趣も聊か違へり、後世、律語にも、散文にも、道行の辭多きは、蓋し忠岑の詠などを以て嚆矢とせん。

古今の撰者のほか、延喜の前後に和歌に名あるものには、淸原深養父、藤原興風、在原元方、大江千里、坂上是則、藤原兼輔等ありき、今一々に論評せず。

第四章　天曆時代の漢文學と詩合、歌合

前三章においてほゞ平安朝第二期の前半の文學、ことに古今集を論じたり、今その後半に移らざるべからず。

世に平安朝の治を稱するもの、まづ指を延喜、天曆に屈す。平安京の泰平はこゝに至りて光華を開き、地方は漸く隔絕して、睽離の兆明かなれども、九條の諸坊春闌けて、山邊の櫻、堤の柳、都の色ぞ深かりし。公卿殿上人は安逸に馴れ、地方官は遙任となりて、任國を知らざるもあれども、都鄙の懸隔いまだ第三期以後の如くは甚しからず。攝關權を專らにすといへども、この頃はなほ天皇みづから政治に勵精したまひて、その前後に、幼帝が虛位を守りて、外戚の手に左右せられたまふ如くにはあらず。これを誇稱するものは、醍醐、村上の二帝をわが國の堯舜といふ。朱雀天皇の在位十數年間を隔てて、この父子二帝いづれも聖明にましまして、天下の事に大御心を勞したまひしこと、まづ相似たり。蓋し天曆の聖帝は國を治め世を進めて、つとめて父の帝にまさらんときほひたまひしな

り。天皇嘗て密かに賤しき司の年老いたるを召して、延喜と當世とのかはりめいかにと、問はせたまひしかば、更に變らずと申す。强ひて責めさせければ、何事もめでたし、たゞ當世には、除目行はるゝに、續松のいさゝか要り增るやうに覺え侍りと申しき十訓抄と、傳ふるを以ても、競爭の叡慮深かりしを知るべし。されば萬般の企畫相類したるもの多く、文事においても、或は求めて、或は知らず知らずに、似通ひたること少からず。延喜十四年、三善清行封事を上れば、天暦十一年、菅原文時もこれを捧げ、昌泰中、僧昌住の新撰字鏡あれば、天暦の頃、源順の倭名鈔あり。延喜には延喜格式等の撰ありて、實益の學に力を致せるに、天暦には樂所、和歌所などを設けて、文華の燦爛たらんことを期す。而してこの二代の文學を比較して、著しき相違を見るは、漢文學の天暦時代に至りて更に興隆の姿あることとこれなり。一弛一張は物の數、萬事すべて反動あり、延喜に和歌ひとり勢を逞しくせしかば、こゝにその反動としてかゝりしなるべし。

翻へつて第一章のはじめを參照せよ。延喜三年、道眞配所に薨じ、善行、長谷雄、清行等はなほあれども老衰し、その子孫はいまだ圓熟の境に入らず、漢文學は寥

寥たる枯林の觀ありき。こゝに天曆時代に至りて、凋殘の老士は既に隔世の人たりといへども。前に黄口乳臭を以て見られしもの、才熟し筆馴れて、錦心繡腸を鬪はす。その中ことに文事に名ありしものは、大江朝綱、同維時、橘直幹、菅原文時、源順、兼明親王等なるべし。

大江朝綱は音人の孫、玉淵の子、參議正四位下たり、その祖父と相對して、彼を前相公、此を後相公と稱す。嘗て村上天皇の勅を受けて、新國史を撰すすなはち類聚國史に倣へるもの、今わづかに殘闕を存するのみ。世に傳ふ、朝綱夢に白樂天と詩を論じ、これより文藻大に進めりと。また傳ふ、渤海の客の入朝するや、朝綱その歸鄕を送りて詩あり、詩の序に曰く、前途程遠、馳思於雁山之夕雲、後會期遙、沾纓於鴻臚之曉淚と、客感稱止まず。のち邦人のその國に渡航せるものに問うて曰く、江相公三公たりや、曰く、いまだし、客歎じて曰く、日本何ぞ文才を重んぜざるやと。大江維時も音人の孫にして、千古の子、朝綱の從弟なり、稱して江納言といふ。古人の律詩を編述せる日觀集といふものあり、今、散佚して傳はらずといへども、蓋し維時等の撰にかゝりしなり。維時の詩文の殘存せるものまた

少し、才藻も朝綱に及ばざるが如しといへども、江氏の門流はその系に榮え、匡衡、匡房等盛名の士いづれも維時の裔なり。

橘直幹は橘公統に學ぶ、遺什多くは亡びたりといへども、斷篇を見ても、才思の卓拔なるを知るべし。遊石山寺詩に曰く、蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲との僧奝然の入宋するや、この一聯の二字を改め、露千里、蟲一聲として、宋人に示す、宋人曰く、秀逸なりといへども、その二字を更ふるに如かずと、すなはち斧正を加へて、原作に同じくせりと傳ふ。直幹と同時に、橘氏にして詩名あるもの在列あり、髮を剃りて尊敬といふ、源順の師なり。尊敬歿してのち、順その遺稿を集めて敬公集といふ、今傳はらず。

菅原道眞の次子に淳茂あり、詩文に長じて、乃祖を辱めずといへども、その甥文時の聲名籍甚なるには及ばず。菅原文時は道眞の長子なる右大辨高規の子、世に菅三品と稱す。才藻富贍ことに流麗の句をよくす、林春齋その織月賦を評して、本朝文粹中の壓卷とす。文時は朝綱に比するに、年齒頗る劣れりといへども、高才博學相讓らず、世擧つてこの二人を天曆文壇の雙絕と賛稱す。村上天皇嘗

て朝綱、文時等に勅して、白氏文集中第一の作を選ばしむ、二人ともに送蕭處士遊黔南詩を記して奉れりといふ、この話柄は後世定家、家隆が古今集の歴卷を選んで、ともに忠岑が「有明のつれなく見えし」の歌を取れると同日の談なり。また當世の文名あるもの、皇孫源保光の第に會して花を賦したることあり、朝綱の句に曰く、此花非是人間種、瓊樹枝頭第二花、文時の句に曰く、此花非是人間種、再養平臺一片霞と、一座いづれも、その上句一字を違へず、下句等しく梁園の故事を引きたるを奇とす。天暦中、天皇宮鶯曉囀の題を下して詠進せしむ。御製の句は露濃漫語園花底、月落高歌御柳陰とありて、ひそかに自負の色ましませり。文時制に應じて曰く、西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裡音と。天皇驚きたまひ、強ひて文時に二篇の優劣を判ぜしむ、文時恐縮して、聖作臣の及ぶところにあらずと奏す。なほ責めたまへば、實は同じきなりと謙遜し、更にありやうを申せと促がされて、實は臣の句聖作に一膝進めりと申して、逃げぬ。天皇笑つて、にくきものの技の善さよと賞したまひきといふ。また應和中、冷泉院に御遊あり、文人を召し、花光水上浮の題を給ひて、詩を賦せしむ。文時その序を作る、中に句あり、誰

謂水無心、濃艷臨焉波變色、誰謂花不語、輕漾激焉影動脣と。晩年官位沈滯して薨ず。その兄雅規、弟庶幾、子雅熙、輔昭等みな詩文に長じ、道眞の外孫齊世親王の子源英明また文名高し、されどいづれも文時に及ばず。

源順は後撰集の撰者として、後に敍ぶべし。兼明親王は村上の皇弟にして、一品中務卿たり、世に前中書王と稱す、具平親王を後中書王といひて、相對せしめしなり。その作のうち、兎裘賦最も人口に膾炙す。はじめ醍醐天皇この親王を愛し、立てて儲位に置かんとせしが、攝關等その賢明を忌みて、この擧を賛せず、天皇やむを得ずして、源姓を賜ひて右大臣としたまふ。されどなほ藤家に憚られて、その職に安んぜず、嵯峨に隱れ、兎裘賦を詠じて鬱悶を遣る。その中に曰く、世有治亂、時有通塞、迹有顯晦、扶桑豈無影乎、浮雲掩而乍昏、叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗と。また曰く、不語靡言、便是淨名翁之病、知者默也、寧非玄元氏之文、喪馬之老、委倚伏於秋草、夢蝶之翁、任是非於春叢、冥々之理、無適無莫、如々之義、非有非空、嗟乎文王早沒、吾何之恨、已矣已矣、命之衰也。吾將入龜緒之巖隈、歸兎裘而去來と、抑壓不平の懷の文中に活動するを見る。蓋し當時における皇族第一の詩人といふ

べし。同じく村上の皇弟に源高明あり、西宮左大臣すなはちこれなり有職の書に西宮記の著あり、また和歌もあれども、詩は見えず。

以上述べたる人々の手になりし詩文およびその斷片は扶桑集、本朝文粹、和漢朗詠集、江談抄等に出づ。當時かれらをはじめとして、文人詩家彬々として輩出し、文華燦然、恰も弘仁時代の再現したるが如し。村上天皇ことに文事を奬勵し、みづから詩文に長けたまへば、上の好むところ、下響の應ずるが如く、君臣合體詩賦を唱和して才藻を競ふ。屢〻好文の士を召し、題を賜ひて、作を奉らしめたまふこと、弘仁の昔に讓らず。これに加ふるに、この時に至りて、はじめて詩合の遊あり。すなはち天德三年八月十六日、淸涼殿の孫廂に出御あり、旣望の月を賞し、かたはら詩を合せしむ、作者は左方文時、順、右方維時、直幹、判者を維時とす、すべて十番、一番々々の間、勸盃あり。蓋し詩合の遊や、敢て唐に倣ひしものにあらず、この折の行事略記に云く、遠稽唐家、近訪我朝、初自彼會昌好文之時、至于元和抽藻之世、雖馳淫放之思、未有鬪詩之遊、仍爲後代聊以記之と。かくて詩合はこれをはじめとし、これを軌範として、その後、時にこれに倣ふものあり。その世に知ら

れたるものを擧ぐれば、この最初の遊より五年めに、應和三年三月十九日、善秀才宅詩合あり、下つて後冷泉天皇の朝に、永承六年三月二十七日、侍臣詩合あり天喜四年六月、殿上詩合あり、なほ下つて鳥羽天皇の朝に、天永二年六月二十日八條亭詩合あり、鎌倉時代に至りて、資實、長兼兩卿百番詩合等ありき。

かく天曆時代には著名の詩人多く、漢文學は更に光彩炫燿なるに至れりといへども、當時の詩文は既に純粹なる漢詩文にあらずして、日本化したる漢詩漢文なり。しかもこの日本化たるや、健全なる變化にあらずして、唯徒らに綺麗なる句を鬪はすのみ、全篇の結構布置においては、いかなる進歩をも見ることなし。されば詩文の流行盛は盛なりといへども、形想併せて盛なるにはあらず、これを和歌に比すれば、その流行は遂に及ばず。弘仁時代は詩文ひとり勢を得て、和歌はいたく窘束せられ、またその感化を受けたりしに、今は詩歌併せ行はれたりといへども、歌は主、詩は從、勢力顚倒して、詩文は和歌の感化に甘んじたり。その著しき例はすなはち詩合にして、この遊は實に歌合を學びて始まれるなり、而して歌合はまた古く漢文學の研究に根ざせるなり。この間の消息を審か

にせんが爲に、歌合の由來について一言せしめよ。

歌合のはじめて今日に知られたるものは在民部卿家歌合にして、時勢より推すもこの遊の嚆矢なるべし。民部卿はすなはち業平の兄行平にして、これを行ひしは、蓋し仁和のはじめ頃なるべし。これについで仁和中將御息所家歌合、是貞親王家歌合等あり。寛平歌合は十所の菊を詠じて、作者には道眞、友則、素性、敏行等あり、寛平御時后宮歌合は四季および戀二十番をあはす。かくて醍醐天皇の朝に及んで、昌泰元年、朱雀院女郎花合あり、延喜十三年三月十三日、亭子院歌合あり、作者には今上、兼覽王、伊勢、貫之、躬恒、興風、是則、友則あり、同年九月九日、陽成院歌合あり。同十六年七月七日、亭子院有心無心歌合あり。さて朱雀天皇の朝には、將門、純友の亂などにてしばし中絶せりと覺えしに、村上天皇に至りて、更に天曆十一年二月、天曆歌合あり。ついで天德歌合あり、こゝに歌合の式も整備し、大にその面目を改む。

溯へつて歌合の起原を思ふに、草合、花合などに出でしなるべし。文華秀麗集に、觀鬪百草と題して、滋野貞主の詩および巨勢識人の和韻あり、これ草合がわが

國の書に見えたるはじめなり。ついで經國集のうち、嵯峨上皇が鞦韆篇に和する滋野貞主の詩に、明日更期鬪百草、君王花樹芳菲中とあり。これらはいづれも漢文學の最も興隆せる頃の作なれば、唐朝の文物を輸入する結果、かゝる遊技までも移植せしならん。黑川春村いはく「按ふにこの戯の原づくところは白氏文集觀兒戯韶齔七八歳、綺紈三四兒、弄塵復鬪草(クサアハセス)云々とあるなどより起れるならん。また開元天寶遺事下云、鬪花、長安王士安春時鬪花、戴揷以奇花、多者爲勝、皆用千金、市名花、植於庭苑中、以備春時之鬪也とあるは、似たることながら花合の證とすべし、但しなほ月令廣義をこゝに徴すべし」(墨水遺稿中)と。白氏文集なるは、大人の遊技としてはいかゞながら、開天遺事なるは、宛も花合の例に引くべし、倭名鈔には荊楚歳時記云、五月五日有鬪百草之戯(鬪草、此間云久佐阿波世)といへり、五月五日はすなはち端午にして、その日の草合はことさらに菖蒲の根の長さを競ふ根合なり。さて文華秀麗集および經國集にいへるものに次いでは、躬恒集に內御屛風に草合を畫き、その讀歌をよめる由ありて、延喜年間のことなり、延喜元年八月二十五日、前栽合のことありしも、また草合の類なり。かく草合、

花合などいひて、花葉の艶芳を競ふこと、漸く行はれしが、後にはこれに和歌を添へて出すこととなり、更に豪奢を競ひては、自然の花葉を造花、洲濱に更へ、また興趣の進みては、花葉の美を爭ふ外に、和歌の勝敗を定むることとなり、こゝに歌合は成立したるなり。されどはじめは歌合も、優劣の沙汰いまだ喧しからざりき。寛平歌合、寛平御時后宮歌合、陽成院歌合など勝負づけなきを見れば、ただ左右を組み合せたるまでなりしか。在民部卿家歌合以下、勝負づけあるものもあれども、これらも勝敗を定むるだけにて、いまだ批判の詞は附せざりしなり。優劣を批判し、式目の具備せるは、實に天德歌合をはじめとす。

天德四年三月三十日、內裏において歌合あり。その前年八月、殿上において詩合ありき、官女等相語つて曰く、男子旣に詩を鬪はす、女房は歌を鬪はすべしと、ここに四年の春二月の末より、その用意とりどりなり。更衣を左右の頭とし、宮女侍臣をその方人とす。歌人は左方、藤原朝忠、坂上望城、大中臣能宣、少貳命婦、壬生忠見、源順、本院侍從、右方、平兼盛、藤原元眞、中務、藤原博古、淸原元輔。判者は左大臣小野宮實賴にして、題は霧、鶯、夘花等、春夏の景物と戀となり。回を重ぬること二

十番、十回は左の勝、三回は右の勝、他は持とす。第三番の時、右の講師源博雅鶯の歌を出すべきに、誤つて柳の歌をよみ上げ、狼狽して更に鶯をよみ上ぐといへども、顏色變じ、聲顫ひて、左方に嗤笑せらる。また第二十番、戀の歌、左は壬生忠見、

戀すてふわが名はまだきたちにけり、人知れずこそ思ひそめしか。

右は平兼盛、

しのぶれど色に出でにけり、わが戀はものや思ふと人のとふまで。

雙方ともに歌人は當代の名家、和歌は苦心の傑作、似たりや似たり色も香も、いづれをよしと定め兼ねて、判者はひそかに天機を伺ふ。御簾の内にも躊躇の御けはひ、頓に勅判も下されず、たゞかすかに「しのぶれど」の詠を口ずさみたまふ。叡慮はこれに寄るなめりと、すなはち判者は右を勝とす。さきほどより手に汗を握りし兼盛は、己の歌勝ちたりと見て、また他の歌を聽かず、拜舞して出て、忠見はこれより病を得て憂死すと傳ふ。この度の歌合はかく行々しく番ごとに一々判の詞を列ね、またその行事の日記を記す。左右の方人おの〳〵毎番の詠歌を論じ、敵方の弱點を指摘するは、蓋し天台の論義に倣ひしものにして、講師、

讀師等の名あるも、その證とすべく、佛敎の影響またこゝに及べるなり。爾來、天德歌合を以て、この遊の規模とし仰ぐ。

なほ村上天皇の朝に行はれたるもの、應和二年五月四日、内裏歌合あり、康保三年八月十五日夜、内裏前栽合あり。天祿三年八月二十八日、規子内親王家歌合あり、この歌合をまた野宮十番歌合といふ、題は秋の草花と蟲聲とにて、左方は女、右方は男、判者は源順なり。順の述懷に曰く、

しらけゆく髮には霜やおきなぐさ、ことのはも皆枯れはてにけり。

橘正通、順が女方を多く勝たせたるを嘲りて、曰く、

霜がれのおきなぐさとは名のれども、女郎花にはなほなびきけり。

いづれの世にも、男女相交りてこそ、嬉戲も花さき狂ひけれ、男同士の詩合も行はれたれど、さまでは盛ならず、歌合のみ次々の御代にもひきつゞき流行せり、今一々に數へず。

要するに天暦時代は漢詩和歌ともに興隆せし盛時なり。されど漢詩は弘仁の勢威なく、むしろ和歌の下につくを甘んじ、和歌はまた漢詩に力を割いて、十分

なる活動をなす能はず、二兎を追うては一兎も得ず、詩歌ともに一見すれば頗る光彩あるが如しといへども、よく〳〵これを究むるに、毫も前代に比して進歩の迹を見ざりしなり。漢文學のことは前述せるところを以て足れりとせん、さらばこの時代の和歌は如何。

第五章　後撰和歌集

古今集の撰進より年を隔つること四十七星霜、天暦五年十月、勅して和歌所を梨壺(すなはち昭陽舍)に置き、藏人少將藤原伊尹をその別當とし、讃岐大掾大中臣能宣、河内掾淸原元輔、學生源順、近江少掾紀時文、御書所預坂上望城の五人をして、これに屬して、萬葉集を訓釋せしめ、併せて和歌を選ばしむ。これ實に和歌所を置かれたるはじめにして、世にこの五人を梨壺の五人と稱す。選拔したる和歌は集めて二十卷、體裁殆ど古今集の轍を踏めるものなりといへども、なほ頗る彼に劣りてしどけなしとの評あり。

榮華物語にいはく、

この御時には、その古今に入らぬ歌を、昔のも今のも撰せさせたまひて、後に撰すとて、後撰集といふ名をつけさせたまひて、また二十卷撰せさせたまへるぞかし。それにもこの小野宮の大臣の御歌多く入りためり。但し古今には貫之序いとをかしう作りてつかうまつれり、後撰集にもさやうにやとおぼしめしけれど、かれはその時の貫之この方の上手にて、古を引き、今を思ひ、行末を兼ねて面白く作りたるに、今はさやうのことに堪へたる人なくて、くちをしくおぼしめしけり。（月宴卷）

その後、袋草紙、長明無名抄、後撰聞書注表紙裏書、阿佛夜の鶴等、いづれもまた後撰集に就いて言ふところあれども、大同小異あるのみ。遙かに下りて近世の中山美石が新抄の論は諸說を綜合敷衍して見やすければ、次にこれを引いて他を略せんとす。いはく、

正しくえらびあへられざりしものと見えて、四季戀雜などわけられたる樣は、古今集とひとしけれど、戀雜などの歌と見ゆるが、四季のうちに入りたる

なども折々ありて、歌の次序(ツイデ)もいとみだりがはしく、よみ人の名のしるし様もいかにぞや見ゆる所々もあり、或はよみ人の名を誤りたる所もあり、それにあはせて、詞書にもいとみたりがはしく、或はいたく言足らで、詞書を以て、歌の意を求めむとするに、その心得がたく、または深き故よしありてよみ出でつらんと見ゆるが、題しらずなどありて、更にわきまふべき由なきもあり。おふけなきいひ言ながら、歌の意もむげに幼なげに、拙き様なるなども、まれまれには交れり。されど中には、後世に寫し誤りたることなどもあるべけれど、かにもかくにも、他の撰集に比べては、いと〳〵みだりがはしきこと多かる集になむありける。しかはあれどすべてをいはば、みさかりなる世の風雅(ミヤビ)にて、下りての世のわざなどの、かけても及ぶべきにはあらず、めでたしともめでたく、いはん方なく見ゆる事どももいと多かり。

これを要するに、いづれも後撰集の不完全なるを惜みしものにして、なほ大體に古人の說を別てば、撰集の組織の杜撰なりといふと、和歌そのものの劣れりといふとの二種の見解ありて、甲は後撰の未定稿なるを說き、乙はその撰者お

よび作者の伎倆の不堪能なるを稱す。袋草紙等は第一説に屬し、無名抄等は第二説に屬す。また古今には有名なる貫之の序あるに、この集には全くこれを闕く。この序なき所以を、さきの第一説より見るものと、第二説より見るものとありて、榮華物語の如きは第二者に屬す。北村季吟は「愚案ずるに、この御時にも、源順などありて、野宮の歌合の判詞當座にいみじく書きたりし事などあれど、なほ貫之には及ぶまじくおぼしめしたるにや。またこの集未定にてこれを止むと、袋草子にも侍れば、序をかゝしめたまふまでにも及ばざるにや、はかりがたき事なるべし」（八代集抄）といひ、兩説を擧げてこれを決せず、異淵もまた榮華の説を駁して「これはいと覺束なし。撰へたる人なしとて、ことの樣を序に書かざらんことかは。この後撰は、はじめ勅のことは、後撰奉行文もありて定かなれど、歌はたゞ取り集めしまゝにて、再び吟味をだにせざるまゝに傳はれるなるべし、よりて誤れること多かり、然れば序かくに及ばで、その事やみしにや」（後撰集標註）と論じ、直ちにこれに次いで「またその時の順など、唐ことをば學びたれど、皇朝のことはふつに知らざりしかば、序もえ書かぬにや」といへども、その説は未定稿な

れば序もなしといふに傾けるが如し。

かの第一說のいふところ、後撰の體裁の不備にして選擇の杜撰なることは、旣に定論たり、今更めて議論するを要せず。この不備杜撰なるは何故ぞや。かくのごとき表面の體裁は、旣に古今集の先例あり、普通の人も審査熟議せば、成し難からざることなれば、これを撰者の伎倆の闕けたるが爲なりといふは、正しからず。殊に奉撰の勅の下りし時は明かなれど、奏覽の時日は物にも見えざれば、いまだ定本とならず、奏覽に及ばずして止み、たゞ未定稿の傳はれるものなることは、多言を須たざるべし。かく未定稿ならば、序文なきも、いまだこれを作るに及ばざりしもの、豈他故あらんや。源順の如き、古今を崇拜すといへども、しかも季吟のいへるが如く、自負の技能あり、何ぞこれを綴るに躊躇すべき。貫之を憚りて作らざりしといふが如きは、あまりに古今に阿りて、事情を見るに迂なるもの、余はたゞ未定稿といふを以て、組織の全からず、序文の闕けたる所以を併せて解決せんと欲す。されど後撰の和歌の優劣如何は、いまだこの一語を以て釋き去る能はざるなり。さらばかの第二說の是非は如何。

歌風の變遷を論ずるもの、多くは曰く、一時代の和歌を委しく調査せんと欲せば、歌人個々の家集を一々に研鑽せざるべからずといへども、當時の正統なる歌風を學ぶには、一勅撰集を以て足れりとす、勅撰集には勿論古代の作をも擧げたれども、これとてその時代の趣味に適合したるものを選びたれば、これもまた時潮を示すものたるを妨げずと。然り、古今は延喜の歌風を示し、新古今は鎌倉初期の歌風を示す、然れども後撰一部によりて、天暦の歌風を示せりといふは未だし。否、後撰もまたその時代の和歌の風調如何を現はせるものなるは、もとより沮むこと能はずといへども、これをかの古今、新古今等に比するに、その間に懸隔なくんばあらず。今を棄てて古に阿る、以て當代の歌風を示せりといふべきか、現時の代表者たる歌人の作を省く、以て當代の歌風を盡せりといふべきか。されば今こゝに後撰の和歌を摘出して、天暦の歌風を論ずるの迂を試みんよりは、翻へりてこの集の組織の方針、類別、命題の方法等を考究するに如かず。これを明らむれば、從うて當代和歌の傾向も會得せられん。

古今集においては、篇中、何人の作か最も多きといふに、撰者四人に超ゆるもの

はあらず。その歌の數、貫之は百に近く、躬恒は五十に餘り、友則は五十に近く、忠岑は三十に及ぶ、別に素性の忠岑に過ぐること一二首なるあるが、これもまた當代の人なり。古人にしてこれに匹敵するものは、ひとり業平の忠岑と同じきあるのみ。これらに次いで多きは、やゝ老若の差こそはあれ、ひとしく延喜の聖世にあひし伊勢、敏行にして、近き過去の小町、遍昭もこれに及ばず、上代の歌聖人麿もわづかに八首を數ふるのみ。その他においても、その名は古今といへど、今人を主として、古人は甚だ少し。翻へつて後撰集を見るに、選擇の方法頗る古今と趣を異にす。その詠歌の六十を超ゆるもの、貫之、伊勢あり、二十を出づるもの、兼輔、躬恒あり、十およびその以上なるもの、時平、業平、忠岑あり、いづれも延喜時代もしくはその以前の古人にして、今人にて十首のほかに出づるものは、大輔、右大臣師輔、左大臣實賴あるのみ。十首以下にても、多きは古人か、また現代の人なれば權家貴人なり。撰者五人の歌は一首も見ることなく、當時の名匠ときこえし兼盛、忠見の如きも、わづかに一二首に過ぎず。

こゝにおいてか知る、後撰集は弘仁の詩集、延喜の歌集に見るが如く、當代の詠

を主としたるものにあらず、古人の作を集めて、その道の準則と仰ぎたるものなり。古今集の撰進は國民が自覺の結果なり、醍醐聖帝は多大なる信任を貫之等に與へて、恣まにその文學的才能、評論的伎倆を揮はしめ、撰者は自己に對する不動の信念を以て、一往邁進、その責任を盡す。かれらの前には古人なく、法則なし、敢て古人なきにあらず、古人も深く仰ぐに足らざるなり、敢て法則なきにあらず、自ら行動するところ即ち法則なり。延喜の和歌は實に國文學に一期を劃せるものにして、當時の歌人は能動的活力を以て耕耘し、收穫したりき。爾來、年を經ること五十に近く、貫之、躬恒は形骸早く朽ちて、盛名ひとり輝く、天曆の文壇また光彩燦爛たりといへども、既に古今の軌範あり、貫之の先師ありて、準繩の控御は免るゝこと能はず。時勢は泰平無事、搢紳久しく安逸に馴れて境遇の轉化なければ、歌運の變遷を促がすべき動機も生ぜずして、徒らに延喜の迹を追ふのみ。こゝに梨壺の五人は和歌所に集まりて、遠くは萬葉を訓釋し、近くは古今に漏れたるを拾ふ、篤く前代を信仰すれば、己等の作を先哲と並べ載するを憚りて、一首も後撰には收めざりしなるべし。形式は固定せり、かれらはこ

れを守つて變ずるを知らず、强ち古を軌範とすることを斥くるにはあらざれども、前人あるを知つて自己あるを知らず、活潑なる意氣の動くことなくして、歌運の進歩を希ふも、また難からずや。

後撰の歌人は、當代にては、權貴の人多きこと、前に示せるが如し。古今の撰者はいづれも卑位下官のもの、しかもみづから選ぶこと最も多く、前の太政大臣、今の左大臣の如きは、二三首に過ぎず、御製は一も見ることなし。(東常緣は醍醐天皇御歳なほ若くましまししによりて、御製を入れざりしやにいへり。(東野州聞書) されど古今集の奏上せられし延喜五年は、聖算二十一歳なりき。)敢て自負するにあらず、他を凌ぐにあらず、文學の前には權力なきなり。後撰の爲すところは、これに異なり。勅撰和歌集に當帝の御歌を揭ぐるは、この集に始まれるが、こは叡聖の御製を仰ぐ所以にして、當然の所置ともいふべけれど、當時著名の歌人を措いて、左右の大臣そのほか權家の子弟の作を多く取りしは、詠歌の秀逸なるがためか、はた別に故あるか、そもそも撰者は權要の人にあらずんば、和歌をよくせじと、まじめに考へしか。平安朝の文學は上流の文學なりしことは、かれて

れを知る、文物の指導者は上流の社會なりしことは、われこれを知る。さばれ皇室の外戚、當朝の執政たるもの、果して第一流の歌人なりしか。嗚呼、文學者みづから侮れり、權力の前に屈せり、かくしてひとり文學の高からんことを望むも得べけんや。後撰は古今を規矩とす、しかもこゝに至りて、かの規矩に從ふ能はざりしなり。

更に和歌の類別および小序を見よ。その篇次を春、夏、秋、冬、戀、雜、離別羇旅、賀哀傷の八に序でたるは、古今集に倣へるものにして、しかもかの集よりもなほ力を四季と戀とに專らにしたるを見る。わけて主力を盡せるは戀六篇にして、そのうち、男女の贈答凡そ半ばを占むべし。古今には戀の部のうち、男女の贈答は業平、小町、橘清樹、典侍因香等の數首に過ぎざるに、後撰には至るところにこれあり、男女の間の祕事を暴露して憚ることとなし。風俗の時を經て益〻淫靡に流るゝや、推して知るべし。さらばこれらの贈答は、實際には古今時代には稀なりしか、何ぞ必ずしも然らん、かの時代とても、固よりそのことなきにあらず、たゞ公然その祕密を發くを厭ひて、戀の歌も多くは題しらずとおぼめき、贈答ともに載

することは少くして、たゞ作品のすぐれたるを選べるなり。後撰に至りては、作品の優劣よりも、むしろ贈答の事實を知らしむるを主とす。過ぎ去りし世には、宇多天皇の御息所たりし伊勢の御が時平との贈答、陽成天皇の後宮にありし大つぶねが皇子元良親王および平仲との贈答、今の世には、大輔が朝忠、道風、敦忠との贈答等、公然これをあらはして弘く傳へたるは、その歌の主も耻とせず、讀む人もあはれ深しなど褒めたればなるべし。この點もまた後撰が古今と趣を異にするところにして、古今はなるべく和歌が花鳥の使、交契の媒たらんことを避けて、戀にも情の切に詞の文あるをのみ取りしが、後撰は今昔の情話を蒐集して、世間の談柄に供し、男女喜んでこれを己が贈答の模範とせしなるべし。和歌の品こゝに至りて益々下りぬ。

後撰集の組織、篇次等によりて、天暦歌壇の趨勢を推すこと、凡そかくの如し。かくして後撰の和歌は天暦の作少くして、むしろ延喜の什を多しとす。よしこれを以て天暦の歌風を推すに足るとせば、そはたゞ延喜を崇拜し、保守せしものに過ぎず。その言辭において多少の變化あり、以て平安第三期に至るの連鎖た

りといへども、大體において古今のやゝくづれたるものといひて、細論の煩を避けんとす。かくして後撰集全體の論を終るといへども、その撰者等については、別に一瞥を加へざるべからず。

第六章　後撰集時代の歌人

後撰集は、これによつて以てその時代の和歌に對する傾向を覗ふべしといへども、いまだ當時の個々の歌人の作品の如何を知るべきものにあらず。さらばこゝに更めて、後撰の撰者および同時の一二の名匠について記するところあらしめよ。

源順字は具瑺、嵯峨天皇の皇子大納言定の曾孫にして、左馬允擧の子なり。延喜十一年生る、天暦七年、四十三歲にして文章生に補せられ、東京藏人、下總權守等に歷任して、和泉守となり、能登守に轉じ、位は從五位上に至る。應和元年、愛するところの子女二人を失ひ、官位また沈滯して進まず、よりて疲れたる馬の詩を

作りて長官に奉り、また無尾牛歌を詠じて、みづから慰む。その筆に成れる夜行舍人鳥養有三歌に云く、

我臣三代志未攄、昔自天曆至康和、再直祕閣撰御書、抄寫年積眼早暗、桑楡景傾病彌忙……惟寂惟寞春空過、獨愁獨歎夏獨臥、人皆去作當構病、世未悲爲愁存命。有三何功被君憐、只在高聲夜不眠。我昔奉公忘寢食、何無天憐及暮年、太陽難照覆瓫下、願君雲上爲奏傳、天曆舊臣沈下位、欲浮舜德海無邊。

その他、上州大王の池亭に陪しての詩といひ、淡路守を望む申文といひ、天德歌合の判といひ、野宮庚申夜歌の序といひ、いづれも己が貧賤不遇を歎ぜざるはなし。永觀元年、七十三歲にして卒す。

順の和歌は拾遺集以下代々の撰集に少からず、別に家集あり、馬毛名歌合あり、散文には野宮庚申歌序短しといへども、貫之が大堰川行幸和歌序に比すべし。世に宇津保物語、落窪物語をともに順の作と稱すれども、信を置くに足らず、竹取物語をもしかいへど、その誤なるべきは既に言へり。漢文は扶桑集、本朝文粹、朝野群載等に散見す。文學的作品にあらずといへども、有名なる倭名類聚鈔は

順の作なり、こは訓詁の書にして、純粹なる辭書にはあらず。そも〳〵わが國にて最も古き辭書および訓詁の書といふべきものには、日本紀私記、和名本草の類あり。正しき字書のはじめともいふべきは新撰字鏡にして、昌泰中僧昌住の著はすところ、また類聚名義抄を菅原是善の作といふは信ずべからずといへども、これも或は延喜以前のものならん。かくてのち倭名鈔は出でたり、鈔は順が辨色立成、楊氏漢語抄日本紀私記、和名本草等によりて、天地、人物、草木に別ち、なほこれを細別し、漢字をあげて、これを註し、これに和訓を添へたるものにして、當時の物名はこの書によりて明むべく、實に千歳不朽の書なりとす。こはもと順が醍醐天皇の第四の皇女勤子內親王が修學の爲に編輯して奉れるものにして、その本に十卷のものと二十卷のものとあり。二十卷本は後人が時令、樂曲、湯藥、官職、國郡、殿舍の六部を增補したるものなりといふ。狩谷棭齋の箋註は最も丁寧なる著述なるが、これには十卷本を取れり。

順學識富贍、才和漢を兼ね、一人一首の著者をして、雖稱本朝楊雄許愼、不爲過論、莫以尋常墨客看之と稱せしむ。而してその特長の詩歌いづれにありやと問は

ば、その得意とするところは、漢詩文にあることもとよりなるべし。これ順にお いてしかるのみにあらず、當時、學者の名あるものは、いづれも力を籠めて支那の文藝を學びしものなること、更めていふに及ばず。しかもこれらの學者が專修の文章道の傍かに、和歌をも學得したるは如何。蓋し延喜前後より和歌大に流行して當時の貴紳が日常交際の要具となり、女子との應答にはまづこれなかるべからず、いはゆる詩歌管絃いづれも公卿が必須の技たるが中に、和歌は特にその流行の範圍廣く、詠出の折もしば〳〵なり。されば男子の詩文に潛心せしものも、併せて和歌を學び、順はこの時潮の魁となりて、その才に任せて詩歌ともに多く作り、多く詠じて、世人をして斯道の先達、一時の名匠と仰がしめしなり。

詩文のうちに順の傑作を求むれば、河原院賦など世に稱せらる。その中に、

强呉滅兮有荆棘、姑蘇臺之露瀼々、暴秦衰兮無虎狼、咸陽宮之烟片々、何唯涼風坊中、一河原院而已哉。

の句の如き、古來、嘖々として人々に膾炙せるものなり。また和歌所別當御筆宣

旨を作り、藤原伊尹を賛して、

雄劍在腰、拔則秋霜三尺、雌黄自口、吟亦寒玉一聲。

といへるも、著名の句なり。そのほか誦すべきものなきにあらずといへども、一般の風潮におけるが如く、全詩全文として殊に見るべきものなく、また文筆の才は朝綱、文時に比するに、一歩を讓らざるを得ず、和歌に至りては、更にその漢詩より數等を下りしものなるべし。順の作のうち、最もすぐれたりと稱せらるゝものも、

水のうへに照る月なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なりける。

といふに過ぎずして、その實はその名に合はず。

老いぬれば同じことこそせられけれ、君は千代ませ、君は千代ませ。

の如きは、やゝ奇拔の風ありといへども、これらはその集に指を屈するばかりにして、しかもまた詩趣に富めるものにあらず。

一昨年も、去年も、今年も、一昨日も、昨日も、今日も、わがこふる君。

といへるなど、歌の何たるをも辨へぬ妄語のみ。

そも／＼和歌は、既に搢紳が社會に處してその才器に誇るべき材となりたれば、これを以て眞の感興を詠ずるよりも、むしろ男女朋友の贈答、もしくは歌合、屛風の繪の題詠に苦心する習なりき。順の如きは、殊にその學識の深邃にして才藻の豐富なるに傲るものなれば、ことさらに種々の詠み難しと覺ゆる題を設けて、巧にこれを詠出することとしば／＼なり。その家集を見よ。題詠以外の歌は幾何もあることなく、難題には、あめつちの歌四十八首あり、雙六盤の歌あり、「世の中を何にたとへむ」の十首あり。また端午に菖蒲を人に贈るとて、

進上　こゝろざし

深　ふかき

右葉之菖蒲草　みぎはのあやめぐさ

千年五月五日可苅　ちとせのさつきいつかかるべき

といへるが如き、その機智を見るに足るといへども、いづれも和歌を玩弄に供せしもの、その詠の多くは平凡にして、詩趣の横溢せるものなきは、もとより當然のことにあらずや。

なほその集を探りゆくに、

蓮だに生ひざらませば、水の上に露おきけりといかで知らまし。

里遠み雲路かきわけ、水ぐきの跡かと見ゆる雁は來にけり。

の如きは、聊か清新の調に入りたるものなりといへども、これとてもまた工夫に過ぎ、纎巧に陷りたる跡は、明かに認むべし。緣語、かけ詞など人爲の巧を弄することは、もとより旣に大に行はれたるが、順において殊に著しきを見る。その短歌に「紅葉にもまだ飽かなくにあき果てぬ」または「菊の花きくに違はぬ」といひ、長歌に「われはなほかひもなぎさにみつしほの」または「綠の衣ぬぎかへむ春はいつともしら波の」といひ、散文に「今いにしへを見るが如く、こよひのことを後の人も見よとて、書き記して奉るは、仰せ言にしたがふなり」といふが如きもの、その作に多し。蓋し順その才識を衒ふあまりに、これらの文字のうへの嬉戲をなし、これを濫用して、ます〳〵一時の流行を盛ならしめ、久しく濟ひがたき弊を釀ししものならんか。

要するに順は當世の學者なり、その學識に肱して、併せて詩をよくし、また歌に

長けたりと、世人は過信す。多く作り、いかなる題にも應じたりといへども、天稟の才に至りてはいまだし。かれは到底詩人にあらずして、むしろ散文的の人なり。さるをみづからも詩歌に得るところありとなし、しかも確固たる信念の存するなければ、徒らに世と浮沈して古今の昔を仰ぎ、これに倣うて及ばざらんことを恐るゝのみ。保守の弊漸く重なり、歌壇は沈滯して振はざらんとす、この運を釀成したる人を求むれば、順の如きまづその罪を免れざらんか。但しひとり順の罪のみ大なるにあらず、一世の崇奉を博したるを以て、その責任の他よりも重きなり。

清原元輔は大中臣能宣とともに重代の名臣と稱せらる。淸原氏は舍人親王の後にして、夏野以來、代々儒を以て家を立て、延喜の頃、内藏允深養父は歌をよくせり、元輔は深養父の孫なり。嘗て同時の歌人平兼盛の歌を詠むに當りて沈思時を費すを難じて曰く、かくの如く案ぜば、その煩に堪ふべからず、予は口に任せて詠じ、まことによく詠まんとする時のみ、沈思すと。(袋草紙巻三)或はまたその性を評して「馴者の物可咲しく云ひて、人咲はするを役とする翁」といへり。(今昔物語巻二)

十八 元輔も順の如く一生顯達せず、その不遇を歎じたる詠到るところにあり。嘗て除目の日、子の日に當りしかば、

ひく人もなくて年ふるみ芳野の松は子の日をよそにこそきけ。

正月二日、鶯は聞きたりやと、人の問へるに答へて、

年ごとに春の忘るゝ宿なれば、鶯のねもわきてきこえず。

肥後守の官闕けたるを望む人多しと聞きて、

誰かまた年經ぬる身をふりすてて、きびの中山こえむとすらむ。

天暦五年、河内權少掾に敍せられ、それより進んでかの望みたる肥後守にもなり、位は從五位下に至りぬ。永祚二年、八十三歳にして卒す、家集あり。清少納言はすなはち元輔の女なり。

順と元輔を比較するに、順は貫之の如くにしてその識なく、元輔は躬恒に似ていまだ及ばず。元輔は詩才頗る見るべく、その調清麗にして、その歌情趣あり。紅梅を詠じて曰く、

梅の花香はことごとに匂はねど、薄く濃くこそ花は咲きけれ。

その他、春秋ををり〳〵の吟に、

老の世にかゝる子の日はありきやと、木高き嶺の松に問はばや。

秋の野の萩の錦を、故郷に鹿の音ながらうつしてしがな。

花薄まねく袂はあまたあれど、秋はとまらぬものにぞありける。

の如きは、その秀詠と稱すべし。

中臣氏は藤原氏と同祖にして、代々神事に從ふ家なり。稱德天皇の朝、淸麿より一字を加へて大中臣と稱す。その七代の孫に祭主賴基ありて、和歌をよくす。後撰集撰者の一人たりし能宣は、即ち賴基の長子にして、詠歌の才はその父にまされり。藏人所衆より身を立て、祭主となり、正四位上神祇大副に至る。若かりし時、父に語りて曰く、過ぎつる頃、入道式部卿宮(宇多天皇の皇子敦實親王)の子の日によろしき歌仕りぬ、

千歲まで限れる松も、今日よりは君にひかれて萬代やへむ。

と申すといひければ、賴基はたと怒りて、枕を投げつけ、汝もし昇殿をも許されて、主上の御子の日など仕らん時、いかなる歌もて祝ひ奉らんとするぞと、いへ

りといふ。また小野宮實賴の七十賀を祝し、竹の杖を作りて、

位山峯までつける杖なれど、いま萬代の坂のためなり。

能宣また機智あり、嘗て小野宮殿に參りしに、簾の中より底に日影の縮ある盃を出して、歌よめとありければ、

有明のこゝちこそすれ、さかづきに日影もそひて出でぬと思へば。

正曆二年、七十一歲にして卒す。家集あり、また榊葉日記と稱するものあり、神宮の伊勢に鎭座ましまししことおよびその忌詞などを記し、奧書に「大中臣能宣内侍宣によりて奏す」とあれど、深く信ずべからず、蓋し後人の僞作なり。能宣の子に祭主輔親および才媛伊勢大輔あり、輔親はその庭に泉水の巧を盡し、天橋立の勝概に擬して、自然の風韻を樂めり。

能宣の傑作は、

御垣守、衞士のたく火の夜は燃えて、晝は消えつゝ物をこそ思へ。

と稱せらるれど、痛切なる愛情をたゞ燃ゆる焔に喩えて、その比較の間に言語の巧を弄するものに過ぎず。同じく戀を詠じて、

さりともと頼む心にはかられて、死なれぬものは命なりけり。
またはじめて女の許に通ひ、その後朝の文に、
あふことを待ちし月日のほどよりも、今日の暮こそ久しかりけれ。
といへるは、ありふれたる思想ながら、情味の掬すべきものあり、辭句の雕琢に
奔らざるところ、却つて御垣守の詠に勝らんか。
今朝きけば澤の蛙も鳴きにけり、春の暮にもなりぬべらなり。
天の原わきてなくなる雁がねは、ふるさと尋ね歸るなるべし。
など、座上の茶話にも過ぎざる庸劣の詠の、集中に多きは、作者のために甚だ耻
づべし。
八雲御抄に、後撰集の撰者を論じて曰く、「梨壺の五人めでたしといへども、かの
古今の四人の撰者に及ぶべからず。能宣、元輔は重代のうへもつとも然るべき
の歌人なり、順また重代にあらずといへども、この道稽古のものなり、望城、時文
は父が子といふばかりなり」と。望城は是則の子、時文は貫之の子、その詠の勅撰
集に出でたるも多からず、家集も存せざれば、更めてこゝに論ずるに及ばず、む

しろ當時に有名なりし平兼盛、壬生忠見について一言せざるべからず。

平兼盛は光孝天皇の皇子是忠親王の裔なり。はじめ王氏なりしが、天曆四年、平姓を賜はりて臣下のうちに列す。和歌をよくし、また漢學に通ず。官位甚だ高からず、位は從五位上に至り、官は天元二年、駿河守に任ぜらる。正曆元年卒す、實にこの歳には、淸原元輔も卒し、大臣には藤原兼家も薨じたりき。兼盛家集あり、その情話は大和物語に散見す。才媛赤染衞門は、赤染時用の子と稱せらるゝが、實は兼盛の妾が妊娠のまゝに時用に嫁して生みたる子なりといふ。壬生忠見は忠岑の子、幼名は多々、のち忠實といひ、また忠見に改む。攝津に住んで、家甚だ貧、和歌をよくして、吐囑の敏捷を以て名あり。幼き時、禁裏より召されしに、乘物のなきと申しければ、竹馬に乘りても參るべき由仰せありしかば、

竹馬はふしかげにしていと弱し、いま夕かげに乘りて參らむ。

天曆八年、御厨子所に候し、天德二年、攝津大目となり、六位を授けらる。天德歌合に敗れて悶死せりと傳ふれども、眞僞を知らず。年齡も明かならずといへども、延喜の時より既に藏人所に出でたれば、天曆の頃は既に老いたるなるべし。家

集存す。一生貧にして、位低く、たゞその詠歌によりて名を知られたり。はじめて召し上げられたる時、その父を懐うて曰く、

君が世にさかゆくべしと思ひせば、とはましものをたゞみねの道。

また父の歌を奉るとて、

言のはの中をなく〳〵もとむれば、昔の人にあひ見つるかな。

須磨の關の詠最も人口に膾炙す、曰く、

秋風の關吹きこゆる度ごとに、聲うちそふるすまの浦浪。

兼盛、忠見の詠はいま更めて論ぜず。要するにやゝ清新なる語調も加はりて、當時有數の歌人なるべしといへども、いまだ革新を試むべき一轉機をも示さず、殊に兼輔、能宣の上なりとも覺えざるなり。

その他、後撰集時代の歌人には源重之、三條右大臣定方の子朝忠、藤原兼輔の子清正、女子に伊勢の女中務、貫之の女紀内侍、遊女に肥後の檜垣嫗等、名あるもの多しといへども、一々論述するに暇あらず。曾禰好忠、藤原實方も同時の歌人なるが、その歿年やゝ遲く、かつ別に新樣の式に移りたるものなれば、拾遺集を論

ずると共にこれを說くを妥當たりとすべし。

第七章　大和物語

後撰集の古今集に異なる點の一は、男女間の情話、戀愛歌の贈答を集めたるにありとは、既に說きたるところなりげにや當時宮廷の驕奢淫靡の風は日に日に增長し、公卿宮媛は花に攀ぢ柳を折りて、一年のしわざの過半はたゞこの事に終りぬ。戀愛はかれらの生命なり、四季折々、花や紅葉につけて、誰か戀を歌はざりける。かくてこの風習の久しくうち續くに從ひ、折にかなひ思の切なる詠歌の、後世の例にもなるべきを集めて、これを傳へんと欲す。こゝにおいて後撰などの撰集にも、この類の歌を集めたるが、これはなほ歌を主として事實を盡さず。更に事實を傳へんが爲に、大和物語を生ず。また己が情事を寫して自ら慰めんが爲に、蜻蛉日記は出で、なほ事實を傳ふるのみにてはあきたらず、假設の人物を設けて宮廷生活を具體的に示さんが爲に、宇津保物語は成りたり。大和

には伊勢、蜻蛉には土佐、宇津保には竹取の先蹤あり、これらの先蹤に依りて、ここにこれらの書を現ぜしめ、これらの書ありて、而して次々に出づべき枕草紙、源氏物語等の魁をなしたりき。

大和物語二卷は、從來、伊勢物語に次いで世に行はれ、歌を學ぶものの必ず見るべきものと稱せられたり。顯昭の云く、歌合の歌には、物語の歌をば本歌にも出し、證歌にも用ふまじと申しければ、源氏、世繼、伊勢、大和とて歌よみの見るべき文と承るといへり。千五百番歌合の判されど大和物語は伊勢、源氏ほど盛に行はれたるにはあらず、從うてその註釋もかの二書の如く多からず。その本にはもと六條家の本、二條家の本等の差別あり。北村季吟の抄は定家自筆の本に從へりといふ、すなはち二條家の本にして、蓋しその原本は現に前田侯爵家の祕藏にかゝるものならんか。今日行はるゝところの版本には、活字本、慶安元年の刊本享和三年、上田秋成の校正せる本、群書類從本、文學全書本、國文大觀本等あり。註釋の書には、版本に季吟の抄、一華堂切臨の首書、井上文雄の冠註等あり、寫本に大和物語註、賀茂眞淵の直解、その他、世に稀なるものに虛靜抄、錦繡抄等あり。

本書は延喜頃より天暦前後までの男女のなからひ、和歌の贈答などを主として記したるものなり。これをしも大和物語と題するは如何。北村季吟は袋草紙の説を引きて、「清輔説云、其名目和語の由歟と云々。我ひのもとのことばをもて、やまとうたの道によりたる古事共をかきあつめたるゆゑなるべし。又やまとものがたりは伊勢物語に對して爾云ともいへり。之を尋ぬべし」といひ、(大和物語抄)荷田春滿は、大和物語といふは、今の京のこと多かれど、はた大和の國にてありしことをも書きたれば、大和と名づけしものと見えたりといへり。(群書一覽所載)賀茂眞淵は論じて曰く、

こを大和物語と名づけたるは、伊勢物語にむかへたる名なるべしとなん、或人はいひける。げに條々のついでも定めず、書きたる樣かれにならへる物なれば、名もさる心にこそあらめ。されど大和とは、上つ代には今の大和國をのみいひしを、藤原、奈良などの都のころよりぞ、おのづから此をす國のすべたる名ともなれりける。然れば此山城の都にての事を書きたるものを、大和物語といはんは、よしなきに似たれども、猶伊勢にむかへて都物語てふ心と聞

ゆるにつけて、しばらくこを助けていはば、萬葉集に吉野の離宮へ幸ませし時の歌に、「大和には鳴きてか來らむ、呼子鳥、象の中山よびぞこゆなる」とよみたり。吉野もやがて大和の國なるに、更に大和にはとよめるは、此時の藤原の都をさせるものなり。しかあらば國はいづこにもあれ、都べをさして大和といひけん事、後までも傳へいへれば、山城の都をさしても、大和とはいひつらん。萬葉などもていはんは、此程の世の人の心めかず思へど、試にいふのみなり。すべて此名の事を樣々にいひしろふ人もあれど、よるべき事はきこえずぞある。解直

この論はまことに「試にいふのみ」なるべく、好むところの萬葉に偏して說を立てたるものにして、要するに附會の言たるを発れず。井上文雄が大和は日本の總名にして、諸國の事どもを書きたれば、日本の物語といふ意なりと說きたるは、冠註即ち袋草紙に從へるなり。案ふに漢詩あるが故に和歌の名あり、外國の對稱なきに日本の物語といふもいかがはしく覺ゆれど、あるが中にこの說や正しからん。或は和歌を敷島の道ともいへば、これを主としたる物語ゆゑ、歌物語

といふ意ならんかとも、思はるれども、この說もまた臆測に過ぎず。或は伊勢物語は伊勢の國のことを記したる故に、その名ありといふに擬して、春滿のいへるが如く、大和物語も大和の國のことある故なりとせば、いかに。なるほど本書の中には大和の國にて起りたる話もあれども、攝津その他の國々の話も多し、また小野宮實賴が大和といふ女と契りし話もあれど、これも殊にこの篇の眼目といふにもあらず。伊勢物語は古本の齋宮のことを最初にかきたる本ありといふが故に、これによりて、その書名も起れりといひたれど、大和物語にはさる本ありともきこえねば、伊勢に倣ひてその名を解釋するは、牽强附會の嫌あり。されば しばらく日本の物語といふに從ひてん。但し伊勢に對して名づけたる名稱なることだけは疑ふべからず。

大和物語の作者と時代とにつきては、また異論あり。抄に論ずるところまづ穩かなり。曰く、

作者の說も一方ならず、あるは在原滋春の所作なり、あるは花山院の御作り物語とも申つたへて侍り。此本をもて此兩說を案じ侍るに、滋春のかけりと

定めん事覺束なし。此物語のうちに、在次君ときこゆるが、甲斐の國にて身まかるとて、「假初のゆきかひぢとぞ思ひこし」とよめりし事は、古今集にも正しく滋春が母にみせよといひおきつる由みえ侍る。しかあればいかゞとぞ思ひ侍る。一條禪閤、御所の歌林良材集には、偏に花山院の大和物語とかゝせたまへるこそ、たゞに故なきには侍らじと、おし量られ侍れ。又此物語にも、此帝の御時まで侍りし人々の歌、折々交はりて見え侍り。今ひそかに思ひ侍るに、滋春のかきたまへると云ふも、古の説なれば、ひたすらに誣ひがたし。かの伊勢物語を、業平の朝臣の自記とも、伊勢の御の筆作とも、二かたに定め難きにとりて、かの自記の物有りしに、又伊勢の御の作り加へて、伊勢物語と名けたりとかや、諸説に決し侍れば、今の物語をも、はじめ在次君のあらまししるしおきつらんに、又彼帝の製作にて、其後々の事どもをも補ひおはしましけるとや見侍らん。或人の云、滋春のかきたりといはんことの覺束なさは、其謂あまたあり、しかあれど花山院のかゝせたまへりといへらんことも、何のよりどころにてか、正しく定めきこえんと。やつがりが曰く、是たゞ舊説にまかす

るばかりにて、何れもさせる證跡は侍らず。さりながら又管見のよりどころは、此花山の帝は……佛道をおぼしこめにけり。此大和物語に、始には亭子の帝おりゐの御心ある事をかき、次に御ぐしおろし、山踏せさせたまふことなどかきつらねつゝ、巻軸には花山の僧正の「うつぶしぞめの麻のけさなり」とよめるをもて、一部をとゞめさせたまへりけり。これらの文體を見るに。かの帝の御心ありてもや、かく物せさせたまへるならんとこそ、愚意におしはかられ侍れ。但、清輔の説に、袋草紙云、作者不審、まづ朱雀院の御時、天慶の始の事にや。先帝は延喜御宇、おほきおほいまうち君と號するは貞信公なり、兼盛非檜垣の嫗等の歌ありと云々。愚案に、貞信公は、朱雀院御宇、承平六年に太政大臣になりたまへり、兼盛は後撰集の頃より花山の帝の御頃ほひまでもながらへたまひしよしに侍り、檜垣の嫗は、天慶四年、純友が騒の頃、「わが黒髪も白河の」とよめり、いづれも時代その頃なり。猶此説により侍らば、清愼公號小野宮左大臣を此物語に今の左大臣と侍り、是も天慶年中に左府に任じたまへるよしなりければ、いかさまにも此頃出來たりといはんに、つきなきには侍らじか

し。清輔公の頃ほひにだに、既に作者は詳ならずと侍るは、其後の説よりさもやと心も惑はるれば、たゞ京極黄門の伊勢物語の奥書に、上古之人、強不可尋其作者、只可翫詞花言葉而已とかゝせたまへる金言にならひて、此物語もさておき侍らんか。

直解は抄にいふところの時代を非なりとして曰く、

此書は在原滋春のかけりといへど、時世いとことにて、ずなはちこの人の専も入りたれば、いふにもたらず。花山院のかゝせまししなどもいへり。今考ふるに、此院のかゝせましして、ふ事は知りがたけれど、凡此書かきけんは、其御時などの手ぶりと見えたり。されど此おはしまし頃までありけん人の歌も入りたり。かゝる物には、昔人の上をこそいへる習なるに、いかにも覺束なし。其程遠からぬ清輔朝臣のかける物にすら、作れる人は知らずとあれば、後にいへるはおしはかりの事しるきなり。さて此書に先帝とあるを、延喜の御代とし、太政大臣とあるを貞信公とし、今の左大臣といふを小野宮殿とするにつけて、天暦などの頃に出こしなどいへど、こは條々異にて、古なる、後なる、

交れり。その古をいふ時は、その折に從ひて、今の左大臣など書くこと、常なれば、是も時をさすに由なし。たゞ平兼盛主は專ら天曆の御時に見えたる人にて、花山の御時までもありつらんこと、誰がいへるも同じ。且ことばの樣、古ごとの殘れるも、誤れるも、又これかける人の自らよみつらんと見ゆる歌のあるに、その歌ども、圓融、花山、一條の始つ方の御時までの手ぶりとこそ見ゆれ。』

以上の二說を主とす、そのほかには耳新らしき說ありや否やを知らず。季吟と眞淵との說は各よくその學風を表はせり。彼は該博なる學問を以て、なほ從來の傳說に戾るを欲せず、此は卓抜なる識見を揮うて、舊說を破ること望ましきよりも過ぎたり。今、以上の說を併せ評して、試みに管見を陳べんか。

一、この書の作者を在原滋春といふことは、根據ある說にもあらねば、信ずるに足らず。滋春は業平の次子なりといふを以て、その父の作なりといふ伊勢物語に摸して作れる大和物語を、その子の作と稱したるに過ぎざらんか。但しこゝに注意すべき點あり。そはこの物語の半ば少し過ぎたるところにて、この書の體裁は一變す、その境に滋春のことを記したるところ二箇條あり。そ

の後の條に、「假初のゆきかひ路とぞ思ひしを、今はかぎりの門出なりけり」といふ辭世の詠をよみて遠逝せりといふは、頗る伊勢物語の結末に似たり。また前の條に、滋春のことを記し、その終に「今は皆ふるごとになりにたる事なり」といひて、ことに懷舊の情をもらせり。他に古事になりにたること、いかほどもありながら、こゝばかりにかくあるも、何となく滋春に關係ある人の筆のすさみにやと、思はるゝところなきにあらず。されどこれらはなほ一の疑問に過ぎざるのみ。

二、作者を花山天皇といふこと、歌林良材に記せりといへども、禪閤兼良の頃は、誤に誤を傳へ、殊に僞說を構へて世人を欺くことの多き世なれば、この說も固より信ずる能はず。季吟は首尾の記事につきて、由ありげにいひしが、これは余が滋春につきて注意すべしといひし說よりもなほはかなくして、到底證據とするに足らず。

三、本書の時代につきて、書中に先帝、太政大臣、左大臣などあるは、これを測るべき尺度とするに足らずと、眞淵がいへるは、褊狹に過ぎたり。なるほど先帝と

いへば、醍醐天皇に限らず、宇多天皇をさしたるところもありて、一概にいふべからずといへども、なほ小野宮實頼を今の左大臣といひ、藤原師尹を今の左兵衞督としたるなど、時代も一致して、必ずやその頃の作ならん。師尹が左兵衞督たりしは、天慶十年より天曆七年までのことにして、また書中に故大納言と稱するは、天曆四年に卒せし藤原清蔭をさせば、これより推して、大和物語は(その全部といふ能はずとも少くともその一部は)天曆四年より同七年までの間に著はされたるものなりといふを得べし。

四、さらば季吟のいへるが如く、この書ははじめに滋春の書き、後に花山天皇の補ひたまへるなりとはいふ能はずとも、眞淵のいへるが如く、古なる、後なる、折々の文入り交れりといふ說は如何。中に後人の作の攙入せずとは斷言し難けれども、文章の組織結構、大體において彼此相違したる點あるを見ず。余はこれを別人の作を集めたりといふに躊躇すといへども、なほその前後の體裁の一變したるは疑ふべからず。すなはち二卷のうち、下のはじめ二三葉までを境として、その前半は伊勢物語の如く歌を主とし、散文はたゞ和歌の

小序の如く簡短を旨として、その歌を作るに至りし事情を知らしむるに過ぎず。後半は文章を主とし、古書口碑に材をとりて、あはれなる物語を集めたるものなりとす。

要するに大和物語は片々たる事實を輯めたるものにして、文學的價値甚だ多からず、全體を概括してこれを論ずるは、また容易のことにあらず。今たゞこの書に取りたる材料を檢するに、前後を通じてあらはるゝ人物は、寛平頃より天暦までのもの多く、記事の最も多きは故兵部卿宮(陽成天皇の皇子元良親王)、故式部卿宮(宇多天皇の皇子敦慶親王)、故源宗于、故源淸蔭、良少將(良岑義方)、平兼盛等にして、躬恒、兼輔、敦忠、朝忠等の事も散見す。女子には桂皇女(宇多天皇の皇女孚子內親王)、故俊子(藤原千兼の妻)、監命婦(良少將とわけありし人)等の事多く、宗于の女、中興の女などもあり。殆ど全く後撰集のうちに出でたる歌人なり。本書の前半はこれらの人々の情話をありのまゝに記したるものとす。必ずしもありのまゝとのみいふを得ざるべく、勅撰集と同じ和歌の作者を異にしたるもあれば、事實ならざることもあるべけれど、そはことさらに實を避け想を構へ

たるものにあらずして、恐らくは誤り傳へたるを、事實と思ひて記ししものなるべし。後半はこれらの近代の人物の情話よりも、むしろ材料を古書口碑に取り、作者の想像によりて、多少の話を加へ、歌を挾みたるものなり。たとへば津の國處女塚の傳說は、萬葉集に出でたるを取りて、二夫が死後の執着の樣を加へたるもの、猿澤の池に身を投じたる采女、および「淺香山影さへ見ゆる」と詠みし采女の故事も、また萬葉に基きたるものなり。伊勢物語の記事を敷衍したるところも少からず、姨捨山の傳說は古今集中の歌に支那の小說を附會したるものなるべく、難波の葦刈の傳說はその歌拾遺集にも出でたれば、その頃、世にいひ傳へたる話柄なるべし。

既に伊勢物語に出でたることを、更にこの書に敷衍したるは、眞淵の說によれば、書き樣も甚だ拙くして、後人の附け加へたるものなりといへり。余も前後の體裁には相違ありといひたれども、殊に伊勢物語を引きたる記事のみ、遙かに他に劣りて後世の攙入なりとは信ずること能はず。眞淵はこれを伊勢物語の原文に比したれば、わけてその拙なるを感ぜしものなるべく、まことにこれら

の節のみ拙なるにはあらじ。一部の論は煩はしければ深くいはず、なほ全篇を通覽するに、本書はまた伊勢物語の體を學びて、その文は一に簡潔素樸を主とし、しかもなほ彼に及ばず。いまだ當時の女流の間に行はれんとする悠長なる風に傾かずといへども、伊勢よりはやゝ委しくなりぬ。委しきことのあしきにあらず、その委しさの拙なるを惜むのみ。たとへば小野好古が官位沈滯して進まざるを、源公忠の歌もて弔へることを敍して、

玉櫛笥二とせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし。

これを見て、かぎりなく悲しくてなん泣きける。四位にならぬ由、文の詞にはなくて、唯かくなんありける。

とあるは、伊勢物語に、

むらさきの色こき時は目もはるに、野なる草木ぞわかれざりける。

武藏野の心なるべし。

とあると、文勢相似て、なほ伊勢は奇抜に、大和は平凡なり。本書の文章の、また土佐日記に倣ひたるところもあり。宰相良植のはらからが、己が妻の筑紫に向う

て去るを、山崎に送れる樣を敍して、

こぎ出でて往ねれば、えかへりごともせず、車は船の行くを見て、得いかず、船にのりたる人は、車を見るとて、面をさし出でて、こぎ行けば、遠くなるまゝに、顏はいと小さくなるまで、見おこせければ、いと悲しかりけり。

といへるは、日記正月九日の條に、

かくてこぎ行くまに〳〵、海の邊にとまれる人も遠くなりぬ、船の人も見えずなりぬ、岸にもいふことあるべし、船にも思ふことあれどかひなし。

とあるを學ぶ。こはもと後漢書董祀妻傳の詩または遊仙窟のうちの句に則れるものなるべしといへど、そのことは措きて、しばらくこの二書を比較するに、さすがに土佐の簡淨は大和の冗漫にまされり。また本書の終かたに、僧正遍昭が初瀨にて妻にあひ、淸水にて小町にあひたることは、その文體の差はあれど、語句の殆ど遍昭集と同じきところ多し。されどこれは遍昭集が古めかしく見ゆるに拘はらず、ことさらに順序をかへ、言辭を改めたるところ、却つて大和物語がもとにして、遍昭集が後人の綴りたるものなることは、二書を比較するも

のの、直ちに首肯するところなるべし。さて後に至りては、唐物語、宇治拾遺物語、古今著聞集などの文は、この物語に得たること蓋し少からざらん。

第八章　蜻蛉日記

人生はいかにあはれなるものぞや、思ふには違ひ、成すには敗れ、悲喜哀樂さまざまの身の、人の上はやがてまたわが上なり、これらをかなしと思ふにつけて、同情の涙は留まらず、文事の發達するに從ひて、筆に上せて世に傳ふ。大和物語の如きは、かくして出來たり。その前半はなほ簡短なる實事譚に過ぎざりしが、後半に至りては、變じて短篇小說を集めたる如きものとなりぬ。この實事より小說に移らんとする傾向は、また蜻蛉日記において見るを得べし。いふまでもなくこの日記は著者が自家の經歷を記したるものに過ぎずといへども、平安朝の小說の多くは、自他の閱歷を以て鹽梅して、社會の生活を實寫したるものなることを思はば、この日記がたとひ寫せることは事實なるにもせよ、哀なる

わが一生の大事を取捨選擇して、體裁を調へたるところ、頗る宇津保、源氏等の小說に類似したるを知るべし。

そも〳〵日記といふものは、如何にして起れるか。かの六國史も、第一の書記は格別、その他は朝廷の記錄といふも妨なし。國史は光孝天皇に絕えたるが、これに次いで宇多天皇の寬平御記、醍醐天皇の延喜御記、延長御記、村上天皇の天暦御記等あり。皇族重臣もまた日記を作る風を生じ、重明親王の李部王記、攝政忠平の貞記、九條師輔の九暦、左大臣師尹の小一條記、小野宮實賴の水心記、同實資の小右記以下、その數甚だ多し。蓋しその始は國史編纂の資料にとて誌ししが、古實典例を重んずる風の增加するに從うて、將來の考勘に供ふる必要を生ぜしものか。されどこれらの記錄はいづれも漢文を以て記し、漢文學の漸く衰ふるに從ひて、時に假名を交へ、たゞおのれが備忘の爲に隨見隨筆するのみなれば、文體錯雜にして記事乾枯、毫も文學的趣味の存するものなかりき。しかるにこの時代に至りて、假名文の流行するに伴ひて、この文體を以て日記を作るものあり。最も古きは紀貫之の土佐日記、これに次いでは、叡山の增基法

師の熊野紀行（一名庵主）、遠江道記、大中臣能宣の榊葉日記、以上の諸書の著者については、後人の假託あるべし、いまだ深く究めず道綱の母の蜻蛉日記、そのほか諸種の歌合日記等なり。次期に及びては、和泉式部日記、紫式部日記、またいまだ眞僞を保せずといへども、赤染衛門の尾張紀行、能因法師の八十島記あり、少しく後れて菅原孝標の女の更科日記あり。平安末期に及びて讃岐典侍日記あり。菅原道眞の須磨記、清少納言の松島日記の如き贋作は、論ずるに足らず。さてこれらの假名文は、かの帝王公卿の記錄の如く、年々、日々の出來事を漏るゝことなく註し置けるものにあらずして、多くは深大の感興ある時にのみ記せるものなり。この點において、日記と紀行とは、その名異なれども、その實殆ど同じ。交通自在なる今の世には、數百里の長途も坐臥わが家にあるが如しといへども、當時にありては、十里の外に出づるも、わが經歷中の一大事、まして數十百里の旅の、行路の難、望鄕の愁、珍らかなる景色に接するにつけても、その日〳〵の感興は空しく過すに忍びずして、日記を編し、紀行を成す。二者區別して見るべからず、同種のものなること勿論にして、文學的價値の存すること、かの漢文まがひの記錄の比にあらざるなり。

殊に蜻蛉日記、和泉式部日記の類は、名こそ日記とはいへ、また遠路の紀行にあらずとはいへ、かの男のすといふ、その日〳〵の陰晴來往そのほかの雜事をも記して備忘に充つる日記とは、大に選を異にす。しかもこれを日記といふは、當時行はるゝところの日記類に倣ひて作れるが故に、著者もしくは後人のしか名づけたるなるべしといへども、その實は却つて物語に近く、或は物語の名を以て稱するものもあり。すなはちこれらは篇中に主眼たるものありて、前後の敍事すべてこの主眼に嚮ひて歸着し、一篇に統一あること、純粹なる小說の如く、主眼に關係なき日常の些事は略して記さず。普通の日記は、時に峻烈なる情感の、一事に熱中することあれども、概するに複雜なる人生は、煩瑣なる雜事をも併せ記さざるを得ず。しかるをこれらの日記がそのことなきは、これ單純なる日々の記錄にあらずして、むしろ抑欝の情の堪へがたきあり、纔かに紙筆の上に悶を遣るものにあらずや。物平を得ざれば鳴る、その位足り、その心足れるものは、異常の才あらざるかぎりは、概ねその處に安んじて、爲すこともなく世を送るに、もし事志と違ひ、憂きことの重なるもの、勇氣あるときは、進んでは世

と戰ひ、退いては文筆に懷を述ぶ。蜻蛉日記の如き、またかくして書かれたるものにあらずや。

蜻蛉日記三卷、流布本はなほ別ちて八冊とす。刊本には元祿十年、寶曆三年、文政元年のもの、および近時の版に文學全書本、國文大觀本あり、いづれも誤脫少からず。註釋の書には蜻蛉日記考證あり、元祿九年、契沖が水戸家の本を以て校訂せしものにして、考證といへど、僅かに篇中の和歌を撰集に出でたるものと比較せし類に過ぎず。その後、天明五年、蜻蛉日記解環十八冊の京都にて刊行せられたるあり。坂徵仲文甫が考證本に本づきて註釋を加へたるものにして、詳密なるものながら、編者が國文學における知識の甚だ淺薄にして、孟浪杜撰の說到るところに存するを見るべし。

この書を蜻蛉日記と名づけしは、上卷の終に「かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をし歎けば、聲改まるも悅ばしからず、なほ物はかなきを思へば、あるかなきかのこゝちする蜻蛉の日記といふべし」とあるによれり。著者は東三條攝政藤原兼家の妻にして、右大將道綱の母なり。天曆八年、兼家が二十六歲、從

五位下右兵衞佐なりし時、通ひそめしに筆を起し、翌年、道綱を生み、それより天延二年、兼家が四十六歲、正三位大納言右大將に、道綱が二十歲、從五位下右馬助になりし時に至るまで、二十一年間の事を記せり。そのうち、天德三年より應和元年まで、三年間の記事なしといへども、これは脫漏したるにあらずして、はじめよりその要少ければとて、記さざりしものにやと覺ゆ。百年の苦樂他人による、妙齡の女子いまだ嫁せざるに當りては、許否の權を有して、さすがに男の心を惱ましむれど、一たび契を交はしては、ひたすらに男の情の薄らがんことを恐れ、後朝の手紙に胸轟かせ、數日の無音に秋風を喞ちて、夜晝心の安まる隙もなきは、當代の女性の習にして、道綱の母の一生は、この女性を代表して餘ありき。契りてのち幾ばくもなく男兒生誕の幸はありしかど、兼家は深くもこの妻を愛せず、またすげなくかれはつるにもあらねど、たゞ心のむく折々訪ひ音づるゝのみなりき。これ一つは前に設けたる妻ありて、その腹に男女あまたの子あり、こゝをつひのよすがと定めし故にもあるべし。試みに兼家の妻妾たりし人の略系を揭げんか。

○藤原魚名……五代山蔭（中納言兼民部卿）―仲正（從四位上攝津守左京大夫）
　├爲保（從五位下）
　├景興（從五位下）
　├安親（正三位參議）
　├茂秀（從五位下）
　└女（兼家妻　或云安親女　贈正一位時姫）
　　├道隆（中關白）
　　├道兼（關白）
　　├道長（御堂殿）
　　└詮子（圓融天皇后　東三條院　一條天皇母）

○藤原長良―高經―維岳―倫寧（伊勢、河内、上總、常陸、丹後守　又陸奥守）
　├理能
　├長能（歌人）
　├女（紀友則子清正妻）
　├女（兼家妻　蜻蛉日記作者）―道綱（右大將）
　└女（菅原孝標妻　更科日記著者母）

○藤原國章（非參議、皇后宮權大夫、從三位）―女（兼家妻）―綏子（三條天皇麗景殿）

〇源兼忠宰相――女兼家妻
　　　　　　├禪師兼家の子にあらず
　　　　　　└女道綱の母養ひて子とす

このほかになほありしやも知るべからず。これらの中にて、三人ともに勢あり、正妻の位置を有して相下らず、時には嫉妬の爲に爭鬪すること三日に及ぶ、世人非笑して三妻錐(ミツメ)といへりとぞ。されどこの家庭の三國鼎立は長く續かずして、主權はいつしか仲正の女に移りしなるべし。

兼家の妻のいづれにかありけん、はじめは夫の愛を專らにして、道綱の母がいみじく憎しと思へる女あり。その出産の騷を聞くにつけても、心いられて、同病相憐み、見どもあまたありと聞くところ(これやがて道隆等の母ならん)と、和歌の贈答などもして、わづかに心を慰めたりき。後かの女すさめられ、兒さへ死したれば、「たちまちにかくなりぬれば、いかなることゝちかはしけん、わが思ふには今少しうちまさりて歎くらんと思ふに、今ぞ胸はあきたる」といへり。されどなほ幸運はその頭に宿らずして、勢は子女多き仲正の女に及ぶべくもあらず。かの腹に生れし道隆はいふに及ばず、七歳の弟なる道兼さへ、道綱を超えて昇進

し、詮子は圓融天皇の後宮に時めかしぬ。はじめは己が爲に、後には子の爲に、霜夜の鴛鴦、燒野の雉子、道綱の母が絶えぬ物おもひはいかなりけん。
兼家が道綱の母に疎々しかりしは、道隆等の母を定まれるよすがとせしが爲にもあるべしといへども、その故はこれのみにもあらざるべく、またよき後見のなかりしが爲といふのみにもあらざるべし。案ふに兼家と道綱の母とはその性質頗る相戻るところありしが如し。兼家は快活にして、諧謔を好み、常節に拘はらず。道綱の母は、見めいたるかたにはあらねど、沈みがちにして、深く佛道に心を染め、多くは佛龕の前に座して、稱名に餘念もなきを、いつの間にか兼家はふと入り來りて、香を散らし、數珠を投げ、天の下の猿がう言をいひ罵りなどす。されば彼は此の言ふことに心ゆかず、此は彼のふるまひに腹たちて、おのづからかれ〳〵に遠ざかる時もありき。されど性質の相反せるは、却りて相引くこともあり、兼家ももとより道綱の母を嫌ふにはあらず。此方より物いひかけても、その妻のつれなく答へもせず、空しく一夜をあかしなどすれば、憎しとは口にいへど、さりとて止まれず。「更に來ずとなん、われは思はぬ。人のけしきばみ

癖々しきをなん、あやしと思ふ」といひ、また「いとにくゝしたまふめれば、疎むとはなくて、いどみなん過ぎにける、忘れぬことはありながら」といひて、かつはその意氣地も、面白く、また裁縫に長け、文筆にさへ巧に、女の手わざは何くれとなくよくすれば、さはいへど棄てがたく、折々は物縫はせ、また歌を直させ、代作などもせさせしなるべし。されど道綱の母は才識拔群、みづから高く標置するものなるに、とかくその夫に愚弄せらるゝやうに覺えて、世をうしとのみ涙に明し暮して、一たびは洛西鳴瀧に隱れて、尼にならんとせしことあり。この破裂はやがてこの日記の焦點とも見るべく、この出來事ありし前後こそ、この書の筆とりそめし時なるべけれ。

そも〳〵なげきになげきの重なりて、道綱の母が鳴瀧に籠りしは、天祿二年のことにして、日記の中卷にこれを記せり。上卷は天曆八年より安和元年まで、十五年間のことを含めるに、頁數は全篇の三が一にも過ぎざれば、もとよりおのれと兼家との關係の大體を述べたるに過ぎず。まづ夫が通ひそめしより、早くも思のまゝならぬことは、いづれのところにも見え、道綱の片言もて、その父の

今來ん〳〵といふをまねすること、著者の親が奥州へ下ること、著者が母を失ふこと、初瀨に詣づることなど、稍〻細かなれど、中以下の委曲を盡せるに比すべくもあらず。よりて思ふに、上卷はその時々にかけるにあらずして、後に思ひ出でて記せるなるべし。中卷は安和二年、天祿元年、同二年の事、下卷は天祿三年、天延元年、同二年の事にして、記事はこれらの年に至りてはじめて委し。天祿二年、同三年の如きは、殊に詳かにして、何日に雨降る、風吹く、火ありなど、一々記せるを見れば、これらはその日〳〵に筆とりしものならん。天延元年に至りて、またやゝ簡略になりぬ。さてこの委しく記せりといふ天祿二年こそ、心安からぬことのみ積りて、長精進を始め、鳴瀧に籠りし年にして、その年のうちに山は出でしが、事のさまなほ面白からず。かくてぞ心やりに物語やうの日記に筆とりそめたるものにて、それにはじめの事をもつけ加へたるものならんか。

これよりさき兼家のつれなく愛情の薄きを歎きくらしては、人の哀も己が上につまされて、いとゞ涙のみぞ多かる。藤原高光が叡山に上りて出家し、その妻も續いて尼となれるを憐み、源高明が左遷せられ、その妻の剃髮せるを痛みて、

彼には短歌、此には長歌を贈りぬ。つく〳〵とふさぎのみする心を慰めんとては、初瀬に詣で、辛崎に祓し、石山に詣づることもありき。それも人少なに、物淋しく出でたちて、「わが心の怠にはあれど、われならぬ人なりせば、いかにのゝしりて」と心の中に思はれぬ。天祿元年、道綱が童姿にて賭弓を射、かつ舞ひたることあり、また元服の儀もあり。その折しもぞ、わが子の生長を樂み、その父の志を悅びたれど、はかなやそれも一時。

　思ひせく胸のほむらは、つれなくて涙をわかすものにぞありける。

などよみて、二年四月朔日より長精進を始め、六月四日には遂に鳴瀧の寺に籠りぬ。あとより兼家來りて、歸らんことを勸むれども、肯んぜず、なほ彼此の人音づれ來て、同じく都へと促がすをも、拒みてはあれど、なほ、

　かけてだに思ひやはせし、山深く入相の鐘に音をそへむとは。

とぞうちうめかれける。されど兼家も重ねて來り迎へ、道綱も切にこれを催ほせば、せん方なくて山を出でぬ。よりて兼家は諢名して雨蛙といへり、尼歸るの意なり。さて後も思ふやうにもあらず、悲は絶えねど、やう〳〵あきらむる心も

つき、胸も和ぎたるが如し。もしや兼家の心も嚮くやとて、兼忠の女が腹の女兒のまだ幼きを、滋賀より迎へて養ひぬ、恰も源氏物語に夕顏の君が腹の玉鬘の君を光源氏が養へるが如し。この養女やゝ生長したる時、道綱の長官にてその叔父なる人の、垣間見て妻とし望むことあり、その簾の間よりのぞき見たるは、これも源氏に柏木右衛門督が女三宮をかいまみ、また夕霧の君が繼母紫の上を覗ひたると、やゝ相似たり。兼家はこの結婚の望を許したるに、道綱の母のみ許さざりしにも、この女性のかたくろしき性質は見ゆ。かくてこのあたりにて日記は終りて、結末の明かならぬは惜むべし。かく切れたるは、書かざりしか、また失せたるか。その後に補遺として和歌を添へたるは、蓋し後人がこの日記に入らざる著者の詠を補へるなるべし。

要するに本書は自敍傳の寫實小說に近きものなり。その變化に乏しきは實際の自敍傳には已むを得ざるところ、また當時の上流社會が安逸にして單調なる生活を敍するには免れがたき缺點にして、宇津保、源氏の如きつくり物語といへども、またこの非難を避くる能はず。この日記を類似の點多き和泉式部日

記に比するに、此は敦厚、彼は浮華、直ちに二書の著者が性格に大なる相違あるを認むべく、この書は殊に沈痛の感を覺えて、道綱の母が當時たぐひ少き貞節の淑女たりしを示す。兼家常に諧謔し、放言すといへども、戯れにもその妻が他人に意ありと疑ひ言ひしことは、前後たゞ一回のみ。また著者がその子に對する慈愛の情の醇厚なるは、そゞろに同情の涙を抑ふること能はず。すべてこれらの事實を記するや、敍述の精緻なること類なく、己が母を失へるところ、山を出づるところ、右馬頭と佐とが對談を聞くところなど、心のゆくまゝに筆は從ふ。殊に自然と感情とを融和せしめて、悲喜の思を述ぶる間に、單簡なる敍景の文を挾むこと少からず。かの對談の樣を寫し、一轉して「雨うち亂る、暮にて蛙の聲いと高し」といへるが如きは、畫龍點睛のこゝちして、その折の景況紙上に躍然たり。蓋しこの書は女子の日記の最も古く、また上乘なるものにして、これを宇津保に比べて、毫も遜色なきものとす。

たゞ本書を讀んで多くの讀者が顰蹙するは、その文章の解しがたきにあり、これ一は主格省略の甚しきと、一は伊勢、大和などの物語と違ひて、章句の前後聯

續したるとによるものにして、この文體はやがて女子に普通なる文として、また源氏物語以來、物語に普通なる文として、永く行はるゝに至れり。

蜻蛉日記と類を同じくし、また時を同じくしたるものに、多武峯少將物語あり、高光日記といふも同書なるべし。高光は九條師輔の八男。母は醍醐天皇の皇女雅子内親王にして、その腹に高光、爲光、女子には五の君あり、高光天暦二年に昇殿を許されしより、官位進んで從五位上右近衞少將兼備後權介に至る。されど性俗塵に交はるを喜ばず、嘗て詠じて曰く、

かくばかりへがたく見ゆる世の中に、うらやましくもすめる月かな。

應和元年十二月、その妻と愛妹と幼き女とに名殘を惜みつゝも、にはかに叡山に上り、横川の增賀上人につきて薙髮し、法名を如覺といふ。同二年、多武峯に移り、草庵を結びて極樂房といふ、正暦五年寂す。家集一卷あり。物語は高光が出家せしよりその翌年の夏頃までの事實を記せり。

この書の刊本は群書類從本と、文政七年に丸林孝之が註せる考證本と、文學全書本および國文大觀本とあるのみ。榮華物語月宴卷に、高光が入道せしことを

記して「これは物語に作りて世にあるやうにぞきこゆめる、哀なることに、この事をぞ世にはいふ」とあるものこれなり。高光とその妻妹等と和歌を贈答せしことを記して、文よりも歌を主とす。書中の人いづれも第三人稱を用ひ、なほ高光には敬稱を用ひたるを見れば、蓋しこれに陪侍せし人などの筆記せしものなるべし。文章など取り出でていふべき程のこともなければ、蜻蛉日記と同時同種のものとして、こゝにかの日記の次にその名を擧げおくのみ。

第九章　宇津保物語(一)——その梗概

平安初期の末、既に竹取物語あり、わが國の小說のはじめと稱せらる。伊勢物語これと並んで、事實と想像とを交へて、また一種の小說なり。この期に至りて、大和物語は伊勢に倣ひ、なほその後半は短篇小說を輯めたるが如し。蜻蛉日記はすべて事實を記せりといへども、その興趣の深さは、小說をよむに異ならず。時勢は既に催ほせり、かくして浩瀚なる宇津保物語の出でたるも偶然ならんや。

第三期に至りて古今無雙の傑作たる源氏物語あり、その以前すなはち第二期までのうちに出來たる小說は、ひとり竹取、宇津保の二三のみに限らず、文運の發達に促がされて、この類の書は前を爭うて一時に世に出でたるが如し。その書名の枕草紙と源氏物語とに散見したるを併せ列ぬれば、竹取、伊勢、宇津保、落窪、住吉、正三位、殿うつり、月まつ女、交野の少將、梅壺の少將、人め、國讓、うもれ木、道心すゝむる松が枝、こま野、からもり、（かはほりの誤かと黒川春村はいへり）藐姑射の刀自、芹川の大將あり。僧源信の勸女往生義といふ草紙に（顯註密勘所引）いまめきの中將、長井の侍從、伏見の翁の名を揭げたるも、蓋しまた當時の小說なり。著作かくの如く多かりしかど、多くは散佚して存せず、今日に至りては、僅かに竹取、伊勢、宇津保、落窪のあるのみ、住吉、正三位の書また存すといへども、後人の僞作にして、その世のものにあらず。典籍の湮滅は惜むに堪へたりといへども、これが爲に當時の小說界の情況も尋ねがたしといふにはあらず。枕草紙にも、まづ「住吉、うつぼの類は」と提擧して、さて後に多くの物語の名を列ね、源氏物語繪合卷には、竹取にうつぼの俊蔭卷を合せ、伊勢に正三位を合せたる由記したるを見れば、これらの三

四者は當時にありても最もすぐれたる作と仰がれたること疑なし。住吉、正三位の原書を得ざるは遺憾なりといへども、竹取、伊勢によりて、最初の小說を知るべく、第二期の述作は宇津保のあるが上に、なほ落窪の存するありて、その發達の程度を覗ふべし。況や宇津保の浩瀚なる、源氏と兩々相比して、他に比なかるべきをや。瓦礫はおのづから世に埋もれ、崑玉永く光あり、泛々たる衆篇を失へりといへども、一二の大作の以てこれに代るべきありて、古代文學は幸に後人の窺知を許す、深く歎ずるに足らざるなり。

宇津保は、中古以來、源氏の盛名に壓せられて、世に喧傳せず、全本は存すれども、錯誤極めて多く、從うてこれを讀むものも少く、註釋もまた出でざりき。江戶幕府時代に至りて、古文學の研究の開くるに及びて、やゝこれを繙讀するものもありしが、なほその誤多くして讀みがたきより、盛には行はれず。ひとり最初の俊蔭の卷のみ他を拔いでもてはやされて、或はこれを以て宇津保の全本と考ふるものさへあり。されば刊本にも、この俊蔭卷三冊を單獨に發兌したるもの、最も普通に行はる。全本は二十卷、三十冊あり、延寶五年に發刊したるもの、文化

三年にこれを再版したるものあり、近頃、國文大觀本の出でたるありて、世に行はるゝのみ。寫本には、古寫本、契沖本、荷田在滿本、山岡俊明本、田中道麿本、狩谷望之本、塙檢校本、村田春海本、清水濱臣校合本等、種々あり。異同を校合し、辭句を註釋し、或は論評を加へたるものには、細井貞雄の玉琴あり、五卷のうち二冊は刊行す、貞雄また新釋の著あり、玉松、二何抄もまたその編述にかゝる。新治は巨勢利和の著、刊行せられずといへども、玉琴と並んで宇津保研究に最も便ある書なり。類語の類には、本多忠憲の不拂塵、小山田與清の類語、足代弘訓の頭字部類、および某氏の類標等、いづれも寫本にて傳はる。雜著には、安藤爲章の宇津穗物語考、桑原やよ子のうつぼ考、殿村常久の年立等あり。その數少きにあらずといへども、有益なるものは稀に、これによりて津梁を得んと欲するもの、なほ望洋の歎なくんばあらず。

宇津保の卷々の順序は、流布の刊本錯誤甚だ多く、到底據るに足らず。これを訂正したるは田中道麿にして、こは尾張人淺井某が信ずべき古寫本をもてるによりて考定したるものなりといひ、本居宣長の玉勝間に、この改訂の順序を示

せり。流布本はたゞに卷々の順序を誤るのみならず、またその名をも誤り呼べり。その誤りたる順序は示すに及ばず、次に道麿が改訂の順序に從ひて、卷々の名を示し、流布本の名稱に誤あるところは、これを註す。

一、俊蔭　二、藤原君　三、忠こそ　四、梅花笠（一名春日詣）　五、嵯峨院（流布本には藏開下と誤る）　六、吹上上（吹上下と誤る）　七、吹上下（吹上上と誤る）　八、祭使　九、菊宴　十、貴宮　十一、初秋（一名、とばかりの名月、或は相撲節會、或は内侍督）　十二、田鶴の群鳥（一名、沖つ白波）　十三、藏開上　十四、藏開中　十五、藏開下（國讓下と誤る）　十六、樓上上（樓上下と誤る）　十七、樓上下（樓上上と誤る）　十八、國讓上（國讓中と誤る）　十九、國讓中（國讓上と誤る）　二十、國讓下（嵯峨院と誤る）

この中、年立に、樓上、國讓の順序を顚倒したるは、當然の所置なり。村田春海の織錦齋隨筆に、卷々の順序を記し、「これはある堂上の人の考へたまひしなり、誰とかその人を忘れたり」とあるは、ほゞ前記のものと同じく、たゞ吹上、祭使を顚倒し、また樓上、國讓を顚倒せり、これまた注意の値ある說なり。次に以上の順序に

なほ一二の管見を加へて、その巻々の梗概を記すべし。

俊蔭　昔、清原俊蔭といふ人ありき。聰明たぐひなし、十六歳にして選ばれて、遣唐の使となりて出で立ちしが、暴風にあひて波斯國に漂流し、測らずも三人の異人にあひて、琴をならふ。また遙かに伐木の丁々たる音の、こよなう清く、己が琴の音に通ひて、三年絶えざるを怪み、聲を慕ひて尋ね入るに、「千丈の谷の底に根をさして、末は雲につき、枝は隣の國にさせる、桐の木を倒して、わり木造る者あり」、すなはち阿修羅なり。人のけ近きものは、虎狼にても寄せぬを、わが食(ジキ)とならんとて來れるかと、たけり罵りたるが、國に父母ありといふを聞きて、忍辱の心あるものにはあらねど、なほわが四十人の子供、千人の眷屬を思ふにつまされて、纔かに許しぬ。俊蔭重ねて、その木の端を得て、父母の土産にせんといふに、阿修羅怒りて曰く、この木を植ゑし時、天女の宣はく、「この木は、阿修羅の萬刧の罪半ば過ぎなむ世に、山より西にさしたる枝枯れむものぞ。その時に倒して、三分に別ちて、上の品は三寶よりはじめ奉りて忉利天までに及ぼさむ、中の品は先の親に報い、下の品は行末の子供に報いんと宣ひし木」なるをと罵れる時、龍

に乘れる童天降りて、金の札を示す、「三分の下の品は日本の衆生俊蔭に施す」とあり。阿修羅驚きて、あな尊と、天女の行末の子におはしけれ。そも／＼この木、上、中の品は大福德の木にて、土を叩くに一萬恒河沙の寶湧き出で、下の品は聲によりて長き寶となるものなりとて、木造るに、天神、天女降りて、その下の品を三十の琴に造りぬ。それより俊蔭は旃檀林に入り、更に西の方に七人の僊人を尋ねて、琴を學び、またこの僊人の一人は俊蔭の孫に生るべしとの示現を受く。かくて琴ならひ終へて、佛、菩薩、僊人に琴一つづゝ贈り、みづからはなん風、はし風の殊に勝れたると、他の十とを携へて、三十九歲にして日本に歸りぬ。父母ともにうせて居らねど、時の帝(嵯峨院)の寵遇は限なし。俊蔭かの携へ歸れる琴を分ちて、帝をはじめ名ある方々に奉る。帝その聲調へよと仰せらるゝにつけて、聊かかき鳴らすに、「大殿の上の瓦碎けて、花の如く散る、今一つ仕うまつるに、六月中の十日の程に、雪襖の如く凝りて降る。」帝驚き給うて、琴の師仕うまつれと、切に宣ひしかど、俊蔭つれなくも辭して、世にもどき、三條京極に家を設けて、一人の女に琴を敎ふる外のことはなし。その女姿輝くばかりなり、帝、東宮をはじめ

て求むる人多けれど、御返しもせさせず、「女は天道に任せ奉る、天の掟あらば、國母、女御ともなれ、掟なくば山がつ、民の妻ともなれ」といひてあるに、女十五歳の時、俊蔭夫妻うち續きてうせぬ。俊蔭遺言して曰く、この家の乾の隅に、深く掘れる穴あり、上下に沈を積みて、その中に琴の錦の袋に入れたると、褐の袋に入れたると、一つ〳〵埋めり、人に見すな。幸あらば、幸極まらん時、禍あらば、禍極まらん時、かき鳴らせ、子あらば、その聰明ならんことを見極めて後、あづけたまへと、いひて歿す。乳母もうせ、家も貧しければ、使ふ人もうせ、家は日に〳〵荒れゆき、たゞ嵯峨野といふ老女ひとり殘りて、萬事を扱ふ。こゝに藤原兼正といふ人、その頃年なほ若くて、若小君といへるが、父の太政大臣に陪して、賀茂に詣づ。途に列にはぐれて、俊蔭の女をかいまみ、その荒れたる宿に一夜を明して、歸らん空も覺えず。家には、最愛の若小君の見えぬとて、父母驚き騷ぐこといとこちたく、その後はまもり嚴しくして、外にもいださず。たゞ一夜の契に、俊蔭の女は懷妊して、玉の如き男子を生みぬ。この子、五歳の時、嵯峨野の死してよりは、川に出て魚を釣りて、母を養ひしが、後にはなほ世を憚りて、北山に尋ね入り、椎、栗、芋、野老

を求めて、日を送る。ある日、大なる杉のうつぼなるところに尋ね當りしに、大なる熊ありて、この兒を喰はんとす。兒歎きて「空しくなりなば、親も徒らになりたまひなん。己が身のうちに、親を養はんに要なき處あらば、施し奉るべし。足なくば、いづくにてか歩かん、手なくば、何にてか木の實、葛の根をも掘らん、口なくば、何處よりか魂通はん、腹胸なくば、何處にか心のあらん。この中に徒らなる處は、耳のはた、鼻の峯なりけり、これを山の王に施し奉る、」と涙を流していふ」に、獸も猛き心を失ひ、うつぼをこの子に讓りて去りぬ。母子こゝに移りて住むに、心安きこと限なく、身も心も隙なれば、母は子に琴を敎ふ。諸獸集まり聞きて、涙を流し、猿は來りて種々の物を贈る。兒十二歲になりし時、東國の兵都の敵を討たんとて、四五百人この山を占めて、母子の命まさに危し。母攜へたるなん風をかき鳴らすに、山崩れ木倒れて、多くの人うせぬ。會々帝北野行幸の日にして、御供の右大將といふはかの若小君なり。遙かに琴の音を聞きて、山に求め入り、昔の人と知りて、重ねてひそかに尋ね來りて、强ひて勸めて伴ひ歸りぬ(この邊の趣、やゝ蜻蛉日記の、兼正が道綱の母を鳴瀧より伴ひ歸れるところに似たり。)さて三條

堀河に家を構へて、こゝに母子を置く。兼正天下の色ごのみにて、一條の大なる家に、その妻女三宮(嵯峨院の皇女)をはじめ、女多く置きたるが、今この母子を迎へては、その他はみな忘れ果てたるやうにて、三條にのみ居る、世の人目を側てて驚く。幼き見は元服して仲忠といひ、十八歳にて侍從になりぬ。帝(代更まりて朱雀院)も東宮も片時だに離んでさせたまはず。ある時、兼正三條の家にて、相撲の還饗し、管絃いと賑はし。左大將正賴仲忠に琴を强ふ、仲忠切に辭して彈かざること、祖父の風あり。正賴勸めて、一手彈きたまはば、最愛の女を奉らんといふ、仲忠すなはち彈く、面白きこととえも言はず

藤原君　正賴が最愛の女は、本書の女主人公なり、この卷は專らそのことを記して、前卷の仲忠の生立と相對せしむ。そも〳〵正賴は藤原君とて、一世の源氏なり。大臣の上とて橘太政大臣の女と、大宮とて嵯峨院の女一宮との、二人の妻あり。大臣の上には男四人、女五人、大宮には男八人、女九人の子あり、いづれも官位顯達し、女はよき壻とりて、一門の榮また類なし。あまたの子の中にすぐれたるは、七男侍從仲澄と九の君(貴宮(アテミヤ))とにて、共に大宮の腹、わけて貴宮の形美はし

く心らうあること、天下無雙といひつべし。傳へ聞き思ひつきて消息するもの、兵部卿宮、彈正宮、右大將兼正、平中納言正明、源宰相實忠等いと多けれど、みなつれなし。懸想人の中に烏滸なるは、上野宮といふ古王子、京童、賭博師の勸に從ひて、東山道隆寺に塔會供養して、その折、貴宮を奪ひしが、正頼に謀の裏をかゝれて、賤しき女を得たり。皇子なれど母は賤しき三春高基といふは、吝嗇第一の人、美濃國を領して、豪富のきこえあり。これも貴宮を戀ひ、今までの貪欲は忘れて、たゞこのことに金を散しぬ。太宰帥滋野眞管とて年六十ばかりなるも、同じく心を焦し、その子に懸想文かゝすとて、「われかくやもめにてあれば、ほれぼれしきを、女人求めしめんとするに、よばひ文の大和歌なきは、人あなづらしむるものなり、わが一つ作りて」といひ、その文には「やもめにて捨て置き奉るよりは、翁の片庵にゐてまして、翁のたうべん物は初穗毎にとり、夜晝は魚をくはしめてこそは、かしづきおけらめ。莊物らはたゞ身一つに奉り、御衣器物までも乏しくてはあらじはや。面勵まして人の見奉るべくあらば、國王の一の妻になりたうべらむにも、劣らじをや」などいふも、をかしかりき。かゝる中に才學俊秀なる當

世の才子は、良峰行政とて、幼き時、父母に具して筑紫に下り、誘拐かされて唐にゆき、十八歳の時、歸朝したる人なり。妻をと勸むるもの少からねど、今までは應ぜざりしが、これもまた切に貴宮を戀ひそめたり。

嵯峨院　その頃、殿上人にては、仲賴、行政、仲忠、仲澄にまさる人なく、この四人が願ひ申さん官は、一年に五度も六度も賜ひなんと、帝もおぼしぬ。行政のほかの三人もまた貴宮を慕ふ戀の奴なりき。この卷は俊蔭卷の還饗をうけて、筆を起せり。かの時より仲忠は深く貴宮の兄仲澄に睦ぶ、蓋し貴宮に近づくよすがにと思へるなり。時々消息するに、つれなくはあれど、さすがに貴宮も仲忠のみははづかしく思ひたり。されどいづくんぞ知らん、仲忠が睦べる仲澄も、またあるべくもあらぬ煩惱の焰に身を燒きをらんとは。次の年の正月の賭弓の還饗は、左大將正賴の家においてす。その折、左近少將源仲賴屛風の間より貴宮の光り輝く姿をかいまみて、思にえ堪へず。仲賴は宮內卿在原忠安といふものの壻なり、忠安は勢なく貧しけれど、その女はまたなく美はし。年頃、女御にすゝめ、また妻に求むる人もありけれど、耳にも入れて過しけるを、この少將切に請ひて、そ

の望を叶へてよりは、異女は思ひもかけず、二なきものとその妻を愛せり。しかるに貴宮をかいまみてより、こゝち例ならず「二なくめでたしと思ひし女も、物とも覺えず、片時も見ねば戀しく悲しく思ひし子供も、前に向ひたれど、目にもたゝず、身のならんことも、すべて何事も〳〵、萬のこと更におもほえで」あるを妻は氣遣ひて問へど、語るべくもあらず、心は空にのみなりまさりぬ。さてその正月、正頼嵯峨院大后宮に六十の賀奉る、仲頼病んで出でざるを、かくては淋しとて、強ひて招かる。

この卷を、道麿等は梅花笠の後に置きたるが、余は斷じてこゝに据う。さるははじめに俊蔭に引き繼ぎたる趣あるのみならず、梅花笠に仲頼病いえて云云といふことあればなり。梅花笠を前にやりたるは、古本にしかあればなるべく、古本にかく次第せるは、蓋しそのはじめに嵯峨院が位を朱雀院に讓りたまひしことあればなるべけれど、この讓位のことは、忠こその次を受けたれば、改めてかくいへるなり、これを以て嵯峨院を後にすべき理由とはすべからず。玉琴の如きは、事實の前後を主として、忠こそを俊蔭の次に置きたれ

どこは敍事の順序をも辨へざる僻わざのみ、かくては全篇支離滅裂せん、されば說話の關係より見て、必ず余が推定したる如くならざるべからず。さはいへこの嵯峨院はなほ訝かしき卷なり。後の菊宴と事實の半ばは重複し、この篇は賀の宴の始まらんとして、突然切れたるも、怪しからずや。故に年立には、「按に、今の嵯峨院卷は實のもとの卷にてはなく、もとは大后宮の御賀ならで、嵯峨院の六十の御賀のことをしるしたる卷のありつらむを、そは早く亡びうせて、こゝかしこわづかに殘れるに、後人のこの菊宴卷の異本などのありしをつゞり合せて、この今の嵯峨院卷とはなしつるなるべし。故(カレ)この嵯峨院卷のいと／＼まぎらはしきなるべし」といへり。

忠こそ　貴宮の前には、尊き數も千萬の富もひれふしぬ。こゝに忠こそ入道といふものあり、この卷はその生立を記す。忠こそは右大臣橘千蔭の子にて、母は一世の源氏なり。「頂の上を蓬萊の山になさんとも、手裏(タナウラ)の內に黃金の大殿を作らんといふとも、忠こそがいはんことは違へじ」と養ふほどに、その兒の五歲の折に、母宮うせぬ。くれ／＼も遺言して、「己につきてあしきめ見せたまふな、腹き

たなき人ありて、あしきことときこゆる人ありとも、いはん人の罪になしたまへ、すべてわが子の爲あしからむことをば、水の上にふる雪、砂の上におく露となしたまへ」とありければ、千蔭は後妻も迎へず、「忠こそを妻にもかたへ、子にもかたへ」と養ひて、いひよる人の言を耳にもかけでありしが、こゝに故左大臣源忠恒の寡婦（一條の上）千蔭を思ひかけて、しきりにいひよる程に、千蔭もさしてつれなくもえあらず、されど男は三十餘、女は五十餘なるに、わけて千蔭は亡妻のことのみ胸に蹈れば、などかこれに心のとまらん。女はならびなき世の寶の王にて、神佛に大願を立てて、千蔭の心の和がんことを願ひ、來る度毎に、あらゆる珍味を盡してもてなせば、心は進まねど、折節は努めて通ふ。忠こそは心なまめき、色ごのみに生ひ出てつ、故左大臣の姪の一條の上と同居せるに通ふ。上その中らひの親しげなるを羨み、千蔭の疎々しきを本意なく、更に忠こそに心を移していひよるに、たゞ避けに避けて、きくべくもあらず。上恨みて、さま〳〵に讒言を構ふ。千蔭はこれを信ぜざれど、度重なりては少しく心も動きて、その子にわが思ふ程は親を思はぬよと喞つ。忠こそはこれまでは「天を逆になすとも、百

の兵して親を射るとも、汝が咎は咎めじ」といひたまへるを、こはいかなることぞと悲み、鞍馬より出でたる修行者につきて、家を遁れ出でぬ。父は悲みに堪へずして、それよりは一條にも通はず、一條の上は千蔭の爲に財を盡して、零落を極め、千蔭は叡山のほとりに閑居し、歎きに沈みて薨ず。

梅花笠　この卷は忠こそが貴宮を戀ふることを旨と記す。忠こそ世を遁れて後、やゝ年を經ての事なりき。左大將正賴、一年、一門眷族を率ゐて、春日に詣づ。若殿原隨ひ行きて、賑はしきこと臨時祭の如く、花は一時に開いて、この參詣をもてなすに似たり。その時、兵部卿宮が貴宮に贈れる歌、

　たちよれば梅の花笠にほふにも、なほわび人はこゝらぬれけり。

春日にては少將仲賴に作文せしめて、その句を題にて人々歌よみ、終りて男女音樂を合奏す、中にも貴宮の琴めでたし。かゝるところに、この聲にめでて、近くよりて聞く僧あり。正賴測らずもこれを見れば、若くて行方を失ひし忠こそなるに、懷舊の情に堪へで、談話は盡きず。折しも夕暮に花誘ふ風の烈しく幕を吹き上げたるに、ふと見入るれば、貴宮の姿け高く、比ぶべきものもなし。忠こそ心

空にあこがれて、山に歸りても、亂れたる思は收めかねつ。さてまた兼正は桂の里に山莊を設けて、仲忠の母をこゝに棲ましむ。帝より仲忠の母に御消息あり。これらの記事を別に一卷として、桂と名づけたる本もあり。

吹上　さま／＼の殿上人を出して、仲忠に對せしめしが、なほこれにもあきたらで、作者は更に一人のたらはぬことなき人を點出せり。こゝに紀伊國牟婁郡に神南備ノ種松といふ長者あり。その女、嵯峨院の御時、內の女藏人にて、源氏一所涼といふを生み奉りぬ。種松國許にてこれをかしづくこと限なし。あらゆる道の師を都より迎へ、涼を養育して、その年二十一になりぬ。かの少將仲賴涼のことを聞き、行政、仲忠を誘ひて、これを訪ふ。涼迎へて、種松と共に、もてなしの限を盡す。吹上にて三月三日の節供まゐり、林の院にて花の盛を見、渚の院にて上巳の祓し、藤井の宮にて藤花の宴を催す。さて歸りなんとするに、土產物夥しきが上に、なほ引出物には、一人每に馬四、牛四、鷹四、鵜四、米など船に積みて奉る。その鷹試みがてら、玉津島に詣で、晦日には吹上にゆく春を惜みて、四月朔日、都に歸りぬ。八月、院の花宴に、仲賴處々の秋の景色など奏して、吹上のことに及ぶ。院遂

に九月一日、吹上に御幸ありて、こゝに重陽の宴を開きたまふ。その夜あけがた物の音靜まりたる時、修行の聲聞ゆ。院これを求めて召したまへば、昔寵愛したまひし忠こそなり、さま〴〵ゆかりの人にあひたまひし大御心思ひやるべし。さて涼を伴ひて還幸あり。ついで帝神泉苑にて紅葉賀あり。涼、仲忠が琴こそ最も目ざましきものにて、二人競ひ彈くに、天人降りて歌舞す。院驚きて、仲忠の堪能は勿論なり、涼はいかにしてかかく彈ける、しかも昔、俊蔭に並びし彌行が手に似たりと宣ふ。涼よりて彌行の山伏となれるに、熊野にて會ひて學びたる山奏す。院二人を賞せさせたまひて、涼に貴宮、仲忠に朱雀院の女一宮を賜はんとす。かくて涼は左中將となり、三條に家を構へ、金銀瑠璃を磨きて住む。忠こそは眞言院の阿闍梨となりて時めきたるが、一條の上の乞食せるに會ひ、小家を造りてこれを養へり。

祭使　この卷は、賀茂祭に正頼の家よりその使の出づることより、端午の節供、競馬、釣殿の納涼、七夕まですべて正頼が行ひたることを書き、その間に人々が貴宮を戀ひてしきりに消息する由を記す。さてくどくもまた著者は一人の懸

想人を點出せり、すなはちこの度は學問のすぐれたる人なり。勸學院の西の曹司の學生藤原季英(藤英)といふは、一族すべて亡びて、榮達の途なく、年既に長けたるが、人の嗤笑をも顧みずして、雪に向ひ螢を集めて學問に耽る。さるにいかなる折にか、貴宮に思ひ入り、堪へぬ思ぞ日々に募りける。さてその年の公の試策となりたれば、文人ども勸學院別當なる正賴の家に集まる。いつもは人に競はぬ藤英の、今日は劣らじものと、見苦しきまでにきほふを、人々笑ひ嘲りて追ひ立てんとす。されどその文を讀んで、はじめてその才を正賴に知られ、いみじき譽を施して歸れど、心は却つて開けず、ひとりうちうめきてぞ歎きける。

菊宴　東宮が殘菊の宴開かれしより、嵯峨院大后宮の六十の賀までのことは、嵯峨院卷と殆ど同じ。されどかの卷はその賀奉らんとしたるまでにて終れるに、これには賀の樣もその後のことも書きたり。これよりさき東宮も思を貴宮にかけたまひて、御消息たえず、貴宮の父の大將にも、母の大宮にも、このことしきりに望みたまふ。大后宮もまた大宮に勸めたまひて、入内のことほゞ定まらんとす。懸想人手まどひをし、大願を立てて、貴宮を得んとす。されど藤英が學問

もかひなく、忠こそが佛道の驗もなく、兼正は徒らに長谷、御嶽に詣でて祈を籠む。中にあはれなるは源宰相實忠なり。この人、時の上達部の女を娶りて契深く、男子一人、女子一人を生ませて、蝶花といつくしみしに、これも貴宮に思ひつきて、それより愛子をさへ顧みず、家はたゞ荒れに荒る。男子は父を戀死に死し、妻と女子とは滋賀の邊に移り住みぬ。實忠はそれをも忘れ果て、貴宮にのみ思ひこがれて、叡山に登り、四十九所に壇立てさせて、聖天供を行じ、七日七夜、中堂に五體を投げて祈りぬ。下向の折、仲忠のこれも同じ心に籠れるに會ひて、共に歸る途に、妻子の滋賀の閑居に行きあてぬ。妻は隱れて見えねど、簾を隔てて和歌の贈答などしたり。

貴宮　貴宮は遂に東宮に參りたまふ。失望するもの多きが中にあはれなるは、實忠は小野に籠りて歎きくらし、仲賴はかの愛せし妻をも捨て、出家して水尾に籠りぬ。貴宮の兄仲澄は病日々に重く、思ひ迫りて歿す。をかしきは、滋野眞管は訴文を奉りて伊豆に流され、三春高基は家をも燒きて山に籠りぬ。貴宮時めきたまふこと二なく、他の女御は物のかずにもあらず。宮その年に娠みて、一宮

を生み、翌年また三宮を生めり。貴宮を主としたる物語は、こゝに至りて一段落をなす。

初秋　仲忠が二十五歳の八月、仁壽殿に相撲節會あり、かの吹上の重陽に對して、世の例にひくばかり盛に行はんとて、用意いとこと〳〵し。當日、相撲果て、管絃など始まりて、帝仲忠、涼に琴を强ひさせたまふに、仲忠あながちに辭しのがれて、藤壺に至る。藤壺女御はすなはち貴宮にして、互に和歌の贈答あり。ついで涼も來りて、物語などするうちに、責め促がされて、仲忠は帝の御前に歸る。帝さまざま手だてを回らして、琴ひかせんとし、なほ仲忠が辭するによりて、さらばその母に彈かせんとて、召したまふ。仲忠よりてその母を伴ふ。帝過ぎにし世の御物語あり、螢の光にてその面影を見たまひぬ。仲忠の母は内侍督になされて退出せり。

田鶴群鳥　仲忠は帝の女一宮を迎へ、涼は正賴の十の君(今宮)を妻とす。そのほか貴宮に懸想せし人だちを、正賴はいづれも己が聟にして、恨なからしめんとす。小野に籠りし實忠は今更に何かせんと泣いて辭し、兼正も辭す。兵部卿宮、正

明、行政、藤英は聟となりぬ。貧しかりし藤英は立身し、そのほかの人々すべて官位昇進す。貴宮は仲忠の北方と贈答して相睦めり。

藏開　仲忠三條京極の舊宅を訪ひ、藏を開きて、俊蔭が遺愛の書籍を得たり。帝の前にこれを講じ、恩賞として小野宮殿が持ちたりしといふ帶を賜はる。時に仲忠の父は左大將、仲忠は右大將たり。女一宮は女子(犬宮)を生み、今宮は男子を生む。仲忠の妹は東宮の妃となりて、梨壺女御といひしが、また妊娠して里に罷り出づ。仲忠はかの舊宅を修理して住み、また父に乞ひて、そのおもひ人だちを一ところに集めぬ。

國讓　仲忠二十八歳および二十九歳の折のことを記す。太政大臣季明病篤く、後事を弟正頼に托して薨ず。兼正の兄忠正は太政大臣、正頼は左大臣、兼正は右大臣となる。藤壺女御(貴宮)伯父の喪によりて里に罷り出づ、こゝにて三宮を産めるなり。兼正の女梨壺女御も懷妊して里に下りゐしが、二宮を産む。時に朱雀院位を東宮に讓りたまはんとす。東宮はもとより藤壺を愛すること深く、おのれ即位せば、その腹の一宮を次の東宮に立てんの御心なり。朱雀院の中宮(東宮

の母后)は忠正、兼正の妹なり。從來立ちて東宮となるもの、藤原氏の所出をおいて外になし、正頼勢あれども、源氏にして一門少し、藤原氏を擧つてこれに當らば、事成らざらんや。梨壺の腹なる二宮を立てんことを請ひて、聽かれずば、一門すべて職を辭せんのみとて、二兄を招いて勸むれども、二人逡巡して決せず。遂に忠正の如きは招かるれども應ぜず、母后すなはちこの事を以て東宮に迫る。東宮色赤くなり、青くなり、よし當今の帝となりても、わが思ふこともなし得ずば、山林にも隱れん、これまで母后に詞を返ししことはなけれど、これのみはとて、御氣色いと惡し。母后もうち腹立ちて、なほその計畫を思ひ止まりたまはず。かくて東宮即位し、藤壺を一の女御としたまひしが、次の東宮はいまだ定まらず、專ら二宮立坊の噂あり、兼正の門前これが爲に市をなす。藤壺は里にありしが、今上呼び歸さるれど、すねて參らず、正頼はもし一宮立たずば出家せんと憤る。忠正の妻は正頼の八の君(見宮)なり、これもまた里に出で、忠正迎に行けども應ぜず。今上は遂に藤壺を愛するあまり、己が心と一宮を東宮に立つ。かくて藤壺內に參り、忠正の妻も夫の家に歸りぬ。この卷の大意かくの如し。その間に源

宰相實忠が一旦妻子と同居して、家事を調へ、後更に小野に入ることあり、仲忠が、藤壺の委托によりて、一宮の手習の手本かくことあり、また水尾に仲賴法師を訪ふことあり。嵯峨院の花宴を以て終ろ。その後、仲忠が三十歲および三十一歲のこと見えず、或は佚したる卷あるかといへどいかゞにや。

樓上　仲忠の大將その愛兒犬宮に琴ならはせんとて、おのれの母に語らひて、三條京極の俊蔭の舊宅を造營して、壯麗を極む。かくて犬宮七歲の時、强ひて女一宮に請ひて、しばらく相別れしめ、八月、仲忠母と犬宮とのみを伴ひて、この第に籠りて、琴を愛兒に敎ふるに餘念なく、たえて他を入れず。俊蔭の子孫は、不思議にも音樂の才代まさりに子より子と巧になり、犬宮の上達は目もさむるばかりなり。さて秋深き京極殿の樣より、冬の景色、年の暮、年かへりて新年の心、三月の節供、四月の祭、五月の霖雨、六月祓までを記し續けて、七月七日に至りぬ。この夜、三人樓上にありて合奏す、涼ひそかにこれをたちぎゝして、感に堪へず。その翌日、仲忠の母を育てし故嵯峨野の子孫京極殿に尋ね來り、仲忠これが立身の途を計る。かくて犬宮のこゝを出づべき日近づきぬとて、八月十五日、京極殿

に管絃を催さんとす。嵯峨、朱雀兩院御幸あり、藤壺も强ひて今上に乞うて參會し、涼をはじめ殿上人ところせきまで參りあひて、天の下の騒なり。犬宮の美はしさは藤壺の幼だちにまされりとて、兩院の御喜斜ならず、嵯峨野の幼孫も愛らしくて、方々にもてはやさる。內侍督(仲忠の母)嵯峨院の仰を受けて、琴を彈くに、その聲內裏まできこえ、帝より御使を賜はりぬ。かくて兩院の奏請によりて、故俊蔭に中納言を贈られ、京極殿に冠賜はり、內侍督、女一宮、嵯峨野の幼孫等が加階し、立身すること、差あり。

(梗概終)

宇津保物語の著者については確說なし。源氏物語河海抄に、源順作云々、有疑とあり「玉琴にこれを辯じて、この物語のうちに、忠平(貞信公)より實賴(淸愼公)に傳へし石帶のことあり、實賴と順とは同時の人なれば、かゝることをかくべからず、强ひていはば、紫式部の父藤原爲時か、宇津保と源氏とはよく似たるところあればなりといへり。されど忠平は天曆三年に薨じ、實賴は天祿元年に薨じ、それより十四年を歷て、順は卒したれば、かの石帶のことを以ては、著者を順ならずとするに足らず、さりとて順とすべき證據も確かならず。これを爲時とする

は、あまりに幼き臆説なり、いかに二小說の類似せるとて、親の才を必ず子が繼ぐべきかは。されば宇津保は圓融、花山二帝の頃に出できしものとして、著者の誰なるかは、强ひて論ぜずとも可ならん。或は曰く、今傳はるところの宇津保二十卷のうち、俊蔭卷のみもとの物にして、他は後人の僞作にかゝると。これも昔時、俊蔭のみ行はれて、他の本の少かりしより出でたる憶說なるべく、確かなる根據なきことにて、余は全部一貫のものたるを疑はず。

第十章　宇津保物語(二)——その評論

宇津保物語を通讀して思ふに、その大體の構想頗る竹取と相似たるものあり。すなはち當代の月卿雲客、無上の貴顯に至るまで、擧つて一人の佳人を得んとし、たゞそのことに寢食を忘れて競爭するを以て、彼此ともに一篇の骨子となす。かくの如きは宇津保が竹取を摸したるにあらずして、むしろ時勢の傾向おのづから然りしものなるべく、共に平安宮廷の臣僚が、政治に怠り、蕩逸に流れ、

傾國の色の前に身命を擲ちて顧みざりし風俗を示してあまりあり。しかれども竹取の佳人は到底これ濁世の有にあらず、君臣が苦心慘澹もそのかひなく、一旦の下界の花は去りて月宮のうちに花咲きぬ。宇津保に現はれたる佳人はかくの如き無情の僊人にあらずして、あくまでも人間なり。肉あり、血あるもの、いつかこの世に匂ひ出でずんばあらずして、その美は競爭者の一人が眺むるに任すに至れり。彼は神靈なる超人間を寫し、此は笑ひまた泣く人間を寫す。されば同じく小說とは總稱すれど、竹取をば一のローマンスといふべく、人生の描寫を旨とするノーヱルは、わが國にては實に宇津保を以てはじめとするなり。或は曰く、宇津保また幻怪の事なきにあらず、仲忠が彈琴に種々の奇瑞あり、熊猿などの畜類の仲忠母子に懷ける、俊蔭が三條京極の舊宅に靈異あるが如き、また人間以外の不思議にあらずやと。されどこれらの奇瑞は、仲忠が才藝に絕倫なる所以を現はさんとして、しらず〳〵人間以上のことをも寫し出せるに過ぎず。かくの如き靈驗は、またこの世にあるべきものと、迷信深き當代の人は信じたることにて、凡人以上のこととはいへ、必ずしも人間以外のことに

はあらず。その他一二の靈怪なることはあれど、これを以て竹取が超人間の女優を寫したるには比すべくもあらざるなり。要するに著者はいづこまでも人生の動靜を寫し出さんとしたるものにして、著作の時代の竹取を去ること遠からざるに、更にかくの如き進歩したる思想の文壇に現はれたるは、當代文化の發達驚くに堪へたり、

篇中、人物の點出配置について思ふに、頗る精到の注意を闕けるに似たり。竹取にて、五六人の男子に配せしむる女子は赫耶姬一人なり、宇津保にて、なほ數多き男子に配する女子はまた貴宮一人のみ。かれには翁の妻、勅使の內侍等あり。此には嵯峨院大后宮、女一宮、今宮、梨壺女御等の婦人少からずといへども、いづれもあつてもなくてもよき人物に過ぎず、仲忠の母やゝ重位を占むといへども、これも一かどの特色あるものにあらずして、主位にある婦人は、彼此共に一人のみ。竹取は短篇なるを以て、かくの如きは却つて全篇を緊切ならしむる益ありといへども、宇津保の長篇にして、またその轍を同じくするは、構案の粗鹵に失し、趣向の平凡に流るゝ嫌なきにあらず。しかれども翻へりて思ふに、宇津

保の著者が企つるところは、人性の發展、感情の變化等を細心に描寫せんとするにあらずして、むしろ一種の傾向を筆端に寓せんとしたるなるべし。蓋し著者が理想とするところは簡短なるものの如し。すなはち種々の智能才藝のいづれかよく美の愛樂を得るかといふにあり。これを寫すや、これらの能力に人格を有せしめて、絕世の一佳人を爭はしめんとす。甲乙丙丁相並んで愛の矢を番ふ、中原の鹿果して誰が手にか落つべきや。

當時、上流の紳士のうち、老若の論なく、いづれか貴宮に思を運ばざるものかある。著者はまづ上野宮、三春高基、滋野眞管を點出して、及ばぬ戀の滑稽を寫せり。一は頑愚なるしれものの暴力に依り、一は貪婪飽くことを知らざる吝嗇人の財貨を賴み、一は魯鈍の極、身の際を知らず、いづれも折られぬ高嶺の花にあこがれて、身を過てるは、竹取に多き滑稽の思想を紹げるものに外ならず、しかもかくの如き滑稽は、藤原君卷に見ゆるのみにして、その他の卷々には稀なり。著者はこれについで、才學俊秀の三人を紹介せり。當世の才子に良峰行政、博洽の學士に藤英、有德の法師に忠こそ入道これなり。行政は十八年間、唐國にあり

て、その文化の眞趣を味はへるものにして、風貌才器ともに一代の秀才、紳士の模範。藤英は螢雪の窓に眼を典籍に曝して、榮達を思はず、俗人の彈指を顧みざりしもの。しかも貴宮の美に對しては、才子も絕えて亂れざりし冷靜の態度を失ひ、學者も素樸の平常を擲ちて、心は千々に碎けぬ。忠こそは寵幸の君、慈愛の父を捨てて遁世し、學を積み、德を磨くほかはなかりしもの、これも煩惱の絆は斷ちがたく、戒行も一旦の思に破れなんとす。されど才學德はあくまでも美に忠實なるものにあらず、美がこれと伍するを避くるも、當然のことなり、三人はみな望を失ひぬ。されどその希望はその生命と終始するものにあらず、かれらは別に小さき滿足を得て、前の失望を忘れんとせり。才子元來輕薄、行政は貴宮のはらからを得て、交際場裡の花たること、曩日に異ならず、藤英もまた貴宮のはらからに婚して、昨日の貧生は今日の博士と世に出で、忠こそは迷の衢を出でて敎界の宿德と仰がる。そのほか兵部卿宮等の尊貴も、兼正等の顯達もまた愛樂を得る所以にあらざりき。

美はもとより智の僞を容れずして、情の眞を喜ぶ。かくてこゝに身の材、世の譽

をも捨て、ひたすらに情の奴となり果てたる三人こそありけれ。源實忠は千萬の寶にも代へがたき男女の子二人ありて、その妻とも中睦まじく、樂しき家庭の主なりしを、貴宮の愛慕に心狂ひては、一人の兒の父を戀死に死したるをも知らず、いま一人の兒の母につれられて、滋賀に棲めるをも顧みず。思ふことのかなはでは、戀人の妹を與へんとあるも何かせんと歎きて、小野に隱れて出でず。源仲賴は身心を傾けて親み事ふる愛らしの妻あり、おのれもまたなきよすがといつくしみて、他し女には目もくれざりしに、これも心は惑ひけり。慕りのみゆく思の遂げがたくては、家も身も要なきものになし、最愛の妻を捨てて、水尾に籠りぬ。源仲澄は貴宮の同腹の兄なり、愛の前には道もなきやらん、あるまじき戀に心を焦せども、口には出すべくもあらず。あはれ五尺の軀は情と道との戰の場となり、堪ふべくもあらぬ艱に、人知れぬ思を包みつゝも、遂に情炎に燒かれ了んぬ。兒を捨て、妻を捨て、また己を捨てたるが中に、二人は息ある骸を抱いて望なき世に長らへ、一人は最大の苦闘に望と共に身をも失ふともにこれ情の化身、愛の犧牲なり。蓋し西歐の詩人ならば、かくの如きを贊稱して措か

ず、美の神はかくして始めてかれらの頭に宿るべしとせん。しかれども由來邦人はよく情意相制せしむ、情をして奔放留まるところを知らざらしむるが如きは、世人はあはれとこそいへ、なほ中庸の道を得たりとして左袒すること能はざりしなり。

こゝにおいて作者は注意を深くし、敬意を表して、別に二人を描けり。藤原仲忠と源涼とこれなり。涼は紀州に廣大なる莊園を占めて、海の物、山の物、望むとして得られざるところなき富貴の王なり、しかもこれなほ理想の人に對せしめんが爲に點出したるものに過ぎず。理想の人はすなはち仲忠にして、かれは音樂において鬼神を泣かしむる技を有す。音樂はたゞに著者が理想的の技術と考ふるのみならず、當時の社會一般の理想的技術にして、詩歌管絃いづれはあれど、中にも上流の男女が學ばざるべからざる第一の藝と崇重せらる。熊澤蕃山源氏物語を稱して、殊に音樂の道を說いて後世に傳ふる書なりと論ぜしかども、源氏外傳源氏がひとり他に擢でて音樂を說きたるにあらずして、音樂は實に平安貴族が必須の技たりしなり。さればこそこれを重んずるあまり、その道に

不可思議の靈驗を附して怪まず、また宇津保の著者は、音樂第一の人を以て、最も理想に近き人間とせしなりけれ。嗚呼、しかりといへども、この富貴も、この驚くべき技術も、また共に美と一心同體なる所以にあらざりしなり。

わが國は、天孫降臨以來、萬世一系の帝王君臨ましますª現つ御神は神の上の神なり、神聖にして犯すべからず、萬民はたゞ仰ぐべし、近づくべからず。もし高位顯官の人が強ひてその踵に接すべしとせば、その道たゞ一つ、いふまでもなくその女を以て女御更衣にさゝぐることなり。その女を後宮に納るゝは、平安貴族の最大希望にして、この一般の思潮の外に出づること能ばざる著者は、またこの風習を以てその理想となせり。貴宮は東宮の妃となりぬ、皇太子の母となりぬ、美は遂に人間の如何ともする能はざるところ、運はこゝに定まれり。

しかれども絕望は力ある人のせざるところ、愛は人生の全部にあらざるなり。二人は愛を失へりといへども、望を失はず。さるが中に涼は客、仲忠は主、涼は仲忠に對照せしめんが爲に寫せるものなれば、著者は一篇を通じて、これを寫さず、その理想的人物として極力描寫に力めたるは、仲忠なり。仲忠は失戀を悲ま

ざるにあらずといへども、天稟の技藝はかれをして久しく悲哀の淵に沈ましむるを許さず。かれには貴宮の人間美に對する技藝美あり、彼此對峙、毫も軒輕すべきものにあらず。しかも憐むべし、肉體の色はあせ易く、技術の光は長しへに輝くべし、仲忠は熱心にその技術を犬宮に傳授して、靈妙の技はます〳〵光を增しぬ。かくして著者は音樂の表象とも稱すべき仲忠の生立を以てこの篇を始め、更に仲忠の榮華を以てこの篇を結びたり。

宇津保物語における著者の思想は凡そかくの如くなるべし。而して著者の筆を行るや、蕪雜粗笨、人物個々の性格を表はすこと能はざるは勿論、男女の區別さへも明かならざるもあり。婦人を寫してもまた男子の如くなるは、おのづからその男性の作家の手に出でたるを示す。案ふに著者は口に說いて、物に示さず、貴宮は美なりといふ、しかもそのいかなるところの美なるかを見ず、强ひて讀者の腦裏に映ぜしめたるその人は、みづから高く標置して、人を人ともせざる增上慢の婦人にして、やさしく女らしきところは聊かも存せず。涼は富貴の王、しかもその吹彈の伎倆はよく仲忠に敵す、仲忠は音樂の神、しかもまた亡祖

の舊宅に無量の財寶を得たり、彼此相比して差別を見ざるが、これらは完備の貴公子を寫さんとして已むを得ざる手段なるべしといへども、篇中の人物、概ね何に長け、何に通ずといふのみにして、これを具體的に示さず。まして人情の反覆推移を精細に描出するが如きは、到底著者の力に及ばざりしなり。宇津保が最大の缺點は實にこゝに存す。

篇中の敍事、年中の行事を寫すこと甚だ委しく、恰も當時の大臣公卿の日記を和げたるが如き觀あり。これを以ても當時の廷臣が節供などの事にのみ熱中せるを見るべく、またこの小說の著者が朝廷に出入したる官人なるを推し量るべし。されど年中行事につきての人々の歌、方々の物語など、平板なることを繰り返し〳〵記したれば、讀者は實にその單調に倦まざるを得ず。紫式部が、女性の身の委しからずと謙遜して、力めて公ざまの儀式を直寫することを避け、たま〳〵これを筆にしても、內々の事に過ぎざりしは、却つて源氏をして宇津保よりも小說の功果を大ならしめたり。文章の構造においても、宇津保はどこまでも男性の筆にして、句を短く切り、主格を畧すること少く、また漢文を譯し

たりと見ゆるところも少からず。蜻蛉日記とは趣を異にし、まして源氏とはいたく異なりとす。

第十一章　落窪物語

春雨のひたすところ柳櫻枝を列ねて色を競ふ、名著大作も孤立して立たず、宇津保と前後して落窪物語の出づるあり。落窪は三卷あり、或は四卷に分つ。宇津保の如く浩瀚なるものにあらずといへども、文章の練熟せる、敍事の緊密なる、却つて彼にまされる點も少からず。彼此相並んで、源氏物語の有力なる先驅者なりき。されどこの書もまた宇津保と同じく、源氏に壓せられたるが爲か、古來甚しく行はるゝに至らず。刊行せられたるもの、素本に古活字本と、寛政十一年、上田秋成が校正せる本とあり、註解の本に村田春海、橘千蔭の說に本づきて、大石千引が註釋せる落窪物語註釋あれど、これは卷一(二冊)の出でたるのみ。明治の世に至りて、文學全書本、標註參考と肩書して飯田秀夫氏の註釋せるもの、中

村秋香氏の落窪物語大成、および國文大觀本あるに過ぎず。その中、大成は廣く諸種の寫本を集めて校訂し、委しく註解を施せるものにして、この書を究むるものの座右になかるべからざる好著なり。

昔中納言忠頼といふ人ありけり。今の北の方には男三人、女四人、また異腹の女一人あり。北の方わが腹の子をのみ愛して、繼子の姫君を寢殿の放出の一間の落窪なるところに置き、着る物もろく〳〵に與へず、物見遊參にも伴はず、その裁縫に堪能なるを以て、ひたものわが子、壻などの衣服を調へしむ。家のもの諢名してその姫君を落窪の君といふ。附き添ふものとては、阿漕といふ若き女ただ一人。これのみはその主の不幸を憐みて、まめ〳〵しく事ふ。北の方の腹の三の君には、藏人少將なる若殿上人通へるが、これに隨ふ帶刀また密かに阿漕に契る。帶刀の母は左近少將の乳母なれば、帶刀も常に少將の許に參り通ひぬ。この左近少將は時の左大將の子にして、東宮の母なる女御の兄なれば、滿朝の聲望はひとりその一身に集まれり。帶刀こゝに參りて、落窪の君の才色共に秀でながらも、困厄の淵に沈める由を語る。少將これを聞き、その色を慕ひ、その運を

傷みて、見ぬ戀にあこがれ、帶刀、阿漕の手を經て音信を通じ、密かに姫君の許に至りて、長しへに渝らじものと、深き契を籠めぬ。

屢〻姫君の許に通ふにつけ、北の方が姫君に物縫はせて、少しの暇もあらせず苦むることの、少將の目にとまりて、同情の念はうたゝ增りぬ。時にはみづから手を添へて、姫が手業を助けなどせしに、遂にはその火影を朧ろげながらも見付けられ、「まろも困じにたり、そこにも眠げにおもほしためり、なほ縫ひさして臥したまひて、北の方例の腹立てさせたまへ」などいふことの、北の方の耳に入りぬ。思はぬ男の通ふさへあるに、おのれが蔭言さへ聞くよと、北の方は憤りて、誰とは知らねど、中納言には、帶刀が通へるなりと、僞り譏して、酢酒魚など積む部屋に押し籠め、おのれが叔父の典藥助なる、六十歲ばかりにしてしかも色好む男に守らせて、姫君を思ふまゝにせよと許す。姫君は典藥助がかき口說くをば、强ひて拒めども、暗黑の手は夜一夜その力を强くして、これを攫まんとす、危いかな。少將これをほの聞きて、臨時の祭に、中納言の一家が物見に出でたる隙を窺ひて、姫君を偷み出で、己が第に据ゑて、偕老の契は愈〻深し。

北の方は、左近少將が落窪の君の夫なることも知らず、その顯達の望あるを聞きて、己が腹の四の君の聟に迎へんとす。少將は深く北の方が繼女に對する處置を憎みて、十分にこれに報いんと思へば、この申し出を折こそよけれとて、おのれに代りて兵部少輔なる者を通はしむ。中納言の一族はこれこそ左近少將よと喜びあへるに、三日めの露顯にはじめて明かにその容貌を見れば、顏の色は雪の白さにて、首長く、鼻いらゝぎて、顏つきたゞ駒のやうなり。あはれ、世の人が面白の駒ともてはやすしれ者なりと見て、四の君は思はぬ契を悔ゆれど、因果の種は芽ざして、一人の女兒をさへ生みぬ。三の君の許に通ひし藏人少將は、世の中のしれ者と相壻と呼ばるゝも耻かしとて、その後はうち絶えて來らず。左近少將すなはちこの少將をもおのれが妹の夫に迎ふ。これらをさへつらき限にて、何の仇にかくはわが族を苦しむるぞと、中納言の一家は思へるに、これのみにもあらざりけり。北の方が女を率ゐての清水詣には、車を毀たれ、局を奪はれ、祭の見物には、車を引き退けられ、これに抗へる典藥助は死に入るばかり打擲せられぬ。落窪の君が亡母より傳へたる三條の家を、君行方知れざれば、今

はわがものと、中納言は新たにこれを修繕して、今日、明日、まさに移らんとしたるに、左近少將の從者襲ひ來りて、理不盡にこれを占めたり。

落窪の君はさすがにやさしき女性の身なり、夫の報復をあまりにつらしと押し止めて、戀しき父に名のりあはぬことを歎くを、少將は今しばしぞかし、あくまで報いて後こそは、またあくまでよき報をもと、なだめて、遂に三條の家を奪ふまでに至りぬ。今はとてはじめて中納言を迎へて、落窪の君に對面せしめたるに、中納言は行方も知らぬ女の戀しさに、さなきだに老いぬる身の、なほも命縮まるばかり歎きしを、かく時めきぬと見て、嬉し涙ぞ溢れたる。恥を重ね、家は取られて、いみじき仇敵と惡みたるも、わが子のしたるなりと知るに、かれを苦めし當然の報ぞとて、なかなかに嬉しと思ひぬ。北の方の腹の長男は久しく越前守の任にありて、その母が落窪の君を苦めしことを知らざりしに、今この事を聞きて、いたく母を責め、少將の恩顧を被ることを喜ぶ。次男は遁世して在らず、三郎はもとより落窪の君を憐みしものにて、こゝに更におのれが母の罪を數ふ。夫に捨てられし三の君、夫を捨てし四の君など、飛鳥川のこゝちして、落窪

の君を羨み、その音信を喜びぬ。北の方一人落窪の君を咀へども、夫さへ、子さへ、今は彼方の方人のやうにて、悔しさ、憤ほろしさ限もなし。

少將は右大臣がその女を與へんとあるをもうけひかず、落窪の君と睦まじくて、男女の兒どもも多くその間に生れぬ。夫婦相計りて、中納言が現當二世の福利のため、盛なる八講を行ひ、七十の賀を祝ひ、中納言老病漸く重きに及びて、少將奏請して、かねて望める大納言に昇す。新大納言泣く〱その志を喜び、死に臨みて財産を處分し、北の方が不滿をも聽かで、よきものはみな落窪の君に與へ子女に遺言して、いづれもかの君の陰に立ちより、必ずその仰に背くことなかれと、いひて薨ず。少將はなほ奏して、三の君を御匣殿に立たしめ、四の君を帥中納言に嫁せしむ。少將みづからの立身出世はいふに及ばず。便宜の爲にこれまで少將とのみいひしが、實は漸々に昇任して、大納言、大將より左大臣を歷て、太政大臣の極官に至れり。子孫の榮華もまたこれに伴ひてめでたかりき。

從來或は稱して、落窪は源順の作なりといふ、されどこれは宇津保をしかいふよりも、なほ根據なき說にて、毫も信を置くに足らず。その著作の時代は、或は村

上天皇の御代より下らざるべしといひ、（落窪物語大成所載松木彝園の説）或は冷泉天皇の頃に作りたるものといひ、（伊勢物語古意所載賀茂眞淵の説）多少の相違はあるが、大成に、それと慥かに明示すべくもあらねど、圓融、花山以前のものなりといへるは、最も穩健なる説なるべし。されどこの以前といふは、圓融、花山の朝をも含めて、泝りて冷泉に及べるものにして、村上を下らずといふは信じがたし。眞淵はなほ左近少將は藤原忠平の事實を寓せるにやあらん、その子の官位の競ひ昇れる樣、いとよく似たりといへるが、（伊勢物語古意頭書）かゝる淺薄なる類似を歷史的事實に求むるは、穿鑿に過ぎたり。或はこの書を後世の僞書なりなどいふは、宇津保をしかいふが如く、却つて空漠なる憶説なり。

落窪を賛稱するものは曰く、この書はわが國における倫理的小說のはじめにして、明かに勸善懲惡の主義を標榜せるものなりと。上田秋成は「伊勢、源氏の物語どもの、文にも、歌にも、比ふべきものなくさかしきはあれど、よく讀みてよく心得ずば、無下にうたてきわざも多かりなんかし。この物語なんひとりひじりだちたる文のつらにもとり加へてんに、益なきものぞとは、賢き人もいふまじ

かゝりけり、あないみじ、あなめでた」と論ぜしが、なほこれより引いて、落窪の君の孝貞兼ね備はれる、その夫の君が魂雄々しく行正しき、帯刀、阿漕がその主に忠實なるを、稱して措かざるものあり。それ然り、論じ詰むれば、多少の倫理的傾向は認められざるにあらず、また讀者が同情を寄するところの主人公の榮達、これに敵するものの敗亡を寫せるものを、すべて勸懲小說とせば、これもまたその一なるべし。然りといへども仁義忠孝の觀念を寓し、嚴格なる勸善懲惡の意義を存するものとしては、落窪は敢て當らず。たとひ勸懲主義の泰斗曲亭馬琴にこの書を改竄せる皿々郷談ありとはいへ、なほかれが主義の出發點をこゝに引くこと能はず、見去り見來つて、儒敎の多大なる痕跡は、いまだこの書に印せられず。北の方が後の苦痛は、必ずしも道義に背けるが故にあらず、落窪の君が榮達は、倖にも左近少將に愛せられしが爲にして、その善行の結果にあらざるなり。

落窪一篇の事實、また因果應報の理に合はざるにもあらず、されどかゝる思想は敢て佛敎を待つて起らざるなり。書中の人物いづれも佛陀が說きたる自然

の理法のうちに囘轉するものと見るべからず、北の方の困厄は、むしろ人力の所爲なり、少將が一時の惡戲なり。されば落窪の思想は、少々の影響はありしかも知らずといへども、なほ余輩は多くを儒佛二敎に求むるを欲せずして、別途にその所由を得んと欲す。

蓋し弱を扶けて强を挫き、德に報ゆるに德を以てし、罪に罪を酬ゆるは、人間自然の情にして、敢て人爲の法敎を待たず。殊に邦人はこの情强く、一旦迸發すれば、熾盛犯すべからざるものあるが如し。落窪はすなはち國民がはじめより有し、敢て外國の敎化を待たざるこの思想を、さながらに表はせるものなり。されば其の作の到底源氏を企及すべからず、從うて落窪その物は大流行を見ざりきといへども、その思想が最もよく國民の性情に適せるものなるを以て、鎌倉時代においては、住吉物語の原本の絕ゆるや、落窪の趣向を竊みて、古書の名を襲ぎ、室町時代においては、更に岩屋能草紙、小落窪草紙と變形して、世人の玩賞に充てらる。男達といひ、敵討といふも、由つて來るところの思想は、落窪に同じく、たゞ文弱の世と武斷の時との別あるが爲に、その形式の相違するのみ。

その思想を事實に表はすにおいて、落窪は淺薄に過ぎたり。著者は極めて幼稚なる一般公衆(むしろ童蒙)の趣味に迎合せんことを力め、仇を挫き、怨に當するなど、すべて物質的報復を主として、人間別に無形の苦樂の存することを思はず、飽くまで公衆の復讐的精神を滿足せしめんが爲に、處罰に處罰を重ねて、罪よりも報の重き感あり。四の君が痴漢に操を破られ、三の君が愛する夫に捨てられたるなど、親の失行の報としては、あまりに酷ならずや。己の力を恃んで造化の權を左右するが如き僭越の行爲は、少將に對して嫌惡の情を生ぜしめ、過當の苦痛を受くる北の方には、却つて同情の感を催ほして、趣味の如何を解する讀者には、著者が收めんとするところに反對なる結果を生ずる嫌なきにあらず。而して後に至りて德を以て報ゆる種々の所作も、またあまりに行々しく、八講に、七十の賀に、彼に此と長く書き列ぬるは、祭すみての何見物ぞ。倦怠の念徒らに起るのみにして、何等の功あることもなし、卷四一册は蛇足なり。落窪を稱するものはまた曰く、文脈に秩序ありて、條路整然、照應の明かなること、他の物語草紙の及ばざるところなりと。しかれども照應もあまりに明かに、

これが爲に注意せる跡の露骨なるは、興味却つて索然たるものにして、統一に過ぎたるは、却つてこの著者の爲に惜むべしとなす。淸水詣に局もなく、多人數の破れたる車のうちに籠められて、身じろきもならず、苦しきは、落窪の部屋に押し入れられたるにも勝るべしといひ、祭の見物に、車を引き退けられたるは、さきに織女を遊參に伴はざりし故なりといひ、彼は此の報、かくせしかばかゝる罸ありと、一々指點するが如き、その趣味の幼稚なること、これまた童蒙の翫賞に供するに止まるものといふべし。

全體の結構につきては、繁簡度に適せず、省筆の法を解せざるところあるが如しといへども、その文章はさすがに簡勁にして素樸、贅語を略して頗る餘韻に富むものあり。人物の行爲、事實の發展をのみ寫して、自然の景物を敍するが如きは、殆どこれなきと、音信の文の多きとは、是非はしばらく措いて、これをこの書の特色とすべし。篇中の人物もやゝ活動して、宇津保の無味なるに勝る落窪の君は左近少將と並んで、篇中の主人公としては、性情やゝ漠然たる嫌なきにあらずといへども、また狹衣、寢覺以來のひたすらに引き込みて男を憚り、感情

を沒却して好惡如何を解しがたき類にはあらず。北の方が剛情我慢の性は寫し得て紙上に躍然たるを覺ゆ。

滑稽の趣味に富めることも、また落窪の特色の一なり。この書いまだ源氏以來の沈欝なる色彩を帶びずして、邦人に固有なる單純快活の趣を現はし、しかも竹取、土佐におけるが如き、言語のうへの洒落、地口の類を取らずして、事實の上に滑稽の動作を求めたるは、最も多とすべし。左近少將が、三日の夜、大雨を厭はず、落窪の君の許に通ひ、夜まはりの雜色に見咎められて、足白の盜人と呼ばれ、笠を叩かれて、路傍の堆かき屎の上に蹲まり、屎つきては行くこともかなはじ、否、この雨を犯しての眞心には、屎も麝香に嗅ぎなしたまはんといひたるが如き、老典藥助が落窪の君を口說かんとて、遣戸を叩けど、中より唐櫃をかまへて明けず、夜更け、衣薄く、板の間より冷え上りて、腹ごぼ〱となりごぼめき、びちびちと音するに、出でやするとかい探りて、尻をかゝへて惑ひ出づるが如き、讀むまゝにおのづから失笑せざるを得ず。されど典藥助が尾籠なるふるまひを、更に落窪の君と少將とが語りて笑ひ、なほ助みづからも北の方の前にて語る

が如き、しつこくことさらにこそぐりを重ぬるやうにて、これもまた例の童蒙に對するが如き、幼稚の趣味なるを免れず。九百年よりも古き昔に成れりとはいへ、この好著に對しては惜むべきことならずや。

第三期　道長時代

第一章　御堂殿とその時代

平安朝の歴史は藤原氏の歴史なり、平安朝廷に跋扈せる貴族は藤原氏の一門なり、されば當世の貴族の專有にかゝる文學が、すなはち藤原氏の文學なることと、言を須たず、藤家の興隆は平安文學の興隆なり、藤家の衰亡は平安文學の衰亡なり。鎌足に起り、冬嗣に伸び、良房、基經より攝關の重きに居り、外戚の權を弄びて、勢威赫々たりしもの、御堂入道道長に至りて、榮華の絕頂に達す。この世をわが世と稱して、望月の虧けたることもなしと詠じたるは、道長がみづから得意の境遇を稱したるものにして、實に朝野羨望の中心、後人榮達の目標たり榮華物語といひ、大鏡といひ、いづれもこの入道殿の顯貴を頌し奉らんが爲に成りしもの、史家は稱して、古を聞き、今を見ても、二もなく、三もなく、ならびなくはかりなく、行末も誰の人かかばかりはあるべき、始終めでたく、珍らかなる寶の

君といへり。されば奠都以來、漸く進歩し來りし文學が、こゝに至りて彩華燦爛、旺昌の頂上に達したるも、偶然にあらず。和歌は延喜に樣式固定して、いまだよく變ずるに至らず、前哲の餘唾を嘗むる嫌なきにしもあらずといへども、散文に至りては、錦繡を羅織して、氣焰の揚り、精神の溢れたること、前後いまだその比を見ざるなり。

望月のわが世と稱したるは、却つて明日より虧くることを豫言す。世態變動止むことなく、上りつむればすなはち下り坂、頂點は續いて居るべからず、藤原氏の榮華は道長に窮まりぬ。その子賴通、敎通等乃父の勢威を墜さざらんことに努めたりといへども、時運の推移は如何ともすべからず、春日の神燈影漸く薄らぎぬ。文學の盛衰もとよりこれに伴へり。和歌は沈滯の極、平安末期に至りて、別途の光明を望むに至れりといへども、散文は逡巡萎靡、空しく道長時代の跡を追うて、氣力なく、變化なく、掉尾の餘勢遂に振はずして止みぬ。平安朝の文化は、實に御堂入道の世において、絕頂に達し、文學もこの朝の長所短所を倂せて最もよくその特色を發揮したり。

浮華輕薄は平安朝の通習なり。俊邁の士がその才學を著はすは、狭隘なる貴族の間においてせざるべからず、貴族の間においてするには、藤家の有力者の眷顧に待たざるべからず。地狭くして、人多く、門閥に攀縁し、同輩を排擠し、便佞阿附、以て己の位置を得んとす。一條天皇自賛して宣はく、朕が代敢て誇るに足るものなし、たゞ人材の輩出せるのみ、決して前世に劣らずと、當時の殿上人に材能饒かなるもの多きが中にも傑出したるは、藤原行成、同公任、同齊信、源俊賢にして、世人稱して四納言といふ。されどこの四納言が顯達したるは、專らその學問伎倆に依れるものにあらずして、一は世間の綱渡りの巧なりしが爲なり。少しくかれらが履歴を調べて、道長と姻縁を結び、その膝下に俯伏したることを知らば、思なかばに過ぎん。大江匡衡は一代の碩儒と稱せらるゝもの、また道長に諂ひて、門前の犬となり、みづから恩澤に浮沈して光陰を送るといひて、頌德の辭を奉りて曰く、

左相府尊閤、希代榮貴之器也。居戚里、爲王者之親舅、入法門、爲如來之弟子、遊文場、爲花月之主、在朝廷、爲社稷之臣。外孫則鳳、作皇子、聖日照帝梧之枝、長男則龍、

作納言、家風期台槐之葉。以薦賢爲己任、以弘經爲身謀、夫釋尊之出世焉、爲一佛乘也、相府之仕朝焉、亦爲一佛乘也。江吏部集卷上

昇平の世、英傑上に治めて、文藝界また名士輩出す。道長の政事における、敢て偉大の功あるにあらず、施設の竹册に記すべく、勸業の後世に德とすべきものなしといへども、その人物や決して小ならず。三人の兄弟膽力を角して、末弟最も勇敢なりと稱せられたる、武人源賴光が傾倒してこれに事へたる、二兄の顯榮を傍觀して功を急がず、徐ろに實力を扶殖して運命の發展を待ちたる、いづれもかれが尋常の人にあらざるを推すに足る。公任の才を稱して、我家がわが子は影ふむべくもあらぬこそ口惜しけれといひたるもの、その愚は却つて將相の才なりしなり。たゞ泰平無爲、平安の桃源春興ゆたかに、外來の刺戟なかりし時勢は、政治、殖産等の事業に力を伸すに至らず、道長はその力を驅つて、宗敎と文學、美術とに向けたり。

當時の名僧碩德には、天台の中興良源既に寂しぬといへども、門下の高足源信、覺運は慧心、檀那の二流を開き、殊に源信の往生要集は後の念佛宗の芽をなす。

大和の多武峰には增賀あり、播磨の書寫山には性空あり、眞言の寛朝宇多の皇孫を以て、法驗殊に著しく、入宋の奝然旃檀の瑞像を捧げ歸りて、五臺山の面影嵯峨野に儼然たり。藤原氏は元來崇佛の家、道長わけて浮屠に歸依し、伽藍の造營父祖にも過ぎ、木幡に淨妙寺を剏め、洛中に法成寺を建て、第內に御堂を設けて、日夜佛事にいそしむ。上の好むところ、下これに響應して、僧俗男女の別なく公私ともに佛事に勵みて、現當二世の福利を祈り、內心の信仰は知らず、表面はたゞこれ佛法繁昌の御世とぞ見えにける。

法橋定朝は佛師僧綱の祖と稱せらる、刀痕滑澤、彫るところの佛像は三十二相具足圓滿、忿怒形の諸天も、怒氣惡形を失ひて、優美溫雅の相に融和す。慧心院の源信は、念佛の餘力、彫刻繪畫に及び、山越の彌陀、二十五菩薩來迎の繪に、儀規以外の機軸を發す。弘高は巨勢家に出でて、地獄變相の畫に名あり、具平親王その技を稱して、道長に謂つて曰く、布障子の役などには、今は弘高を召さざるべからずと。（古今著聞集）爲氏、爲成は宅磨家を起し、定朝の本尊と共に、爲成の壁および扉の繪は、道長の子賴通の本願にかゝれる鳳凰堂に、優麗きはまりなき當時の面

影を傳ふ。宇治河畔の舊刹、蒔繪螺鈿の巧を盡して、美術工藝の模範と今日に稱せらるといへども、古來の史書なほ重きをこれに置かず、筆を極めて法成寺の輪奐を稱す。惜しいかな、早く滅びて、その礎跡だも存せざれども、道長が畢世の力を擧げ、天下の財を傾け、名工巨匠を督して金銀七寶を鏤めしもの、莊嚴華美思ふにもあまりあり。

宮廷は遊觀娯樂の場、月卿雲客詩歌管絃に日を送り、女房の局に出入し、簾を隔て、袖をひかへて唱和す。皇后、中宮夜庭に並び立ち、女御、更衣また寵を爭ひ、いづれも才藝ある女房を集めて、その羽翼とすれば、古往今來、女子の文筆に通ずるものの輩出したる、この時より甚しきはなし。殿上人の和歌に長けたるものの藤原實方、源道濟等あり、書をよくするもの藤原佐理、同行成ありといへども、いまだ知名の淑女の多きに及ばず。一條の皇后定子の女房には淸少納言、馬内侍等あり、上東門院最も俊秀の侍女に富みて、紫式部、和泉式部、伊勢大輔、小馬命婦、出羽辨等あり、道長の妻の許には赤染衞門のあるあり。やゝ後れて紫式部の女大貳三位その名母に繼ぎ、和泉式部の女小式部、源賴光の女相模、康資王の母など

いづれも和歌に名ありき。

第二章　寛弘前後の漢文學

さきに天暦の世、漢文學は延喜の衰微に反して、やゝ復興の姿ありしが、大江朝綱は既に村上天皇の朝に卒し、菅原文時、源順はついで圓融天皇の朝に卒し、名家漸く凋落せり。されど多士濟々の稱ある一條天皇の時、朝綱等と交はりまたその門に學びたるもの少からずして、以て道長全盛の世を粉飾す。當時の詩文は載せて扶桑集、本朝麗藻、類聚句題抄、本朝文粹等にあり、また本朝續文粹、朝野群載にも散見す。作中まゝ聯句の朗吟するに堪へたるものありといへども、全篇の傑作を見ず。詩格も一方に偏し、扶桑集にはなほ五言を存すれども、本朝麗藻には七言あるのみ、律殊に多くして、絶句は少し。內容の單調もまたこれに伴ひ、たゞ字句の雕琢に苦心するのみ。天暦は弘仁、貞觀に及ばず、寛弘は更に天暦に及ばず、龍頭蛇尾は平安朝の漢文學に避くべからざる趨勢なりき。

四道の學、他の三道は文章道の盛なるに壓せられ、文章道はまた門閥の手に歸しぬ。斯道の門閥は既に貞觀の頃樹立せしが、この時に至りて、その弊ます〳〵甚しく、己を高くして他を排し、權門に阿附して、玉殿錦帳に陪侍するを擧とすれば、詩文はいやが上に貴族の專有となりて、攝家の一門、累代の儒家のほかには、その作の傳はるもの稀に、本朝麗藻の如きは、たゞ一條天皇をはじめ奉り道長の一門等の爲に編輯せるの感あり。凌雲、文華秀麗等の上下和諧おの〳〵その技を揮ひ巧を競へるに比すれば、頗る徑庭ありといふべし。

文章道を以て門戶を張るものには、菅原、大江二家あり。菅家には、寬弘の頃、淳茂の孫輔正齡既に八十を出で、斯道の耆宿、三位の顯達、世に北野宰相と稱す。その作傳はるもの少し、和歌には家集あり。文時の子輔昭もまた和歌をよくせり。要するにこの家は道眞の裔として、その地位むしろ江家の上にありしが如しといへども、才人の出で、光焰の揚れることは、終にかの家に及ばず。

江家には匡衡最も著はる。匡衡は維時の孫、幼にして學を祖父に受け、博聞強記よく及ぶものなし。永觀、永祚の間、文章博士となり、帝の侍讀となる。官位は正四

位下式部大輔に至り、侍從に進む。著はすところ、江吏部集三卷、また和歌の集一卷あり。匡衡常に門閥の貴に伐りて、音人、維時の功を說き、自ら重んじて、一言猶千金の重きに勝り、三百卷の書至尊に授くといふ。道長を仰いで周公に比し、みづから相府の家臣と呼び、詠じて曰く、

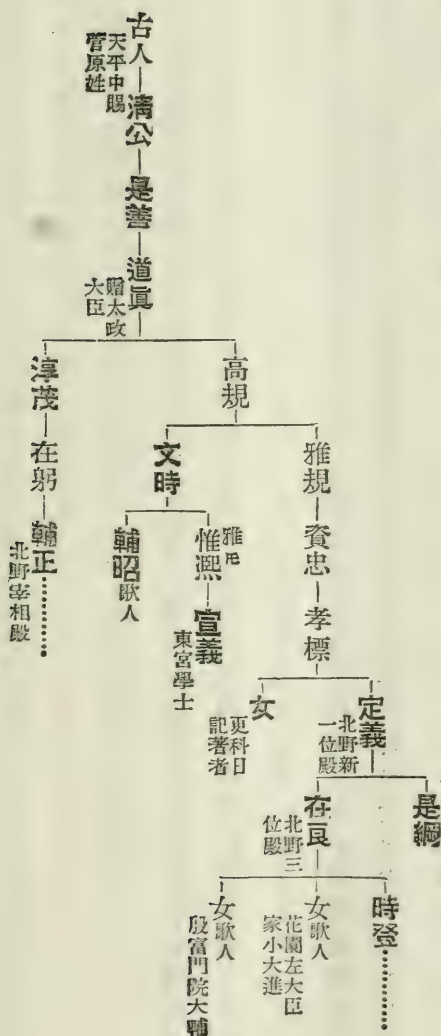
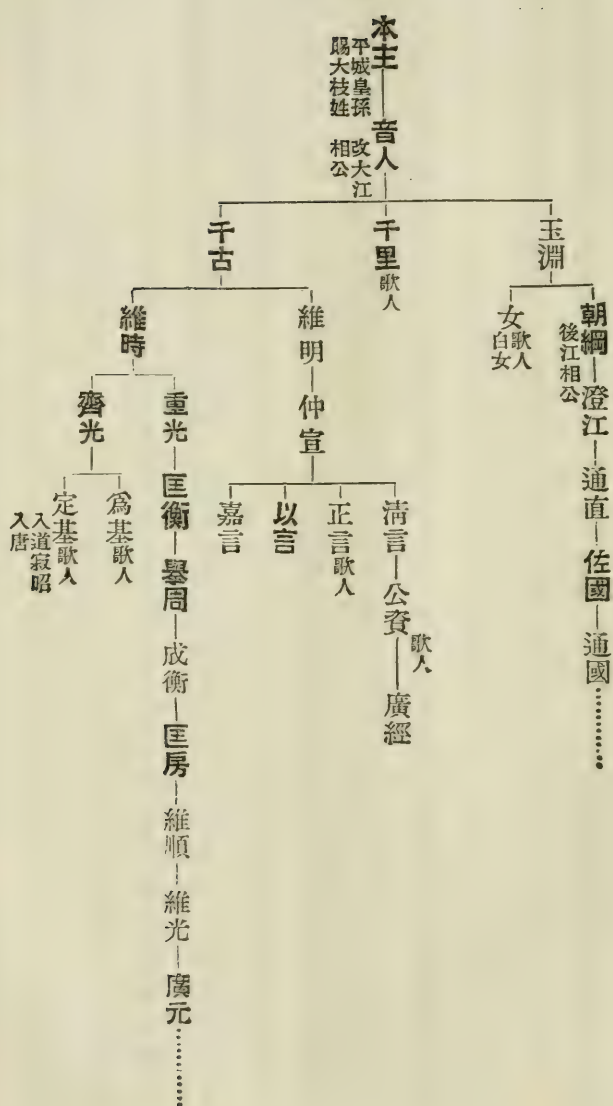
沐浴恩波載德音、自憑相府好文深、幸當下問不停滯、一字千金萬々金。

しきりに官位を貪りて、名利の念殊に深く、嘗て尾張守たらんことを望みて得ざるや、心忽ち死灰の如く、法の行はれざるあり、文の用ひられざるあり、只今在天の文星光縮まりぬと歎じて、却つて行成に揶揄せらる。いよ〳〵その任に就くことを得るや、歡天喜地、君の師を崇ぶ、古今かくの如しといひ、匡衡異賞殊私、喜ぶべし、懼るべしといふ。阿諛便佞、上に諂ひ、後學微官の士を虐ぐること甚しく、一進一退、喜憂交〻至る。天下の腐儒、博學の小人、古今東西、曲學阿世の士多しといへども、匡衡を以てその頭領に推すべし。從うてその詩文も、筆を下せば河流を決して、滔々數千言たちどころに成るといへども、蕪雜粗厲、疵瑕滿幅、俗臭紛紛として、品位の見るべきものなし。

菅原氏略系

古人
天平中賜菅原姓
清公
是善
道眞
贈太政大臣
高規
淳茂
雅規
文時
在躬
輔正
北野宰相殿
資忠
惟凞
雅巳
輔昭
歌人
宣義
東宮學士
孝標
定義
北野新一位殿
女
更科日記著者
是綱
在良
北野三位殿
時登
女
歌人
花園左大臣家小大進
女
歌人
殷富門院大輔

大江氏略系

本主
平城皇孫
賜大枝姓
音人
改大江
相公
玉淵
千里
歌人
千古
朝綱
後江相公
女
歌人
白女
澄江
通直
佐國
通國
維明
仲宣
清言
公資
歌人
廣經
正言
歌人
以言
嘉言
維時
重光
匡衡
擧周
成衡
匡房
維順
維光
廣元
齊光
爲基
歌人
定基
歌人
入道寂昭
入唐

匡衡の一族にして、その學かれに匹敵すべきもの、大江以言あり。以言は千古の曾孫、從四位下式部權大輔たり。はじめ文章博士となりてより、凡そ七年間も兼官なく、深くみづから一身の沈滯を歎ず。蓋し一條天皇その才を知りて、拔擢せんとしたまへども、道長の沮めるなり。以言慍りて、詩を作りて曰く、鷹鳩不變三春眼、鹿馬可迷二世情と。（江談抄及古事談）憶測の說ながら、兩雄並び立たず、匡衡が道長に阿附して、以言の進路を遮りたるものにあらざるか。以言文藻絢爛、修辭頗る見るべしといへども、才敏にして筆を行ることの迅速なるは、匡衡に及ばず、凡俗の時弊も免れがたし。大江匡房近世の才子を論じて曰く、橘在列は源順に及ばず、順は慶滋保胤に及ばず、保胤は以言に及ばずと。（江談抄）後進は先達に勝り、詩文は年を逐うて盛なるが如くなれども、この論いまだ首肯すべからざるなり。以言の弟嘉言は和歌をよくせり。

寛弘の前後、詩を以て名を得たるもの、菅江二家のほかには、慶滋保胤、紀齊名、具平親王、源爲憲、藤原有國等あり。慶滋保胤字は能、賀茂忠行の次子にして、保憲の弟なり。賀茂氏はもと天文曆數の家なりしを、保胤性癖世業に合はず、氏を改め

て儒家に列す。學を菅原文時に受け、また源順と親交あり、思藻豐富、文章一時に絕す。天暦の末試みられて、ひとり第に中り、大内記となり、近江掾を兼ぬ。されど幼より佛門を慕ひ、言談の際には眼を合せて佛號を唱ふ。嘗て横川に增賀の止觀を講ずるを聽き、歔欷措かざりき。終に髮を剃つて寂心と稱し、四方を遊歷し、やゝ寬弘に先だちて寂す。著はすところ日本往生極樂記あり、聖德太子以下四十餘人を傳す。また花山天皇の爲に詔勅を綴り、奝然等の僧侶の爲に願文を作る、その文概するに簡短にして平易なり。匡衡の從弟大江定基愛姿を失ひて出家し、寂心を師として寂昭といひ、更に源信に學び、宋に入りてかの國に終れり。具平親王もまた寂心の門に出づ。

具平親王は村上の皇子、圓融の皇弟にして、二品中務卿たり、人呼んで千種殿または六條宮といひ、兼明親王に對して後中書王と稱す。以言と親しく、また深く寂心を敬重し、共に佛敎を修持し、みづから昆弟に比し、世々師弟となりて、妙法に霑はんことを願へり。詩文はもとより、和歌、音律、陰陽、醫術等の諸藝に通じ、著はすところ六帖、弘決外典鈔ありといふ。眞名伊勢物語またその筆に成れりと

いへども、後人の假託なるや明けし。金玉積傳集二卷の、上は前中書王の口傳下は後中書王が筆道八曲の次第を述べたるものといへども、また信を置くに足らず。作るところの詩文、綺語麗句を列ぬるのみにして、これを前中書王に比するに、いたく劣れり。

源順に學べるものに橘正通、源爲憲あり。正通は不遇を歎じ、齡は顏駟に亞ぎ、三代を過ぎてなほ沈み、恨は伯鸞に同じく、五噫を歌ひて去らんと欲すと吟じ、跡を闇まして行くところを知らず。或は稱して高麗に赴けりといへど、信ずべきことにあらじ。爲憲は光孝天皇の裔なり。師順卒するに臨み、その集を正通に授けずして、爲憲に與ふ。爲憲詩筵に赴く毎に、必ず一嚢を携へ、名づけて詩嚢といふ。嘗て以言の詩を聽き、頭を嚢中に埋めて吟賞已まず、殆ど涕泣するに至れり。古今著聞集　著はすところ口遊、圓融院御授戒記、空也上人誄等あり、また本朝詞林を編せりといへども、散佚したるものの如し。假名文には天德歌合の序跋あり。林春齋その秋夜對月憶入道尙書禪門詩を引き、居易の體を學んで、やゝ感慨の深切なるを覺ゆといへり。その代迈陵島人感皇恩詩を見ても、當時の泛々たる文

人を抜いて、才情の溢れたるを知るべし。

紀齊名本姓は田口、のち紀に改む。正通の門に學びて、出藍の譽あり。早く世に重んぜらるといへども、長保元年、年なほ三十四にして歿す。諸家の詩を集めたる扶桑集は、すなはちその手に成れり。當時、文壇沈滯し、絶えて氣焔の見るべきもののなきが中に、僅かに波瀾ありしを、匡衡、齊名の論爭とす。長德三年の省試に、大江時棟の作に寰中唯守禮、海外都無怨の句あり。齊名論じて、外と怨と二字同聲なるは、蜂腰病にかゝれるものといひ、諸儒これに一致して、時棟を落第せしむ。時棟の養父匡衡下句の蜂腰を避けざるは、既に都良香にその例ありと論じて、その決を翻へさんと訴ふ。齊名詩髓腦を引いてこれを辯ず、匡衡更に古來の例を引いて、滔々としてこれを駁す。彼は一代の宿老、齊名みづから謙して、敢て智を英儒に鬪はさんとするに非ず、只、忠を聖主に竭さんが爲なりといへど、遂に匡衡の壓迫に堪へず、議は翻へりて、時棟は及弟の榮を擔へり。議論の是非いづれにあるを問はずとも可、名儒大家と稱せらるゝもの、徒らに些々たる抜葉の末に遑々として、詩文の大本を忘る、時勢の赴くところ、傑作の出でざるも宜な

るかな。

藤原有國は北家の支派に出で、また儒を立てて一家を成す。平安朝のはじめ頃内麿の子、冬嗣の兄に眞夏あり、有國はその七代の孫なり。性至孝にして、また義氣に富む。勘解由長官に任ぜられ、參議從三位に至り、攝政兼家の股肱と稱せらる。兼家薨ずるに臨み、諸子を選びて職を襲がしめんと欲し、これを有國と平惟仲とに計る。有國謂へらく、兼家の今日あるは、ひとへにその次子の功なりと、よりて道兼を薦む。されど兼家は惟仲の言に從ひて、長子道隆を立つ。道隆深く有國を恨み、事によりてこれを除名せり。時勢一變、道長執政となるに及びて、有國を擧げて太宰大貳となす。道隆の子伊周罪を得て、また太宰帥に貶せらる。謂へらく、乃父に對する恨は報いてわが頭上に落ちんと。されど有國の志はこゝにあらず、われ先に道隆に貶せられし時、なほ且これを辱とせり、況や伊周が外戚の尊においてをやと。その子廣業をして迎へしめ、厚遇至らざるなし。伊周深く慚愧し、これより金蘭の交を結べりといふ。有國のち京に歸り、進んで從二位彈正大弼に至れり。その作を集めたるもの勘解由相公集あり。孝義の性格おのづ

からその製作に表はるといへども、なほ字句の末に趍りて、眞情の流露を闕き、先哲菅公に比するに、頗る徑庭あり。その父輔道對策高第し、有國に至りて家聲頗る振ひ、これよりその家儒を以て業とす、斯道を以て門戶を張るもののうち、官位最も高し。その領の洛の東南日野にあるを以て、日野家と稱せらる。

佛敎の流行は一代の風潮、道長をはじめ朝野をあげて經文讀誦に餘念なし。この時世に遭遇しては、儒家も浮屠を排せざるのみならず、また力を崇佛につくす。儒佛相混じて、詩文の命題も極樂、兜率を想ひ、圓頓、三密を說き、高僧名師の德を讃するなど、多くは釋敎に關するものなり。勸學會といふは、古くありしものならんが、一旦衰滅に歸したるを、道長更に復興す。暮春、暮秋の十五日に、叡山の僧二十人と學士二十人と會合し、法華を講じ、佛事を營み、終りてのち詩賦を綴り、稱して信心を內にし、綺語を外にすといふ。高階積善の編輯せる本朝麗藻の詩は、この會の作多きが如し。

儒家は深く佛敎の影響を受けたるほかに、また和歌とも相近づきたり。漢文學の勢力衰へ、詩文の家に生れたるものも、專門の業を疎かにして、和歌にすさむ

こと少からず、轉じて歌人となるもあり。彼此の障壁壊れて、本朝麗藻、和漢朗詠集の如きは、目次を列ぬるに、甚だ歌集に似たるところあり。詩文は萎靡せる代に、その思想辭法を和歌に流用せんとする傾向を見るに至りぬ。藤原公任、源道濟等が歌論を倡道せるが如きは、漢詩の髓腦に得たるものにして、すなはち詩歌兼學の結果にあらずや。さらばこの時代における和歌は如何。

第三章　拾遺和歌集

國の東西を問はず、歌謠は散文に先だちて起る。文字の使用自在ならず、また情感の推理にまされる時代には、勢しからざるを得ず。延喜、天暦の世、和歌は一時の盛を極め、散文また漸次發達せりといへども、いまだ和歌の隆々たるに及ばざりき。しかるにこの時代に至りては、情況こゝに一轉して、和歌は既に旺昌の頂點に達せしもの、社會に變動なく、從うて人心に更新の氣なく、單調に流れ、鬱滯して進まず、却つて散文をしてひとり名聲を博せしめたり。

和歌の世間に遍く行はれたるは、いふにしも及ばずといへども、歌集の勅撰は前後の時代に比して、頗る寂寥にして、たゞ一の拾遺和歌集あるのみ。これすら道長時代の撰といふよりも、前代の和歌を集め、前期の終、この期のはじめに成りて、彼此の過程にあるものといふべし。而してその編輯の時期と撰者とは他の撰集の如く明かならず。撰の成りたるを、勅撰次第の或説、拾芥抄等は長徳頃とす。運歩色葉集に長徳元年と定めたるは、何によりたるか定かならず、また信ずべからず。撰者は、後拾遺集の序および増鏡は、花山法皇とし、拾芥抄は藤原公任の撰或は法皇ともいへりとす。賀茂眞淵は論じて、花山御撰などいふは、甚しき僻事ぞ、よく見ば必ず然らぬこと見ゆべし（新學頭書）と、ひとり頷けど、然らぬことは見ゆべからず。吉田令世これを駁し、この集を花山院の御撰にあらずとは、何を以て知るべきぞ。後撰だに誤はありき、まして花山院ひとりなれば、誤はあるべし、誤ありとて、花山院にあらずとはいひがたしと。（歴代和歌勅撰考）駁議當を得て、以て眞淵の説を破するに足るといへども、この論もいまだ積極的に法皇なりと斷ずるに由なし。

かくの如く集のみについていふは、論なほ箇なりといへども更に拾遺集と拾遺抄との二種あるに至つては、紛雜混亂、爭頗る決しがたし。集は和歌を載すること千三百首に餘り、抄はこれを拔き出でて五百八十餘、彼は二十卷、此は十卷なり。これが撰者については、袋草紙は二つながら法皇となせるが如く、八雲御抄は集は公任、抄は花山、一說に集は花山、抄は公任とし、拾遺抄註、井蛙抄、勅撰次第は集は花山、抄は公任と定む。その中、拾遺抄註は、二書編成の行程を說くこと甚だ委しく、井蛙抄も同じ說を揭げたり。井蛙抄に云く、

冷泉相公云、公任卿「朝まだき嵐の山の寒ければ、散るもみぢ葉を着ぬ人ぞなき」といふ歌を、花山院、拾遺集に「紅葉の錦きぬ人ぞなき」と直して入れられたるを、公任卿の所存に違ひて、この歌拾遺抄に「散るもみぢ葉を着ぬ人ぞなき」と入れられたり。時の人集をさしおきて、抄をもてなしけり。仍て通俊卿後拾遺も集にはつかずして、抄につきて、後拾遺抄と題せり。その後、年久しく抄を賞翫することにて侍りけるを、京極黄門、集もまことに殊勝なりとて、抄をさしおきて集を翫びて、この由を後鳥羽院へも申されければ、御所も御同心あ

りけり。その後、集をもてなすことになりて侍るよし、京極委細書き置かる云云。公任卿拾遺抄をえらぶことも、わが歌一首の故に思ひ立たる云々。

吉田令世はこれらに就いて判定して、集花山、抄公任の說辯を待たずして明けし、しかるに八雲などに兩說を擧げたる、唯俗のいひつたへによりて、一方に定めざりしものかといへり。（歴代和歌勅撰考）しかれどもこれもまた俗傳の多數によりて決したるのみにして、他に有力なる證跡あるにあらず。しかも塙保己一の說くところに思ひ及ばざりしは、うたゝ令世が古人に雷同して、獨創の見に乏しきを見る。保己一が拾遺抄を論ずる言に曰く、

袋草紙曰、抄歌五百八十六首、或云四首、即淸輔朝臣所見本異耳。又曰、花山院御撰、而世多爲公任卿撰。今試以集中所載作者之官位、推其時、此書之撰、即在長德二年後、數經刊修、且稍有所增加、至長保三年、乃改爲拾遺集廿卷也。玩讀兩書、其題書之辭、倶似不出人臣之手也、爲花山法皇製作者、得其實歟。姑書俟識者點竄爾。（群書類從所載拾遺抄奥書）

すなはち從來の說に反し、抄を以て集に先だてりとす。頗るその意を得ざるが

如しといへども、さすがは眼に盲して心に明かなる名檢校の論、漫に俗說に附和せず、進んで憑據を原書に求め、いふところ的確に、頗る耳を傾くべし。たゞ所說簡約にして、結論のみを擧げて、推理の次第を說かず。試みに余が見るところを記して、この說の來由を探り、併せて不同意の點をもあげんとす、果して保己一の意に合へりや、否や。

集、抄とも、公任の官名を記して右衞門督とす、公任がこの職にありしは、長德二年より長保三年までなり、故に保己一は撰述の期を長德二年の後にありとせしならん。なほ二書ともに、藤原道綱を春宮大夫とす、道綱がこの職に任ぜられしは長德三年なり、されば保己一の說よりもなほ一年を下すを得べし。ついで集に藤原實資を右大將とし、抄はこの人なし、實資がこの職に任ぜられしは長保三年なり。公任の督は長保三年まで、實資の大將は同年よりとすれば、則ち集がこの年に成れるを知るべく、また抄は長德三年より集の成りし年まで五年の間に成りしものにして、もし同年にあらずんば、必ずこれに先だちしなり。更に書中の歌の小序を見ても、集が抄の後を受けたりと思はるゝ由あり。されば

集まづ成り、抄ついで出でたりといふ說の、極めて故ありげにきこえ、貫之が古今集の繁を拔いて、新撰和歌集を編したる例も引かるれど、余はなほ抄は長德三年以後に成り、更にこれを增補して長保三年に集を得たりといふの明證あるに從はんとす。抄の稱の如きは、後の命名なるかも知るべからず、拘泥するに足らざるなり。

ついでその撰者を保己一は集、抄ともに花山法皇とす。いまだその理由を知らずといへども、題書の辭人臣の手に出でずといふは、「侍り」などの敬語多きを以て、歌人が草案を奉りたるまゝを用ひて、帝王の机上に編せられたる故なりといふにあらざるか。或は右大臣師輔、左大臣道長など大臣の名をしるせるは、先例に違へるを、（今の諸本は名を記さず、八雲御抄に言ふところによる）舊說には撰述の疎漏に歸したれども、今世の辯の如く、却つてこれを以て帝王の御撰の證とすべしといふにあるか。いづれも一理ありといへども、いまだ的確の說にあらず、直ちにこれに左袒しがたし。翻へりて思ふに、集中所載の歌の百首以上あるは、人麿、貫之の二人のみにして、兩者その數相匹敵す。公任は貫之に私淑するもの、具平親王がさりと

て人麿には及ばじといへるに平かならず、秀歌十首を鬪はせて、人麿の勝となりたるに、いよ〳〵平かならずして、三十六歌仙を撰せり紙袋草と傳ふることを思へば、集中、二聖が衡を爭ふが如き、すなはち公任の所爲にあらざるなきかを思はしむ。また集中卷頭の歌は、すなはち公任が和歌九品の上品上生のうちに選べるものなるをも思ふべし。されどいづれも憶說に過ぎず。勅撰次第には、集を或說に藤原長能、源道濟とし、拾遺抄物には、花山院御撰にして、二人これを承れりとす、眞否如何を知らず。作者についでは、しばらく疑を存す。

拾遺集の作者は、人麿、貫之を除けば、歌數遙かに下る。その中にも、二十首以上に及べるは能宣、元輔、藤原輔相、兼盛、躬恒、順にして、五首以上のもの更に十七人ばかりあるのみ。公任は十三首、花山法皇は一首もなし。一二首の作者徒らに多く、求むること廣くして、擇ぶこと精しからざる感あり。概するに集中の歌、古今、後撰と重複するもあれど、その名の如く、まことはかの二集の遺れるを拾ひたるものなるべし。わけて撰者は人麿、貫之に傾倒し、また後撰の撰者および天曆の名家の多くは後撰に載らざりしを以て、力めてこれらの歌を蒐めしものなら

ん。

長明無名抄に評して「拾遺の頃より、その體ことの外に物近くなりて、理くまなく顯はれ、姿すなほなるを宜しとす」といへるは、當を得たり。今や風調漸く斬新を喜ぶに至れりといへども、進んで變革を唱ふるものは稀に、なほ古今の體を保守し、いはば古調、新體の過程にあるものなり。古今はなほ朧ろげにいひて、餘裕の存するを見たるに、拾遺は明晰を思うて却つて露骨に、委曲ならんとして却つて巧慧に、詩趣の闕けたるもの多きが如し。古今の、

春の夜の闇はあやなし、梅の花、色こそ見えね、香やは隱るゝ。　躬恒

は、拾遺の、

香をとめて誰折らざらむ、梅の花、あやなし霞たちな隱しそ。　躬恒

となり、古今の、

人はいさ心も知らず、ふるさとは花ぞ昔の香ににほひける。　貫之

は、拾遺の、

あだなれど櫻のみこそ、ふる里の昔ながらの物にはありけれ。　貫之

となりぬ。古今に、

み吉野の山邊に咲ける櫻花、雪かとのみぞあやまたれける。　友則

といへるは、もとよりよくもあらねど、なほ實景を離れざるを、拾遺に、

かきくらし雪も降らなむ、櫻花、まだ咲かぬまはよそへても見む。　よみ人知らず

といへるは、巧を衒ひて情を欺けり。古今の、

櫻色に衣は深く染めて着む、花の散りなむ後のかたみに。　紀在友

といへる「櫻色」は、常の語にて、何の怪しきこともなきを、拾遺が、

櫻色にわが身は深くなりぬらむ、心にしみて花を惜めば。　よみ人知らず

といへるは、視聽を誣ひて、卑俗に流れ、鎌倉初期の「櫻色の庭の春風」などの素をなしぬ。かく新奇に趨りて、いまだまことの淸新を得ず、作意に失したるもの多しといへども、性情の赴くところ、自然のあるところを、感ずるがまゝに寫し出せるものに至つては、頗る人心を動かすに足れり。

八重葎しげれる宿の淋しきに、人こそ見えね、秋は來にけり。　惠慶法師

思ひ出もなき故郷の山なれど、かくれゆくはた哀なりけり。　大江嘉言

いづ方になきてゆくらむ、時鳥淀のわたりのまだ夜深きに。　忠　見

さばれたゞ見るがまゝ思ふがまゝといふのみにして、詩趣のこれに添はざるは、興味索然。

來ぬかなとしばしは人に思はせむ、會はて歸りし夜半のねたさに。　よみ人知らず

われながらさももどかしき心かな、思はぬ人は何か戀しき。　同

更に一面には、巧緻をを求めて纎細に流れ、

水の面の深く淺くも見ゆるかな、紅葉の色や淵瀨なるらむ。　躬　恒

といへるが如き、鎌倉初期の、

うすくこく野邊の綠の若草に、跡まで見ゆる雪のむらぎえ。　宮内卿

の本歌たるべく、共に工夫の極、生意を沒却せり。

思想は陳套なるに、強ひて新奇を望めば、勢これを修辭に求めざるを得ず。古語を倘びながらも、おのづから近格に傾き、「散り、散らず」「あはむ、あはじ」、「海も淺し、山

も程なし」、「戀ひは戀はれず、人はつれなし」、「咲けば散る、咲かねば戀し」などの對句を用ひ、「鳴けや、鳴け」、「忘るなよ」、「夢よ、夢」など頓呼法を以て初句を切り、「とふ人も今はあらしの山風に」、「冬されば嵐の聲も高砂の」、「わがことはえもいはしろの結び松」、「音にきく人に心をつくばねのみねど戀しき」など、懸詞の今始まりしことならねど、好んでこれを用ふるに至れる、「名こそながれてなほきこえけれ」、「あらばあふ夜のありもこそすれ」など、ことさらに頭韻を喜べる、「解けむ期もなく氷しにけり」、「勅なればいともかしこし」など、漢語を挾みたるが如き、いづれも拾遺集の辭法を見るに足るべきものとす。

かくの如く形式の新たなるものありといへども、大體においては、なほ前代を墨守するのみ。春花秋葉につけて戀情を述ぶる樣の、枝葉までも同じくして、女郎花といひて狩と續け、思を火に喩へ、瀧の絲といひてへと受け、玉だれのすけるといふなど、常套のことのみ多ければ、まして思想においては、殊に論ずべきことあるを見ず。

第四章　時流の先達、歌論の先鋒——藤原公任

道長時代の和歌を論ずるものは、まづ一代の先達と仰がれし藤原公任を說かざるべからず。公任は小野宮太政大臣實賴の孫、父は三條太政大臣賴忠にして、母は代明親王の女、道長と從兄弟の親ありて、しかも齡を同じくす。天元三年、淸涼殿にて元服し、主上みづから冠を授けたまふ。それより累進し、參議となり、中納言となりて、從弟藤原齊信と官位常に相如く。正三位左衞門督たるに及びて、齊信に位一階を超えられ、怏々として樂まず、病と稱して出仕せず、ついで職を辭す、その辭表を作るや、當時の名家に草案を托す、みな意に叶はず、更に大江匡衡をしてこれを書かしむ。匡衡難色あり、家に歸りて呻吟す、その妻赤染衞門曰く、公任は驕慢の人、必ずまづ名門にして官位のこれに合はざる由を記すべし、諸家の案にこの事なき、その意に滿たざる所以なりと。匡衡案を拍つて曰く、是なり〳〵と、すなはち筆を執つて、臣者五代太政大臣嫡男也、亡祖忠仁公といふより、次第に數へ上げて、己が沈淪の由を記す、公任これを見て深く喜べりとい

ふ。紙袋草上に阿り、下に驕り、權勢に戀々たる匡衡の妻にして、公任を見ることなほかくの如きものありき。嘗て人々集まりて、宇津保物語の仲忠と凉との品さだめせしことあり、公任詠じて曰く、

沖つ波吹上の濱に家居して、ひとりすゞしと思ふべしやは。

かれは到底一生を詩神に捧ぐるものにあらずして、權勢の奴たる俗物たりき。』かの辭表にいへるが如く、公任は累代攝關の嫡流、その俗界における、志や決して小ならず。されどその姉遵子は圓融天皇の后となりしが、皇子なくして素腹の誹を殘し、天皇もまた御讓位ありては、公任が一の人たる望も絶えぬ。道長支流より出でて、威權赫々、公任の驕慢も如何ともすること能はず、一身の爲を思うては、却つてその前に屈伏して、眷顧を希はざるを得ざりき。さきに父賴忠の薨ぜし時、公任書を道長に送りて曰く、

今よりは君が御蔭をたのむかな、雲かくれにし月を戀ひつゝ。

かくて公任齊信に超えられしに平かならずして、職を辭せしかば、朝廷その情を憐みて、位を從二位に進む。その時の詠なるべし、

うれしさを昔は袖につゝみけり、今宵は身にも餘りぬるかな。

その後、齊信、公任ともに大納言となり、正二位に昇りて、地位また相如く。萬壽元年、公任愛女を失ひて、憂患止む能はず、意を決して致仕し、北山長谷の山莊に隱れ、佛事を營みて晩年を送り、長久二年、七十六歲にして薨ず、世に四條大納言といふ。家集一卷あり、公任およびその子定賴のことを記すに、敬稱を用ひたるより見れば、陪侍の者などの輯めしなるべし、編次體を得ず、亂雜なる書なり。公任が歌論の著には新撰髓腦あり、その撰にかゝるものには和歌九品、金玉集、三十六人撰、前十五番歌合、諸國歌枕、和漢朗詠集あり、有職の書には北山鈔、深窓祕抄あり。

公任聰敏にして多藝なり、嘗て道長が大堰川の遊に、詩、歌、管絃の三舟を艤し、各その技に通ずる人をして、その一に擇び乘らしめし時、公任兼ねて三舟の才ありと稱せられ、「朝まだき」の歌を詠じて自讃せしは、文壇著名の談なり。大鏡、袋草紙、古事談公任また有職の技に通じ、中納言となりて、典禮を掌り、朝儀式目多くはその手に出でたりといふ。されど諸藝のうち、最も長じて衆人に仰望せられしは、和歌

の道なりき。公任稚かりし時、宮中にありて、

しら〳〵としらけたる夜の月影に、雪かきわけて梅の花折る。

と詠ぜしに、主上御袖を濕らさせたまひ、公任も感激してまた落涙せり、生涯の思ひ出この事にありと、後々までも語れりといふ。かくて若年より堪能の譽高く、長じて後、いよ〳〵その技熟達せるが上に、門地高ければ、一世の耳目は一身に集まり、一言の毀譽は歌人を生殺する權ありき。嘗て藤原範永が月を詠じて公任に稱せられ、その讃辭を請ひて、錦袋に納めて重寶としたりといふが如き、十訓悦目抄、袋草紙抄、古今著聞集 藤原長能が三月盡の詠を難ぜられ、病を得て歿したりといふが如き、公任老病漸く重しと聞きて、大貳高遠が衣文うるはしく長谷の山莊を尋ね、一言も病氣のことに及ばず、その道の大事とて、貫之が望月の駒の歌と己がきりはらの駒の歌との優劣を問ひたりといふが如き、愚祕抄、西公談抄 これらの逸話多く傳はり、いづれも公任の聲望を證して餘あり。八雲御抄に云く、「公任卿寛和の頃より、天下無雙の名人とて、既に二百餘歲を經たり。在世の時はいふに及ばず、經信、俊賴以下、近く俊成存世までは、空の月の如く仰ぐ」と。かれは實に貫之、

定家の間に立ちて、斯道の宗と仰がれたりしなり。
公任の伎倆は果してその世評に叶へりや、その作品を熟讀してはうたゝ俗論の謬妄を歎ぜざるを得ず。かれの詠ずるところ、清新の風あるにあらず、綺麗の辭あるにあらず、放膽の格なく、奇警の句なく、平板にしてむしろ散文に近きもの多し。家集を繙きて、その一二を擧ぐれば、

山里の梅を思ふに、雨ふればたゞにも散らで色やまさらむ。

梅が枝にふりしく雪は、一歳に二度さける花とこそおもへ。

この技を以てかの評ある所以は、一は製出の敏速なるにより、一は古歌に博通せるによりたるが如し。巧拙はともあれ、座に臨みて吟詠口を銜いて發す、即興に任せて唱和に滯らざるは、文學上の眞價はしばらく措いて、一時の喝采を博する所以なり。加ふるに博く先人の詠を胸に蓄へ、機に觸れて引證溢るゝが如くなれば、世人はその才能に思ひ及ばずして、まづその學識に驚歎す。古歌に準據し、もしくはこれを翻案せる、いはゆる本歌とりのかれの作に多きが如き、己が思想の貧なるを覆ひ、併せて該博の名を得る所以ならずや。敢て本歌とりを

以て、公任に始まれりといふにあらざれども、かれは好んでこれを用ひて、その世、後の世の流行の魁をなしたるが如し。古今の「青柳を片絲によりて、鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」に倣ひて、

青柳の片絲によりて出でけれど、さしてぞきつる梅の花笠。

とよみ、忠岑の「春きぬと人はいへども、鶯のなかぬ限はあらじとぞ思ふ」を、

卯の花の散らぬ限は、山里の木の下闇もあらじとぞ思ふ。

と變じ、貫之の「櫻ちる木の下陰は寒からで、空に知られぬ雪ぞふりける」を、

もみぢ葉は雨とふれども、空はれて袖より外はぬれずぞありける。

と翻したるなどを思へ。

しかれども公任もとより名を一世に馳せたるもの、その詠に佳調なきにあらず。長所とするところは、新奇に趨らず、古格を守りて、穩和雅麗なるにあり。

かはり行く人の心を見ざりせば、何につけてか秋を知らまし。

春來てぞ人もとひける、山里は花こそ宿のあるじなりけれ。

源平爭鬪の世、薩摩守忠度が「ゆきくれて木の下陰を宿とせば」とよみたるは、す

なはち公任が「宿のあるじ」に出てたるならじや。こは公任が得意の筆法と見えて、

ふればまづ君がすみかを思ふかな、雪は山邊のしるしなりけり。

わが門に立ちよる人は、浦近み、浪こそ道のしるべなりけれ。

など、同じ意匠を繰り返し用ひたるは、才藻の淺薄むしろ憐むべし。

公任は歌人としては到底多大の價値あるものにあらず、しかるをなほ平安朝を通じて二三の大家のうちに列せらるゝは何ぞや。その主因は、貫之が古今集の序において爲し、定家が詠歌大概において爲したることを、またその著述においてなしたるにあり。公任は實に歌學を以て名を博せり。古今集の註、今傳はらずといへども、顯昭の註にかれの著として屢〻これを引けるは、蓋し歌集註釋の始なるべし。その敏才と殊に博洽なる學識とは、かれを驅りて好んで今昔の和歌を品隲せしめたり。作よりも評、手の人よりも口の人、歌論は公任に至りて體を備へたり。

敢て公任を以て正しく歌論の祖と斷ずるにあらず。最も早く和歌の形式を論

じたるものは、八雲御抄に四家式とて、歌經標式、喜撰作式、孫姬式、石見女式の名を擧ぐ。歌經標式は寶龜三年、參議濱成が勅を奉じて撰したるものといひ、喜撰作式はまた勅によりて僧喜撰の手に成れるものといひ、孫姬式は菅原道眞が孫女の爲に殘せるものといひ、石見女式は人麿の遺訓を傳へて、石見國より出でたるものといふ。御抄にまた石見女式は安倍清行式と同じ物かといへり、清行は寛平中の人、その作二首のせて古今集にあり。この四家式の今日に傳はれるは、後人が假託の書なる由、定論あり。されどその原本の佚して、僞作の出でたりといふも如何。臆測に過ぎざれど、余はむしろかゝる原本もはじめより存せず、平安末期に歌論の流行せしより、古人の名を竊みて、これらを作りしものなるべしと考ふ。古今集以前、歌體のいまだ確立せざる時に當りて、歌論の出づるは、時期早きに失す。貫之の論すらいまだ體裁を備へたるものにあらず、躬恒の祕藏抄とて今に傳はれるものも、躬恒の眞作にあらざるべく、御抄に名を存する忠岑十體も、推するに四家式の類なるべし。天曆以來、古歌を推重し、學修するより、おのづから格調の得失も考竅せられ、歌合流行して、敵味方の長短を是非

するより、批評の方法も研究せられ、遂に道長時代には歌論も體を備ふるに至りしなるべし。當時また道濟の十體和歌、能因が歌枕ありといへども、歌論を以て一世を代表せしものは、公任その人なり。

公任が和歌の批評に關せる逸話は、長元歌合の是非を聞かんとて、源經信が兄に伴ひて、北山の山莊を訪ひたるといひ、公任の子定頼が和泉式部、赤染衛門の優劣を問ひたるに、式部は「こやとも人をいふべきに」といふ歌よめる人ぞと答へたるといふなど、その例少からず。嘗て具平親王と人麿、貫之の優劣を論じ、二聖の秀歌十首づゝを合せて、貫之の勝に歸せるもの一首（袋草紙による、三十六人歌仙傳には三首とす）のみなるを喜ばず、その三十六人撰を編したるは、その基くところこゝにありといふ。和歌九品は佛教に說くところの彌陀の九品に擬して、名歌を選びたるもの、金玉集は倭歌得業生柿本末成の假名を以て、また佳什を集めたるものなり。論評は新撰髓腦において見るを得べく、說くところ措辭の大體にわたるのみにして、いまだ精細の見なし。その中に曰く、

凡そ歌は心深く、姿清げにて、心にをかしきところあるを、すぐれたりといふ

べし。事多く添へ鎖りてやと見たるが、いとわろきなり。一筋にすぐよかにならん詠むべき。心姿相具すること難くば、まづ心を取るべし、遂に心深からずば、姿をいたはるべし。その形といふは、打聞清げに故ありて、うたときこえ、もしは珍しく添へなどしたるなり。ともに得ずなりなば、古の人多く本に歌枕を置きて、末に思ふ心をあらはす。さるをなん中頃よりは、さしもあらねど、はじめに思ふことをいひあらはしたる、なほわろき事になんある。貫之、躬恒は中頃の上手なり、今の人の好むは、これが樣なるべし。

名門の學者、三舟の才人、その名高しといへども、その實これに合はず。されど和歌の詩趣を闕き、變化に乏しきは、公任ひとり然るにあらず、滔々として世を擧げてみな然りしものにして、公任實にこの時流の代表者たりしなり。因循にして古格を保守する一般の風潮を結晶せしめたるもの、すなはち四條大納言にして、社會は己の影をかれの一身に認む、その世俗に推戴せられたるもまた宜なり。加ふるにこの保守黨の大家は、偶然にも歌論を以て門戸を張りて、後世の流行の魁となりぬ。平安末期にこの學の勃興したるもの、かれの倡道與つて力

あることを思へば、公任が平安朝の文學における功勞、また決して侮るべからざるなり。

第五章　革新の曉星――曾禰好忠

公任と反對の極端に奔り、當時の歌壇に最も異色あるを曾禰好忠とす。好忠は公任にはむしろ先輩なるべく、既に後撰時代に名を得たるが、長生して寛弘前後に及べるが如し。

好忠の傳は詳細を知ること能はず。素性高からず、みづから歌人を以て許せりといへども、縉紳の間に伍して、常に輕侮せらる。官は丹後掾たり、はじめ人呼んで曾丹後掾と稱し、のち曾丹後といひ、遂に曾丹といふ。好忠歎じて曰く、いつまた「そた」といはれんずらんと。袋草紙寛和元年の春、圓融上皇洛の西北船岡山に子の日の御遊あり。卿相に藤原兼家、同公季、歌人に平兼盛、清原元輔、源重之、紀時文等陪侍して、和歌の會を開き、兼盛その判者たり。好忠召喚の命もなきに、出でて

座に列なる。兼家等怪んで、誰がまねきによりてかと問ふ。好忠昻然として曰く、當代の歌人を召さるといふに好忠が參らぬことやあると答へ、益〻無禮を咎められて、その席を追ひ斥けられぬ。（小右記、大鏡、今昔物語等）好忠性頑癖にして狷介、自ら高くして人を容れず、人もその微賤と不遜とを惡んで、かれを容れず、轗軻不遇にして一生を終りぬ。その歌また一世に歡迎せられず、空しく後の識者を待たざるを得ざりしは、作品の人物と同じく怪奇に流れ、時潮と悖戾せしを以てなり。[二]

平安末朝の藤原基俊が作と稱する悅目抄に、安倍清行式の語として、引いて曰く、不詠古語、非卑陋之所名奇物異名と。この式の眞否は知らざれども、その想は蓋し後撰以來の和歌に通有なる主義なり。こゝに古語といへるは、萬葉などに見えて、近世に廢れたるものにして、力めてこれらを避け、古今を標準として雅正の語を用ひ、花紅葉、里に鶯、浦に千鳥、名所は初瀨、み吉野、難波の葦に宮城野の萩と、模型のうちに局促するものを、すなはち當時の正調と稱したり。その弊や、溫雅を欲して凡俗に流れ、平靜を欲して乾枯に陥り、千篇一律、無味なること嚼蠟の如し。好忠ひとりこの俗習を憤り、奮うて新意を詠ぜんと欲す、その面目は

時流に反するにあり。時流に逆ひ、別に機軸を出さんと欲して、かれは好んで人の言はざる語句を用ひたり。試みにその用例を見よ。

(一)從來の和歌に少き諸國の地名を用ふること多し。やすＪＩ、かまど山、牛窓等の如し。

(二)草木等もことさらに耳なれざるものを用ひたり。薺、鼠麴草、接骨木等の如し、

ゑぐの若菜をよめるは、萬葉に基けるなり。

荒小田の去年の古根のふるよもぎ、今を春べとひこばへにけり、

なつかしく手には折らねど、山かつの垣根のむばら花咲きにけり。

かく世人の詠に上らざるものを採り、更にみづから人の怪むところの熟語を作成せり。

鳴けや鳴け、蓬が杣のきり〴〵す、過ぎ行く秋はげにぞ悲しき。

藤原長能これを聞いて曰く、好忠は狂惑のやつなり、蓬が杣といふことやはあると。(紙袋草)

(三)見聞のまゝに種々の事物をよむのみならず、また萬葉等の古書をひねりて、

恣まにその語を襲用せり。その恰好なるはなほ佳なりといへども、古語の用例を誤解したるものの多き、狂惑の評また當らざるにあらず「底の蛙ぞ聲すだくなる」「もとあらの櫻」「もとあらに咲かむ」「げを寒み」「蟬の羽のうすら衣」などいへるが如き、これなり。

(四)いはゆる歌道の正調に反して、一に朽古の語を用ふると共に、一方には世俗通用の語を歌中に收めたり「夏引の白絲の手ぐり」「青げなるおくての稻をまもる間に」などの如き、また、

　夏はぎの麻のをがらとあだ人の心かろさといづれまされり。

　秋風のふくさ衣をとりみだり、さほすほどにぞ寒きめは見る。

といふが如き、一般の因循なる輩には、必ず醇正なりと許されざるものなるべし。

これらの用意を以て、好忠が詠じ出せる中には、頗る清新の氣を帶びて、朗々誦するに堪へたるもの少からず。

　蟲の音もまだうち解けぬ草むらに、秋をかねても結ぶ露かな

みしま江に角ぐみわたる蘆の根の、一よの程に春めきにけり。

　由良の門を渡る舟人檝を斷え、ゆくへも知らぬ戀の道かな。

しかれども古來の典型を脱して、自在に感興を詠ぜんとする極、辭句の美醜を問はず、思想の詩趣ありや否やを見ず、口より出づるもの皆歌なりとして、詠みちらし、吐きちらして、われ賢しと思へば、その作に、蕪雜粗笨、佶倔に失し、卑俗に流れ、また散文的評語に過ぎざるものの多きも、當然のことなり。

　つばなぬく淺茅が原も老いにけり、白木綿ひける野邊と見るまで。

　年ふれば老いぬる人のしろ髮を、夏も消えせぬ雪かとぞ見る。

　わが守るなかての稻ものぎは落ちて、むら／＼穗さき出でにけらしも。

美趣に富み、詩想の溢るゝこと、これを公任に許すべからざるが如く、好忠にもまた許すべからず。好忠力めて時弊を矯めんと欲す、その極端に趨るは、時流を警醒するが爲には、止むべからずとするも、標榜するところは、誠意なき極端なり、形式の上の極端なり。徐ろに思想を養ひて、和歌の内容に革新の基礎を置くを思はず、ことさらに辭句の新奇を衒ひ、幻妖怪醜を以て策の得たるものとな

す、その時人に顧みられざりしは、好忠がみづから招ける禍なり。さばれ從來遍く世人を掣肘せし因襲の桎梏を脱して、ありのまゝに見聞するところを歌ふに至りし苦心は察すべく、これこそこゝに特に好忠を傳する所以なれ。平安末期に至りて、源經信、俊頼父子等が新體の旗を翻へして、一世を風靡せるは、蓬が杣の曾丹實にこれが源をなせるなり。

拾遺以下の撰集に擧げたるもののほかに、好忠の歌を集めたるもの、曾禰好忠集一卷あり。蓋しこれを二部に別つべし。一は毎月集と題して、四季、十二箇月に別ち、毎季のはじめ一首の長歌を置き、毎月を更に三旬に別ちて、一旬おの〳〵十首、すべて三百六十首ありて、一日を一首に宛てたるものなり。一は百首和歌にして、四季、戀おの〳〵十首、次に淺香山、難波津の歌の文字を一字づゝ首尾におきたる歌三十一首、十、千、八方等の名を詠み入れたる歌、子の日に召なきに參りてさいなまれて後奉りたる歌等ありて、源順の唱和をも擧げたり。遙かに下りて、室町時代に徹書記深く好忠の歌を愛し、江戸時代に入りて、契沖阿闍梨またこの集を好み、校正して世に布く。されど版や滅びぬらん、殆ど行はれずなり

しを、その後、岸本由豆流、安田躬弦協力して標註本を刊す。別に村田了阿の類字抄、加納諸平の摘草あり。是非棺を蓋うて定まる、好忠後世に多くの知己を得たり、また以て瞑すべし。

第六章　寛弘前後の歌人——和泉式部等

寛弘前後における第一の歌人は、公任にあらず、好忠にあらず、却つて名譽の月桂冠は一巾幗の手に歸せざるを得ず、堂々たる鬚髯男子も和泉式部の前に如何の顏ばせかある。前に業平、後に西行、中頃の式部を併せて、これを平安朝歌道の三大才人とす。

和泉式部は越前守大江雅致の女、はじめ和泉守橘道貞の妻となりて、小式部を生み、のち道貞に別れて、冷泉第三の皇子彈正宮爲尊親王に愛せられ、親王薨じて幾ばくもなく、第四の皇子帥宮敦道親王その容色をめで、書を贈りて曰く、

あなこひし、今も見てしが、山かつの垣穗に咲ける大和撫子。

式部これに應じて、

戀しくは來ても見よかし、ちはやぶる神のいさむる道ならなくに。

といひて、またその寵を被れり。赤染衞門その節操に乏しきを諫むれども、聽かず。さて後のことなるべし、上東門院に仕へ、更に丹後守藤原保昌の妻となりて、丹後に下りぬ。式部容貌艶麗、性質また多情多感、一身を意馬心猿の奔るに任せて顧みず。道命阿闍梨と契り、また雅通の少將、源賴信と歌よみかはせるも、たゞなるなからひとは見えず。嘗て稻荷祠に參詣して雨に遭ひ、賤しき童に襖(アヲ)を借りしに、その童の「時雨する稻荷の山のもみぢ葉は、あをかりしより思ひそめてき」といへるを愛でて、おのが家に引き入れぬと傳へたり。(古今著聞集)

式部の著には和泉式部日記あり、長保五年四月頃、帥宮に思はれしより、翌年正月頃までのことを記せる短篇にして、著者みづからを第三人稱として記し、また和泉式部物語ともいふ文學上さまで價値あるものにあらず、式部に見るべきは、もとよりその和歌にあり。一生詠ずるところ甚だ多く、これを集めて歌集五卷、續集二卷あり。蓋し式部の和歌は清少納言の隨筆、紫式部の小說と相待ち

て藤家全盛の世を飾れる花なり。當時、因襲風をなし、世を擧げて氣力なく、精神なく、たゞ摸擬剽竊を事とする時、式部ひとり内に情火の燃ゆるあり、感興自然に溢れて、限なき詩趣を生ず。千篇一律、茫々たる歌壇の荒野に倦み疲れたるもの、飜へつて眼をこの集に注げば、清泉珠と迸り、黃鳥春を歌ふの概あり。ことさらに奇を衒ふにあらず、情を僞るにあらずして、抑へがたき胸中の炎の文字の間に閃くを見る。時人は式部が第一の詠を、

暗きより暗き道にぞ入りぬべき、遙かにてらせ、山の端の月。

この歌なりとせしが、こは經典の語を譯したるものに過ぎず。公任は、

難波津のこやとも人をいふべきに、隙こそなけれ葦の八重ぶき。

といふを推奬して措かざりしが、(袋草紙)これもたゞ措辭の末に巧を弄せしに止まる。式部の長所はこゝにあらずして、自然の情を自在に歌へるにあり。

人の身も戀にはかへつ、夏蟲のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ。

うきことも戀しきことも秋の夜の月には見ゆるこゝちこそすれ。

小式部うせて、院よりその年賜はるべき絹を、母の式部に賜はりければ、

もろともに苔の下には朽ちずして、埋もれぬ名を見るが悲しさ。

「やくとやくかな」「見せむ、聞かせむ」などの類の、却つて耳に疎ましきも少からずといへども、修辭上の技巧のよく思想の表現に資したるものまた多し。

かれを聞け、さ夜ふけゆけば、われならで妻よぶ千鳥さこそ鳴くなれ。

夏の夜は槇の戸たゝき、門たゝき、人だのめなる水雞なりけり。

自然の景物に對するも、外よりこれを觀るに止まらず、入つてその物と融合す、自然はわれなり、われは自然なり、山川草木が人格を得て活躍するもこれによれり。

春がすみ立つや遲きと、山川の岩間をくゞる音きこゆなり。

誰か來て見るべきものと、わが宿の蓬生あらし吹き拂ふらむ。

戀には脆き婦人の、年去り、人逝き、明鏡の上、白髮のこぼるゝを見ては、動き易き情の果していかならん。佛徒のいはゆる無常迅速の觀念は、式部の歌に多くて、さすがに樂しきこの世を背くは難かりき。

ありとても賴むべきかは、世の中を知らするものは朝顏の花。

露を見て草葉のうへとおもひしは、時待つほどの命なりけり。
限あれば厭ふまゝにも消えぬ身を、いざ大方に思ひ捨ててむ。
いかにせむ、いかにかすべき、世の中は背けば悲し、住めばすみうし。
當時、和歌の才を以て和泉式部と並べ稱せられしを赤染衛門とす。衛門は赤染時用の女にして、實は平兼盛の子なりといふ。長じて大江匡衡に嫁し、擧周、江侍從等を生む。また道長の妻倫子に仕へたり。家集二卷あり、また夫の任國に就けるに從ひし時、作りたりといふ尾張紀行今に存す。嘗て子擧周の病める時、その平癒を住吉明神に祈りて、

かはらむと祈る命は惜しからで、別ると思はむほどぞ悲しき。

紫式部日記に和泉、赤染の二女を對比して曰く、
和泉式部といふ人こそ、面白うかきかはしける。されど和泉はけしからぬ方こそあれ、うち解けて文走りがきたるに、その方の才ある人、はかない詞のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしき事、物覺え、歌の理り、まことの歌よみざまにこそ侍らざんめれ、口に任せたる事どもに、必ずをかしき一節の目に

とまる、よみ添へ侍り。それだに人のよみたらん歌難じことわり居たらんは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌のよまるゝなんめりとぞ、見えたる筋に侍るかし、恥かしげの歌よみやとは、覺え侍らず、丹波守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひ侍る。殊にやんごとなき程ならねど、まことに故々しく、歌よみとて萬の事につけてよみちらさねど、きこえたる限は、はかなき折節の事も、それこそ恥かしき口つきに侍れ。やゝもせば腰はなれぬばかり折れかゝりたる歌をよみいで、得もいはぬよしばみ言しても、われ賢こに思ひたる人、惛くもいとほしくも覺え侍るわざなり。（紫式部日記）

公任は式部を賛し、良暹は衛門に傾く。長明無名抄にこれらの論を引きて判定して曰く、

式部、赤染が勝劣は、大納言ひとり定められたるにあらず、世擧りて式部をすぐれたりと思へり。しかれども人のしわざは、主（ヌシ）のある世には、その人がらによりて劣りまさることあり。歌の方は式部さうなき上手なれど、身のふるまひ、もてなし、心もちなどの、赤染には及び難かりけるにや。

古人の見また式部が天稟の才を認めたり。衞門の歌はなほその夫の詩の如し、席に臨みて滯らず、辭を綴ること極めて達者にして、或はその妹の爲に、或はその子の爲にも、代作することあり、贈答唱和に急しくして、倦怠の色を見ず。されど式部の如く情熱の燃ゆるにあらず、措辭の巧なるにあらず、むしろ二人の間に詩才を比せらるゝは、衞門の僥倖といふべし。俗論滔々、歌品の眞贋を辨へず、時々の歌合などには、衞門の詠用ひられて、式部の顧みられざること多かりきといふ、歎ずべきかな。

寛弘の前後、男子にして和歌に名ありしものには、藤原實方、源道濟、藤原長能、能因法師等あり。藤原實方は從四位上左近衞中將たり。嘗て東山に花を賞し、詠じて曰く、

櫻がり雨は降りきぬ、同じくはぬるとも花の陰に宿らむ。

翌日、一條天皇の御前にて、藤原齊信しきりにこの歌を稱す、藤原行成傍にありて曰く、歌は面白し、振舞こそ烏滸がましけれと。實方これを恨み、殿上において行成を打つて、その冠を落す。天皇その不敬を怒りて、中將の職を停め、歌枕を捜

り來れとて、陸奧守となしたまふ。實方遂に任所に薨ず。思ふにその性我執傲慢、行成が評は、一首の歌よりも、むしろかれが平生をいひ盡せるもの、しかも櫻がりの詠はまたその得意の格なり。

船ながら今宵ばかりは旅寢せむ、しきつの波に夢は覺むとも。

されど和歌はさすがに巧なり、その詠を見るに、辭藻流麗にして、情緒纒綿たるもの、また少からず。

何せむに命をかけて誓ひけむ、いかばやと思ふ折もありけり。

契ありてまたはこの世に生るとも、面がはりして忘れもやせむ。

源道濟は文章生に身を起して、筑前守兼太宰少貳に至り、正五位下に敍せらる。詩文に通じ、また歌論を立つるところ、出處頗る公任に似たり。その詠暢達にして筆は意の如く奔り、毫も晦澀の痕を見ざるを以てまされりとす。

思ひ出でよ、途は遙かになりぬとも、心のうちは山もへだてじ。

秋きぬと今朝は氣色も見えねども、人の心のかはるなるべし。

古は身にしむ秋もなかりしを、老いては物ぞかなしかりける。

朝ぼらけ雪降る空を見わたせば、山の端ごとに月ぞのこれる。

ぬれ〱もなほ狩りゆかむ、はし鷹のうは毛の雪をうち拂ひつゝ。

藤原長能は右大將道綱の母の兄にして、從五位上伊賀守たり。嘗て三月盡の歌を詠じて

心うき年にもあるかな、二十日あまり九日といふに春の暮れぬる。

といへるを、公任聞きて、春は二十九日やはあると難ぜしかば、怏々として樂まず、これより病を得て歿しぬといふ。他の長所を見ずといへども、好んで體言どめの格を用ひ、以て平安末期の流行に魁せるが如し。

佐保姫の珠落ちにけり、唐錦おれる木の葉のうへの白露。

一重だにあかぬ心を、いとゞしくやへ重なれる山吹の花。

能因法師俗姓は橘永愷、文章生となり、肥後の進士たり、のち出家して能因といひ、攝津古曾部に住む、世に古曾部入道といふ。能因和歌の道を長能に問ふ、長能「山深み落ちて積れるもみぢ葉の、乾ける上に時雨ふるなり」といふ歌を示して曰く、體裁かくの如くなるべしと、能因すなはち悟入するを得たり、和歌の師資

相承こゝに始まりぬと傳ふ。能因偏癖、歌道に熱心なる極、性行の頗る常規に外れたるあり。藤原節信といふこれも好の者が、井手の蛙を得たりとて、その乾し固めたるを懐より出せば、能因は恭しく疊紙を開き、これこそ長柄橋の鉋屑よとて、相誇りぬ。またその秀歌として知られたる、

都をば霞とともに立ちしかど、秋風ぞ吹く白川の關。

の詠は都にありて詠み得たるものながら、たゞに出さんははえなしとて、久しく窓より顔をさし出し、日にやけ黒みて後、奥州の旅中の吟なりとて世に示せりといふ。されど識者は論じて、この逸話は信ずべからず、能因まことに奥州に遊びて、その折の紀行八十島記も傳はれば、白川の關の詠もその折に實景をよみたるものなるべしとす。大日本史等家集のほかに、古今の秀歌を集めたる玄々集、歌道を論じたる能因歌枕等の作あり。詠ずるところ、清新なる風趣を備へ、字句の色彩に富みて、優に一家を成せり。

心あらむ人に見せばや、津の國の難波あたりの春の景色を。

いかならむ、今宵の雨に、常夏の今朝だに露の重げなりつる。

嵐吹くみむろの山のもみぢ葉は、龍田の川の錦なりけり。

思ふに實方はその實却つてその名に合はず、道濟は小公任といふべく、しかもその詠公任に勝るものあり、長能の和歌は到底その妹の散文に比すべき價値を有せず、能因その門に出でて藍より青く、風格やゝ西行に似たるものありて存す。そのほか和歌に名あるものゝ藤原道信、同義孝、同道雅、同定頼、同義忠、同元眞、大中臣輔親等あり、僧侶には天王寺別當道命、祇園別當良暹等あり、女子には伊勢大輔、馬内侍等の名前述の二才女に次ぎ、なほこれらと並んで名媛佳人いづれも辭藻を練りて、文壇に角逐したりき。

第七章　枕草紙

散文界における平安朝の傑作、否、日本の絶品を、枕草紙、源氏物語とす、枕草紙の著者清少納言は、曾祖父を深養父といひて、古今集中の作者、父は元輔にして、後撰集の撰者の一人なり。少納言の傳記詳かならず。一條天皇の皇后定

子に仕へて、敏才達識の譽宮廷の間に高し。榮華物語には、三條天皇の女御淑景舍に事へたりとす、淑景舍は定子の妹なれば、長德二年、定子薨じて後、こゝに參りて陪侍せしなるべし。しかるに淑景舍も定子の薨去より六年を經てうせぬ、その後の少納言が出處は如何なりけん。若殿上人が淺ましく荒れたる宿を過ぎて、これこそ昔の淸少納言がなれの果よと、語り合へるに、おどろ〳〵しき老婆の顏さし出して、駿馬の骨を買はずやと叫びたり古事談卷二といふなど、傳ふるところは、いづれも老齡にして落魄せる由なり。年老い、世にも忘れられて、ひとり住みたるを、音なふ人のありければ、

とふ人にありとは得こそ言ひ出でね、われやはわれと驚かれつゝ。

零落して、都にも住みかねて、地方に住處を求めたりといふは、いまだ信を置くに足らず。無名草紙に「はか〳〵しきよすがなどもなかりけるにや、乳母子なりける者に具して、遙かなる田舍に罷りて住みけるに、襖などいふものの乾しに外に出づとて、昔の直衣姿こそ忘れねと、獨りごちけるを見侍りければ、怪しの衣着て、つゞりといふもの帽子にして侍りけるこそ、いと哀なれ」といへるは、必ず

憑據ありとも思はれず、たゞ傳說に基きて、假想に耽りたるものならざらんや。四國にさすらひぬとも傳へて、今、讃岐金刀比羅神社の境內に、その墓存すれども、果してその遺址なりや、これもまた信ずべからず。近世、伊勢貞丈の安齋雜考の中に、枕草紙抄と稱する短篇あり、女房名寄、行成卿窓中抄、女房作者部類、淑景舍日記、中關白記、季經抄等の書を引いて、淸少納言の實名を記し、酒亂を記し、その性行を知るに足るものありといへども、引用文の眞贋甚だ疑ふべく、こゝには取らず。

枕草紙は本朝書籍目錄に淸少納言枕草子二卷とあり、その册數は二卷、三卷、五卷、七卷など、本によつて定まらず。刊行の素本には、慶長活字本あり、慶安二年の刊本あり。安齋雜考には「惣じてこの草紙異本多し、季經の抄めされし本は章段も餘程多し、季經抄は十卷傳はれども、賴元の抄は十四卷といふ內、纔かに四卷殘り傳はれり、また閑院本とて抄もなき本一本傳はれり、また大炊殿本とて傳はれり」とあり。註釋本の刊行せしものには、北村季吟の春曙抄十二卷と加藤盤齋の抄（俗に萬歲抄と稱するもの）十五卷とありて、共に延寶二年に出でたり。盤

齋は季吟に等しく、松永貞德に學び、古書の註解を事とす、その抄は縱繆藩紙、大意にさへ通ぜざるところもあれど、本文は春曙抄に異なるところ少からず、彼此對比して發明すること多し。春曙抄は尾州より得たる一本といへるによれるものにて、季經の抄はいまだ見ずとあるが、釋義穩當にして、爾來この書を學ぶものの好指針たり。のち壺井義知の裝束抄一卷出で、春曙抄に附して世に行はる。近頃、詳解等の書發刊せられしが、大體はまた春曙抄に基けるものなり。

枕草紙といふ名は、本書の末に、「宮(定子)の御前に內の大臣(伊周)の奉りたまへりけるを、これに何を書かまし、上の御前には史記といふ文を書かせたまへるなど、宣はせしを、枕にこそはし侍らめと申ししかば、さば得よとて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと盡きせず多かる紙の數を書きつくさんとせしに、いと物覺えぬ事ぞ多かるや」とあるによれり。されどこれはた徒然草と同じく、後人のつけたる稱にて、もとは定まりたる名もなかりし故にや、禁祕御抄、八雲御抄、明月記等の古書には、たゞ淸少納言が記とあるのみ。安齋雜考によれば、「閑院本などにも題號なく、春は曙といふより何となう書き出したり。……淸原賴

元抄にまた、題號ありけるや明かならずと書きたり。大炊殿本と申すに始めて枕草子と題付したり、いかゞ信じがたきやうに侍り」とあり。活字本などにも、清少納言とのみ標題を附したり。

本書は隨時の感興と史的事實と錯雜混交して、一篇を成す。すなはち山川草木の名を擧げ、うれしき物、をかしき物など樣々に類聚して、折に觸れ、心に浮びたること、觀察し、感得したることを記せる間に、自己が遭遇したる事實を挾めること多し。その事實は、寛和二年、花山天皇の御落飾に次いで、大納言義懷の遁世せることとなどや始ならん。少納言がはじめて定子に仕へしは、正暦三四年頃の事なるべし、なほ淑景舍女御の東宮に參れること、積善寺供養のことなど、その程の記事少からず。それより進んで長德中の記事最も多きが如し。長德元年、道隆薨じてより、東三條の一流は頓挫して振はず、二年、伊周九州に謫せられ、定子勢を失ひ、怏々として薨ず。これらはいづれも少納言が枕草紙擱筆以前のことなり。春曙抄には「長德年中、長保元年、二年などの事どもにて、その後の事見えざるにや」といへど、篇中、俊賢中將、大藏卿正光などいへる、その官位より勘ふれば、

長保三四年のことも稀には存するが如し。されば枕草紙は時々に見聞き思ひ出づることを記せるものにて、一時に書きたるものにはあらざるべく、これを書き始めたるは、いづれの年にあるかを知らずといへども、著述の筆を擱けるは長保四年以後なること明かなり。

著者が遭遇せる事實といふも、過半は自己に關し、しかもいづれも自讃のことなり。頗はしけれど、次に書中に散見する自讃のことがらを集めて、これが綱目を掲ぐべし。

(一)皇后宮が大進生昌(ナリマサ)の家に行啓ありし時、門小さくして車を通ずべからず、何とてかく狹く作れるぞと責むるに、身の程に合せてしたるのみと答ふ。されど門の限を高く作れる人も聞ゆるはと、清少納言のいふに、生昌は、あな恐ろし、それは于定國がことなり、古き進士などにあらずば、知るべくもあらぬをと、驚嘆せり。(春曙抄本巻一)

(二)頭中將齊信が少納言の才を試みんとて、白氏文集なる蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中の上一句をかきて、末はいかに〳〵とあるを、「草の庵を誰か尋

ねむ」と答へたるに、殿上人等讃歎してやまず。これが上の句つけんと、もて騒ぎたれど、遂につけ煩ひて止みたり。（四卷）

(三)皇后宮の琵琶もたせたまへる御姿の、あてに美はしきを見て、傍の女房になかば隱したりけんも、え斯うはあらざりけんかし、それはたゞ人にこそありけめと、さゝやきたるを、その女房の直ちに啓すれば、宮は笑ひて、汝は少納言がこの言を解せりやと、仰せられたり。こは白居易が琵琶行の千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面といふを思ひよそへたるなり。（五卷）

(四)皇后宮の、人に思はるゝならば、第一に思はるべし、死ぬとも二三にてはあらじと、宣ふに、少納言が答へて、九品蓮臺の中には下品といふともと、いへることありき。（同上）

(五)殿上より、梅の花の散りたる枝をもたせて、これはいかにとあるに、早く落ちにけりと答へて、帝にたたへられぬ。紀長谷雄の大庾嶺之梅早落、誰問粉粧といへる句を取りたるなり。（六卷）

(六)頭辨行成に贈れる、

夜をこめて鳥のそらねははかるとも、世にあふ坂の關はゆるさじ。
の歌、いみじう譽められたり。（卷七）
(七)殿上人の、局に呉竹の枝をさし入れたるを、この君にこそといひ、行成等にその當意即妙を感ぜられたることもありき。（同上）
(八)三月晦日の夜、殿上人來り集まりて語り明ししが、漸う退出し、僅かに殘れる頭中將等も、明け果てぬ、歸りなんとて、ふと道眞の七夕の詠を思ひ出でて、露は別の涙なるべしと誦す。少納言急ぎたる七夕かなと揶揄して、有髯男子を瞠若たらしめたり。ついでまた中將宣方の手紙贈れるに、朱買臣が妻を教へけん年にはしもと答へて、かれをして答ふるところを知らざらしむ。いかでかゝることは知りしぞと、帝も怪みたまへりとなん。（卷八）
(九)帝の香爐峯の雪はと宣ひしに、直ちに立ちて簾を捲きしといふことは、普く世に喧傳す、くりかへしいふも愚かなるべし。（卷十一）
少納言が得意とするところかくの如く、主として博學宏才を衒へるにあるが、なほ學問以外のことにも自讃はあり。

(十)或は雪山を作りて、いつまでか殘るべきと、おの〱その時日を豫言せるに、遙かに衆に異なりし少納言の豫言が的中せしかば、帝も、まことに年頃は多くの人なめりと見つるを、これにぞ怪しと思ひしと、宣へりといひ、(卷四)

(十一)或は行成に贈りたる手紙に、歌もなきを、却りて賞賛せられたりといへり。(卷七)

そのほか定子の知遇に感じ、密かにこれを等輩に誇れる念ありしことは、篇中甚だ多し。もとより己が失敗を記せることなきにはあらで、定子が山吹の花瓣を包みて「いはで思ふぞ」と書かせたまへるに、その上句を忘れて、女の童に聞きたることもあり、また實方に答ふる歌を、辨のおもとして傳へしめたるに、おもとがこれを得いはずして止みにしを、なか〱恥かくすこゝちしてよかりきと、卑下したることもあれど、これとてあながち謙遜の念ある證とすべくもあらず、多くの記事は自讃に充ちて、清少納言が驕慢の性を表はせり。その自讃は概ね己が學識に關し、その艶容麗色に誇るが如きことは、殆ど見るべからず。思ふに清少納言は蛾眉朱唇、花の姿あるにあらず、もとより和泉式部が大幣の引

く手數多なる類にもあらず、御堂殿に音なはるゝ紫式部にも及ばず、鏡中の影に山鳥ならぬ木兎の、己が姿を喜ぶ能はざりしなるべし。その契りかはしし人、さきには修理介則光あれども、愚直にして文才なきを以て、これを斥けてわが耦とせず。藤原齊信、同行成は才貌拔群の殿上人、またたゞなる中にもあらねど、かれらが少納言を愛するは、その才識をめづるものにして、その容貌を愛するにあらず。少納言が齊信に並んでは、われながら疎ましきほど、齡過ぎ、姿揚らざる由は、己が筆にこれを言へり。されば女性に通有なる虚飾の念に、少納言が深くみづから誇とするところは、その才識にあり、詩文に明かに、名句を暗んじ、穎才表に顯はれ、傲慢人を凌ぐ性は、篇中至るところに見ゆ。さればこそ紫式部日記に評して、「清少納言こそしたり顔に、いみじう侍りける人、さばかりさかしだち、眞名書きちらして侍る程も、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり」といひ、また榮華物語にも「清少納言などいであひて、せう〳〵の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひ」といへるなれ。しかるを少納言が知らず顏に、「物語などするに、さし出でてわれひとりさいまぐるもの、すべてさし出は童

も大人もいとにくし」（卷二）といひたるは、盲人の人を嘲りて盲といふものにて、式部丞信經を評して「あまりなる御身ぼめかなと片腹痛く」（卷五）といへる、その御身ぼめこそ片腹痛けれ。

更に枕草紙を以て紫式部日記に比するに、日記には儕輩の婦人の風采性情など、微細に描寫したるに、草紙には皇后定子、淑景舍女御などの御有樣をこそ、めでたく又なきやうに譽め記したれ、陪侍の女房につきては、殆ど一言もこれに及ばず。僅かに宰相の君が、皇后に代りて返事したゝめたるを、「いとをかしく書きたまへり」と一言これを讃し、（卷十一）また中納言の君が「紅の張りたるを着て、首より髮をかいこし」たるを嘲笑せしことあるのみ。（卷九）これまた少納言が驕慢不遜、袖を列ねて共に宮中にある者の如き、敢て眼中に置かず、從うてその進退などは、以て己が筆を煩はすに足らずとせし故ならんか。しかれども男子に對する著者の擧動は、全くこれに反す。中關白が戲謔を記して委曲の狀を盡せるは、言ふに及ばず、齊信、行成の容儀を激賞して、これが描寫に力め、わけて一見して、細かに齊信が服裝を觀察し、定子等にその注意の深きを笑はれたることもあ

り。(卷四)そのほか權中納言義懷、大納言伊周のこと、または實方、宣方のことなど、いづれも見ること精しく、寫すこと詳かなり。思ふに男女の間はいたく懸隔して、競爭嫉妬の念なく、却つて異性間の微妙なる引力あれば、增上慢の才女も鬚髯ある人の爲には、その慢心を忘れて、手まどひせしなるべし。「はづかしきもの」とて、少納言が第一に「男の心のうち」(卷六)といひたるを思へ。

しかれどもその官位才色に對して賛稱の念なき時には、人を人ともせざること、男子を見るも、また女子におけるに異ならず。その兄と稱せらるゝ修理介則光を物ともせざるが如き、大進生昌、美濃守時柄を愚弄するが如き、才覺至らずと見る男をば、いかに侮蔑したるかを知るに足らん。少納言にして女らしき心あらば、魯直にして世に輕んぜらるゝものは、却つて憐みいたはるべきを、驕念强く、我意深き癖として、惻隱の念は殆ど求むべからず。元來、同情は滑稽、諷刺のほかは、詩文に闕くべからざる要素なるを、枕草紙の一篇、筆に任せ、才に誇り、包合せず、抑損せず、鋒鋩露出して、ひとりこの要素を缺如したることそ、家に雜作なきこゝちして、すさまじく、そゞろ寒げなれ。いたづらをし、そばゆる小兒をそし

らぬ顔に許しおく親を惡めるは、（卷八）親心知らぬわざながら、それはまだしも容すべし、ある男の家の燒けたるを笑へる、（卷十二）また長谷に詣でて、賤しき人のわが前に蹲まれるを、追ひ退けしめんと、惡みいへるが如き、（同上）清少納言はいかに女らしからざる女なりけるよ。

枕草紙は一時に書きたるものならじといへども、とにかくに長保三四年までの記事あり、既に道隆の薨去に遇ひ、伊周の流罪を見、定子の葬儀をも送りたるなり。されどこれらの不幸を傷める文は、篇中に求むべからず。中關白うせにし後のことは、「故殿おはしまさで、世の中に事いでき、物騷がしくなりて、宮また內にも入らせたまはず」（卷七）といひ、皇后かくれたまひし後のことは、「ましてこの後の御有樣見奉らせたまはましかば、理とおぼしめされなまし」（同上）と、密かに盛衰の變を歎じたるが如きあるのみ。東三條家が宮中に勢力を占めて、一門榮華の夢に醉ひ、みづから驥尾に附して誇りはびこりたることを、旨と寫して、その他に及ばず。主家は全く權を失ひ、從うておのれも落魄の運に向ひたるに、この折の樣を寫して、盛衰掌を反す有爲轉變の世を歎き悲むこととなし、今の零落を記

すは、愚痴の至、涙の種とて、强ひてこれを避けんとするか。さりとてさしあたりての非運には、おのづから會者定離の理、因果應報の敎も胸に浮びて、堪へがたき苦痛の湧き、これを忘れんとする慰安の辭もあるべきに、篇中、筆のこゝに及べるを見ず。蓋し佛敎も少納言が深く信ずるところにあらず、當世の流行に伴ひて、佛事物詣に力めしが、說經を聽きては、「說經師は顏よき、つとまもらへたるこそ、その說くことの尊とさも覺ゆれ、外目しつればふと忘るゝに、憎げなるは罪や得らんと覺ゆ。この詞はとゞむべし、少し年などのよろしき程こそ、かやうの罪は得がたのことは書き出でけめ、今は罪いと恐ろし」二卷といひつゝもその罪を犯し、長谷などに籠りては、「顏知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるはさなめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなどのわたりにさまよひて、佛の御方に目見やり奉らず、別當など呼びてうちさゝめき、物がたりして出でぬる、えせ者とは見えずかし」六卷と、男の方のみ見やりたるなど、遊參參詣、世帶佛法、まことの道心はなかりしなり。されば少納言の性、あくまで俗界に浮沈し、己をのみ立てて、他人のことには思ひやりなく、驕飾の念頽齢に至るまで拔

けず、主家の不幸、一身の零落は思ひやるだに苦痛を感じ、すへて今の有樣を見じ聞かじとて、翻へりて昔の歡樂の夢をせめてもの思ひ出とせしものにあらずや。かくの如く、過ぎ去りし榮華を戀ひて、現在に安んずる能はざる人の一生は、いかに悲慘なるものぞ。枕草紙以外の淸少納言こそ、一篇の悲劇を成せるもの、不幸にして婦人に生れて、才識高く、更に駿馬伏櫪の歎に堪へざりし衷情、果して如何。

さばれ淸少納言は平安朝第一流の大家たるに恥ぢず。その折にふれて書き捨てたる枕草紙は、紫式部が苦心慘憺たる源氏物語と對比すべく、長短相反したるところ、また頗る見るべし。少納言は趣味に富み、よく物の雅俗美醜を辨ず。その山川草木を品し、世の有象無象を評したる、所言肯綮に中り、案を拍つて歎稱せざるを得ざるものあり。一々例證するに堪へずといへども、そばの木を評して「はしたなきこゝちすれども、花の木ども散り果てて、おしなべたる綠になりたる中に、時もわかず濃きもみぢのつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし」(卷三)といひ、また交讓木(ユヅリハ)を敍して「いみじうふさやかにつやめ

きたるは、いと青う清げなるに、思ひかけず似るべくもあらず、莖の赤うきらきらしう見えたるこそ、いやしけれどもをかしけれ」同上といひたるなどは、明かに色彩の趣味を識れるものにして、齊信と己とが並びたるを記せる、巻四また男女同車の樣を寫せるが如きは、巻十一いづれも一卷の土佐繪に對するが如く、紅紫眼を射るを覺ゆ。されどこれらはなほ言ふに足らず、少納言の特色は、實にその觀察の精緻にして、しかも奇拔なるにあり、萬の蟲のうちに、蠅蟻などの細かなる擧動を寫したる、巻三また似げなきものを列ねて、「さやうに髭がちなる男の椎つみたる、齒もなき女の梅食ひて酸がりたる」同上といひ、むつかしげなるものに、「猫の耳のうち」巻八と數へたるなど、われ／＼が平常見聞に及び、言はんとして言ふ能はざりしものの、少納言の靈筆に上りて、胸中の祕鑰を開かれたるこゝちす。またさま／＼法師たるものの憂きこと、悲しきことを並べて、俄然一轉、輕く「これは昔のことなり今樣はやすげなり」巻一とどめたる、見るに異なることなきものの、文字に書きてこと／＼しきものを擧げて、「文章博士」といひたるなど、諷刺骨に徹るといふべし。その觀察の鋭利なるは、天稟の然らしむるところ、描

寫の細密なるは、また女子なればこそと思はる。しかれども機敏なる眼を以て森羅萬象を洞察せりとはいへ、少納言は更に詳かにこれが性情を考竅することなし。反省思惟はそのよくせざるところ、物の外面は寫すこと精緻なりといへども、內面の情に洞徹するに及ばずして、早くもその一生は過ぎぬ。この點においても、淸少納言は紫式部と選を異にし、江戶時代の作者に譬ふれば、これは井原西鶴に、かれは近松巢林子なるの感あり。

枕草紙に見るべきは、またその文章にあり。行筆縱橫自在にして、法格に拘泥せず、寸鐵人を殺し、迅雷耳に轟き、縷々として春蠶の絲を吐くかと見れば、忽ち一刀にして切り、坦々として平安の大道を行くもの、急に嵯峨たる峻坂に當る、神出鬼沒、端倪すべからず。紫文は淵々として春日とのどかに、淸文は雲霓の如く變化す、彼は正、此は奇、才情の筆に表はるゝところ、おのづから然らざるを得ず。これらは二人の作を併せ讀むもののよく知るところ、多言を要せざるべし。

枕草紙の憑據を論ずるもの、或は支那晩唐の李義山が雜纂に出でたりとす。石原正明これを辯じて曰く、「隨筆の中に、いにしへ今、から大和にわたりてめでた

きは、枕草紙。李義山が雜纂に基きたりといふ說あり。時代の程を思ふに、さることとならんも知りがたし、又偶合ならんもいかでか知らん。いとよう似たりといふ人もあれど、そは紫磨金身のたとへに、黃疸やみを引きいづるが如し。その色こそ似たらめ、尊さときたなさといよ〱こよなし」(年々隨筆卷一)と、この論當を得たり。枕草紙が後代に及ぼせる影響は、伊勢、源氏の如く著しからねど、また少からず。徒然草は蓋しこれより出てたるものなるべく、江戶時代のはじめの犬枕、尤の草紙、當世尤の草紙などは、全くこれに擬し、下りて花月草紙も範をこゝに取れり。風俗文選、鶉衣などの俳文百花賦、百蟲賦の如きも、また枕草紙に得るところありしなるべし。

淸少納言また和歌の作ありといへども、その才に乏しかりしは、その傲慢の資を以て、なほこの道には謙退なるによつても知るべし。かの「よにあふ坂の關は許さじ」の詠の如き、みづから得意の作とし、世人も秀歌と許せるものながら、孟嘗君の故事を引きたるほかに、何等の趣味をも感ぜず。學才を衒ひ、理屈がちなる人の名歌をよみ出づべくもあらず。少納言みづから知りて、その詠も多から

ず、その和歌については論ぜずして可なり。

第八章　源氏物語(一)——その梗概

平安朝第一の小説はと問はば、誰か直ちに源氏物語を以て答へざらん。源氏以前に源氏なきはもとより、源氏以後また源氏に比すべきものなし、源氏物語はたゞに平安朝第一なるのみならず、古今を通じてわが國第一の小說なり。今や余輩はこの傑作について說くの光榮に嚮へり。敢て不肖を顧みず、禿筆を振つて論評を試むべしといへども、これに先だち、例によりその梗概を記するを便とす。しかも浩瀚の篇、これが綱目もなほかつ紙數を襲ねざるべからざるを恐る。加ふるに古來この書の流行せるより、その大器を記述せるものも多く世に行はるれば、こゝには興味なき說話を順次に長々しく陳ねず、たゞわが見るところによつて、その組織の大系を說明するに止めんとす。

源氏物語五十四帖、甚だ浩瀚なりといへども、秩序整然、一絲亂れず、その間、抑揚

あり、昂低あり、好んで對照法を用ひ、人物境遇の相似てしかも相反せるものを並べ比したり。一部のうち前の四十四帖を正篇とし、後の十帖を續篇とすべし正篇は、桐壺の帝の皇子の一代の源氏となりし、光源氏といふ貴公子を主人公とし、これを中心として、貴賤さま〴〵の婦人を點出し、これが性情の相違を描く。中にも紫の上は才色雙絕の婦人として、源氏が一生の愛を注げるもの、著者は力をつくしてこれを寫せり。篇中の男子もまた一二に止まらずといへども、致仕の大臣(はじめ頭中將)を以て源氏に對せしむ。源氏は色めきてあだなる限の人と見えながら、本性は篤實にして、いつまでも昔を忘れず、大臣は表は謹嚴方正の人にして、實は好色のしかも移り易き性を有す、主客相對して常に競爭の念を斷たず。續篇はすなはち世に宇治十帖といふもの、篇中寫されたるところの洛南宇治の河畔なるを以て、この名あり。源氏の子と稱せらるゝ薰大將を主人公とし、同じ人の外孫匂兵部卿宮を客とし、二人おの〳〵源氏が性の一面を偏有す。大將は沈鬱にして、遙かに淨土を天の一方に憧憬し、宮は快活にして近く愛の神の跡を追ひ、しかも二人ともに豔冶にして恒心なき浮舟の君を爭

ふ。流れ藻の寄る邊を知らぬ君がとゆきかくゆく心中の苦悶いふべからず。

源氏物語の大意かくの如く、またこの書を前後の二篇に別ちて見るべきは、誰とて否まざることなるが、これを論評するものの、單にこれにて了るは、餘に簡なり。余をして言はしむれば、正篇は更に三紀に別ちて見るべし。前紀は桐壺より槿まで二十帖、源氏が三十二歳までのことを記し、その壯年、心いまだ定まらざりし時の種々の行爲が、將來の成果を呼ぶべき因緣となれる由を寫す。中紀は乙女より藤裏葉まで十三帖、三十三歳より三十九歳まで、源氏が榮華を極めたる時なり。後紀は若菜より竹河まで十一帖、三十九歳よりその薨後に及び、運傾きて壯年の行爲の應報こゝに熟し來る。この三紀の區別はまた帝王の治世の推移と相伴へり。更に一々に就いて述べしめよ。

前紀　源氏の主人公たるは、正篇を通じてのこと、今更めて言ふを須ひず、別に前紀の焦點となれるは藤壺女御なり。論者或はこの女御のことを、一篇の大事といふもあれど、むしろこの一紀の焦點となすを當れりとす。まづ首卷に早くもこれを點出して、かゞやく藤壺、ひかる源氏と對照してより、常住坐臥、源氏の

心中に往來して、さま〲に苦み歎きしも、ひとへにこの麗姫の上なり藤壺の由緣によりてこそ、女主人公たる紫の上をも引き出ししなれ。かくて女御が薨去の年にて前紀は終り、逝去はあくまで悲しけれど、苦悶の種はこゝに消えて直ちに中紀全盛の世は來りぬ。この前紀はその結構また三小期に別れたり。

第一期　桐壺より花宴まで、源氏が青年のいまだ物心思ひ知らず、痴蝶花に狂ひし樣を寫し、これと契りかはしし婦人も、多くは旣にこの間に現はれたり。御代は桐壺の帝の御治世、上に慈愛海よりも深き父帝を戴きて、前紀のうち源氏が得意の時なり。この中にて桐壺卷は特別のものとして見るべく、第一期の發端にして、またおのづから全篇の發端なり。まづ源氏の生立、その成人して正妻葵の上を得たるまでを記し、また早くも藤壺女御を點じ來りて爾後、種々の事端の開かるべき因緣を示す。箒木これについで、全篇の序論なり。五月雨徒然なる夜、頭中將等二三輩を出場せしめて、源氏の前に各自の婦人觀を說かしむるは、やがて著者その人の婦人觀にして、この後、本書に具體的に描寫すべき婦人の品性價値について、豫め抽象的の說をなして、通篇の

綱目を揭ぐ。引例の人物いづれも篇中の人物とは關係もなきものなるに、ひとり夕顔のみ後巻の伏線に備へて、單調の誹を避けたり。序論の雨夜の品定終りて、巻をも更へず空蟬のことを記す。かく巻々の事實を相離れしめず、一巻のうち一件終りて直ちに次巻に記すべき端を開き置けるは、それと言はずして前後の關係を明かならしむる著者が慣用の手段なり。

空蟬巻は箒木に繼ぎて、伊豫守の後妻すなはち空蟬を主として、軒端の荻をこれに對せしめ、夕顔巻はもと頭中將が通ひし三位中將の女夕顔の君のことを記す。光君の名に負ふ源氏のはじめての戀ならば、まづ若紫など引き來るべきに、かく沙汰過ぎたる婦人を描き出づるは、狡猾なる筆法にして、またはかなげなる姿して執るところは堅き空蟬と、身心ともにやさしくひたすら物おぢする夕顔と、對照せしむ。この位置高からざる空蟬をまづ取り出でて、その志操を寫せるは、たとひ著者みづからをさながらに畫けるものならずとも、おのれの境遇の殊にかくの如き婦人に同情を寄すべきものあるにあらずや。論者或は紫の上を以て、式部その人をわれと寫ししものとす。され

ど紫の上は著者が理想の人、空蟬は著者が現實の樣を寫したるなりとするは、揣摩に過ぎたりや。

若紫卷は、式部卿宮の女紫の上の幼時を寫し、源氏と相並んて、雛人形の如くあてにうるはし。紫の上は藤壺女御の姪にして、源氏が女御を慕ふあまりに、由緣の色の芽ばえを北山の庵室に索め出てたるなり。すべて源氏がおのが娘の如くにして養育したるもの三人、一は即ち紫の上にて、藤壺の關係より、一は秋好中宮にて、六條御息所の關係より、一は玉鬘內侍にて、夕顏の關係より、いづれも引き出し來りて、おの／＼描寫の方法の異なるを思ふべし。若紫と名實ともに相對したるは末摘花卷なり。源氏は若紫を得たるに逍遙の味を覺えて、更に常陸宮の姬君に遇へり。紫はいたいけに美はしき蕾の花、これはよき年頃の、しかも古代に、堅くろしく、すさまじく、わきて目に立つ鼻の、末摘花の色に通ひて紅きよ。この姬君と中紀の近江の君とは、滑稽を旨として記述の單調を避けんがため、時にこれを挾み、凝りたる肩を破顏一番に和げしむ

以上、箒木の中河の方違、夕顔の五條の假の宿、若紫の北山の山ずみ、末摘花のあばら屋など、いづれも鄙びてわびしき樣を寫したるに、紅葉賀、花宴に至りて、はじめて宮廷榮華の界に移り、四季折節の饗宴、月卿雲客の振舞、錦繡を羅織して、光彩眼を射る。これまで藤壺のことは記したれど、處々に少しく挾みたるまでなりしが、紅葉賀には專らこのことに筆を費やして、まゝならぬ世の樣、をさめかねたる胸のうちを描き、私通の罪の子なる冷泉院の誕生に及ぶ。この涙の雨しめりがちなる中に、九十九髮の老いしらけたる老典侍と源氏との情事を點出す。頭中將は競爭心はじめより存して、常に源氏の行動に注意し、密かにその跡をつくることも少からざりしが、幸に若紫は氣づかず、末摘花もその目に入らざりしに、老典侍に至りてこれを見顯はし、三人相絡みて、こゝに一齣の滑稽劇を演じたり。

紅葉賀の藤壺女御に對して、花宴の朧月夜内侍あり。內侍は二條右大臣の愛女にして、東宮に參るべしと定まりたるもの、測らずも月朧ろなる花の夜、あやしき契を源氏と結びぬ。紅葉賀は悽婉、花宴は妖麗、かれは昔の罪を悔いて

隔ての離なか／＼に堅く、これは落花流水の誘ふに任せて、新たなる過を襲ぬ。さてしも源氏がさま／＼なる戀の、おのづから互のねたみともなり人のうらみともなりて、早晩衝突を生ぜざるを得ず、桐壺の父の帝の崩御は榊卷に記したれど、その前の葵卷の初に「世かはりて後」とあれば、すなはちかの帝の御代は花宴を限なりしなり。かくて御兄朱雀院の御代となり、敵意ある右大臣父子が執政の世となりて、こゝに源氏が面白かりし若き世は夢と消えぬ。種々の破綻の生ずるは、すなはち第二期に屬し、花宴までを第一期とす。

第二期　葵卷に入りて、突然六條御息所と槿の姬君とを現出す。これに先だちて、御息所の履歷を書きたる一卷あらまほしく、その補足として本居宣長は手枕一卷を擬作したるばかりなれど、諄々として序を逐ひてしるすうちにまゝ大省筆あること、これ著者の筆法なることを思へば、これもまたさる類なるべし。さて葵、榊と續ける二卷は、ひとしく神事の採物の名を假りて、賀茂と伊勢とを對せしむ。葵は六條御息所と葵の上との車爭に起り、葵の上が出產の際、御息所の怨靈に惱まされて死することを寫す。上は行儀正しく、闕

けたることもなければど、愛敬薄く、女らしからず。御息所は情深く、山ばみて、一笑も人を惱殺すれど、嫉妬の邪念最も强し。淺ましくも罪得ることと、抑へても抑へがたく、わが魂の通ひて葵の上を恨むるは、夢と覺めても夢ならず、情と理と小さき胸に戰ふ樣の、いかに哀なるよ。夕顏の君を惱まし物の怪の何とも知られず、こゝに至りてそれと悟らるゝも、また巧慧なる筆法なり。一妻死して一妻來る、紫の上の新枕、これまた半開の海棠春雨に花重げたる風情して、及びがたき才筆にあらずや。

○榊は源氏が六條御息所を野の宮に尋ぬるに筆を起し、御息所は遂にその女の齋宮に具して、伊勢に下りぬ。桐壺の帝崩御ましまして藤壺は出家し、源氏と朧月夜內侍との中は內侍の父に見顯はさる。その罪免れがたくて、源氏の近流となり、こゝに著名なる須磨、明石の卷は來る。都會の歡樂に馴れたる身に、音づるゝものは浦の浪、松風の音ばかり、播磨の名所を舞臺として、單調なる正篇のうち、この二卷最も變化に富めり、藻鹽やく苫屋の間、また一美人を點出す、即ち明石の上とて、紫の上と並んで篇中重要の位置を占むるもの、誠

退にして、しかも標置するところ甚だ高し。配流の罪許されて、やがて源氏は都がへりの嬉しきにつけても、明石の上の別は悲しく、喜憂交〻至りて、あやにくの世なりけり。かくて近流の苦艱に過ぎにし罪過の業報は消え、世また改まりて、冷泉院の御治世となり、こゝに源氏の榮華は來らんとす。

第三期　澪標より權まで、旣に點出せし婦人の位置を定め、前の諸卷を結んで、以て中紀に入るべき準備をなす。澪標には源氏の住吉詣に明石の上の行きあひて、それとは知れども詞も交されぬはかなき別を寫し、明石卷を結ばんとしていまだ結ばず。蓬生は末摘花を結び、關屋は空蟬を結ぶ。これよりさき須磨の前に花散里卷あり、心なだらかにめやすき花散里の上を寫ししが、蓬生の稱はこれに對するなるべし。逢坂の關に空蟬の尼が源氏と邂逅せしは、住吉の別に似たれば、關屋の稱はまた澪標に對せしなり。蓋し花散里と關屋とはたゞ事實の聯絡を明かならしむると、對照の法を示すとの爲に、設けたるものなるべく、卷も短く、味もなし。繪合卷は、六條御息所の女秋好中宮を源氏が養女として後見することを記して、かの御息所を結び、併せて中宮と

弘徽殿女御との競爭が、青年時代における源氏、頭中將の競爭を更に深からしむる所以を述ぶ。すなはち中宮と女御との繪合に、源氏は中宮の方人となり、中將はその女の女御の方人となりて、若々しくもいどみ合ひ、こゝに流謫中の筆のすさみの繪卷を出して、須磨、明石の名殘を示す。松風は明石の上の來りて嵯峨に棲める次第を述ぶ。薄雲は藤壺の薨去を敍して、その名は藤壺の由縁により、また松風に對せしむ。明石の上の腹なる少女を紫の上請ひて子として養ひ、生母はわが子の行末を思ひて、離れがたなき愛情を割く、この間の消息寫し得てあはれなり。かくて藤壺は逝き、紫、明石は睦み、前紀將に終らんとしてなほ盡きず、更に槿の一卷を添ふ。槿の君は夕顏と名實ともに相對し、志操堅固にして、終に源氏の懸想に從はず。その性頗る衆と異なりといへども、この一卷は到底蛇足たるを免れず。

中紀　この一紀は、光源氏が顯達榮華の情態を筆を極めて寫せるものにして、狂蝶花を追ふ時代は既に過ぎぬ。されど源氏が六條院の春興秋色もこれを彩るべき人事なくんば、索莫の感なきを得ず。よりて源氏の子息夕霧大將と養女

玉鬘の君とを引き來り、殊に玉鬘を主位に置き、その情事を寫して、併せて源氏の尊貴を示す。經緯織り成して景情共に全く、蓬萊の仙宮彷彿として眼裏にあり。この間を中紀と定めて時期を劃せる所以は如何。初の乙女卷には六條院造營のこと果てて、源氏は太政大臣准三后となり、また朱雀院の行幸に人々昔の花の宴を偲ぶこととあり。終の藤裏葉卷には、源氏將に四十の賀を行はんとして用意とりどりなり。帝源氏を太上天皇に准じ、封戸を增し、年官年爵を賜ふ。その他の人々も立身差あり。また帝および院六條院に行幸あり。源氏が人臣の境を超えて顯榮を極むることを以て、一局を結べる著者の用意は、判然たり。すべてこの紀はめでたき限を盡せりと覺え、前紀、後紀には病死の悲を寫せること多けれども、こゝにはその事一もこれあらず。只この間に大宮のうせたることありといへども、それも省略して。當面の記事なし。憂き世の習、歡樂極まつて悲哀生ず、次の若菜卷の四十の賀は、すなはち非運の始にして、源氏を父と仰ぎたまひし冷泉院もまたこの卷に御讓位のことあり。さてこの中紀もまた三小期に別ち見るを便なりとす。

第一期　乙女卷は源氏の嫡男夕霧大將のことを主とす。夕霧は葵の上が腹の子にして、母の性をや襲ぎけん、實儀にして色めきたる振舞なく、學問に勵精し、また事務の才幹あり。幼より外祖母大宮の許にて養育せられて、從妹雲井雁の君と睦み、生長するに及びて、親睦の情はすなはち相愛の情となる。雲井雁の父は源氏と競爭の念絶えざりし內大臣(もとの頭中將)にして、おのが女なる弘徽殿女御の秋好中宮に勢劣りたるだに慊きに、雲井雁は源氏の子の妻にはせじと、母大宮の恨むるをさへ聽かずして、靑年少女の間を割きぬ。かくて夕霧が唯一の戀を向けたる人は、關守嚴しく、せめても面影の似通ひたる女に、積る思を慰めんとせしに、この女さへ典侍となりぬ。成るに任せし父が色ごのみの報はあるらん、夕霧は戀の道には失敗の人なりき。

玉鬘卷は源氏の養女玉鬘君を主とす。玉鬘は實は內大臣の女にして、夕顏の君の腹に生る。幼にして乳母の夫太宰少貳に伴はれ、肥前の僻地にて養育せられしが、成人するに及びて京に上り、大和の長谷に參籠して、もと生母に仕へし侍女に遇ひ、その緣によりて源氏に引き取られ、花散里の許に置かる。內

大臣がその實子を源氏の手に養はるゝことは、思ふに雲井雁を夕霧に與へざりし自然の應報ならざらんや。內大臣は源氏がよき女得たると聞きて、羨望に堪へず、鵜の眞似する烏の方々求め歩きて、近江の君といふ魯直なる一女を得たり。末摘花と源內侍とこの君とは本書の三滑稽にして、一はその容貌により、一はその行爲により、一はその品性によりて、讀者の笑を博す。

第二期　初音、胡蝶、螢、常夏、篝火、野分の六帖は、いづれも源氏が三十五歳の事にして、四季の景物によつてその名を命ず。旣に乙女に、源氏が六條院造り終へ、かたらひし婦人を集めて、その對の屋に住ましむることを記ししが、こゝに至りてこの院の四季折々の風物を寫す。前紀薄雲巻にも春秋優劣の論ありしを、今更に委しくとり〳〵にその長所ある由を示したるものにて、ひとり冬景の漏れたるは、槿巻にこれを寫したれば、重複を避けたるなり。さてこの六條院の景物を寫す間に、容顏花の如き佳人を挾みて、天地有情、畫龍眼を點ず。すなはち玉鬘にして、これを戀ふる公卿殿上人多きが中に、わけて情の切なるを螢兵部卿宮と髭黑の大將とす、朱雀院また參らしめよとの內旨あ

り。行幸、藤袴の二卷もまた玉鬘の懸想に關する續き物語なり。かくて佳人は終に誰が手に入るべきか、結果はいまだ知るべからず。

第三期 槇柱、梅枝、藤裏葉は玉鬘および源氏の子女につきて段落を附けて、中紀を結び、そのうち槇柱は專ら玉鬘のことを記す。聊か怪むべきは、この卷の初に、既に玉鬘が髭黑の大將の妻となり居ることとなり。藤袴に次ぎて大將が望を遂げたる次第を記すべきに、そのことのたえて見えざるは、或は一二卷の散佚したるにあらずやと疑はる。されどこの疑問は當らず、前紀には六條御息所が源氏に契れる由來を略し、またこのあたりにも大宮病歿のこと、玉鬘が尙侍となりたることなどを略したるより推せば、婚姻のなりゆきを示さずして、却つて讀者の想像に任せたるは、著者が狡猾なる大省筆にほかならず。

碧瑠璃の天また一點の雲、槇柱は離婚の悲を說きたり。髭黑の大將は、その諢名の示せるが如く、髭黑々と顏いかめしげなる人、若き心に玉鬘の不滿なるは知るべしといへども、儕輩の羨を一身に集めたる大將の恐悅は更に思ふ

べく、夜々新妻の許に通ひて怠らず。もとの北の方は嫉妬の念に前後を忘じて、火取を大將に投ぐることあり。終にその子を伴ひて父の家に歸る、久しかりし夫婦の契に、離別の哀はさすがに堪へ難かりけり。その後、大將は玉鬘を己の家に迎へて、子あまた生ませぬ。梅枝、藤裏葉には、內大臣が我執も漸く挫けて、雲井雁は夕霧の妻となり、紫の上が養へる姫君は東宮の女御となりぬ。これらのこといづれもめでたし〳〵。

後紀　盛者必衰、會者定離、榮華の君が代も傾きぬ。この紀は源氏の晩年および薨後を寫せるなり。而してまたこれを三小期に別ちて見るべし。若菜より夕霧までは女三宮と柏木右衞門督との情事を主とし、添ふるに一條宮と夕霧との情事を以てす。御法、幻は紫の上のことを主とし、匂兵部卿以下は源氏薨後のことなり。

第一期　若菜卷には源氏が四十の賀あり、明石の女御（すなはち明石の上の生みたる紫の上の養女）が男宮の出產あり、慶事相集ふが如くなれど、惡魔は既にその背を覗へり。朱雀院はその御子のうちわけて女三宮を鍾愛し、その

行末を思ふあまり、これを源氏に託して、その正妻とせしめたまふ。紫の上これより心穩かならず、詠じて曰く、

目に近くうつれば變る世の中を、行末遠くたのみけるかな。

折しも三十七歳の厄に、重患をさへ得て、二條院に籠りぬ。源氏が看護の功空しからず、この病は癒えたれど、さらに一方に禍は起りぬ。内大臣の子柏木右衞門督は女三宮の姉君一條宮を得たれども、その心は女三宮にあり。戀猫の戯より御簾のまくれしに、偲ぶ面影をほの見て、いやまさりに心はまさる。宮ははかなく稚な氣なる人の、あるまじき文を返しも得せず。結ばれたる不義の緣の絲は人しれずこそおもひしに、はからず源氏に絲口を取られぬ。源氏はむかし藤壺とのことを思ひて、應報の歷然たるに驚き恐れざるを得ず、更に朧月夜内侍が出家の次第を記して、因果の次第を明かにす。すべて若菜卷は記述甚だ長く、これを上下に別ちて、善惡必ず報ある佛法の理を細かに事實に示せるなり。

○柏木卷は、右衞門督が罪の報は更に覿面に、良心の苛責に堪へずして、幾ばく

もなく卒去する由を記し、横笛、鈴蟲二卷はその子のこと、女三宮が出家のことを述べて、右衞門督の記事を結ぶ。夕霧卷はその餘論ともいふべく、夕霧大將を主人公として、故右衞門督の妻一條宮をその賓とす。夕霧は宮を戀ふれども聽かれず、雲井雁は夫の餘念あるを憤りて、里に歸りぬ。離別のこと、槇柱と事情の類似せるは、稍〻厭ふべしといへども、一方に愛を得たると得ざるとの差別を設けて、事件の重複を避けたり。

第二期　御法卷には紫の上の病死を記し、幻卷には、その次の一年、四季の移り變るにつけて、源氏が亡妻を懷うて、輾轉反側堪へ難き情を寫す。中紀の初音以下の六帖が一年の歡樂を盡したるに對して、こゝに幻は一年の悲哀を敍したるなり。

幻に次げる雲隱の一卷、その名ありてその卷なしといふこと、頗る怪むべし。古來これを解するものは曰く、天台に立するところ、有、空、亦有亦空、非有非空の四門あり、有、空の二門は漢土に渡來したるが、他の二門は印度に留まりて傳はらず、名のみありて實なし、雲隱はこれに倣へるなりと。さはいへもとよ

りこの一卷なかりしにあらずして、はじめはその物存せしにあらずやとの疑も生ず。既に古人も「今の雲隱の卷も定まり留まれる所あらむかし、幻もあらましかば、などか尋ね得ざらん、もとよりなしといへることとおぼつかなし」（紫明抄）と論じたるを思ふべし。されどこの疑は是認すべからず。天台の理に寄せたりといふは、もとより取るに足らずといへども、はじめよりこの卷の存せざりしことは定かなり。試に思へ、人間死別の悲は既に幾度も寫せるが上に、幻において、著者は一字一涙その筆力を盡したれば、今また源氏の薨去を敍するは、徒らに重複の嫌を殘すに過ぎず。むしろ例の折々の省筆法を借り、最も重要なるところを一掃して無に歸し去るの、餘韻嫋々たるに如かざるなり、もし闕卷あらば、記事にも缺陷あるを免れざるべきに、毫もさるところなく、幻の末に「今年をばかくて戀ひ過しつれば、今はと世を去りたまふべき程近くおぼし設くるに、哀なることつきせず」といひ、また歌に「物思ふと過ぐる月日もしらぬ間に、年もわが世も今日やつきぬる」といひ、次期の匂兵部卿の初には、「光かくれたまひにし後」といひて、源氏の薨去を明かにし、なほ六條

院の人々の散亂せること、夕霧が處分の宜しきに合へることなどを敍し、一條宮のことをも結びたれば、少しも事實の缺陷を見ず、從うて闕卷のあるべき理なし。この間になほ記したることあらば、そは却つて贅疣たるを免れざるなり。されば雲隱の卷のもとよりその物なかりしことは定かなるが、余はなほこの上に、その名もはじめは存したるものなるかを疑はんとす。著者もしその卷を設けざりしならば、何によりてか名ありて實なき雲隱を立てたることを知るや。自序あるにあらず、附言あるにあらず、いづくよりこの稱を得たりや。安居院法印聖覺の源氏供養諷諭文に、順を追うて卷々の名を文中に込めたれど、雲隱といふを見ず、たゞ遙かに後なる拾芥抄などによりて、この名を知るのみ。思ふに後人がこゝに源氏薨去の事實を闕きたることの大缺陷たるを思ひ、假に卷の名を設けて、種々の說を立てたるにあらずや。

第三期　源氏薨じて後、この小說に重要なる地位を占むるは、女三宮が罪の子なる薰大將と、明石の女御が腹なる匂兵部卿となり。二人のをさな立のことは、前に少しく橫笛卷に記したるが、こゝに匂兵部卿卷に至りて、その生立

を詳述し、當時の宮ばら若殿上人のうち、二人が才色兼備の譽ある人にして、しかも互に競爭せることを寫す。紅梅卷は致仕の大臣（さきの內大臣）の次男紅梅右大臣を主として、その父大臣の局を結び、匂宮を客とす。竹河卷は玉鬘の局を結びて、薰を客とす。すなはち紅梅にては、右大臣の三女のうち、父は故北の方の腹の妹君を匂宮は妻はせんとすれど、宮はひきかへて、今の北の方の許に養はるゝ故兵部卿宮の姬君に心あり。竹河にては、玉鬘は夫既に死して、心雄々しくみづから子女を養育す。薰と夕霧の子藏人少將と共に、その姉娘に心ありしが、母は引き違へて院に奉り、その妹を帝に奉る。されどこの姬君も兄弟の男子も出世はかばかしからず、玉鬘は世事の不如意なるを歎きぬ。かくて幾筋にも岐れたる說話の絲口は漸く結ばれたれど、別途の說話は更に開かれんとす。

宇治十帖　橋姬卷以下の十帖は、源氏物語のうちの續篇ともいふべし。薰大將を主とし、匂宮を客として、相競ふこと、源氏の致仕の大臣におけるが如くならしむ。而して二人が浮舟の君を爭ふことを以て、一篇の主旨とす。そのうち橋姬

より寄生までの前五帖は、專ら薫のことを寫し、東屋より夢浮橋までの後五帖は、むしろ浮舟の君を主としたり。されば此の十帖も假に前後の二期に別ち見るを便なりとす。

前期　桐壺の帝の八宮は宇治に侘しく住みなして、世に數まへられたまはぬ人なりき。佛敎に心を潛めて、出家もせばやと願ひたまひしかど、姉妹の姫君をもちたるが爲に、それも得ならず。薫も俗塵を厭ふ人、はからずこの宮を尋ね、一朝にして十年の親の如し。宮のち病あり、遺兒を薫に託して薨ず。薫は深くも姉の大君を慕へども、大君はうせにし父宮をのみ偲び、世をはかなきものに思ひなして、これを聽かず、却つて中君を薫に妻はす。されど薫は中君を匂宮に進めて、おのれは大君を挑む。大君なほ聽かず、幾ばくもなくして父の跡を追うて白玉樓中の人となり、中君さへ既に迎へられて匂宮の許にあり。薫悔しきこと限なく、中君のおのづからわがものなりしをと歎かれて、時には心中を中君にほのめかすことあり。中君は夫ある身のせん術もなく、別に異腹の妹あることを薫に告ぐ。かくして二人の姫君については一旦局を

結び、別に一人の庶妹について端を發けり。（この間の巻の名、橋姫、椎本、總角、早蕨、寄生）

後期　中君の異腹の妹とは、今常陸守の妻なる婦人の腹に生れたるものにして、浮舟の君これなり。薫これを得て、その面影の大君に似たるを喜び、かの紀念として宇治に住ましむ。匂宮これを覗ひ知り、密かに往きてあだなる契を結びぬ。檝失ひし浮舟の、娘氣のはかなく、心も色めきて、志篤き薫の行末は賴もしけれど、匂こぼるゝ宮の情も嬉しく、寄る邊いづこと小さき胸に思ひ餘りて、溢るゝ苦悶を身と共に宇治の流に投げぬ。投身の事は、浮舟、蜻蛉二巻の間にあるべきを、省きたるは、悲慘の事實を直寫することを避けて、讀者の想像に任ずる、著者が例の筆法なり。天の命じたる運は人の力に左右すべからず、捨てたる命は更に救はれ、浮舟は小野に籠りて出家す。薫これを傳へ聞きて、音信を通ずれども返事なし。かくて談話はいまだ終らず、終らざるが如くしてしかも終りぬ。（この間の巻の名、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋）

意志薄弱なる浮舟の、果して道心堅固の半生を送り得べきか、一筋に宇治の

ゆかりに思ひ染みたる薫が、失戀を諦めて、いよ〱佛道に進むべきか、見し花を折らでは止まぬ匂が、更に如何の事を爲さんとするか。人々の運命はいまだ定まらず、かくして源氏物語は完結せるものとすべきか。余或は謂へらく、源氏薨じて說話は大段落を告げたるにも拘はらず、著者はなほ倦ますして續篇を綴れり、この勇猛心を以て、如何ぞ更に段落なきところに筆を止むべきや。こはなほその後を書き續くべき意ありしならんが、事故ありて果さず、または病歿して成らざりしものならんと。翻へりて思ふに、必ずしも然らず。夢浮橋の名は旣に轉蓬萍流の世態を示せり、運のさだめなきぞ世のさだめ、悲しきことも悲しきことのみにあらず、めでたきこともめでたきに終らず、宇津保、落窪の如き結末は、人生を寫さんとする著者の眼には餘に稚し。さらばなほ委曲に波瀾蕩搖の樣を寫し往かんには、更に同じことを繰り返さざるべからず。かくしてさだめなきにさだめ、將來の運命如何を想うて讀者をして伎癢の感に堪へざらしむるところ、即ち紫式部が苦心慘澹の跡を見るべきにあらずや。しばらく現存の卷數に依りて、私見を述ぶるのみ。

以上試みに時期を別ちて、源氏物語の組織の大要を示せり。而してその間、時に缺陥あるが如くにして、これまた著者が省筆に過ぎざることを示せり。しかれども古來說を立てて、源氏物語の零本なる由を論ずるものあり。そは法印聖覺が表白の前文および今鏡に六十卷といひ、拾芥抄などに浦傳、櫻人、狹蓆等の卷名を記したるなどによりたるなり。されど六十といへるは、天台六十卷に比して、大數を擧げたるものに過ぎず、浦傳等の名も、特別の卷の名か、他の卷の異名かも明かならず、所說漠然たる後世の書は、信を置くに足らず。むしろ直ちに源氏の後に出でたる更科日記に五十よ卷といひ、藤原定家が明かに五十四帖（明月記元仁二年二月の條）といひたるなどによりて、今日の五十四卷の初よりかくありしものなることを信ぜんと欲す。

第九章　源氏物語（二）――註釋批評の書

源氏物語一度世に出でてより、海內の文藝その影響を受けざるはなし。古今を

通じてまた見るべからざる作品として、註釋批評の書は汗牛充棟もたゞならず作者の傳記、寓意の深淺、文章の巧拙等、研究を積み、議論を重ねたり。さればここにこの物語を論ずるに當りても、前哲の所説に待つところ、もとより多ければ、まづその註釋批評の書の由來を敍し、これらの價値を定め置かざるべからず。

源氏の作いできて、直ちに宮廷の間にもてはやされしは、紫式部日記に記せるを見ても知るべく、幾ばくもなく普く世間に喧傳して、他の小説は日前の星の如く光を收めしは、更科日記、狹衣、榮華物語、千載集等にいふところによりて推すべし。この流行の勢は註釋の撰述を促がすに至りて、源氏物語奥入の出づるあり。奥入は世尊寺伊行の手に成れりと傳ふ、伊行は藤原行成六世の孫、近衞天皇の朝の人、書をよくし、夜鶴庭訓抄を著はして子孫に示す。また文學に志あり、夢浮橋の後を受けたる山路露一卷の傳はれるも、この卿の作ならんといふ。藤原定家が次いで奥入を增補したるもの、短篇ながら今傳はれり。

源氏の廣く行はるゝにつけ、傳寫の折の衍文脱字など漸く多く、疑似百出す。は

じめこの書の成るや、藤原道長行成をしてこれを淨寫せしめたりと稱すれども、事實の如何を知らねば、ましてその書の傳はれるを見ず。かくて魯魚の誤增加するに至りて、學者は諸本を校訂して、定本を示す。この定本はおのづから二流に別れたり、青表紙と河內本とこれなり。青表紙は藤原定家の校訂に成る。定家歌道の家に生れて、文學の研鑽に心を潛め、古代の歌書物語を蒐めて、これを筆寫訂正し、範を後世に垂る、青表紙もその一なり。河內本は河內守源光行が家傳の書をもととし、二條伊房本、冷泉朝隆本、堀川俊房本(黃表紙)、從一位麗子本、法性寺關白本(唐紙小草紙また尙侍殿本)、俊成本、定家本(青表紙)を參考して定めたるものなり。光行は和歌をよくして、千載集中の作者たり、また海道諸國記の作あり。承久の亂、官軍にあり、捕へられて殺されんとす、その子親行和歌を捧げて父の助命を請ふ、幕府その情を憐み、光行を赦せりといふ。

青表紙、河內本のうち、はじめは河內本專ら行はる。水原抄はすなはち河內本の撰定者光行の撰にかゝり、後世續出せる諸註釋の水原たり。紫明抄は光行の子紫雲寺素寂の手に成り、父の撰と併せ稱せらる。原中最祕抄、弘安源氏論義は共

に一二卷の小篇なるが、前の二書に次いで、また鎌倉時代のもの、仙源抄は長慶天皇の御撰にして、簡單なる源氏の辭書とす。河海抄は仙源と和並んで出でたるものなるべく、大部にして委曲をつくせる註解のはじめと稱せらる。この書は南北朝の頃、四辻左大臣善成が物語博士源惟良の戯を假りて撰したるなり。應仁の頃、一條禪閤兼良博洽の才を以て、述作頗る多く、源氏に關しても花鳥餘情、源氏和字鈔、源語秘訣等の撰あり、中にも花鳥餘情は大部の書にして、河海抄と併せて、學者の最も尊重するものなり。

以上の諸註は概ね河內本をもととしたるものにして、別に入道明魏(藤原長親)の耕雲本ありしかど、弘く行はれざりき。しかるに戰國の世、三條西實隆(逍遙院)の出づるや、歌道を宗祇に學んで、二條家再興と稱し、和歌小說の類すべて定家を宗として、その遺敎を仰ぐ。これより河內本廢れて、學者專ら青表紙によるに至れり。かくして現はれたる註釋多かりしが中に、著名なるものを擧ぐれば、弄花抄は牡丹花肖柏が宗祇、實隆の講說を聽いて輯めたるもの、林逸抄は奈良の饅頭屋宗二が肖柏に學びて抄したるもの、細流抄は實隆の子稱名院公條が弄

花をもととし、河海、花鳥を參照して撰したるもの、明星抄は公條の子三光院實澄が少しく細流を補訂して、發端一卷を加へたるもの、孟津抄は九條禪閤植通(東光院)が三條西家の說を傳へ、諸書を參考して綴りたるもの、天正三年の跋あり。紹巴抄は里村紹巴が公條の講釋を筆記せるものといへど、極めて哢花に近く、天正八年に成れり。戰亂相つぐ時、なほこの書の硏究の絕えざりしこと、註解の續出するを見ても、推するにあまりあり。

さばれ室町末期は文學頽廢の時なりしことは疑ふべからず。時しも大廈の倒るゝを一木に支へ、二條家の說を江戶時代に傳へたるは、細川幽齋その人なり。江戶時代に至りて久しからず、大部の註釋の世に出でたるもの三、いづれも幽齋の學系に屬するものにして岷江入楚、源義辨引抄、湖月抄これなり。岷江入楚は中院通勝が丹後に客寓せし時、幽齋の講筵に侍し、京に歸りて更に實澄に學び、博引旁證最も力めて、慶長三年撰を終ふ。裒然たる大帙、微に入り奧を闡きて、前後この書の浩瀚なるに比すべきものなし。辨引抄は京七條金光寺の住僧一華堂切臨の撰なり、切臨は松永貞德に學んで、幽齋の說を傳へ、また一華堂乘阿

に就いて、實澄の學を得たりといひ、その撰また引證頗る委しく、殊に連歌師の手に成れる抄書を見ること多し。湖月抄は北村季吟の撰にして、延寶元年刊行せらる。季吟學を箕形如庵に受け、また貞德を師とす、如庵は實澄に學びて細流をもととし、貞德は植通に學びて孟津をもととす、故に湖月また細流、孟津に依るといふ。（湖月抄凡例）されど季吟はことに明星抄を粉本として用ひたるが如し。この三書のうち、博く捜り精しく說きたること、湖月抄は到底他の二書に及ばず、河海、花鳥を引けりといへども、直ちに原書に得たるにあらず、紹巴抄、岷江入楚等、引用書のうちに漏れたるものも多し。しかるに幸にもこの書が源氏の定本として、普く世に行はれ、今日に至りても流行なほ止まざるは、恰もその刊行の文藝興隆の運に向へると、撰者の穩健なる學識を以て、取捨宜しきに稱へると、また一は盡く本文をも擧げて、初學者に便宜を與へたるとによれり。かくて古來滔々たる舊註釋の最後に出でて、天下に弘布し、舊說を代表せるものは、實に湖月抄なり。

そもく平安末期より、佛教は更にその勢を新たにして、深く人心に感染し、鎌

倉、室町の世は黯澹たる現實に苦みて、當來の光明にあこがれ、幻妖不思議の空想の雲は社會を覆ふ。文藝における佛敎の感化、この時より甚しきはなく、業平、小町も佛菩薩の權化にして、濁世濟度の爲に假に生れ出でしものとし、和歌の根本の理想も三世因果の理を示すにありとす。かゝる時、源氏を解するものが、その河內本を奉ずるものと青表紙を貴ぶものとを問はず、いづれも佛敎的觀念を以てこれを見るは、勢のまさに然るべきところなり。著者が想像に任せて人生の禍福を寫し、讀者をして喜憂交〻至らしむるは、狂言綺語の罪を免れず、傷ましいかな、紫式部はこれが爲に、死して後、地獄に墜ちたりと傳へ、これを救はんとて、佛事供養をなすものあり。妄語は佛家の嚴に戒むるところ、しかも源氏は世人の愛讀するもの、この撞着を融和せんが爲に說を立てて、五十四帖も實は浮屠者のいはゆる善巧方便、理を說くのみにては、耳を傾くるもの少き故、表に種々の情話を構へて、裏は玄妙の法理を敎へたるものなりといふ。かくして學問不振、師資相承して渝ることなきを譽とする時、辭句の解釋といひ、思想の批評といひ、毫も改新の見るべきなく、因循姑息、以て江戸時代に及べり。

元祿前後は、思想の最も自在なりし時代なり。偃武以來、泰平の時運に乘じて、文藝勃然として起り、陳套の陋習を擲ちて、新たに古典の研究に從事す。湖月抄はすなはち保守的舊說の殿將、これを睥睨し、自由討究をその標幟として出でたるもの、契沖阿闍梨の源註拾遺あり、安藤爲章の紫家七論あり、熊澤蕃山の源氏外傳あり。契沖は何よりも第一に語學の上に偉功ありし人なれば、言語の解釋にては、古より考竅を重ねて、ほゞ殘すところなき源氏物語に對して、破天荒の新說なきも、已むを得ざるところなりといへども、なほ古人の論を挺破するもの少からざるは、さすがに國文學中興の宗なるかな。されど源氏評論の上に一大時期を劃するは、實に紫家七論にありとす。

紫家七論と源氏外傳とは儒家の見を以て源氏を論じたるものなり。そも〳〵慶長以前にありて、深く人心を支配せしは佛敎にして、儒敎も並び行はれたりといへども、佛敎に壓せられて、いまだ文藝の上に勢を逞しくすること能はざりき。しかるに江戸時代に至りては、主客全く顚倒し、佛敎は沈滯振はず、儒敎は新進氣銳、思想界を蹂躙す。その立つるところ、武士道と相率ゐて、戀愛を卑み、節

義を重んじ、平安朝の風俗の如きは、浮靡輕薄なりとして取らず、從うて源氏の如きは誨婬の書として、排斥せざるを得ざりしなり。後光明天皇が花鳥風月の媒として和歌を擯けたまひしが如き、荷田春滿が一生戀の歌を讀まざりしが如きいづれもまた如上の見より出づ。かゝる時運に會ひ、儒學と國學と併せ修め、儒敎的觀念を以て、儒者が排斥せし源氏を辯護したるは、實に契沖に學びし安藤爲章にして、かれはこれが爲に紫家七論を作り、紫式部を以て才德兼備の淑女と稱す。今日より見れば、源氏を評隲するに當りて、作者の德操如何は深く問ふに及ばざるが如しといへども、當時にありては、これを論じて源氏を稱揚する必要ありしなり。七論の書、眇たる小册子に過ぎずといへども、精到の論、明快の斷、源氏著述の年代、順序等を說いて誤らず、從來の古傳を蹈襲臚列するのみなりし謬說は、その根柢よりして崩されぬ。七論は源氏物語の科學的研究の嚆矢にして、後世いまだその說を飜へすものなし。たゞその書の勸懲に資するものなりといふに至りては、宛然たる儒家の口吻、その弊竇に陷れることと、なほ從來の書が佛說の餘臭あるに同じ、源氏外傳の如きは、純然たる儒者の說のみ、

客觀的批評といふべきものにあらず。かくの如く儒者の見を以て論を立てたるもの、やゝ後れて五井純禎の源語詁あり、純禎また勢語通を著はして、伊勢物語を註したりき。

賀茂眞淵は國學界の泰斗、その歌文の才は殆ど匹偶を知らず、奈良朝文學を研鑽し、卓拔の論を以て海內を風靡したりといへども、平安朝文學については甚だ委しからず。源氏物語新釋は、その惣考の如き、取るべきことなしとせずといへども、なほ七論の燒き直しに過ぎざるは、縣居の翁の爲に取らざるところ、精緻なる科學的研究においてかれはその高足本居宣長に三舍を避けざるを得ず。宣長が源氏に關しての著述には玉の小櫛あり。著述の年代を論ずるが如き、七論の外に出でずといへども、廣く異本を校合して、誤謬を校訂したることはまた古事記、萬葉、伊勢等におけるが如し。この一事を以ても、かれが學者的態度を察すべく、常に周匝なる用意を以てすれば、辭句の註釋の如き、最も穩健なり、一篇の本旨に關しては、佛敎を以て解すると、儒敎を以て論ずると、二者ともに斥けて、源氏はかくの如き寓意あるにあらず、たゞ物の哀を寫せるものと稱す

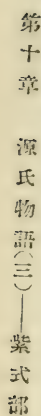
これぞこの書の特長といふべき點にして、儒佛ともに排する國學者の見よりすれば、勢しからざるべからず、さはいへ滔々たる世人が逡巡爲すなき時、博引旁證ひとり前哲に對して反抗の聲を揚げたるは、篤學博洽の士が胸中確乎たる信念の存したればなり。而してその說の、今日に至りても動かすべからず、西洋の科學的批評とおのづから一致するは、また以てかれが歸納的に得たる結論の謬らざるを證すべし。

湖月抄の後、辭章の註釋に至りては、いまだ完備したるものあらず、こゝに至りて安政の頃、萩原廣道の源氏物語評釋あり。漢文學の修辭法を應用して、この書を解釋批評したるものにして、源氏の註釋の最も具備せるものなりといへども、僅かに花散里に至りて中絕したるは惜むべし。かくして源氏に關する著述その數甚だ多きが中に、その四大書と稱すべきは、湖月抄、紫家七論、玉の小櫛、源氏物語評釋これなり。舊說の註、浩瀚なるものもとより多しといへども、湖月が初學者に便にして、最も廣く行はれたるを以て、しばらくこれを數ふ。評釋また應用の才、細緻の說の見るべきを取る。片々たる小冊、世人の注意を引くこと多

からずといへども、卓越の見を以て、從來の僻說を打破して、文學の硏究に一時期を劃せるは、實に七論と小櫛とにあり。

名山奇勝を思へども、跋涉遊歷することも能はざるものは、庭園に自然の景を摸して、みづから慰む。源氏の流行は種々の註解の出づるを促がして、これが學習に便ならしめたりといへども、長篇大帙いまだ通讀に便ならず、こゝにおいて童蒙のために綱要を記したるもの出づ。源氏小鏡は、南北朝の頃、入道明魏の撰なりといひ、ついで永享四年、上總介源範政の著はせる源氏物語提要あり。江戶時代の初期は、社會一般に知識を渴望して、讀書の力足らず、從うて訓蒙諺解の類多く出でたる時にして、野々口立圃の稚源氏、十帖源氏、一華堂切臨の源氏綱目等あり。これらの書少からずといへども、北村季吟の子湖春が著はせるしのぶ草、あるが中にもすぐれたり。その後、眞淵が國學を以て海內を風靡せしより、擬古文を作るもの甚だ多く、源氏の佳句名文を集めたる紫文製錦、手簡をよせたる紫文消息など、拔萃の書の出でたるも、みな小作家の需要に充てんが爲なり。時勢の趨向は、源氏一篇に關する編述によりても、ほゞ覗ふことを得べし。

第十章　源氏物語（三）――紫式部

源氏物語が道長時代の才女紫式部の手によりて成りたることは疑ふべき餘地なし、この著者たる紫式部はいかなる人ぞ。古書の示すところ、その家系は凡そ次の如くなるべし。

紫式部の父を藤原爲時といふ。堤中納言の孫にして、文章生に擧げられ、詞藻に富む。一條天皇の朝、仕進を希へども意の如くならず、沈滯を歎いて、申文を奉る句あり、曰く、苦學寒夜、紅涙霑襟、除目後朝、蒼天在眼と。道長これを憐み、强ひて奏して越前守に任じたりといふ。今昔物語、古事談等長和五年、園城寺に入りて出家したりき。式部の兄惟規また詩趣豐かに、和歌をよくす。嘗て大齋院の女房に通ひけるに、齋院の侍門を閉ぢて、出づることを得しめず、女房やうやく申し請ひて、惟規を歸しぬ、惟規歸るさに、

神垣は木の丸殿にあらねども、名のりをせねば人咎めけり。

また父が受領の職に任ぜらるゝや、惟規折しも當職の藏人にて、伴ひ下ることを得ず、後に至りて下りしが、途中に病を得、父の任國には着きたれど、今を限の容躰なり。法師ばら枕邊に集ひて、經文の功德樣々に說き、中有の心細さなど聞かせたるに、惟規息の下より、そこにも嵐にたぐふ紅葉、風に隨ふ尾花などのもとに、松蟲の音など聞ゆるにや、それにぞ恐ろしき心も慰めましをといへり。辭世とて、

都にもこひしきことの多かれば、なほこの度はいかんとぞ思ふ。

この歌の終のふ゜文字書き得でうせぬ、父書き加へて、記念ともちいつきたるが、後には涙に朽ちぬといふ。（今昔物語等）

紫式部の履歴については、河海抄にまづ記して曰く、

紫式部は鷹司殿（從一位倫子、一條左大臣雅信女也）官女也。相續而陪侍上東門院、父越前守爲時、母常陸介爲信女也。其祖先は閑院左大臣（冬嗣）、次内舍人良門、右中將利基、中納言兼輔、因幡守雅正、爲時也。後左衞門權佐宣孝に嫁して、大貳三位、辨局（狹衣作者）を生ず。舊跡は正親町以南、京極西頰、今の東北院向也。此院は上東門院御所の跡也。又式部墓所在雲林院白毫院南、小野篁が墓の西也。宇治寶藏日記にも紫野にある由見えたり。雲林院は淳和天皇の離宮也、賢木巻に、光源氏雲林院にて六十卷といふ文をとかせて聞給ひし所也。式部は檀那院贈僧正の許可をかうぶりて、天台一心三觀の血脈に入、兼てより紫野雲林院の幽閑をおもひしめけるも、旁故あるにや。

紫式部の實名は明かならず、當時、宮中の婦人など、いづれも通稱を以て呼びて、

日常は實名を用ひざりしなり。さらば紫式部の稱はいかにしてか得たる。式部とは父もしくは兄の官名によりてつけたるなるべく、紫といふについては、古來、異說ありて定かならず。袋草紙に二說を擧ぐ、一はこの書に紫の上を寫すこと殊に力めたる故といひ、一は式部は一條天皇の乳母子なり、天皇上東門院に仰せて、わがゆかりのものなり、哀とおぼしめせと宣ひしにより「紫の色こき時は」といふ古歌の意をよせて、つけたるなりといふ。河海抄は更に一說を加へ、はじめは單に藤式部とのみいひしを、藤の花のゆかりによりて、紫の字に改めたるなりといへり。これらのいづれか實なるやを知らずといへども、いづれにもせよ、紫式部日記に、公任が式部を求めありきて、「あなかしこ、このわたりに若紫やさふらふ」と、いへりとあるに關係あるは、殆ど否むべからず。本居宣長はそのもと一條天皇のゆかりといふに出でて、紫の上のことにはあづからざることなるを、しかよそへたるに興あるなりといへど、なほ萩原廣道が「この人も、そのはじめは江侍從、淸少納言などの如く、その氏によりて藤式部といへりしとあれば、これ即ちその呼名なりけるを、この物語作り出でて後に、他より稱*めて紫

とはかうふらせつらんとぞ覺ゆる。もしくはこの公任卿の戯れたまへるなどや、その始なるらん、よしさらずとも、他（ヒト）のつけて呼びたるが、何となく弘まれるなるべし」といへるを、穩當の見なりとすべし。「式部また日本紀局の稱あり、こは一條天皇が源氏物語に感じて、日本紀に通じたるものにあらざれば能はずと宣ひ、これよりこの諢名を得たるなりといふ。日記寛弘六年正月の條 されど紫式部の如く、弘く通じたる名にはあらざりしなり。

紫式部性聰敏、幼にして惟規と共に史記を父に學び、修得すること兄よりも速かなり、爲時歎じて、あはれ男子にてもたばやといへり。されど謹愼にして、その才を露はさず。女の漢學だてするは、よからぬこととして、うはべは一文字をだに得かゝぬやうにふるまひたりといふ。日記 長じて左衞門權佐藤原宣孝に嫁す。河海抄に、鷹司殿の官女といへるは、何によりたるか、必ずしも信ずべからず、系圖の異本に御堂關白の妾としたるは、いよ／＼信を置くに足らず。宣孝は式部と遠祖を同じくし、良門五世の孫にして、勸修寺家の祖なり、長保三年四月二十五日卒す。卒年尊卑分脈による 宣孝、式部夫妻の間に生れたるもの、女子二人あり、姉を大

貳三位といひ、妹を辨の局といへり。

宣孝歿してのち、式部出でて中宮(すなはち上東門院)に事ふ。奉仕のはじめはいづれの年なるか、詳かならずといへども、寛弘四年に中宮が文集の樂府を式部に學ぶこと、紫式部日記に見えたれば、この時は既に椒庭にありしなり。なほ日記の翌五年九月の條に「まだ見奉りなるゝ程なけれど」といひ、更に同十二月の條に「はじめて參りしも、今宵のことぞかし、いみじく夢路に惑はれしかなと思ひ出づれば、こよなくたちなれにけるも、疎ましの身の程やとおぼゆ」といへるによりて考ふれば、奉仕の後なほ甚だ久しからず、されどまたやゝ時日を經たることを知るべし。これらの記事によりて、七論に、はじめて中宮に仕へたるは、寛弘二三年の程なるべしとしたるは、蓋し穩當の說なり。かくて同五六年の頃には、中宮の父道長が渡殿の戸を敲きて、式部を挑めることもありしが、式部は柳の絲と吹く風を受け流して、これに應ぜざりき。(日記)

式部が死去の年も明かならず、七論は榮華物語の記事によりて、假に說を立てたり。すなはち萬壽二年八月三日、後冷泉天皇降誕の條(楚王の夢)に「大宮の御方の紫

式部が女の越後の辨」とある書き樣を思ふにこの時、式部はなほ存生せるが如し。更に長元四年九月二十五日、上東門院住吉詣の條(殿上花見)に供奉の人々の名を列ね、大貳三位、辨の乳母はその中にあるに、母の式部は見えず、恙なくば必ず參るべきを、その事なきは、已むを得ぬことありて留まれるにあらずば、旣に身まかりたるなるべしといふにあり。かくして式部が死去を萬壽二年より長元四年までの七年の間にあるべしとするは、或は事實に齟齬することもあるべしといへども、知り得る限においては、最も穩當の說なりとす。

紫式部の履歷について知り得るところの大略は、凡そかくの如し。さらば源氏物語の長篇はその一生のいかなる時において著はされたるか、これもまた詳かならず。河海抄に說くところ、著作の順序甚だ詳かなり、信を置くに足らずといへども、弘く行はれたる說なれば、こゝに引くべし。

此物語のおこり諸々ありといへども、西宮左大臣、安和二年、太宰權帥に左遷せられ給ひしかば、藤式部幼くより馴れて思ひ歎ける頃、大齋院(選子內親王、村上女十宮)より上東門院へめづらかなる草子や侍ると、尋申させ給けるに、うつぼ、竹取

やうの古物語はめ馴たれば、あたらしく作り出して奉るべき由、式部に仰せられたれば、石山寺に通夜して、此事を祈申に、折しも八月十五夜の月湖水に映りて、心のすみ渡るまゝに、物語の風情心に浮びたるを、忘ぬさきにと、佛前に有ける大般若の料の紙を本尊に申うけて、先すま、あかしの兩卷を書とゞめけり。これによりて須磨の卷に、こよひは十五夜也けりとおぼし出てとは侍とかや。後に罪障懺悔のために、般若一部六百卷をみづから書て奉納しける、今に彼寺にありと云々。光源氏を左大臣になぞらへ、紫の上を式部が身によそへて、周公旦、白居易の古をかんがへ、在納言、菅丞相のためしをひきて、書出しけるなるべし、其後に須磨に書加て、五十四帖になして奉りしを、權大納言行成に淸書をさせられて、齋院へ參らせられけるに、法成寺入道關白奧書かゝれて云、此物語世皆式部が作とのみ思へり、老比丘筆を加る所也と云々。誠に君臣の交、仁義の道、好色の媒、菩提の緣に至るまで、のせずといふ事なし、其趣莊子の寓言に同じきものか、詞の妖艶更に比類なし。

の說詳かなりといへども、多くは妄誕不稽、その中に式部源高明（西宮左大臣）

に馴れ親めりといへども、その年齡を考ふるに、高明の左遷は式部の生前か、或は繈褓の頃なるべしとは、提要以來既に定說たり。また道長が筆を加へたりといへるが如き、いはゆる奥書の文を見ても、附會の說たるを知るべし。一犬虛に吠えて、萬犬實を傳ふ、石山に參籠して須磨、明石に筆をつけ始めたりといふこと、普く世の話柄となりて傳はり、かの觀音堂に源氏の間あり、式部が使用の硯さへありといへども、かくの如きはいづれも信を置くに足らず。こゝにはむしろこれらの俗傳を放擲し、七論に倣うて、直ちに確證を稽へ、事情を酌んで、論斷を下さざるべからず。

日記寛弘五年および六年の條に、源氏物語のこと三箇所も見えたれば、この頃は既にその著作(少くとも過半)の成りたること明かなり。さらばこれを成したるは、いかなる時においてしたるか。憶說に過ぎずといへども、長保三年、夫に後れて、いまだ宮づかへもせず、寡居せること五六年、故人を慕ひ、遺見を憐み、無聊の間、徐ろに世態人情を考へて、筆をつけたるものなるべし。もしこれを當らずとせば如何。

試みに宣孝存生中に、式部が筆を執れりとせよ。世路の險夷を辨へ、人情の祕奥を覺れること、到底年長け世故に通じたるものにあらざれば能はず。また一篇のうち、死別の悲を寫したるところ所々にあり、わけて源氏が紫の上の遠逝を傷める幻の一卷の如き、何となく式部が亡夫を悲む情を、男女地を替へて描き出せるにはあらずやと思はる。よしこれらはなほ想像に止まれりとせん。されど日記に「男だに才がりぬる人はいかにぞや、花やかならずのみ侍るめるよと、やう〳〵人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづゝにあさましく侍り」とあるを見れば、夫のありし間は、深くその才識を韜晦して、物かくとだに知られざりしなるべし、況や源氏の著作をや。

さらば中宮奉仕の後、たとへば河海抄にいへるが如く、大齋院の望めることなどによりて著作を始めたりとせよ。或は論じて源氏の如く儀式典例を記して委曲を極めたるは、到底、宮中陪侍の人にあらざれば、寫すこと能はずとするものあり。賀茂眞淵これを辯じて曰く、もし參らざる以前、宮中のことを委しくいかで知らんと思ふ人も侍らんか。箒木の卷に、公私の事をも夫のいひ合せ、又す

こしも才ある人は、見聞く事のおのづから心にとまるなど樣に、かけるを以て見れば、參らずとも知るべきを、況や學ある人の常として、おのが身におはぬ天の下の政をも、賢しき上一人の御事をも、臣たみの上をも考へしれる事、なほ人に異なり、又おのづから見知る事もなどかなからん」と、余はこの說に從ふ。また寬弘二三年に宮仕へして後、かき始めて、同五年までに成れりとするは、その時日あまりに短し。これをも眞淵は辯じて曰く「このあまたの卷々、一通りうちかかんだに、容易には成り難かるべし、いかに才ありとも、作らんには數年を經ぬべし、大齋院の御もとめにて書きたるなどいふは、程をも辨まへぬ說なり」と。異常の天才、必ずしも二三年のうちに、この作を成し得ざるにはあらじといへども、なほ寡居幽閑の時、かきたるものとするぞ、事實に近かるべき。

かくして源氏物語は、七論にいへるが如く、恐らくは長保の末、寬弘のはじめ頃、式部が寡居したる間に著はせるなるべし。當時、式部の年齡は如何。七論はまた論じて曰く、「道長公四十三歲にて、式部に艶言のたまひ、同寬弘六年に渡殿の戸をたゝきわびたまひしなどを思へば、いたく老媼とも見えず、又みづからさた過

ぎたるよし書きたれば、若く盛りなる女とも見えず。榮華物語(殿上花見卷)に、中宮威子三十一二にならせ給ふを、さた過ぎたまふと書けるを思ひ合すべし。しかれば物語は式部三十歳あまりにても作れるなるべし」と、この說また傾聽するに足る。

以上の說を以て最も妥當なりとすといへども、疑問は全く氷釋せしにあらず。寡居の時、着手したりとすとも、その完成は仕進の後にあらざるか、なほ進んで寬弘五年以後にあらざるか、必ずしもこれを否と斷ずべからず。なほ古來種々の說を立つるものあり。短篇の宇治大納言物語(小世繼とも稱するもの)には、源氏は父爲時が作りたるものにして、細かなる事どもを、式部には書かせたるなりといひ、契沖もこれにつきて、半信半疑の間にあり。されどこの宇治大納言といへるは、後世の僞書にして、記載の事實も信を置くに足らず。蓋し源氏があまりに傑出したるを以て、一女子の手に成るべきかを疑ひて、かくのごとき妄說を作り出ししのみ。或はまた說を立てて、宇治十帖は別手に出でたりとし、中には大貳三位の書き繼ぎたるとまで斷ずるものあり。(世諺問答跋)思ふに正篇と十帖

と結構文章やゝ異なるが如き觀あるを以て、この説は出でたるなり。されどかくの如きは、式部の思想の進步し、運筆の老熟したるが爲のみ、苟くも思へ、才識殆ど同じき人の、前後、踵を接して出でて、同じ書に筆を執ること、果して世にその事あるべしや。光源氏を寫せる筆にあらずんば、薫大將は寫すこと能はず、何人か敢て浮舟を描ける名譽を、式部より奪はんとするものぞ。翻へりて更科日記によるに、源氏の五。十。よ。帖。は寛弘を隔ること十餘年、萬壽に先だちて、早くも世に流布したるなり。五十餘帖の既に然るを思へば、一篇必ず別手に出でたるものにあらざるべく、一人の手により、しかも前後引き續きて、書かれたるなるべし。

七論はまた紫式部の性行を論じて、貞淑にして節操正しき婦人なりとす。こは源氏物語のうち、不倫の行爲を寫せること少からず、古來その書を以て、その人を推し、式部を非り、源氏を斥くるもののあるを遺憾とし、この攻擊に對して辯論せるなり。かくして鐵案は下され、式部の價値は定まりぬ。されど爲章の論も、時流の弊を矯めんとして、已また時流の渦中に陷れるもの、なほ儒家の偏見たる

を免れず。紫式部が淸少納言の如く驕慢ならず、和泉式部の如く多情ならず、その主の誘惑をも拒んで容れざりしは事實なり。しかれどもこの拒絶は、二夫に見えずといふ、後世のいはゆる貞操の觀念より出でたりや。當時いまだかくの如く嚴格なる倫理は行はれず、余を以て見るに、式部がその夫を重ねざりしは、後も遂げざる契に、捨てられて世の物わらひとならんことを恐るればなり、節義よりも深慮なり。新千載集に云く、

淺からずたのめたる男の、心ならず肥後の國に罷りて侍りけるが、便につけて文をおこせて侍りける返事に、　紫式部

逢ひ見むと思ふ心は、松浦なるかゞみの神やかけて知るらむ。

敢てこれを以て式部の性行に累せんとにはあらずといへども、七論の如く節義無雙とするも、また謂なし。滔々たる社會のうちにては、謹愼の婦人たるは許すべしといへども、後世に說くところの道義を以て、平安朝を測らんとするは、そも〳〵謬らずや。

第十一章　源氏物語(四)――古來の準據說

羅馬は一朝にして成らず、物必ず由るところあり、源氏物語ひとり突然として出でんや。紫式部天禀の才ありとも、前代の文化の導くなくんば、如何ぞこの大作を赤手にして成すべき。こゝにおいてか、古來、源氏の準據について論ずるもの多し。今その準據論を大體に別てば、一は個々の事質の準據(甲)なり、一は物語の本意の根源(乙)なり、事實の準據はまたその資料を從來の小說に求めたるもの(甲の一)あり、古今の歷史に取りたるもの(甲の二)あり。次にこれらの說の一斑を揭ぐべし。

甲の一　從來の小說に準據を求めたりといふ說を主張するもの、まづ源氏の粉本として擧ぐるは、宇津保物語なり。この二書の類似について委しく論じたるを、細井貞雄の空物語玉琴とす、貞雄別に源氏物語玉椿を著はして、更に宇津保と源氏との關係を詳述せりといふ。今、玉琴に比較したる條々を左に紹介すべし。

源氏螢巻に、源氏が螢を放ちて、玉鬘の君を螢兵部卿宮に見せしむることは
宇津保初秋巻に、帝が螢の光にて尚侍を見たまふことより出づ。
繪合に、須磨、明石の繪を賞美することは、藏開に、俊蔭の日記求め出でてあはれがることより。
箒木の雨夜の品定は、吹上に、冷の許にて、仲忠、仲頼等が婦人を評することおよび初秋に、正頼、兼正が文あはせのことより。
玉鬘に、筑紫の大夫の監が玉鬘の君を挑みし滑稽は、藤原君に、太宰帥眞菅が貴宮をよばひし滑稽より。
乙女に、夕霧が大學寮にて學問することは、祭使に見えたる藤英が苦學のことより。
海雲等に、春秋の論あるは、初秋に、年中の節會の様を寫せるを、引き違へてかきたるなり。
藤袴に、玉鬘の尚侍となりしことは、初秋に、俊蔭の女の尚侍となりしことより。

源氏が六條院、二條院を造りて人々を住ませしことは、藏開に、仲忠が三條殿に父の姿を集めしことより。

梅枝に、源氏が、明石中宮の料に、人々に手本かゝせしことは、國讓に、貴宮が、若宮の料として、仲忠に手本を求むることより。

明石中宮の入内は、貴宮入内のことより。

夢浮橋に、薫大將が浮舟の君を小野に尋ぬることは、菊宴に、三條の上が夫實忠にすさめられて、滋賀の山もとに隱れたるを、仲忠、實忠がゆくりなくその家を尋ね當てたることより。

若菜に、柏木右衞門督が女三宮をかいまみたることは、國讓に、仲澄が女二宮を見、樓上に、凉が犬宮を見たることより。

空蟬に、空蟬が軒端荻と碁を圍めるを、源氏の覗ひたるは、國讓に、女一宮、貴宮の碁戲を實忠の覗ふことより。

椎本に、薫が宇治の大君、中君をかいまみたるは、國讓に、仲忠が一宮、二宮をかいまみたることより。

葵に、六條御息所、葵上の車爭は、國讓に、鴨川べりにて一條宮と貴宮との車爭より

若菜下の朱雀院の五十の賀は、嵯峨院の嵯峨大后宮の六十の賀より。

源氏が嵯峨院の造營は、兼正が桂の第を造り、仲忠が京極の家を造りしことより。

桐壺に、源氏が幼き時、その詩を高麗人の歎美せしことは、俊蔭に、俊蔭が幼き時、高麗人と文作りかはししことより。

玉鬘に、長谷にて玉鬘、右近の邂逅せるは、樓上に、石作寺にて仲忠が源宰相の上、二郎君にゆくりなく遇ひたることより出でたるなど、みな源氏が宇津保に負ふところなり。

これらはいづれも紫式部が意識的に準據せしものなりや、これをしも然りとせば、源氏、頭中將の對照および薰大將、匂宮の對照は、仲忠、冷の對照より出でたるものにあらずや。玉鬘の君を月卿雲客競うてわがものにせんとするは、すなはち貴宮のことを寫しかへたるものにあらずや。

次に源氏が落窪物語に得たりと思はるゝところまた存す。源氏が紫の上の繼母に對する處置の苛酷にして、以て往日の恨を報ゆるは、左近少將が落窪の君の爲にその繼母を遇するより出づ。源氏に、王女御と鬚黑の大將の北の方とが、その母の惡業の報いて、悲しきめにあひたるは、落窪の三の君、四の君の運命より得たるものなり。また浮舟の君の繼父と落窪の君の繼母と相似たるを思ふべく、乙女に、弘徽殿大后が「命長くてかゝる世の末を見ることと、取り返さまほしう萬をおぼしむつがりける」は、落窪の繼母が老後のくり言の趣あり。源氏の末摘花は、落窪の面白の駒を、男女取りかへて寫せるものの如く、體細く、色白く、鼻の殊に目に立つより、いづれもその諢名を得たり。（落窪と源氏との關係は、文學士長谷川福平君嘗て論じたることあり、こゝに擧ぐるところ、これに依ること少なからず）そのほか浮舟の君は萬葉集、大和物語などに出でたる菟原處女に思ひ得たるところあるべし。なほ今散佚して傳はらざる物語の類に準據せることも少からざるべしといへども、考査に由なきを如何せん。

甲の二　古來、和漢の文學を論ずるもの、その眞價値のあるところを辨へず、一

个の著者が胸中に畫きたる架空の談話なりといふを喜ばずして、歴史的事實をこれに關聯せしめて、暗に諷諭するところありと論ずるもの多し。かくして源氏に寫せる記事を歴史的事實に對比して、その準據を說くものあり。まづ書中の人物の行動せる時代について考ふるや、或は曰く、桐壺の帝は醍醐天皇に准へ、朱雀院は朱雀天皇に、冷泉院は村上天皇に比したりと。（河海抄等）或は曰く、桐壺の帝は桓武天皇に、朱雀院は平城天皇に、冷泉院は淳和天皇もしくは仁明天皇に寓せたるなりと。（岷江入楚の一說および日本紀御局考）

源氏が須磨の謫居は篇中最も顯著なる事實なるを以て、これによりて源氏の根源を史上の人物に求むることしば〱なり。その說に曰く、（一）源氏の近流は即ち源高明（西宮左大臣）が太宰權帥に左遷せられたることに據れり。一世の源氏なると、母の更衣なると、歸洛の後再び榮えたると、皆相似たりといふ。されど河海抄に說けるが如く、著者が高明に馴れ親みて、みづから遭遇したる事實を寫せるなりといふは、時日の關係を忘れたる妄論なること、既に一言せるが如し。（二）謫居の地を須磨としたるは、「藻鹽垂れつゝわぶ」と歌へる在原行平に准へ

たるなり。(三)謫居の時、風雨の變ありて召し還さるゝは、周公旦の東征に比したるなり。(四)源氏が龍王および住吉に立願せることは、菅原道眞が太宰府にて天に祈りしことに似たり。(以上、河海抄に始まりて、湖月抄等に敷衍せるところ)(五)近くは藤原伊周の貶謫こそ、式部が親しく見聞して、密かに同情の涙を注ぎしことにはあらずや。(花鳥餘情參照)(一)源氏の容貌光り輝くばかりなるを以て、光源氏の稱ありといふは、或は曰く、仁明天皇の皇子にして、源姓を賜はれる西三條右大臣光に擬したるなり。(明星抄等)或は曰く、廣幡左大臣顯光の子重光天下第一の美男なるによりて、光少將と名づく、これより出でたるものか。(湖月抄)

源氏が藤壺女御および朧月夜內侍と契れることは、篇中最も不倫なる行爲と目せらるゝもの、されどこは著者が心一つに出でたるにあらずして、婉曲に事實を寫せるなりとするは、紫式部を庇護する情よりおのづから然りしなり。論者曰く、藤原時平の女褒子醍醐天皇に參りて、京極御息所といひ、第十の皇子雅明親王を生む、或は曰く、これ實は宇多法皇の皇子なりと、藤壺はすなはちこの御息所を寫せるなり。(柳葊雜筆)また曰く、在原業平が藤原長良の女高子に通ぜしこ

と、伊勢物語に見えたり、高子のち陽成天皇を生みて、二條后と稱せらる。朧月夜內侍はこの后に准へたるものにして、その一門が源氏との間をせきたるは、五條后、基經、國經等の行爲に思ひよせたるなり。（源氏物語千鳥抄等）或はこの內侍のことは京極御息所が元良親王に心通はしたる、（後撰集參照）花山女御が藤原實資に思ひ入りたる、また麗景殿女御と承香殿女御とが共に源宰相賴定に密事ありし（二件共に榮華物語參照）事實より、材を得たるにはあらずやと說くものもあり。

なほ堀內昌卿の紐鏡は、種々の事實の類似を說くこと、煩瑣を極む。たとへば桐壺の帝が更衣の死を傷みたまふは、花山天皇が弘徽殿女御の早世を悲みたまふに當り、源氏の須磨貶謫は、藤原兼通が弟兼家と不和にしてこれを逆遇するに當り、雲井雁が夕霧を疎みて父の許に歸れるは、圓融天皇の時、梅壺女御が里がちなるに當り、明石中宮は上東門院に當れりなど、說ける類にて、さて二條后のほかは、大抵、村上天皇より三條天皇までの事實に似、しかも物語のかた遙かに事實よりもめでたく味ありとす。嗚呼、かくの如く强ひて類似を求めば、何事か準據なからん、鹽は雪に通ひ、更に氷れば氷砂糖となる、似ても似つかぬ關係

を論ずるは、學者のことか、抑も愚人のことか。紫式部をして後人の說くところを聞かしめば、詳細の論、著者も初耳と驚歎すること多かるべし。

思ふに式部が取りて材とせしものは、論者が示すところの著名なる史的事實よりも、却つて著者が日常の見聞にかゝる零碎の些事に多かるべし。玉鬘の君の幼時を寫して、地を肥前にとりたるは、式部の家集に、親しき男の筑紫に下れるとある、その男などより傳聞したるにあらずや。浮舟の君の繼父常陸介のことを記せるは、また式部の母が常陸介なりし人の女なりし故なるべし。わけて源氏に寫すところの、殊に婦女子の見聞に出でざるが如きを見ば、いよ〳〵架空の想像に止まらずして、從來の閱歷によりたるを知るべし。何をか婦女子の見聞といふ、年中の節會などを寫すに、宇津保には似ず、公の儀式はすべて省略して、內々の事のみに止め、紅葉賀、花宴などに伶樂のことを記すにも、試樂を旨としたるが如し。かくして年少の時より見聞したることの、おのづから著作の資料となりて、甲の人物に乙の性格を取り合せなど、樣々に調合せしなるべし。而して古來の歷史、小說に準據を取るや、或は意識してこれを爲すことあり、或

は胸中の蘊蓄の知らず識らずのうちに露はれ出づることあり。一々彼は誰此は誰と引き當てて考へんは、物語文よむべき心ばへにあらずとは、既に宣長などもも道破せるなり。準據の取るべきを取るは、もとより爲さざるべからずといへども、過ぎたるはすなはち及ばず。社會の人事を寫すや、おのづから然るべき暗合までを、一々對比して、師資相承の名を揚げしめんとするは、却つて正鵠を失せん。從來の小說に得たる準據として、論者が陳ぬるところ、半ばは然るべく、半ばは然らざるべし。事實の準據は、古書に擧げたる如く、それと指して正しくいふべくもあらず。

たとひ源氏が古今の事實および在來の小說に負ふこと多くとも、たゞにこれを摸擬するに止まらず、これを基礎として、その上に自己の思想を建營せば、その書の價値は毫も減ぜざるなり。源氏が準據せしは片々たる事實に過ぎずして、古書古事以外、十分に一家の主張あり、前後誰かよく人世の描寫かくの如きに至れるぞ。社會の表裏を洞察し、人情の祕鑰を把持して、この大篇を成す、以て千載不朽の名を傳ふべし。小說としてこれにて十分なり。しかるに文學の眞價

を解せざる時、この十分を以て十分なりとせず、源氏はかゝる本旨を以て書きたり、かゝる寓意ありなど、群盲しきりに大象の一局を撫して、大象の全體を解し得たりとす。かくして種々の源氏の本意論は出でたり。

乙　源氏の本意を論ずるもの、各、己を以て他を測り、後世の思想を以て、平安の古代を推すの弊あり。而して鎌倉時代より江戸時代のはじめまでは、佛教いたく行はれたれば、その臭味を帯びたる説多く、また儒教に傾けるもあり。河海抄以下の舊説が、源氏の本意として擧ぐる説、これを別てば凡そ四あり。

(一)天台六十卷に擬らへたりといふこと。　著者はこの書によりて、法文甚深の意を現はし、因果輪廻の理を示せるなり。さてこれを天台六十卷に擬らへたれば、源氏六十帖ともいふ。その中に並の卷ありて、これを合すれば、二十八帖となるは、法華經二十八品に擬らへたるなり。六十帖といひながら、五十四帖なるは、天台六十卷といへど、止觀十段のうち三段闕けたるが如し。

(二)莊子に基けりといふこと。　河海抄にいふところを、明星抄に祖述して云く、「まづ此物語の大綱、莊子が寓言に基けり。寓言といふは、己が言を以て他人

の名を借りて以ていへりとなり。莊子が法文は、名を作り出して、わがいひたき事をいはせたり、その云ふところは、盡く實の事なり。今この物語に云ふところの源氏も、その眞實を尋ぬれば、その人なし、書き顯はすところは實なり、されば莊子が筆をまのあたり寫せり。凡そ莊子が文章より一切經の文章は出たりと、唐人がほめたる如くに、一切の詞花言葉は此物がたりより出るなるべし。」（首卷大意のうち）

(三)春秋に擬らへて勸懲の意を含めたりといふこと。　明星抄に云く、「人の善惡を褒貶して、この物語に記し出せるところは、左傳を學べり。孔子の春秋を記さるゝ心は、善を記すところは、後人を善道にいさみを加へて進ましめん爲、惡を記すは、後生に見ごりに懲すべき爲なり。されば勸善懲惡と云ふ、是なり、この物語の作者の本意、是なり。」（首卷大意のうち）

(四)史記に基けりといふこと。　即ちうるはしき文體は、司馬遷が筆法を寫し、卷に次第を立つるも、史記によれり。本紀十二卷は桐壺より匂宮まで、世家三十卷は宇治十帖を以てこれに比し、列傳七十卷は並の卷を以てこれに擬し

たるなりといふ。

舊說の立つるところ、大抵かくの如し。江戶時代に至つて、熊澤蕃山識見高邁を以て鳴る、しかも儒者は儒者なり、源氏を論ずるにも、また儒意を以てす。曰く、この書はひたすらの好色の書にあらず、一々證跡ある事實なれども、これを記して敎を立てても、見る人少かるべしと思ひて、寓言にして面白くかきなして、その中におのづから敎を含めたり。されば一條帝は日本紀に熟せるものと宣ひ、順德帝も日本の至寶とこの物語をいへり。かくてこの物語は風紀をもととし、中にも音樂の道を委しく記せり。この道のものなど祕事大事などいふ故、後に絕えんことを恐れて、大略をかきとゞめ、後の君子を待ちしなりと。（源氏外傳所說摘要）かくして卷中の人物の是非を論じ、わけて委しく音樂のことにわたれるは、「後の君子」を以て自ら擬するものにして、源氏の祕意を闡明せるよりは、むしろ源氏を借りて自己の意見を發表せるものなりとす。

紫家七論さまでいみじき書ながら、著者が水戸學派に屬するを以てにや、なほ甚しく儒意に拘はり、併せて國體を重んずる意は、一見、紙上に瞭然たり。冷泉院

の即位の如き、作者は深く諷諭するところあるなり、されどなほ帝統の動かすべからざるを知りて、桐壺の帝の皇系より外に出づることなからしむと、論じて、さて曰く「そも〳〵一旦人倫のみだれと、長く皇統のまぎれと、いづれか重く、いづれか輕かるべしや。斷案を下しがたしといへども、臣下の意にていはば、源氏の罪を知らざるまねして、皇胤の思はぬ方ならぬを喜ぶべし、しからば式部が立意推しはかるべし。さしもに用意深き式部が、當時宮中にも披露する物語に、心なくて書くべしや。この造言諷諭に心づかせ給ひて、いかにも〳〵物のまぎれを豫め防がせ給ふべし。かの二條后などの密事を思へば、恐ろしき事ならずや。上にしるす源氏の心は、皆式部が心にて、私通の樣をあり〳〵と知らせ參らするなり。臣下はまた薫大將のまぎれを見て、用意あるべしと以て明かに爲章の意のあるところを知るべし。

しかるに爲章が師兄たる契沖の說を見よ。文學の評論は專門の學にあらず、いふところ茫漠たる點なきにあらずといへども、さすがに古今獨步の學僧、見識甚だ卓拔なり。その著源註拾遺に源氏を勸懲の書なりといふ論を駁して曰く、

「定家卿の詞に、歌ははかなくよむものと知て、その外は何の習ひ傳へたる事もなしといへり、古今密勘に見えたり。これ歌道においては、まことの習なるべし。然れば此物語を見るにも、大意これに准らへて見るべし。式部が此物語をかくに、人を引てあしくせんとは思ふまじけれど、其身女にて、一部始終好色に付てかけるに、損せらるゝ人も有べし、又聖主賢臣などに准らへてかける所に、叶はずして罪を得たればにや、地獄には入にけん。源氏の薄雲に事ありしは、父子に付ていはば、何の道ぞ、君に付ていはば、又何の道ぞ、匂兵部卿の浮舟におしたち給へるは、朋友に付て、何の道ぞ。夕霧、薫の二人は共にまめ人に似たれど、夕霧は落葉宮におしたちて、柏木の靈に信なく、薫の宇治中君の匂兵部卿に迎られての後、度々たはふれしも、罪少なからず。春秋の褒貶は善人の善行、惡人の惡行を面々にしるして、これはよし、かれはあしと、見せたればこそ、勸善懲惡あきらかなれ。此物語は一人の上に善惡相まじはれる事をしるせり、何ぞこれを春秋等に比せん」といへるは、積極的に自己の主張を明かにせずといへども、よく儒流の偏見を喝破し得て、宣長の先驅をなせるものといふべし。しかるに賀茂眞淵

その後に出でて、說くところ七論の說を繰り返すに過ぎざりしは、何ぞや。
本居宣長博覽一世に絕し、議論盡く根據あり。その源氏を論ずるや、すべて物語は物の哀を知らしむるものなり、この目的に合へば、物語の本意は達せり、他に意あらんや、讀者またその心して讀まざるべからずとす。曰く、「大かた物がたりは、世の中にありとある、よき事、あしき事、めづらしき事、おかしき事、おもしろき事、あはれなる事のさま〴〵を書あらはして、その樣を繪にもかきまじへなどして、つれ〴〵なるほどのもてあそびにし、又は心の結ぼゝれて物思はしき折などのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、物のあはれをもしるものなり」（玉の小櫛）と。實にこれ千古の疑團を解決したるものにして、古家の下、紫式部を起し來るとも、よくわが意を得たりと首肯せん。今日より見れば、ことに珍らしげもなき說ながら、當時にありてこの論を立てたるは、非常の卓見なりと稱せざるべからず。
かくして今日に至りては、源氏を論ずるもの、別に諷諭するところあり、寓意ありといふもの、殆どこれなく、槪ねこの書が當時の社會を直寫せるものにして、

不倫不德の行爲を描けるも、時勢の反映に外ならずとす。さらば源氏は平安中期の貴紳淑女を客觀的に描出せる、いはゆる寫實小說に過ぎざるか、著者が理想の篇中に躍寫せるものなきか。余を以て見れば、物の哀を寫せりといふも、解释の方によりて弊なきにあらず、佛教の意を寓せりといふも、また理なきにあらずして、各〻物の一面を見たるものなり。こゝにおいてか、寫實、理想如何の問題について、私見を述べざるべからず。

第十二章　源氏物語(五)——その評論

古墳しるしの松高く、梢に龍吟の響ありしもの、摧かれて一束の薪となる、千歲世を隔てては、何によりてか古人の眞相を見るべき。今日にありて平安朝盛世の貴族の生活を覗ふべきもの、かれらが殘せる日記にあらず、後人の著はせる歷史にあらずして、實に一部の源氏物語にあり。月卿雲客が詩歌管絃に遊びくらせる、佳姬麗媛が春花秋葉と色を競へる、一々筆は意の行くに任せて、談笑唱

和の聲なほ耳にあり。藤家一門が道長を中心として榮華を極めたる時、五十四帖は光源氏を中心としたる當代貴族が榮華の蓄音器なり、寛弘宮廷のパノラマなり。當代の社會を活寫せるものなれば、すなはち源氏は好箇の寫實小說と稱すべきに似たり。しかれども余輩がこの書を讀むや、得るところは平安貴族の生活を知るに止まらず、通篇至るところ、別に囁きの聞ゆるあり。著者は表に現在の社會を描寫して、裏に自家の理想を含蓄せしむ。源氏物語はたしかに一の理想小說なり。

さらばその理想は如何なるところに存するか。舊說のいふが如く、佛敎の說を祖述したりといふも、決して浮言にあらず。一部を天台六十卷に擬して、玄妙の法門を演繹せりといふは、誇大に過ぎて信ずるに足らずといへども、著者が佛法に感染すること深く、宇津保、落窪などに比するに、體相一變到るところ沈欝幽寂の趣を有するは、讀者の首肯するところなり。因果應報の理は人世必然の數として、著者はこれを信じ、篇中一貫の理としてこれを示せり。源氏が正妻女三宮の節を柏木右衞門督に汚されたるは、藤壺、朧月夜に對する壯年の過のこ

ことに報いたるものとして、われながら理法の炳然たるに驚けり、冷泉帝の子孫なきも不義の出なればなり、朱雀院の秋好中宮を得ざりしは、源氏貶謫の報なり。かく篇中の事實に佛教的倫理を寓して、一種の勸懲主義を唱道したりといはばいふべし。されど佛教の影響著しとはいへ、なほ當時の根本思想を侵蝕したるものにあらず、因果の理は式部の信ずるところなれども、源氏一篇の理想にあらず、その描出して讀者の前に呈せんとしたる主張は、別に存す

源氏物語の本意は實に婦人の評論にあり。著者が深く儕輩の態度進止に注意して、みづからその見聞を筆に殘せるは、紫式部日記これを證す。著者は觀察を積み、考竅を重ね、こゝに一篇偉大の小説を作りて、婦人に對する意見を發表せり。十人十色おの〳〵特質あり。空蟬は清癯梅の如く、朧月夜は妖艶牡丹の如し。床の上の福壽草、作法正しく飾りたれど、春闌けて香もなきは葵の上、秋の千草の色珍らしき六條御息所、下に蛇や臥すらんと恐ろし。藪陰に手をついて畏まる墓の醜けれど、末摘花の毒もなく、籠の鶯、野趣なき女三宮の鳴く音に罪あり。夕顏の露をも待たではかなく消えたるに、槿は却つて光におぢず。葦邊の鶴の

聲は聞ゆる九皐の天、明石の上は思ふほどの世を過ぎ、刈萱の身にしむ色もなけれど、花散里のめやすきに味あり。紅紫爛漫描き得て見る目もまばゆきに、わけて著者が理想の婦人として寫したるは紫の上にして、以て理想の男子たる光源氏に對せしめたること、いふまでもなし。遠くて峯に眺むるによろしく、近くて瓶に挿むによろしく、盛の色は匂へる雲と靉靆き、風の誘ふは暖き雪と亂る、花は櫻、女は東の對の上に止めたり。

著者は種々の性格を具體的に人物の行爲によりて示したるのみならず、直接に草紙地の文のうちにも、または人物の對話をかりても、自己の婦人觀を發表せり。雨夜の品定が源氏一篇の總評ともいふべきは論なし、これをはじめとして、所々に評論の散見するは、讀者のよく知るところ、玉鬘巻に、源氏が新調の衣服を調へ、その一々の紋様によりて、これを頒たるべき對の方々の容貌を、紫の上の想像するが如き、梅枝巻に、香の合せ様、假名のかき様によりて、人々の性質を描きわけたるが如きは、顯著にして巧妙なる例なり。その批評において、著者が教ふるところは、妻たるべき心得あり、繼母についての訓誡あり、人は心を長

くもたざるべからずとし、女は容貌よりも心ばせによりて輕重せらるゝものといふなど、一々列擧するの煩に堪へず。かくの如くして、如何ぞ源氏を理想なくして社會の客觀的寫生を主としたるものとすべけんや。

源氏寫實論を唱ふるもの、或は駁して曰はん、この小說をして著者が理想を發表せるものとせば、何ぞその理想の卑しきこと、一にかくの如きや。源氏は理想の男子なり、しかも道義の上に許すべからざる罪過を犯し、紫の上また德操の卓越せるものなくして、婦人に戒むべき嫉妬の情あり。さてもなほ理想の旗幟を揭げたりとせば、これ評者の謬妄なるにあらずんば、著者の陋劣なるなりと。これらの駁擊に對しては、總論既にこれに答へたり、今更めて詳論するを要せず。論者に請ふ、後世の道德の標準を以て、上代の人物を測ることなかれ、馬前に殉する細川夫人の苦節は、平安淑女の事にあらず、嚴格なる忠孝は知らぬ未來、身を横へて君に代る繼信の忠義は、京都公卿の事にあらず、城頭子を殺し、自ら剛毅なる武士道も後世の道なり。優しきわれ〳〵の祖先は理性を重んぜずして、情感を主とす、理想の男女は情の中庸を得たるものこれなり。冷々淡々たる

葵の上、孤守獨善の槿の齋院の如きは、禮節は正しかるべし、色香めでたき趣を闕きたるを惡む。情炎の促がすところ、嫉妬の念あるは、人情の常なり、六條御息所の心中なかば憐むべし。戀魔の驅るところ、時に倫理に累すといへども、源氏の行爲に表はれたる人生の弱點、また同情を惜まず。式部說いて曰く、「女は身を常に心遣ひして守りたらんなん、よかるべき。心安くうち捨てたる樣にもてなしたる、品なきわざなり。さりとていと賢しく身かためて、不動の陀羅尼よみ、印つくりて居たらんも、にくし。現の人にもあまり氣遠く物隔てがましきなど、氣高きやうとても、人にくゝ、心うつくしうはあらぬわざなり。太政大臣の后がねの姬君ならはしたまふなる敎は、萬の事に通はしなだらめて、かど〳〵しき故もつけじ、たど〳〵しくおぼめく事もあらせじと、ゆるゝかにこそおきてたまふなれ。」常夏卷いつとてもまたしかあるべけれど、わけて當時は何等の倫理よりも、何等の行儀よりも、これを以て一生處世の方針としたるなりき。

翻へりて宇津保を取りて比較せよ。詳細の論は今敢てせず、たゞ大體に就いて見るに、明かに源氏がこの前驅者に負ふところの大なるを見る。宇津保は竹取

におけるが如く、一美姫を中心として、數人の男子を率き來り、源氏は一公子を中心として、種々の婦人をその周邊に集む。かれは男子の材能を主としたるに、これは女子に趣味を有して、その一々の性格を紙上に躍然たらしめんとす、源氏は、一篇の主人公なりとはいへ、むしろ夥多の女子を聚中する方便に過ぎず。男女の差こそあれ、結構のあるところ、二篇甚だ相似たり。されど人物の布置配合を見るに、源氏は宇津保の個々分立したるが如き拙劣なるものにあらず、藤壺は紫の上を導き、夕顏は玉鬘を呼び、彼此の事實會ひては離れ、別れては合ひ、一幹は千枝の綠を支へ、百八の珠は一絲に繫ぐ。男子も重要なるもの源氏一人のみにあらず、これに對する致仕の大臣あり、ほかに髭黑の大將あり、夕霧、柏木あり、彼我錯綜して事件を複雜ならしむ。

事件よりも更に複雜なるは、著者が人性の解釋なり。宇津保が個々の人物を寫すや、甚だ單純にして、たゞ種々の才藝を人化したるもの、手足ある書籍はあり、談話する財寶はあり、衣冠せる樂器はあり、いまだ肉あり、血ある人間を見ず。竹取よりも一歩を進めて人生の描寫に力めたる宇津保は、主張するのみにして、

實續なく、遂に紫式部をして名を擅らにするを得しめたり。式部は人間の決して仲忠、冷等の如く單純なるものにあらず、變化常なくして、善に究竟の善なく、惡に一徹の惡なく、表裏反覆の間に人生の妙味の存するを知れり。寫すところ、事實の奇なるにあらず、たゞ日常一般の些事にして、なほ落涙禁ぜざらしむるは、人情の琴線に觸れたればなり。たとへば夕霧卷に夕霧と雲井雁との結婚の許否について、致仕の大臣の家庭に小波瀾あるを見よ。母子の不和、かれにも一理あり、これにも一理あり、感情の衝突、是非の評を下すべからざるところに、人情の機微は描かれて、殆ど餘蘊なし。著者はまた人性を解釋し、あやにくなる心を以て通有の弱點とす。手中に存するものは顧みず、失うて後、うたゝこれを望むは、世人に多く見るところにして、殊に源氏の特質なり。その葵の上に對するや、存生の時は情こまやかならず、なくてぞ人は戀しく、その秀美の點を懷うて今更に悔しく、槿の齋院などつらき人は、見まさりして心を苦む。かくの如き例一々列擧するに堪へず、眞に人性の長短ともに描寫し盡せるもの、われ源氏物語においてこれを見る。

源氏の正篇において、著者が理想の人として寫したるもの、男子に光源氏あり、婦人に紫の上あり、共に一生の榮華を極めて、衆人の羨望措く能はざりしものなり。されど源氏もまたこの人生を描寫するもの、人生は到底理想の如くなる能はず、蠢々として衆生の動くところ、兜率にあらず、淨土にあらず、人間は五塵六欲に充ちたる嚢袋なり、美ともいへ、善ともいへ、理想は實現せず。四大凝つて形を成せるもの、水火相刻して缺陷あるを免れず、過失あり、破綻あり、因縁相依りて業報來る。源氏は壯年の罪報いて、心中の苦悶漏らすに由なく、紫の上もまた憂患は絕えず。めでたし〳〵と壽ぎ終る宇津保、落窪とは、大に選を異にするものなり。しかれどもとにかくに源氏と紫の上とは著者の理想に近き人物なりき。年を襲ね、見聞を廣むるに從ひて、式部はその描寫のなほ現實に遠く、人生が更に缺陷の大なるを感じ、移つて別に現實の世界に見るところを寫さんとす、かくして宇治十帖は成りぬ。

薫大將と匂兵部卿と、共に源氏の性の一面を得たるのみにして、缺陷多き人なりき。彼は幽靜、此は浮華、一は佛法に進み、心長うして、わが物となるべきをも失

ひ、一は情深けれど、輕々しく、うちつけに過ぐ。宇治の大君のつれなくも、人生の常なく、男子の憑みがたきを思ひしみて、亡き父の跡を戀ふるが如きは、俗界の人にあらずして、竹取の赫耶姫に似たるもの、果して早くも焦るゝ世界に移りぬ。中君はあどけなく、物も覺えぬ樣ながら、なほ年を積むまゝに、世態の眞味を解す。しかも解するや遲し、事情は頼むべき人の妻たるを許さずして、頼みがたき人に一生を託す。わけて浮舟の君のあはれなる樣よ、娘氣のはかなく、色には染み易く、行末を思うては薫に傾かざるにあらず、情深き匂宮の愛には魂も碎けぬべし。かくの如きは滔々たる社會の婦人が陷り易き禍、花まさに開く青春の時、いまだ恒心のあるなくして、誘惑は右よりし、左よりす、人生女の身となるまた難いかな。

源氏の正篇は、種々の人物の性格を寫し分くるに力を盡して、境遇の變化と、これに伴へる情感の反覆とは、その主眼とするところにあらず。源氏に須磨の近流あり、女三宮の不義あり、紫の上また時に傷心の事なきにあらずといへども、とにかくにかれらの榮華は前後に通じてめでたく、その性情もまた前後一貫

のものなりき。たゞそれ人と人との差別を說いて、一人の變化を示さず、一度、人人の異同を示し了りては、更に四季折々の些事につけて、これをくり返すに過ぎず。こゝにおいて正篇を讀むもの、しば〳〵その冗漫にして、單調に過ぎたるを誹る。十帖はこれに異なり、浮舟の君を唯一の主人公として、その半生の波瀾を寫す。賤しく育ちたる少女の母と共に、高貴なる異腹の姉を羨み、幸に貴公子の愛を得て、玉の輿に乘りぬ。誰か知らん、幸はすなはち禍、戀する人は二人、棒ぐる心は一つ、彼方に傾き、此方に動き、無殘なる濁世の波に翻弄せられ、惑ひ歎きての果は、宇治の藻屑と身をなしぬ。されど小さき胸の苦はこれにも終を告げずして、更に小野の閑棲となり、また薰大將に覗はる。運命の壓力は終に如何、讀者をして、その結局を想うて、一喜一憂の感に堪へざらしむ。かくして十帖は境遇に變化あり、事實に波瀾あり、著者の筆力ます〳〵熟達して、渾然たる拱璧、斧鑿の痕を存せず。しかれども正篇の、單調なる貴族生活を寫して、なほ精彩奕々として、人物それ〳〵に活動し、錦繡の眼を射るが如き色あるは、經營慘澹の程も覺えて、また識者の感歎して措かざるところなり。

更に轉じて源氏を以て枕草紙に比せよ。第一に彼此の相違を感ずるは同情の多少なり。式部は少納言と全く性質を異にし、同情の念殊に深く、これが爲に全篇靈犀の氣を生じ、讀者をしてしば〲落涙の滂沱たるを覺えざらしむ。されど同情は滑稽を害ふ。式部、時に末摘花の君、源内侍、近江の君などを率き來りて、可笑の活劇を演ぜしめ、以て單調の弊を免れんとす。されど末摘花の鼻の赤きこそ可笑しけれ、蓬生の宿にひとり亡父の遺跡を守りて、無情の世間と鬪ふには、唇頭の笑おのづから消えて、紙上一點、同情の痕を印せざるを得ず。（蓬生卷參照）近江の君が、玉鬘の出世を羨みて、尚侍にだに得ならば、如何なる賤しの手業もせんと賴み回れるは、魯愚の質のさりとてはまた憐むべきにあらずや。（行幸卷參照）同情の豐富なるは、源氏の長所にしてまた短所、もし出來得べくんば、その一端を割きて清少納言に與へなんものを。

旣に枕草紙の條に一言せるが如く、少納言の觀察は鋭利なりといへども、外面に止まれり、式部はこれに反して、人生內面の祕奧を探らんとす。二人が佛敎の信仰に等差あるが如きも、またその一因ならずとせず。式部は深く佛敎に歸依

し、従うて厭世の感を漏せること、到るところに存す。たゞに十帖の薫大將のみにあらず、正篇三紀のうち、中紀以外の源氏の感懷、および後紀における紫の上またはその他の人々の志のあるところを見るべく、これに伴うてまた死の悲を寫せること甚だ多し。かくして源氏物語がよく個々の性格を差別して、重複の嫌なからしめたる大手腕は、固より否むべからずといへども、これらの個々の性格の間、またおのづから通有の點あるを見る。すなはち篇中同情多く、またうはべだけにもせよ、厭世の感を懷く人の多きは、これやがて著者が胸中の祕懷の露出したるものにして、これを以ても紫式部の性質の一端を推すべきにあらずや。

源氏物語の文章については、評釋等において委しく論じたれば、更めて事々しくいふに及ばず。その千古無比の名文たるは、よく人の知るところにして、筆路の整頓したるは、いかに著者の頭腦が秩序あるかを示して餘あり。全篇すべて苦心の跡を存し、前に伏線あり、後に照應あり、讀み去り讀み來りて、うたゝ用意の周匝を歎ぜずんばあらず。されど物一長あれば一短あり源氏の弊はその用

意の周匝に過ぐるにあり、丁寧反覆、照應も對比も度を過ぐれば、却つて變化の妙味を失ふ。行筆あまりに委曲を盡して、冗漫の感あり、餘韻沒却の嫌あり、勁健奇拔の味なきは、もとよりこれや平安宮廷の婦人の口調ならん。諄々として語り、迂餘曲折、文は切れんとして切れず、主格なく、助辭多く、同じ形容詞、副詞、互爾波を重ねて、後人をして一讀その意を得るに艱ましむ。加ふるに統一はこの著者の特色なりといふに、なほ一篇のうちにあらゆる婦人を描き盡さんとし、複雜に過ぎて、やゝ統一を缺く感あり。さもあらばあれ、これらの弊は深くいふに足らず、よく人生の祕密を看破し、個々の性情を寫し得たるもの、源氏物語の如きは古今またその比ありや。

源氏の後篇に擬したる山路の露および雲隱の六卷の如きは、こゝに論ずべき要なし。また源氏が後世の文學にいかに甚深の影響ありしかも、極めて興味ある問題ながら、それらの論はこゝにはあまりに煩はし、他日別に筆を更めて言ふところあるべし。

第十三章　第三期の末の小說(一)――狹衣

藤原氏の榮華は道長に窮まりぬ、平安朝小說の發達は源氏物語に窮まりぬ。絕世の大作は連續して出でず、源氏物語一度世に出でて、貴族の間に傳播するや、その後の作者はその光彩に眩惑し、これを仰ぎ、これに倣ひ、たゞその下風に立ちてみづから甘んずるのみ。諸家先を爭うて筆を執れども、いづれも飣餖補綴を事として、別に機軸を出すこと能はず。さるが中に今日に存して最も名あるものを狹衣とす。

狹衣は四卷あり、流布の刊本は、その一、二を各〻上下に、三、四を各〻上中下に別ちて、すべて十冊とす。群書一覽に八卷とあれば、或は四卷を各〻上下に別ちたる本もあるなるべし。近時また國文大觀のうちに收めて刊行す。古來、註解の書稀に、只下紐の如きあれども、杜撰にして見るに足らず。

例によつて一篇の梗概を記すべし、

卷一　狹衣大將が源氏宮に對する戀愛を以て、一篇の骨子とし、さまざまの事

實はみなこの一事に基因す。故に突然冒頭に、三月の末、大將が源氏宮を訪ひてうち歎けることを以て、文を起して、主旨の存するところを知らしむ。しかる後、溯りて大將等の履歴を記したるは、當時にはなほ類稀なる倒置法といふべし。』
時の帝嵯峨院の皇弟に堀河の大臣といふがありき。姪を賜はり、帝の後見となりて時めきぬ。北の方三人、一人は先帝の妹にて堀河の上といひ、一人は太政大臣の女にて洞院の上といひ、一人は式部卿宮の女にて坊門の上といふ。御子は男女二人、女子は坊門の上の腹にて、嵯峨院の中宮に立ち、男子は堀河の上の腹にて、狹衣大將これなり。大將容儀世に知らずめでたく、才藝並ぶものなし。從妹にあり、先帝の皇女にして、源氏宮といふ。幼くして先帝崩御ありしかば、叔母の堀河の上の許に育はれぬ。大將とは同じ殿のうちに人となりて、中よき友どちの筒井筒むつびあひて餘念もなかりしが、年長けてはおのづから隔ての垣もいできて、まゝならぬはうき世なりけりと、大將はあぢきなく思ひ歎きたまへり。』
五月五日、五月雨のつれ〴〵なるに、內には管絃の御遊ありて、上達部の吹彈殘す手もなし。大將横笛を勸めらるれど、辭して吹かず、あながちに强ひられて、少

し玩びたる聲世に似るものもなく、帝をはじめ涙落さぬはなし。物の音響き昇るに從ひて、虚空に音樂聞え、紫雲に乘りて天稚御子たなびき下り、いざたまへと大將を誘ふ。あなやと引き止めたまふ帝の、御こゝちも悲しげなるを、ましてく父母の歎を思ひやりては、なほこの度は參るまじき由、文に作りて誦したるに、感じて神は歸り昇りぬ。さてこそめでたき世界より假にこの世に生れし人ぞと、帝は惜みて、最愛の女二宮を笛吹きし祿に與へんと、ほのめかしたまふ。大將これに心もとまらず、源氏宮の事のみ思はれて、

いろ〳〵に襲ねては着じ、人しれず思ひそめてし夜半の狹衣。

狹衣の書名はこれより出でたるなり。大將この世の人ならずと、世の噂高く、わきてその父母は天上界に奪ひ去られんことを恐れて、掌中の珠といつき守りたまひぬ。この天稚御子の天降れることは、宇津保の仲忠が奏樂の事より得たるなるべし。またその天上に誘ふは、竹取に似て、却つて昇らずなりにしところに、著者の意匠は存するものか。

女二宮は帝の御子のうち姿最も美はしく、帝は大將に與へんと宣ひ、大將の父

母も喜びて、消息奉れよと勸むれど、いかでか心の傾かん、大將は物憂くのみなりて、世を捨てまほしく思ひたまふ。ある時、二條大宮あたりにて、女車の怪しきが、物恐ぢたりげに早くやり過したるを咎めて、はからずも仁和寺の威儀師が帥平中納言の女飛鳥井の君を誘拐したるを助け、鄙びたるその家に送りゆきぬ。深く日とまるとしもなけれど、優しくなよゝかなる姿のにくゝはあらで、袖ひき動かすに、女、

　とまれともえこそいはれね、飛鳥井に宿りはつべき影しなければ。

かくて契りかはし、夜毎に通ふ。これはこの姬君の乳母貧に苦み、その主を威儀師に許して、盜ませんとせしなり。それを妨げられしが、大將が檢非違使別當の子の少將と名のるに思ひ侮りて、その通ひ來るを喜ばず、欺いておのれ夫を設けて奧州に下らんといふに、姬君已むを得てこれに伴ふ。これも乳母の謀にて、まことは姬君を大貳の子式部大輔道成に許ししなり。かくて姬君は道成に伴はれて、筑紫に下る。道成は大將の乳母子なり、船中にて大將が餞別の扇などを誇りかに示すにぞ、姬君はいよ〳〵過ぎし契の思ひ出でられて、悲に堪へず、韓

泊にて海に投ず。この飛鳥井の君が賤しき住家は、源氏の夕顔の宿に擬したるなるべく、その筑紫に伴はるゝは、蓬生卷の末摘花の拒絕を反對に寫したるなるべし。

卷二　源氏宮はつれなし、飛鳥井の君は行方知れず、官位昇進し、帝の信任も厚けれど、大將少しも嬉しからず、父母に女二宮の事勸めらるれど、心はあらぬ方にあこがれぬ。さるを怪しき緣かな、ある時、弘徽殿に知る人を尋ねて、はからずも女二宮に近づき、一時の過よりはかなき契を結ぶ。されど帝に知られんことも耻かしく、源氏宮に思ひ代ふることも叶はで、知らず顏に大將は過す。女二宮の母后は懷紙の落ちたるにそれと知りて、悔しさ限なく、假の契に宮が乳房の黑みゆくを見ては、誰の男のかくもうち捨ておくぞと、歎積りて、重き病を得たり。月滿ちて宮が男見生みたるを、母后おのれが腹に產れぬと、帝の御子に申しなして、世のきこえをつくろふ。やう／＼みそか男は大將なりと知りて、いかなればわが母子を人とも思はず、輕んずるよと、憤る心は病を進めて、母后はやがてうせたまふ。女二宮はおのが過より母后をも失ひて、慚悔骨に徹り、世をはか

なみて尼となりぬ。

帝御こゝち例ならず、位を皇兄一條院の御子後一條院に讓りて、嵯峨に退隱し若宮と女三宮とは大將に預けて後見せしめたまふ。入道宮(即ち女二宮)は父の帝と共にましします。女三宮の姿は入道宮にも劣りたるに、さらでも大將の心入れんやうもなし、若宮は實はおのれが子なれば、大將も注意して養へるが、親子ともいはれぬ中のいと心苦しかりき。この若宮の一件は源氏の藤壺が腹の冷泉院の事を、あらぬ方に作りかへたるなるべし。

後一條院は東宮の時より源氏宮を戀ひて、屢〻御消息あり、殆ど入内に定まらんとすれば、大將心も心ならず、折しも一條院崩御ありて、入内は延びたれば、やゝ心安きに、また齋院代り、源氏宮神託によりて立つ。入内の事の止みたるは嬉しけれど、齋院となりてはいつかまたわが手に入るべきと、大將はなほうきことぞ增りぬる。

大將心長き人にて、飛鳥井の君のこと忘るゝ日もなし。式部大輔筑前より上りて、姬君の記念など見せまゐらす。さてはうせにしよと、今更に淚は止まらず。そ

の後、大將高野詣の途に、粉河にて姬君の兄なる山伏にあひ、姬君がその叔母の尼に助けられて、髮を剃りたる事をほの聞きて、なほ委しく尋ぬる由もがなと思ひたまへり。

卷三　こゝに洞院の上はわれ一人子なきを歎きて、堀河の大臣の子なりと名のる今姬君を養女とす。大臣はおのれの子ならずと思へど、上もてかしづくこと限なし。姿は醜くもあらねど、素姓卑しく、性質も愚かなり。それをも思はで、上は今姬君を入內と定め、大將によろづの世話を賴む。大將耻かゞやかしき業と押し止めたく思ひ居りしに、入內近くなりて、上の弟宰相中將忍びて今姬君の許に通ひ、その噂立ちて、入內のことは敗れぬ。この姬君は源氏の近江の君より出でたること明かなり。

大將はからずも今姬君の許にて、その母が飛鳥井の君の叔母なりと知りぬ。この緣につきて聞けば、かの姬君は叔母の尼と洛西常磐にありしが、物おもひ積りて、先つ頃うせぬとなり。大將すなはち常磐に尋ね往きて、明日は姬君の四十九日といふに、かの山伏および尼に會ひて、過ぎにし人の事を聞く。姬君大將の

種を宿して、愛らしき女兒を生み殘ししが、一品宮にめでられ、そこに引き取られて養はるとて、常磐には居ざりき。

一品宮は今上の妹なり、おのが女養はると聞きて、見まほしさに、大將は忍びてその許にゆく「權大納言なる人すれ違ひざまに、これを見かけたるが、氣高きにほひは闇にもしるし。權大納言は一品宮に心かけて、常にこのあたりにさまよふ人なり、こゝに大將を見て、おのれと同じ心なるべしと思ひ、妬ましさにひたすら世間にこの事を言ひ弘む。かゝる噂かくれなければ、大臣夫婦もそのまゝにはいかゞとて、奏して一品宮を大將の北の方に申し請ふ。大將は二十一歲、一品宮は三十歲、さた過ぎたる姿の心もとまらぬに、妻設けては、愈々源氏宮も思ひ絕えざるべからずと、大將は契の程のつらく思ひ歎く。一品宮ももとより大將のわれを思はぬを知りたるに、なほ通ひ來るは、たゞこゝに養ふ忘れがたみの幼兒の故と覺りては、益々情も薄らぎぬ。二人は表ばかりの夫婦にして、大將はひとり自由に泣きし折さへ羨ましく、今の歎かしかりき。

かくて大將は齋院を音づれては、源氏宮に思をかこち、嵯峨を尋ねては、入道宮

にくどき歎けども、今更いかにともすべからず。竹生島に詣でて、そのまゝに世を遁れんとし、最期の暇乞にとて、齋院に往きて、名殘の琴を彈く。神殿三たび鳴り、異香薫ず。

卷四 大臣の夢に、賀茂大神現はれて、この世に惜しき人なるを、はや〳〵その遁世を止めよと告げたまひ、大將の望も得遂げずなりぬ、

故式部卿宮の女美はしき由を聞きて、得まほしくおもひ、大將はその兄宰相中將に依頼す。されど深く思ひしみたるにもあらず、中將も嬉しけれど深くは思ひたまはじと危めり。また致仕の大納言の女の源氏宮に似たりと聞きて、往きて見れど、思ふに違ひて、大將の日にもとまらず。却りてかの式部卿宮の家を覗ふに、美はしと聞く女のすさびなるべし、箏の音聞えて上手なり。その母と見えて、若々しき人の、幼き兒に書を敎ふる姿の、いたくも心にかなへり。この人の女ならばと、大將は心も進みて、更に中將に迫りたまふ。

母は夫の宮の遺言に依りて、女を入內させせんと計りて、その心がまへせしに、今また大將より御消息あり。兄の中將は、後見なき入內よりも、遺言には背くと

も、大將に許さんが心安しと思ひて、母に勸む。とつおひつ母は考へ煩ひし思の積りてや、病を得て龜山の麓に籠る。大將尋ね往きて、しみ〴〵と望を述べ、物の隙よりかの女を見るに、さながら源氏宮の面影を寫せり、まことはこの女源氏宮の姪なりけり。大將が宮を慕ふあまりにその姪を得たるは、即ち源氏が藤壺の由緣に若紫を養ひたるに出でたること疑なし。

母は死したるが、その忌果して、大將は早くもかの女を堀河の殿に伴ひぬ。乳母危みしかど、その後、情愛の細やかなること類なし。大臣夫婦これを聞きて、などて早くは知らせざりしとて、また厚くもてかしづく。かくてぞ大將が遁世の志は愈〻沮みぬる。

祥瑞しきりに起り、天照大神の神託もあり、後一條院終に位を大將に讓りたまふ。一品宮は今更に世のおぼえも耻かしとて、入内せず、その養女を帝に返し奉りて、幾程もなく薨ず。式部卿宮の女は藤壺といひ、男宮產みて榮えたまふ。帝はなほ源氏宮に御消息絕えず、常磐の尼寂するに當り、遺言して、飛鳥井の君の殘しし書畫をその生みたる姬宮に送りぬ。帝見て懷舊の情に堪へたまはず。また

嵯峨院御不豫なりとて、行幸あり、入道宮と物語したまふことなどにて、めでたく局を結べり。

狹衣の著者は、俗に稱して大貳三位といふ。蓋しその母が源氏の大作あるにより、これに次いで成りたるものは、その子の筆なるべしといふ、淺薄なる想像より成りたる說に過ぎざるべし。而してこの說の起れるところは、河海抄などにあるが如し。抄に紫式部の傳を記して、その中に「後、左衞門權佐宣孝に嫁して、大貳三位、辨局狹衣作者を生ず」といへるを、後人の無識なる、二人の女を一人と誤解して、すなはちこれを狹衣の作者となせるなり。姉の大貳三位名は賢子、高階成章に嫁す、成章は正三位太宰大貳にして、その歌、後拾遺集に入れり、世呼んで欲大貳といふ。賢子もその夫の職によりて、大貳三位の稱ありしなり、後一條天皇の乳母なり。妹の辨の局また越後辨といふ、左衞門兼隆に嫁し、後冷泉天皇の乳母となりき。かゝれば河海抄に說くところは、狹衣の著者は妹の辨の局なりといふにあることを辨へなば、大貳三位といふ俗說の謬妄全く信を置くに足らざるを知るべし。さらば辨の局といふを以て當れりとするか。抄の前後の記事の

牽强附會なるより考ふれば、いまだ眞なりとすべからず、況や狹衣の作者については異說の存するをや。

僻案抄に、古今集の難解の語といふをがたまの木を解釋して、狹衣を引き、「この物語禖子内親王（前齋院）宣旨作りたりときこゆ」といへり。禖子内親王は後朱雀天皇の第五の皇女、寛德三年三月、卜定せられて齋院となりぬ、世に六條齋院と稱す。（賀茂齋院記）性和歌を好み、屢〻その第において歌合あり、宣旨は源賴國の女にして、齋院に陪侍す、また和歌をよくし、後拾遺、新勅撰などの撰集にその作を載せたり。寛德三年は後冷泉天皇の治世のはじめ、宣旨もその頃の人にして、大貳三位より二三十年は若かるべし。果して狹衣をその作なりとせば、永承、天喜の頃に成りたるものならんか。

僻案抄は藤原定家の作と稱す。されど梨本集などには僞書として斥け、大日本史もこれを取らず。梨本集が歌道に對する識見は卓拔なれども、學ぶところ博からざれば、書中の事實は據るに足らず、大日本史また何によりて論を立つるかを示さず。よしやこれらの說を用ひて、定家の作ならずとすとも、その鎌倉時

代に出でて、河海抄に先だてるものなることは、疑なし。（光厳院御記、元亨二年三月の條に僻案抄についていへり）されば狹衣の著者を大貳三位といふは、一噱に値するのみ、辨の局といふも信じがたく、余はむしろ六條齋院の宣旨の手に成れりといふに傾く。本書のうち、源氏宮を齋院として、賀茂のことを記したること多きも、故なしとせんや。書中また一條、嵯峨、後一條諸院の禪讓の事をいへども、いづれもいさぎよく位を去りたまひて、院中の政事といふことは、聊かも筆紙の間に見えざるを思へば、必ず院政以前のものなるべし。しかも文體を察するに、源氏物語を隔ることとやや久しきものならざるを得ず。これらによりて思ふに、たとひ著者はかの宣旨ならずとも、狹衣は宣旨のありし頃、すなはち永承、天喜前後の作とすること、大抵誤なかるべし。

狹衣が源氏に得たること多き由は、既に梗概のうちにも述べたり。源氏のほかに書中に名を揭ぐるもの、大津の王子、あしびたくや、隱れ蓑、大井、からくに、かはほり、袖ぬらす、玉の緖、ふせご等あれば、これらに倣ひたるところもありしならんと思へど、今知りがたきを如何せん。げにや物語の盛運は源氏に極まりぬ、狹

衣これに次いで著名の小說なるが、到底、源氏の域に近づくべからず。胸中自信なく、漫に古書を仰いでこれを摸擬し、自ら世態人情を觀察するを忘れたり。婦人の評論も見ゆれど、源氏の說を繰り返すに過ぎず。寫すところの人物、たゞ容貌の相違を說きたるのみにして、性質の異同を示さず、出場の男女源氏の如く多からざるに、なほ漠然として彼此の區別なし。男子は、狹衣大將のほか、如何なる人も、讀み終りて腦中に印せず、大將さへ厭世の念絕えずといへるだけにて、何の特長もなき人物なるが如し。女子また數人あれども、殆ど性格の如何を知らず、源氏宮が大將の愛を容れざる動機も知るべからず、入道宮が大將に對する眞情もまた描かれざるなり。案ふにこはひとり狹衣の著者を咎むべからず、一は當世の風俗の然らしめしなり。女子の嬌飾は年毎に甚し、ことさらに冷靜を衒うて、男子に對して感情を露はさざること、旣に前代より然りしが、この風は漸次倍加し、天眞の性を害ひ、色なく澤なきこと、剪綵の花の如く、引きこみがちにして、活動の氣なく、一顰一笑も人に見らるゝを厭ひて、殆ど個人の感情の存するやあらずやを疑はしむ。かゝる時に處して、狹衣の著者はおのづから不

利なる位置に立ちぬ。されば宰相中將の妹が幸運も、當人の感懐は聊かも寫さず、その乳母の辨の言を借りて、わづかにその事情を知らしむるが如き、狡猾なる一種の側寫法にして、勢またこの手段に出でざるを得ざりしなり。

文體は、源氏一たび出でて、後世の物語の模範となりぬ。狹衣またこれに傚ひ、諄諄として委曲を盡さんとして、却つて餘情を沒する嫌多し。源氏は丁寧反覆に過ぎたりとはいへ、またよく詳略の法に注意し、幽玄なる詩的筆致のいふにいはれぬ趣あり。末流よくその源を解せず、描寫の露骨に過ぎて、時に淫猥に流るるは、源氏以後の小說の弊なり。狹衣に、源氏宮と女二君とを比較して、とらへたる腕カヒナ、肌付を說き、女二宮の乳房の黑みたるによりて懷妊を知らせたるなど、決して紫式部の爲さざるところなり。神佛の靈驗、物の怪の出現を擧ぐるは、いづれの書にも見ゆれど、狹衣に、天稚御子、賀茂大神、天照大神、普賢菩薩の現はれ、また飛鳥井の君の幽靈の出でたるなど、何等の莊重幻怪の光景もなし。源氏に、舊き院に物の怪の夕顏を惱ませる、葵の上の枕邊に六條御息所の生靈の立ちたるなど、心の迷か、現のわざか、彷彿として眞假の境に夢遊し、今日の讀者をして

も毫も非理の感を懐かしめざるに比すれば、優劣果して如何ぞや。論じもて行けば、狹衣は庸劣にして取るべきところなきが如しといへども、いまだ必ずしも然らず。源氏は事實の變化少きに、出場の人物多く、複雜に過ぐるの感あり。狹衣は飛鳥井の君より移りて、その遺子の關係より一品宮を引き出し、今姫君の要なしと思ひしに、これより飛鳥井の君の消息を知るなど、彼此連絡し、源氏の如く長篇ならざるだけに、前後またよく整頓したり。結構の上に工夫を凝し、變化に富みて、しかも統一の妙あるは、蓋し源氏よりも一歩を進めたるものなるべし。憐むべし、月輪ひとり天に冴えて、衆星影を潛む、五十四帖の大作前にあり、これが爲に壓せられて、狹衣以下の小說はその價ほども賞美せられず、また不幸なるかな。

第十四章　第三期の末の小說(一)——濱松中納言

狹衣と殆ど同じ頃の、作なるべく、名聲また相如きたるものに、濱松中納言あり。

この書流布の本甚だ少く、寫本を以て傳はるものにも、完備の本ありやを知らず。刊行の書は丹鶴叢書に載せたるもの、明治に至りて日本文學全書および國文大觀に收めたるものなどあるのみ。丹鶴本はすべて四卷あり、毎卷を上下に別つ、誤脫なきにあらずといへども、比較的に正確なり。文學全書本は校合甚だ粗漏、假字を漢字に改ためる、時に語釋を施したる、いづれも草を打つて蛇を出したるものに過ぎず、卷頭の解題もまた誤れり。

濱松中納言また御津の濱松といふ、今四卷を存するは完本にあらず、前後に脫漏ありて、中部はもとのまゝに傳はれるなるべし。はじめの脫漏せるところは、一卷ばかりありしならん、その間の記事の顚末は詳細を知るべからずといへども、後文によつて試みにその大體を推さんか。ある宮に男子一人ありき。その子なほ幼き頃、父宮うせぬ、北の方せん方なく、子を伴ひて左大將なる人に嫁す、大將に姬君數人あり、その大君生長するに從ひて、容貌輝くが如し。かの伴ひし男子も年々に美はしさ增り、公のおぼえもめでたく、官は進みて中納言に至りぬ。遠くて近きは男女の間、同じ家に育ちたるうら若き二人は、下に通ふ心やあ

りつらん。その頃、また式部卿なる色めきたる若宮ありて、大君を得んと望めり。大將はこの望を叶へんとし、北の方は思ふどちなるを、己が生める中納言に許さばやと思ふ。おのづから物の隙ありて、中納言は姬君に契りぬ。大將これを憤り、北の方の所置にも慊焉らず、大君をさしおきて、妹の姬君だちに式部卿宮等を壻取す。中納言養父の憤に席安からず、世をあぢきなく、亡父の宮のしきりに思ひ出でらるゝに、宮は、今、生を替へて、唐の帝の第三の皇子になりぬと、占ひ告ぐるものあり。戀しさ限りなく、三年の暇を請ひて、唐に渡りぬ。大君は父には逆遇せられ、中納言は居らずなり、悲歎やる方なくて、尼となりぬ。その腹に女子一人ありと、いふにあるが如し。

卷一　次に今の卷一は來る。中納言恙なく唐に着けり。朝廷に伺候するに、かの國の公卿これに並ぶべきは一人もなく、衆みなその才器に服す。第三の皇子は母后と共に、高陽縣といふ處に住みたまへりと聞きて、中納言たづね往きて會ひぬ。またその母の后をかいまみて、恍惚として故鄕なる大君の事も忘るゝばかりなり。昔この后の父の大臣遣使として日本に渡りき。その頃、上野宮といふ

皇子筑紫に流され、配所に薨じたまひしが、その姫君は乳母につきてそこに留まりけるに、かの唐の使語らひ寄りて、女子一人設けぬ。五歳の時、幼兒を伴ひて使は唐に歸る、この女すなはち今の后なり。時に一の大臣の女一の后となりて、勢强く、かの皇子の母の后は帝の寵愛は限なけれど、なほ憚りて高陽縣にあるなりけり。さるほどに一の大臣の五の君中納言を慕うて、戀の淵に沈む。父愛に溺れて、その女を中納言に侑むれども、此方は心もとまらず。后のみゆかしくて、測らずも夢に齊しき一夜の契を籠めぬ。若君一人いできぬ。日本にも思ふ人あり、唐土の事も悲しけれど、三年の期限の切れたるにせん術なくて、中納言はこの若君を伴ひて、歸航の船に乘りぬ。

卷二　中納言は筑紫に着きぬ。時の大貳一人の女をもてかしづきけるが、かゝる貴人のおはせしこそ幸なれと、饗應の手を盡し、その女を奉らんの意をほのめかししかど、中納言は今は唐の一の大臣の思はん事も憚あり、かの國より送の人も來りしをと、辭して後會を期す。さて京に歸りて、忘るゝ隙もなかりし尼姫君(即ち大君)と共に棲み、淸き交ながら親交わき目もふらず。父の大將孫女の

愛らしきに、憤の念も和らぎたるさへあるに、式部卿宮に比して中納言の志の厚きを喜びぬ。中納言は漸く心おちつくにつけて、唐の后の委託を果さんとす。后は常に郷國に止まりし母を戀ふる情に堪へず、嘗て渡唐して日本に歸りし聖(ヒジリ)につけて音信を傳へしが、雲煙茫々、その後の消息を知らず、よりて更に中納言に書を託せしなり。書中に曰く、中納言を見ること、吾を見るが如くせよと。さて中納言はかの聖吉野にありと聞きて、そこに向ひて出で立ちぬ。

卷三　聖は吉野の奥に行ひすまし、唐の后の母君もそこに殊勝にくらせり。母君は唐の使に別れて後、筑紫より京に上りしに、帥宮かいまみて通ひたまひき。今更かゝる契もいかゞとて、尼になりて、この山に籠りしが、もとの契の種を宿して、女一人設く。初は厭はしくも思ひしが、漸う姿のねびまさるにつけて、唯一のほだしとなりて、往生の妨なりけり。中納言は尋ね着きて對面あり、尼は后のゆかりとて、くれ〴〵も姫君の上を頼み奉る。こゝにかの大貳の女は、その母伴ひて都に上り、大將殿の衞門督といふに緣を結びぬ。中納言これを聞きて思ひ出でて、密かに通ひ、女はもとより中納言に心を寄す。その後、重ねて中納言は吉

野を尋ね、八月十五夜に姫君の琴の音を聞きて、唐の人を思ふこと切なり。

巻四　帝中納言に承香殿女御の腹の姫君を降嫁せんとしたまふ、中納言これを辭して聖慮を傷け、官位これより沈滯す、されど顧みず。十月また吉野を訪ひて、はからずも尼君の臨終に會ふ、紫雲たなびき、往生いとめでたし。後更めて中納言は吉野に往きて、姫君を迎へ出でぬ、容貌美はしきことゝえも言はず、聖誡めて曰く、三年經て、姫君の二十になるまで、妻とすること勿れと。さて京に伴ひ歸りて、唐にて設けたる子をこれに預け、かの后の事も始めてうち明けて、もろともに思ひやりて、涙にくれぬ翌年、后この世の緣盡きて、天に生れぬと、夢に見えたり。かの式部卿宮は中納言と尼姫君との中をさへ妬しと思へるに、また山里よりよき女捜り出でたりと聞きて、いかでかいまみんと、折を求む。時しも吉野の姫君瘧を患ひて、淸水に籠りしを、ゆくりなくも覗ひて、恍然自失、何とかして率て隱してんと思へりとなん。

今の濱松中納言の闕卷たることは、筆を起せる樣の發端とも見えず、前に脫漏あるによりても、直ちに知りぬべし。また拾遺百番歌合に、この物語の歌とて十

五首を引きたるうち、二首は今本に見えず、風葉集に引きたる二十八首のうち、九首は見えず。さればこの二書の出でたる頃は、なほ濱松が今本よりも多きものなりしこと、明かなり。黒川春村は、今本四巻なるは、第一巻散佚したるものにて、まことは五巻なりしが如しと論じたり。（古物語類字抄）第一巻の散佚したるはいふまでもなけれど、余は終の巻もまた亡失したるを信ず。無名草子に濱松の事を記して、「また吉野山の姫君もいと〳〵惜しき人なり、式部卿宮に盗まれて、思ひ餘るにや、中納言に告げさせたまへといへることそ、あさましくいとをしけれ」といへるを見れば、古は別に吉野の姫君の盗み去られしことなど記せる末の巻のありしこと、疑なし。風葉集にこの物語の歌を引いて、

人を行方しらずなして歎き侍りける頃を、花の風になびくを見て、

濱松の中納言

尋ぬべき方しなければ、ふる里の尾花が袖にまかせてぞ見る。（雑一）

何となく見なれ侍りける女を、行方しらずなして侍りける所にて、月を見て、

濱松の中納言

思ひいづる人しもあらじ、故郷に心をやりてすめる月かな。雜二

といへるは、必ずまたこの末の卷にありしものと思はる。同し集に、また吉野の姫君の歌を引きたる小序に「吉野より出でて侍りける頃、花の散るを見て」とあるを、春村は「こはもし今本四の卷の內なるべくやとも思へど、更にそれとおぼしきも思ひよらねば、これはた首卷のうちなるべし」と論じたるは、博洽渠の如きにも似合はしからぬ僻說ならずや。かゝることの首卷のうちにあるべしや、何ぞ一步を進めて、末卷の闕けたりといはざりしか。

こゝに梗概に示せるだけにても、濱松中納言が源氏に據りたる痕跡は歷然たり。されどこはひとり濱松等の小說に咎むべからず、旣に源氏のみにてもその正篇と宇治十帖と趣向の重複せるところなきにあらず。試みに見よ、源氏と頭中將との對照は、一轉して薰大將と匂宮との對照となりぬ。また源氏が藤壺の中宮を慕うて、煩悶の情に堪へず、遂に緣に繫がるゝ若紫を求めて、心を慰めたりといふと、薰大將が宇治の大君に後れ、中君を得ず、やう／＼その異腹の妹浮舟の君を得て、なき人の記念として愛せりといふと、基くところはさながらに

同じ。但し藤壺は契るべからざるに契り、大君は契るべくして契らず、紫の上は運一度定まりてまた動かず、浮舟は寄る邊定めずさまよふ。個々特立、よく特別の性格境遇を描き別けたれば、彼此混雜せず、同根に生じても紅白判然、讀者をしてその出るところを知らざらしむ。これすなはち紫式部が伎倆の卓越したる所以なり。

惜しいかな、濱松中納言の如き、紫式部の伎倆なく、換骨奪胎の法を覺らずして、摸擬の跡一々數へ見るべし。主人公の中納言は源氏と薫大將とを混和して一人としたるなり。その唐の后に對する關係は、源氏が藤壺に對する關係に等し。僅かに一夜ばかりの契の後は、かき絶えて互に煩悶すること、何ぞよく似たるや。藤壺は己の准母なりといふ緣によりて近づき、唐の后は再生の父の母なりといふ緣によりて近づく、その罪過の種を宿ししこともまた同じ。唐の一の后は源氏の弘徽殿の大后、一の大臣は二條太政大臣、五の君ぞ朧月夜内侍なる。朧月夜は花の宴の夜はからぬ契の出できしに、五の君は紅葉の賀の折に中納言を見そめたり。吉野の尼君は即ち宇治の八宮なり、その姬君を託すること相類

す。更に吉野の姫君の唐の后のゆかりなるは、源氏が藤壺のゆかりに若紫を求めたるに通へり。源氏が若紫を育てて、様かはりたる娘ぞと思へるが如く、中納言は吉野の姫君をあつかひて「まことの妹は限ありて、思ふまゝにもえ身に近うかゝらざらましを、これは様異に珍らしう限なき思をかはして」といへるが如き、明かに準據せるところを自白せるなり。なほ吉野の姫君が浮舟の君にも基くところあるは、いふにしも及ばず。中納言が大貳の女を衞門督のものとして、更にこれを惜めるは、薫大將が宇治の中君を、己がのどかなる心から、匂宮に得られたると、やゝ趣は違へど、また相類せり。大貳がその女を中納言に奉らんとするは、源氏の明石卷に通へり、大貳夫妻はそれ〳〵明石の新發意老夫婦に似たり。かくて薫らしき中納言は浮舟のやうなる吉野の姫君を得たれど、なほ心靜かに思へるに、匂の如き式部卿宮ありて、これを奪ふところ、吉野と宇治と土地のかはれるのみにて、事實は彼此さながら同じからずや。なほ狹衣を以て濱松に比するに、彼の入道宮と、此の尼姫君と、出處の類似せるを見る。その親の憤るところ、はかなき契に子の生るゝところ、薙髮するところ

の如き、これなり。入道宮は離れ棲みて、あくまで大將を拒み、尼姫君は同居して相親めりといふ點は相反す。されどこれらの類似は或は偶合にてもあるべく、こゝに强ひて論ずべきほどの事にもあらじ。たゞくりかへし述ぶべきは、源氏以後の小說が源氏を摸倣せることとなり。濱松一篇は要するに宇治十帖を變形せるもののみ、而して十帖は浮舟が左顧右眄の衷情描き得て餘蘊なきに、濱松はさる趣あることとなし。中納言は薰大將よりもむしろ源氏に似たりと覺ゆれど、性情の描寫十分ならず。

濱松中納言の長所は、書中の事實の緊縮して、冗漫ならざるにあり。闕けたる首卷に渡唐以前の事を記し、卷一に在唐中の事あり、二は歸朝の後、尼姫君との關係、三は吉野の訪問、四は吉野より姫君を迎へ出づる事を寫して、秩序明かに、彼より此と移りゆきて、その間に無要の人物を容れず。たゞ大貳の女などは、源氏に擬する餘に、已むを得ず引き出でたるやうにて、あらずもがなと覺ゆ。されど槪するに人物も多きに過ぎず、事實も複雜ならず、時代も數年間の事に留めて、前後整頓したる好小說なり。行筆また體を得て、端午にはかく、重陽にはかくな

ど、年中行事を繰り返さず。他の物語には、子産みたること多く、産養しか〳〵など、女房の日記の如く煩はしげなるが少からざるを、これにはさることなし。しかも纏綿たる情緒描き出でて、談笑涕泣の聲を聞くが如きは、狹衣にも勝れり。これを單獨に見ば、事理を別ち、人情を盡し、波瀾あり、變化ありて、なか〳〵に價値あるものといふを憚らず。さばれ物の評價は單獨に見らるゝものにあらず、他と比較して後、衡定せらる。濱松佳作なりといへども、前作を摸して出藍の妙所なくば、その價値の半ばはその範とするものに奪はれざるを得ず、余甚だ狹衣、濱松等の爲に惜む。

著者みづから既に源氏の摸寫に止まるを疚しとし、力めて事實に變化あらしめて、補綴の跡を覆はんとす。濱松の一半の舞臺を唐土に取りたるが如き、またこれが爲なり。されど內外の交通稀に、帝都に蟄伏して、その他を知らざる社會にありては、客觀的描寫足らずして、唐の朝廷を寫すこと、全く平安宮城に同じ。洞庭の紅葉の賀といひ、六月祓といひ、いづれも日本の風俗のみ。その唐と日本との男女の樣などを比較して、我は「いみじう飾りつくろふ」に、彼は「ありのまゝ

にいと慥か」に物いふといひ、また「日本には下の通ひこそ亂れがはしくもあれ、后、女御の前にてかやうになど仰せらるべくもあらぬを、この世は嚴しながら、さすがにしどけなくこそ」といへるが如きは、もとより唐人の性質をかくの如しといふにはあらで、當時わが國の風、禮儀繁縟にして虛飾、全く自然の態度を失へるに慊焉らず、これに反照せしめんが爲に、この言ありしものならん。しかるを或はこの書の著者を論じて、「まこと漢土へ渡りたりし人の作なるか、はた又留學僧などの歸り來りしものにつきて書けるものか、共に定かならず」（日本文學全書）といへるは、唐の一字に拘泥して、無要の說を述べたるものなり、實にかの國の樣を見聞せるものならば、何ぞ描寫のかくの如く淺薄ならんや。

さらば濱松中納言の著者は如何。更科日記の奥書に、この日記の著者のことを簡短に記して、「夜半の寢覺、御津の濱松、自ら悔ゆる、朝倉などはこの日記の人の作られたるとぞ」とあり。濱松の著者を論ずるには、まづ更科日記について說かざるべからず。

第十五章　更科日記

更科日記一卷、扶桑拾葉集卷六および群書類從紀行部に收む、類從本は事實を傍註して裨益少からず、單行本には元祿十七年の刊本および天保五年の西門蘭溪が校本二冊あり。校本は文章の錯亂を正し、標註を施す。明治以後發刊の書には、文學全書本のほかに、二十五年、佐々木信綱氏の校註出で、三十二年、關根正直氏の略解成る、略解は重ねて錯亂の章を訂正せり。近頃また國文大觀のうちに收む。

日記の著者を菅原孝標の女とす、孝標は道眞の曾孫なる資忠の長男にして、代代、文學を以て門戶を張る。孝標に二人の妻あり、一人は藤原倫寧の女にして、蜻蛉日記の著者と姉妹の關係あり、その腹に更科日記の著者は生る。一人は從五位上中宮大進高階成行の女にして、上總大輔と稱す、その後一條天皇に奉仕せるは、蓋し孝標に離緣せられて後のことなるべし。孝標四十五歲にして上總介となりて、任國に赴く。著者幼にして生母の手を離れ、繼母と共に上總に伴はる。

止まること五年、任滿ちて一族京に歸りぬ、即ち寛仁五年にして、この時、著者十三歳、日記の事實はこの歸京の旅に始まれり。鳥兎匆々、十一年(長元五年)、孝標常陸介に任ず、著者この度は生母と京に留まる。その後、後朱雀天皇の中宮嫄子に事へ、中宮薨じて、その腹なる祐子内親王に侍す。されどその父因循にして、宮仕を喜ばざれば、數年にして辭して家に籠りぬ。三十歳を過ぎて、橘俊通の妻となり、幾程もなくして子仲俊を生む。俊通は但馬守爲義の四男なり、天喜五年、信濃守となりて任に就きしが、著者は京に留まれり。その翌康平元年、俊通任國より歸り、年を移さずして病んで卒す、時に享年五十七、著者は五十歳にして、最愛の夫に別れ、哀傷に沈める時に、日記は終りぬ。さればこの日記は、寡居の淋しさに、つれ〴〵と過ぎこし方を思ひ出でて記ししものなるべし。篇中の記事の、四十年に近くして、僅かに一卷なるを見ても、大體を寫して簡畧なるものなるを知るべし。さてその記事は如何なることを旨としたるか。まづ著者が最大の旅行なる西上に筆を起して後は、物詣のみ多し。近くは清水に、北に上りて鞍馬に、逢坂越えて石山に、大和に向ひて初瀬に詣でたること、そのほかは東山に籠れる

こと、太秦、西山に籠れること、宮仕のことなどを、篇中の主眼としたり。これをしも更科日記といへるは、その夫信濃守となりて任國に下りしが、その歸京の後、ある夜、甥なる人の尋ね來りしに、著者詠じて曰く、

月も出でで闇にくれたる姨捨に何とて今宵尋ね來つらむ。

と、なほ篇中月をよみたる歌數首あり、これらによりて書名は出でたるなるべし。（西門氏校本の說による）

更科日記を讀みて、著者の性行を察するに、殊に著しく覺ゆるは、その幻想に耽溺せしこと是なり。幼きより昔物語を好み、上總にありて光源氏の事など、所々、人の話に聞きて、「等身に藥師佛を作りて、手洗ひなどして、一間にみそかに入りつゝ、京に疾く上せたまひて、物語の多く侍るなる、ある限見せたまへと、身を捨てて額をつき祈り申」したりき。京に歸るや、否や、母に促りて物語求め、源氏の斷片を繙きては、そのつゞきの愈〻ゆかしく、漸う叔母より源氏五十よ卷を櫃に收め、在中將、遠君、芹川、しらゝ、淺水などを一袋にして、とり添へて贈られたる嬉しさ、譬へん方なし。晝は日ぐらし、夜は目の覺めたる限、閉ぢ籠りて、讀み盡し、讀み

返して、その頃のはやりなる讀經も習はず、この樂に比ぶれば、后の位も何かせんと思へり。時にはわが影を顧みて謂へらく、この姿はなほねび整はざるのみ、妙齢にもならば、艶麗にして漆髮長く曳くこと、物語の美人の如くならんと。しかもかれが憧憬せしところの美人は、相好具足圓滿の紫の上にあらず、みるめなき海人の苫屋を出でての果は雲の上なる明石の上にあらず、槿の齋院は情しらず、雲井雁は世話に過ぎ、玉鬘の行末もゆかしからず、思ひきや、一生浮萍の如き薄倖の佳人ぞ、その夢寐忘るゝ隙なき戀の主なりし。曰く、「いみじくやんごとなき形有樣、物語にある光源氏などやうにおはせん人を、年に一たびにても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里に隱しすゑられて、花紅葉月雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからん御文などを時々待ち見などこそせめとばかり、思ひ續け、あらましごとにも覺えけり。」日記

著者の姉も幻想に滿ちたる人なりき。秋の夜、月明かなるに椽に出でて、つくづくと空を眺め、突然著者に問うて曰く、唯今、行方なく飛び失せなば、いかゞ思ふぞと。また家もなき猫を飼ひ馴らし、これこそ近頃うせたまひし大納言行成の

姫君の生れ替れるなりとて、その名を以て呼ぶに、聞き知り顏に鳴きまつはるとて、著者と共に憐みいたはれり。あはれこの猫は火災に燒け死し、姉はまた産後の惱重く、孤兒を著者の手に殘して逝きぬ。

更科日記にはいかに夢物語の多きよ。當時、迷執の習、夢を信じ、夢を占ひ、源氏物語などにもこれを材料としたるが、殊にこの日記に至りて多きを覺ゆるは、著者が例の幻想より來れるなり。その物語に耽るや、夢に僧ありて、無常の風は人を待たず、一生の大事を忘れて、さもよしなき事を弄べるかなと諭して、讀經を勸めたることあり、清水にては「汝は生前この寺の僧にて、多く佛を造れり」と夢み、石山にては「中堂より御香賜はりぬ」と夢み、また長谷にては「すは稻荷より賜はるしるしの杉」よと、物を投げ出されたる夢を見たることもありき。

さなきだに得るが上にも得たきは人の心、幻想に耽れる身の希望に充ちて、空中に畫ける樓閣の輪奐の莊麗よ。人事意の如くならず、齟齬のみ多き世に、可憐なる婦人が眼前の樓閣は、朝の霜と一棟碎け、夕の煙と一屋飛び、雲霧消散、跡を留めず。さばれかれはその夢物語の示せるが如く、深く神佛に歸依せり。信仰は

希望を生ず、望を失ひて更に望みかくしてかれは失望の闇の中に、常に一點の光明をしたゝめて、その一生を過しぬ。親のこと、夫のこと、己のこと、子のこと、一も思ふが如くならずして、なほ後世に頼をかけたる、その言に曰く、

昔より、よしなき物語、歌の事をのみ心にしめで、夜晝思ひて行をせましかばいとかゝる夢の世を見ずもやあらまし。初瀬にて前の度は、稻荷より賜ふしるしの杉よとて、投げ出でられしを、出でしまゝに、稻荷に詣でたらましかば、かゝらずやあらまし年頃、天照(アマテル)御神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御めのととて、内わたりにあり、帝、后の御蔭にかくるべき樣をのみ、夢ときも合せてしかども、その事は一つかなはで止みぬ。たゞ悲しげなりと見し鏡の影のみ違はぬ、あはれに心うし。かうのみ心に物のかなふ方なうて止みぬる人なれば、功德も作らずなどしてたゞよふ。さすがに命は憂きにも絶えずながらふめれど、後の世も思ふにかなはずぞあらんかしとぞ、うしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、居たる所の屋のつまの庭に、阿彌陀佛たちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやう

に透きて見えたまふを、せめてたえまに見奉れば、蓮華の座の土をあがりたる高さ三四尺、佛の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手片つ方をば擴げたるやうに、今片つ方には印をつくりたまひたるを、異人の目には見つけ奉らず、我ひとり見奉るに、流石にいみじく氣恐ろしければ、簾のもと近くよりてもえ見奉らねば、佛、さばこの度は歸り、後にむかへに來んと、宣ふ聲、わが耳一つに聞き居て、人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼としける。日記

著者が希望は現世に充たされずして、當來に嚮へり。かれはあくまで現實の社會に滿足せず、公家名門の大禮盛儀も趣味を感ぜず、饗宴彈奏たゞ顰蹙を以て迎ふるのみ。かくの如きは、一はその野逸の性より來る。かれは富家の猫たらんよりも、むしろ幽谷の兎たるを望あり。始めて長谷に詣づるや、恰も後冷泉天皇の大嘗會の御禊に際す、折しもあれこの賑はしき都をふり捨ててと、人々のつぶやくも聽かで、大和に向ひぬ。かれは宮中の生活を描かずして、山野の景物を寫し、興趣を社會に發見せずして、ひとり虛無の世界に放浪す。客觀の念頭に上

らず、主觀の紙上に蔓ること、これを更科日記の特色とす。蜻蛉日記は冷秋の蝉と戀に悲み、和泉式部日記は春暖の蝶と戀に狂ひ、喜憂は異なれど、共に社會の中に混じて、自他觸接せるに、わが日記の著者は社會の外に立ち、古物語に己の戀をよせたりき。

更科日記が現實の社會に趣味を感ぜざるは、著者が個人的性格の然らしめたるは固よりなりといへども、また一面は當代の思潮の然らしめたるものにして、著者は離れても離れられざるこの思潮を代表したるものなるが如し四季折々、變化ありてしかも變化なき年中行事づくし、詩歌管絃三昧、社會は花にも紅葉にも飽きぬ、坦々として無爲に過ぎたる生活に飽きぬ、それだにあるに平安宮廷の榮華は極まつて既に傾けり。頭の霜とふりたる翁は御堂殿の法成寺供養を夢の如く語りぬ、瑞齒ぐみたる嫗は上東門院の入内を思ひ出でて泣きぬ。衰へたる世かな、宇治殿は父に及ばず、春日の光も薄らぎたり、月やあらぬ、春は還れど、木の下陰にふりはへたる袖の錦のあせたるをいかにせん。かくして當時の公衆は現實に滿足せずして、ひたすらに過去を憧憬せり。淸紫の二女を

はじめ先代の人は、進んで世に交はり、世を見て、世を寫せり。今やあらず、現在を傾衰の時と見、その時に遇ひたる自己に對する信念も厚からず、今を捨てて古を戀ひ、實境に求めずして粉本に求む。こゝにおいてか倣古摸擬の風は生じぬ。これ既に狹衣、濱松の證するところ、更科日記の著者またこの時風を一身に代表するものにあらずや。

立ち歸りて、濱松中納言の著者如何について一言せしめよ。更科日記の奥書および拾遺百番歌合とともに、この小說を以てまた菅原孝標の女の手に成れりとす。小說と日記とは用意おのづから異に、措辭の上に一々證左を取ること能はずといへども、卷中の敍事は彷彿として、二書が一人の筆なるを思はしむ。更科日記の著者はわけて夢に溺れて、生涯その災祥の前兆たるを信じたりき。濱松中納言また夢を說くこと、他の小說の比にあらず。中納言唐にありて大將の大姫君の出家を夢み、唐の后は吉野の尼君の夢に入り、またその往生は夢によりて中納言に知られぬ。そのほか和歌にも夢の文字の見ゆること多きは、恐らくは日記と同じ人の作れるが爲ならずや。日記の著者は、幼時、源氏物語を讀みて

神往の感に堪へず、わけて浮舟の君を慕うて、女はかく美はしうて山里に籠らましと、思ひたりき。濱松中納言また源氏に準據するところ多く、わけて重複厭ふべきほど、吉野を宇治に擬したるは、著者が心醉の極こゝに至れるならずや。されば余は古來の說を信じて、濱松中納言を以て更科日記と同手に成れるものなるべしといはんと欲す。

日記の類には、次期に及びて讚岐典侍日記二卷あり、源三位賴政の女二條院讚岐の著はせるもの。著者堀河天皇に仕へ、嘉承二年、天皇の御惱より崩御まで、親しく看護し參らししことを寫し、それより新帝鳥羽天皇に仕へて、天仁元年の終まで、すべて二年間の事を記す、冗漫にして活氣なく、取り出でて論ずべきほどの價値もなければ、一言こゝに附記して止む。

第四期　平安末期

第一章　平安末期の漢文學

强弩の末威また振はず、道長以後、藤原氏の勢力は傾きぬ。殊に後三條天皇が英邁の資を以て、力めて政權を皇室に回復せしめたまひしより、攝政關白の顯職も空しく拱手して成を仰ぐのみ。白河法皇以後、院宣の政治は始まりて、面目一新、國家の隆昌期して待つべかりしが如しといへども、それも一時の空望に過ぎず、天に二日なく、國に二君なし、政令二途に出でて、紀綱の振肅は望みがたし。詔勅服從せられず、藤家も官位の高きばかり、この時に當りて實力を地方に伸し、豪族の援助を借りて、勢を帝都に張らんとしたるもの、源平二氏あり。兩雄の並び立つや、相爭はざるを得ず、龍雲を捲き、虎風を起し、機を狙ひ、隙を覗ひ、遂に發して修羅道の大悲劇を演ずるに至りぬ。爭亂の衆庶に災せるはまことに痛むべしといへども、雷雨の大に至らんとするや、草木おのづから動く。旱魃の天、

水涸れ、地蒸し、鬱滯の氣人をして窒息せしめしもの、こゝに至りて冷風颯然、精神頓に揚る。社會が一般に活氣を帶び來り、文學また一新の時に嚮へるも、當然の數にあらずや。

漢文學も久しく鬱屈抑損せるもの、漸く生氣を恢復して、才人彬々として輩出すと稱せらる。院政のはじめに大江匡房、三善爲康等の大家多く、源平爭亂の世また入道信西、淸原賴業等の名流あり。されど大家名流の輩出も一時表面の繁昌に過ぎず、斯道の大勢に對しては、何等の著しき影響もなし蓋し漢文學は外國の所生を以て、そのまゝにわが國に移植せしもの、枳橘地を易へて性を變ず、一時よくこれを養ひ得たりとも、滋味口に甘きもの、遂に江北の有にあらず。遣使留學の事廢れてより、わが國の漢文學は漢文學としての實價を年々に減殺しゆくのみ。平安末期においても、大體の傾向は動かすべからず、多少の移動はありといへども、概するに前期の運命をそのまゝに繼承せるに過ぎず。即ち（一）門閥の弊益〻固定して、菅江二家以外、別に門戶を張るものあり、しかもその家また名門貴族のほかに出でず（二）單調の弊も益〻增長して、思想に變化なく、些々たる

言語の修飾に苦心するのみ、五言は稀にして、七言多く、絶句は稀にして、律多きこと、また前期に異ならず。たゞ時に非常の長篇を賦するものあるは、內容はともあれその勞を多とすべし。（三）儒家の作るところ、多くは佛敎に關するものにして、表白、願文、緣起の類は殊にその力を注ぎしものなり。（四）門閥はその道を專門の業とするものなれど、一方には却つて業を分ちて專門とすることの廢れゆくを見る。詩と歌とはもはや別手にならずして、匡房はまた有數の歌人、經信、基俊はまた著名の詩人なりき。嗚呼、これいづれも前期に述べしところを繰り返すのみ、かくの如きは、當代の漢文學の爲に恥ぢざるを得ず。されど更に一方より見るに、和漢の文學混交し、これが爲に純粹なる漢文學は衰頽の運に向ひたれど、國文學はその影響愈〻著しく、注目すべき變遷を見るに至れり。その文章の漢語を交ふること多く、また漢文の脈絡を傳へて、やゝ勁健なる體を生じたるは、起源はこゝにあらずといへども、發育は實にこの時にありしなり。大鏡の史記の體を學びたるが如き、和歌に敍景の詠の增したるが如き、いづれもまたこの影響に出でたるものにあらずや。

この時代の詩文を見るべきものは本朝續文粹、本朝無題詩、朝野群載を主とす。本朝文粹は前代の詩文を集めて、この期の人は與からず。續文粹十三卷は藤原季綱の撰にかゝり、藤原敦光、大江匡房、藤原明衡の作多く、他は遙かに少し。無題詩十卷（本朝書籍目録には十二卷とす）には題名も編者も明かならず、後人假に稱してこの名あり卷中の作者三十二人のうち、藤原周光の作最も多く、藤原忠通これに次ぐ朝野群載は三十卷のうち、今、二十一卷を存するのみ。文學的作品の外に、公事有職に關せる部門をも含む。三善爲康の輯めたるものなり。そのほか詩文秀句を見るべきもの、永承六年侍臣詩合、天喜四年殿上詩合、泥之草再新、新撰朗詠集藤原基俊撰）類聚句題抄、三十五文筆集等あり。

菅江二家のほかに、藤原氏にして儒學を以て門戸を張るもの三家あり。これらの家に著名の學者ありしは、こゝに始まりしにはあらずといへども、代を逐うて儒家として名あるに至りしは、前期の末よりこの時代までの間にあり。三家とは式家、北家の支流日野家、南家の山井三位の流これなり。

式家には、寛平の頃、佐世ありしが、同じく宇合の裔なる明衡に至つて、更に著は

る。明衡、康平中。東宮學士たり、また嘗て勘解由次官兼出雲守たり。時に和歌をも詠ず。卒去の年明かならずといへども、後拾遺集に、

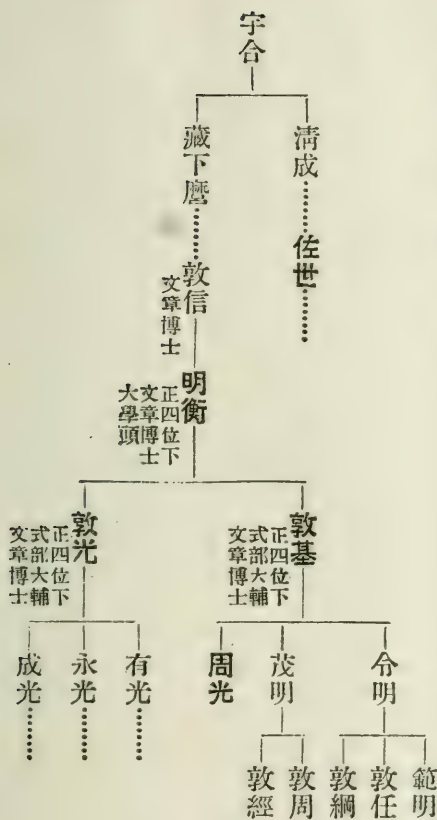
後三條院東宮と申しける時、殿上にて人々年の暮れぬる山をよみ侍りけるに、

藤原明衡朝臣

白妙に頭の髮はなりにけり、わが身に年の雪つもりつゝ。

とあるを見れば、後冷泉天皇の時、既に頽齡なるを知るべく、むしろ前期の末の人なりといへども、便によりてこゝに列ぬ。有名なる本朝文粹は明衡の撰に成る、すべて十四卷、本朝故人の詩文を輯め、編纂の體裁、目錄の次第など專ら文選に倣うて、これを取捨せり。また本朝秀句五卷を輯めたりといへども、今傳はれりや否やを知らず。みづから著はすところ新猿樂記一卷、雲州消息(雲州往來、明衡消息、明衡往來ともいふ)三卷あり。新猿樂記は猿樂見物の人多きが中に、右衛門督といへるものありとて、その三人の妻、十六人の女、女の夫、九人の男子の事を列ね記し、種々の技藝、商估等に關する熟語を集めて、しかも和漢混交の變體に流れたり。雲州消息もまた漢文とはいへ、全く後世の手簡文の體なり。この變

體は敢てこの時に始まれるものにあらずといへども、大家にして顯著なる文例を殘せるは、明衡その人を始とす。後世、玄慧法師の庭訓往來、一條兼良の尺素往來以下、諸種の往來物出でて、少年の習字に便宜を與へたるは、新猿樂記、雲州消息の二書實にその魁たりしなり。

式家畧系

北家畧系
内麿
眞夏
輔道
有國
從三位參議
勘解由長官
後從二位
彈正大弼
廣業
家經
正家
行家
資業
文章博士
式部大輔等
日野三位
法名素舜
實綱
有綱
有俊
有信
實光
實政
敦宗
又歌人
南家畧系
武智麿
永頼
山井三位
能通
歌人
實範
從四位上
文章博士
大學頭
成季
文章博士
大學頭
子孫代々文章博士
季兼
熱田大宮司流
季綱
從四位上
右衞門權佐
大學頭
友實
尹通
實兼
文章生
加賀掾
通憲
入道信西

明衡の子に敦基、敦光の二子あり、共に儒を以て著はる。兄は嘉承元年、六十二歳にして卒し、弟は天養元年、八十三歳にして卒す。林春齋稱して曰く、明衡に二子あるは、小を以て大に擬するに、老泉に軾、轍あるが如きか。かつ敦光齡八旬を超え、當時の老儒として世に推さる、また軾早く歿して、轍長生せるが如きかと。敦基編述するところ、國後鈔は仁和年間より堀河天皇までの歴史にして、蓋し六國史に次ぐもの、桂下類林三百六十卷は諸道の勘文を集めたるものなりといふ。敦光は堀河、鳥羽、崇德の朝に仕へ、當時の詔勅、願文、銘贊等その手に成るもの多し。また本朝帝紀を撰し、攝政忠通の委託によりて、續本朝秀句三卷を輯むといふ。その作品のうち、初冬述懷百韻本朝續文粹卷一は大江匡房の參安樂寺、西府作二首と相並んで、古調の長篇なり。保延元年七月、變異、疾疫、飢饉の行はれたる時の勘文同書卷二は三善清行の封事に比すべし。なほ當時の文壇に有名なるは人麿の影供なりき。その頃、六條顯季柿本人麿の像を寫して、敦光に畫讚を請ふ、畫成りて、元永元年六月、人麿の影供を執行し、和歌を詠じて獻る。その畫讚に曰く、

和歌之仙、受性于天、其才卓爾、其鋒森然、三十一字、詞花露鮮、四百餘歳、來葉風傳、

斯道宗匠、我朝前賢、溫而無滓、鑽之彌堅、鳳毛美景、麟角猶專、旣謂獨步、誰敢比肩、

敦光また和歌をよくし、影供の題水風晩來といへるに應じて曰く、

風ふけば浪にや秋の立ちぬらむ、汀涼しき夏の夕暮。古今著聞集、朝野群載等

敦基の子周光また才藻饒かなり。その撰に拾遺佳句三卷ありといふ。

北家眞夏の裔は、有國に至りて、家聲大に振ふ。これより學問を以て世業とし、儒家として官位の先途最も高きものなりき。有國の子資業は前期の末の人、永承六年、洛南日野の山莊に隱れて、こゝに法界寺を建て、また文庫を構へ、群籍を置く。法界寺の一部は今に當時の面目を存して、世人の往き訪ふもの少からず、法界寺文庫の捺印ある文書また往々傳はれりといふ。日野家の稱はかくして起れり。南家山井三位永賴の流は實範に至りて著はる、實範もまた前期の末の人なり。その子季綱明衡に繼いで本朝續文粹を撰す、また季綱切韻二卷の著ありといふ。季綱の孫に通憲あり、平治の亂を釀成して慘禍に罹れる、一代の才子少納言入道信西、即ちこれなり。

藤原通憲は近衞天皇の朝に薙髮して、圓空といひ、また信西と改む、諸道を兼學

して、當世無雙の宏才博覽なり。後白河天皇の乳母紀伊二位の夫たるによりて、天皇即位以來は天下の政事與からざることなく、寵に誇り才を恃んで、威權飛ぶ鳥を落す。時に大内荒廢年久しかりしを、こゝに營繕の企あり、信西事に從ひ、殿堂諸司纔かに年を踰えて成る。また後三條天皇の例に任せて、記錄所を置き、理非を勘決す。朝儀諸式もその手によりて復興せられたるもの多し。右衞門督藤原信賴また後白河上皇の寵遇篤し、信西その進路を沮む。この二人の軋轢は遂に平治の亂の主因となり、信賴源義朝と兵を擧げ、信西の遁逃せしを捕へ、その首を斬りて獄門に懸く（平治元年）。さきに保元の亂の時、信西敗將の獄を斷じて、冷酷を極めたりき、而して今みづから慘禍に遇ふ、因果覿面、汝に出づるものは汝に歸るとぞ、世の人評しける。信西の編著には本朝世紀、法曹類林、日本紀註あり、傳ふるところ通憲入道藏書目錄あり、以て典籍の藏に富みしを知るべし。入道信西はこの時代の末期の人、これに先だちて、その初期に碩學大江匡房ありしことを忘るべからず。匡房は匡衡の曾孫にして、はじめ平定親に學ぶ、對策及第し、從五位下式部少丞となる。その後、立身思はしからず、不遇を歎きしが、後

三條天皇の東宮たりし時、東宮學士となり、これより官位累進す。ついでなほ二代の東宮に侍讀し、白河法皇の院政を布きたまふに及びて、推戴の功少からずといふ。進んで參議權中納言となり、太宰權帥を兼ね、位は正二位に至る。天永二年、大藏卿に任ぜられ、その年十一月、七十一歲にして薨ず。世に稱して江帥また江都督といふ。

匡房穎悟絕倫、幼より經義に通じ、詩文をよくす、みづから記して曰く、予四歲始讀詩、八歲通史漢、十一賦詩、世謂之神童（暮年詩記）と。關白賴通の平等院を建つるや、土御門師房と宇治に往きて地勢を相す。大門の位置北面より外なけれども、古來その例を知らずとて、賴通難色あり。匡房時に年十一、師房と同車せるが、答へて曰く、天竺にては那蘭陀寺、震旦にては西明寺、日本にては六波羅密寺、いづれも北面なりと。衆その博聞に驚く（古事談、十訓抄）。承曆中、高麗王病あり、わが國に名醫ありと聞きて、牒狀を送りてその派遣を請ふ。文辭禮を失へるものあり、廷議これを拒絕するに決し、匡房をして返牒を記さしむ。その中にいへるあり、曰く、雙魚難達鳳池之浪、扁鵲豈入雞林之雲と、世傳稱す（江談抄、十訓抄等）。その源義家に兵法を敎へ

たる逸話の如きは、普く人の知るところなり。

匡房作るところの詩文甚だ多し。狐媚記、暮年詩記、遊女記、傀儡子記、洛陽田樂記、對馬貢銀記、筥崎宮記、續本朝往生傳、本朝神仙傳および願文緣起の類、載せて朝野群載、群書類從等にあり、參安樂寺の一首（本朝續文粹卷一）は、唐宋またかくの如き長篇は稀なりと稱せらる。千句萬語列ね來つて名將の兵を率ゐるが如く、文字の豐富なる、運筆の自在なる、まことに當世の一人と推すべし。たゞ匡衡に繼いで拙速蕪雜の弊は免れずといへども、和漢の典故に通じ、儀禮の典範を示ししが如き、また多とせざるべからず。江家次第二十一卷（今十六、二十一の二卷を逸す）は有職の書として、源高明の西宮記、藤原公任の北山鈔にもまさりて完備せるものなり。江談抄はその談話を門人の筆記せるもの、江記はその殘闕を存し、高名錄は傳はらず。

匡房また和歌をよくして、その名高かりしが、多作雜駁の弊は詩文に同じ。その家集、在世の時は朧月集と名け、薨後、明月集と改めたり（二十二社註式）といへど、今ありや、否や。代々の撰集、諸種の歌合に、その詠少からず。詞花集の撰あるや、卷頭の歌

はすなはち匡房の吟なりき。

氷ゐし滋賀の唐崎うち解けて、さゞ浪よする春風ぞ吹く。

高砂の二吟また世に稱せらる。

高砂の尾上の櫻さきにけり、外山の霞たゝずもあらなむ。

高砂の尾上の鐘の音すなり、曉かけて霜やおくらむ。

匡房の頃は文人輩出の時代なり。そのうち匡房と對立し、編纂の功を成して、後世に裨益せしものを三善爲康とす。三善氏は小槻氏と共に算道の家なり、爲康その家に出でて、詩文をよくし、自ら稱して槐市老翁といふ。朝野群載はその撰にかゝる、ほかに編述するところ、續千字文、童蒙頌韻、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、懷中曆等あり。明法の家に出でたる中原廣俊、惟宗孝言また詩文に名ありき。

皇族には匡房と同時に輔仁親王あり、後三條天皇の第三の皇子にして、詩歌に秀づ。下つて關白忠通、左大臣賴長共に關白忠實の子にして、和漢の學に通ず。忠通に詩集および法性寺關白記の著あり、また楚忽鈔の名を存す。賴長は台記最も著はる、自ら經綸の才を以て任じて、詩歌を屑しとせず、傲慢にして常に兄を

凌ぐ。衒學誇才、兄弟軋轢して、保元の亂これが爲に激成せられたりき。

源平時代の末期に淸原賴業あり、淸原氏はまた儒を以て家を立つるものなり。賴業は祐隆の子、正五位下文章博士となり、高倉天皇の侍讀たり、文治五年、六十八歲にして卒す。その禮記を讀むや、直ちに本經に就いて解し、古註は斥けて用ひず、宋の朱子と時を同じくして、見るところ東西暗合す、後人その識見を稱す子孫祠を嵯峨に建てて奉祀す、後嵯峨天皇車折大明神の號を賜ひき。子に良業あり、爾來代々永くその業を襲げり。

要するにこの時代の漢文學は、才人輩出、一時の隆盛を見たりといへども、その隆盛や、數においてして、質においてせず、形影相追ひて、浮辭華語を列ぬるのみ。幕府創立の後はこの隆盛も頓挫してまた立たず、專門家流が門前雀羅を張りて、空しく荒落の運を歎ずるばかりなりき。そも〳〵詩文が前代より次を逐うて墮落したるは、再三これを說けり、さらばこの時代において取るべきは何ぞ。文人が多くは編纂の業に力めたるは、前揭の記事これを證す。今や創作の時代にあらずして、蒐集の時代なり。世人は自己の力を信ぜず、自らその才の群を拔

けるを認むとも、そは現世の社會に對してのこと、古人に對しては到底及ばずとす。時は下れり、おのれ著作するはいまだし、まづ前者の軌範を知らざるべからず、こゝにおいてか古詩文集の撰あり、典例古實の書あり。ひとり漢文におい て然るを見るのみならず、國文においてもその傾向は毫も異なることなし。次に和歌に先だちて、假名の散文に就いて述べしめよ。

第二章　今昔物語

上下貴賤ともに文明の化に霑ひ、德澤四方に遍き時は、創作と編纂と併せ行はれ、或は構想措辭に力め、或は訓詁考證に勵み、種々の方面に文藝の發達を見るを得べしといへども、一般の趨勢なほ一方に傾くことなきを得ず。まして文化の布くところ社會の一部に限られ、文筆の徒いづれも同じ境遇に浮沈する時、ひとり文學に變化を求むとも得べからず。かくして平安末期は概するに創作力衰微の時代なり。漢文學に本朝文粹、朝野群載の類あるが如く、國文學に、歷史

として榮華物語、大鏡あり、雜錄として今昔物語あり。まづ今昔物語を說くべし。』
今昔物語は章每に「今は昔」の句を以て起したれば、この稱あり、一に宇治大納言物語といふ。すべて三十一卷、今その數卷を闕く。天竺、和漢に涉りて、珍事異聞を輯め、類によりてこれを別てり。卷一より卷五までは天竺の部なり。そのうち一、二、三は釋迦の傳記を旨とす。四は佛後と題して、涅槃の後、佛弟子の進退より阿育王の事など、いづれもまた佛敎に關することを記し、五は佛前と題して、釋迦、提婆等が前生の事などを記す。卷六より卷十までは震旦の部なり。そのうち六、七は佛敎と題して、支那にこの敎の傳來せしことより始めて、すべて佛敎に關することを記す。八は佚して傳はらず、九は孝養と題したるが、これに合へるは數個條に過ぎず、他は宿報の事にて、地獄に墮ちてまた娑婆に歸れる話殊に多し。十は國史と題して、支那の史譚を集めたれど、莊子の寓言なども少からず、わけて後半は歷史的價値なき雜話多し。卷十一以下は本朝の部にして、そのうち卷十一より卷二十までは佛敎と題す、十八闕けたれど、もとよりこれに漏れざるべし。十一は傳法および佛寺建立の事を記し、十二は諸法會の起源と近代名

僧の傳記とを述べ、併せて佛敎修持の功德を記して次卷に接す。十三は專ら法華經の功德を說き、十四これに次ぎ、なほその他の經文陀羅尼の功德をも說く十五は往生の事歷、十六は觀音の利益、十七は諸佛殊に地藏の利益を述ぶ。十九は名ある人の出家せる事を記し、また佛物私用の罪報、孝養の事、鶴が報恩の話など、佛敎に關する雜談あり。二十は天狗、外術、宿報、現報の事を記す。二十一は闕け、二十二は大織冠以下、藤原氏の事のみ記して、僅かに八節あるのみ、二十三ははじめに歷史上著名の譚一二を載せ、その他は武勇强力の事を記す、蓋し二十二、二十三はもと一卷なりしが、別れしなるべく、從うて今昔の卷數は三十卷なりしなるべし。（二十三に大織冠と題せるに、大織冠の事は却つて二十二にあるを思ふべし）二十四、二十五は世俗と題し、二十四は醫療、陰陽、管絃、詩歌の諸道に堪能なる人の事歷を集め、二十五は合戰、爭鬪の事を記す。二十六は宿報と題して、はからずも災厄を免るゝこと、ふと死ぬること、人身御供のこと、人知らぬ島のこと、思はぬ財寶を得たることなどを記す。二十七は靈鬼と題す。二十八は更に世俗と題して、興言、利口、滑稽の振舞を旨とし、時に怪異の事もあるが、それさへ滑稽の趣味を含めり。二十九は惡行

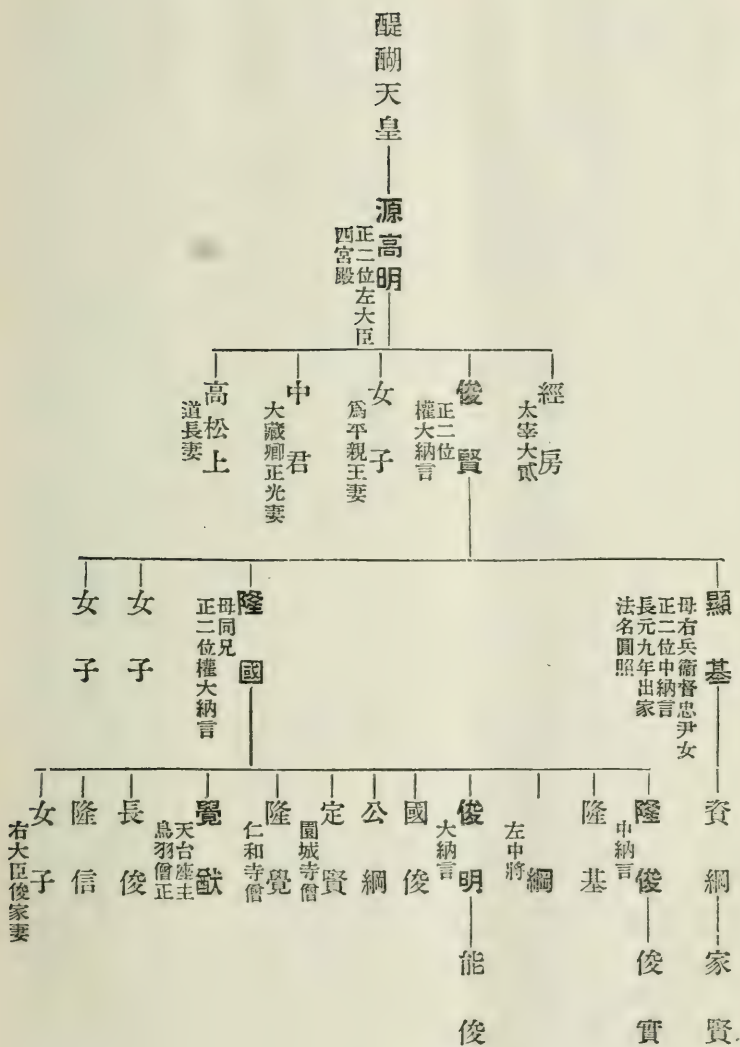
と題して、盜賊の事を主とし、終に禽獸の事を添ふ。三十、三十一は雜事と題し、三十は夫妻人倫の道に關する事を記し、三十一はなほ種々の事を述べて、その補遺としたり。

今昔物語は卷帙浩瀚にして、誤脫また多きを以て、後世の類書たる宇治拾遺物語などは多く行はれたれど、その原本たるこの書は却つて流布せず、刊本の種類甚だ少し。その刊行せられたるは丹鶴叢書に收めたるものあり、無比の善本と稱せられしが、本朝の部あるのみ。明治の世、國史大系の出づるや、專ら丹鶴本により、なほ天竺、震旦の部をも添ふ、こゝに至りて世人はじめてその全書を覗ふを得たり。初刊の史籍集覽に、また本朝のうち佛敎の部を除き、二十二より三十一までを收めしが、その校定新加の本を出すに及びて、丹鶴本、大系本ともに脫したる十七、十九、二十の三卷を加ふ。刊本として見るべきは、これらに止まれり。丹鶴本に先だちて、享保中、熊本の人井澤長秀が前後二篇各〻十五卷に別ちて刊行せるものあるが、これも本朝の部のみにして、また十訓抄、古今著聞集、宇治拾遺等に出でたるを省き、恣まに文章を變じて、當時の通俗體としたれば、到底

もとの面影を見るべからず。別に宇治大納言物語とて、三卷（或は合せて一卷）のものあり、これは小世繼と稱するものと大同小異、數節の出入あるのみ。卷中の記事明かに伊勢、大和、枕草紙、紫式部日記、今昔、宇治拾遺、十訓抄等より抄出せるものにして、後世假託の書なれば、論ずるに足らず。

今昔物語は世に稱して宇治大納言隆國の作と稱す。隆國は名家の出、その祖父は醍醐天皇の皇子なる西宮左大臣にして、父は一條天皇の頃、四納言のうちに數へられし源俊賢なり。隆國寛弘元年に生れ、十二歲にして從五位下に敍せられ、道長薨去の年は二十五歲にして、旣に從四位下右近衞權中將たり。官位歷進して正二位按察使權大納言に至る。延久六年、職を辭し、承保四年、病によりて出家し、その年、七十四歲にして薨ず。性機智あり、嘗て藤原賴通の宇治の第を訪ひ、ことさらに小馬に騎りて、門內に入る。曰く、これ馬にあらず、足駄のみと、賴通その答を奇なりとして、復これを禁ぜざりき。隆國また學才饒かに、時に和歌を詠ず。永承元年、宇治にありて詠じて曰く、

宇治川のはや瀨に浪の聲すれば、降りくる雨を知る人もなし。

醍醐天皇
源高明
正二位左大臣
西宮殿
經房
太宰大貳
俊賢
正二位
權大納言
女子
爲平親王妻
中君
大藏卿正光妻
高松上
道長妻
顯基
母右兵衛督忠尹女
正二位中納言
長元九年出家
法名圓照
隆國
母同兄
正二位權大納言
女子
女子
資綱—家賢
隆俊—俊實
中納言
隆基
綱
左中將
俊明—能俊
大納言
國俊
公綱
定賢
園城寺僧
隆覺
仁和寺僧
覺猷
天台座主
鳥羽僧正
長俊
隆信
女子
右大臣俊家妻

嘗て哀傷のことありし時、人に贈りて曰く、
死ぬばかり歎くをとはぬ人よりも、今まで生ける身こそつらけれ。
流布本宇治拾遺物語の序に曰く。
この大納言は隆國といふ人なり。……年高うなりては、暑さをわびて、暇を申して、正月より八月までは、平等院一切經藏の南の山際に、南泉房といふ所に籠り居られけり、さて宇治大納言とはきこえけり。髮を結びわげて、をかしげなる姿にて、蓆を板に敷きて涼み居侍りて、大なる團扇をもて扇がせなどして往來の者たかき賤しきをいはず呼び集め、昔物語をせさせて、われは內にそひ臥して、語るに從ひて、大なる雙紙に書かれけり。天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり、それがうちにてたふとき事もあり、哀なる事もあり、少々はそら物語もあり、利口なる事もあり、さま〴〵樣々なり。
蓋し今昔物語の事をいへるなるべし。されどこれに次げる記事、茫漠に失し、杜撰に流れて、信憑するに足らず。また本書の體裁を一見しても、苦心慘澹、和漢の古書を涉獵して成り、決して途人の雜談を筆記したるものにあらざるを知る

べし。佐藤博士は論じて、隆國が避暑閑居の事實も、後人の附會なるべく、江談抄に宇治民部卿（藤原忠文）が炎暑の時、暇を請うて宇治の別業に向ひ、避暑を以て事とし、或る時は披髪して宇治川に洗へりといへるに、出でたるならんといへり。（宇治拾遺物語考）

されば今昔物語編述の由來に就いての傳説は信ずべからずといへども、編者を以て宇治大納言隆國とするは、ほゞ當れるが如し。早く寶物集、八雲御抄に、隆國の撰に成れりとし、ついで古今著聞集もしか信じたり。篇中の記事は長元四年、源頼信が平忠常を討ちたる事、同八年、大齋院薨去の事、同九年、後一條天皇崩御の事より、後冷泉天皇の永承年間の事もあり、康平五年、源頼義が奥州にて安倍頼任、同貞任を滅ぼしたる事もありて、その後、敗將安倍宗任が筑紫にある事まで見ゆれば、隆國が見聞したるといふに適合して、時代に矛盾の感なし。而して前九年の役の平定せる康平五年は、隆國六十歳に當れば、執筆の始はいづれの年にあるにもせよ、今昔の成りたるは、撰者が耳順以後にあること、明かなり。しかりといへども、こゝに一の看過すべからざる疑問あり、かの頼義が征奥の

記事に次いで、本文は闕けてなしといへども、源義家朝臣罰清原武衡等語といふ目次の存することこれなり。これはいふまでもなく、後三年の役をさせるものにして、堀河天皇の寛治中に起り、隆國の薨後、十餘年の事にかゝる。さらばこれを以て今昔全部の編纂は寛治以後に成る、隆國の編述せりといふは、非なりとすべきか。これ或は然るかも知るべからず、しかれども、隆國說を是認するものの、旣にこの書を隔ること遠からざる時に存したるを思ふべく、また僧侶には源信、增賀、性空、官人には藤原義忠、同資業の事などを記せるかき樣を以ても、かれらに近き時の人の筆にして、遙かに世を隔てたる寛治以後に成れるにあらざるを推すべく、なほ康平三年に歿したりといふ駿河前司橘季通を、唯今ある」といへるなどを以ても、康平前後に編せるものなるを知るべし。さればかの後三年の一節は、前に前九年の事あるを以て、これに對せしむるが爲に、後人がこの題を挾みたるなるべく、さりとも本文は作らでそのまゝになりしものならざるか。姑く愚考を記して、識者の斧正を俟つのみ。

前に一言せるが如く、今昔物語は、道行く人の話、世の中の噂を、聞くがまゝに記

しつけたりといふは、この書の性質より考へても、決して然るべからず。記事亂雜にして、目錄に合はざるが如きところもあれど、大體は類似せる事實を蒐集編纂して、秩序整頓せるものなり。印度のことは、當時傳播せる典籍のうち、殊に法苑珠林、佛祖統記、雜寶藏經、經律異相、地藏靈驗記、法華驗記等より材料を得たるもの多く、支那のこともまたかの國の書を涉獵して得たるものなるべし。當時、支那の書にして、今昔編纂の參考にもやなりぬらんと思はるゝは、雜事を記して著名なるものに、說苑、新序、世說、新語、西京雜記、朝野僉載等あり、異聞瑣語を集めたるものに、搜神記、同後記、冥報記、還冤志、續齊諧記、述異記、酉陽雜俎等あり、その多くは佐世の日本國見在書目錄にも見えて、旣に延喜時代に行はれたるものなり。されば今昔物語が必ずしも直接に事實をこれらの書より抄出せりとはいはざれども、これらが編者の机側に存して、參照に供せられたるものとするは、强ち不稽の說にあらじ。本朝の部にも宿報のこと極めて多く、その志或は日本靈異記に紹ぐにあらざるなきかを思はしむ。卷三十の十四個條のうち、材を大和物語に取りたるもの七箇條あり、竹取、伊勢、土佐日記に取りたるもの

もあり、佛寺の縁起を抄錄せるも少からざるが如し。されば今昔は少くとも數年の苦心を經て、蒐集類別せるものにして、一兩年のうちに成りたるものにはあらざるべし。

厖然たる大帙も、惜しいかな、今昔物語は文學的價値甚だ薄く、さりとて歷史的價値もまた多しとせず。古書に、口碑に、見聞のまゝを記して、運筆匆々、編者の理想といふべきものの存せざるはもとより、記事に詩趣の掬すべきなく、修辭に才藻の愛すべきなし。强ひて取るべきところありとせば、古朴にして虛飾なき筆致の不用意なるにありとせん。源氏以下の物語と相反して、文章簡勁に、漢字の使用も多く、その用字に他書に稀なるものも少からずして、語學者の研究に資すること多し。記載の事實は資料を精選せず、得るがまゝに網羅したれば、到底、歷史的價値の存すべくもあらず。井澤長秀が「この書に載するところの人、出自をあやまるあり、伊勢御息所を以て藤原忠房の子とする類なり。一人を以て二人とするあり、基聖、寛蓮が類なり。二人を以て一人とするあり、權中納言敦忠、土御門中納言の類なり」といへるが如きもの、今一々に穿鑿せず。歷史的正確も

存せず、個人的想像も見るべからず、しかもこの書の貴ぶべきは、當時の社會の風俗を見、公衆の思想を察するに、重大なる價値を存するを以てなり。今こゝに今昔物語によつて得たる社會の情況を記述するの要なしといへども、枕草紙、源氏物語によつて余輩が知り得るは、貴族の社會に限れるに、この書が示すところは、貴賤に通じたることを忘るべからず。當時、佛教がいかに上下に瀰漫せしかは、これに關する記事が一部の過半を占むるにても察すべし。殊に法華の功德を說くこと多きは、天台宗の流行が然らしめたるものにして、觀音、地藏の利益多きは、一は現世の祝福を與へ、一は墮獄の苦艱を救ふといふ慈悲の誓願あればなり。宿報輪廻の說を信ずること篤く、迷信の深きは更にもいはず、百鬼夜行も珍らしからず、至るところ生靈、厲鬼の現はるゝあり。されど當時の鬼には後世の如く凄まじき性質を備へざるもの少からず、鬼の板または油瓶に化けたるもあり、また水の精、銅の精といふ、何でもなき化物もあり、猪狐など人に變ずといへども、獰猛狡獪の氣少く、屢〻人に見破らる。猪の化くるなどは、むしろ滑稽の感あり、宇治拾遺物語に至りて、更めて狸としたり。廢院に宿り

て鬼に逢ふ話、生靈の現はるゝ話、繼母の子を惡む話など、その頃の小說の資料に供せられたるもの多く、いづれも文學研究者に大なる趣味を與ふるものなり。

今昔物語が後世に影響せることは、鮮少にあらず。江談抄に同じ話七箇條を擧げたるは、暗合か、また由るところあるか。十訓抄など鎌倉時代の雜錄は、多くはこれに擬しまた事實をもこれより取りたるものにして、中にも古今著聞集は目錄の編次までこれに依りたり。個々の事實の古書より取りたるか、傳聞に得たるか、とにかくこの書に登載せられて、更に明確なる印象を世人に與へ、やがて傳說となりて殘れるもの、その數また少からず。支那の二十四孝の事も、この書に數條を存し、猿の肝干したりといふ昔話、道成寺の傳說などもあり。渡邊綱の鬼退治の話、一つ屋の老女の話の如きも、この書に擧げたるが、なほ後世の如く複雜ならず。寒夜に衣服を脫して人の寒さを思ひやる話、姨捨山の話、舍人公助の父に鞭撻せられて逃げざる話、袈裟が夫に代りて身を殺す話なども、この書によれば、類似の傳說の旣に支那に存したるを知るべし。

今昔物語のほかに、宇治拾遺物語十五卷(或は八卷に別つ)あり。その序に記すところは、蓋し宇治大納言が今昔に漏れたる事どもを拾ひ集めたるを、後人またこれに追加して成りたるものなりといふにあり。されどこの序文は後世のさかしらなるべく、信を置くに足らず。拾遺の筆法、前後一致し、別人の手に追加せられて成りたるにあらず。元來、宇治拾遺物語といふは、今昔物語を古くはしか稱したるものなるを、後にその名に擬して、この書を編したるものなるが如し。篇中の記事、今昔以外のことのみを選べるにあらずして、余の見るところによれば、拾遺百九十六段のうち、今昔と同じ話八十五箇條あり、もし今昔の全本を得ば、或は百箇條に昇るかも知るべからず。その殘餘のうち三十餘條は隆國薨後の事にかゝる。而してこの書の成れるは、建保年間にあり。これらの考證につきては、佐藤博士の精細なる宇治拾遺物語考ありて、嘗て史學雜誌に載せたり。こゝにはたゞその結論を引くのみ。平安朝の文學を說くに當りて、かくいふだに要なかるべしと思へども、或はこの書を今昔と同じく隆國の撰に成れりと信ずるものあるべきかを思うての老婆心より、かくは附記するなり。

第三章　假名文の國史(一)――榮華物語

今昔物語を隔ること幾程もなくして、榮華物語および大鏡の出づるあり。從來の國史いづれも漢文を以て記し、古事記の如き變體のものもありきといへども、これまた純粹の假名文と稱すべからず。假名弘通以來、これを用ひて、いはゆる雅文の體を以て歷史を編したるは、この二書をはじめとす。その一は編年の體を取り、一は列傳の體に從ひ、共に攝政道長の榮華を寫すを以て主眼とす。藤家の威權傾斜し、武家實力を養ひ來れば、月卿雲客寢食漸く安からず、往時、御堂殿の盛なりし樣を夢想して、これらの篇を成せるなるべし。

榮華、大鏡いづれもまた世繼と稱し、彼此混亂惑ひ易し。蓋し世繼とは歷史といふほどの詞にて、もとは一の普通名詞なりしが、後人轉じて固有名詞に用ひ、或はこれを榮華に當て、或は大鏡の事としたるなるべし。伴信友が「まづ世繼とは、もと御世々々の事を繼々に語るうへの詞なるを、其を書しるせる書どものなべての名にもいへり。五代帝王物語の發端に、神代より代々の君のめでたき御

事どもは、國史世繼家々の記に委しく見えて云々といへる、是なり」（比古波衣所載、榮華物語、續世繼考）といへる、即ちこれなり。而して世繼の名を用ひたるは、古くは榮華に多し、袋草紙、袖中抄、十訓抄、大鏡流布本卷四の終なる後人の書入、增鏡、本朝書籍目錄、拾芥抄に載せたる定家の押紙と稱するものなど、皆然り、讃岐典侍日記に引けるも、また榮華をいへるなるべし。大鏡に用ひたるものは、中古歌仙三十六人傳、壒囊鈔などに過ぎず。續世繼（今鏡）を信友は榮華に繼ぎて書けるものといへども、體裁明かに大鏡に繼げるものなれば、その名のうちの世繼もまた大鏡をいへるなり。

二書の作者も明かならず。榮華物語に後人の目錄、系圖一卷を添ふるありて、その端に赤染衛門記之と記せり。されど尊卑分脈の藤原長良の流爲業のところに、世繼作者とあり。この世繼は二書のいづれを指せるものか、明かならず。本朝書籍目錄には世繼を榮華の名として、藤爲業撰と記し、伴信友も爲業を榮華の作者と見たり。大日本史、群書一覽などはこれに反して、かれを以て大鏡の作者とす。是非如何、茫漠として歸着するところを知らず。今まづ榮華に就いて説く

べし。

榮華物語すべて四十帖、本朝書籍目錄には宇多天皇より堀河天皇までの君臣の事を記せりといへども、宇多天皇よりの事は、單に發端として簡短の記事あるに過ぎず、委しくは村上天皇の朝、九條師輔より藤家の更に振興せるに筆を起して、堀河天皇の寛治六年、藤原忠實が中納言にて春日祭の上卿を務めたるに終れり。從來行はれたるもの、素本に活字本、明暦二年刊本、小本等あり、九卷の拔抄本もあり、明治に至りて史籍集覽初版、文學全書、國史大系のうちに收む。註釋はその數多からず、近頃、和田、佐藤二氏の詳解の出づるあり、最も見るに足る。

榮華物語の年代および編者について論じたるもの、安藤爲章の榮華物語考、伴信友の榮華物語、續世繼の考を以て最も委しとす。爲章の著は紫家七論と共に片々たる小册に過ぎずといへども、議論精緻、よく千歳の疑團を解決して、著者が史學における識見の卓拔なるを表はす。信友また江戸時代における考證隨一の大家、その論傾聽すべし。爲章は榮華が赤染衛門の作にあらざる所以を論じ、信友はこの書の上下二篇に別つべき所以を説く。まづ爲章の説の梗概を次

に紹介せん。

榮華物語は寛治六年までの記事ありとすれば、その編者は同年以後まで世にありたる人ならざるべからず。赤染衞門果してその頃まで存生したるか、否々決して然らず。(一)衞門の家集に、道長の兄なる中關白道隆がなほ藏人少將なりし時、衞門の妹の許に通ひしこと見えたり。道隆がこの職にありしは、天延二年より貞元二年まで四年にして、その頃、妙齡の妹を有するほどなれば、衞門は大概二十歲前後なるべし。(二)また家集に、大原少將入道の遠逝を傷みて、おのれの命長さを歎ぜし歌あり。この入道は、萬壽元年、六十歲にて寂せし人なれば、衞門もその頃は六十歲餘か、七十歲ばかりの老尼なるべし。これよりさき十餘年前、長和元年に夫匡衡に後れて、旣に薙髮したりき。のち長久二年、曾孫匡房の出生を祝したる歌また家集にありて、その頃まで長生したるは明かなれど、さりとて寛治六年まであらば、その齡は百二三十歲なるべし、さることあるべしや。さらば衞門の撰し置きたるがありしを、後人の續ぎ足したるものならんかとも思はるれど、はじめの卷々もまたかれの作と見えざること多し。系圖に衞門

は上東門院の侍女なりといへど、誤にて、實は道長の北の方倫子に事へしなりさてまた夫の任國尾張、丹波に伴はれ、匡衡卒後は尼となりて里住せり。されば宮廷內部の事はおのづから精しかるまじきを、榮華には中宮、東宮、齋院、女御、またそのほかの方々の內事、女房の衣裝の色あひ模樣までを委しく記したり。もとより源氏などのつくり物語に比すべくもあらず、一々事實に取りたるものなるに、その事に疎き衞門いかで斯くし得べしや。或は曰はん、榮華は所々女房の日記などを抄出したるものにて、初花卷など紫式部日記に取りたる痕歷々たり、さらば衞門みづから見ずとも、これらの書によりて編し得べしと。されど紫式部日記は同輩の女房などを忌憚なく論じたるものなれば、たとひ式部死したりとも、大貳三位、越後辨などあらば、母の日記を他人に貸すべからず、衞門もこれを引くべからず。ほかに源氏物語、枕草紙、往生要集、往生極樂記、また藤原高光、同實方の歌などをも引きたるが、これらの作者はいづれも衞門と同時の人なれば、衞門の書きしものならば、さることもすべからず。また倫子の死去を寫すことの簡略なるは、これに事へし人の筆とも覺えず。かたがた思ふに、堀河

天皇以後の男子が、古き實錄または赤染衛門、紫式部等の諸才女の日記、家集などより拔き集め、女の筆めかしく作りたるものと覺ゆとなり。これを爲章の說の大綱とす

伴信友は第一に書名の事、第二にこの書を上下二篇に別つべき事、第三に作者の事を論ず。書名については、この書を榮華とも世繼ともいふが、古くは世繼の方多しと、例を引きて說きたるに過ぎず。二篇に別つべきの論、殊に價値あり。曰く、榮華四十帖は同時同人になりしものにあらず、第一帖月宴より第三十帖鶴林までを上篇とし、第三十一帖殿上花見より第四十帖紫野までを下篇とし、おのおの別手になりたるものなり。かくいふ故は、(一)鶴林卷の末に「つぎ〳〵の有樣どもまた〳〵あるべし、見聞きたまふらん人々かきつけたまへかし」などいひて筆を止めたる趣あり。(二)道長薨後の事、なほ書き殘したるところあるを、殿上花見にはこれらの不吉の事は略して、「入道殿うせさせたまひにしかども、關白殿、內大臣、女院、中宮、あまたの殿原おはしませば、いとめでたし」と起したるは、筆を新たにしたる書きざまなり。(三)流布本大鏡卷四の終に、世繼名とて卷々の

目錄をあげたるは、月宴より鶴林まで三十帖あるのみ。(四)疑巻に寛弘二年の事を記して、今に二十よ年(よは四なり)といへるは、萬壽五年に當る、鶴林は即ちこの年に筆を止めたり。(五)殿上花見巻、根合巻に上の巻と見え、また愚管抄に世繼の上の巻といへるは、即ち榮華に上下二篇あるを顯はせり。

ついで作者については、宮中の微細なることを漏さず、却つて世間の大事を闕き、年立の覺束なきこともあるなど、女房の日記などをよせ集めて書けるなるべしといひて、爲章の論を繰り返し、更に例證を引きぬ。さていよ／＼この書を上下二篇に別つべきものなる時は、上篇を以て古傳の如く赤染衞門の手に成れりとし、下篇を以て尊卑分脈等に見ゆるが如く爲業の作とせば、彼此矛盾なく、甚だ都合よく思はるれど、はじめの巻々も衞門の筆にあらざることは、既に爲章の論ぜるが如し、たゞ爲業の作といへるは然るべし。但しその手に成れるは、上篇か下篇か知らねど、まづは上篇なるべしと、信友の論凡そかくの如し。博引旁證驚くべしといへども、その結論の上篇を爲業の作ならんとしたるが如き、最も僭越なる推斷にして、考證を以て自ら任ずる大家にも似合はしからぬ

所爲なりとす。

四十帖を以て二篇に別つべしといふ信友の論は、まことに然なり。試みにこの二篇を比較するに、上篇は七十年ほどの事を三十帖に寫し、下篇は六十年ほどを十帖に籠む。從うて上篇は記事詳密に、一二年の事を長々しく書き續けたるところもあるに、下篇は甚だ粗略に、煙後、松下枝の間などは、記事順次にうち續かず、教通が關白になりたることさへ漏れたり。上篇は道長を中心として、勢力の消長歸着するところあれば、記事もやゝ統一の趣あるに、下篇は焦點とすべき人物もなく、支離滅裂の感あり。强ひて道長に對すべきものを求むれば、具平親王の王子にして道長の婿たる右大臣源師房かまた怪むべきは、下篇には道長の薨後の始末など忘れたるが如く、その畢世の事業たりし佛寺の炎上も詞短かに書き流し、北の方倫子の事も上篇には委曲を盡したるに、下篇には極めて輕々しく寫し去りたるが如き、おのづから上下二篇は信友の說の如く別手に成りたるかを思はしむ。されどしばらく余の憶說を加へんに、上下二篇に別つことはもとより可なり。されど同人が一旦筆を收め、更に書き續ぎたるもの

なるべく、別手に出でしにはあらざらんか。上下ともに文章の巧拙致を一にして、別人の筆とは見えず、一人の手に成りて、これを上下に別ちたるは、或は源氏物語の體を學びたるにはあらざるか。

榮華は事實を臚列したるものなること勿論なりといへども、その編述の由來を思ふに、當時つくり物語流行の時勢に促がされ、その體裁に傚うて作り出でしこと疑なし。殊に源氏物語は世人が一般に崇仰して措かざるところ、榮華の作者も深く私淑するところあり、卷中、光源氏を引きたるところ數箇處に及び、卷名も遙かに拙なりとはいへまたかの大作に學び、全部の結構またかれより出でたり。まづ道長が政權を執るに至れる來歷を詳述したるは、わがいはゆる源氏の前紀にして、道長が金銀瑠璃七寶莊嚴の法成寺を建立して榮華を極めたるは、源氏の中紀、六條院を造營して方々を集めたるに擬らへて、力を盡して寫したるもの、その晩年もまた比するところあり。敍述拙く、道長の性格も漠然たりといへども、なほ好惡ともに見捨てず、よく敵にも恩を施せるを以て、人みな歸服せりといふが如き、かれが本來の性或は然りしかも知らざれども、一は

源氏の性格をこゝに移し植ゑたるものにあらずや。さて榮華が一旦鶴林に筆を絶ちたるは、源氏が幻に主人公の最期を含めて、雲隱の缺陷あるに同じ。殿上花見以下、道長薨後の事を記したるは、源氏の匂宮以下に擬らへたるものにして、下篇を十帖としたるは、或は宇治十帖に比したるにてもあるべし。かくして源氏五十四帖を別手に出づとすべからざるが如く、また榮華上下篇も一人の筆に成りたるなるべし。或は信友の二人說の是なるかも知らずといへども、余はむしろ一人說を取らんと欲するなり。

さらば榮華を一人の手に成れりとして、その一人は即ち誰ぞ、本朝書籍目錄には藤原爲業とす、果して然るか。そも〳〵藤原爲業は長良の一流にして、從四位下木工頭爲忠の次子、母は橘大夫の女、待賢門院の女房なり。爲業從五位下皇太后宮大進たりしが、出家して寂念と稱す。弟賴業、爲隆また出家して寂然、寂超といふ。三人いづれも和漢の才ありて、共に洛北大原に籠る、世に稱して大原の三寂といふ。爲隆の子に隆信あり、殊に繪畫に長け、また和歌をよくし、その子信實も二道ともに絕世の譽あり。大鏡、今鏡に繼ぎたる彌世繼は實に隆信の手に成

長良——國經……爲忠
從四位下木工頭
保延二年卒
歌人
爲盛
從五位下
散位左近
爲業寂念
從五位下
皇后宮大進
頼業寂然
從五位下
壹岐守
爲隆寂超
本盛忠
從五位上
皇后宮少進
隆信——信實
母ハ若狹守親忠女
俊成ノ後妻トナル
兼豪
忠宴
叡山僧
昌忠
叡山僧
女子

れり。尊卑分脈、増鏡等 爲業和歌を以て當代に重んぜらる、その詠二三首を擧ぐべし。

吉野山、花のさかりになりにけり、絕ゆる時なき峯の白雲。

松風に更け行く月のすみの江は、波のよるこそたちまさりけれ。

あやなしや、手ぶさに鈴を取りながら、思ふ心のかつ亂るらむ。

吉野川、紅葉流れて岩がうへに、くれなゐ深き浪ぞこえける。

霜がれの眞萩が枝ぞめづらしき、遠里小野のけさの初雪。

勅撰作者部類、爲業の條に至保延五年と記せるが、これをその卒去の年とせばいみじき誤なり。嘉應二年十月九日、住吉社歌合には、左方の作者のうちに沙彌寂念と記し、安元元年十月十日、右大臣家歌合には、右方の作者のうちに寂念法師爲業入道と記したれば、保延の後三十餘年なる高倉天皇の朝にありて、盛に歌よみたりし人なることを忘るべからず。

翻へりて榮華の事を思ふに、高倉天皇の頃既に高齡なりし藤原淸輔が、その袋草紙に、「或人云、如云世繼物語、萬葉集ハ、高野御時、諸兄大臣奉之撰云々」とて、典據として引用せるほどなれば、榮華がこれより以前に成りて、既に世に行はれた

ること明かなり。また讃岐典侍日記巻下に、鳥羽天皇の即位を敍して、「かやうの事は世繼などを見るにも、その事書かれたる所は、いかにぞや覺えて、引きこそかへされしか」とあるは、また榮華をいへるなるべし。この日記は堀河天皇の崩御、鳥羽天皇の即位などを旨と記して、その折、直ちに事實を記したるものなり。されば少くとも堀河天皇の末年までには、榮華は既に編纂せられ、日記にも引かれしなり。即ち寛治五年の後幾ばくもなく出できて、最近の事實をも記ししものとするを當れりとす。かくして爲業が住吉の歌合に參與せし嘉應二年を七十の高齡なりと見ば、榮華の成りしはその襁褓の頃に過ぎざるべく、六十歳と見ば、出生以前なり。假に一歩を讓りて上下二篇を別手に成れりとせば、その下篇を爲業の撰といふとも、時代は相應せざるにあらざれども、信友の言の如く上篇を爲業の撰なるべしといふは、到底あるまじきことなり。こゝにおいて余は推定す。榮華の編者は、赤染衛門といふの非なるが如く、藤原爲業といふもまた非にして、堀河天皇の朝に成りしものなりと、その誰人なるかは得て知るべからず。

思ふに堀河天皇の頃は、後三條天皇勵精の後を受け、白河法皇また英邁の資を以て院中に政を聽き、北面の士を置きて股肱とし、力めて藤原氏を抑へたまふ、兵力は源平二氏の手にあり、關白師實師通の如き、空位を擁するのみ、師通の後にはしばらく攝政關白を置かれざることさへありき。藤家の士今の衰微を歎き、昔の隆昌を懷うて、盛衰の感に堪へず、筆を極めて道長の榮華を寫し、最後に春日祭の樣を記し、その上卿たる師通の子忠實が行末を祝して、「世にまた御笠の山のかゝるたぐひなく、めでたう思ひ餘りて、車ひきとゞめつゝ、道すがら見る人の、

行末もいとゞさかえぞまさるべき、春日の山の松の梢は。

など、ふるめかしき人の思ひける」といひて局を結び、わづかに心を慰めたるものならん。

全體の結構、全くありのまゝの事がらを編纂したるものにして、中には事實に齟齬したることもあれど、そは傳聞の誤にて、ことさらに爲したるものにあらず。少しくつくり物語めかして書きたるところもあれど、概して想像架空の談

なし。事實の片々を編年體によせ集めたるは、そゞろに編者に統一の才なきを示し、乾燥無味、千篇一律、讀んで何の興味も感ずることなし。ひとり法成寺建立供養のあたりは、法成寺金堂供養記等を參照して記せるものならんが、敍事頗る精細、深く措辭に注意したるを見る。されどそれも徒らに經文の句などを補綴して、綺麗の詞句を羅列したるのみにして、毫も靈活の氣の存するなし。かくして榮華の一篇、その文學的價値は極めて少しといふを憚らずといへども、時に簡短なる記事の、人情の琴線に觸るゝものあり。例へば小一條院が道長の婿となりしを、院の妃延子とその父顯光とが憂へ歎きし樣を寫せるが如き、倚侍嬉子が東宮に參り、男宮を生みおきてうせたることの如き、おのづから讀者をして一滴の涙を注がしむ。事實の然らしむるなりといへども、またこの詩趣ある光景を捕へたる編者の才を多とせざるを得ず。

一篇たゞ時日を逐うて事實を散漫に記したるものに過ぎずといへども、なほその間に編者が大體の着想は覗ふことを得べし。寫すところ、もとより攝政道長を主人公として、かれが榮華を極むるに至りし所以、すなはち藤原氏が宮廷

における勢力の消長を以て、一部の骨子とす。勢力の増加は何によりて起るか、その女を女御、更衣に納るゝにあり、權家と緣を結ぶにあり。道長が皇室と姻緣相絡みたるはいふに及ばず、當時、才學を以て世に鳴りし具平親王といひ、公任といひ、行成といひ、齊信といひ、いづれもよく渡世の術を辨へ、道長と緣を結びて、その地位を固めたるものなり。既に婚嫁成るや、ついで來るは出產なり、出產の安否はまた將來の幸不幸に關す、もしこれを左右することを得ば、そはたゞ佛事供養にあるのみ。かくして榮華が記事の範圍は極めて狹く、宮廷貴族の間の結婚、出產、佛事などを以て大部を占め、他に政治上の大事あれども略して記さざるが多かりき。

文章の蕪雜にして冗漫なる、改めて言ふを須ひずといへども、はじめの程はなほ修辭に注意し、卷々の結末など殊に感慨あり、餘情あるやうにしたるが、後には漸く粗鹵に流れぬ。敍述平直露骨、また屢〻同じ言を繰り返して、讀むに煩はし。その優柔なる體はさることながら、おのづから漢語、佛語を交ふることも多くなり、四六駢儷の句も少からず、活氣なき死文字のうちに、鎌倉時代の和漢混合

體の漸次胚胎したるを見る。

第四章　假名文の國史(二)—大鏡

大鏡は古本と流布本とあり、彰考館本、烏丸光廣が書寫の本を古本とし、古活字本、普通版本、史籍集覽本等を流布本とす。古本は簡にして、流布本は詳なり、たゞし流布本には事實の重複し、また齟齬するところあれば、その詳なるは、却つて後人の加筆ある故ならん。他本はみな八卷、烏丸本のみ三卷なり。（萩野、松井二氏校定本凡例）註釋の最も古きものを大鏡裏書とす、多くは卷中の人物の傳および事實の考なり。そも〳〵この書、古來、校訂せらるゝこと少く、註釋また稀なりしが、始めて精細なる研究に着手せるを大石千引とす。千引は加藤千蔭の門に出で、和歌をよくし、古學に通ず、以爲らく、伊勢、源氏の類は從來その校註多し、徒らに前哲の糟粕を甞めんよりは、古人がいまだ着手せざるところに指を染めんと。よりて主として榮華、三鏡の類を考査し、榮華物語抄、榮華物語考難註、大鏡系圖、大鏡觀

短抄、水鏡觀短抄等の撰述あり、いづれも刊行せられず、流傳極めて稀なり。明治の世に至りては文學全書、國史大系、國文大觀等に收めたるものあり、落合、小中村二氏の詳解あり。校定本は久米幹文の校本頗る見るべく、その後、萩野、松井二氏が校定せる大鏡は誤謬最も少き善本なり、主として烏丸本によつて校定し、古本になきところは、輪廓のうちにこめてこれを分てり。

大鏡は、文德天皇の朝より後一條天皇の萬壽二年まで十四代、凡そ百七十五年間の記事にして、まづ文德より後一條までの御略傳を記して、その母后の事を代々の間に合せ記す。次いで左大臣冬嗣より太政大臣道長まで二十人の藤家の大臣を傳し、その子孫の事をも併せ記し、その後、鎌足以來の事、氏神、氏寺の事、道長が堂塔建立の事等を記して、藤原氏の傳記を終る。餘談として賀茂、石淸水臨時祭の起源、延喜天暦の政治、村上源氏の事、歌道の逸事、およびその他の雜話を擧げたり。榮華と併せてわが假名文の歴史のはじめなることは、いふまでもなし。從來の歴史は、漢文にかきたるものも、多くは編年體の書にして、僅かに類聚國史などのみ體裁を異にしたるものなりしが、この書に至りて、史記に倣ひ

て、はじめて列傳體を用ふ。史記は三史の隨一、三史は既に奈良朝に傳來し、平安朝に入りては、文選と併せて大經に准じて、紀傳道の最も重んずるところなればその流行や知るべきなり。

大鏡は榮華と共に道長の盛運を寫すを主としたるものなり。しかるを溯りて本紀は文德天皇より、列傳は冬嗣より記したるは、大鏡みづから然る所以を說明せり。その序に云く、

まめやかに世繼が申さんと思ふことは、異事かは。唯今の入道殿下の御有樣の、世にすぐれておはしますことを、道俗男女の御前にて申さんと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝后また大臣公卿の御上を續くべきなり。その中に幸ひ人におはします、この御有樣申さんと思ふ程に、世の中の事のかくれなく現はるべきなり。つてに承れば、法華經一部を說き奉らんとてこそ、まづ餘教をば說きたまひけれ、それを名づけて五時教とはいふにこそはあなれ、しかの如くに、入道殿の御榮を申さんと思ふ程に、餘教の說かるゝといひつべし。

すなはち道長の榮華の基くところを知らしめんとして、前代の事をも說きたるなり。されど遠祖鎌足以來の事はあまりに耳遠し、藤家にて北家が殊に盛なるに至りしは、文德天皇の時よりなり。天皇の母は五條后順子にして、冬嗣の女、皇后は染殿后明子にして、冬嗣の孫、良房の女なり。この時、冬嗣は薨じて久しくなりぬといへども、その子良房皇太后の兄、皇后の父、太子の外祖として、太政大臣となる人臣を以てこの官に就きしは、實にこれをはじめとし、藤原氏が皇室の外戚として、代々攝關の重職に居るは、この時よりす。さればこそ本紀は文德天皇に筆を起し、列傳は良房の父冬嗣より記ししなれ。たゞし良房、基經の後、菅原道眞の大政に參與するあり、藤家の勢力少しく沮み、忠平の子よりまた數家に別れたるが、更に九條師輔に興りて以て道長に至れるを以て、榮華物語は師輔よりしるすに止めたり。

かくて大鏡が列傳を設けたるも、藤家歷世、政權の傳承を主としたるを以て、傳を立つるや、代々の大臣とばかり限らず、冬嗣の長子、基經の實父、陽成天皇の外祖父なるを以て、權中納言長良をも擧げたり。これに反して藤家にては良世、高

藤、定方、恒佐、源氏にては信、融、高明などの大臣について傳を設けざるを見ても、歷代の大臣を網羅せんとの考あるにあらず、敍述の目的、たゞ道長の勢力の由つて來るところを示さんとするにあるを知るべし。

帝王には文德、人臣には冬嗣より始めたる所以は、かくの如くにして疑を容れざるが、その末は何故に道長の末年および子孫の事までも記さざるか。その祖先を傳すれば、須らくその子孫後裔も傳すべし。たとひ子孫の事まではなくとも、道長一生の事は述ぶべきにあらずや。榮華物語を以て、しばらく上篇のみなりと見ても、なほ鶴林卷に道長が一生は寫し終れり、しかるに大鏡は何故に萬壽四年にかれが薨ぜし事まで記さず、その二年を以て筆を止めたるか。これに對しては二樣の答あり。

一、第一の答は極めて簡短なり。大鏡は萬壽二年に成れるが故なり、道長存生のうちの著なるが故なり。書中、後一條天皇を當帝（タウダイ）といひ、後朱雀天皇を今の東宮といひ、道長を唯今の入道殿下といひ、賴通を今の關白といふなど、一日瞭然たり。後一條天皇紀にはなほ位につかせたまひて、十年にやならせたまふらん。今

年は萬壽二年乙丑の歳とこそ申すめれ」とあるにあらずや。

二、第一の答は物の表面のみを見て、裏面を察せざるもの、萬壽二年に書きたるが如くしたるは、たゞ編者が假設の言のみ、實は遙かの後に書きたるものなり。さらば何故にこの年に筆を止め、この年に書きたるものの如く裝へるか思ふに萬壽二年は道長薨去の前々年にして、これよりかれの運は衰滅に向へるなりこの年、天變しきりに、名ある人の死すること多く、老入道はその愛女小一條女御(寛子)および登花殿尚侍(嬉子)に後れて、悲歎の涙にくれぬ。榮華物語にこの一年を叙して、「年頃いみじき天變とて罵りつるは、げに空しうやはありける。春は皇后宮うせたまひぬ、さんぬる月には院の女御うせさせたまひ、また「登花殿尚侍の)かくれおはしまして、かく一天下のゆすりたる、これこそは天變なりけれ」といへるは、この消息を漏せるなり。春秋は獲麟に筆を絶ちぬ、道長の榮華を寫すべくんば、すなはち萬壽二年は擱筆の機なり。

以上の二説の是非を論ずるには、まづ大鏡編成の時代を定めざるべからず。果して第一説のいふが如く、萬壽二年の撰なりや、もし然らずとせばいづれの時

に成れるものぞ。

試みに大鏡を繙讀せよ。前後の記事の、萬壽二年の筆たることを證するもの多し。前にいへる一二事のほか、なほ數條を例示せん。

(一)小野宮實資を今の右大臣といひ、藤原公信を唯今の左兵衛督といひ、源隆國を四條少將といへるなど、官職よく時代に適へり。

(二)世繼の翁は貞觀十八年に生れて、今年百五十歳といへり。

(三)嘉祥三年より今年まで百七十六年といへるところあり。

(四)大納言公任の女、教通の北の方が萬壽元年に歿したるを「こぞの正月にうせたまひて、大納言萬を知らずおほじ歎くこと限なし」といへり。

(五)村上天皇の女九宮資子が長和四年に薨じたるを「うせたまひて十餘年にやならせたまひぬらん」といへり。

(六)道長の女嬉子は、萬壽二年八月、後冷泉天皇を産む。本書に記して「妊じたまひて七八月にぞ當らせたまへる」といへり。

(七)治安三年、道長の北の方倫の子の六十の賀を「おと年の御賀」といへり。

これらの年を數ふれば、大鏡がさながら萬壽二年に成りしものなるを思はしむ。萩野博士は最もこの書に精通す、嘗てその敎を乞ふに、答へて曰く、編者狡獪、力めて古代の作たるを裝はんとすれども、時に馬脚を露はざるを得ずと。よりて萬壽二年說に對する反證三箇條を擧ぐ、一々肯綮に當れり。

(一)右大臣良相の傳に「贈正一位西三條大臣と申す、淨藏定額を御祈の師にておはす、千手陀羅尼の驗德かうぶりたまへる人なり」とあり。しかるに今昔物語卷二十二、閑院冬嗣右大臣并子息語に同樣の事を記して、「三郎ハ良相ノ右大臣ト申ケル、世ニ西三條ノ右大臣ト申ハ、此也、其ノ比、淨藏大德ト云フ止事无キ行者有ケリ、其ノ人ト極ジキ檀越トシテ大臣千手陀羅尼ノ靈驗蒙リ給ヘル人也」とあり。事實ならば、偶合とするも可なりといへども、良相は旣に貞觀九年に薨じ、淨藏はのち寛平三年に生れて、その間二十五年もあり、歷然たる誤なれば、二書の一が他の誤を受けたるものならざるべからず。そのいづれか前なるやは確言し難しといへども、大鏡が今昔の後に出でて、これを取れりとするを穩當なりとすべきか。また今昔物語の同じ卷の堀河太政大臣基

經語に「堀河ノ院ハ地形ノ微妙ケレバ、晴ノ所ニシテ、大饗被行ケル時ニハ、尊者ノ車ヲバ、堀河ヨリ東ニ立テ、牛ヲバ橋柱ニ繋ギテ、他ノ上達部ノ車ヲバ、河ヨリ西ニ立並ベテ有ルガ、微妙也。尊者ノ車別ニ立タル所ハ、此ノ堀河ノ院ノミゾ有ケル」とあり。大鏡の基經の傳にも、同じ趣の記事あるを見ても、二書の間に密接なる關係あることを思ふべし。

(二)帝王傳の終に云く、「五十五代の帝文德天皇の齊衡四年丁丑二月十九日、帝の御をぢ左大臣從一位藤原良房のおとゞ太政大臣になりたまふ、御歲五十四。この大臣こそは始めて攝政もしたまひつれば、やがてこの殿よりして、今の閑院の大臣まで太政大臣十一人續きたまへり。但しこれよりさき大友皇子、高市皇子加へて十三人の太政大臣なり。太政大臣になりまたひぬる人はうせたまひて後、かならず諡號(イミナ)といふものあり。されども大友皇子やがて帝になりたまへり、高市皇子の御いみなおぼつかなし。また太政大臣といへど、出家しつれば、いみななし。さればこの十一人續かせたまひたる太政大臣二所は出家したまひつれば、諡號おはせず」とあり。出家せる二人とは忠家と道

長となること論を俟たず。道長に諡號なしといへるは、即ち明かにその薨後の筆なることを示せるものにあらずや。

（三）圓融天皇紀に、その母后（村上天皇の后、名は安子）の事を記して「中〇后〇と申すとあり。醍醐天皇の后穩子を大后といひ、安子を中后といひ、後三條天皇の后茂子を今后といふ。茂子は師輔の孫、公成の女にして、道長の子能信に子養せられ、後三條天皇の女御となりて、白河天皇を生めり、その皇后に冊立せられたるは、國母となりたるを以てなり。されば大后、中后、今后と三幅對に稱するは、茂子が皇后冊立の後のことにて、白河天皇以後ならざるべからず、從うて大鏡の選述も白河天皇以後なるを知るべし。

これに對して多少の疑なきにあらずといへども、その疑は單に疑といふのみに過ぎず。思ふに篇中小一條院の東宮を去りたる記事の如き、情實を探り委曲を盡して、到底、後の世に日記記錄などによりて作るものの爲す能はざるところ、しかもこの書の性質としてその空想に出でざることより考ふれば、當時在世の人のまのあたり見聞して寫せるものかと、思はれざるにあらず。さばれこ

れもいよ／＼疑に過ぎず。前後の記事を察するに、却つて後世の作たるを推さしむることもまた存すずなはち、

(四)嬉子の妊娠を記して、「妊じたまひて七八月にぞ當らせたまへる。入道殿の御有樣見奉るに、必ず男子にてぞおはしまさん。この翁吏によも申しあやまち侍らじと、扇を高くつかひつゝいひしこそ、をかしかりしか」といへる。

(五)源師房の事を記して、「今一所(道長の女)は、故中務卿宮具平親王と申すは村上の七の御子におはしましき。その御男君三位中將師房の君と申すを、今の關白殿(賴通)の上の御はらからなる故に、關白殿御子にし奉らせたまふを、入道殿(道長)埒どり奉らせたまへり。あさはかに心得ぬ事とこそ、世の人申ししか。殿の内の人もおぼしたりしかど、入道殿思ひおきてさせたまふやうありけんかしな」といへる。

(六)三條天皇の皇女一品宮(禎子)の事を記して、「この一品宮の御有樣のゆかしく覺えさせたまふにこそ、また命惜しく侍れ。その故は生れおはしまさんとて、いとかしこき夢想見たまへしなり。さ覺え侍りし事は、故女院(東三條院)、こ

の大宮(上東門院)など妊まれさせたまはんとて見えし、たゞ同じ樣なる夢に侍りしなり。それにて萬おしはかられたまふ御有樣なり」といへる。

(四)は後冷泉天皇の降誕を寓し、(五)は師房の顯達を寓し、(五)は一品宮が後朱雀天皇の後宮に入り、後三條天皇を生み、陽明門院と仰がれたまひしを寓するが如し。これを豫言の如くに裝へど、實際は編者がこれらの事實を見聞して、後に筆を執りたるものなるべきか。これらは明確の證にあらずといへども、また以て博士の立言の傍證たるべくかた〴〵大鏡は少くとも白河天皇以後の作なりといふ說を可とすべし。從うてその筆を萬壽二年に止めたるもの、前掲二說の第一の非にして、第二によりたるを知るべし。

さらば大鏡は果していづれの時代に成り、誰人の筆にかゝれるか。尊卑分脈に爲業を世繼の作者としたる、その世繼を大日本史の如く大鏡と解すべきか。今鏡(續世繼)は大鏡に繼いで、後一條天皇の萬壽二年より高倉天皇の嘉應二年までの事を記せるもの、書中に今年は嘉應二年といへるは、蓋し大鏡の如く假託の言にあらずして、まことの執筆の時をいへるなり。而してこの書に大鏡を稱

して「ふるき物語」雲井巻といへり、或は古代の事を記したる物語といふ意か、或は大鏡を萬壽年間の作と妄信しての辭かも、知るべからずといへども、文意によりて普通に考ふれば、古代に成りたる物語といふにあるべし。高倉天皇の時、既に古代の書として敬重すれば、爲業の作といふは、また恐らくは非ならんか。爲業は前章に示せるが如く、嘉應の頃、盛に歌よみし人なり、すなはち今鏡の編者と同代の人なり。同代の人の作を以て、ふるき物語とするは、老幼の差あらば、或はこれあらんとはいへ、甚だ實際に遠し。されば余はこの書も榮華に全じく、高倉天皇の頃よりやゝ以前に成りしものならんと推定す。

こゝにおいてか榮華、大鏡の比較論は生ぜざるを得ず。二書が道長を主として、藤家の榮華を寫せる目的も同じく、編成の時代もほゞ似たるが如し。少しく二書の異同を驗せんか。榮華は冗漫、大鏡は簡潔、一見するに榮華の詳細なる記事を節約して、大鏡は成りたるが如し。されど大鏡は決して榮華のみに據りたるものにあらず。同時代の事を寫せば、同事實の多きは已むを得ざることながら、事實の選擇彼此相異なり。榮華は立后任大臣など宮廷内の事を旨としたるに、

大鏡には刀伊の入寇の如き、かの書になき記事あり。事實の異同も處々に存す。師輔の女登子を榮華は登花殿內侍としたるに、大鏡は貞觀殿內侍とし、敦康親王の享年を彼は十七としたるは、此は二十九としたるが如し。

しかのみならず榮華と大鏡とは批評の標準全く異なり。榮華は道長を以て人間の標本とし、完全無缺の貴紳とし、これと利害相反する人は、すべて惡し樣にいふを常とす。大鏡は然らず、道長を篇中第一の人物として、その隆運を祝するは同じといへども、徒らにその勢威に萎縮して、讃歎をのみ事とするものにあらず。是を是とし、非を非として、事實の眞相を究むるを以て、おのれが任とす。ここにおいてか、古來の歷史を語らしむるに、物の表面を見る世繼あり、裏面を察する繁樹あり、その間に更に一人の青侍を點出して、眞僞を批判せしむ。大體の事態は世繼これを說けども近時の複雜なる顚末は、繁樹等をしてその內情を穿たしめずんば止まず。表面はともあれ、大鏡はむしろ裏面に重きを置けるなり。著名なる人物について、二書の描寫の相違を見よ。兼通は道長の父なる兼家といたく軋轢せしもの、伊周は道長執政の後貶謫せられしもの、榮華はいづれ

もこれを斥非したるが、大鏡はあしくは評せず。隆家は伊周の弟にして、兄と共に貶謫せられしもの、その道長に重んぜられし由は、二書ともに同じけれど、大鏡は殊にその剛直を稱し、大齋院が道長に諂ふを見て、かれが「追從深き老狐」と評せし率直放膽の言に同情を寄す。道雅は彼にはよき人物とし、此には花山天皇を誘惑して父の喜を買ひし惡人とす。道長に至りては、榮華はたゞ讃歎の及ばざらんことを恐るゝばかりなるが、大鏡は一條天皇が道長の執政を拒みたまへる由を記し、また道長が私の造營に天下に調役を促りし事を諷して憚らず、彼此對照して、二者が編述の方針の異同を辨ふべし。

榮華は、一篇の體裁、當時流行のつくり物語殊に源氏に擬したるものに過ぎずして、その特長の存することとなし。大鏡はもと史記の體に倣ひたるものとはいへ、記述のさま、雲林院の菩提講に二老翁が來合せて古事を語り、一人の靑侍の時に口を挾むを、さながらに筆記したるが如くにし、彼一章、此一章、讀んで應接に暇なきは、こゝに文體に一特色を發揮せるものにして、後世の假名文の歷史がこれに則るものの多きも、深くこの體に感じたればなり。記事の緊張して、讀者

をして厭かしめざるも、榮華の比にあらず。文章また頗る勁拔、たゞ「禍や〳〵」「思ひよるべきことかはな」「いと珍らしきことよな」など感歎の辭を用ふること多きに過ぎ、「この御末ぞかし、今の世に源氏の武者の族は」など、屢〻倒置の法を挾むが如く、ことさらに勁拔ならしめんとする痕跡を現せはるを惜む。過差、文盲、恪勤、閑散、追捕、遺恨、非常、謟曲、無禮、辱詬、人非人、勇敢幹了、甚深々々、希有々々など漢語を挾みたることの多きは、ことさらにしたるにあらずして、當時通用語となれるものを用ひたるに過ぎざらん。

前述の次第によりて考ふるに、體裁の整頓し、評論の剴切なるなど、案ふに大鏡は榮華の後に成りたるものなるべし。蓋し榮華のはじめて世に出づるや、徒らに無用の事實を列擧して、煩瑣に流れ、また口を極めて道長を讃歎し、理非を問はず盲從を事とするに快からず、歴史の編述斯くの如くなるべからざるを慨し、形勢の移動を明かにし、細かに事實を剖析して、その眞相を究め、是非を定めずんは止まざるの決心を以て敍述したるもの、すなはちわが大鏡にあらずや。されば余はこの書が嘉應年間を去ることやゝ久しき以前、また榮華の後幾ば

くもなく成りたるものにして、榮華の編成を堀河天皇の朝とせば、大鏡は鳥羽天皇の頃にありとせんとす。もとより一家の私言に過ぎずといへども、或は穩當の見たるに近からんか。

この時代の末に成れるものに今鏡あり、體裁は榮華と大鏡とを混じて、事實は大鏡に繼ぎたるもの、特色の見るべきなければ、こゝには略して言はざるべし。

第五章　夜半の寢覺

平安末期の散文は創作にあらずして、編錄にあり。歷史雜錄にやゝ一新面目を開けりといへども、小說の如きはたゞ舊套を墨守して、因循固陋、毫も根本的革新を企つべき意氣なし。強ひてその始末を敍せんとすれども、明かにこの時代のはじめの小說として評論すべきもの殆ど存せず。八雲御抄、明月記等、鎌倉時代のはじめの書に引けるもののうち、これに屬するが多かるべしといへども、今多くは傳はらず。さるが中に夜半の寢覺は狹衣、濱松中納言と並んで、源氏以後の傑作

と稱せらる。更科日記の奥書に、濱松中納言と共に菅原孝標の女の著はせりといへるもの、然りや否やを知らず。とりかへばやもまたかれらに劣らず拔群の譽あるもの、その創作は蓋しこの時代にあるべし。されど惜しいかな、寢覺もとりかへばやもその原本は傳はらず。今存するものを以て本來の面目を覗ふに足らずといへども、この新本と原本との相違を穿鑿するうち、おのづから平安末期の小説界の傾向を推すに足るべきものあり。さればこゝに二書の題目を掲げて論述するは、直接にこれを以て當時の創作の代表者としてのことにはあらず、間接に時代の趨勢を知らしめんが爲のみ。

夜半の寢覺は刊行の本なし。寫本にて傳はれるものも極めて稀に、余が知れる限にては、黑川博士の藏本五卷と中村秋香氏の藏本五卷とあるのみ。ほかに秋元子爵の珍什にかゝり、春日隆能の畫けりと傳ふる繪卷物一卷あれど、僅かに數節の殘闕のみ、その繪畫は數段に過ぎざれども、なほ賞翫に値すべし、文章としては研究に資するほどもなき斷片なり。黑川本と中村本とは卷數同じといへども、詳略差あり、大體の趣向は同じといへども、文章は全く異に、しかもいづ

れもその原本にあらざるが如し。

既に散佚しまたは殘闕せる古物語の面目を今日より窺ふに足るべき資料は、拾遺百番歌合、風葉和歌集、無名草子を最とす。拾遺百番は源氏、狹衣の和歌を左右に分ちて合せたる百番歌合に繼ぎたるものにして、左方を源氏とし、右方を夜半の寢覺、濱松中納言以下十種の物語として、その和歌を拔き集む。稱して定家の撰といへるが、もしさなくとも鎌倉時代の初期のものたるに相違なかるべし。風葉集は勅撰集の體に倣ひて、古物語の和歌を集めたるもの、文永八年に成れり。無名草子は源氏をはじめ諸種の物語を評論し、併せて道長時代の著名なる女房を批判したるものにして、建久前後の作に擬したれど、黑川春村は推して應永頃の書かといへり。古物語類字鈔例言今この三書によりて夜半の寢覺の原本の面影を朧ろ氣ながら推測するに、頗る黑川本および中村本に異なるところあるが如し。そのうち黑川本はやゝ原本に近く、中村本はなほ下りての世に改竄せるものなるべし。されど黑川本は中間に脱漏あり、かつ誤謬多くして、前後の始末を一貫して見るに難く、中村本は敍述簡なりといへども、一部の連絡い

とたしかに、終始よく調ひたるものなれば、次にこれによりて一篇の梗概を述べて後、黒川本および原本の異同に及ばんとす。

巻一　先帝朱雀院のはらからに、源氏の大臣といふありき。北の方二人、おのおの一男、一女を殘しおきて、早くうせぬ。一人は二位大納言の女にして、左衛門督と姉姫君とを生み、一人は帥宮の女にして、宰相中將と乙姫君とを生む。二人の姫君いづれも美はしきことよにすぐれたりといへども、わけて宮腹の乙姫君はたぐひなき姿なり、これをこの小說の女主人公とす。姉は琵琶、妹は箏を學びしが、乙姫君十二歲の八月十五夜、空を眺め居たるに、天人天降りて琵琶を敎へ、翌年のその夜、また降りて殘る五つの祕曲を傳ふ。かくてこの君は姿の光り輝くのみならず、樂の手までもめでたき限を盡して、この世の人とは見えず。その頃、內裏には關白の姫君中宮たり、東宮の母にして、勢他の女御の比にあらず。その兄の中納言年なほ二十に足らぬ程なるが、當時の若殿上人の何事もすぐれたるを數ふれば、第一に指をこの人に屈すべし。即ちこの篇の男主人公にして、爾來その官は時々に昇進しゆけど、便宜のため中納言もしくは主人公と

呼ぶべし。源氏の大臣二人の姫君に壻取せんとし、まづ次第のまゝに姉姫君の壻と中納言を定む。

乙姫君愼むべきことありて、九條あたりの叡山の僧徒の家に籠れり。折しも中納言は乳母の病を訪ひて、僧都の家の隣家に宿り、はからずも乙姫君をかいまみて、類なき姿にわれを忘れて押し入り、心のほどをかきくどきて、はかなき契を結びぬ。されどこれを乙姫君とは知らで、僧都の姪但馬守時明の第三の女なりと思へり。この女は關白の甥に式部卿宮の中將といへるが呼ばひけるを、父母從はせずして、源大納言の辨少將に與へんとせし人なり。中納言はひとへにこの女と思ひ、己が身の上をも隱して、宮の中將のやうに言ひなしぬ。

中納言はいよ〳〵姉姫君の壻となりしが、その新妻の姿はかなき契の女と似通ひたるところもあれど、なほかれには比すべくもあらず。思ひ餘りて、勸めて時明の女を中宮に宮仕せしむ、されど思ひきや、そはわが思へる人にあらざりきやう〳〵時明の女に尋ねて、戀人の乙姫君なることを知りて、なほさらに眷戀の情に堪へず。

乙姫君ははからざりし契に懷妊し、涙の乾く隙もなくて病み臥しぬ。心しりの女房など宮の中將の來れるを覗ひ聞けど、かの男君の聲にあらず。病はやうやうつらくなり行く。父大臣最愛の女の病を患ふるあまりに、おのれも病に臥して、嵯峨の廣澤に籠る。乙姫君は兄の宰相中將の才覺にて、石山に往きて病氣平癒を祈る山にて、そこにて身二つにならんとす。中納言これを尋ね往きて慰め、また姫君の身につけたる衣裝を得て、せめてもの思ひやりの種とす。月みちて乙姫君女子を生む、中納言これを請ひ取りて、わが父母に預けて養育を託す。源氏の大臣は病によりて出家せしが、その姉姫君夫の中納言と妹との中を覗ひ知りて、兄の左衞門督に告げ、兄はこれを父の入道に告ぐ。入道怒りて宰相中將を呼びて、仔細を尋ぬ。中將さることとなしと辯じ、入道はなほ過なきやうにとて、乙姫君を廣澤に迎へぬ。

卷二　中納言の叔父に左大將あり、幼女三人をもちたるが、北の方に後れて、心淋しく、乙姫君が父の許にある由を聞きて、これを妻に得んことを請ふ。朝廷にては殿上人うち寄りて樣々の物語のうち、宮の中將、嘗て乙姫君の琵琶を聞き

たるが、世に類なき上手なりし由を奏す。帝これを聞き、見ぬ戀にあこがれて、宮中に納るべしと望みたまふ。されど帝には旣に中宮います、年は長けたれど、左大將こそよからめとて、父入道これを許して、結婚の式を霜月と定む。
中納言これを聞きて悲に堪へず、乙姬君の侍女なる少將および宰相中將を招きて、情緖を訴ふること切に、やう〳〵少將に案內せさせて、密かに姬君の許に往き、交情纒綿、そこに籠りて三四日も歸らず。ある夜、その夢に、びんづら結ひたる童、これは御許なる玉の類なりとて、與ふるを見れば、史記の一の卷の玉の軸したるなり。女君、これこそ蓬萊の山の玉の枝よ、一枝は御許にあり、これは暫しわが許に置かれよ、遂には奉らんとて、懷に入れたる由見えぬ。
中納言愛情いよ〳〵募りて、今のうちに率て隱さんことを、少將にも宰相中將にも迫れども、みな從はず。遂にた大將は乙姬君を迎へて北の方とす。姬君はあるにもあられず、伏し沈みてのみあれど、大將は若く美はしき妻を得て、他愛もなし。ある時、大將新らしき北の方の乳房の黑きを見て、その懷妊したるを知り、北の方はこれを耻ぢて氣を失ひ、病重くなりぬ。かの夢の告はこの懷妊をいへ

るなりき。北の方遂に男子を生む。大將これも然るべき緣ならんと思ひ、こゝち惡しき色も見せずして、愛し育む。

卷三　人の心は移ろひ易きものなり、大將のあくまで親切なるに、北の方は漸ううち解くる色あり。大將晝はひねもす、夜は夜すがら、その許に居り、おのが女のことはさしおきて、片時も北の方の傍を離れねば、中納言の音信はおのづから傳へられずなりぬ。その頃、中納言の父の關白は薨じ、大將ついで關白となり中納言はさきに大納言に進み、今また左大將となり、人々の官位多く昇進す。關白は北の方を愛するあまり、これに仕へし侍女の身の上をも定めやりぬ。少將は尾張守の妻となりて下り、對の君は藤中納言の妻となり、この中納言は大貳となりて、妻と共に下りぬ。かくて主人公は音信傳ふべき媒も切れて、悲むこと甚し。せめては慰むやとて、故中務卿の姬君に言ひよりしに、あまりに物あらはに輕々しければ、心とまるべうもあらず、更に朱雀院の女一宮に思を運びぬ。朱雀院もこれを許したまひて、婚嫁の日は殆ど定まりぬ。時に主人公の北の方即ちかの姊姬君よ、容貌はすぐれて美はしかりしかど、性質の愛嬌なくやゝ頑

なるぞ、玉に瑕なりし。この頃、珍らしく懷妊せしが、女一宮の緣談など聞いて、物心細く、久しく中絕えたりし妹を招きて、遺言し、男兒を生みて、遂に產後の惱に歿す。

時に齋院うせたまひ、主人公と結婚の約ありし女一宮これにつぎて齋院となりぬ。その頃、關白の長女は旣に十七歲ばかりなるが、關白はこれを主人公に與へんとす、主人公は辭して帝に進らせたまへと勸む。このあたり節を結ばて卷は終り、事はおのづから次の卷に續きぬ。

卷四　帝に進らせたまへと勸むれども、關白は聽かず、なほ主人公に與へんとて、婚嫁の日をさへ定めぬ。人世は無常、かゝるうちに關白はからず重患に罹りて、今日をも知らず、たゞ北の方のことのみ氣遣はしく、よく〳〵北の方にも、甥なる主人公にも、遺言して薨ず。かくて主人公繼いで關白となる。相思ふどちの、男はその妻死し、女はその夫歿して、久しき契はまた繰り返されぬべきか。主人公は二人の間に生れし男兒を己が許に迎へ、また北の方にも、來りて共に姬君を扱はんことを勸む。されど北の方はうせて程なき夫の情を懷うて、今は思ひ

もよらず。

危かりしは、かの宮の中將はじめよりこの北の方に志あり、たばかりてこれを奪はんとして、過ちて故關白の中君を連れ出す。帝は北の方を尙侍にせんとおほせあり、北の方辭しておのれの代に、第一の繼女を進む。よりてこの大君尙侍に定まり、中君は宮の中將の妻となり、三の君も身のおちつき方づきぬ。北の方かくてよくその繼女だちを後見し、世話し終りぬ。主人公辭を盡して言ひよれど、なほ靡きも果てず、過ぎ去りし夫の愛、相思ふ人の情、かれこれと思ひ合せて、心は千々に碎く。

卷五　尙侍は參內して弘徽殿に居る。帝かの北の方の靡かしがたきを憾とすれども、この尙侍の美はしきに心を慰めたまふ。主人公はなほ北の方に勸めて、たとひわれを思はずとも、姬君を哀とは見ずやと、切に促がす。かくても應ずる色なきを以て、その兄の中納言(もとの宰相中將)に說く。中納言これを父入道に語らふに、入道も世の人ぎゝやゝうしろめたけれど、さりとて許さずして、却つて過あらば如何せん、はじめよりの契ならば、それもよかりなんと、心折れたり。

入道かく許せば、北の方もせんすべなし、遂に主人公は尚侍の許より退出する北の方を要して、直ちにわが家に迎ふ。

かくて二人の中らひ日々に睦じく、北の方また懷妊す。懷妊に惱める時、故關白の物の怪現はれて、夫婦の交情を羨むことあり。女兒出産す。主人公はその大姫君を外祖父なる廣澤の入道に對面させて、昔を語る。尚侍も若宮を生む。主人公の大姫君十歳にて裳着、叔母の中宮腰結す。北の方また懷妊、主人公具して石山に詣で、今昔の感に堪へず。男兒出生。大姫君は東宮の女御となりぬ。その後、朱雀院崩御、帝は東宮に讓位あり、東宮の女御立后、尚侍の若宮東宮に立つ、いづれもめでたき限なり。

中村本の梗概凡そかくの如し。更に黑川本を見るに、事實の大體は概ね中村本に同じ。その卷一は中村本の一の過半に當り、その二は彼の一の後部と二の前半とを含み、その三、四、五は合せて彼の五に當る。中村本の二の後半および三、四の記事は、黑川本には全く闕けたり。中村本は「紫藤の露の底に花の色衰へ、翠竹の烟の中に鳥の聲も稀になりゆけば」といふ句を以て全篇を起し、「かやうに夢

は空しからぬことと、ありがたくぞ侍りしとぞ」といふ文にて結びたるに、黑川本の冒頭は「人の世の樣々なるを見聞きつもるに、なほ寢覺の御なからひばかり、淺からぬ契ながら、世に心づくしなる例はありがたくもありけるかな」といひ、結尾は「この世はさばれや、かばかりにて、あらぬこと多かる契にて止みもしぬべし、後の世をだにいかでと思ふを、さすがに すが〳〵しく思ひたつべくもあらぬほだしがちになりまさるこそ、心うけれと、夜の寢覺絕ゆるまなくとぞ」とあり。兩書ともに文章は全然相違すれど、首尾は全したゞ黑川本は敍事は詳細ながら、中間に大缺陷あり、これが爲に委細の始末を辨へがたしといへども、前後を綜合して考ふるに、大體の事歷は中村本に同じきが如し。異なるところを求むれば、源氏の大臣の四人の子女は、中村本には、二人の北の方の腹におの〳〵男一人、女一人としたるに、黑川本には、北の方の一人は男二人、一人は女二人を生みたりとしたるほかに、淨寫の誤ともいはばいふべき數字の相違などのあるのみ。

黑川本の和歌はすべて七十五首、中村本は百十七首、そのうち二書全く一致す

るは、僅かに一二首に過ぎず。他は彼此似通ひたるところもなきものか、もしくは改竄を經たるものなり。その改竄せる一例を見よ。

黑川本 はかなくて君に別れし後よりは、ねざめぬ夜なく物ぞかなしき。

中納言

中村本 うつゝとも思ひぞわかぬ、うたゝねの床にまぎれし夢の寢覺は。

同上

原本夜半の寢覺の歌の、拾遺百番歌合にあげたるものの二十首（端書に別に四首あり）のうち、黑川本のこれに一致するものは八首、（古物語類字抄に七首とあり）中村本は三首なり。風葉集にあげたるものの二十二首（類字抄には二十三首とあり、わが計算の疎忽なるにや）のうち、黑川本には六首、（類字抄には七首とす）中村本には二首一致す。中村本が歌數の多きにも似ず、相合ふもの少きを以ても、黑川本が原本に近く、中村本がいたく改竄を經たるものなることを知るべし。もと黑川本が完備して、春村の推考せる如く、全部十五卷もありとせば、これすなはち寢覺の原本にあらずや。この問も理なきにあらずといへども、余はなほ然りとせず。載するところの和歌、改むること中村本の如く

はあらずといへども、なほ多少原本に異なるものあり。

拾遺百番歌合　漕ぎかへり同じ港による舟の、渚を誰と知らずやあるらむ。　時明の女

黒川本　漕ぎかへり同じ港による舟の、渚はそれと知らずやありつる。　同　上

中村本　舟よする同じ港の內なれば、わたのはらから遠からめやは。　同　上

これらを以ては、なほ黑川本の甚だ原本に類したるを見るのみといふべけれど、黑川、中村兩本は大體の事實において齟齬するところなきに拾遺百番歌合等によりて瞥見する原本は、いまだ兩本に見ずしてかつ異なる新事實の存するにあらずや。

さらば原本と現存の兩本と相違するところは如何。固より精密なる比較はなし難く、また大體の骨子とするところは同じ。男主人公(はじめ中納言、のち關白)と女主人公(源氏の大臣の乙姬君、のち寢覺の上)と相思へども、種々の障礙あり

てその中を隔てしが、男が慕ふ心は終始一徹、一心は岩をも徹して、遂に夫婦となりぬといふを以て、一篇の本旨とす。天人が降りて乙姫君に琵琶を敎へたる、二人が名も知らではかなく契りて、重ねて相見ることの難き、主人公と宮の中將とを對照したる、乙姫君が廣澤に籠れる、思はざるに年長けたる大將の妻となれる、そのほか姉姫君、宰相中將の擧動など、彼此いづれも相似たるが如し。しかれども(一)現存の兩本にては、乙姫君帝に思はれ奉りしかど、入內せざりしに、原本にてはしかとはいひ難けれど、帝に參りて後、內裏を逃れ出でたるやうに見ゆ。(二)現存の兩本にては、主人公は女一宮を賜はらんとしたるが、宮は齋院に定まりて、降嫁の事おのづから止みぬ。さるを原本にては、主人公と女一宮とは一旦婚嫁せしなり。さて宮を愛せずとて、主人公は院の勘當を被りたるが如し。(三)現存の兩本にては、女主人公は運命に服從して、靜かに時機の囘轉を待ちしかど、原本にては、死したるまねして、老いたる夫の許を逃げ出でたるが如し、これらのほかに、現存の兩本になくして、原本にある人物には、冷泉院、白河院、まさこぎみあり、事實には右衞門督が出家することあり、右大將と女三宮との關係

あり、右大將の北山に籠れることあり、人物事實ともに複雜なること、原本は遥かに現存の兩本にまさりしなり。たゞその今に存せず、存するものは原形を失へるを以て、推論も容易ならずといへども、白河院などの名あるによりても、余は更科日記の奥書の如くならずして、夜半の寢覺はむしろこの時代になりて出で來しものならんと考ふ。

寢覺の結構は例の如く源氏に得るところ多し。主人公の實義なると、宮の中將の好色なると、相對せしめたるは、源氏と頭中將、薫大將と匂宮の對照に似たり。また女主人公が年長けたる左大將に嫁し、繼女三人を後見したるは、玉鬘の君が髭黑の大將に嫁して、その子女を扱ひたるに類す。たゞ此はその女を侗侍に申しなし、彼はみづから侗侍となりぬ。寢覺はまた狹衣に得るところもあるが如し。女主人公は狹衣の女二宮と類似の點少からず、いづれも測らぬ一夜の契に懷妊し、狹衣にてはその母憂へて病歿し、寢覺にてはその父病んで出家し、二女ともに嵯峨に籠る。その懷妊を乳房の黑さによりて見あらはさるゝも、些々たる事ながらまた相似たり。

かくの如く寢覺もまた源氏等の古物語に眩惑し、これに倣ひたるものなるが、力めてその摸擬の跡を隱さんとして、事實を交錯せしめ、變幻出沒、人を驚かしむるを事としたるが如し。しかるに後の世に至りて原本を改造し、怪奇なるを平坦にし、複雜なるを單簡にし、變化なく、波瀾なく、人物事實多く抹殺せられ、二主人公をしていづれも徐ろに時運の開展を待たしむるところ、自然なるが如くして、平板凡庸の嫌あり。案ふに原本の事變を好み、改竄本の和平を愛する、おのおの時代思潮の然らしむるところなり。されどこゝにはなほ斷言をなすを得ず、原本の始末の明かならぬと、現存の本の時代の慥かならぬとは、いまだ確乎たる論を定むる能はざれども、とりかへばやを讀むに至つて、余が推定の過たざるを見るべし。

第六章　とりかへばや

とりかへばやは普通に傳ふるところ四卷あり、別に山岡俊明の校正せるもの

ありて、五巻に別つ、されど刊本なし。明治に至りて日本文學全書および國文大觀のうちに收めて刊行す。例によりてその大體を極めて簡易に述ぶべし。

何時の頃にか權大納言なる人ありき。異腹に男女の子二人あり、男は容貌性質すべて女の如く、女は行ふところ好むところ男の如し。已むを得ず男を女にしたて、女を男にして育つ。男の官名など時々に變れど、便宜に從ひて、このにせ男君を右大將といひ、にせ女君を宣耀殿尙侍といふべし。その頃、大將と並びて一人の上達部あり、式部卿宮の子にして、當時の若殿上人にては、最もすぐれたる人にて、好色の名高し、これをも前後通じて中納言とのみいふべし。

大將兄妹の父の兄に右大臣あり、女四人をもつ。大君は帝の女御、中君は東宮の女御なり。父大臣わけて四の君の美はしきをめでいつくしみて、誰をがなその夫にせんとて、遂に右大將を壻取す。中らひは甚だよけれども、大將のふるまひあまりにのどやかに、何となく物足らぬ有樣にて、月に一度は物の怪ありとて、乳母の里に籠る。また先帝朱雀院は女一宮を愛して次の東宮とし、宣耀殿尙侍をその後見とす。

中納言は尙侍の美はしきを傳へ聞き、大將に媒を賴めどもかひなし。ある時、大將を訪ふに、不在にて、四の君ひとり物淋しげなり。よき隙なりと心動き、押し入りて挑む。四の君心弱くて從ひしが、これまでの習に、男はみな大將の如きものと思へるに、例に異なるふるまひかなと、淚のみこぼれぬ。もとよりしばしばもあはぬに懷妊す。大將怪しと見て、やうやう密通の敵手は中納言と知りぬ。されど顯はし立てていふべくもあらず、何となく世の中ものうくなりぬ。

先帝(朱雀院の前の帝なるべし)の三の御子といひしは、遊學生として唐に渡り、かの國の一の大臣の女に婚して、二人の女子を設けしが、妻を失ひて後、娘を伴ひて歸朝して、吉野に隱れ居たまへり。大將この宮の道心深き由を聞き、尋ね往きて、一日に十年の親の如く、しみじみと語らふ。

四の君は女子生みぬ。色ごのみなる中納言はなほ尙侍をかきくどけど、聽かれず、よりて大將を音信れて、更に媒を賴む。折しも暑き日の、衣裝も薄くあらはなるに、中納言親しきまゝに亂れより、遂に大將のまことは女なるを見あらはして、思はぬ契を結ぶ。大將あさましくも懷妊す。中納言しきりに率て隱してんと

迫る。已むを得ず、吉野宮を訪ひ、兩親、四の君、尙侍などにもむの〳〵それとなく暇を告げ、中納言が設けたる宇治の隱れ家に籠りて、女の姿に復りぬ。京には大將失せぬとて、大さわぎになり、世の人は四の君が中納言と密通したれば、大將はそれを悲みてうせぬるなりと噂す。四の君の父立腹して、女を勘當す。さてのちもなほ四の君の中納言にあふことあり。

尙侍は行方知れぬ大將を尋ねんとて、その由密かに母に告げて、男の姿に復り、嘗て大將の往きしといふ吉野に赴く。途上、宇治の小柴垣に尋ぬる人の影ほの見しかど、彼方も此方も姿かへたりとは思ひよらねば、そのまゝに過ぎぬ。大將は男兒生みぬ。尙侍は吉野に尋ね着きしに、大將より手紙をこゝに送れるによりて、その所在を知り、こゝに兄妹首尾よく對面することを得たり。かくて天狗の魔障の爲にこれまで男女姿を變ぜしものの、今はじめて取り替へて、尙侍は大將となり、大將は尙侍となり、男は男、女は女の裝に改まりて、大將はまづ京に歸り、尙侍は吉野に至る。

中納言は宇治の女君なくなりぬとて、足ずりして悔めども、かひなく、とり殘さ

れし男兒を抱きて、泣くより外のこともなし。四の君また出產せしが、病により
て勘當を許さる。
大將は重ねて吉野に至りて、妹の尙侍を迎へ歸る。大將今はた實の契を四の君
に結ぶ。帝は尙侍をかいまみて、眷戀の情に堪へず、屢〻御書を送りて、遂にこれも
めでたき契を籠めたまふ。大將は二條堀河に家を設けて、吉野の二人の姬君を
迎へ、姉姬君を北の方とす。中納言今は四の君にも逢はれず、大將を今なほ女ぞ
と思ひて、恨みても、何の手ごたへかあらん。されど大將もさすがに哀と思ひて、
吉野の妹姬君をその妻として、宇治に殘されし男兒を養育せしむ。東宮はさき
に後見たりしにせ女君の種を宿して、男子を生み、退いて女院といひ、尙侍の腹
の若宮代りて東宮となり、尙侍は中宮となる。吉野の姉姬君ひとり子生まず、他
は中宮はじめ子女多く、大將、中納言ともにめでたく榮えぬとなり。
以上を今傳はれるとりかへばやの梗概とす。されど鎌倉時代に旣に同名異物
の二種の本あり、風葉集、無名草子もとりかへばや、今とりかへばやの二類を擧
ぐ。さらば今日傳はれるところ、卽ち今略述したるところの本は、そのいづれに

属するか。俊明校正本の序には、これを今とりかへばやとす。されど黒川春村はこの説を委しからずとして、辯じて曰く

抑この今本の歌、惣計八十四首あり。然に拾遺百番歌合に載たる八首のうち、二首は今本の卷の一のはじめのかたに見ゆれど、其餘六首は卷中にみえず。又風葉に取かへばやの某とて載たる歌十三首あれど、今本にあふものはたゞ一首のみなり。又風葉に今取かへばやの某とて載たる七首のうち、四首は今本にあへり、殘り三首は卷中に見えずその見えたる四首は、一の卷の末に一首、二の卷に一首、三の卷に二首なり。是によりて熟考するに、今本の卷の一のはじめの二十葉ばかりは古とりかへばやにて、其末より次々の卷等は今取かへばやなる事、炳然し。但みえぬ歌の三首あるによりて、今取かへばやも亦今一二卷ありけるが、散失せしものなるべき事しるかり。扨古取かへばやは狹衣などにさしつぎていできしものか、百番歌合、色葉等に載たれば、何れにも鎌倉以前のものとこそおぼゆれ。今とりかへばやは鎌倉の中頃なるべし、詞づかひの古からぬを見ても、さやうにおぼゆるぞかし。風葉集を撰べり

し頃は、兩本ならびて行はれしなり。

この說甚だ委しきやうながら、必ずしも信じがたし。古本とりかへばやの殘闕と今とりかへばやの殘闕と交錯して世に傳はり、前後一致して重複のところもなく、木に竹を繼げる感もなきは、餘にあつらへ求めたるが如き偶然にあらずや。春村は卷一の初の二十葉ばかりを古本とす、されど新本の卷一とても、これより外にあるにはあらじ。今とりかへばやといふも、大體は古本に基き、不可なしと見たるところはその儘に存し、意に適はざる處々を改めたるものなるべし。夜半の寢覺などのいたく改竄せる本も、なほ原本と同じ歌を存するを思へ。されば春村の論の如く、とりかへばやのはじめを古本、後を新本と定むるは當らず、古本のまゝなるところと改竄せるところと入り交れるが、すなはち今とりかへばやにして、今日傳はれるものこれなり。さらば今とりかへばやの歌とて、風葉集などに掲げたるものの現存の本に見えざるは、如何といふに、これは固より現存の本に缺陷あるが爲なるべし。この書を讀むに首尾はまづ整ひたれど、中間にところどころ連絡の不十分に、脫漏せるところあるを覺ゆるなら

ずや。

とりかへばやはこれも時勢の傾向を漏れずして、源氏摸倣の痕歴々たり。右大將と中納言とはすなはち十帖の薰大將と匂宮とにして、吉野宮は勿論宇治の八宮に當り、しかも濱松中納言の吉野の尼君と極めて相似たり。されど筆法の源氏と巧拙相異なるは、免るゝこと能はず。人情の微を穿てるところなく、同情の禁じ難きところなく、彼此人物の性格十分に發揮せず、たゞ敍事を怪奇にして、前後應接に暇あらしめず、つとめて讀者の心を欺瞞し、眩惑して、小說の功成れりとす。その奇變を好むや、殆ど亂に近づき、醜穢讀むに堪へざるところ少からず。敢て道義を以て小說を律せんとするにあらず、その毫も美趣の存せざるを難ずるなり。殊に甚しきは、中納言が右大將の妻の四の君と通じ、また右大將と契るところなど、たゞ嘔吐を催ほすのみ。

かくいふは、今とりかへばやによりて論ぜしなり。さらば古本とこれと如何なる點において相違せりや。無名草子ほどその消息を漏せり。まづ古本とりかへばやの一斑を說いて曰く、

とりかへばやこそはつゝきもわろく、物恐ろしく、おびたゞしき氣したる物ざま、中々いと珍らしくこそ思ひよりためれ。思はずに哀なる事どもぞあんめる。歌こそよけれ。四の君こそいみじけれ、あらまほしく、よき人にて侍り。また尙侍の男になりて後の人がらこそよけれ。またおくになりて、この人々の子どもなど多く、若上達部、殿上人內の御物忌にこもりて、殿上にあまた人つどひて、物語のさたなどしたるこそ、雨夜の品定など思ひ出でられ、いと珍らしく、をかしといひつべきに、まねび損じて、いとかたはらいたしともいひつべし。女中納言こそいといみじげにて、もとゞりゆるして、子うみたるなど、また月每の病いときたなし。四の君の母中將の法師になりたる、いと哀なり、雪の朝に簑きたるなどよ。女中納言の死にいりよみがへるほどこそ、おびたゞしく、恐ろしけれ。鏡もてきて、萬のことくらからず見たるほど、まことしからぬ事どもの、いと恐ろしきまでこそ侍れといへば、云々。

次に古本と新本との比較に及び、「唯今きこえつる今とりかへばやの、本にまさり侍る樣よ。何事も物まねびは、必ずもとには劣るわざなるを、これはいとにく

からずをかしくてこそあめれ。詞づかひ、歌などもあしくもなし。おびたゞしく、恐ろしきところなどもなかめり」とて、なほ二書の人物を對比し、大體において今とりかへばやのまされる所以を說きたり。

されば二本は根柢において異なるものにあらずして、新本は古本に多少の修正を施したるものなり。すなはち大將と尙侍と男女とりかはるところ、自然にして、かれらの人物もこと〴〵しからず改められたりといふ。これらによりて察するに、古本はなほ一層矛盾衝突多く、變幻出沒目を驚かすものなりしを、今とりかへばやはこれを不可として、やゝ自然の體に改めたるなり。されどなほもとのおどろ〳〵しき結構の存するは、原作が原作なるだけに、已むを得ざりしものならん。さてこの二本の時代につきては、春村の說に、古本は平安朝の末に成れるものにして、今とりかへばやは鎌倉時代の中頃に出でたるなるべしとす。古本といふも、狹衣、濱松などの後に出でたるものなるは疑なかるべく、さはいへ明月記にも引かれたるを思へば、概ね平安末期に成れりとすべく、またこれを改竄せる今とりかへばやが、風葉集に引かれたるを見ても、春村のこの

說の妥貼なるべきを信ず。

以上述べたるところによりて、更に源氏物語以來の傾向を觀察するに、源氏は殊に奇を求めたる跡なく、たゞさま〳〵の女子を集めて、個々の性格を描寫し、社會の反射鏡として、よく千狀萬態の人情を活躍せしむ。宇治十帖に至りて、叙事の單調なるは讀者の倦怠を招かんことを慮りて、やゝ事實に變化を求めたり。その後の著者、紫式部の才なく、人情の機微を闡くこと能はざれば、已むを得ず記載の事實に波瀾を求めて、江湖の好奇心に投ぜんとす。かくて狹衣は人生を活寫せることは、到底、源氏の十が一をも庶幾すべからずといへども、趣向の整備して、事實より事實を生じ、一齣は一齣より改まるところ、頗る見るに足る。濱松が舞臺を支那に求めたるも、また奇を求めたる結果なり。この傾向は平安末期に至りて益〻甚しく、性格の描寫を忘れて、ひたすら事實の奇なるに人を驚殺せんとす。寢覺のそら死といふは、現存の本にはなけれど、またこの弊に陷れるものなるべし。而して變幻怪奇の極端に奔れるものは、すなはちとりかへばやなり。當時の風俗、貴族は男子も白粉臙脂を裝ひ、翠黛鮮かに、鐵漿黑々と、冠は

塗桶の如く、袍は糊こはく張りて、荒ぼりの木像の如く、强裝束の體、優美の境を超えて、怪醜に傾きぬ。形式の工夫も過ぎたるは、服飾においてかくの如し、文學何ぞひとりこの數に漏れんや。風俗の然るが如く、平安末期の小說は決して健全なるものにあらず。才なくして奇を求む、奇は奇なりといへども、幻怪なる立案の、たゞ不快の感を與ふるに過ぎず。これを後世の戯曲に喩へよ。近松の世話淨瑠璃は事實の變化に奇を衒ふ念なく、人情の琴線に觸れんことを主としたるに、その末流は丈夫忽ち美人に變じ、孝子急に强盜に化するなど、口さきの轉化にのみ力めて、却つて看客の同情を引き難くなりしに等しとせんか。

かくして平安末期の小說は出沒變化、奇に流れ、怪に趨りて、一時の輕佻浮華の風と呼應したるが、鎌倉時代のはじめ頃に至りて、形勢の漸く轉ずるあり、從來の物語のあまりにめざましくおどろ〳〵しきに飽きて、實世間にさもあるべしと思はるゝ結構を喜ぶこととなりぬ。この風潮に應じ、古本とりかへばやに對して、今とりかへばやは成れるなり。寢覺の削減改竄せられたるも、蓋しまたこれが爲なるべし。されど精神の宿るなくして、自然を求むるや、平穩は轉じて

平板となり、高雅を得ずして、凡庸に歸す。この形勢の移動は小説和歌ともに同じ。否、小説は材料少くしてなほ説明に艱むといへど、去つて歌壇を見れば、誰かわが論を妄誕なりとせん。これをわが論といふは非、古來の學者多くは既にこの形勢に就いて説くところあり、いまだこれを以て小説に推し及ぼさざりしのみ。さらば次にこの時代の和歌を論ぜしめよ。

小説を終るに當りて、堤中納言物語に就いて一言せざるべからず。この物語は短篇十章より成り、文章勁拔、構想また奇警なるものありて、他に比類なきもの、從來の學者これについて説くもの多からざれども、頗る研究の價値あり、世にこの物語を堤中納言の作と稱す、堤中納言といへるは藤原兼輔にして、延喜頃の人なり。されど物語はかくの如く古きものにあらずして、余はむしろ鳥羽天皇または近衞天皇以後なるべしとす。されど書中の數篇の同時に成れるか、また代を隔てたるものか、いまだ詳かならざるところあり。こゝにはしばらくこれを省いて後日の考を俟つ。

第七章　後拾遺和歌集と當時の歌人

古今集以來、和歌の流行は聊かも衰へず、むしろ年々に上下の間に弘通するのみなりしかど、拾遺集の後、勅撰の擧なきこと八十六年、歌壇に着目すべき一轉機もなかりしが、平安末期のはじめに至りて、後拾遺集の撰あり。これより斯道は更に隆盛の狀況を呈し、歌人輩出、歌論勃興、以て鎌倉初期の新古今時代に接す。後拾遺はその本來の價値よりいへば、極めて崇重すべきものにあらずといへども、文運の推移を劃すべき一轉機の代表者たることを忘るべからず。長明無名抄に「後拾遺の時、今少しやはらぎて、昔の風を忘れたり。やゝその時の古き人などはこれを承けざりけるにや、後拾遺姿と名づけて、口惜しきことにしけるとぞ、先達語り侍りし」といへるも、この風潮の變化を示せるなり。

後拾遺和歌集二十卷、こは承保二年、白河天皇新たに撰集奉るべき由の勅を權中納言藤原通俊に下したまふ。されど政務繁劇、荏苒九年を過ぎしが、應德元年、通俊參議となりてより閑暇を得て、拮据編纂に從事し、それより三年を經て、同

三年九月十六日、撰成りてこれを奉上す。（歴代和歌勅撰考に本集の序を引いてこの時代を難じたれども、これ却つて輕卒にも序を讀み誤りて論を立てたるもの、取るに足らざる謬説なり）勅撰はやゝ久しく中絶したりしに、今この擧あり、世人は好奇の眼を光らして諦視し、その不備の點を剔抉して、これを辯難するもの多し。或は多田頼綱はさしたる和歌の名譽にもあらざるに、その詠を選ぶこと多きに過ぐといひ、或は津守國基小鰺を撰者に賄し、これによりて己の歌を多く選ばるゝことを得たりとて、小鰺集と諢名す。されど頼綱の詠といふも、四首に過ぎず、國基また著名の人なるに、その歌の選ばれたるは三首のみ、清輔がこれらの非難を以て、尊耳卑目の誤なりといひしも、故なきにあらず。或は曰く、當時絶詠のきこえある三首を漏せり、中にも秦兼方の歌、

　去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ。

といへるは、作者が得意の吟にて、これを集のうちに載せんことを請ひたるに、通俊こそ。の字不快なりとて取らず、兼方退いて語つていふ、通俊をすぐれたる人と思ひしに、物知らぬ男かな、四條大納言の第一の秀歌に、「花こそ宿の主なりけれ」とあるを、いかに心得たるかといへりと。或は曰く、通俊我意に任せて、他の

歌に雌黄を入る、よくしたるもあれど、却つてわろくしたるも多し。大江嘉言の「梅の香を軒に嵐の吹きためて」の、軒にを夜半のと改め、藤原隆經の「春毎に空の景色のかはらぬは」の空を野邊と更へたるが如き、そも〳〵何の兒戲ぞやと。また後拾遺集の成りて後、幾ばくもなく難後拾遺の出づるあり。集中の和歌のよろしからずと思へるを拔きて、非難したるものなり。蓋し歌道に辯難の書あるは、これを始とすべし。世人がこの著を以て當時の名匠源經信の手に成れりとするは、蓋し事實ならん。かくの如く攻擊の矢のこの一集に向ひたるは、一は時勢の辯論を好むに至りしよりなるべく、一は通俊がいまだ當時無雙の聲望を擔はざるに、他をさしおいて、一人にしてこの特命を蒙りしより、世の嫉妬を買ひたるものなり。これらの惡評を得たりしかば、通俊ひそかに無念に念ひ、貫之が新撰集の例に倣ひて、更に後拾遺の名歌を選拔して、續撰和歌集を編したりといふ。

後拾遺集における部門の分類は、概ね古今以來に異なるところなけれど、雜の部に神祇、釋敎と俳諧との加はりしことを忘るべからず。拾遺に神樂歌ありし

が、これを以てなほ宗教的臭味ある和歌を集めたるものとはいふべからず。この時代に及びて、佛教の感化は和歌にも現はれて、釋教の一部を設けざるべからざるに至り、これに對比するが爲に、神祇の門をも立てたるなり。俳諧は既に古今にその目見えて、その後の集にはなかりしを、こゝに復興したるは、また和歌の流行が種々の體を試みるに至らしめしことを證するに足る。さるに公任さへ辨へずして取らざりしものを、通俊がいかに心得たるにや、經信は嘲りて、俳諧歌を入れたるにて、集のわろさも知らるといへりなど評する八雲御抄は、頑陋取るに足るざる論なること、いふまでもなし。

集中に選みたる作者およびその時代に就いては、撰者みづからその序に編輯の方針を述べて曰く、

古今、後撰に入りたる輩の家集は、世もあがり、人も賢くて、善惡定めんことも憚あれば除き、まづ梨壺の五人を始として今の世の人に至るまでの歌を取れり。世の人古を尊み、今を卑みて、近世の歌に心をとゞめざるべけれど、なほ後世の爲にこの集を撰べるなり。萬葉、古今、後撰、拾遺、そのほか公任が三十六

入歌仙、十五番歌合、和漢朗詠集、和歌九品、深窓祕抄、金玉集、能因が玄々集等にのりたる歌は繰り返し取らず。また麗花集、山伏集、樹下集は編者を知らず、八雲御抄には樹下集を多々法眼源賢の作とせり これらの集なるは、必ずしも既にのりたりとて除かず、中にもよきは載せたり。大意を取る

かくいへるもしるく、本書に現はれたるところを見るに、第一に注意すべきは、近世の和歌を選べるにあり。その頃の歌人のうち經信六首、匡房二首のほかに、撰者もわが歌五首を擧ぐるが如きは、和歌の勃興して、時人が自覺力の增加したる爲にあらずして何ぞや。それ然り、然りといへども、これいまだ一を知つて二を知らざるもの、自覺力增加の兆あるは疑なしといへども、一時の名匠と稱せらるゝ人も、その作僅かに數首に過ぎず。當時の形勢、故實先例の沙汰喧ましく、上代を渴仰する念は毫も減退せず、たゞ延喜以前は世あまりに隔たり、またその世の作は既に秀歌は多く拔かれぬ。しかるに寬弘以來は一度も勅選の擧なく、その作一首も手を付けられず、しかも道長時代は藤原極盛の世にして、名聲嘖々たる大家極めて多かるにあらずや。こゝにおいてか、後拾遺は力をこの

時代に專らにす、榮華物語、大鏡が道長を主としたると、趨勢恰も相似たり。されば、この集は平安末期のはじめに撰せられたりといへども、その中の和歌は寛弘前後のものも最も多く、選拔の方針は、もとより白河天皇の世の風尙に從へりとはいへ、その內容の過半は道長時代の製作なりしなり。道長時代は才女名媛の輩出せし時なれば、この集にも、多數の作あるはこれらの婦人にして、和泉式部を最とし、次いで三十首以上の收められたるは相模、赤染衞門と男子に能因法師あるのみ。またこの集を見ておのづから注意せらるゝは、皇室の御製の見ゆることとなり。花山、一條、三條、後朱雀、後冷泉、後三條、白河の諸帝、小一條院、東三條院、上東門院、陽明門院等、一人の作としては少きにもせよ、これらの方々を多く集めたるを見ば、當時の風潮、和歌が宮廷の才媛のものたると同時に、また最上貴顯の翫賞に歸したるを思はざるを得ざるなり。

後拾遺に選ぶところは近世の詠なり。さらばその近世の詠が、古代に異なる點は如何。思ふに後拾遺の作者が師とし仰ぐところのなほ古今にあること、後撰および拾遺の時代に異ならず、かれらは力めて延喜の作者が流暢平易の趣に

倣ふ。もとより時勢の轉移は否むべからず、風尚漸次に動きて、裏には新意を帶び、變調を呈し來りて、古今を遠ざかること、拾遺より更に一歩を進むといへども、表はなほ古格に背かざらんとすることは、いふにしも及ばず。集中、時人が絶唱と稱したる二三の例を見よ。

心あらむ人に見せばや、津の國の難波あたりの春の景色を。（前に能因の傳の中にも擧げたり）　能因

すむ人もなき山里の秋の夜は、月のひかりも淋しかりけり。　藤原範永

淋しさに宿をたち出でて眺むれば、いづこも同じ秋の夕暮。　良暹

あふまでとせめて命の惜しければ、戀こそ人の命なりけれ。　相模

吾のみと思ひしかども、高砂の尾上の松もまだ立てりけり。　藤原義定

これらを以て後拾遺の正調とす。これらの正調の中に數へて、自讃して措かず、他もまた敬重せしもの、

朝まだき八重さく菊の九重に、見ゆるは霜の置けばなりけり。（内裏の菊を詠じたるなり）　藤原長房

木の葉散る宿は聞き分くことぞなき、時雨する夜も、時雨せぬ夜も。

源　頼　實

の如きは、理窟に陷り、凡俗に流れて、何等の趣味をも感ぜず。古今集は敍情を主とし、穩雅を尙べとも、主觀の弊は理窟なり、和靜の弊は凡俗なり、末學の流弊多きことを知るもの、こゝに一變して淸新の調を加へんとす。この風潮は既に拾遺に兆せりといへども、後拾遺に至りて形を成す。後拾遺の長所はこゝにあり、尙古派に彈指せられたるもこゝにあり。いまだついで起るところの金葉、詞花時代の新體の如きに至らずといへども、新體の萠芽は、この時に含まる、後拾遺は實に古風の殿將にして、また更新の先鋒たりしなり。何によりてかこれを更新の先鋒と見る、敍景の詠の增加せしが如きは、その第一の特徵にあらずや。

難波潟、空吹く風に波立てば、つのぐむ葦の見えみ見えずみ。　よみ人しらず

さ夜ふくるまゝに汀や氷るらむ、遠ざかりゆく滋賀の浦浪。　快　覺

新古今時代の藤原家隆が名譽の作なる「滋賀の浦や遠ざかりゆく浪間より、氷りて出づる有明の月」も、快覺の詠に本づきたるものと見れば、さしたる秀逸と

も覺えず。

沖つ風吹きにけらしな、住吉の松の下枝をあらふ白浪。　源　經信

この詠は作者が古今の「住吉の松を秋風吹くからに、聲うちそふる沖つ白浪」に比すべしと自讃せしものなれど、既にこの古歌ありて、しかもその上に出づるを得ず、また相並んで惠慶法師の「住吉の浦風いたく吹きぬらし、岸うつ波の聲しきるなり」の詠あるを思へば、殊に經信の爲に頒辭を呈する能はざるなり。

世の中を思ひ亂れて、つく〲とながむる宿に秋風ぞ吹く。　源　道濟

情景相待つて、また佳調と推すに憚らず。

山高み、都の春を見わたせば、たゞ一むらの霞なりけり。　大江正言

白妙の衣の袖を、霜かとて拂へば、月のひかりなりけり。　藤原國行

これらは敍景の上に比喩を構へて、頗る修辭の巧を弄したるを見る。蓋し修辭に苦心するに至りしは、また歌風更新の特徴と稱すべし。さきに拾遺を論ずるに當りて擧げたる、懸詞を喜び、對句を用ひ、頓呼法を以て初句を切るなどの類は益〻多し。子の日の歌に「朝綠、野邊の霞のたなびく゜に゜、けふの小松を任せつるか

な」は一語を二意に懸けたる縁語なり。「ひかぬ例にひかるべきかな」「たのむるをたのむべきにはあらねども」「うかりける人のまこと」「忘れなむと思ふさへこそ、思ふことかなはぬ身にはかなはざりけれ」「忘られぬ人の中には忘れぬを、待つらむ人の中に待つやは」など同じ語を重ね、反對の字句を置きたる如き、修辭の餘弊取るに足らずといへども、これらは縁語と共に古今にも存するところ、たゞその增加せるを憾むのみ。「わりなしや」「心得つ」「まことにや」など、初句にて切ることも頗る增加したるが、たゞに初句のみならず、他の句にても終止段の語を用ふること多くなりぬ。助辭を豊かにし、口調をのびらかにする古今の風は既に飽かれ、語を閉ぢ、調を迫らしめて、勁拔雄壯の辭を用ひんとするは、即ちこの頃より生育して、新古今時代に極まれるものなり。

今朝きつる野原の露に吾濡れぬ、うつりやしぬる、萩が花摺。　能因

朝寢髮亂れて戀ぞしどろなる、あふ由もがな、鬢結にせむ。　良暹

長しとて明けずやはあらむ、秋の夜は、待てかし、槇のとばかりをだに。　和泉式部

明けぬなり、賀茂の川原に千鳥鳴く、今日もはかなく暮れむとすらむ。　圓　松

かくして内容の上に、修辭の上に、風格を一新せんとする意氣は存すといへども、歌人の思想の根本に變化あるにあらず。平安城裡に安逸を貪り、櫻かざせる大宮人の境遇、依然として舊に依れば、詠ずるところもまた根本的革新をなすに至らず。ことさらに工夫を弄して、纖巧に流れ、虛僞に趨るもの多ければ、後拾遺姿の誹を得たるも、偶然にあらず。

山ざくら見にゆく道をへだつれば、人の心ぞ霞なりける。　藤原隆經

前の都の春を霞なりといひしは、實景賞するに足るといへども、人の心を霞に比したる作意に、何の風情かある。

梅が香を櫻の花ににほはせて、柳の枝に咲かせてしがな。　中原致時

の詠の如き、俗諺に稱せらるゝまで有名なるものながら、巧を弄するところ、凡俗厭ふべし。

さゝがにの巢かく淺茅の末每に、亂れてぬける白露の玉。　藤原長能

も纖細にして煩はしく、

ねぬ夜こそ數つもりぬれ、時鳥、きく程もなき一聲により。　小辨

といへるは、情を僞りて毫も詩趣を存せず。長所はこれを擧ぐるに憚からずといへども、更にこれらの短所をも併せ陳ねざるを得ず、惜むべきかな。

漸く新體に流れんとすといへども、古風はもとより重んずるところ、歌論のやや與らんとするや、批評家が標準とするところは、一に古今前後の和歌にあり。舊格を重んじ、三代集を復習玩味する極、旣に公任などが好んで試みたる本歌とりの流行を見るに至り、爾來この一體は時代を重ねて益〻盛なるに至りぬ。坂上是則の「その原やふせやに生ふる箒木の、ありとは見えてあはぬ君かな」を引き來れる、

ゆかばこそあはずもあらめ、箒木のありとばかりは音づれよかし。　馬内侍

古今の「戀しくば下にを思へ、紫の根摺の衣、色に出づなゆめ」に出でて一歩を進めたる、

人知れずねたさもねたし、紫の根摺の衣、上着にをせむ。　堀河右大臣

古今の「春の日の光にあたるわれなれど、頭の雪となるぞわびしき」といへるをさながらに翻へせる、

年つもる頭の雪は、大空の光にあたる今日ぞうれしき。　伊勢大輔

拾遺の「つみたむることの難きは、鶯の聲する方の若菜なりけり」を假りて附合したる、

數しらずかさなる年を、鶯の聲する方の若菜ともがな。　藤三位

などの例頗る多し。これに比すべき程は多からねど、漢詩漢文に準據したる詠もまた存す。文選の蜀都賦なる貝錦斐成、濯色紅波より、

網代木に紅葉こきまぜよる氷魚は、錦を濯ふ心地こそすれ。　橘義通

の詠は出づ。大江以言の詩序に楊岐路滑、我之送人多年、李門波高、人之送我何日といへるより、

かくしつゝ多くの人は惜みきぬ、我を送らむ事はいつぞも。　源兼澄

は得たるなり。かくの如く本歌にすがり、詩文に準らふこと、一概にも排すべか

らずといへども、一歩を外れては、摸擬剽竊に陷る、今、例證したるうち、固よりこの嫌あるもの少からず、その他、古今の「ありぬやと試みがてらあひ見ねば、戯れにくきまでぞ苦しき」を、

あひ見てはありぬべしやと試みる、程は苦しきものにぞありける。　よみ人しらず

に更め、拾遺の「忘らるゝ身をば思はず、誓ひてし人の命のをしくもあるかな」を、

戀ひ死なむ命は事の數ならで、つれなき人の果ぞゆかしき。　永　源

に變へたるが如し。思想缺乏、強ひて措辭に巧を弄するにあらずんば、すなはち摸擬の弊に流る、これらを後拾遺集の弊とはするなり

後拾遺集の撰者藤原通俊は太宰大貳藤原經平の次子にして、從二位權中納言に至る。才和漢を兼ね、深く政務に通ず。白河天皇殊にその器を愛して、大江匡房と併せて近世の名臣と稱す。また和歌をよくし、所々の歌合にも列なれりといへども、譽望はもとより源經信に及はざるに、天皇の最屓によりて、後拾遺奉撰の榮を私せりとて、世人の非難を招けり。或は曰く、通俊が撰集の勅を蒙れるは

これによりて名を一時に擅にせんと欲して、みづから奏請したるなりと。家集も傳はらず、詠ずるところ、經信はもとより、匡房にも及ばざるが如し。

　つれ〴〵とふる五月雨に日はくれぬ、軒の雫の音ばかりして。

妻なくなりて後、周防内侍の許に送れる

　とへかしな、かたしく藤の衣手に、涙のかゝる秋の寢覺を。

などの詠をその佳調とすべし。

　春風は吹くとも散るな、櫻ばな、花の心をわれになしつゝ。

など措辭の新奇なるもなきにはあらねど、概するに古今時代の穩和なる風調を庶幾したるなり。後拾遺の體もこの好尙によりて成りたれども、おのづからまた變化を想望する世風を脱せざりしものの如し。康和元年、通俊五十三歲にして薨ず。

後拾遺集時代の第一流の歌人は、源經信に指を屈せざるを得ず。經信は祖父を左大臣重信といひ、父を權中納言道方といふ。官位は正二位大納言に至り、太宰權帥となりて、承德元年、八十二歲にして任地に薨ず。桂に別墅を構へたるを以

て、桂大納言といふ。風流の心篤く、諸般の技藝に通じ、和歌漢詩管絃通ぜざるところなく、世人その三舟の才を稱す、殊に歌道は當世第一と呼ばれ、天下の判者の稱あり。家集一卷今傳はれるが、自ら撰べるものにもあらず、その子孫の集めたるにもあらず、後人の勅撰集より抄出したるものなるべし、萬代集に擧げたる詠なども漏れたるが多し。經信壯にして、公任を訪うて、和歌の批判を聞きたることあり、詠ずるところ、公任の尙古風を學べるもあり、八雲御抄が「延喜よりこのかた、歌の見るべきものなし、たゞ公任、經信の二人のみ古風に近し」といへるは、或はこれを指したるものなるべしといへども、御抄の說は蓋し輕重を誤れり。經信の特色はその尙古の點にあらずして、自然の景を寫し、淸新の調を詠じて、新體の頭領たりしにあり、かれの秀吟といふべきものを見よ。

煙たつ海人の苫屋も見えぬまで、かすみにけりな鹽竈の浦。

風さえてうき寢の床や氷るらむ、あぢむら騷ぐ滋賀の唐崎。

夕されば門田の稻葉おとづれて、蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く。

引板はへて守るしめ繩のたわむまで、秋風ぞ吹く小山田の庵。

旅寢して曉がたの鹿の音に、稻葉おしなみ秋風ぞ吹く。

三笠山、峯より出づる月影は、佐保の川瀨の氷なりけり。

古調の助辭多きに反し、體言を多くし、意義を複雜ならしめんとして、却つて佶倔の弊に陷れるものは、

散りかゝる紅葉流れぬ、大堰河、いづれゐせきの水の白浪。

池にひづ松のはひ枝に、紫の浪をりかくる藤さきにけり。

の如し。蓋し通俊は古調に從ひ、經信は新體を喜べるものなりといへども、經信はなほ新古二體を一身に兼ねて極端に馳せず、正に變革の過渡にあり。その子俊賴に至りて、急激なる新派の大將軍として怒號叱咤し、天下靡然としてその風に移る。直ちにこの章に接して論ずるところの金葉、詞花二集の頃は、即ちその時なり。

そのほか當時の歌人には、藤原兼房、同範永、津守國基、白河院の女房周防内侍など有名なるもの少からざりき。

第八章　金葉和歌集と詞花和歌集

後拾遺集にやゝ發育し來れる新體は、金葉、詞花の二集に至りて跳梁す。二集は八代集のうち最も正風を離れて、變調を呈し、鎌倉時代の玉葉、風雅二集に比すべきものなり。編纂の時代相隔ること遠からず、性質も相通ひたるが上に、その量は却つて簡短なれば、こゝに二集を併せて說くべし。

金葉集は、白河天皇讓位の後、木工權頭源俊頼が院宣を奉じて撰せしもの、崇德天皇の天治元年これを奉る。されど認可せられず、その理由は詳かならず。或は曰く、輔仁親王の御名のりを記したるが故なり、親王は後三條天皇の御子、三宮と稱す、まさしく法皇には御弟なるを、輔仁と書きあらはすは、撰集の例に違ひて不敬なることなりと、されど果して然りや否やを知らず。（流布の初度本には、三宮とのみあるは、後に書き改めたるにや）かくて訂正して奉りしに、なほ認可せられず、重ねて訂正して三度めに漸く嘉納せられぬといふ。時に大治二年、後拾遺の編成りしより四十二年に當る。今日流布の本は二度本にして、奏覽本(三度本)にあらず、初度本、奏覽本は共

に收めて續群書類從にあり。

撰者は當時歌壇の聲望最も重かりしが、なほこの集の成るや、種々の非難ありき。藤原盛經は稱して臂突集といふ、えせしふといふ意なるべしとなり。（井蛙抄）大治元年、藤原顯仲は良玉集十卷を編して、金葉集を駁せり、この書今傳はれりや否やを知らず。後人評して曰く、さしもの俊頼も助手なく、顧問なく、古今、後撰の例も思はで、己が心一つに撰せし故、後難も多きなりと。（落書露顯）

金葉集と次の詞花集とは、他の撰集の二十卷なるに違ひて、卷數僅かに十卷、和歌の分類もこれに伴ひて單簡なり。これ當時は拾遺集よりも拾遺抄行はれ、抄に擬してかくしたるなりといふ。なほ一の注意すべきことは、金葉の雜の部の終に、連歌の門を設けたるにあり。連歌の起源を泝り探らば、太古にもあるべし、古くは萬葉集にも出で、下りて枕草紙などにもその例あり、勅撰集にては拾遺に收めたれど、連歌の名を設けて、ことさらに一部を置きたるは、この集をはじめとす。蓋し後拾遺に俳諧を復興したるが如く、和歌の流行は種々の變體を試みしめ、消閑の戯として一首を二人して詠ずることも盛になり、爲に連歌とい

ふ稱も起りて、鎌倉時代以後の興隆の備をなしたるなり。

金葉集の選擇の方針は、詞花集と共に、後拾遺の例に倣ひ、後撰までの歌人は取らず、その以後より下りて現代に至れる和歌を選べるなり。されど後拾遺よりも更に一歩を進めたるは、過去を客として現代を主とし、他に輕くして己に重きにあり。集中、歌數の最も多きは、撰者みづからの三十五首にして、これに次ぐは、その父經信の二十六首なり。更にこれに次いで十首以上あるものは藤原公實、同顯季、顯季の子長實、藤原忠通、長實の弟顯輔、權僧正永縁とす。蓋し金葉の撰者は古今の跡を追はずして、却つて古今の撰者が行ふところを行ふ。古今には貫之、躬恒の歌最も多し、今、經信が己の詠を以て首位に置くは、ひとへに自信の強くして、今を尙び古に阿らざるが爲なり。たゞ當代の名流として己と並び立てる藤原基俊の詠を取ること、三首のみなるは、好むところに僻したる偏頗の處置ならずといひ難し。

詞花集は、近衞天皇の朝、崇德上皇のおほせによりて、左京大夫藤原顯輔これを撰す。天養元年六月二日（袋草紙、拾芥抄）これを奉る、御覽ありて、御製少々またその外の

歌をも削減して返したまふ。仁平元年、(色葉集)(逆歩)重ねて奏覽せりといふ。されど一説(勅撰次第一本)に、天養元年を以てはじめておほせを承けたる年とし、仁平中の奏上としたるもの、或は可ならんか。かくて金葉の撰成りしより二十五年にして、詞花の撰終りぬ。

當時またこの集に對する非難あり。藤原敎長はこの勅撰のおほせを傳へたる奉行なりしが、集成るに及んで、拾遺古今を撰してこれを難ず。長門前司爲經も後葉集を編して詞花を誹り、顯輔の子淸輔は牧笛集を作りて、父の爲にこれを辯じたり。後葉集は傳はれり、拾遺古今と牧笛集とは今存するや否やを知らず。八條太政大臣實行もまた詞花がその子公行の佳詠を收めざるを憤り、別に歌集を撰して、これを駁せんとせしが、その子公敎の諫によりて、わづかに思ひ止まりぬといふ。

和歌の部類と選擇の方針とは、詞花も金葉に異なることなし。十首以上の和歌あるもの、曾禰好忠を最とし、これに次ぎて和泉式部、源俊頼あるのみ。おほせを下したまひし崇德上皇と撰者の顯輔とは、おの〳〵六首あり。

阿佛房口傳に云く「金葉、詞花などは歌の姿かはりて、一節をかしきところある歌多く侍る、今めきたることがちにや候ふやらん」と。さらば試みにこの二集の秀歌といふべきものを擧げんか。

待ちし夜の更けしを何に歎きけむ、思ひ絶えてもすごしける身を。　越中

顯輔はこれを以て金葉集の戀歌の隨一とす。また詞花集には、

いかでかは思ありとも知らすべき、室の八島の煙ならでは。　藤原實方

の詠拔群の譽あり。次の數首もまた二集の中の佳調なりとす。すなはち金葉には、

宇治川の河瀨も見えぬ夕霧に、槇の島人舟よばふなり。　藤原基光

淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に、幾夜ねざめぬ須磨の關守。　源兼昌

音に聞く高師の濱の仇波に、かけじや、袖のぬれもこそすれ。　一宮紀伊

もろともに哀と思へ、山櫻、花よりほかに知る人もなし。　行尊

詞花には、

御垣守、衞士の焚く火の夜は燃え、晝は消えつゝ物をこそ思へ。大中臣能宣

瀨を早み岩にせかるゝ瀧川の、われても末にあはんとぞ思ふ。新院

思ひかね別れし野邊を來て見れば、淺茅が原に秋風ぞ吹く。(長恨歌の意をよめるなり)源道濟

難波江の蘆間に宿る月見れば、わが身一つも沈まざりけり。藤原顯輔

かくの如きは、すべて今めきたりといふに合へりや、長明無名抄に「金葉集はまた態とをかしからんとして、輕々なる歌多かり」といふに合へりや。いまだ必しも然らずして、これらのうちには、古風を庶幾したるものもあり。思ふに金葉詞花時代は紛擾爭鬪、恰も源平二氏が兵力を爭ふ如く、歌人崛起輩出して覇を爭ひ、甲論乙駁、是非いまだ確定せざりしなり。されば諸家の試みるところ様々なるが中に、古今の調を尙ぶものには、

數ならぬ身にさへ年のつもるかな、老は人をも嫌はざりけり。詞花　成尋

また來むと誰にも得こそいひおかね、心にかなふ命ならねば。同上

の如きあり。この調の見るべきは、情理相交はるところに、無限の味を存するにありといへども、思想の複雜に、理智の勢を得るに至りては、その弊や理窟に流れざるを得ず。

玄範

梅の花にほふあたりはよきてこそ急ぐ途をば行くべかりけれ(金葉)

良暹

今よりは思ひも出でじ、恨めしといふも賴みのかゝるかぎりぞ(同上)

よみ人しらず

身のほどを思ひ知りぬることのみや、つれなき人の情なるらむ(詞花)

隆緣

の如きは、即ちこれなり。或は道長時代の調を尙ぶものあり、道長時代の調は、殊に古今に反對して旗幟を立つるにあらずといへども、時勢の移動はおのづから製作の上に現はれ、古今、後撰よりも更に嫺雅優麗の風を帶び、用語も漸く新たなり。金葉集にありてこれに倣へるもの、

木の下をすみかとすれば、おのづから花見る人になりぬべきかな。金葉

花山院

の如きは、宛然として近世の香川景樹が「埋火のほかに心はなけれども、向へば見ゆる白鳥の山」の風あり。その他、

あさましや、こは何事のさまぞとよ、戀せよとても生れざりけり。金葉

俊頼

世の中はうき身に添へる影なれや、思ひ捨つれど離れざりけり。同上

同上

などいづれもその例なり。

さばれ金葉、詞花の歌人が特色とするところは、延喜、天暦もしくは寛弘を庶幾するにあらず、かれらは既に三代集に厭きて、一新の功を果さんとす。因襲風を成し、陽には貫之、公任を仰ぐといへども、空しくその下に逡巡するは、有爲の才を懷き、功名の念に篤きものの堪ふるところにあらず。いかにせば典型の弊を破り、陳套の嫌を免るべきか、かれらはその粉本を探りて、これを曾禰好忠に得

たり。憐むべき曾丹、烱眼一世に擢んで、早く革新を唱へたれども、時至らず、世を擧げて酣醉して醒めず、怨を呑んで逝きたるが、その事業は今や經信父子によりて紹がれ、天下これに響應するに至れり。詞花集に選ぶところ、好忠の歌最も多きを見ても、大勢の嚮ふところを察するに足る。

好忠の企畫するところは、用語を豐富にし、句法に桎梏なくして、自在に感興を歌はんとするにあり、これがためにかれは萬葉集に注目してこれを學びたりき。金葉、詞花の歌人が爲すところもまたこゝにあり。その詠に曰く、

風はやみとしまが崎を漕ぎ行けば、夕浪千鳥たちゐ鳴くなり（金葉）　神祇伯顯仲

玉津島、岸うつ浪のたちかへり、せないでましぬ、名殘さびしも（同上）　藤原顯季

夕霧に佐野の舟橋音すなり、たなれの駒の歸りくるかも（詞花）　左大臣俊雅母

されど萬葉を學ぶも、好忠およびかれの繼承者が目的遂行の一手段に過ぎず、或は耳なれざる土地、草木、鳥獸の名を詠じ、或は俗諺卑語を挾むなど、いづれも

かれらの慣用手段なり。かしこに萬葉の古樸を寫せりと思へば、こゝには纖細を極めて、兎の毛の末に置く露の、われて碎けし果をも描く。要はたゞ和歌の範圍を擴めて、不拘不滯の妙境に達せんとするにあり。されば從來の優麗にして輭柔なるもののほかに、切字を多くして遒勁の體を得んとするもの、旣に後拾遺にその例を擧げたるが、こゝには更に次の如きものあり。

かしがまし、山の下ゆくさゞれ水、あなかま、われも思ふ心あり　金葉　よみ人しらず

かくの如きは萬葉が本來の簡素なると違ひて、贅澤過ぎての紙衣三昧、工夫の極遂にこゝに至りしなり。もとより修辭は巧を爭ひ、美を鬪はして、非常の發達をなしぬ。互爾波を省ける一格には、「櫻浪よる谷川の水」の如きあり、擬人法には「雪の色を盜みて咲ける卯の花は」「風吹けば枝安からぬ木の間より、ほのめく秋の夕月夜かな」の如きあり、今ことさらに一々例證せず。

さらば金葉詞花の歌人が新體の旗幟を翻へして變革を試みしもの、その成功はいづれの點にありや、敍景の歌これなり。これ一は三代集の敍情に厭きたる

反動なるべく。一は萬葉に、また漢詩に、得るところありしが爲なるべし。かくしてさきに後拾遺において增加の傾向ありと稱せしもの、こゝに客觀的寫實は主觀的抒情の上に勢を逞しくするに至れり。

風吹けば蓮の浮葉に水こえて、涼しくなりぬ、茅蜩(ヒグラシ)の聲。金葉　俊頼

鶉鳴くまのの入江の濱風に、尾花浪よる秋のゆふぐれ。同上　同上

夏の夜の月待つ程の手ずさびに、岩もる清水幾掬びしつ。同上　基俊

既にこの詠あり、橘千蔭が「隅田川わたし待つ間の手ずさびに、結びて放つ青柳の絲」も新意ありと許すべからざるなり。

わたの原こぎ出てて見れば、久方の雲ゐに混ふ沖つ白波。詞花　新院

何等の奇趣なきが如しといへども、一誦して萬里洶湧の海眼前に彷彿たるを覺ゆ。

新體の弊はその險僻鬼語を用ふるにあり。從來の風格に反抗して一家を立つるもの、利及頭に加へ、迅雷耳に轟くにあらずんば、以て一世を震撼せしむに足らずとして、好んで怪奇幻妖の詞句を用ふ。恰も當時の小說が結構の變化をの

み喜びしと、その傾向は同じ。勅撰集は穩健雅正の詞を選んで、力めて新意の詠を避けたるもの、それさへなほ次の如きものあり。

あふことはかたねぶりなる磯額、ねぶりふすともかひやなからむ。（金葉）　よみ人知らず

近江にかありといふなるかれいひ山、君はこえけり、人とねぐさし。（同上）　同上

君をわが思ふ心は大原や、いつしかとのみすみやかれつゝ。（詞花）　藤相如

勅撰集既に然り、まして當時の歌合、百首類もしくは人々の家集を見ば、險難全く解すべからざる句、佶倔殆ど調を成さざる詠の多きを見るべし。嗚呼、新體は少しく成功して、多く失敗せり。他にあらず、その變革や根本に腐敗の種を求めて、これを燒却せずして、枝葉にのみ力を盡ししを以てなりき。

翻へりて明治の歌壇を察するに、今の情勢は以て古を推すべく、古の變遷は以て今に鑑むべし。桂園派が沈滯不振や年既に久し、故正岡子規が俳句革新の餘力を以て、更に和歌の革新に志し、地下に井手曙覽、平賀元義を起して、その風に

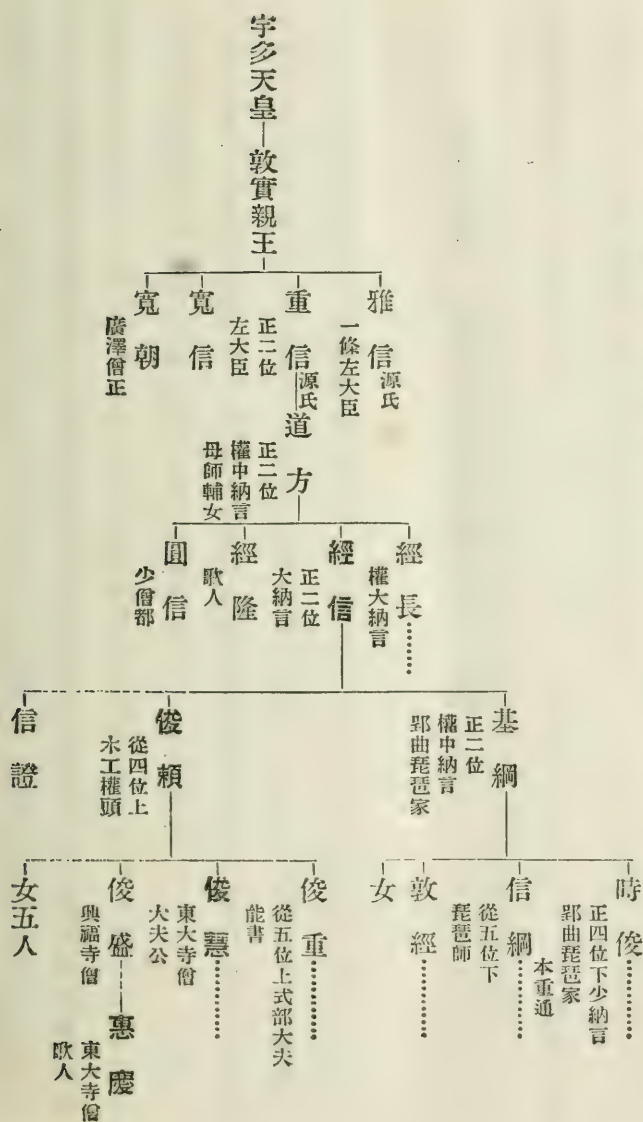
倣ひ、しきりに萬葉の古調を唱へしは、即ち俊頼等が曾丹を祖述せしと同一轍に出づ。爾來、新派を標榜するもの、力めて從來の風調を斥けて、屢、不可思議の句法を用ふ。美醜いまだ俄かに判ずべからず、後人何の語を以てこれを評すべきか、渾沌錯雜、自由か、はた亂調か。金葉、詞花の紛擾は藤原俊成出でて漸く鎮靜し、一將の下に統率せらるゝに至れり。今後の歌壇の俊成たるべきは果して誰ぞ。されど現代の論はわが事にあらず、今、俊成を敍せんとする前に、なほ金葉、詞花時代の雄將割據を一瞥せざるべからず。

第九章　金葉、詞花時代の歌人

金葉、詞花時代には著名の歌人輩出せるが中にも、天稟の詩才遙かに群衆に傑出せるものを源俊頼とす。

源俊頼は經信の子、堀河、鳥羽、崇德三帝に歴仕し、右近衛少將に任じ、木工權頭、左京權大夫を兼ね、從四位上に敍せらる。多藝にして殊に和歌をよくし、また賓牲

經信、俊頼の略系

- 宇多天皇―敦實親王
  - 雅信（源氏　一條左大臣）
  - 重信（正二位　左大臣）―道方（源氏　正二位　權中納言　母師輔女）
    - 經長（權大納言）……
    - 經信（正二位　大納言）
      - 基綱（正二位　權中納言　郢曲琵琶家）
        - 時俊（正四位下少納言　郢曲琵琶家）……
        - 信綱（從五位下　琵琶師）……（本重通）
        - 敦經……
        - 女
      - 俊頼（從四位上　木工權頭）
        - 俊重（從五位上式部大夫　能書）……
        - 俊惠（東大寺僧　大夫公）……
        - 俊盛（興福寺僧）―惠慶（東大寺僧　歌人）
        - 女五人
      - 信證
    - 經隆（歌人）
    - 圓信（少僧都）
  - 寛信
  - 寛朝（廣澤僧正）

寛闊人を容るゝを以て、名聲一時に籍甚す。嘗て藤原顯季の人麿影供を行ふや、一時の名流悉く集まる。顯季俊頼に謂つて曰く、卿は當世の宗匠なり、初獻を奠るべしと。俊頼の子東大寺の僧俊慧また歌道に拔群の譽ありき。

父經信既に新體を試み、和歌を以て名を一世に轟かししが、俊頼更に出藍の才あり、暗啞叱咤、大に革新を叫んで、社會はその獅子吼に懾伏す。その家集を散木奇歌集といひ、曾丹集と並んで放膽の才と險難の辭とを以て稱せらる。出でて幾ばくもなく、その註顯昭述といふの編せられたるは、一は以てその行はれたるを見るべく、一は以てその難解の語多きを知るに足る。その詠の最も秀逸なりと稱するものの二三は、既に前章に擧げたり、なほこれを補はんか。

山ざくら咲きそめしより久方の雲ゐにかゝる瀧の白絲。

もまた人口に膾炙するもの、

夕まぐれ戀しき風に驚けば、荻の葉そよぐ秋にはあらずや。

は措辭の清新を以てまさるもの、

夕されば萩女郎花なびかして、やさしの野邊の風の景色や。

は風調の婉美なるを取るべきか。

きゞす鳴くすた野に君がくちすゑて、朝ふますらむ、いざ往きて見むの如き、萬葉風の簡勁素樸なるものも、好んで詠ずるところにして、

紫陽花の花の四ひらにもる月を、影もさながら折る身ともがな。

の如き、纎柔巧緻の筆を弄するも、また珍らしからず。

俊頼が新體を以て一世を風靡し、思想と用語とを豊富自在ならしめたる功は沒すべからずといへども、强ひて目近からぬ事物を詠じ、言ひ馴れぬ言語を用ひて、意義を晦澀ならしめたる弊また甚しほとゝぎすにて事足れるものを、時つ鳥といひ、くきらといひたるが如きは、何等の兒戯ぞや嘗て雨中郭公を詠じて曰く、

これ聞かむ、こせのさ山の杉の梢に、雨もしみゝにくきら鳴くなり。

藤原顯輔問うて曰く、くきらとは何ぞ俊頼答へて曰く、東南院已講覺樹の言に、天竺に、五月頃、里に出てて鳴く鳥あり、聲妙なり、名づけて倶喜羅といふ、もしくは郭公なるかと、これによりて詠みたるなりと(散木集註)また嘗て詠じて曰く、

信濃なる木曾路の櫻さきにけり、風のはふりよ、すきまあらすな。

傳へていはく、信濃國の習に、諏訪神社に風の祝(ハフリ)といふものを設けて春のはじめより百箇日の間、深く物に籠め置くに、豐年疑なし。もし隙間などありて、この祕めたるものに日の光を見すれば、風荒れて五穀稔らずといふ。この諺を能登大夫資基といふものの聞き出でて、これを材として歌よまんと思へりと語る、俊頼誡めて、そは無下に卑俗のことなり、ゆめゆめ詠むべからずといひて、後日にわがものとして「信濃なる」の歌を作る、資基深くこれを恨めりといふ。奇怪の語も、卑俗の諺も、よむべくしてよむは咎むべきにあらずといへども、俊頼の如きは、ことさらに人の知らぬことを言ひて、世を驚かさんとしたるもののなること、この二例を以ても知るべし。好漢惜むべし、この弊あり、詠ずるところの詩趣を沒して、俗調に流れたるものの少からざるは、當然の數なり。歌論の書に山木髓腦(俊頼無名抄)、莫傳抄、俊頼口傳等ありといへども、果してその手に成りたるものなりや否やを知らず。

俊頼と聲名相如き、しかも性質も歌風も相反せしものを、藤原基俊とす、基俊は

道長の次男頼宗の孫にして、大宮右大臣俊家の子なり。門地名望高く、兄宗俊、弟宗通ともに正二位權大納言に昇れるに、基俊はわづかに從五位下右衞門佐に止まりて、その地位、次弟基頼にだも及ばざりき。蓋し基俊性頗る驕慢、才學を恃んで、漫に他を凌ぎしかば、社會はその學を許せども、その人を許さず、世に惡まれて、おのづから仕途沈滯せしものならんか。雨雄並び立たず、基俊常に俊頼と相軋る。嘗て歌合ありし時、

あけぬともなほ秋風の音づれて、野邊のけしきよ面がはりすな。

の詠あり、名を隱したれど、基俊は俊頼の作なりと知りて、難じて曰く、腰の句にての字すゑたるは、體挫けて聞き苦しきものなりと。俊頼はとかくの返答もなかりしが、伊勢の君琳賢傍にありて、基俊に向ひ、證歌こそ侍れ、如何心得たまへるとて、「櫻さく木の下風は寒からで」といへる貫之の歌を、しかもての字を長々と吟じたれば、基俊面目を失ひ、さし俯きて言なかりきといふ。琳賢は常に基俊の學を恃むを惡めるものなり、また嘗て後撰集のうちにて人のよくも知らぬ歌二十首を寫し、基俊の許に往きて、これ批判して賜はれよとて、さし出でたる

を、たばかるとは知らず、縱横に朱を加へ難じ正したり。琳賢その草案を處々にもて歩きて、基俊にあひては梨壺の五人も散々の敗亡、これ見たまへ、古にも例なき歌仙の筆の樣をと、披露せるを、基俊安からず思へど、またせん術もなかりきといふ。

猿は木から落ち、川だちは川で果つ、基俊は學に傲りて、屢、學に敗れたりといへども、かれの立つるところは、もとよりその學問にあり、作家よりもむしろ學者たるにあり。かれは廣く漢文學にも通じ、これを以て歌學に應用せんとしたり。俊頼はこれに反して、批評よりも創作をよくするもの、基俊これを罵つて曰く、俊頼和歌をよくすれども學問なし、才藻の枯渇するなきを得んやと。俊頼これを聞いて曰く、文時、朝綱は才學博洽、されど秀歌なし、躬恒、貫之は詩名なし、されど和歌無雙なり、基俊の言は誣ひたりと。俊頼は平穩寛容の大人、基俊は褊狹傲慢の學究、されどその和歌は却つてこれに反し、俊頼は才氣を弄して奇僻に趨り、基俊は古歌を尙んで雅正を主とす。その性質を問はずして、歌風の類似より比較するに、俊頼を曾丹に似たりとせば、基俊は公任を學べるなり。公任に三十

六人撰、和漢朗詠集あれば、基俊に新三十六人歌仙、新撰朗詠集あり。歌學を興したるは公任にして、更にこれを盛ならしめたるは基俊なり。輕々しく信を置くべからずといへども、悦目抄を世に基俊の作と稱す。
基俊は歌論の學者として見るべく、和歌は甚だ巧ならず。その詠、時に清新の調なきにあらずといへども、おのづから學ぶところに偏して、古歌を渴仰し、尙古の旗を掲げて、新體に抗す。家集の壁頭に、

物每に改まれども、戀しさはまだふる年にかはらざりけり。

とあるは、古今の「百千鳥囀る春は、物每に改まれどもわれぞふりゆく」をさながら本歌に取りたるものにして、これらを基俊が慣用の手段とす。

昔見し人は夢路に入りはてて、月とわれとになりにけるかな。

わが宿の池の氷を鏡とて、見ればあはれに老いにけるかな

の如く、𢌞爾波を多くし、詠歎の辭を用ひて、力めて意義を幽遠ならしめんとするも、またかれが尙古に偏したる得意の格なり。
鳥羽天皇の頃には、源俊賴金葉集の撰者として最も世に重んぜられしが、下つ

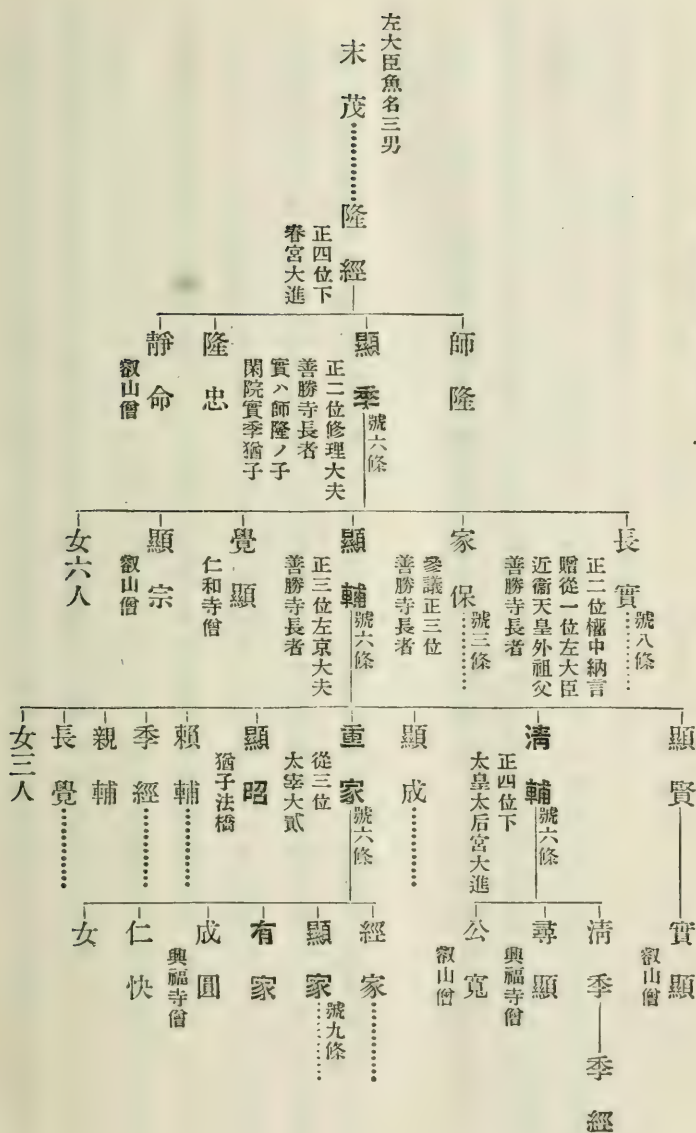
て近衛天皇の頃には、藤原顯輔詞花集を撰して、一時に名あり。また六條一流の祖と仰がれ、子孫代々その業を襲ぐ。歌道の門を張れるは、卽ち顯輔の時よりなれども、その父顯季もまたこの道に堪能のきこえありき。修理大夫顯季は左大臣魚名の三男末茂の裔にして、白河天皇の乳父なり、善勝寺を草創す。その家六條烏丸にあり、六條の家名はこれより起れり。保安四年、六十九歲にして薨ず。家集明月鈔ありといへども、今傳はらず。左京大夫顯輔はその子なり。詞花集を撰し、また家集あり。その子に淸輔あり、猶子に顯昭法橋あり、いづれも歌學に名ありき。

太皇太后宮大進淸輔は藤原俊成と並んで、平安極末の名匠と稱せらる。されど祖父は正二位、父は正三位、己は正四位下と、位は代々に劣りて、仕途澀滯、屢〻和歌を詠じてこれを歎ぜしかば、それより漸く昇進すといへども、遂に父祖に及ぶ能はず。その述懷に曰く、

位山、谷の鶯人知れず、音のみ泣かるゝ春を待つかな。

承安二年三月十九日、淸輔主人となりて白川の寶莊嚴院にて尙齒會を開きし

六條家略系

末茂 左大臣魚名三男
隆經 正四位下 春宮大進
師隆
顯季 號六條 正二位修理大夫 善勝寺長者 實ハ師隆ノ子 閑院實季猶子
隆忠
靜命 叡山僧
長實 號八條 正二位權中納言 贈從一位左大臣 近衞天皇外祖父 善勝寺長者
家保 號三條 參議正三位 善勝寺長者
顯輔 號六條 正三位左京大夫 善勝寺長者
覺顯 仁和寺僧
顯宗 叡山僧
女六人
顯賢
清輔 號六條 正四位下 太皇太后宮大進
顯成
重家 號六條 從三位 太宰大貳
顯昭 猶子法橋
賴輔
季經
親輔
長覺
女三人
實顯 叡山僧
清季
季經
尋顯 興福寺僧
公寬 叡山僧
經家
顯家 號九條
有家
成圓 興福寺僧
仁快
女

は、文壇の一佳話なり。清輔和歌を以て深くみづから許す。しかるに父顯輔の詞花集を撰ぶや、不請の氣色ありて、相談をも加へざりきとて、その著袋草紙に歎息の意を漏せり。そののち二條天皇の勅を受けて續詞花集を撰せしが、撰成りし時、天皇既に崩御あり、奏覽を經ざりしを以て、勅撰集のうちに數へられず。清輔は基俊に次いで歌學に秀でたりし人、袋草紙その手に成り、斯道の古事典例雜話を記して、今なほ世にもてはやさる、これを拔萃せるもの雜談集あり。歌論の書には、奧儀抄、和歌初學抄、その手に成れりと稱す、當代の詠を選べるものに今撰集あり、牧笛集、和歌一字抄、和歌題林等またその作なりといへど、今傳はらざるが如し。顯昭も和歌をよくせしが、その長所はまた歌學にあり。藤原俊成の六百番歌合の判を作るや、顯昭これを見て意に滿たず、陳狀を奉りて辯駁す。また歌學の書に袖中抄あり、弘く世に行はる。蓋し顯昭は和歌の註釋家としては、最も古き人なるべし。古今集には公任以下二三者の註ありしが如しといへども、その書の今日に存する限にては、顯昭の撰を第一とす。嘗て官階なきを憂へ、日本紀歌註を作りて獻り、かつ述懷の詠を添へしかば、則ち法橋の僧綱を得た

りといふ。拾遺抄註、散木集註もまたその撰述せるところなりといふ。

顯季、顯輔、淸輔の三世の家風は、一括して言へば、强ちに古調を守るにあらず、求めて新奇を衒ふにあらず、基俊にもつかず、俊頼にもつかず、その中間にありて平易暢達を主としたるが如し。その長所は穩健、その短所は平凡、新古錯雜、口に任せて吟出すれば、粗笨の弊もまた少からず。六條家三代、官位は代毎に劣れりといへども、歌道においては顯季よりも顯輔の力勝り、顯輔よりも淸輔の名高く、子孫の父祖を辱めざること、最も稱するに足る。その作歌の一二の例を擧ぐれば、顯季は、

五月雨にとふ人もなし、山里は軒のしづくの音ばかりして。

わが宿は庭もまがきもおしなべて、今さかりなり、撫子の花。

かくの如く平淡にして苦心の迹なきを得意としたるなり。顯輔は、

年毎にかはらぬものは、春霞たつたの山のけしきなりけり。

月かげにたづね來たれば、時鳥、なく山の端に横雲わたる。

秋風にたなびく雲の絶間より、もれいづる月の影のさやけさ。

かくの如く、愈〻出でて愈〻明快流暢の調に傾けるを見るべし。叙景の詠また賞すべしといへども、淺薄の誹は免れず。淸輔に至りては、縱横奔放、坦懷掬すべきあり、纖巧愛すべきあり、多作して筆路の自在なること、父祖にまされりといへども、大體の法格は家風を遵守せるものの如し。

散ればうし、にほへばうれし、梅の花、思ひわづらふ春の風かな。

から國の虎ふす野邊ににほふとも、花の下には寢ても歸らむ。

手枕にかきやる髮のみだれまで、くもりも見えぬ秋の夜の月。

その他、有名なる歌人多しといへども、一々に擧げず。たゞ金葉時代には、大僧正行尊のあることを忘るべからず。行尊は西行法師、大僧正慈圓に先だちて厭世思想を歌へる出世間歌人なりき。同時に源雅兼なりき、その詠多からざれども、

風吹けば波の綾おる池水に、絲ひきそふる岸の靑柳。

の如く、巧緻綺麗の格に長じたるが如し。詞花時代には、崇德上皇の御製殊に仰ぐに足る。世事意の如くならず、鬱屈の情は別途に迸りて、その詩想を培へるものか。わけて御配流以後の憤懣やる方もなき境遇にありては、一字一淚、都門に

曖き夢を貪る上達部の詠に比すべくもあらず。鎌倉時代の後鳥羽、順德二帝と相對して、專門の歌人もまさに愧死すべし。

第十章　千載和歌集と藤原俊成

奠都以來、四百年に近く、泰平無事なりし平安の帝城も、保元、平治の亂より、上下心安からず、昨日は鹿が谷に怪しき談合を催ほせり、今日は法皇幽せられたまひぬなど、ひそめき合ひ、黑雲次第に密聚して、險惡なる天、迅雷忽ち耳に轟き、驕れる平家は兵庫に落ちぬ、醜の夷の木曾冠者は都を荒しぬ。その旭將軍も葉末の露と消え、二十餘年の平家一門の榮華も西海の泡とはかなく、無常迅速、慘澹たる世態を眼の前に見ても、花紅葉の色は昔に變らずや、月卿雲客のさても悠悠たるかな。壽永二年二月、三位中將平資盛後白河法皇の院宣を承りて、撰集を參らすべき由を藤原俊成に傳ふ。撰成りてこれを千載和歌集といふ。これを奏進せしは、集の序によれば、宣下より五年め、文治三年九月二十日にして、明月記

によれば、その翌四年四月二十二日なり。歷代和歌勅撰考にこれを解釋して、三年に一度奏覽せしが、なほ改むべきことありて、更にこれを清書し、四年に上進せしものなるべしと、或は然らん。詞花集の成りしより文治四年まで、年を經ること三十八、實に鎌倉幕府創立の後兩三年にして、この集は成りたるなり。

千載集の成るや、美作前司入道といふもの難千載集を作りて、これを駁せりと傳ふれども、撰者が一代の名匠なるを以ての故にや、他にさしたる論難も出でざりしが如し。たゞこの集に關しての逸話は、多く傳はりぬ。薩摩守忠度が都落の馬の頭を廻らして、俊成が五條の第を敲き、この度勅撰の事ある由承るに、師弟のよしみに選ばせたまへと、己の詠草を殘して去りしを、源氏に憚りて「さゞなみや滋賀の都は」の詠一首のみ、よみ人知らずとして入れられたりし（平家物語）は、人口に膾炙する話なり。西行法師撰集成りぬと仄かに聞きて、委しき事も知らまほしく、遙々の旅の空より引きかへして都に向へるに、途に知音に遇ひぬ。わが「鴫立澤」は選ばれたりやと、何よりも先に尋ねたるに、否と答ふ。たとひ他の詠の多くのりたりとて、これを落したる程の撰集何かゆかしからんと、また引き

返して行方定めず漂らひき（井蛙抄）といふも、人のよく知る話なり。そのほか鴨長明が一首選ばれたりとて深く喜びしこと、また故道因法師の歌十八首擧げられたりとて、その幽靈が撰者の枕近く涙を流して禮謝せるにぞ、更に二首を加へしこと（長明無名抄）などの逸話もありき。

千載集の體裁は金葉、詞花の二集を斥けて、後拾遺の昔に歸れるものなること撰者みづからその序にいへるが如くにして、卷數は二十卷となり、從うて歌數も部門も增加し、また屢〻缺如せる序も加へられぬ。後拾遺の昔に歸れりといふは、語を換へて言へば、一歩古今に近づきたるなり、更に古今を庶幾するに至りしなり。部門に就いて注意すべきは、短歌、折句の目あることとす。その實はもとより今に始まりしにあらずといへども、この名はこゝに始まりぬ。短歌は即ち萬葉集の長歌なり。蓋し古今集に長歌に題するに短歌の名を以てせり、これ或は轉寫の誤にあらざるなきを得んや。しかるを俊成等古今を崇仰するあまり、その體に拘泥して、說を立てて曰く、萬葉集のいはゆる長歌は、語多くして意少し、三十一字歌は語短うして意長し、和歌は思想を以て主とす、意長きは長歌な

り、これに反するは短歌にあらずやと。かくして長歌に題するに、短歌の目を以てしたるなり、また奇ならずや。折句は五文字ある物名の一字づゝを五句の上にすゑてよめるなり。

集中の作者については、上は拾遺に選び殘されたる正暦の頃ほひより、下は文治の今に及ぶ、されど昔よりも近代を主としたるものなり。集中、撰歌の最も多きを俊頼の五十二首とし、俊成の三十六首これに次ぐ。はじめ一たび撰進せしに、法皇のおほせに、撰者の歌餘りに乏し、なほ三四十首加ふべしとあり（明月記）その結果この數を見るに至りしものか。ついで歌數の二十首以上に及べるもの藤原基俊、崇德上皇、俊慧法師、藤原清輔、道因法師あり。俊成と衡を爭ふところの名家西行法師は十八首、名門の上手後德大寺左大臣實定は十五首、武家の歌人源三位賴政は十四首、鎌倉時代に至りて聲名赫々たるべき藤原良經、同家隆、同定家、法印慈圓、式子內親王なども、旣に頭角を表はして、多少の詠あり。

金葉、詞花時代は新體の跳梁せる時、その流行は引いて鎌倉時代にまで及ぶ、ことさらに險難の辭を用ふることは久しからで止みぬといへども、大體におい

ては新體うち續いて勢を逞しくせり。されば千載集には、艶麗なること、

櫻花、比良の山風吹くまゝに、花になりゆく滋賀の浦波。　藤原良經

の如きあり、遒勁なること、

うかりける人をはつせの山おろし、烈しかれとは祈らぬものを。　俊頼

の如きあり。敍景の詠は新體の特長、俊成はこれを避けざるはもとより、すぐれたるものは進んでこれを歡迎せり。

あさぼらけ宇治の河霧たえ〴〵に、あらはれわたる瀬々の網代木。　藤原定頼

小夜千鳥ふけひの浦に音づれて、繪島が磯に月傾きぬ。　藤原家基

難波潟しほ路はるかに見わたせば、霞に浮ぶ沖の釣舟。　圓玄

されどかくの如きは、千載時代の和歌の一面のみ、世人が好奇の心は早くも薄らぎぬ。寫實に馳せ、巧緻を競ふ風も今はた飽かれて、古今の詠の却つて感興深きことを思ひ、更に穩雅なる敍情の歌を作らんと欲す。崎嶇たる山谷を去りて、

今やまた坦々たる行路に臨めり。

思ひわびさても命はある者を、憂きに堪へぬは涙なりけり。　道因

人の上と思はばいかにもどかまし、つらきも知らず戀ふる心を。　平實重

うきことのまどろむ程は忘られて、覺むれば夢のこゝちこそすれ。　崇德院

かくばかりうき身なれども、捨て果てむと思ふになれば悲しかりけり。　空仁

これらはいづれも古今集を熟讀して後に出づべき作にして、比喩も、裝飾も殆どなく、痛切なる感情をあるがまゝに吐露したるものなり。敍景の詠といへども、また平淡を旨として、細巧に失せず、或は抒情の意を加へたるものを倚べるが如し。

おしなべて花の盛になりにけり、山の端毎にかゝる白雲。　圓位

何となくものぞ悲しき、菅原や伏見の里の秋のゆふぐれ。　俊頼

さばれ時勢は移れり、延喜の昔は更に回復すべからず、平安朝のなかごろより、修辭の法は次第に精緻になりたるを、千載集に至りて、更に辭句の率直平易を欲すとも、到底得べからず。

梅が枝の花に木傳ふ鶯の聲さへにほふ春のあけぼの。　守覺

岩間もる清水を宿にせきとめて、ほかより夏をすぐしつるかな。　俊慧

尾上より門田にかよふ秋風に、稻葉をわたるさを鹿の聲。　寂蓮

の「にほふ」「ほかより」「わたる」の如き用辭は、古今に望むべからざる巧妙のものなり。能因の「都をば霞と共にたちしかど、秋風ぞ吹く白川の關」の歌を作りかへて、

都にはまだ青葉にて見しかども、紅葉散りしく白川の關。　源頼政

といへるは、單に剽竊に過ぎざるを、時人の嘖々として稱美せしは、青紅の色を對せしめたる辭句の着色を喜べるが故なり。

かくして意匠の斬新なる、措辭の洗錬なるは、もとより時勢の歡迎するところなるが、撰者みづからは力めて奇に趨り變を衒ふことを避けて、高雅にしてし

かも平懷なる體を用ひたり。その詠を同じ集なる他人の作に比較せよ。

時鳥なきつる方をながむれば、たゞ有明の月ぞ殘れる。　後德大寺實定

かゝる上の句あらば、下の句は普通にははや姿は消えぬとか、聲のみ殘れりとかの意あるべきを、それらのことは言はずして、月のみ澄めるに、おのづからその趣を知らしめたるが、この歌の價値の存するところなるを、俊成はかくせず、

過ぎぬるか、夜半の寢覺の時鳥、聲は枕にあるこゝちして。　俊成

とありのまゝに飾らずいふのみ。

旅寢する須磨の浦路の小夜千鳥、聲こそ袖の波はかけけれ。　家隆

千鳥の聲の袖に波かくるといふに、詩趣をよせたるを、俊成はそれさへもせず、

あはれなる野嶋が崎の庵かな、露おく袖に波もかけけり。　俊成

と平直に敍するのみ。かくの如き好尙を標準として、俊成は千載集を撰せしものなることを思はざるべからず。

佛敎は漸々に人心に感染す。はじめは流行せりとはいへ、なほ表面の流行に過ぎざりしが、世を經るに從ひて、浸潤益々深く、平安末期には殊に行尊、俊慧、西行等

の僧侶に和歌をよくするもの增加して、厭世思想を鼓吹す。千載集に佛敎臭味ある和歌の多きは、もとより時習の反映なり。

あふことは身をかへてとも待つべきに、世々を隔てん程ぞしき。　　俊成

しかばかり契りし中もかはりけり、この世に人をたのみけるかな。　　定家

物思へどかゝらぬ人もあるものを、哀なりける身の契かな。　　圓位

數ならで年へぬる身は、今更に世をうしとだに思はざりけり。　　俊慧

概するに千載集は穩健なり。古今、後撰の優雅もあり、拾遺、後拾遺の悽婉もあり金葉、詞花の華麗もあり、要は新體の敍景に長け、措辭に巧なるを好めども、その屢〻偏癖怪奇に趨るを以て、古代の正調を以てこれを律せんとするにあり。恰も世人が幻妖の體に飽いて、更に平淡の調を望める時に乘じたるを以て、撰者が名望は赫々として、旭日昇天の勢あるに至れるなり。さらば次にこの撰者について一言せしめよ。

藤原俊成は道長の五男長家の曾孫なり。はじめ名を顯廣といひ、のち俊成に改む。正三位皇太后宮大夫たり。その家五條室町にありしを以て、世に五條三位と稱す。安元二年、官を辭し、尋で薙髪して釋阿といふ。長生して鎌倉幕府時代に及び、歌道の耆宿として世に重んぜらる。建仁三年、九十の高齡に當りて、特に賀を和歌所に開かしめられ、御製の和歌および鳩杖を賜ふ。その翌元久元年薨ず。家集を長秋詠草といふ。

一說に、俊成はじめ顯輔の養子たりと、果して然らば、幼時は六條家の家風を學びたるなるべし。されどその望にかなはざりけん、二十五歲の時、藤原基俊の門に上る。長秋詠草に云く、

　前左衞門佐基俊といひし人に古今の本を借りて返すとて、

君なくばいかにしてかははるけまし、いにしへ今のおぼつかなさを。

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　基俊の君

書きたむるいにしへ今の言の葉を、殘さず君に傳へつるかな。

かくして俊成は基俊に學び、その歌學の博洽に服せりといへども、創作の才に

至つてはわが師に許さずして、俊頼が詩趣の横溢し、用語の自在なるを尚ぶ。千載集にその作最も多きもこれが爲なり。或る人問うて曰く、俊頼は君が師の敵にあらずや、しかるをかくの如きは如何、俊成答へて曰く、われは歌を見て人を見ずと。

俊成はかくの如くはじめは六條家に入りたるかも知るべからず、のち基俊を師とし、また俊頼をも推重せり。その諸家を咀嚼し、諸風を折衷したるも、由來するところあるを知るべし。詠ずるところ、艶麗にして幽婉、しかも力めて高雅の趣を脱せざらんことを期す。渾然たる美玉、自然の光澤あるが如しといへども、これなほ琢磨の果なり。天受の才は才なりといへども、放縱の才にあらずして折衷の才なり。學を積み、想を練り、苦心慘澹として遂に一家を成す。かれの歌は村舍の白梅東風に野香を恣にするものにあらずして、瓶裏の紅梅枝を矯めて形を正せるものなり。心敬僧都私語(ササメゴト)にその拮据經營の態を敍して曰く、

定家卿爲家の歌をいさめて申したまへるとなん。歌はさやうに宿直ものにまつはれ、燈火ほがらかにして、樽折籠物など取りちらしては、出て來ぬ道な

り。されば汝の歌よろしからずとなり。亡父卿(俊成)の詠じたまひし樣こそ、まことに秀逸も出で來ぬべけれ。深更にとのあぶら細く、あるかなきかに向ひ、直衣のすゝけたるうちかけ、古き烏帽子耳まで引き入れたまひ、脇息により、桐火桶を抱き、詠吟の聲忍びやかにして、夜たけ人靜まるにつけて、うち傾き、よゝと泣きたまへるとなん、まことに思ひ入れたまへる姿、つたへ聞き侍るだに、艶情に堪へず、感涙おさへがたく侍り。

かくして松風烈しき夕暮に、ほのかに琴の音を聞けるが如き桐火桶の體は成れり。姿整ひ、目もあやなるは、檳榔毛の車曳き出でたるが如しといへども、天馬空を驅るの槪はすなはちなし。次に有名なる作例二三を引くべし。

浦傳ふ磯の苫屋の檝まくら、聞きもならはぬ浪の音かな。

いかにせむ、室の八島に宿もがな、戀の煙を空にまがへむ。

戀せずば人は心もなからまし、ものの哀はこれよりぞ知る。

すみわびて身を隱すべき山里に、あまり隈なき夜半の月かな。

世の中よ、道こそなけれ、思ひ入る山の奧にも鹿ぞなくなる。

俊慧法師嘗て俊成を訪うて、貴詠の中にはいづれかすぐれたる、普く世には、

おもかげに花の姿をさきだてて幾重越え來ぬ峯の白雲。

といふをもてはやすはいかゞと尋ねければ、俊成答へて、否、それさもあらず、わが身にとりてのおもて歌とするは、

夕されば野邊の秋風身に染みて鶉なくなり深草の里。

これにこそあれといへりと。この一事以てかれが庶幾するところを推すに足るべし。

世にあるものが、朝に平家を送り、夕に源氏を迎へ、立身の計に暇なき時、世を出でたるものが、厭離穢土を說いて念佛三昧に暮す時、俊成は歌道を以て畢世の事業とせり。これを一身の業とするのみならず、子孫代々の業とせんとせり。勞には報あり、その細心工夫は成功して、かれは一代の宗匠となりて、文壇に覇を唱へ、六條家もこれが爲に壓せられぬ。五條三位は即ち歌界の右幕下、鎌倉開府と千載集撰進と相前後して成りたるも、時なるかな。二代の將軍は暗愚、御子左の二代は幸にして父よりも名高き定家ありて、後世に人麿、貫之と並び稱せら

る。定家は博く古書を集めてこれを研究し、古風を以て近體を律すること、その父よりも甚だ嚴なり。朽廢の語は用ふべからず、新奇の語も用ふべからず、卑俗の語もとより用ふべからず、三代集の正調を以て宗とすべしと。商鞅の法ぉのれを縛して、かれは用語を制限せられ、句法の變化を以てこれを補はんとす、述ぶるところ、術を盡し、巧を極めて、時には解しがたきものあり。父子二代の名家相襲いで、二條家の基礎磐石の如く、累世勅撰の榮を擔ふ。俊成が主唱し、定家が擴張したる家法は、もと〳〵末流の奇癖に流るゝを戒めしものなるを、無爲無能の子孫は、本意を忘れて枝葉を守り、平淡をのみ喜びて、乾燥無味、殆ど和歌の称を與ふるを憚るものを詠じて得々たり。俊成の作には豔冶牡丹の如きあり、鮮麗芙蓉の如きあり、これをしも忘れて、鎌倉時代の二條家が批杷の花の如く、平々凡々たるは、そも〳〵何の事ぞ。さきに小説を説くや、平安末期の奇變を喜べるものが、後に至りて自然を尙ぶに過ぎて、また平凡の弊に陷りしことを述べたると、彼此符節を合すが如きを思ふべし。

平安末期は、群雄蜂起して勢を爭ひ、英傑遂に勝利を得て、歌道に覇を張るに至

れる時なり。漢文學の門閥は既に古し、和歌の門閥は蓋しこゝに始まる。門閥にはおの〳〵立つるところの歌學あり、歌學はこの時代に至りて大に興隆せるなり。さらば更に和歌の流行と歌學の勃興とに就いて記するところなかるべからず

第十一章　和歌の流行と歌學の勃興

延喜の勃興より、和歌は貴族社會の日常の玩びぐさとなり、四季折々の變遷につけ、嬉しきにつけ、悲しきにつけて、思を述べ、悶を遣り、手紙の端に情懷を列ね、屏風の繪に讃辭を題するなど、廣く世に行はれて、いづれか衰微の時はなかりしかど、わけて流行の甚しかりしは、平安朝の末より鎌倉時代の初にかけての頃に如くはなし。內容の進步も固より著しといへども、その優劣を古今時代に比すれば、一長一短いまだ是非し易からず。されどその蔓延の範疇の廣きことにおいては、彼遂に此に及ばず、白河の花、西山の紅葉、小野に雪見の行幸、鳥羽に

納涼の御遊、文臺の上に詞藻の咲き亂れたるは、四海波たち騷がするうき世の嵐も知らず顔に、のどけくも盛なりき。

和歌の流行は、歌合および百首の流行すなはちこれを證す。當時、いづこ、いかなる歌合のありしかは、歌合部類または正續群書類從に擧げたるものによりて知るべし。その流行の極、堀河天皇の時には艶書合あり、廷臣宮女を左右に分ちて、艶書の歌を合せしむ。鎌倉時代のはじめに入りては、左大將家の六百番歌合、建仁元年の千五百番歌合の浩瀚なるものありき。百首は和歌稽古のため、或は題を設け、或は時を定めなどして、歌數多く詠み出でんと勉めしより、起れるものなるべし。その初とも稱すべきもの、菅家百首ありといへども、後世の贋作なる由は定論あり、源重之集に東宮より召によりてよめる百首あり、また同じ頃、曾丹集のうちに百首和歌あり、これらやそのはじめならんか。その後、經信、俊頼等が好忠を崇重するに至りて、曾丹集などに學びて百首を試むること多くなりしなるべし。その殊に著しきは、堀河天皇の時、基俊、俊頼等十四人の太郎百首、ついで永久四年、基俊、俊頼等七人の次郎百首とす。俊頼の散木集のうちまた百

首あり。爾後の歌人の家集を繙けば、歌道琢磨の爲、百首の詠に勵みたること、所所に散見す。鎌倉時代に入りては、一人一首の有名なる小倉百首の撰、藤原爲家の千首等、枚擧するに暇あらず。

歌學もまた平安末朝に至りて隆々の勢あり。その起源を稽ふるに、いはゆる四家式の如きは信ずるに足らず、古今集序蓋しその備を作れるものか。公任の頃に至りて漸く頭を擡げ來りしかど、いまだ著しき發達を見ざりしに、歌合の流行するや、左右黨を分ちて、爬羅剔抉、わが長を揚げ、敵の短を非るを事とすれば、おのづから和歌の批評は精緻になりて、こゝに歌學の勃興を致ししなり。當時、歌學の書と稱せらるゝもの甚だ多く、八雲御抄に擧ぐるところ、五家髓腦（道長時代の新撰髓腦、能因歌枕に、この期の俊頼無名抄、綺語抄、奧儀抄を併せていふ）、四家髓腦（俊頼無名抄、綺語抄、奧儀抄、童蒙抄）あり。個人に就いてその作を別てば、經信の難後拾遺基俊の悅目抄（一名更科記）和歌無底抄（一子傳）俊頼の無名抄（山木髓腦また倭祕抄）莫傳抄（萬葉集草木幷十二月異名集）俊頼口傳、藤原仲實の綺語抄、淸輔の袋草紙、雜談集（袋草紙の拔抄）奧儀抄、和歌初學抄、牧笛抄（難後葉集）和

歌一字抄、顯昭の袖中抄、古今集序註、拾遺抄註、散木集註、俊成の和歌肝要、古來風體抄、桐火桶、久我通光の歌仙落書、鴨長明の瑩玉集、無名抄、西行の西公談抄等あれど、その過半はこれらの歌人の名を假りたる後世の僞撰なるべし。悅目抄の如きは、さるが中に慥かなるものと稱せらるれども、余輩はその眞に基俊の手に成れることを信ぜず。最も信ずべきものは、袋草紙等の數書と當時の歌合の評言となるべしといへども、たゞこれらのみを以ては、その時代における歌學の結構組織を闡明せしむるに、不足の感なき能はず。眞僞混交の間に立ちて、諸家が和歌に對する眞實の意見を探るは、頗る困難なることに屬す。さばれとにかくに歌學の盛に行はれたることは、もとより一毫の疑もなし。疑なしといへども、これを細敍するは洞徹の眼力を要す。

當時の歌學者が立つるところの論を、類によりて別てば、一に故實、二に釋義、三に形式の論、四に內容の論なるべし。故實は歌會の作法、和歌のかき樣等の先例を考竅するものにして、袋草紙等によりてその一斑を知るべし。系統格式を重んじ、虛儀縟禮に流れし時、これを一の學問として崇めしは、必然の勢なるべし

といへども、その研究は和歌の進歩に何等の益もなく、むしろ自由なる發展を妨げたりといひて可なり。釋義は和歌を學ぶものゝ、評するものゝ、まづ通過せざるべからざる關門にして、歌枕の說明、雅語の註解等を主とす。顯昭の著書は大抵この部門のものなり。先例を尊び、古代を崇めて、遵奉これ事としたる時、またこの研究の重んぜられたるは、いふにしも及ばず。されど當時の釋義を見るに孟浪杜撰、よく萬葉集を讀破する能力なきはもとより、斯道の經典と仰いで暗誦するところの古今集、およびその以後の勅撰集の用語をも誤解することと少からず。僧良暹は著名の歌人なり、さるに古今の「時鳥、汝が鳴く里のあまたあればのながなくを謬りて、「宿近くしばし長鳴け」と詠み、また拾遺の「逢坂の關の岩角ふみならし」のいはかどを謬りて、「關の岩門今ぞ過ぐなる」と詠む。津守國基また和歌に名あるもの、これもまくり手といふことなし、まふり出の誤なりと辯じて、却つて良暹に非笑せらる。基俊は俊賴の「雲ゐがくれにすむ龍も」のたつを鶴と解して嘲罵せられたりき。言語の釋義の淺薄なる、これたゞその一斑のみ、以て全豹を推すべし。

形式の論は、助動詞、弖爾波の説など、文法に關するものなきにあらずといへども、修辭の論を多しとす。題の詞に、歌の中によみ入るべきものと入るべからざるものとありといひ、名所または詞に、憚るべきもの、忌むべきものありといひ縁の字、縁の詞を論ずるが如き、いづれもこの中に收むべし。和歌の六義を説くは、既に古今集序に端を發して、詩の六義の摸倣のみ。別に形式によりて、和歌を分類して、長歌、短歌、旋頭歌、混本歌、廻文、隱題、折句、沓冠、疊句等の目あり。和歌の弱點を論じて、四病、八病等を擧げたるは、漢詩の髓腦に本づく。四病は即ち岸樹、風燈、浪船、落花、ともに句中の文字の異同によりて起る。八病は即ち同心、亂思、欄蝶、渚鴻、花橘、老楓、中鈍、後悔にして、形式の上よりせるものと、内容の上よりせるものと混交す。内容によりて和歌を分類しては、詠物、贈物、述志、恨人、惜別、謝過、題歌、和歌の八品あり。されど概するに内容について考究することは稀に、形式をのみ論辯すること、當時の和歌が内容の變化に乏しく、専ら形式の綺羅に勉めたると、相伴必然の勢なりき。しかもこの形式の論辯も、無益の枝葉にのみ走りて、却つてその本とするところを忘る。嗚呼、歌學を以て盛なりといふ、されどその

盛なりとは、流行の義のみ。淺薄附會の論、誤に誤を重ねて、以て鎌倉時代に及ぶ和歌一時の旺昌も、幾ばくもなくして衰廢見るに足らざるに至りしこと、歌學評論の罪與つて力あり。

そも〳〵和歌變遷の迹を稽ふるに、そのわが國固有の國民詩たることはいふに及ばざれども、發達の徑路著しく漢詩の影響を認むべし。延喜盛代の和歌は弘仁以來の詩文を壓して興りたれども、詠ずるところの題目および思想の、しらずしらずの中に文選、文集等の感化多きは、否むべからず。大八洲國の山川草木は神代ながらの姿なり、されどこれに對する國民の思想感情は、これを刺戟する科學、文學によりて、時々刻々に變じゆくべし。これを一人の趣味の發達に譬ふ。菊を培養するに、あらゆる人爲の巧を施して、穠豔の態を喜びしもの、一たび「黃菊、白菊、その外の名はなくもがな」の句意を味はふに至りては、却つて自然奇瘦の狀を好むべし。五月の夕闇を破りて喧ましき蛙の惡きを彈指せし人も、梅に棲む鶯と共に歌を詠むと聞き、古池の水の音に悟を開かしめぬと知りては、きたなき蟲もめでたく好ましく思はるゝなり。和歌に詠まれたる思想も、ま

たかくの如く、漢文學の影響せるもの多かるべし。萬葉には春花よりも秋葉を可怜しとせしに、平安朝には、ひたすら秋情を悲しく思ひなりしが如きも、その一例にはあらずや。既に小野篁の詩に、物聲自堪傷客意、宜將愁字作秋心（和漢朗詠集）といひしを取りて、藤原季通が歌に、

ことゝゝに悲しかりけり、むべしこそ秋の心を愁といひけれ。（千載集）

といへり。砧うつ聲に腸を斷つも、良人の遠征に泣く思婦の情を詠ずる漢詩の常にして、もとわが國民の風にあらざりしが、この時代の末ごろより、特に擣衣の歌多きに至りぬ。藤原基俊の詠に、

たが爲にいかにうてばか、から衣千たび八千たび聲の恨むる。（千載集）

といへるは、即ち白居易が誰家思婦秋擣帛「月苦風凄砧杵悲、八月九月正長夜、千聲萬聲無了時（白氏文集巻十九）を譯したるものなり。平安末期にわけて自然の景を詠ずることの多くなりしも、或はかの國の敍景詠物の詩に得るところありしにあらずや。辭句の上においても、「知らず幾世を經べきわが身ぞ」（拾遺集、よみ人しらず）といひ、「われも何故いそぐ舟出ぞ」（詞花集、平忠盛）といひ、「空しき枝に春風ぞ吹く」、（新古今集、藤原良經）「都

の山は月纖うして（拾遺愚草、藤原定家）といへるが如き、また多少の漢文學の語脈を認むべきにあらずや。

一般にいへば、平安朝は漢學よりも遙かに佛教の勢力の强き時代なり、從うて佛教が和歌に及ぼせる影響は詩文の比にあらず。これよりさき既に萬葉集においても、その後期の歌には「うつせみもかくのみならし、紅の色もうつろひ、ぬば玉の黑髮かはり、朝の咲ゆふべ變らひ、吹く風の見えぬが如く、逝く水のとまらぬ如く、常もなく」といふが如きものありき。奠都以來、顯密二教の天下を風靡するに至りては、文學もおのづからその指顧の下に動かざるを得ず。たとひ表面のこととはいへ、或は世の中の後れさきだつ例を、末の露、本の雫に思ひよせ、（僧正遍昭）或は「朝露は消え殘りてもありぬべし、誰かこの世を賴み果つべき」（伊勢物語）と儚なみ、或は立ちのぼる煙、手枕の夢にたとへて、うき世の無常迅速を歌ふことなど、珍らしからずなりぬ。下りて道長時代には、

暗きより暗き道にぞ迷ふべき、遙かに照らせ、山の端の月。　和泉式部

ちる花に又もやあはむ、おぼつかな、その春までとしらぬ身なれば。

藤原實方

といへるが如きもの、前よりも多く、平安末期に至りては、佛教の瀰漫と共に、その和歌における影響は益〻著しきこと、後拾遺集に釋教の部門を設けたるを見ても、思半ばに過ぐべし。なほ一二の例を擧げんか。

俊賴

あみだぶととなふる聲を檝にてや、苦しき海を漕ぎはなるらむ。(法師の舟にのりて天王寺の西門より西ざまにゆく繪の讃)

神祇伯顯仲

この世だに月まつ程は苦しきを、あはれいかなる闇にまどはむ。

崇德院

松が根の枕も何かあだならむ、玉の床とて常の床かは。

かくの如きものの頗る多くなりぬといへども、平安朝の末よりこのかたは、佛教の感化はたゞにこれに止まらずして、歌道そのものを以て一の宗教と崇むるに至れり。

佛門の布教師は賢くも本地垂迹の說を以て、國民固有の信條を同化して、神佛一致の論を立てたりき。神道が漸く盛ならんとするに當りても、敢てこの論に

反抗せず、むしろその下に隷屬して、わが道の興隆を計れり。歌道は、神道と共にこれのみはひとの國より傳はらぬ敷島の道なり。されど神道既に佛敎に屈從阿合す、和歌たとひその道を異にすとも、またかれが大勢力の下に抑壓せられざるを得んや。こゝにおいてか文學と宗敎との混同あり。和歌は人の天眞を流露せるもの、その極致に到れば、圓頓三密の敎何ぞ別に存せんや。前後の二句は定慧の二法、天地の二理なり、三重の次第を立てて、迷の前には三毒、三惡趣となり、覺の前には三身、三德となる四病、八病は人間の四苦、八苦を厭ふ義なり、五句を別ち、六義を示すは、五體、六根を表す、九品、十體をあらはすは九識、九尊、十界、十如を表する故なりとは、悅目抄に說くところ。この書を基俊の作とするは、信を置く能はざること、前に述べたるが如しといへども、この說は大體において平安末期のものとして誤らざるべし。西行嘗て慈圓に敎へて曰く、まづ和歌を御稽古候へ、和歌を御心得なくば、眞言の大事は御心得候はじと、沙石集また慈圓が天に口なし、和歌を以ていふべしと稱し、歌論を以て佛法に喩へたる拾玉集も、この時代の末か、鎌倉時代の初のことなるべし、

和歌を以て宗敎に齊しくす、こゝに歌神の現はるゝあり。その主たるものは、世に和歌三神と稱するもの、即ち玉津島、住吉、人麿にして、蓋し平安末期より歌神と崇められしなり。玉津島明神は紀州和歌浦に鎭座まします、衣通姫を祀れりといへども、はじめより果して然りしやは疑はし。神龜元年十月、聖武天皇この地に行幸ありて、山光水色の明媚を愛したまひ、これより春秋の二時、勅使を遣はして、玉津島の神、明光の靈を奠祭せしむ。續日本紀本朝通紀はこの神即ち衣通姫なりと稱し、或は後人の說を立つるものは神功皇后とすれど、ともに確證あるにあらず、むしろこの時はたゞ山水の靈を祀りしものなるかも知るべからず。されど平安朝の末に至りては、既に衣通姫とせられしものの如し。北畠親房の古今集序註には、仁和二年九月、勅使を遣はして衣通姫を玉津島明神と齋きたまふとす、いまだ必ずしも信ずべからず。玉津島を詠ぜし和歌も、はじめはその絕景を賞せしのみ、崇德天皇の頃より神と崇めしものあり、しかもその地の名を和歌と呼ぶより、いつしかこれを和歌の神とせしものならん。藤原俊成その五條室町の第にこの神を勸請して、新玉津島明神といひ、渴仰怠らず、後、和歌所

と稱せられて、その裔爲明が新拾遺集を撰びしもこの第なり、舊風の國文學家の殿將として江戸幕府時代に北村季吟が名を得たるも、またこの地なり。

攝州住吉神社はもと底筒男、中筒男、上筒男の三神を祀り、太古以來、往還の船舶海上の安全を祈れり。これを和歌の神と崇むることは、蓋しまた平安朝の末よりのことなり。伊勢物語古意に、この物語のうち、住吉行幸の折、明神が歌よみたまひしことを記せる條に、荷田春滿の說を引いて曰く、この御神海路を守り、ましたる神功皇后の天の下治めたまへるみわざにつきて、すめら御國を守りたまふ事は、いふにや及ぶ。しかるを後世六百年ばかりの人は、この御神は歌を守りたまふとぞいふ。古今の書どもも、神の祕事てふものも、見きはめ侍れど、さる事は見えず。たゞこの物語のこの條を戲れ事とも知らぬ人のいひ出てたるなりけりと。何故に歌神とせらるゝに至りしかは、いまだ詳かならずといへども、住吉は平安京に最も近き海岸にして、しかも風景絶勝の地なるが上に、西海往來の要津なり。されば屢〻天皇の行幸もあり、貴族の遊覽もありて、和歌を唱和すること多く、明神が歌よみたへりといふ傳說もあるに、なほ神主津守氏にうちつゞき名匠さへ出で來て、その道に勵めば、おのづから和歌の神の第一と尊ばるゝに至りしなるべし。長元八年、關白左大臣歌合ありて後、左方の人住吉に賽したる時の詠に、

住よしの浪も心をよせければ、むべぞ汀に立ちまさりける。　大納言經輔

とあるを見れば、既に後一條天皇の頃より、住吉明神を以て和歌に關係ありとしたることを知るべしといへども、なほ歌神として盛に信仰せられたるは、俊成の頃よりならんか。

　和歌の浦の道をば捨てぬ神なれば、哀をかけよ、住吉の波。　俊成

俊成老後に謂へらく、さてもあけくれ歌にのみ耽りて、更に當來の勤もなし、かくては後生いかならんと歎きて、住吉神社に參籠し、もし歌はいたづら事ならば、今よりこれを捨てんと、祈念せしに、七日滿ずる夜、夢中に明神現じて、この道の外に、別に佛道を求むべからずと、示されきといふ。（徹書記物語）またその子定家も當社に參籠して、同じことを歎きしに、七日滿ずる夜、恰も九月十三夜に當りしが、明神うつゝに現じて、汝月明かなりと示されぬ、さてはこの道はかくなりと知りぬ。その日記を明月記といふも、これが爲なりと稱す。（同上）人麿を歌神として祀ることも、蓋しまた平安朝の末に始まれり。白河天皇の頃粟田讃岐守兼房といふものあり、和歌を好みて、常に人麿を念じけるに、ある夜の夢に、この歌仙の姿を見たり、嬉しく思ひて、繪にかゝせて秘藏しけるが、歿す

るに臨みて、天皇に奉る。天皇これを鳥羽の寶藏に納められしを、藤原顯季さまざまに申し請ひて、摸寫せしめ、これを本尊として、元永元年、六條烏丸の第において始めて人麿影供を行ふ。（柿本影供記、十訓抄等）爾來、屢〻その催しあり、後には赤人もまた併せ祀られたり。

たゞに三神が和歌の神たりしのみならず、伊勢、賀茂等いづれの神もまた歌道を擁護し、その託宣の詞、夢想の告も概ね和歌を以てせらると信ぜられたり。而してこれらの神に、その道の冥加を祈るや、多くは法樂の和歌を奉る。法樂の和歌といふこと、いづれの時に始まれるかを知らずといへども、延久四年に、能登國司が奉れる氣多宮歌合ありこれらを今傳はれるものの始とすべきか。下りて俊成には春日、日吉、住吉、賀茂、伊勢に奉れる五社百首あり、西行には御裳濯川歌合、宮川歌合あり、これらの例平安末期以後頗る多し。要するに歌道を以て佛敎に融合したること、その道を尊くしたるものなりといへども、徒らに佛說を附會して、却つて文學上の眞價を輕視し、遂に後世に及びては、和歌灌頂、古今傳授の如き、荒誕不稽の說を生ずるに至る。江戶時代に儒敎の傾向が文學に障礙

を與へしが如く、極端なる佛敎の感化はまた歌道に有害なりしなり。和歌の流行と共に、またその道の門閥を生ずるに至れり。和歌はそのはじめ師資相承のことありしにあらず、公任は道長時代第一の耆宿、斯道の中興と稱せらる、當時の歌人多くはこの卿の門弟なりといふものあれど、これらはいまだ直接の師弟の關係ありきとも思はれず。その頃、能因法師和歌を藤原長能に學ぶ、世にこれを以て歌道に師弟あるはじめとす。下りて俊成は基俊に學べり。かく師弟の沙汰漸く細やかなるに至りて、こゝにまた儒敎におけるが如く、歌道を以て門戶を張るものあり。顯輔、淸輔父子は六條家を起し、俊成、定家父子は二條家を立て、兩々相執つて下らず、以て鎌倉時代に及べり。

こゝに佛敎の感化最も深けれども、その弊は受けず、閥閱相爭ふの際、ひとり超然として自然を友とする天成の歌人あり。即ち西行法師にして、俊成と相俟つて平安朝掉尾の名家なり。次に西行を說きて、以て平安朝の文學史を終らんとす。

第十二章　自然の心友——西行法師

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉、室町の世、「そも〳〵歌道において定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず、近世に至つて定家の價値いたく墜落しても、山家集の一書はなほいかなる歌人の机邊をも去らず西行の名今に嘖々たるは、そも〳〵何が故ぞ。

西行法師俗名は佐藤義淸（ノリキヨ）、鎭守府將軍藤原秀鄕が九世の孫なり。代々、武を以て家を立て、義淸また勇敢にして弓術をよくす、和歌に堪能なるは、蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて、北面の士となり、左兵衞尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす、されど義淸は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へていはく、嘗て同族左衞門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門の邊に人たち騷ぎ、內には泣き悲む聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿

は昨夜頓死したまへりとて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し、官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の敎なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びてとり縋れるを、思ひ切りて椽より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始ぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せりと稱す。西行物語かくて名を西行また圓位といふ。出家する時、保延六年にして、西行歳まさに二十三なりきといふ。古今著聞集、百練抄

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣て、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、筑紫にまでも遊ぶ、常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終るべしと。一个の笠、一條の杖、草の枕、苔の莚、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず、高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず、數寄を立ててこゝかしこに嘯きありく條、憎き法師なり、何處にても見あひたらば、頭をうち割るべしと。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて、花の陰など眺めある

き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞと問へば、西行と申す者といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、あかり障子を開けて出づ。しばしまもりて、年ごろ乘り及びたるに、御たづね悦び入り候ふとて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子だちは、いかなる事の出來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかは、日頃の仰に違ひたるはと怪み問ふ。文覺答へて、あらいふがひなの法師どもや、あれは文覺に打たれんずる者のつらやうか、文覺をぞ打たんずるものなりといへりといふ。（井蛙抄）西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことと思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なむ、そのきさらぎの望月の頃。

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて、閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。（逝去の土地について異説あり）その和歌を集めたるもの、山家集あり。御裳濯川歌合は、西行が自作の歌を、左山家客人、右野徑亭主の兩方に別ちて、三十六番に合せ、その判を俊成に依囑したるもの、宮河歌合も、また自作を玉津島海人、三輪山老翁の左右に立て、併せて三十六番を定家に判ぜしめたる

もの、彼は內宮に奉り、此は外宮に奉れるなり、撰集抄九卷西行の作なりと傳ふれども、信憑するに足らず。
わが國、古來、詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終りしもの、前後僅かに三人、西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが魁をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑して、その跡を逐ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おの〳〵その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟嚢を肥やすものなるかを知るべし。さるが中に宗祇は東常緣より古今傳授を受け、三條西實隆と計りて二條の家風を再興したりといひて、文學衰亡の世に歌道の實權を握らんとし、芭蕉は古風、檀林を排して、正風の旗下に廣く門弟を集む。宗祇が滿々たる野心は著しく機鋒を現はし、芭蕉は溫雅のうちまた覇氣を包めるに、西行ひとり社會に交はるを欲せず、超然として世塵を脫却して、名聞榮利を外にし、全

く山川の間に一身を浮沈せしむ。彼我ともにその道の爲に盡せるもの、いまだ必ずしもこれを軒輊すべからずといへども、類似の間にまた差別の存するは明かなり。

そも〳〵平安朝の貴紳淑女は鴨桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ小天地に蹈蹐して、足幾外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、從うて思想の發展もあることなし、見聞するところは、東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず、子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、俳句の上にも、おのづから典型を生じて天眞を忘る、實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒らに形式を飾りて、燦爛たる錦嚢、その內容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して、從來蹈襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安末期、崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることとの、世上一般の題詠と選を異にすればな

りわけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句、みな己が肺腑より出づ數百年の後なほ名聲赫々として、天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てて、直ちに自然の堂奥に到らんとす、深く山川草木を愛して、これを見ることなほ己を見るが如く、親昵して同情の念に堪へざるは、固より然るべきことなり。

　わきて見む、老木は花もあはれなり、いま幾たびか春にあふべき。

　こゝにまた我住みうくてうかれなば、松は獨にならむとすらむ。

　濁るべき岩井の水にあらねども、汲まば宿れる月やさわがむ。

　わび人の涙に似たる櫻かな、風身にしめばまづこぼれつゝ。

同情は進んで愛着となりぬ。臨終の大事到る時、何物か伴はん、一切の眷屬珍寶みなわれと相忤く、かく儚なみて、西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ、一旦の沈淪に昨日の親友も今日の仇敵たる時、山色水聲のわれに睦ぶこと舊に依り、訪ふ人もなき山里に心永

き春秋は尋ぬることを忘れず。この親切なる自然に對して、その慰藉に報ゆることを知らざるものは、冷血無情の人のみ。西行は最も自然の價値を認めたるもの、從うてこれが愛着の念も遥かに群集と選を異にしたり。

おのづから花なき年の春もあらば、何につけてか日を送らまし。

うちつけにまた來む秋のこよひまで、月ゆゑ惜しくなる命かな。

「花のもとにて春死なむ」といへるが如きも、同じく愛着の念の露出せしものに外ならず。されど翻へりて思ふに、かくの如きは佛道精進の妨ならじや、西行みづから謂へらく、歌道を學ぶは、即ち一歩を佛敎に進むるなり、佛も嘉納ましますべしと、かく辨じてみづから諭せども、衷心いまだ釋然たらざるところなくんばあらず、人事に拘束せらるゝを以て、修行の障礙とすれば、風月に放浪するもまた然らずや。花にうかれ、紅葉に歎きては、專心の工夫も時に荒むことあり、都に志すものは途に滯るべからず、これを思うては、輾轉反側、風流僧の枕安からざりしもの、幾夜なりけん。

鶯の聲にさとりを得べきかは、聞く嬉しさもはかなかりけり。

ませに咲く花にむつれて飛ぶ蝶の、羨しきもはかなかりけり

捨つるは惜し、捨てざれば道に入るべからず、矛盾撞着、迷悟の間に彷徨してゆきも得やらず。

花にそむ心はいかで殘りけむ、捨てはててきと思ふわが身に。

いづくにか身を隱さまし、厭ひてもうき世に深き山なかりせば。

當面の花鳥風月の佛道修行に妨あることを思うて、なほこれを捨つること能はず、主觀に敗れ、却つて客觀に對つて、あらぬ希望を述ぶることあり。

なか〳〵に心つくすも苦しきに、くもらば入りね、秋の夜の月。

捨てていにしうき世に月のすまであれな、さらば心の留らざらまし。

時には觀念工夫も意の如くならず、何故に己のかくの如く己が儘ならずして、自然のしかくわれと睽離するかを思うて、懷疑の念に堪へざることあり。

おぼつかな、秋はいかなる故のあれば、すゞろに物の悲しかるらむ。

何ごとにとまる心のありければ、更にしもまた世の厭はしき。

愛着は迷なり、この雲を去らざれば、眞如の月は明かなり難しといへども、山水

もと無心にして人間の如き魔性を有せず、強ひてこれに着するは、また妄執の種なりといへども、これを以て窓前日夜の友とす、清淡虛無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に從うて轉ずること水の如し、來往自在、ここに疑惧の境を去つて、安心は漸くに決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ、やすく待ちつゝ今日もくらさむ。

散るを見て歸る心や、櫻花、むかしにかはるしるしなるらむ。

時鳥きゝにとてしも籠らねど、初瀨の山にたよりありけり。

雲にたゞ今宵の月をまかせてむ、厭ふとてしもはれぬものゆゑ。

山里は人こさせじと思はねど、とはるゝことぞうとくなりゆく。

かくして扞格は除かれ、融和は來れりといへども、つら／＼案ずるに、西行が信仰はなほ差別の見を脫する能はざる小安心に過ぎず。蓋し佛敎の興隆は、あらゆる周圍の事物をその勢力圈內に收め、平安朝の末よりは、わが敷島の道もまた佛說を附會したるものの如くなりき。西行とこれに學べる慈圓とは殊に文學に佛敎の趣味を加へたりし人にして、しかも他の無識なる論者の如く、妄誕な

る迷信的臆説を唱ふることはせず、好箇の佛教的和歌の代表者なりといへども、なほその佛教と和歌との融合に就いては、遺憾なきこと能はず。かれらは和歌を學ぶは即ち佛教を學ぶなりといひて、二者を同一視せんとするに急なるより、區別すべき點をも沒却して、ひたすらにその堺線を抹殺せんとせり。同じ高嶺の月は見れども、別け昇る麓の途は同じからず、極致に達すれば、彼我もと別なく、自他を滅し、天地に合し、水火も溺らす能はず、燒く能はざる久遠の生命はこゝに生ずといへども、この大悟に至るの過程は、即ち混ずべからず。佛教は佛教により、文學、美術はまた文學、美術により、あくまでもおのが道を歩みて、以て終極の彼岸に達す。目的は一なり、手段は異なり、一なる目的と異なる手段とを混ず、矛盾紛擾こゝに生じて、また正路に歸る能はず、彷徨逡巡、僅かに一時の安心を求めて止む。これ西行等にも免る能はざりし謬見なり。西行の爲に計るに、眞に和歌を以て天分とせば、しばらく佛道をいふこと勿れ、人事を好まずして、山水を喜ばば、自然詩人たるも可なり、要はあくまで自然に對する同情を深くし、己の魂を山川の靈に通はしめ、物我一致の奧に至りて、こゝにはじめて高

山大海を三十一字に込め、言々句々、飛雲迅雷の趣あるべし。その晩年はやゝこれに近づきたるかも知るべからずといへども、一般に論ずれば、西行の和歌やなほこの境を隔ること遠く、小我を立てて、依然たる敍情詩人の主觀的觀念を脱すること能はず、小規模の述作に甘んじ、かれが才を以てして、遂に歌壇に驚天動地の改革をなすことを得ざらしむ。時勢か、はた運命か、西行の爲に、また文學の爲に、痛惜せざるを得ず。

しかれども世を擧げて剪綵の末技に汲々たる時、巍然して衆を拔いで立ち、ひとり因襲の宿弊を捨て、直ちに自然に接觸して、感ずるところ即ち歌となる。その歌は企てて成すものにあらずして、おのづから成れるなり。次に揭ぐるところの例、よき歌のみにはあらざれども、そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕を存せざるかを見よ。

さらぬだに秋は物のみ悲しきを、淚もよほすさを鹿の聲。
ながむるに慰むことはなけれども、月を友にてあかす頃かな。
つく〲と物を思ふにうちそへて、折あはれなる鐘の音かな。

思へたゞ暮れぬと聞きし鐘のねは、都にてだに悲しきものを。
今よりは昔がたりは心せん、あやしきまでに袖しをれけり。
時には率直にして活氣あること、次の如きものあり。
瀬戸わたる棚なし小舟こゝろせよ、霞みだるゝ、しまき横ぎる。
基俊、俊頼以來、歌壇にも著しく黨同伐異の弊を醸成し、或は保守を唱へ、或は變革を叫びて軋轢す、下りて六條、二條のおの／＼門戸を張りて、私見を立つるあり。群雄互にその能に誇り、險語難辭を構へて衆を驚かし、句格聲律を論ひて他を凌ぎ、ことさらに平地に波瀾を起して、濁浪澎湃、天に漲るに至れり。西行ひとりこれらに異に、行かざるべからずして行き、止まるべくして止まる。かれは努めて歌を作らず、ましてこれによつて世に傲らず、たゞ見聞し感觸するところを吟嘯するのみ。されば用ふるところの詞概ね平易率直にして、誇大に流れ、煩瑣を喜ぶが如き弊なしといへども、逢ふところのものにして新たならば、これを表はす詞も、また新たならざるを得ず、その詠に入れるもの、鳩、梟、むら雀、てり鷽(ウソ)、鶍、こがらめ、櫻鯛、小鰶(コハエ)、石決明、蛤、貽貝(イガヒ)、芭蕉、烏扇、ゑぐ、ほどろ等あるは、經信以下

の新體歌人の見るところに似て、從來の歌人のいまだ試みざりしものなり。いはゆる自然を寫すとは、ただ平板凡庸なれといふにはあらず、景物の要求にあひては、修辭の巧もまた工夫せざるべからず。西行がいかに措辭に苦心して、寫すところの情景を饒かならしめんとしたるかを見よ。

露のぼる蘆のわか葉に月さえて、秋をあらそふ難波江の浦。
惜めども鐘の音さへかはるかな、霜にや露の結びかふらん。
おほかたの秋をば月につゝませて、吹きほころばす風の音かな。

擬人法を用ふるが如きも、「鶯の霞にむせぶ」「藻鹽やく浦のあたりは立ちのかで、けぶり爭ふ春霞」などその例少からず。なほ一二を示さんか。

女郞花池のさ波に枝ひぢて、もの思ふ袖のぬるゝがほなる。
來る春は嶺の霞をさきだてて、谷の筧をつたふなりけり。

用語の新古など事々しく論ずるが如きも、西行の頗はしとするところ、境に到り機に臨みて、詞花おのづから綻ぶ、何ぞ辭句の時代を論ずるが如き學究的態度を敢てせんや。雅語可なり、俗語可なり、新奇の辭も可なり、もとよりことさら

に銜ひ用ふるにはあらず、たゞ寫さんとする思想に適うて則ち止む。その歌に散見する「そばえて」「そゞろがましき」「わざと」「濃からまほしき」「心のたけ」「雨のはらはら」「せたむる」「物めかし」「吹きしらまかす」などの如きは、保守的歌人がその詠に上すことを憚る語なるべし。

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹き來つて、松濤すなはち鳴る、その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることもまた强し。時に婉曲の響あれども、ことさらに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下いよ〳〵光を增して、後人をして渴仰止まざらしむ。平安朝四百年、天眞の流露、感情の直白を以て著しきもの、西行の匹儔とすべきものを求むるに、前に在原業平あり、中頃、和泉式部あり。先に業平を論ずるに當りて、かれと西行とを比したるが、更に今三人についていはんに、業平の歌は心の鏡、式部は歌を歌として詠み、西行の歌は法の影なり。業平は戀に泣き、式部は戀に狂ひ、西行は戀を忘る。自然を以て水とせよ、業平は一顆の水晶これに浸れるが如く、式部は臙脂を溶かせるが如く、西行は氷を加ふるに消え

去つて跡なきが如し業平は鞍馬の奥、峨々たる山、磊々たる巖の間を碎け散る谿流の如く、式部は嵯峨の山莊、淸瀧川を引きたる遣水の如く、蜿蜒曲折の巧を盡し、西行は唐崎の岸うつ浪の風に任せて、或は荒れ、或は靜かなるが如し、たゞ萬里はてなき大洋の偉觀なきを惜む。

平安朝文學史終

人名索引

し、じ

す

せ

書名及件名索引

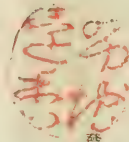
大正十二年一月五日印刷
大正十二年一月八日第一刷發行

平安朝篇(一—二〇〇〇)
定價三圓五十錢

著者 藤岡作太郎

東京市神田區南神保町十六番地
發行者 岩波茂雄

東京市神田區今川小路二丁目二番地
印刷者 津村福章

株式會社 一匡印刷所

發行所 東京市神田南神保町 岩波書店
電話九段一二八〇・一二八一番
振替東京二六二四〇番